

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—38—

小郡市大字井上所在の井上薬師堂遺跡の調査 2

1996

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—38—

小郡市大字井上所在の井上薬師堂遺跡の調査 2

平成7年度

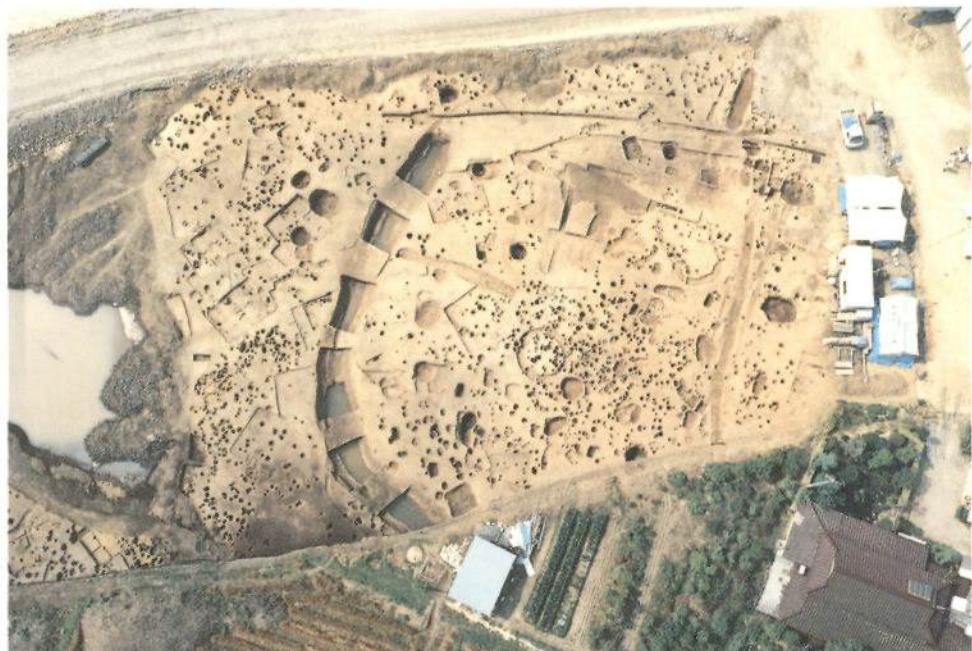
福岡県教育委員会

卷頭図版 1-(1)



井上薬師堂遺跡東台地俯瞰

卷頭図版 1-(2)



井上薬師堂遺跡西台地俯瞰

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の記録であります。

本年度の報告は、昭和59年度から60年度にかけて実施しました井上薬師堂遺跡の調査の成果を「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」第38集としてまとめたものであります。本報告書をおして文化財の愛護思想の普及資料および学術研究の一助に供すれば幸甚に存じます。

なお、発掘調査を実施するにあたりまして多大のご尽力とご協力をいただきました地元の皆様方をはじめ、関係各位に対して深甚の謝意を表します。

平成8年3月29日

福岡県教育委員会
教育長 光安常喜

例　　言

- 1 本書は、昭和59年度から60年度にかけて福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて発掘調査を実施した福岡県小郡市大字井上に所在する井上薬師堂遺跡の調査報告書で、「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」の第38冊目にあたる。
- 2 本書の執筆分担は下記のとおりである。

第1章	……………	(児玉　真一・佐々木隆彦)
第2章	……………	(佐々木)
第3章－1	……………	(　〃　)
"　－2	……………	(児玉・佐々木)
附　編	……………	(児玉)
- 3 発掘調査における遺構実測は、木下修・児玉・佐々木・伊崎俊秋・緒方泉・木村幾多郎（現・大分市歴史資料館）・高田一弘・日高正幸（現・小石原村教育委員会）・宮田弘之・森下英治・藤平寧・高橋潔・時元省二・古賀勇・野田徹・目修二・深江義幸が行った。
- 4 発掘現場での写真は児玉・佐々木・緒方・木村が撮影し、空中写真はフォト大塚に委託した。掲載した遺物写真は、九州歴史資料館の石丸洋・須原悦子・北岡伸一及び児玉が撮影した。
- 5 出土遺物の整理作業は、文化課甘木事務所と九州歴史資料館で実施し、遺物の実測は、平田春美・若松三枝子・小崎みゆき（旧姓・佐藤）・児玉・佐々木が行った。鉄器処理については、九州歴史資料館の横田義章の指導で政住理英子・坂田ミチヨが行った。
- 6 製図は文化課太宰府事務所の豊福弥生、同甘木事務所の塩足里美が行った。
- 7 本書の編集は、第1次分を児玉が、第2次分を佐々木が担当した。

本文目次

	頁
第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の位置と環境	6
第3章 調査の内容	9
第1節 東台地の調査	9
(1) 壇穴住居跡	9
(2) 掘立柱建物	28
(3) 土壙	30
(4) 周溝状遺構	36
(5) 溝	38
第2節 西台地の調査	72
(1) 壇穴住居跡	73
(2) 掘立柱建物	114
(3) 土壙	119
(4) 井戸	146
(5) 周溝状遺構	151
(6) 溝	155
(7) 不明遺構	160
(8) 西台地出土の焼塙土器	161
(9) 西台地出土の瓦	161
附 編 大溝出土の木製品追補	262

図版目次

本文対照頁

- 卷頭図版 1 (1) 井上薬師堂遺跡東台地俯瞰
(2) 井上薬師堂遺跡西台地俯瞰

(東台地)

図 版 1	井上薬師堂遺跡航空写真	6
図 版 2	井上薬師堂遺跡と薬師堂東遺跡	6
図 版 3	井上薬師堂遺跡俯瞰	6
図 版 4	(1) 井上薬師堂東台地俯瞰	9
	(2) 東台地住居群俯瞰	9
図 版 5	(1) 1号竪穴住居跡周辺 (北西から)	9
	(2) 1号竪穴住居跡	9
図 版 6	(1) 3号・4号・13号竪穴住居跡, 8号・9号土壙, 2号周溝状遺構	12
	(2) 5号竪穴住居跡	14
図 版 7	(1) 5号竪穴住居跡階段状遺構調査前	14
	(2) 5号竪穴住居跡階段状遺構調査後	14
図 版 8	(1) 1号・6号竪穴住居跡, 1号土壙 (西から)	17
	(2) 7号竪穴住居跡 (北西から)	18
図 版 9	(1) 7号竪穴住居跡屋内貯蔵穴	18
	(2) 7号・8号竪穴住居跡と溝 (西から)	21
図 版 10	(1) 8号竪穴住居跡カマド	21
	(2) 9号・10号竪穴住居跡, 4号・7号土壙 (西南から)	23
図 版 11	(1) 11号竪穴住居跡	24
	(2) 12号竪穴住居跡	25
図 版 12	(1) 12号竪穴住居跡階段状遺構	27
	(2) 階段状遺構の断面	27

(西台地)

図 版 13	(1) 第1次調査西台地俯瞰	72
	(2) 第1次調査西台地俯瞰	72
図 版 14	(1) 第1次調査西台地南西側俯瞰	72
	(2) 第2次調査西台地俯瞰	90
図 版 15	(1) 5号竪穴住居跡 (南東から)	79

(2)	8号A・B竪穴住居跡（北西から）	80
図版 16	(1) 10号・11号・13号竪穴住居跡, 28号～32号土壙（北西から）	82
	(2) 14号・25号竪穴住居跡, 17号・18号・20号・23号～26号土壙（南東から）	84
図版 17	(1) 16号～18号竪穴住居跡, 2号周溝状遺構（西南から）	87
	(2) 16号竪穴住居跡（西から）	87
図版 18	(1) 17号竪穴住居跡（西から）	87
	(2) 18号竪穴住居跡, 2号周溝状遺構（西から）	88
図版 19	(1) 25号竪穴住居跡, 17号・18号・20号土壙（南東から）	89
	(2) 26号竪穴住居跡, 36号・37号・40号土壙（南東から）	89
図版 20	(1) 27号竪穴住居跡（西から）	90
	(2) 27号竪穴住居跡カマド出土状態	90
図版 21	(1) 27号竪穴住居跡下層（南から）	90
	(2) 28号竪穴住居跡, 4号周溝状遺構（南から）	91
図版 22	(1) 29号竪穴住居跡（南東から）	92
	(2) 30号・47号竪穴住居跡（東から）	94
図版 23	(1) 30号竪穴住居跡下層（南から）	94
	(2) 31号竪穴住居跡（北西から）	94
図版 24	(1) 32号竪穴住居跡（南東から）	96
	(2) 32号竪穴住居跡土器出土状態	96
図版 25	(1) 32号竪穴住居跡下層（西南から）	96
	(2) 33号竪穴住居跡（南から）	98
図版 26	(1) 34号竪穴住居跡（南東から）	98
	(2) 34号竪穴住居跡下層（南東から）	98
図版 27	(1) 35号竪穴住居跡（東南から）	98
	(2) 35号竪穴住居跡下層（北西から）	99
図版 28	(1) 36号竪穴住居跡（南東から）	101
	(2) 36号竪穴住居跡カマド	101
図版 29	(1) 38号竪穴住居跡（南東から）	102
	(2) 38号竪穴住居跡屋内土壙	102
図版 30	(1) 38号竪穴住居跡下層（南西から）	102
	(2) 38号・39号竪穴住居跡（南東から）	102
図版 31	(1) 39号竪穴住居跡カマド	103
	(2) 40号竪穴住居跡, 70号～72号・77号土壙（南東から）	105

図 版 32	(1) 42号竪穴住居跡（東北から）	109
	(2) 43号・45号竪穴住居跡（西から）	109
図 版 33	(1) 44号竪穴住居跡（北から）	111
	(2) 46号竪穴住居跡（西から）	113
図 版 34	(1) 1号・2号掘立柱建物（南東から）	115
	(2) 1号・2号土壙（東から）	119
図 版 35	(1) 17号・18号土壙（南から）	124
	(2) 17号土壙土器出土状態	124
図 版 36	(1) 23号土壙（南から）	126
	(2) 41号・42号土壙（東から）	131
図 版 37	(1) 43号～47号土壙（北東から）	131
	(2) 48号土壙（東から）	134
図 版 38	(1) 55号土壙（北から）	134
	(2) 56号土壙（南東から）	135
図 版 39	(1) 57号土壙（北東から）	135
	(2) 58号土壙（北から）	136
図 版 40	(1) 59号土壙（東から）	136
	(2) 60号土壙（西から）	136
図 版 41	(1) 61号・62号土壙（北から）	136
	(2) 63号土壙（北から）	138
図 版 42	(1) 65号土壙（東から）	138
	(2) 75号土壙（東から）	145
図 版 43	(1) 3号井戸土層堆積状態	146
	(2) 4号井戸（東から）	146
図 版 44	(1) 4号井戸井戸枠出土状態	147
	(2) 5号井戸（西から）	147
図 版 45	(1) 6号井戸（西から）	149
	(2) 6号井戸最下層出土の木材	149
図 版 46	(1) 7号井戸（北から）	149
	(2) 7号井戸最下層の状態	149
図 版 47	(1) 8号井戸（東から）	149
	(2) 3号周溝状遺構（東から）	152
図 版 48	(1) 4号周溝状遺構（北から）	154

(2) 11号溝埋土堆積状態	157
図 版 49 東台地1号～3号竪穴住居跡出土遺物	50
図 版 50 東台地3号～5号竪穴住居跡出土遺物	51
図 版 51 東台地5号～8号竪穴住居跡出土遺物	54
図 版 52 東台地8号・9号竪穴住居跡出土遺物	56
図 版 53 東台地9号竪穴住居跡, 1号・2号土壙出土遺物	64
図 版 54 東台地2号・5号・8号土壙, 西台地2号竪穴住居跡出土遺物	65
図 版 55 西台地3号・4号・8号・9号・13号竪穴住居跡出土遺物	186
図 版 56 西台地27号・29号・32号・35号竪穴住居跡出土遺物	193
図 版 57 西台地38号・40号・42号竪穴住居跡出土遺物	196
図 版 58 西台地40号・42号・44号竪穴住居跡, 1号土壙出土遺物	197
図 版 59 西台地2号土壙出土遺物	226
図 版 60 西台地2号・3号土壙出土遺物	227
図 版 61 西台地3号土壙出土遺物	227
図 版 62 西台地3号・4号・8号・11号・17号土壙出土遺物	228
図 版 63 西台地17号・20号土壙出土遺物	231
図 版 64 西台地23号・29号・36号・38号～40号・42号・44号土壙出土遺物	233
図 版 65 西台地44号・45号・51号・59号土壙出土遺物	235
図 版 66 西台地61号・65号～67号・69号・71号・72号・74号土壙, 3号・4号井戸出土遺物	237
図 版 67 西台地4号～6号井戸, 1号周溝状遺構, 11号溝出土遺物	239
図 版 68 西台地11号溝出土遺物	242
図 版 69 西台地11号溝出土遺物と西台地焼塩土器	161
図 版 70 西台地出土の瓦	162
図 版 71 西台地出土の瓦	162
図 版 72 西台地出土の瓦	162
図 版 73 西台地出土の瓦	162
図 版 74 西台地出土の瓦	163
図 版 75 西台地出土の瓦	163
図 版 76 西台地出土の瓦	163
図 版 77 西台地出土の瓦	164
図 版 78 西台地出土の瓦	164
図 版 79 西台地出土の瓦	164
図 版 80 西台地出土の瓦	164

図 版 81	(1) 西台地出土の瓦	164
	(2) 谷部大溝全景	262
図 版 82	(1) 木製品集中地区（北西から）	262
	(2) 長柄鋤出土状態	266
図 版 83	(1) 鼠返し出土状態	264
	(2) 鼠返し（表裏）	264

挿図目次

本文対照頁

(東台地)

第 1 図	九州横断自動車道路線図	3
第 2 図	井上薬師堂遺跡周辺地形図 (1/5,000)	5
第 3 図	井上薬師堂遺跡位置図 (1/25,000)	7
第 4 図	井上薬師堂遺跡地形図 (1/3,000)	8
第 5 図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60)	10
第 6 図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	11
第 7 図	3号竪穴住居跡実測図 (1/60)	12
第 8 図	4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	13
第 9 図	5号竪穴住居跡実測図 (1/60)	15
第 10 図	5号竪穴住居跡階段状遺構実測図 (1/30)	16
第 11 図	6号竪穴住居跡実測図 (1/60)	17
第 12 図	7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	19
第 13 図	8号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/30・1/60)	20
第 14 図	9号竪穴住居跡、土器出土状態実測図 (1/30・1/60)	22
第 15 図	10号竪穴住居跡実測図 (1/60)	24
第 16 図	11号竪穴住居跡実測図 (1/60)	25
第 17 図	12号竪穴住居跡、階段状遺構実測図 (1/30・1/60)	26
第 18 図	13号竪穴住居跡実測図 (1/60)	28
第 19 図	1号・2号掘立柱建物実測図 (1/60)	29
第 20 図	1号・2号土壤実測図 (1/60)	30
第 21 図	3号・4号・7号土壤実測図 (1/60)	33
第 22 図	5号・6号土壤実測図 (1/60)	34
第 23 図	1号周溝状遺構実測図 (1/60)	37
第 24 図	2号周溝状遺構実測図 (1/60)	38
第 25 図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	39
第 26 図	1号～3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	40
第 27 図	3号・4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	41
第 28 図	4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	42
第 29 図	5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	43

第 30 図	5号・6号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図(1/3)	44
第 31 図	7号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図(1/3)	45
第 32 図	8号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	46
第 33 図	9号竪穴住居跡出土土器実測図その1(1/3)	47
第 34 図	9号竪穴住居跡出土土器実測図その2(1/3)	48
第 35 図	9号・10号・12号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	49
第 36 図	1号土壙出土土器実測図(1/3)	58
第 37 図	1号・2号土壙出土土器実測図(1/3)	59
第 38 図	2号土壙出土土器実測図(1/3)	60
第 39 図	4号・5号土壙出土土器実測図(1/3)	61
第 40 図	5号土壙出土土器実測図(1/3)	62
第 41 図	6号～8号土壙出土土器実測図(1/3)	63
第 42 図	9号土壙出土土器実測図(1/3)	64
第 43 図	1号・2号周溝状遺構出土土器実測図(1/4)	70
第 44 図	東台地出土鉄器・石器・土製品実測図(1/2・1/4)	71
(西台地)		
第 45 図	1号竪穴住居跡実測図(1/60)	73
第 46 図	2号竪穴住居跡実測図(1/60)	74
第 47 図	3号竪穴住居跡実測図(1/60)	75
第 48 図	4号・7号・9号竪穴住居跡実測図(1/60)	77
第 49 図	5号竪穴住居跡実測図(1/60)	78
第 50 図	6号竪穴住居跡実測図(1/60)	79
第 51 図	8A号・8B号竪穴住居跡実測図(1/60)	81
第 52 図	10号・11号竪穴住居跡実測図(1/60)	折り込み
第 53 図	12号竪穴住居跡実測図(1/60)	83
第 54 図	13号竪穴住居跡実測図(1/60)	84
第 55 図	14号竪穴住居跡実測図(1/60)	85
第 56 図	15号竪穴住居跡実測図(1/60)	86
第 57 図	16号竪穴住居跡実測図(1/60)	86
第 58 図	17号竪穴住居跡実測図(1/60)	87
第 59 図	18号竪穴住居跡実測図(1/60)	88
第 60 図	25号竪穴住居跡実測図(1/60)	88
第 61 図	26号竪穴住居跡実測図(1/60)	89

第 62 図	27号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/30・1/60)	90
第 63 図	28号竪穴住居跡実測図 (1/60)	92
第 64 図	29号竪穴住居跡実測図 (1/60)	93
第 65 図	30号・47号竪穴住居跡実測図 (1/60)	95
第 66 図	31号・37号竪穴住居跡実測図 (1/60)	折り込み
第 67 図	32号竪穴住居跡実測図 (1/60)	96
第 68 図	33号竪穴住居跡実測図 (1/60)	97
第 69 図	34号竪穴住居跡実測図 (1/60)	99
第 70 図	35号竪穴住居跡実測図 (1/60)	100
第 71 図	36号竪穴住居跡実測図 (1/60)	101
第 72 図	38号竪穴住居跡実測図 (1/60)	102
第 73 図	39号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/30・1/60)	104
第 74 図	40号竪穴住居跡実測図 (1/60)	105
第 75 図	41号・44号竪穴住居跡実測図 (1/60)	107
第 76 図	42号竪穴住居跡実測図 (1/60)	108
第 77 図	43号・45号竪穴住居跡実測図 (1/60)	110
第 78 図	46号・48号竪穴住居跡実測図 (1/60)	112
第 79 図	1号・2号掘立柱建物実測図 (1/60)	114
第 80 図	3号掘立柱建物実測図 (1/60)	116
第 81 図	4号～6号掘立柱建物実測図 (1/60)	117
第 82 図	7号・8号掘立柱建物実測図 (1/60・1/80)	118
第 83 図	1号・2号土壌実測図 (1/80)	120
第 84 図	3号～7号土壌実測図 (1/60・1/80)	121
第 85 図	8号～12号土壌実測図 (1/60)	123
第 86 図	13号～22号土壌実測図 (1/60・1/80)	125
第 87 図	23号～26号土壌実測図 (1/60・1/80)	127
第 88 図	27号～33号土壌実測図 (1/60)	129
第 89 図	34号～38号・41号土壌実測図 (1/60)	130
第 90 図	40号・42号～44号土壌実測図 (1/60)	132
第 91 図	45号～51号・土壌実測図 (1/60)	133
第 92 図	52号～54号・土壌実測図 (1/60)	135
第 93 図	55号・56号・61号・62号・64号土壌実測図 (1/60)	137
第 94 図	57号～60号・63号土壌実測図 (1/40)	139

第 95 図	65号・69号～71号・76号土壤実測図 (1/60)	141
第 96 図	66号～68号・73号・74号土壤実測図 (1/40)	143
第 97 図	72号・75号・77号土壤実測図 (1/60)	144
第 98 図	3号～5号井戸実測図 (1/60)	148
第 99 図	6号～8号井戸実測図 (1/60)	150
第 100 図	1号周溝状遺構実測図 (1/60)	151
第 101 図	2号周溝状遺構実測図 (1/60)	152
第 102 図	3号周溝状遺構実測図 (1/60)	153
第 103 図	4号周溝状遺構実測図 (1/60)	154
第 104 図	11号溝土層断面実測図 (1/60)	158
第 105 図	不明遺構(柱穴群)実測図 (1/60)	160
第 106 図	1号～3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	168
第 107 図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	169
第 108 図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	170
第 109 図	4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	171
第 110 図	4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	172
第 111 図	5号・6号・8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	173
第 112 図	8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	174
第 113 図	9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	175
第 114 図	10号～13号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)	176
第 115 図	14号～17号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	177
第 116 図	27号～29号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	178
第 117 図	29号・30号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	179
第 118 図	32号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/4)	180
第 119 図	32号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/4)	181
第 120 図	35号・38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	182
第 121 図	40号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	183
第 122 図	42号・44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	184
第 123 図	44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)	185
第 124 図	1号土壤出土土器実測図 (1/3)	198
第 125 図	2号土壤出土土器実測図 (1/3)	199
第 126 図	2号・3号土壤出土土器実測図 (1/3)	200
第 127 図	3号土壤出土土器実測図 (1/3)	201

第 128 図	4号～6号土壙出土土器実測図(1/3)	202
第 129 図	6号・8号・9号・11号土壙出土土器実測図(1/3)	203
第 130 図	11号土壙出土土器実測図(1/3)	204
第 131 図	11号土壙出土土器実測図(1/3)	205
第 132 図	12号～14号・16号・17号土壙出土土器実測図(1/3)	206
第 133 図	17号土壙出土土器実測図(1/3)	207
第 134 図	17号土壙出土土器実測図(1/3)	208
第 135 図	18号・20号土壙出土土器実測図(1/3)	209
第 136 図	20号・23号土壙出土土器実測図(1/3)	210
第 137 図	23号・25号・29号～31号土壙出土土器実測図(1/3)	211
第 138 図	36号・38号・39号・42号・43号土壙出土土器実測図(1/3)	212
第 139 図	44号・45号土壙出土土器実測図(1/3)	213
第 140 図	45号土壙出土土器実測図(1/3)	214
第 141 図	45号・46号・49号土壙出土土器実測図(1/3)	215
第 142 図	59号・61号・65号・66号土壙出土土器実測図(1/3)	216
第 143 図	69号～73号土壙出土土器実測図(1/3)	217
第 144 図	77号土壙, 3号～5号井戸出土土器実測図(1/3)	218
第 145 図	1号・2号周溝状遺構出土土器実測図(1/4)	219
第 146 図	2号・3号周溝状遺構出土土器実測図(1/4)	220
第 147 図	4号周溝状遺構, 10号溝出土土器実測図(1/3・1/6)	221
第 148 図	1号・5号・6号・8号・9号溝出土土器実測図(1/3)	222
第 149 図	11号溝出土土器実測図その1(1/3)	223
第 150 図	11号溝出土土器実測図その2(1/3)	224
第 151 図	西台地出土焼塩土器実測図(1/3)	225
第 152 図	西台地出土鉄器・石器・土製品実測図その1(1/2・1/4)	244
第 153 図	西台地出土鉄器・石器・土製品実測図その2(1/2・1/4)	245
第 154 図	西台地出土鉄器・石器・土製品実測図その3(1/2・1/4)	246
第 155 図	西台地出土瓦実測図その1(1/3)	247
第 156 図	西台地出土瓦実測図その2(1/3)	248
第 157 図	西台地出土瓦実測図その3(1/3)	249
第 158 図	西台地出土瓦実測図その4(1/3)	250
第 159 図	西台地出土瓦実測図その5(1/3)	251
第 160 図	西台地出土瓦実測図その6(1/3)	252

第 161 図	西台地出土瓦実測図その 7 (1/3)	253
第 162 図	西台地出土瓦実測図その 8 (1/3)	254
第 163 図	西台地出土瓦実測図その 9 (1/3)	255
第 164 図	西台地出土瓦実測図その10 (1/3)	256
第 165 図	西台地出土瓦実測図その11 (1/3)	257
第 166 図	西台地出土瓦実測図その12 (1/3)	258
第 167 図	西台地出土瓦実測図その13 (1/3)	259
第 168 図	西台地出土瓦実測図その14 (1/3)	260
第 169 図	西台地出土瓦実測図その15 (1/3)	261
第 170 図	大溝出土墨書土器実測図 (1/3)	262
第 171 図	大溝木製品集中地区実測図	263
第 172 図	鼠返し実測図 (1/6)	264
第 173 図	長柄鋤実測図 (1/6)	265

表 目 次

第 1 表	東台地 1 号・2 号掘立柱建物計測表	29
第 2 表	西台地 1 号掘立柱建物計測表	114
第 3 表	西台地 2 号掘立柱建物計測表	114
第 4 表	西台地 3 号掘立柱建物計測表	116
第 5 表	西台地出土遺構新旧対照表	167

第1章 はじめに

小都市に所在する井上薬師堂遺跡は、集落遺構からなる東・西台地と、東台地の東の谷部を含み、谷部からは豊富な木製品資料等が出土している。

井上薬師堂遺跡の調査は昭和59・60年度にわたって実施した。調査の都合上、昭和59年度の調査を第一次調査とし、昭和60年度のそれを第二次調査とした。

第一次調査は、西台地の半分と谷部の調査を実施し、谷部の調査結果については昭和61年度に『九州横断自動車道埋蔵文化財調査報告－10－』として報告している。谷部では主に7・8世紀代を中心に、多量の木製品・土器類等が出土し、中には木簡・墨書き器が含まれ、筑後地区における文字資料として貴重なものであった。

第二次調査は、後述のように東・西台地の残余の遺構検出及び実測等であった。

さて、井上薬師堂遺跡は、調査前に表土が除去され、一部においては遺構面まで削平が及んでいた。また、その際の排土中から、軒丸瓦を含む数片の瓦片を採集した。

第一次調査は、昭和59年8月の盆あけから重機を導入して残余の表土剥ぎから開始した。西台地の遺構面の覆土を除去した後の9月3日に作業員を導入し遺構検出を開始した。事前に行った道路公団甘木事務所との協議において、幅員8m程の工事用道路を用地の南辺に沿って建設するため、その部分を先行して調査を実施するよう依頼を受けていたため、工事用道路部分から調査を開始した。したがって、調査区南辺部の1～13号竪穴住居跡を中心とした土壌や溝等が調査対象であった。遺構は弥生時代及び古墳時代のものが重複し、ピットは多く検出するものの、掘立柱建物跡としてまとまるものはなかった。

工事用道路部分の実測と並行して、調査区の西半部に調査の主力を移し西から東側に向けて遺構検出を開始した。各種遺構が密集し、遺構の切り合い関係の確認や遺存状態が悪い遺構の性格の把握に手間取りなどしたが、調査は日々に進捗した。調査中の12月に道路公団甘木事務所から、谷部に構造物を建設し、その完成期限が来年度の田植え前だと知らされた。よって、急遽、谷部の北側用地境に試掘トレンチを設定し、谷部の深さ・埋土の状態の情報を得、木製品を検出した。よって、道路公団甘木事務所と協議し、2月までの間で谷部を調査することとし、困難な調査の末、3月16日に調査を終了した。

これらの調査の間、12月8日に調査機材や実測図を収納するプレハブが全焼した。それは筆者の不注意からで、多くの方々に御迷惑をかけた。図面はある程度復原したが、土壌等の遺構番号に不連続な部分ができた。それは、ひとえに筆者の責任であり、この報告書に不正確な部分が生じたことを深くおわびします。（兎玉）

第一次調査に引き続いて第二次調査は、昭和60年4月8日から作業を開始した。第一次調査では、工事用道路部分と西側台地の約1/2が掘り終わっており、この時点で担当者が替わり調査を引き継いだため、状況の把握ができないことから、二次調査は、一部調査がなされていた東台地から始めることにした。これに先立って、調査区の東側に位置する薬師堂谷地区側にシガラミを組み、土砂の流入を防ぐ措置を講じると同時に、既に表土剥ぎが終了していた東台地の遺構検出を実施した。

調査を開始した翌日には、道路公団甘木事務所と調査と工事工程の調整についての打ち合わせを行い、両側からの工事が迫っていることから早急に調査の終了要請がなされた。

東台地と西台地との境には「U」字状に浅い谷が入り込み、調査した東台地は南東側に延びた先端部にあたる。この調査区からは弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴住居の他、掘立柱建物、土壙、周溝状遺構などを検出したが、台地の縁に位置する竪穴住居は削られたものが多く、旧地形がかなり変わっていることが窺われた。

調査が順調に進行していた4月18日、藤井功前文化課長の危篤の連絡があり、現場を緒方君に任せて病院へ直行した。しかしながら、翌19日午前6時10分不帰の客となられた。まさに痛恨の極みであった。このため5日間現場を中止し、再開したのは4月24日からであった。午後からは作業員全員西台地に移動し、掘り残しの調査に着手した。

西台地は、東台地とは違って遺構が錯綜し、やや調査に時間を要したもの、6月18日にすべての作業を終了したが、谷地区に一部未調査部分があったため、6月24日から緒方技師が谷部の調査にとりかかった。

調査後の整理作業は、当初文化課甘木事務所で行っていたが、他の地点の整理との関係で九州歴史資料館に遺物を移動して、実測及び写真撮影などの作業を行った。(佐々木)

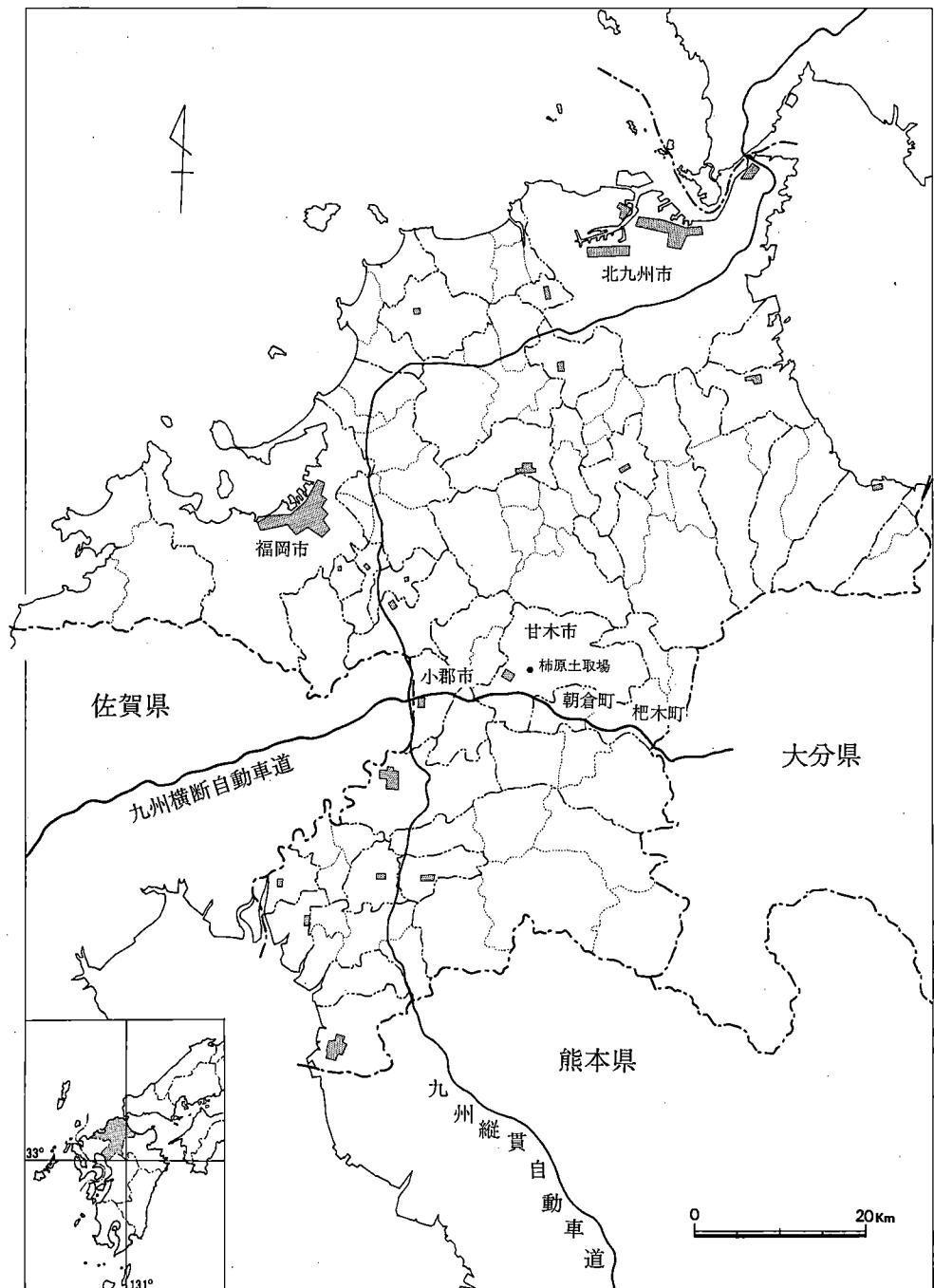
なお、井上薬師堂遺跡に関する調査関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局長	今村 浩三	杉田 美昭
総務部長	菱刈 庄二（前任）	安元 富次
管理課長	森 宏之	
管理課長代理	野口 利夫（前任）	佐伯 豊

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所長	乗松 紀三（前任）	風間 徹
副所長	西田 功	
副所長（技術担当）	中村 義治	



第1図 九州横断自動車道路線図

庶務課長	松下 幸男 (前任)	徳永 登
用地課長	岩下 剛 (前任)	松尾 伸男
工務課長	山口 宗雄 (前任)	後藤二郎彦
小郡工事区工事長	友田 義則	
甘木工事区工事長	猪狩 宗雄	
朝倉工事区工事長	小手川良和 (前任)	上野 満
杷木工事区工事長	中山 茂 (前任)	小沢 公共

福岡県教育委員会

総 括

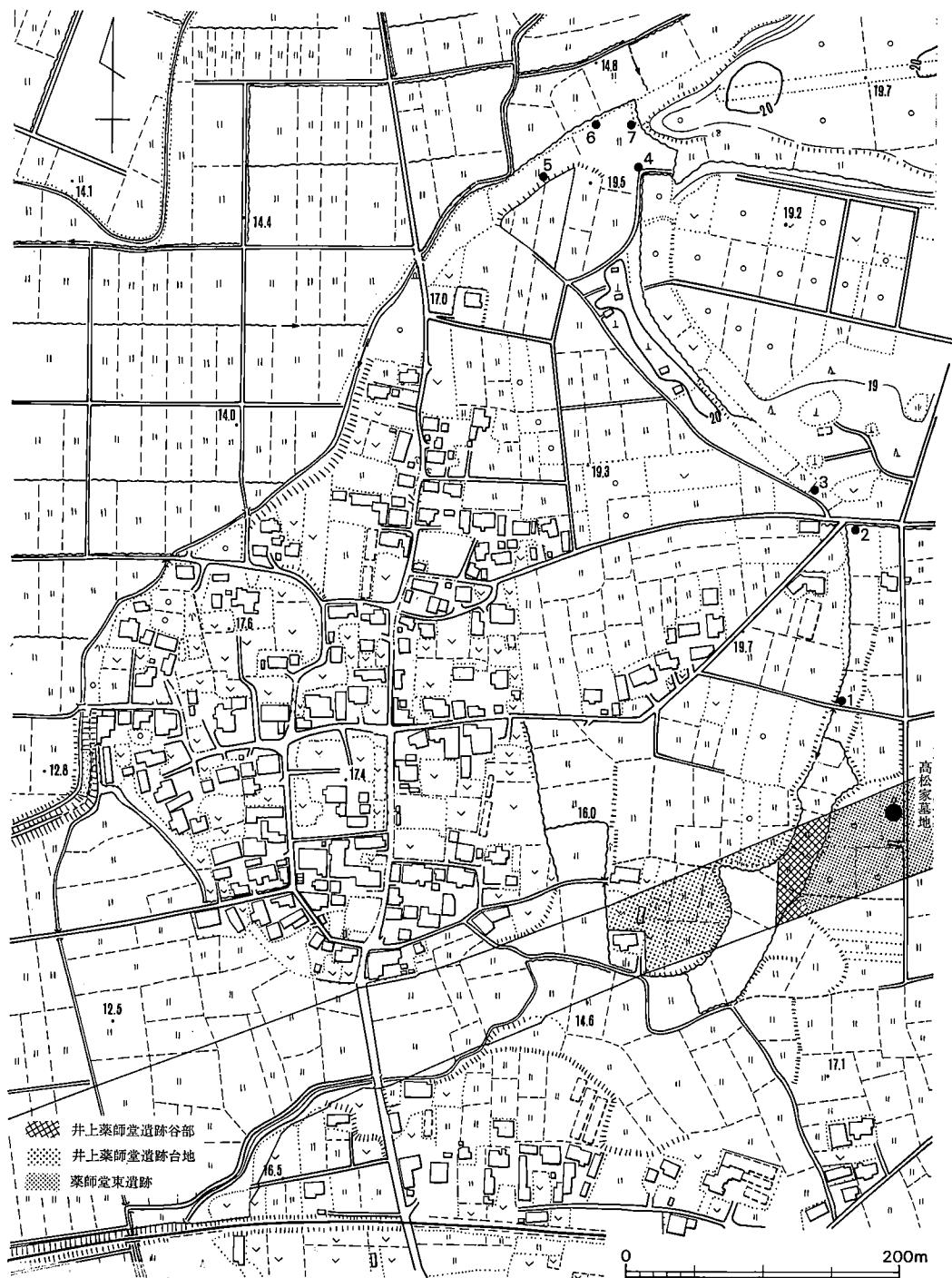
教 育 長	友野 隆
教育次長	安部 徹 (前任) 竹井 宏
指導第二部長	渕上 雄幸
文化課長	前田 英一
文化課課長補佐	中村 一世 (前任) 平 聖峰
文化課長技術補佐	宮小路賀宏 (現・九州歴史資料館学芸二課長)
文化課参事補佐	栗原 和彦 (現・九州歴史資料館調査課長)

庶 務

文化課庶務係長	松尾 満 (前任) 平 聖峰 (兼任)
文化課事務主査	長谷川伸弘
同 主任主事	川村喜一郎

調 査

文化課調査第2係長	栗原 和彦 (前任) 宮小路賀宏 (兼任)
同 技術主査	井上 裕弘 (現・文化課文化財保護室長補佐)
同 主任技師	木下 修 (現・同参事補佐)
同 主任技師	高橋 章 (現・北九州教育事務所参事補佐)
同 主任技師	※佐々木隆彦 (現・九州歴史資料館参事補佐)
同 主任技師	※児玉 真一 (現・文化課文化財保護室参事補佐)
同 主任技師	新原 正典 (現・同) ※調査担当者
同 主任技師	中間 研志 (現・同)
同 主任技師	小池 史哲 (現・同)
同 技 師	伊崎 俊秋 (現・県立甘木資料館副館長)
同 技 師	緒方 泉 (現・文化課文化振興班技術主査)



第2図 井上薬師堂遺跡周辺地形図 (1/5,000)

(●印ボーリング調査地点)

文化課技師 小田 和利（現・九州歴史資料館主任技師）

同 文化財専門員 木村幾多郎（現・大分市歴史資料館館長）

同 臨時職員 日高 正幸（現・小石原村教育委員会）

同 臨時職員 森山 栄一（現・筑紫野市教育委員会）

同 臨時職員 宮田 浩之（現・小郡市教育委員会）

同 調査補助員 高田 一弘

佐土原逸男

武田 光正（現・遠賀町教育委員会）

平嶋 文博（現・三輪町教育委員会）

田中 康信（現・瀬高町教育委員会）

向田 雅彦（現・鳥栖市教育委員会）

樋口 秀信（現・佐賀県教育委員会）

調査作業員

人見シズカ 堀江ミチエ 堀内マサヨ 安丸シノブ 古賀アキエ 野田スミ子

高木キトシ 中島トシコ 中村 妙子 野田トメノ 野田ヨシ子 西岡クミ子

古賀トモコ 白井サツキ 藤 静子 野田ミネ子 野田マサ子 清水サチ子

倉成トシエ 古賀ヨシ子 西岡 和子 島田ミチ子 西岡 文子

古賀スマ子 花田ナオエ 権藤キヨ子 倉成ツルヨ 野田マスミ

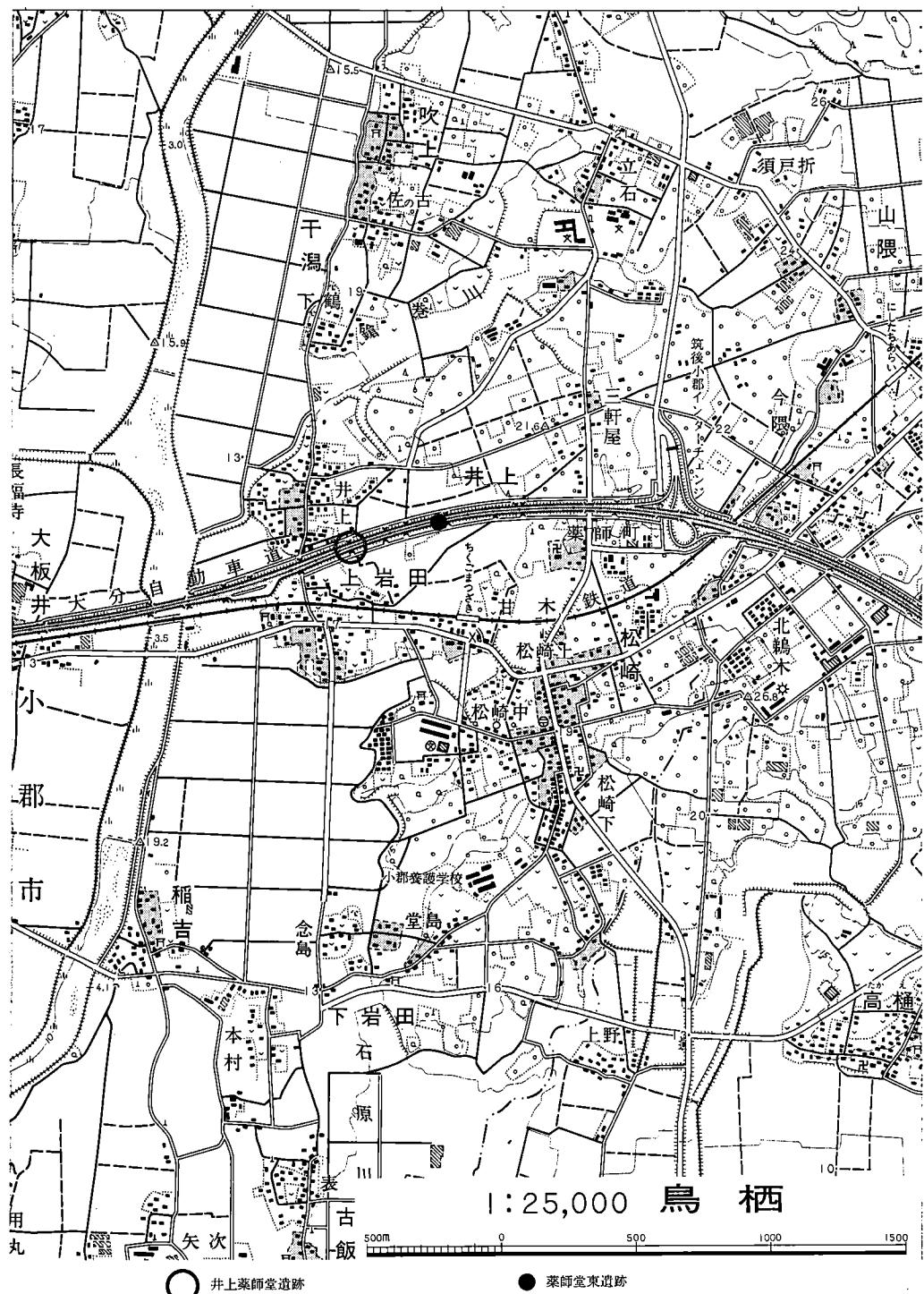
第2章 遺跡の位置と環境

井上薬師堂遺跡は、福岡県小郡市大字井上に所在する。

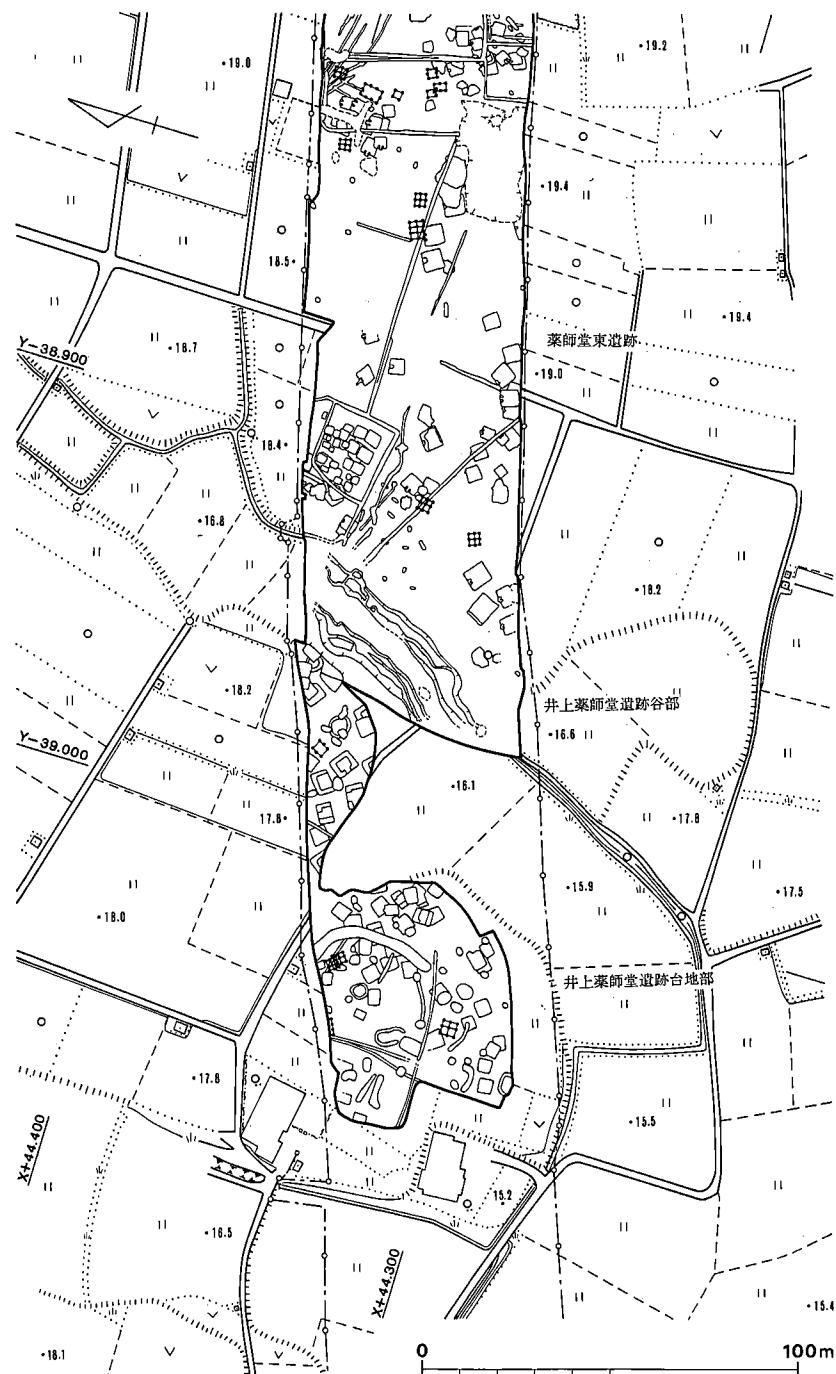
この遺跡は、宝満川東岸に位置する花立山（標高130.6m）から南西に延びる低位段丘上（標高17.0m 前後）にあり、この段丘は宝満川によって形成されたものである。本遺跡は谷地区と西台地とに別けて調査し、台地は東・西台地に区分している。

東隣の谷地区（昭和60年1月～3月調査）からは、大量の木製品、木簡、山田寺系の瓦、墨書・ヘラ書土器などが出土し、谷を挟んだ東側では、薬師堂東遺跡が調査され、7世紀～8世紀の集落が確認されている。

なお、遺跡の位置と環境については「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－10－」に詳細に記載されているのでこの章では割愛する。



第3図 井上薬師堂遺跡位置図 (1/25,000)



第4図 井上薬師堂遺跡地形図 (1/3,000)

第3章 調査の内容

第1節 東台地の調査

東台地の竪穴住居跡は、総軒数が13軒であるが、M-2の区画で錯綜した掘り込みが竪穴住居であればその数は15軒乃至16軒程度となろう。調査場所は、台地の先端部にあたり、狭い範囲の中で弥生時代後期、古墳時代前期及び後期の3時期の住居がひしめきあっており、北側に広がる台地上には相当数の竪穴住居の存在が想定される。

台地の先端に位置する竪穴住居は削られていることで旧地形が保たれていないことが分かるが、どの程度削平を受けているのかははっきりしない。

明確な13軒の竪穴住居の内で、弥生時代後期の住居は4軒、古墳時代初頭～前期の住居が4軒、古墳時代後期の住居は4軒、不明1軒を数える。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居には殆どベット状遺構が備えつけられており、その形態は様々である。古墳時代前期の竪穴住居跡が4本柱に対して、古く位置付けられる住居跡は、平面プランが長方形を呈し、支柱穴が2本であるなど、北部九州で普遍的に認められる類の住居跡である。古墳時代前期の住居の次に現れる竪穴住居は後期（6世紀代）の所産で、当然のごとく「U」字状のカマドが付設されている。

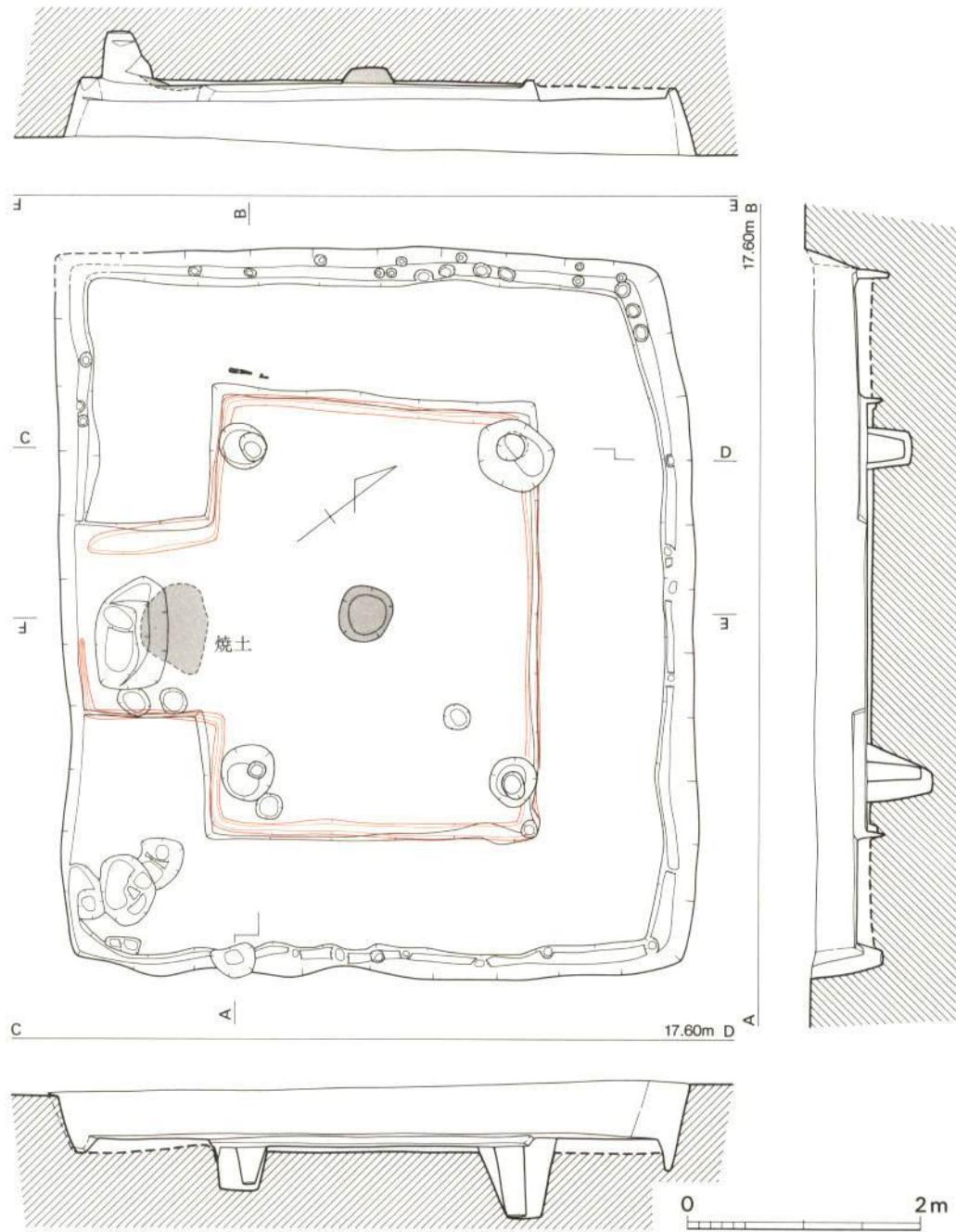
この他、弥生時代後期の円形周溝状遺構2基、掘立柱建物1棟、土壙7基+ α 、溝1条などを検出した。

以下、個別の遺構について述べることにする。

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (図版5-(1)・(2), 第5図)

調査区の中央部付近で検出した竪穴住居跡で、1号土壙と南西隅で重複している他はさしたる切り合はない。設置方向は、4号・10号・11号・12号住居と同じであるが、11号住居とは近接していることから同時併存でない可能性がある。住居の形状は方形に近い形をなし、その規模は、5.30m・5.20m×6.00m、床面までの深さは40cm～50cmを測り、遺存状態の良好な住居である。南壁の中央部を除いて、壁に沿って幅1.00m前後、高さ10cmの貼り床のベットが巡っている。壁沿いの壁溝内には所どころに杭を打ち込んだようなピットが掘られ、この杭で壁際の



板材を止めていたと思われ、内側のベットと床面との境にも見られる。

ベットの途切れる南側の壁沿いには、橢円形の屋内土壙が配されている。屋内土壙に接するような形で焼土が薄く堆積し、一部は内部に流れ込んだ状態で検出された。

柱はベットの内側の四隅に建てられ、その柱間は2.90mと2.30mを測る。調査時点で覆土中の柱の状況を観察した結果、覆土中にも柱の痕跡を観察したことから、柱は立ち腐れの状態にあったことが分かる。床面の中央には浅い焼痕のある炉が設置されていた。

出土土器は大半が破片で、壺・甕・小型丸底土器・手捏土器・高坏・坏の他、鉄器片が1点ある。出土した土器は布留古式並行期のものであるが、甕の中には新しい形態のものが含まれており、若干の混入品がある。

出土遺物

土 器 (図版49, 第25・26図)

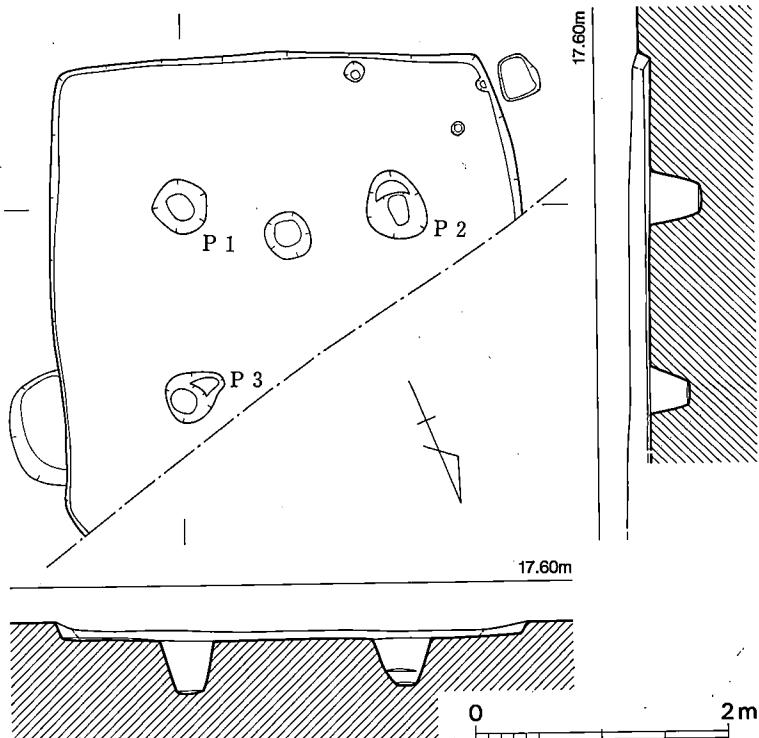
土師器 壺は二重口縁(2)と直口(1)するタイプとがある。甕は布留式の特徴を有すなすもので、4はつくりが雑で真似たものであろう。5の内面は頸部下からヘラ削りしており、技法的に古いものである。7・8は新しいタイプの甕で混入土器であろう。12は脚台付の土器で、底部付近に3箇所孔を穿っている。一応甕としたが、器種がはっきりしない。20~22は高坏としたが、22は別の器種の可能性がある。

鉄 器 (第44図)

1は小鉄片の製品で欠損部分がない。長さは2.7cm、幅1.9cm、厚さは4mmを測り、一方に片刃をつくり出している。一種の板状鉄斧と思われる。埋土中から出土した。

2号竪穴住居跡

(図版4-(2), 第6図)



第6図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

調査区の北側で検出した竪穴住居跡であるが、約1/3が調査区外で完掘していない。住居の形態（方形）から、おそらく北側壁にカマドを付設するタイプであろう。

東と南側の壁の長さは3.70mと3.35mを測り、壁高は10cm前後で遺存状態は悪い。支柱は4本で、検出した3本の柱間はP1-P2が1.70m、P1-P3は1.55mを測る。その他詳細は不明である。

出土した遺物は少なく、図示可能な須恵器の壊蓋があるに過ぎない。

出土遺物

土 器 (図版49、第26図)

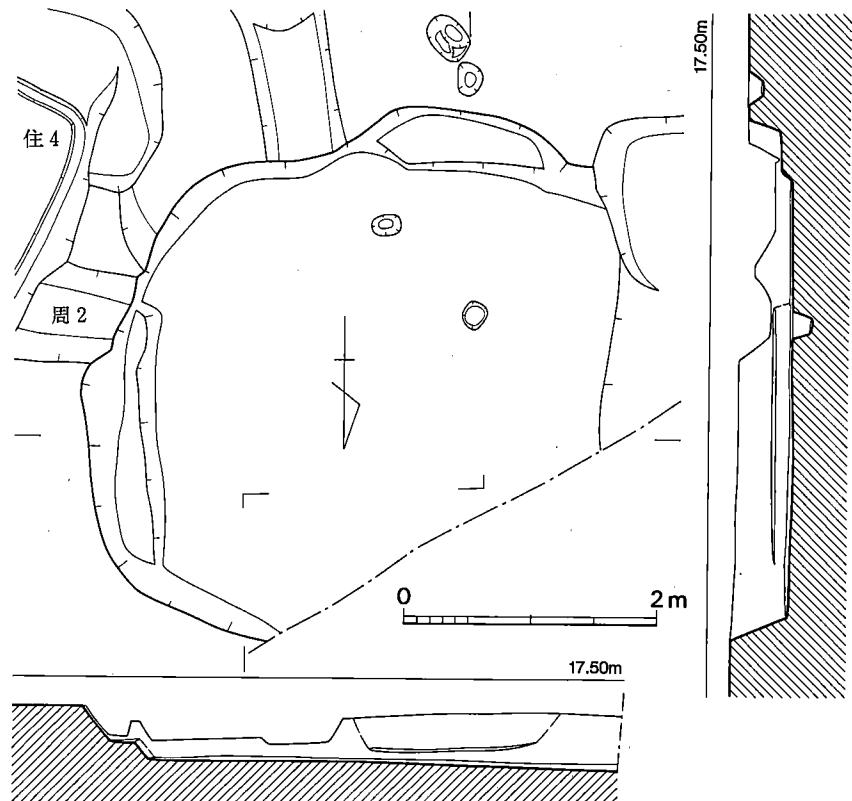
須恵器 完形のIII型式の壊蓋が1点出土している。天井部には一直線状のヘラ記号が刻まれている。床面上からの出土である。

3号竪穴住居跡 (図版6-(1), 第7図)

東台地調査区の北

東端で検出した竪穴住居跡であるが、この周囲は他の遺構が錯綜しており不明な点が多く、第2次調査を開始した時点では既に調査済であったことも相まって判別しにくい部分があるが、3号住居として説明する。

住居の北西側は調査区外のため約1/3が未調査である。重複関係は、土壤と2号周溝状遺構との重なりがあるが、土壤よりは古く周溝状遺構よりは新しい。



第7図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物をみると7世紀後半代の土器が出土していることから、カマドを付設した方形の竪穴住居であろう。

出土遺物は、土師器の甕・台付鉢・甌、須恵器の壺蓋・壺身・提瓶・高台付椀の他、不明石器などがある。

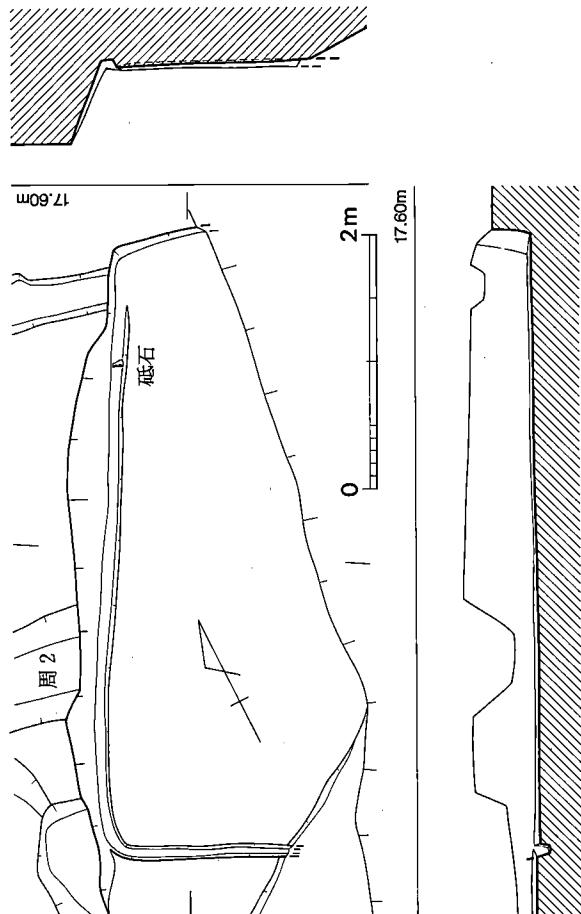
出土遺物

土 器 (図版49, 第26・27図)

土師器 甕には鋭く反り返る口縁部を有すものと外反度が鈍いものがある。4は甌の破片である。5は珍しい器種での復原実測である。すべて住居の覆土中からの出土である。

須恵器 壺蓋は身受けの返りがつくタイプで撮みが付くであろう。9の壺身の外面底部にはヘラ記号を刻んでいる。

椀は高い高台の付くタイプで、これらもすべて住居の埋土中からの出土である。



第8図 4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

4号竪穴住居跡 (図版6-(1), 第8図)

3号竪穴住居跡の東側に隣接した形で検出した竪穴住居跡であるが、2/3以上が削平され消失している。重複関係では、弥生時代中期後半から末頃の2号周溝状遺構より新しい。

住居の西壁辺の長さは4.80m、深さは65cmを測る。床面は平坦で硬く踏み締められていた。柱穴などは検出範囲内では見当たらない。

出土遺物は、大半が住居の埋土中からであるが、遺物の時期が3時期にわたっており、最下層からは古墳時代前期の土器、中層から上層にかけては6世紀後半から7世紀代にかけての土器類が出土している。これらの事実から、当該住居の時期は、最下層の古墳時代前期頃の所産と考えられ、同一方向に設置された1号竪穴住居跡と同時併存していたと思われる。

出土した器種は、古式土師器の壺・壺、土師器の甕・鉢、須恵器の甕・壺蓋・高台付椀・高壺の他、刀子片、周溝内から出土した砾石と軽石、円形の不明石器がある。

出土遺物

土 器 (図版50, 第27・28図)

土師器 1～3は下層から出土した古式土師器で、住居に伴う土器であろう。4～6の甕は須恵器の壺蓋15・16に伴うと思われる。10・11などの口縁部を厚くつくるタイプは、身受けの返りのある壺蓋や高台付椀に伴うであろう。

須恵器 須恵器にも時期差があり、15の外面天井部にはヘラ記号が刻まれている。

鉄 器 (第44図)

刀 子(2) 茎から刃部にかけての小片で、関部は不明瞭である。背の幅は5mmを測る。覆土中からの出土である。

石 器 (第44図)

砥 石(4) 住居の周溝内から出土した手持ち砥石がある。図示した上部が欠損しているが研ぎ面は4面で、使い込んでおり中央部が研ぎ減りし細くなっている。

軽 石(5・6) 埋土中から2個出土している。5は断面が台形状をなし、緊縛したような痕跡はない。6は図示した裏面が凹面をなし、浮子に使用した可能性がある。

不明石器(7) 住居の埋土の下層から出土した円形の石器がある。約1/2が欠損するが、使用した石材は花崗岩で側面を粗く加工している。図示した上半部には弱い火を受け淡く赤変している。直径は16.4cmに復原でき、厚さは6.0cmを測る。用途が何かはわからない。

5号竪穴住居跡 (図版6-(2)・7-(1)・(2), 第9・10図)

1号竪穴住居跡の北西隣で検出した竪穴住居跡である。他の遺構との重複関係はない。住居の平面プランは長方形で、その規模は長辺が5.80m・6.00m、短辺が4.40m・4.15m、床面までの深さは35cm～40cmを測る。

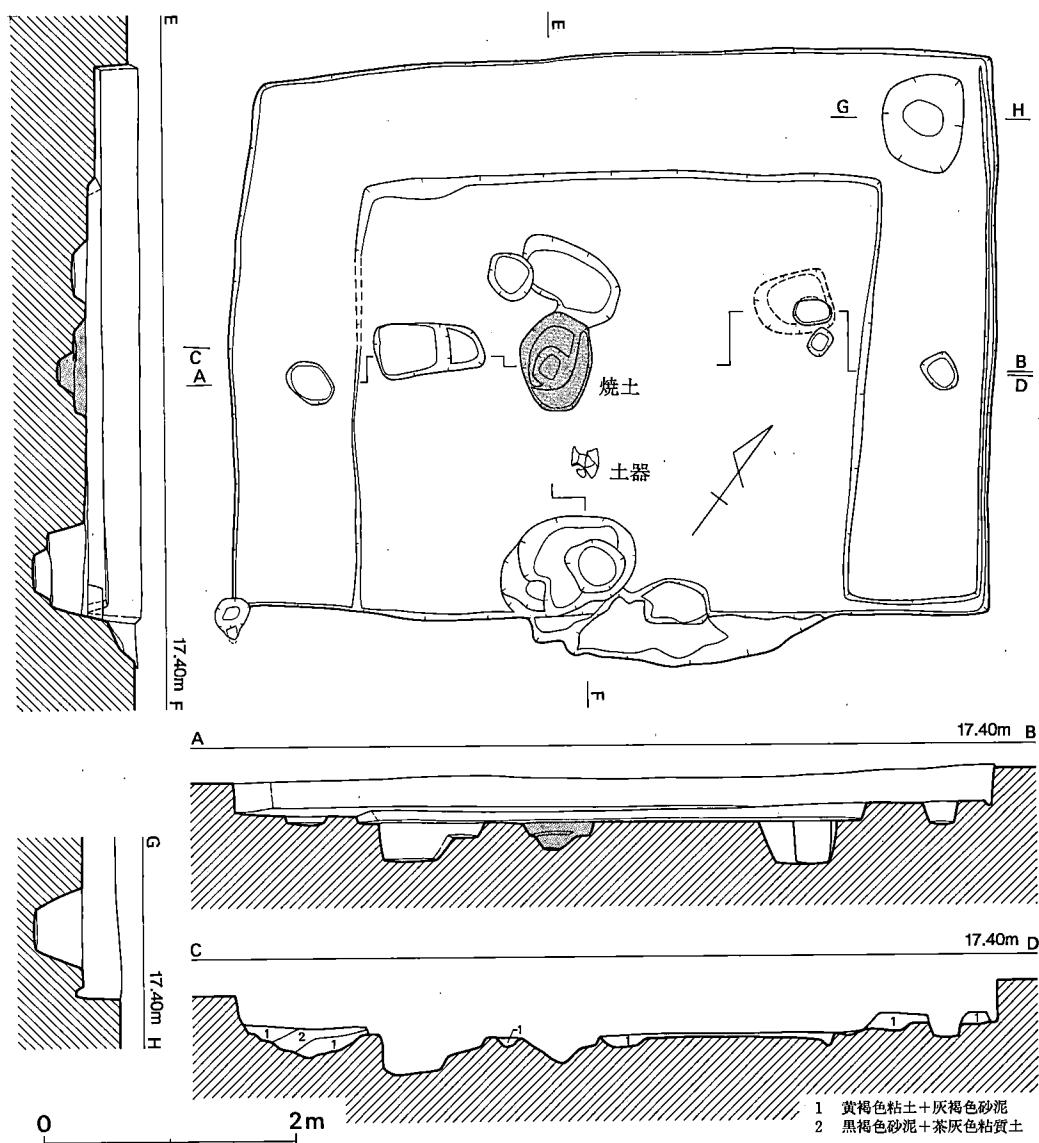
南壁を除いた壁沿いには、幅が90cm前後、高さが15cmのベットが「コ」字状に巡っている。図示した断面図でも分かるように、ベットは住居を設定する際にかなり凹凸のある掘削をした後に灰褐色砂泥の混じった黄褐色粘土と灰褐色粘質土の混ざった黒褐色砂泥とを客土し貼床としている。

支柱穴は2本で、柱間は3.20m～3.30mである。その延長線のベット上には浅い支えの柱穴が掘られている。床面の西寄りには2段掘りのピットがあり、内部には灰が若干詰まっていたが焼痕などは認められない。炉としての使用が考えられる。

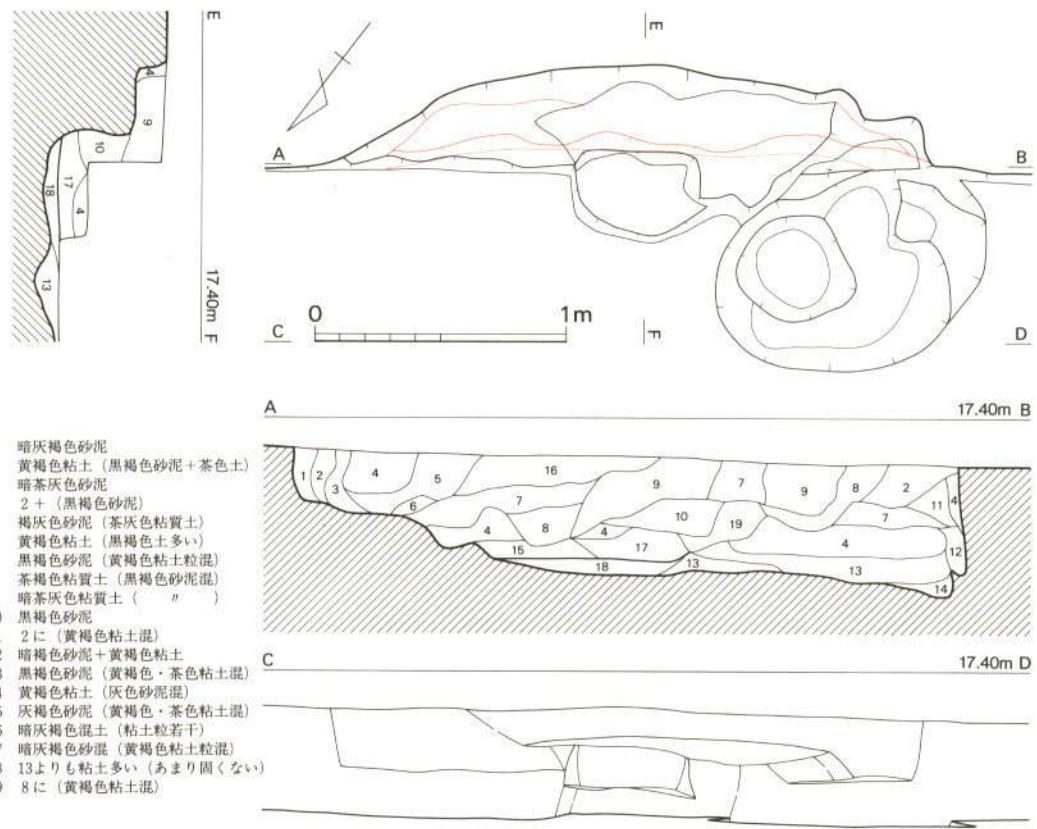
南壁沿いの中央部には、不整円形をした所謂屋内土壙が掘られ、底面にはさらにピットが掘られている。屋内土壙が設置されている壁面には、奥行きの浅い掘り込み状のラインを検出した。掘り込みの中央付近には、幅50cmの粘質土の階段状の遺構が付設されていた。浅い掘り込みは屋内土壙の部分まで達しており、この掘り込みが階段状の遺構と関連性があるか否かであ

るが、階段状遺構が住居の出入り口の可能性が強いことを考慮すれば、粘質土と砂泥による壁面の補強なのか、または壁面の崩壊による補修痕のどちらかであろう。ちなみに検出上面は硬く締まっていない。

住居の北隅のベット上には、65cm×75cm、深さが38cmの規模のピット（屋内貯蔵穴と考えている）が設置されている。ベット上に設置された例としては、6号・7号・11号・38号住居などにみられる。



第9図 5号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第10図 5号竖穴住居跡階段状遺構実測図 (1/30)

出土遺物は、古式土師器の甕・鉢、弥生時代の系譜を引く器台の他、覆土の上層から新しい6世紀後半頃の須恵器の坏身が出土しているが、混入品である。古式土師器は、4と7が床面上から出土し、他は覆土の下層からの出土である。その他、安山岩製の打製石鎌がある。

出土遺物

土 器 (図版50・51, 第29・30図)

土師器 甕には2タイプあり、1は在地系の甕で、2は布留式系統の甕の形態をなす。5・6のような平底の鉢が混ざっており、やや古い形態のものが残っているようである。7には在地の器種にみられる粗い叩きがある。

8の坏は小片で混入土器である。底部にヘラ記号と思われる一条の沈線が刻まれている。

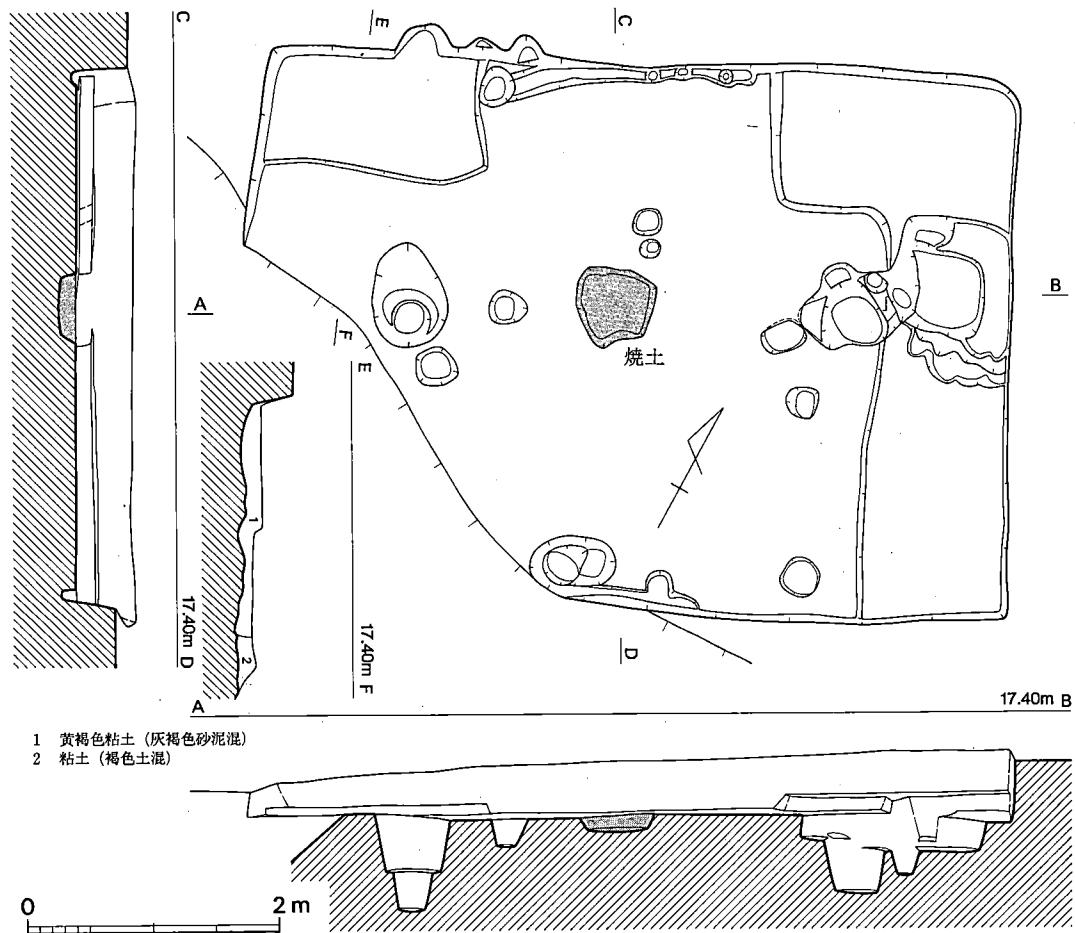
須恵器 いずれも破片の復原実測で、2号竖穴住居跡から出土している須恵器の坏蓋と同じ時期の坏身で、当該住居に伴わない流入土器である。

6号竪穴住居跡（図版8-(1), 第11図）

1号竪穴住居跡の南西側で検出した住居跡であるが、住居の南側が削平され完全に消滅している。主だった他の遺構との重複はない。

住居の平面形態は長方形を呈し、その大きさは北壁の長さが6.00m、東壁の長さは4.20m、床面までの深さは40cm前後を測る。住居の東から北壁にかけて幅1.00m前後の「L」字状のベットを付設し、西側隅にも小さなベットを設けている。ベットは灰褐色砂泥が混ざった黄褐色粘土を客土していた。

支柱は、2本で、柱間は3.50mを測り、その間に不整形の浅い炉を設けている。北側壁のベットの間には壁溝を掘っており、数本の杭を立てた小ピットがみられた。南壁沿いには楕円形の小さなピットがあり、小形ではあるが屋内土壙かも知れない。東側のベット上には方形に近い



第11図 6号竪穴住居跡実測図 (1/60)

土壙様の掘り込みがみられ、屋内貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物は、弥生時代終末から古墳時代初頭頃の甕・鉢の他、玉杓子の柄があり、1点のみ弥生時代中期の甕が混入している。

出土遺物

土 器 (図版51, 第30図)

出土した土器は破片が多く不明な点が多いが、底部が尖り底のもの、外面底部付近をへラで削るものなど弥生時代終末の特徴を示しているが、これらは庄内系の土器が伴うことがあり、古墳時代の範疇で捉えることもできる。同一時期の住居としては7号竪穴住居がある。

1は尖り底を有すやや大型の甕で、頸部と胴下半部に凸帯を巡らすタイプであろう。2は混入土器である。出土した土器はすべて住居の覆土中から出土した。

土製品 (第30図)

土製玉杓子(8) 断面がやや扁平な土製玉杓子の柄である。同じものが7号住居からも出土している。

7号竪穴住居跡 (図版8-(2)・9-(1)・(2), 第12図)

5号竪穴住居の西側で検出した竪穴住居跡で、他の遺構との重複はない。住居の平面プランは長方形で、その規模は、南・北壁が5.30m・4.80m、東・西壁は3.95m・3.80m、床面までの深さは40cm前後を測る。

東壁から北壁にかけてと西壁には、幅1.0m前後、高さ15cmのベット状遺構を配している。ベットは、黄褐色粘質土と暗茶灰色粘質土で客土したもので、削り出している。支柱は2本で、その柱間は2.5mを測る。柱間の西寄りには浅い円形の炉を掘り込み、中からは灰の堆積と焼痕がみられた。

北壁のベットが途切れた部分の床面にはピットが掘られているが、住居に伴うか否かは分からぬ。南壁の中央には小形の屋内土壙が掘られている。さらには、北隅のベット上には、深さ60cmの円形の所謂屋内貯蔵穴が掘られ、上面周囲は浅く掘り下げられており、木蓋の痕跡の可能性が考えられる。

遺物の出土状態は、大半が床面上から出土したが総数としては少ない。

出土遺物は、弥生時代終末から一部古墳時代にかかると思われる土器類が出土している。器種は、壺・甕・鉢・高杯の他、土製玉杓子が出土している。

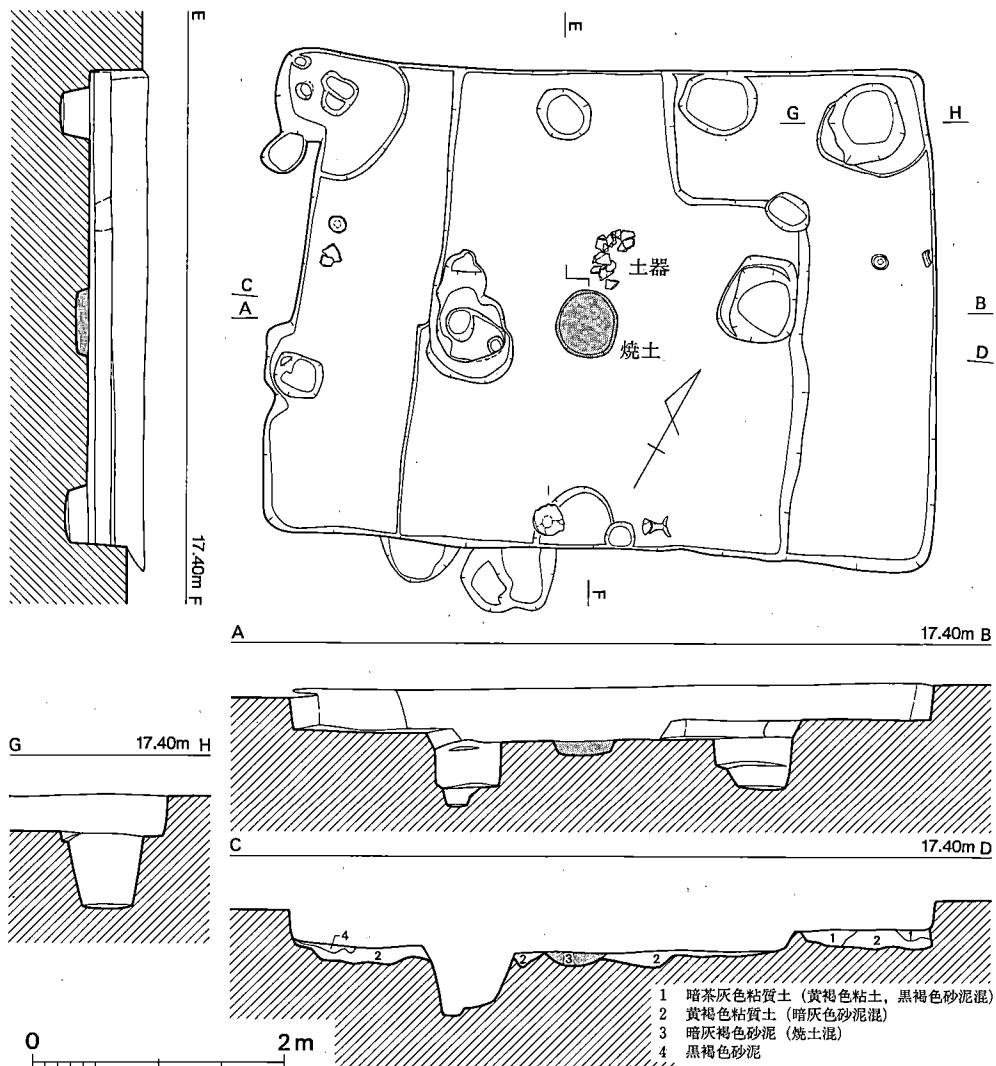
出土遺物

土 器 (図版51, 第31図)

図示した土器類はすべて床面から出土したものである。1の広口壺はやや古いタイプで、2の甕や5の鉢などの外面底部付近にヘラ削りがみられるなど西新式の特徴を示している。3の高壺は口縁部が完全に剥離している。2は炉跡の傍、3の高壺は屋内土壙の近く、鉢類はベット上から各々出土した。

土製品（第31図）

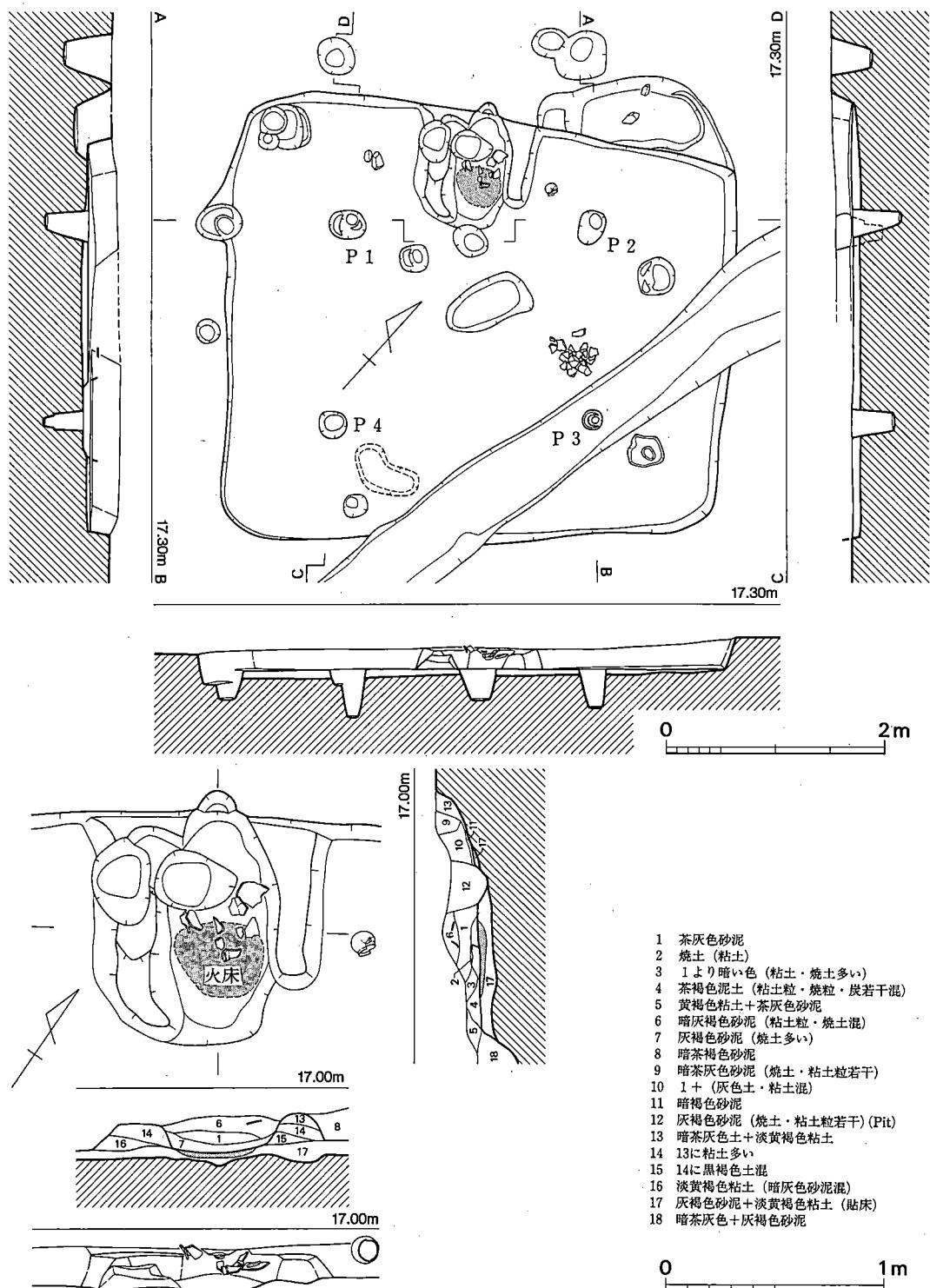
土製玉杓子(9) 6号竪穴住居跡から出土した玉杓子の柄と同じものが1点出土している。



第12図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60)

8号竪穴住居跡 (図版9-(2)・10-(1), 第13図)

東台地調査区の西端近くで検出した竪穴住居跡で、平面形状が長方形に近い。当該住居はほ



第13図 8号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/30・1/60)

ば南北に延びる溝と重複し溝より古い。住居の規模は、短辺が3.20m・3.90m、長辺が4.45m、床面までの深さは20cm前後を測り、総体的にやや歪な形である。床面は住居の掘削の後に5cm前後の客土を施している。

支柱穴はP1-P4の4本で、各柱間はP1-P2が2.25m、P1-P4が1.85m、P2-P3が1.80m、P4-P3が2.40mである。支柱穴の延長線上の北壁から20cmと50cmほど外側に2本の柱穴があるがこれが住居と関係する柱穴の可能性もある。

北壁の中央部には「U」字状のカマドが付設されているが、右側の袖は掘り過ぎている。構築の手順は、住居を掘削した段階の凹凸面を灰褐色砂泥と淡黄褐色粘土で貼り床とした後、暗茶褐色土と淡黄褐色粘土で両袖を構築している。カマドの燃焼部分の最下層には火床が残り、その上層には焼土混じりの灰層が堆積していた。カマドの奥壁には僅かながら煙道の痕跡を残している。

遺物の出土状態は、甌が床面中央から出土し、小型の甕がカマドの右傍から出土した他は、住居の埋土中からの出土である。出土した器種は、古式土師器の二重口縁壺と高坏の破片が混入の他は当該住居に伴う土器で、甕・椀・甌などと床面から雲母片岩製の紡錘車が出土している。

出土遺物

土 器 (図版51・52、第32図)

土師器 1と3の古式土師器は周囲の古墳時代前期の住居の土器が混入したものであろう。2の小型甕には煤が付着しており、カマドで煮炊きに使用されていたものであろう。4~7の椀は同一タイプで、内外面に黒色顔料を塗布している。8の甌は両方の把手が欠損している。

石 器 (第44図)

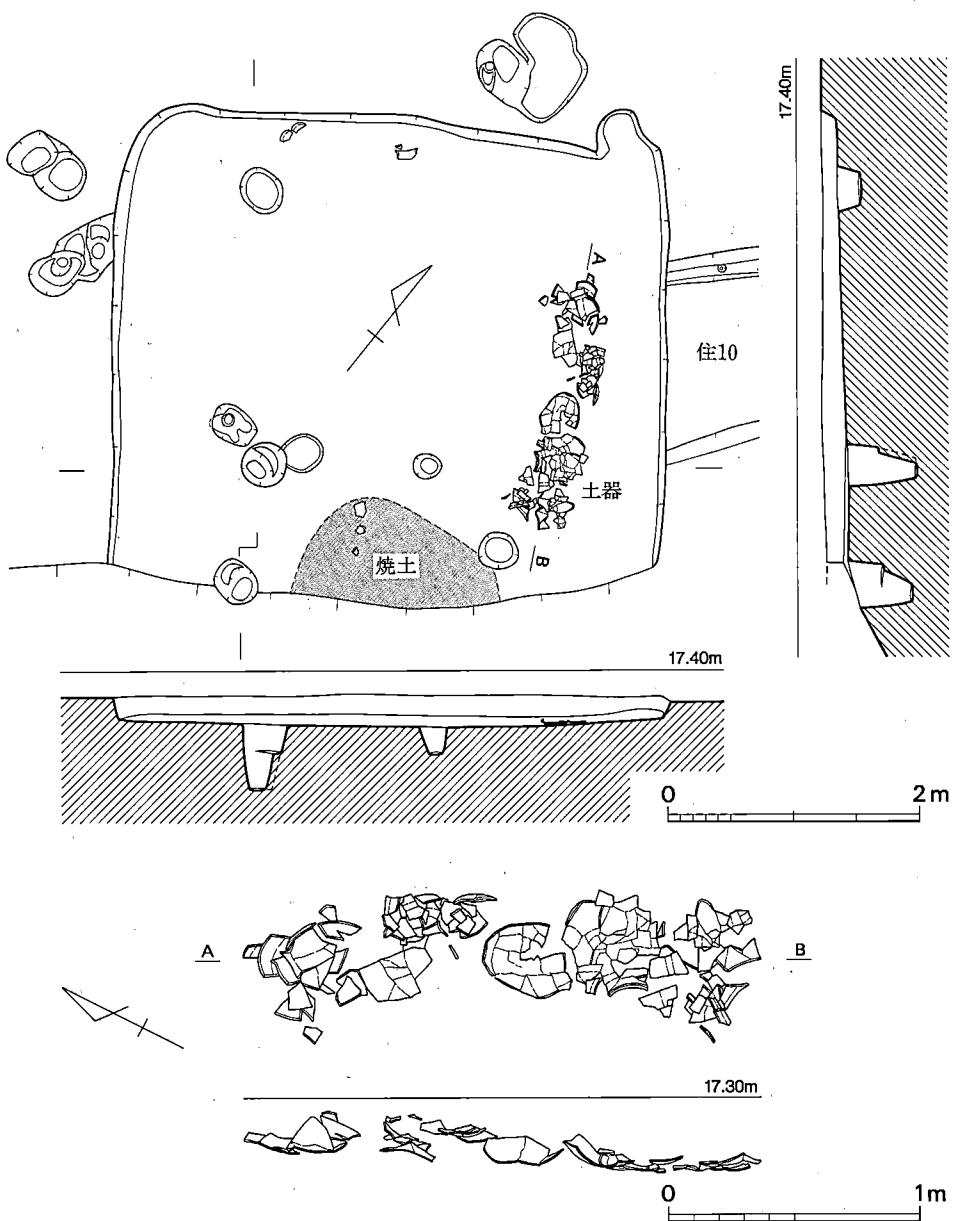
紡錘車(9) 雲母片岩製の扁平な紡錘車が1点ある。頗る整美なつくりで、直径が4.9cm×4.7cm、厚さは0.4cmを測り、正円ではない。中心には両方から孔を穿っている。重さは17.5gで、住居の床面から出土した。

9号竪穴住居跡 (図版10-(2)、第14図)

東台地の先端部分で検出した竪穴住居跡で、10号竪穴住居と重複している。先端部は斜面となり、住居の一部が削平を受けている。住居の平面形態は方形に近い形状をなすと思われる。規模ははっきりしないが、北壁では4.10m、床面までの深さは20cm前後を測る。

支柱は4本と思われるが、南側の2本は確認したが北側の2本は検出できていない。断面図の柱間は2.10mを測る。

検出した範囲内ではカマドは遺存していないが、南壁側に広く焼土が散在していることから



第14図 9号竪穴住居跡、土器出土状態実測図 (1/30・1/60)

カマドは南壁側に付設していたと考えられる。

遺物の出土状態は、床面全体に散在していたが、特に東側壁に添った状態で直線状に床面上で押しつぶされた形で出土した。この土器類はすべて土師器の甕で、総数は4個体以上を数える。この出土状態が何を意味するかは定かでないが通常の出土状態を示しているとは考えにくく

い。出土した器種から判断すると祭祀に使われる土器ではなく、判断に苦慮する所である。

図示できる出土遺物は、土師器の甕が大半で、身受けのある須恵器の壺蓋が1点あるに過ぎない。その他、黒曜石の薄片鎌が覆土中から出土している。

出土遺物

土 器 (図版52・53、第33・34・35図)

土師器 1・2は東側の床面から出土した土器群の内の2個体で、同じタイプの甕の完形品である。1は外面に煤が付着する。2の甕には外面に化粧土が塗られている。3以下も同タイプの甕で、9のみ肩部の張らない甕である。5・6・8がカマド周辺に散在していた焼土内から出土し、他は埋土中からの出土である。

須恵器 12は身受けのある壺蓋の破片である。埋土中から出土した。

石 器 (第44図)

石 鎌(10) 黒曜石製の大型の薄片鎌がある。一方の翼を欠失している。

10号竪穴住居跡 (図版10-(2)、第15図)

9号竪穴住居跡と重複し、約1/2が削平を受けた竪穴住居跡である。現状では東台地の先端部に位置するが、先端に設営した住居はすべてが削られており、台地がどの程度延びていたかは定かでないが先端ぎりぎりの所まで設営していたとは考えにくいことから、この台地はかなりの削平を受けているものと思われる。さらに住居の設営方向は、1号住居と同じで同時併存の可能性がある。

住居の平面プランははっきりしないが、屋内土壙の遺存の状況から推察すると方形に近い形状であろう。規模は定かでないが、北西側の壁の長さは3.80m、床面までの深さは55cm前後を測り、壁高の遺存状況は良好である。

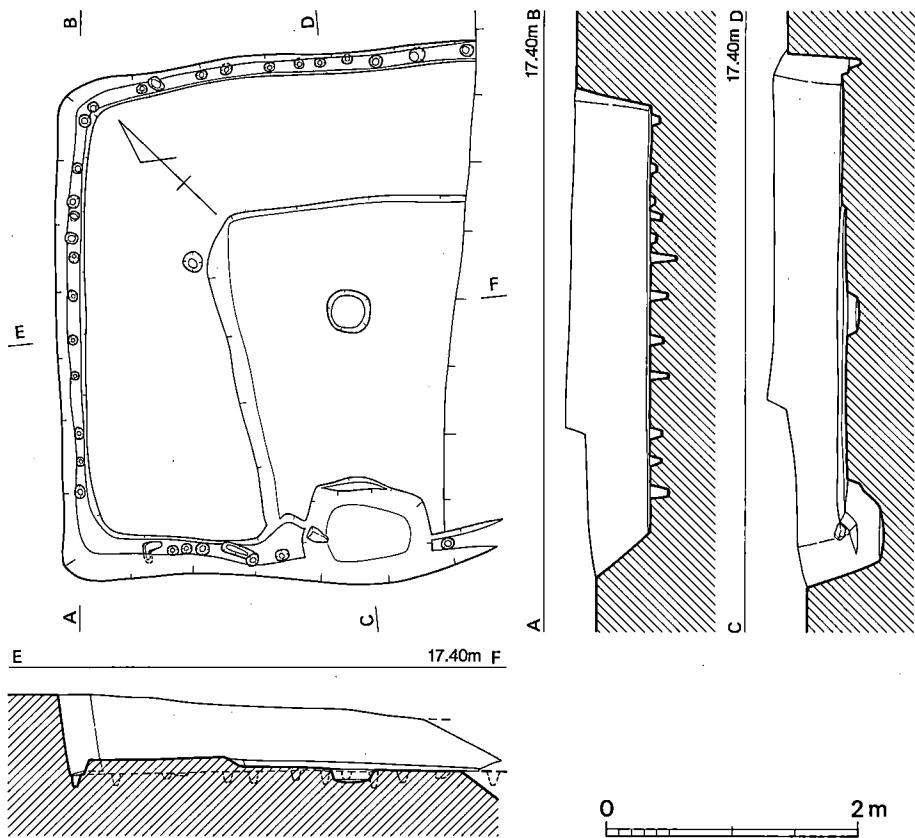
屋内土壙の設置場所から判断すると住居の規模はそう大きくなく、ベットの形状は「コ」字形か鍵形であろう。ベットの幅は1.20m前後で貼り床である。壁沿いには周溝が巡っており、溝内には杭を打ち込んだと思われる小ピットがほぼ等間隔にみられる。支柱穴ははっきりしない。南北壁際には長方形の屋内土壙が設置されている。

出土遺物は少なく、壺・甕・壺の破片があるが、新旧入り交じっておりはっきりしない。

出土遺物

土 器 (第35図)

1は古式土師器の壺の破片で、3の平底の甕の破片とは伴わない。4の壺と思える器種もこれらに伴うものかははっきりしない。5の丸底があり、住居は古墳時代初頭頃であろう。



第15図 10号竪穴住居跡実測図 (1/60)

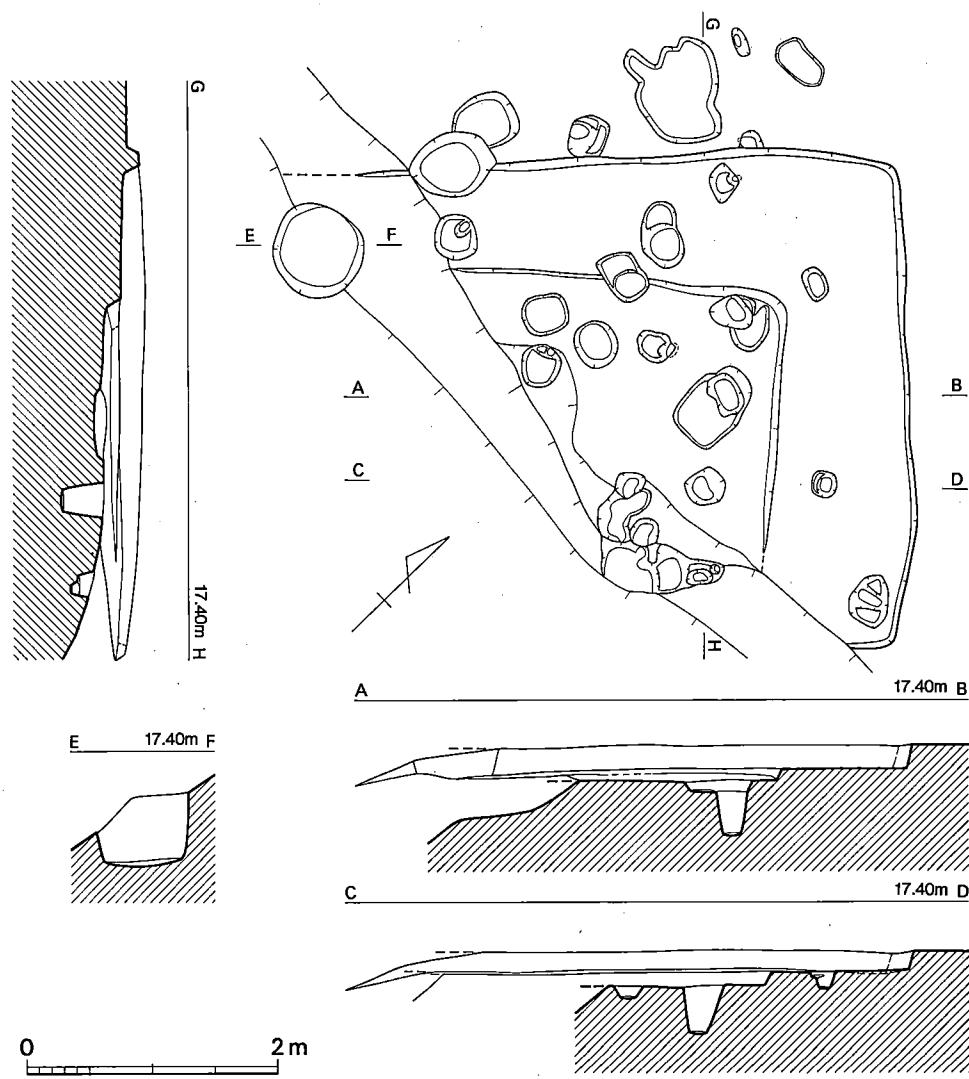
11号竪穴住居跡 (図版11-(1), 第16図)

当該住居も台地の先端部に位置する竪穴住居跡で、1号住居の南隣から検出した。他の遺構との重複はない。住居の南側は削られ、約1/3が遺存しているに過ぎない。設営状況から1号住居とは併存しないと思われ、時期の判別できる出土遺物がないため定かでないが、5号住居と同一時期であろう。

住居の形状は、はっきりしたことは言えないが、西側の斜面に残っている円形の屋内貯蔵穴が存在し、これが住居のコーナーと推測すると長方形になる。遺存する壁に沿って幅1.0m前後のベットが巡っている。東側の壁の長さは3.75m、床面までの深さは30cm前後を測る。

西隅のベット上に付設している屋内貯蔵穴の規模は、径が70cm、深さは削られた部分を復原すると76cmを測る。支柱は2本で、その内の1本がA-Bライン上の柱穴であろう。

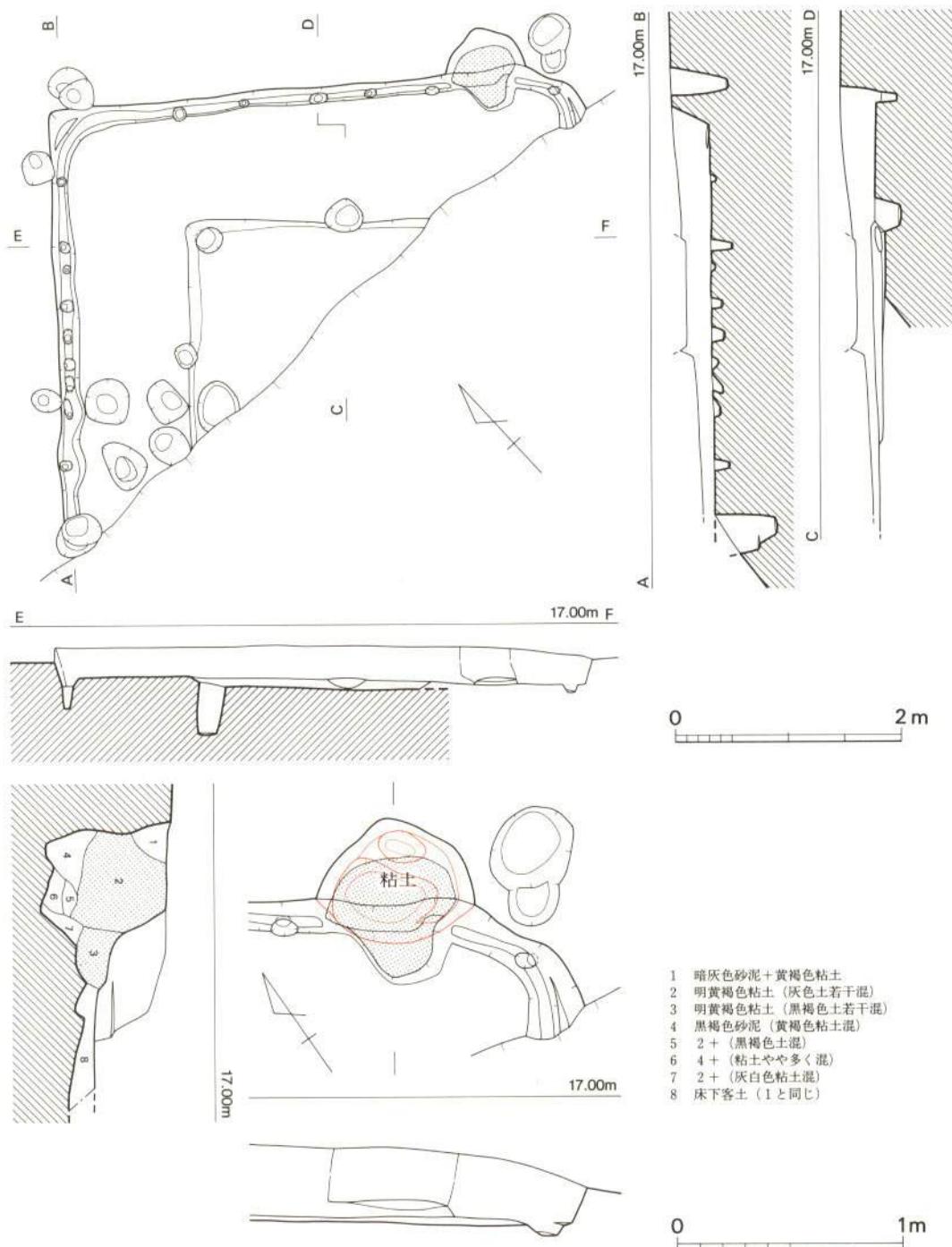
出土遺物は、図示できる土器類がない。



第16図 11号竪穴住居跡実測図 (1/60)

12号竪穴住居跡 (図版11-(2)・12-(1)・(2), 第17図)

東台地調査区の西端で検出した竪穴住居跡で、約1/2強が削平されている。この住居の西側には小さな谷状の落ち込みがあり、ここを境に台地を区分している。



第17図 12号竖穴住居跡、階段状遺構実測図 (1/30・1/60)

竪穴住居跡は、古墳時代後期の8号住居の西隣から検出された。削平が著しく内容に不明な点が多い。住居のタイプから平面形態は長方形であろう。規模は分からぬが、北東壁辺は4,70m、床面までの深さは30cm前後を測る。壁沿いには幅1.0m前後、高さ10cmのベットが巡っている。床面は暗灰色砂泥と黄褐色粘土の土で客土している。

ベットと壁との間には幅5cm～15cmの壁溝が掘られており、両壁とも密度は違うものの等間隔に壁を補強するための杭を打ち込んだ小ピットがみられる。支柱は4本と推測され、その内の1本が内側床面の北隅に掘られた柱穴が考えられる。東台地での4本の柱穴とベットを有すタイプの住居は他に1号住居のみで、出土遺物が少なく時期決定ができないが、古墳時代前期頃の所産であろう。

北東側の壁の一角には、5号住居で確認したような階段状の遺構が設けられ、設置方向は5号住居が南東方向に対して12号住居は北側方向に設置している。設置方向は異なっているがこの階段状の遺構は住居の出入り口と考えられる。

出入り口は壁を幅70cm、壁面からの奥行き40cm、深さ55cmほど掘り込み、この深さは住居の掘削面よりも深く掘り込んでいる。図示した土層断面でみると、最下層に明黄褐色粘土（灰色土混）と黒褐色砂泥を交互に盛り、その上に明黄褐色粘土の塊を住居の検出面まで一気に充填している。地山面と接する部分は暗灰色砂泥と黄褐色粘土混じりの土を盛っている。この部分の周溝は断面図でも分かるように巡ってはいない。この傍には1個のピットが掘られているが出入り口に伴うものなのかは分からぬ。

屋内土壙の傍に出入り口を設ける例は、横断自動車道で調査した立野遺跡の弥生時代後期の住居などで検出されており、他の例も多々あるが、北方向に出入り口を設置する例はそう多くないと思われる。本来は南東側に正規の出入り口があり、この出入り口はもう1箇所の出入り口の可能性も考えられる。

出土遺物は小破片の土器のみで、器種は甕・高坏の破片がある。

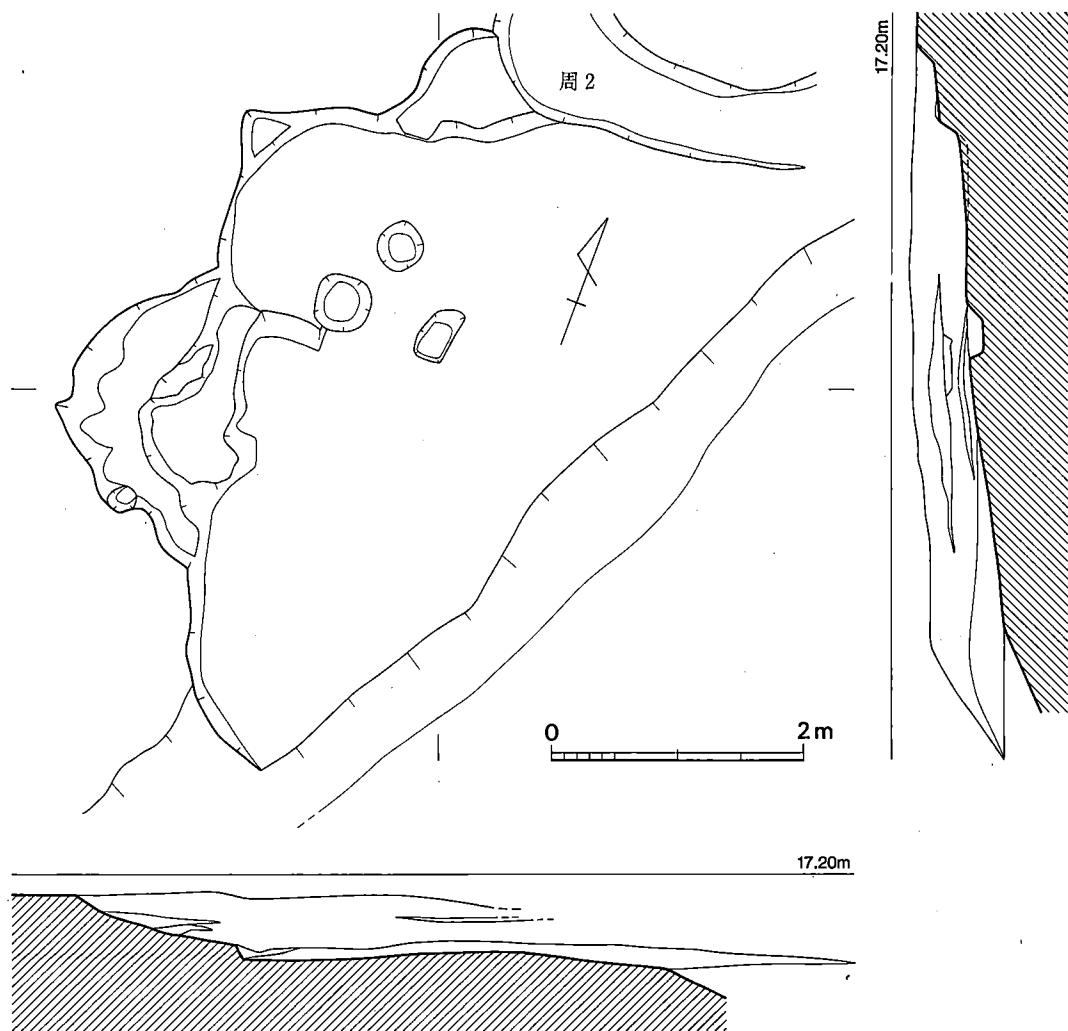
出土遺物

土 器 (第35図)

甕は1～3があるが、在地系のものである。4は高坏の脚部片と思われるが定かでない。

13号竪穴住居跡 (図版6-(1), 第18図)

台地の東端、4号住居の南隣で検出した竪穴住居跡である。約1/2が削平を受け全容はつかめない。2号周溝状遺構との重複関係があり、新旧関係は定かでないが、周溝状遺構内に土器が遺存していることを考えると竪穴住居の方が古いと思われるが、当該住居の出土遺物の時期決定となる資料が皆無に近いことと周溝状遺構が弥生時代中期後半から末頃に比定されそれより



第18図 13号竪穴住居跡実測図 (1/60)

古い住居が他に検出されていないことなどから若干疑問が残る。

住居の形状や規模などは旧状を保っておらず分からぬ。また、西側の壁は複雑な様相を示しており、他の遺構との切り合いがあるのかも知れない。支柱穴もはつきりせず、前述したように出土遺物も図示できるものが無い。

(2) 掘立柱建物

東台地での掘立柱建物は、数多くのピット群の中で拾いあげられたのは2棟である。検出した2棟の掘立柱建物は重複しており、周囲の竪穴住居跡との重なりがないことからこの場所が

高床の倉庫の設置場所として確保されていたのかも知れない。建物の新旧関係は柱穴の切り合いかから2号の方が新しく、規模的にも同じぐらいであることから建て直しが図られた可能性も考えられる。

1号掘立柱建物

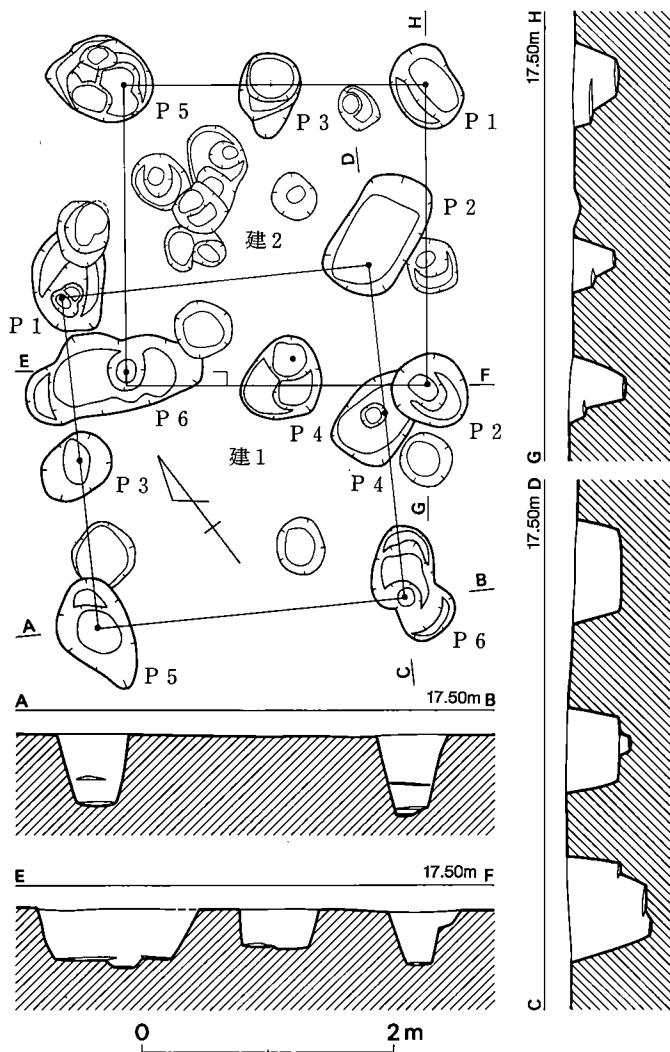
(図版5-(1), 第19図)

梁間1間×桁行間2間の規模を持つ掘立柱建物で、梁と桁の柱間の長さはそう変わらず、梁間の長い特徴を持つ。柱の大きさや形状は様々で、P5の柱は抜かれたような形をなしている。主軸方位はN-31°-Eを示す。

2号掘立柱建物

(図版5-(1), 第19図)

1号掘立柱建物に対してほぼ直交方向に建てられた梁間が1間、桁行間が2間の建物である。方位はN52°Wである。



第19図 1号・2号掘立柱建物実測図 (1/60)

第1表 1号掘立柱建物計測表 (cm)

梁間柱間		桁行柱間		桁行間	梁間柱間		桁行柱間		桁行間
P1-P2 245	P3-P4 235	P1-P3 130	P3-P5 135	P1-P5 265	P1-P2 240	P3-P4 220	P1-P3 120	P3-P5 120	P1-P5 240
P5-P6 245	P2-P4 120	P4-P6 150	P2-P6 265		P5-P6 230	P2-P4 110	P4-P6 130	P2-P6 240	

(3) 土 壤

東台地での土壌の総数は、7基を数える。台地の東端に不明瞭な落ち込みが重複しており、何らかの遺構ではあるが性格がはっきりしないことからここでは割愛する。

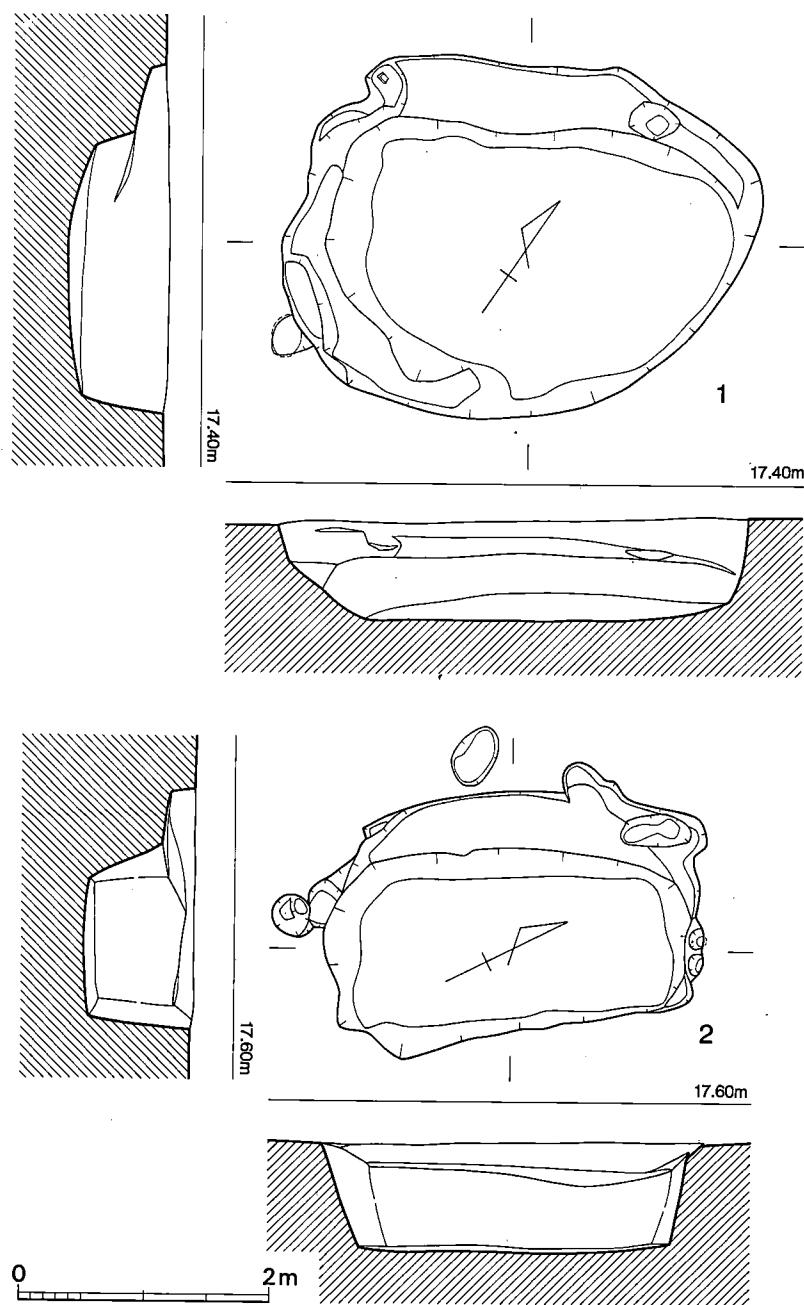
1号土壌

(図版8-(1), 第20図)

1号と5号竪穴住居跡に挟まれた形で検出した土壌で、1号住居との若干の重複があり、住居よりは新しい。

平面形状は不整橢円形をなし、西と北側には狭いテラス状の平坦部を呈している。断面形は逆台形である。その大きさは、長軸で3.80m、短軸では2.75m、深さは80cmを測る。

出土遺物は、土師器の甕・鉢・壺・甌の他、須恵器の壺



第20図 1号・2号土壌実測図 (1/60)

蓋・高台付椀と軽石及び土製管状土錐、鉄器などがあるが、鉢には出土した一連の土師器に伴うか否かはっきりしないものが含まれている。

出土遺物

土 器 (図版53、第36・37図)

土師器 瓶には器壁が厚く鋭く反り返る口縁部をなし肩部の張るタイプと、小型で口縁部のつくりが厚く胴部の張らないタイプの2種類がある。3の瓶にのみ外面に煤が付着する。

出土した鉢にも2つのタイプがあるが、両者とも上記の瓶に伴うか否かは分からぬが、6は古式土師器に伴う可能性があり、7は口縁部が内傾し器高が高く、一見鉄鉢(応器)状の形状を呈している。

壺にも2タイプがあり、小型の扁平なもとと口唇部を内湾させ、やや大型の壺とがある。

12は瓶か移動カマドの把手部分で、把手の先端部に「十」字状の印を刻んでいる。

須恵器 壱蓋は身受けの返りのあるタイプと口縁部がやや開くタイプとがある。高台付椀は高台部が体部と底部の境目に貼りつけられ、体部から口縁部にかけて直線的なものと体部との境に丸みのあるもととがある。

鉄 器 (図版53、第44図)

鎌(3) 小破片のためはっきりしないが、鎌の破片であろう。図示した右端は丸くなるが、欠損しているのか完結しているのかが分からぬ。

石 器 (第44図)

軽 石(1) 繫縛痕のはっきりしない浮子に使用されたと思われる軽石が1点ある。断面は楕円形を呈している。長さは4.5cm、幅は3.0cm、厚さが1.5cmを測る。旧状を保っていないのかも知れない。

土製品 (図版53、第44図)

管状土錐(12~14) 覆土中から3点出土している。細みのタイプと太いものとの2タイプがある。12は長さが5.0cm、最大径が1.5cm、13は長さが6.7cm、径は2.0cm、14の長さは5.8cm、径は1.9cmを測る。

2号土壙 (図版5-(1)、第20図)

1号掘立柱建物と2号周溝状遺構の間で検出した土壙で、他の遺構との重複はない。平面形状は隅丸長方形を呈し、西側にはテラスを設けている。土壙の規模は、長軸で2.90m、短軸ではテラスを含めると1.90m、内側では1.20m、深さは90cm弱を測る。断面径は逆台形を呈し、形状は一見墓地のようにも見えるが、出土した遺物は日常什器が大半で用途は定かでない。

出土遺物は、土師器の瓶・土鍋、須恵器の高壺・壠蓋・壠身・高台付椀などがある。

出土遺物

土 器 (図版53・54, 第37・38図)

土師器 甕は形態から4タイプがある。1は口縁部が反り、肩部の張らないタイプ。4はその大型品である。2・5・8は口縁の外反度が鋭く、肩部の張るタイプで8は口唇部が尖る。3・6・9は口縁部の外反度が鈍く、肩部から胴部が殆ど張らない形態のもの。11は口縁部を厚くつくり、肩部から胴部にかけてすぼまるタイプなどがある。この内の9は甌の可能性がある。10は土鍋片であろう。すべて土壙の埋土中から出土している。

須恵器 13の坏蓋は完形品で、天井部に擬宝珠の摘みが付き、口唇部は嘴状に肥厚する。内面天井部には「=」字のヘラ記号を刻む。14は低い高台の付く椀で、体部から底部にかけて丸くつくる。15の坏身は径の小さいもので、底部外面には1条のヘラ記号を刻んでいる。すべて覆土中から出土した。

3号土壙 (第21図)

2号土壙の北隣で検出した土壙で、1号周溝状遺構と一部重複して、土壙の方が新しい。平面形状は不整形を呈し、南側は階段状をなす。土壙の規模は、長軸が3.90m、短軸は2.80m、深さは80cmを測り、断面が逆台形を呈する。

図示できる出土遺物はない。

4号土壙 (図版10-(2), 第21図)

2号土壙と1号周溝状遺構を挟んで相対峙する箇所で検出した土壙である。重複関係は周溝状遺構と7号土壙とがあり、周溝状遺構よりは新しく、7号土壙とは調査時点では確認できていないが、出土した土器を比較すると当該土壙の方が古い。

平面プランは東側がはっきりしないが、おおよそ隅丸長方形を呈すると思われる。その規模は長軸が3.50m、短軸は1.35m、深さは70cmを測る。床面は平坦で、東側の小口壁は僅かにオーバーハングした形に掘られている。

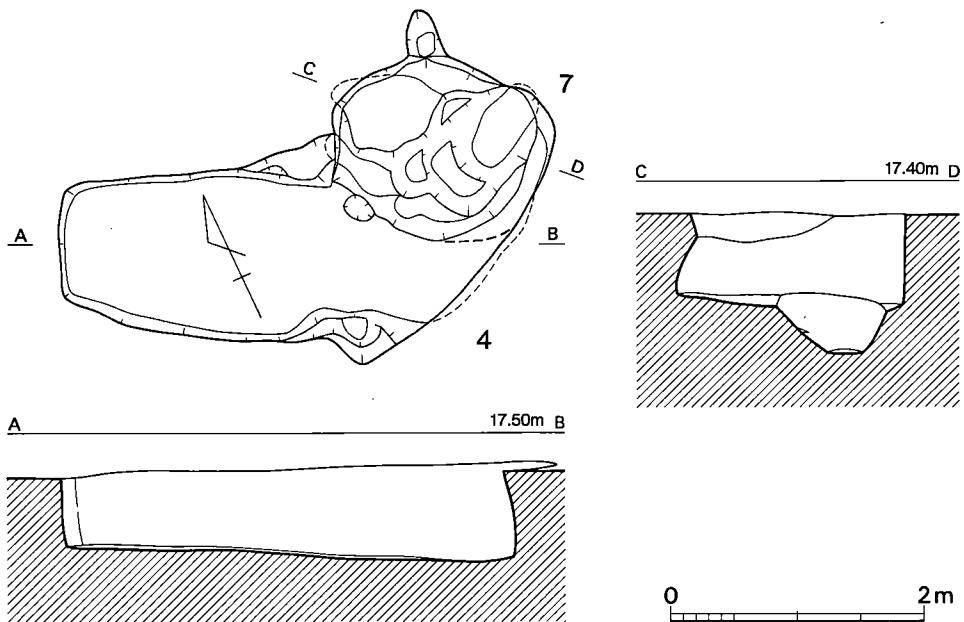
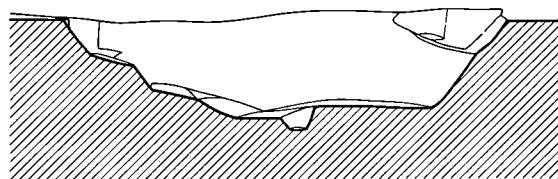
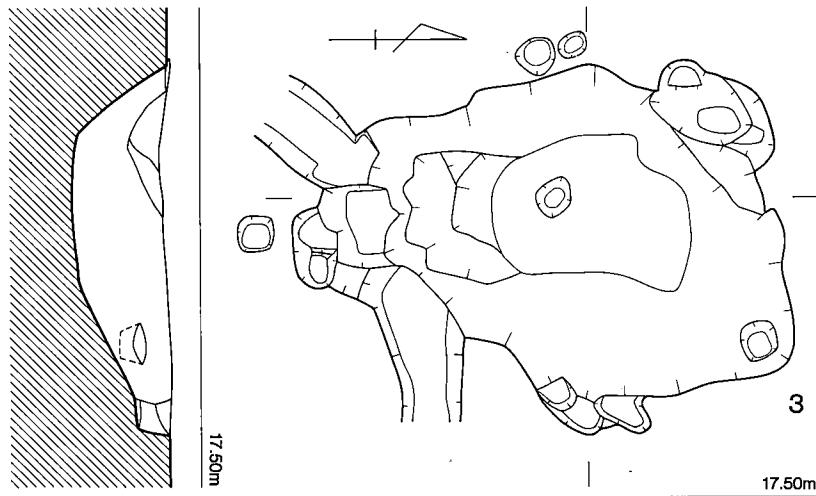
出土遺物は少なく、甕の破片と手捏土器が図示できるに過ぎない。

出土遺物

土 器 (第39図)

土師器 出土した小片では時期決定は難しいが、鈍い「く」字状に外反した口縁部片から弥生時代終末から古墳時代にかけてのものであろう。

手捏土器も破片を復原実測したもので、口唇部を尖らせている。いずれも覆土中から出土したものである。



第21図 3号・4号・7号土壤実測図 (1/60)

5号土壙 (図版4-(2), 第22図)

5号竪穴住居跡の北西側に隣接して検出した土壙である。主だった遺構との重複はない。

平面プランは不整形を呈し、その規模は長軸が2.30m, 短軸は1.85m. 深さは55cmを測る。南東側には削り出しのテラスを設けている。

出土遺物は小形の土壙の割りには多く出土し、土師器の甕・甌・壺、須恵器の壺蓋・壺身・高台付椀の他土製の管状土錐がある。

出土遺物

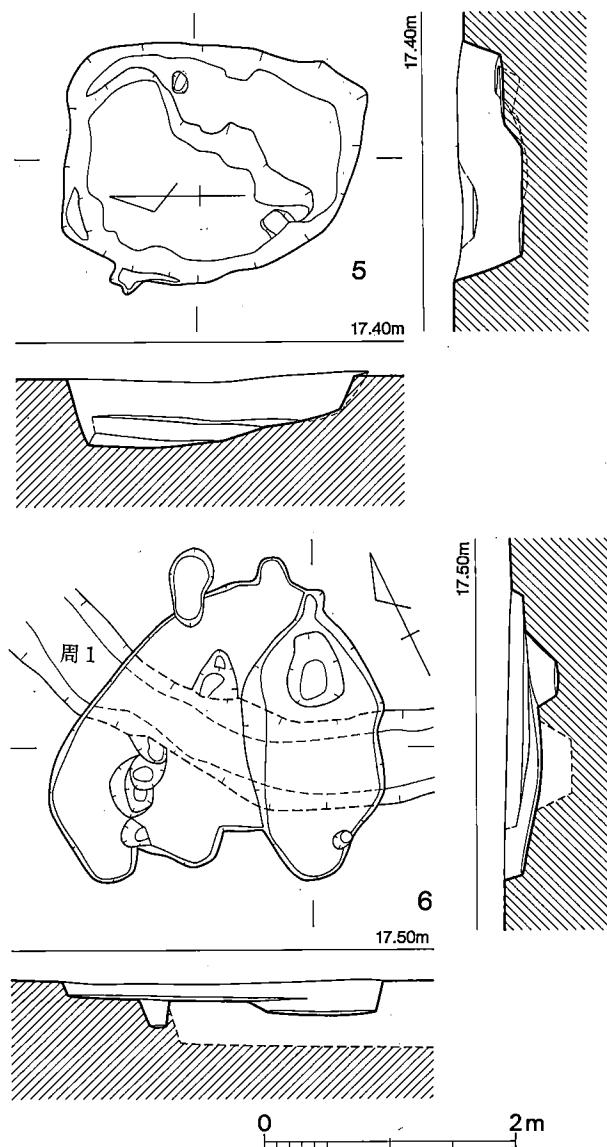
土 器 (図版54, 第39・40図)

土師器 甕には時期の異なるものが混在しているようで、口縁部が肥厚するタイプと緩く「く」字状に外反するタイプとがある。前者は須恵器の摘みのある壺蓋や高台付椀と共に伴し、後者は蓋受けのある壺身と共に伴すると思われる。小型のものの中には鉢に分類できるものもある。甌は胴部下半が直線的につくられるもので、底部の孔が大きく安定感のあるものである。

須恵器 壺蓋は扁平な摘みが付き身受けの返りのあるタイプで、13・14には天井部外面にヘラ記号を刻んでいる。高台付椀は口縁部から体部にかけて直線的につくられるタイプが大半で、高台も低いものが多い。

土製品 (図版54, 第44図)

管状土錐(15~17) 3個体とも細みのタイプで、15の長さは6.1cm, 直径は1.3cm, 16は6.5cm, 径は1.5cm, 17の長さは6.1cm, 径が1.4cmを測る。すべて覆土中から出土した。



第22図 5号・6号土壙実測図 (1/60)

6号土壙 (図版5-(1), 第23図)

2号土壙の東側に隣接した形で検出した土壙であるが、他の土壙と比べて浅く明瞭な形を呈しておらず、浅い落ち込みといえるような遺構である。1号周溝状遺構との重複があり、土壙の方が新しい。平面形状はハート形を呈し、東側が一段深く掘られている。

出土遺物は少なく、土師器の甕と須恵器の坏身の破片、管状土錐があるに過ぎない。

出土遺物

土 器 (第41図)

土師器 口縁部を肥厚させ鋭く外反するタイプの甕である。

須恵器 坏の破片がある。底部内外面に薄いヘラ記号状の刻みがあるが、はっきりしない。土師器・須恵器とも覆土からの出土である。

土製品 (第44図)

管状土錐(18) 1号土壙から出土したやや大型のタイプと同じ管状土錐の破片がある。当該土壙に伴うものか否かは定かでない。

7号土壙 (図版10-(2), 第21図)

4号土壙と重複した土壙で、出土遺物から7号の方が新しい。平面形状は不整方形に近く、床面の東側は一段深く掘られている。西側の壁は抉ったような形状を呈している。その規模は1.70m×1.45m、最深部で1.10mを測る。

出土遺物は少なく、土師器の甕の把手、須恵器の坏蓋・坏身などが出土している。

出土遺物

土 器 (図版54, 第41図)

土師器 甕と思われるずんぐりした把手がある。把手の下方には深さ1.2cmの孔が穿たれている。

須恵器 坏蓋が1点と坏身が6点出土している。時期は6世紀末～7世紀初頭頃のもので、4の底部外面には弧状のヘラ記号がある。

8号土壙 (図版6-(1), 付図)

台地の東端に位置する重複の激しい箇所の土壙で、平面形態が方形に近い形状を呈する。東台地の調査に入った時点で既に調査済であったため詳細には分からぬ。

出土遺物は土師器の小型甕と須恵器の坏蓋・高台付椀がある。

出土遺物

土 器 (図版54, 第41図)

土師器 1は小型の甕で、口縁部は短く鋭く外反するタイプのものである。

須恵器 2は擬宝珠の摘みを持つ坏蓋の完形品である。口縁端部は嘴状に屈折する。天井部内面には2本の細いヘラ記号がある。3は焼成の悪い高台付椀で、高い高台が付く。両者とも7世紀代のものである。

9号土壙 (図版6-(1), 付図)

8号土壙の東側に位置する長方形に近い形状を呈する土壙である。この土壙も実態がつかみにくい。設置場所から当然8号土壙との重複があると思われ、出土遺物でみると当該土壙が古い。

出土遺物は土師器の甕・高坏(壺の口縁部か)・坏、須恵器の坏身などがあるが、土師器には時期差があり混入土器が含まれる。この中で1~3は出土した須恵器よりも古いものであろう。

出土遺物

土 器 (第42図)

土師器 1は「く」字状に外反する口縁部、2は大型の甕の口縁部と思われる。3は二重口縁部の壺の口縁部の可能性もある。

須恵器 2この坏身片がある。6世紀後半頃のものである。

(4) 周溝状遺構

東台地では2基の周溝状遺構を検出した。1号は土壙などに切られているが、全容はつかめる。2号については、台地の東端で3号・4号・13号住居跡と重複していて一部が残存しているに過ぎない。

出土した土器をみると弥生時代中期末から後期初頭頃の所産で、調査した東台地上には同じ時代の住居跡はない。周溝状遺構は集落から若干離れた箇所に設置する例が多いことから、近隣に同時代の集落の存在が想定される。

1号周溝状遺構 (図版5-(1), 第23図)

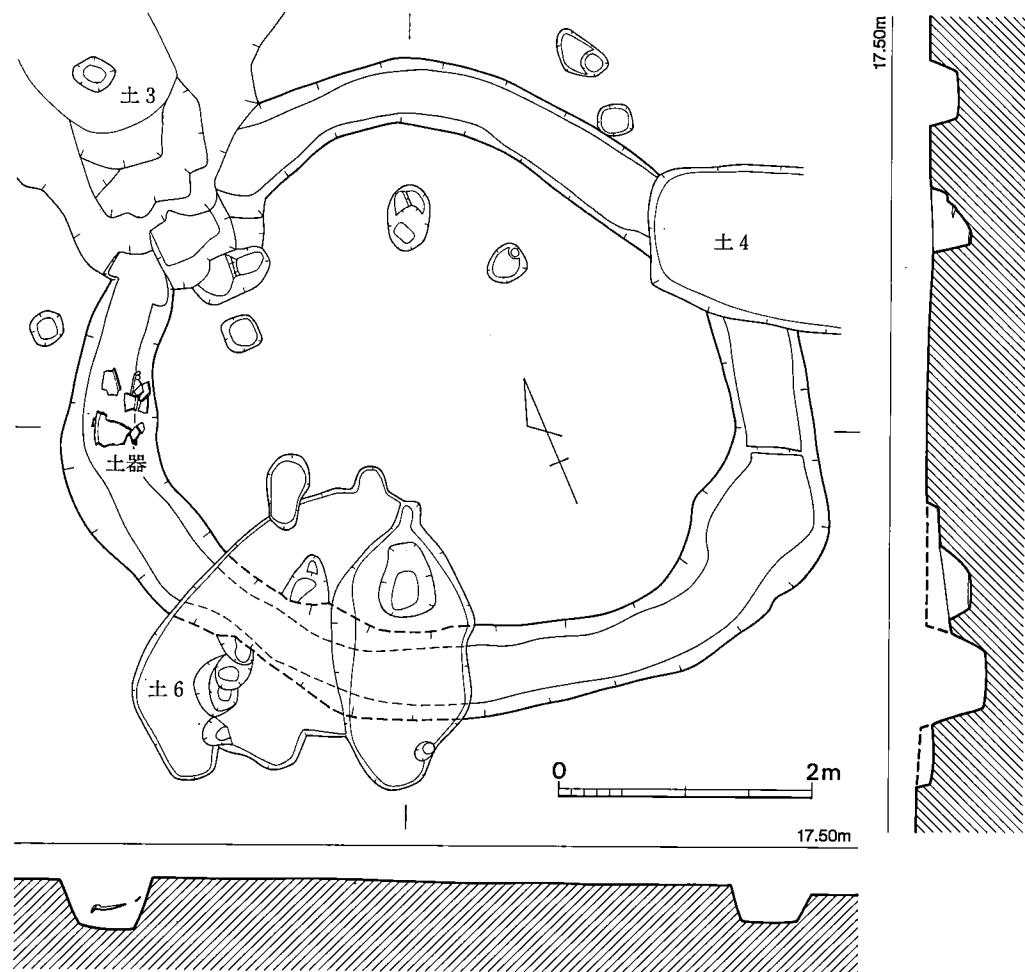
竪穴住居跡との重複はないが、3基の土壙と重複し土壙よりも古い。全体の形状はやや歪な円形を呈している。その規模は外周で5.0m×6.0m、内周で3.85m×4.40m、溝の深さは40cm前後、幅は平均して60cm程度である。円の内部には主だった遺構はない。

出土遺物は西側の周溝内（底面から約20cmほど上層）から日常什器の甕が出土している。

出土遺物

土 器（第43図）

1～4は弥生時代中期末から後期初頭頃に比定される甕で、外面に煤が付着しており日常使用されていた甕が投棄された形で出土した。個体数としては4個体がある。これに対して2号周溝状遺構からは祭祀に使われる丹塗りの高環の完形に近い土器が出土しており、出土した土器からはこの遺構の用途が理解しにくい。総じて日常什器の出土が多いのも事実である。



第23図 1号周溝状遺構実測図 (1/60)

2号周溝状遺構 (図版6-(1), 第24図)

台地の東端の遺構が複雑に重複した中に弧状の溝状遺構が僅かに遺存していた。

重複関係は、3号・4号・13号竪穴住居跡と重なりがあり、すべての住居より古い。検出した箇所は鋭角に湾曲しており、平面プランは正円ではない。

現存での周溝の幅は70cm前後で、深さは40cm程度を測る。

出土遺物は、周溝の底面から丹塗り高坏が伏せた状態で出土し、120cm東側では広口壺の底部が出土している。この内の図示できた土器は高坏のみである。出土遺物から周溝状遺構の時期は弥生時代中期後半頃であるが、この時期の周溝状遺構は珍らしく、出土例の中で最も古いものの可能性がある。

遺物の出土状態をみると、1号周溝状遺構では煤が付着した日常什器が底面より上層から出土し、明らかに投棄された状態を示しているが、2号の場合は床面に伏せて置かれた状態を示している。しかも祭祀に使われる土器の出土であり、この遺構の性格の一端を覗かせているのかも知れない。

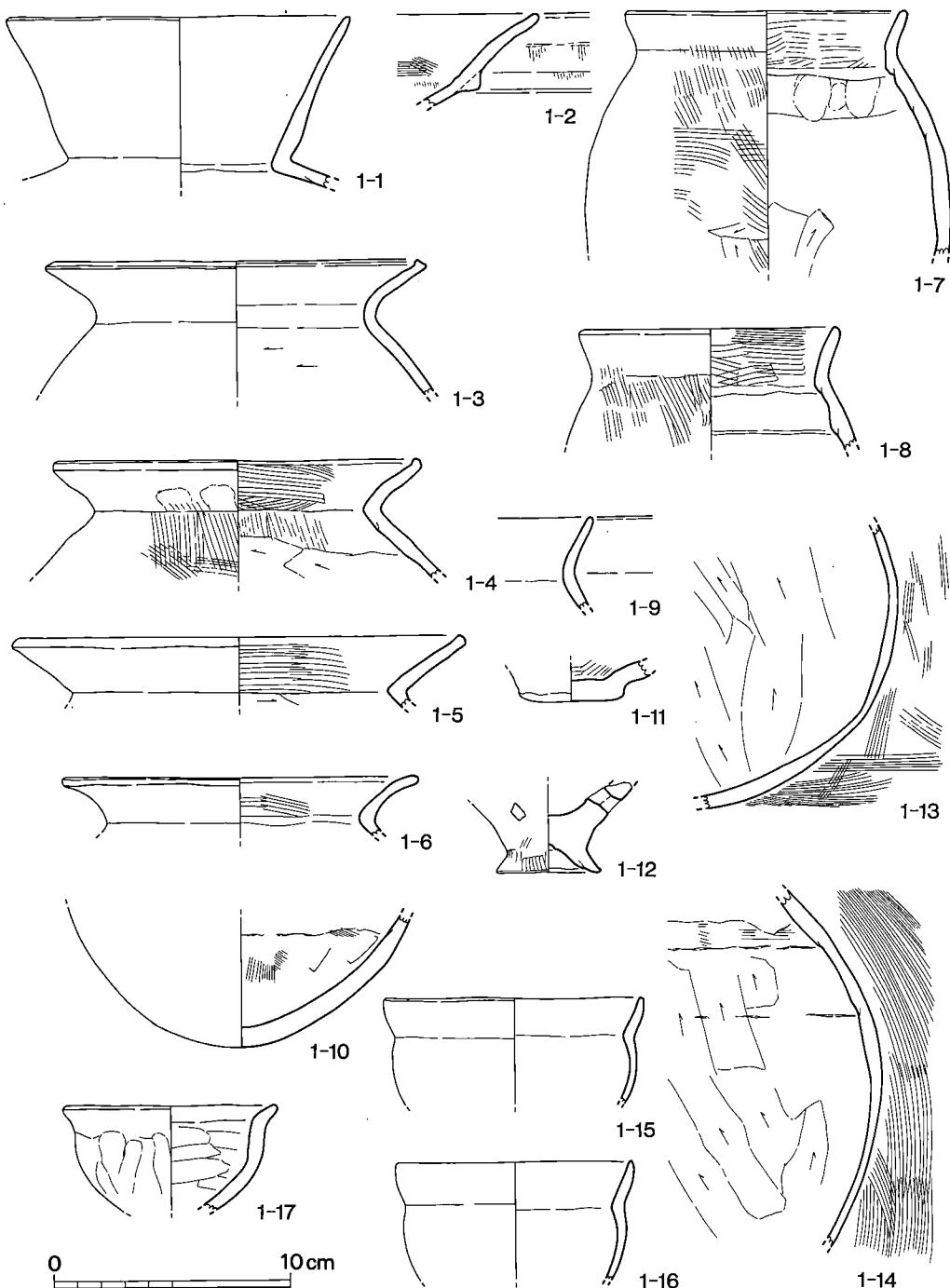
出土遺物

土 器 (第43図)

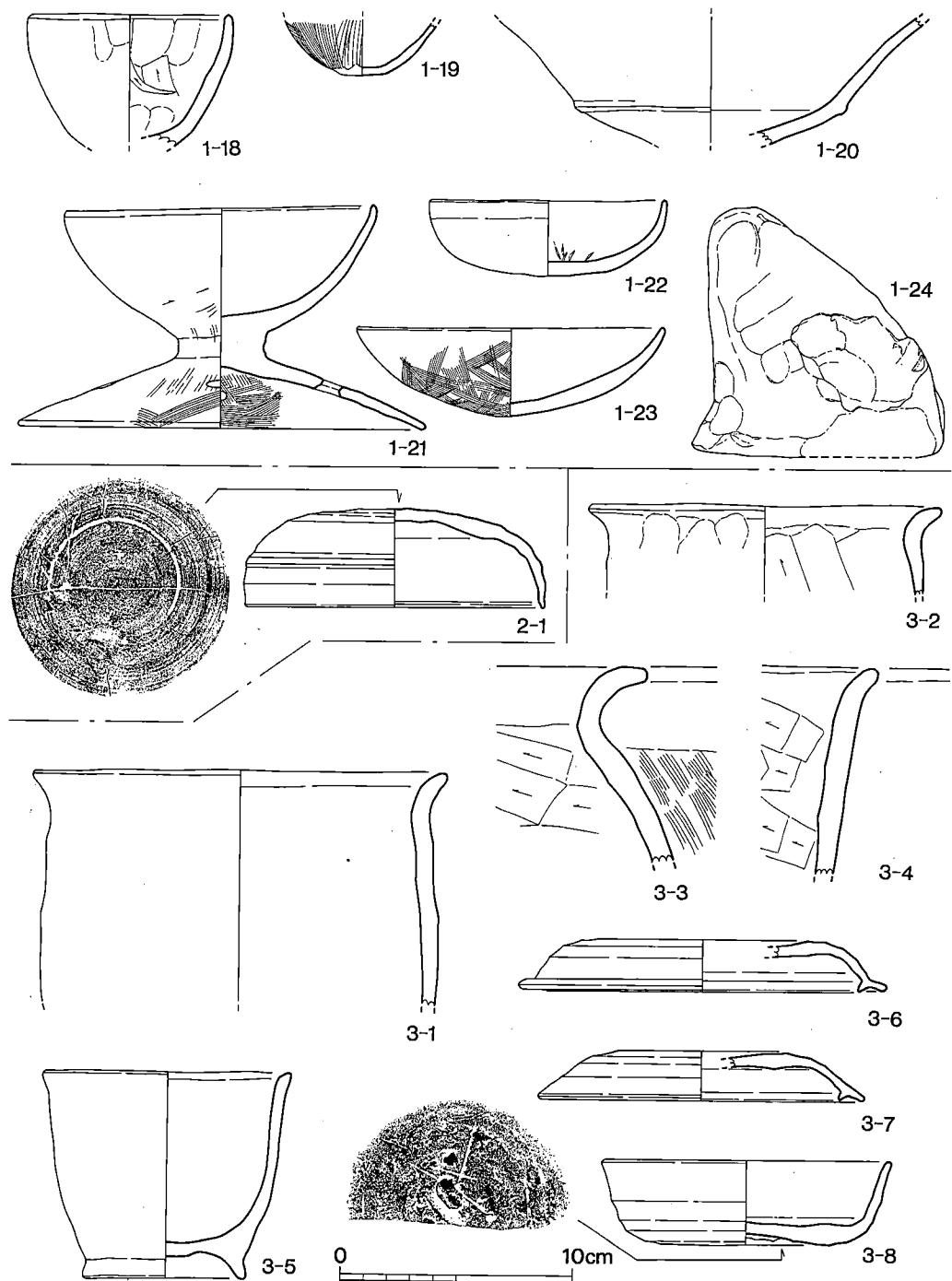
鋤先状口縁部の丹塗磨研の高坏が1点ある。坏部と脚部を図上復原したもので、全面の風化が激しく、丹の剥落が著しいことから長く放置されていたことを物語るものであろう。

(5) 溝状遺構

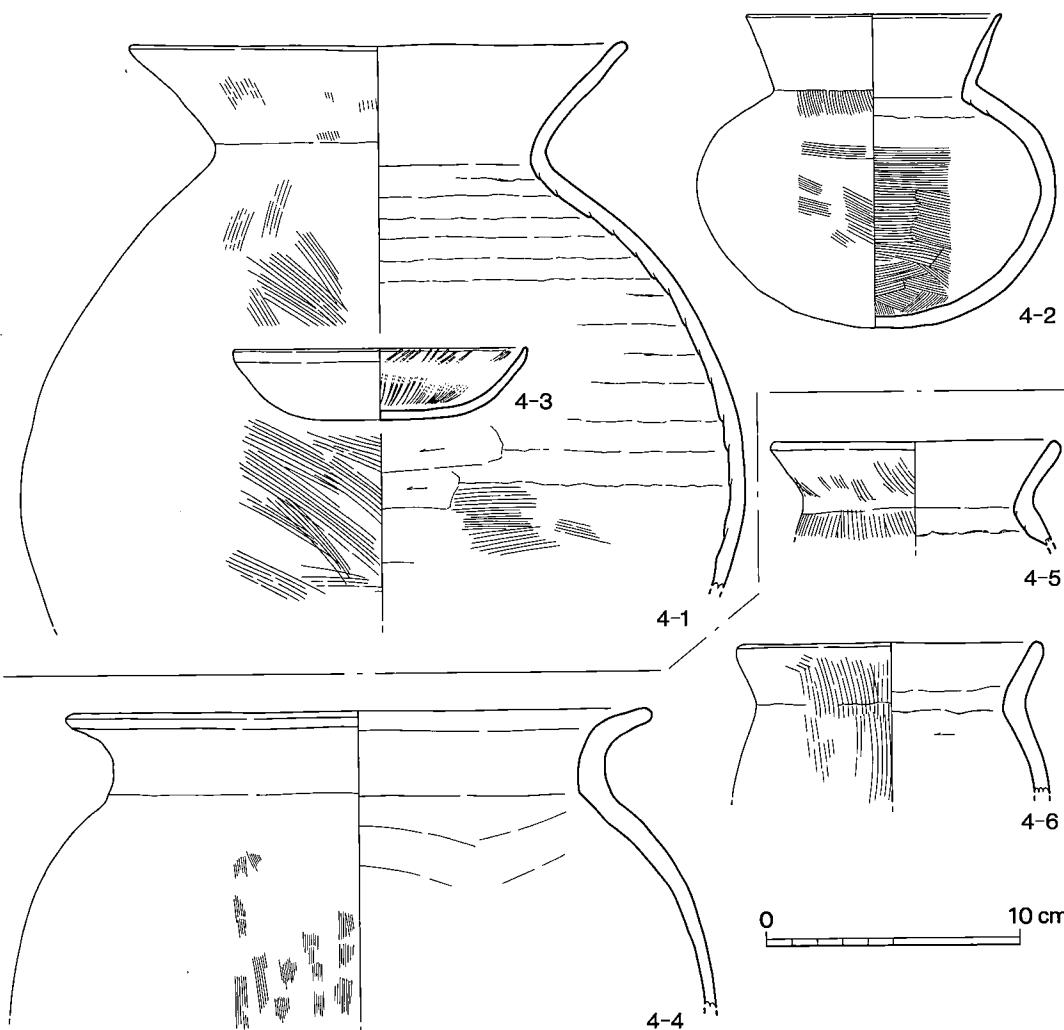
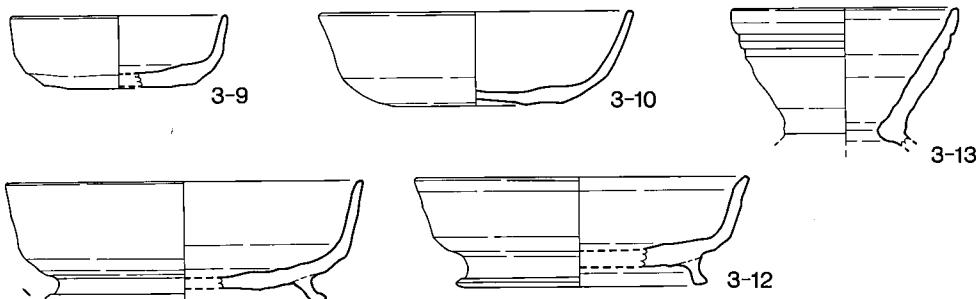
8号竪穴住居跡より新しい溝で、ほぼ南北に延びている。出土遺物がなく時期は不明。



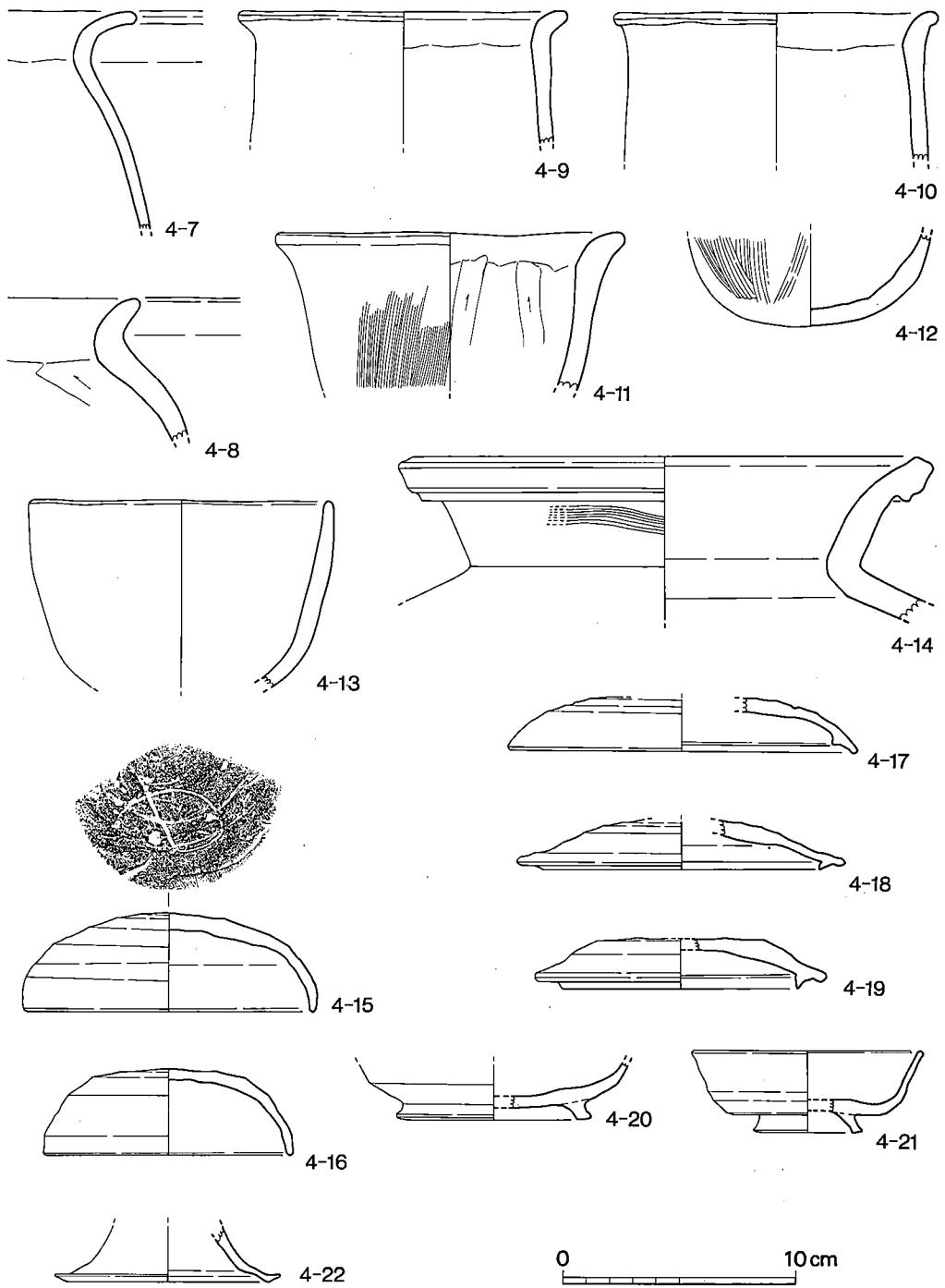
第25図 1号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



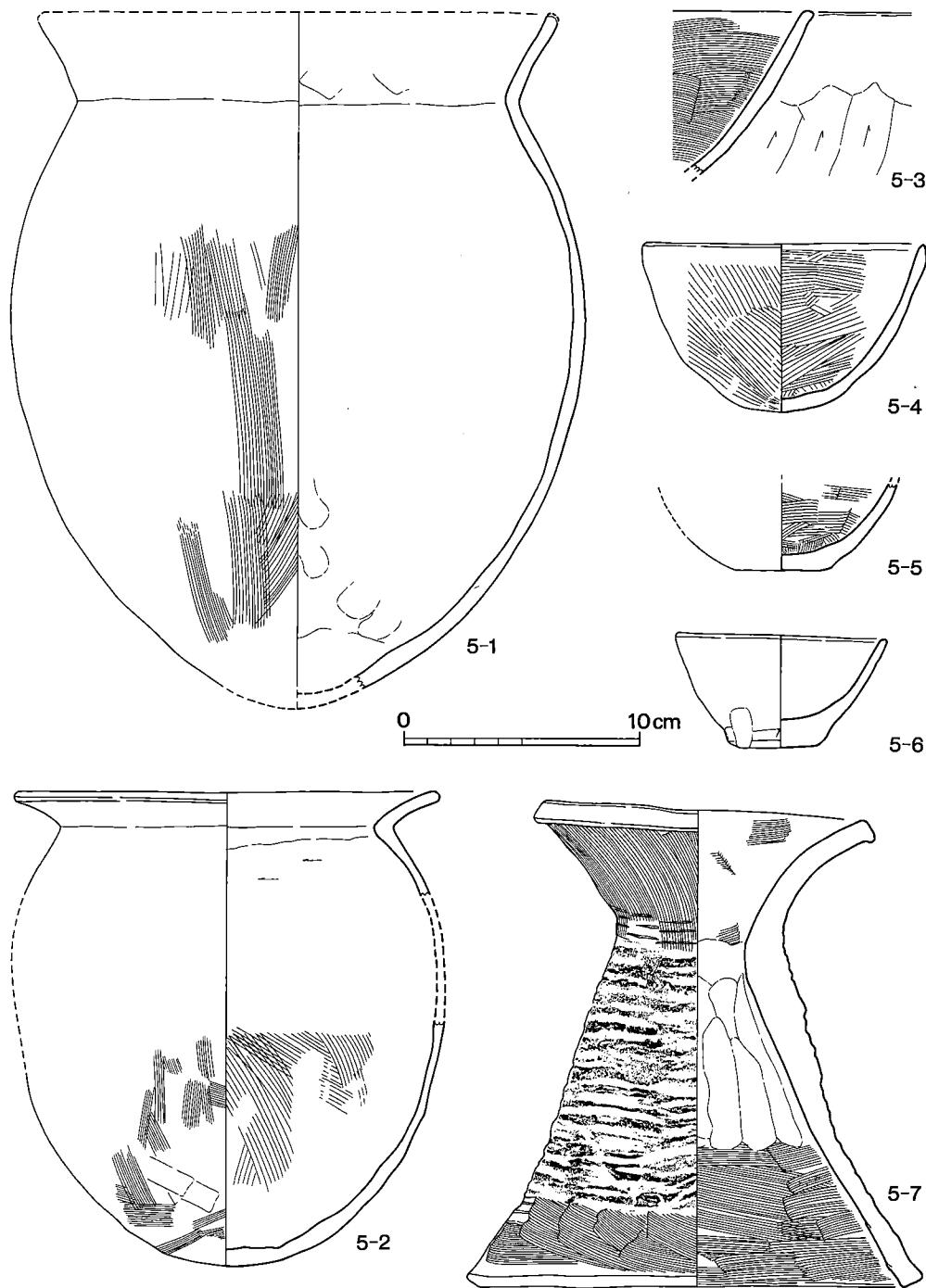
第26図 1号～3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



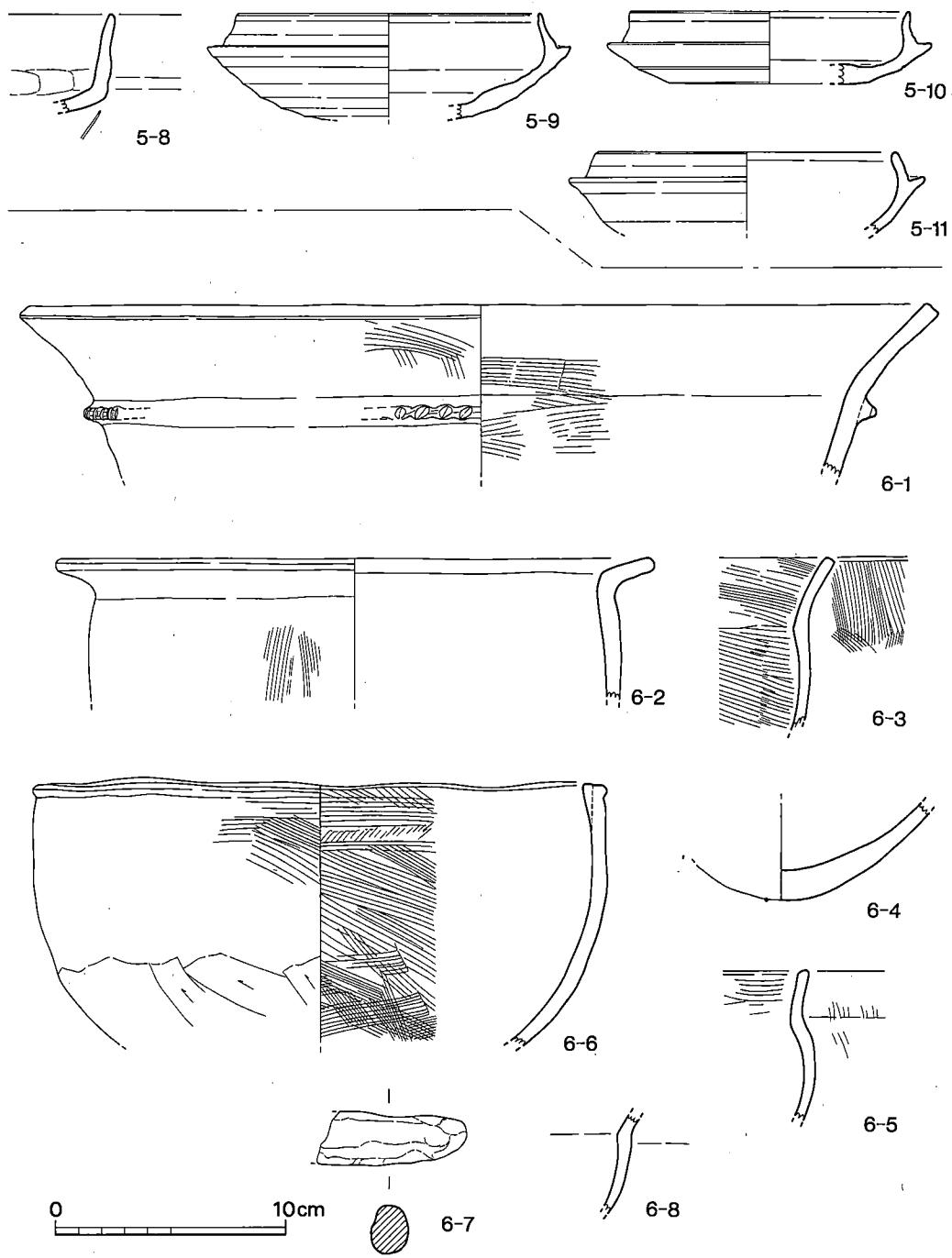
第27図 3号・4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



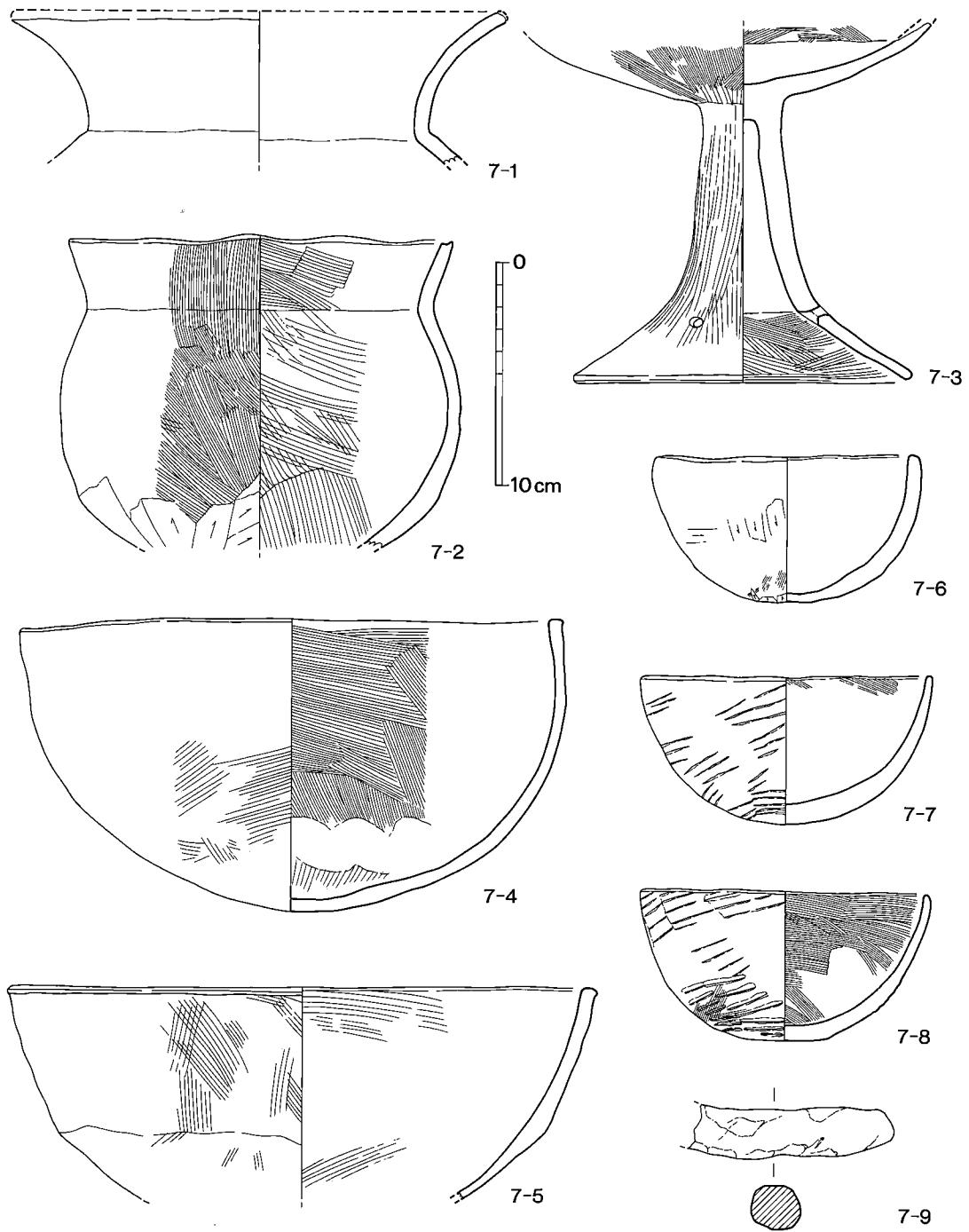
第28図 4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



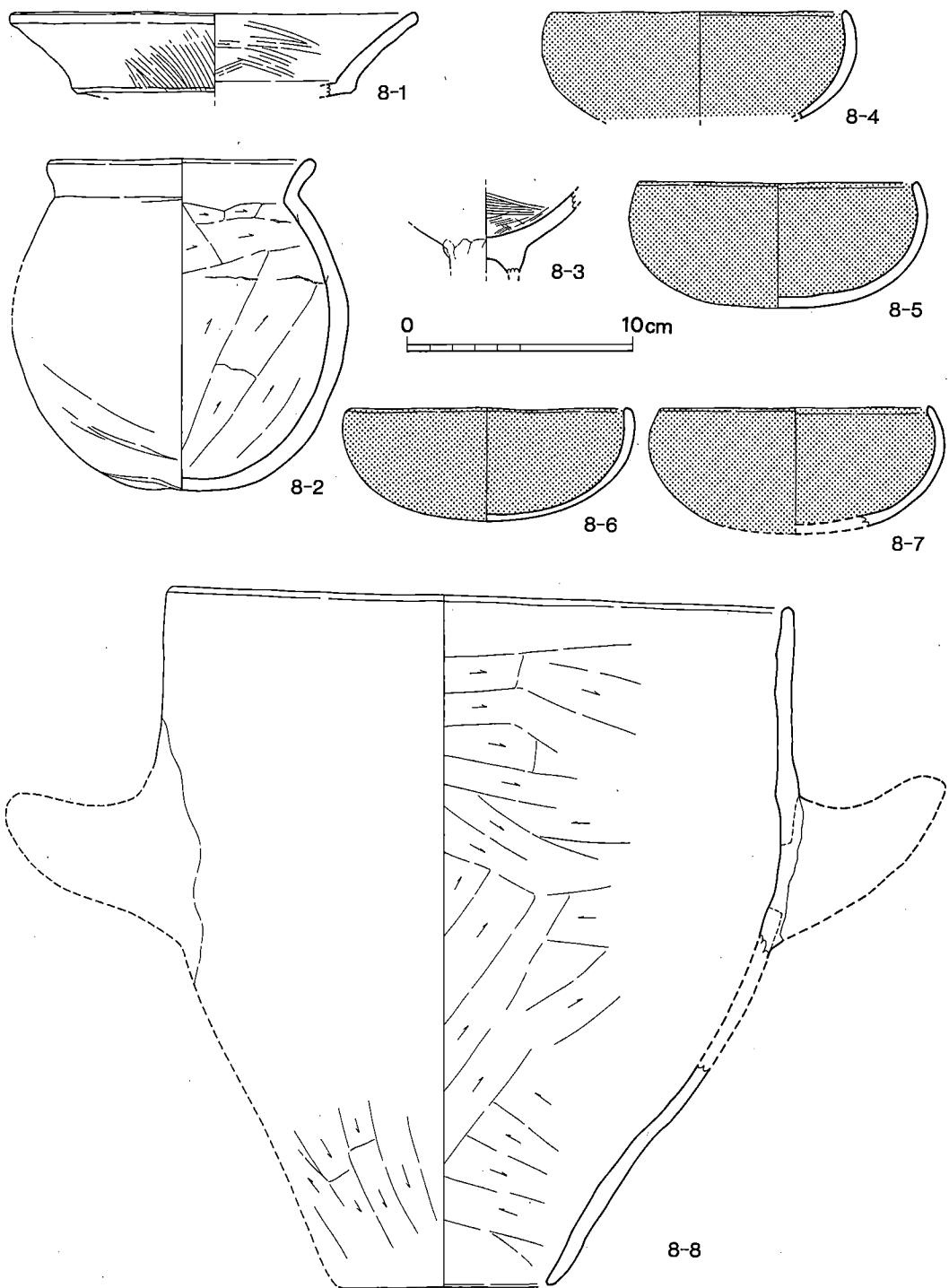
第29図 5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第30図 5号・6号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図 (1/3)

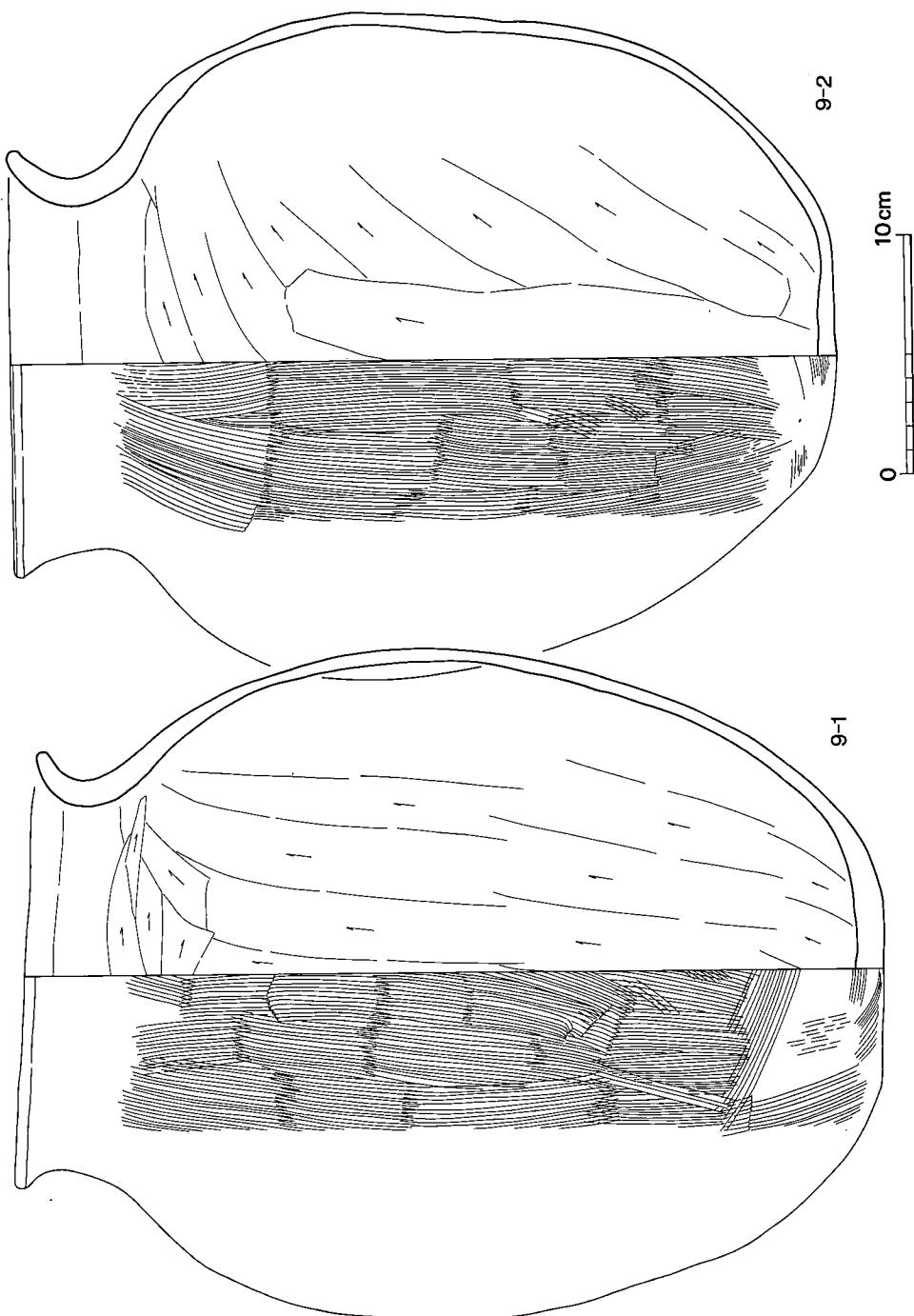


第31図 7号竪穴住居跡出土土器・土製品実測図 (1/3)

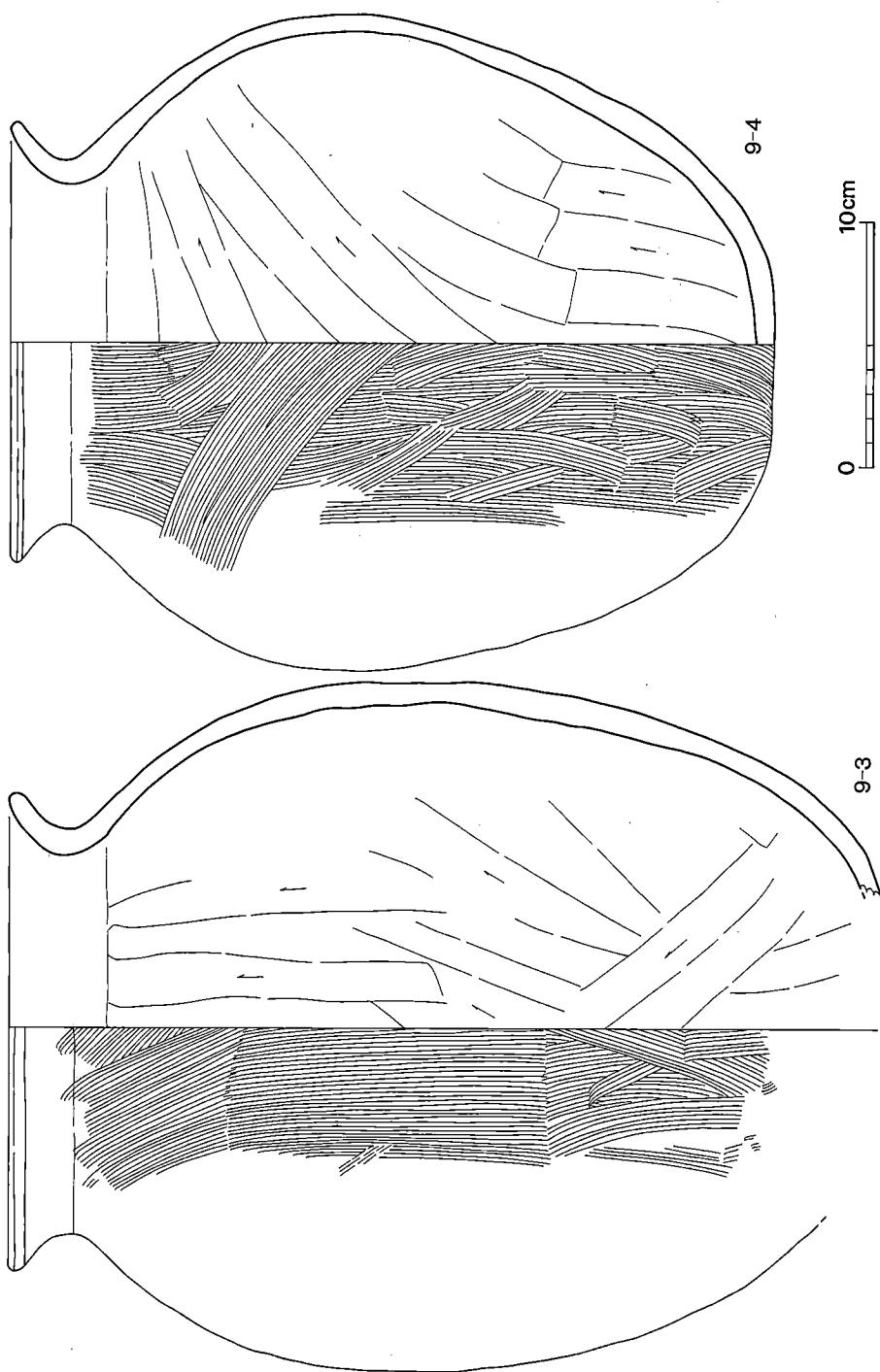


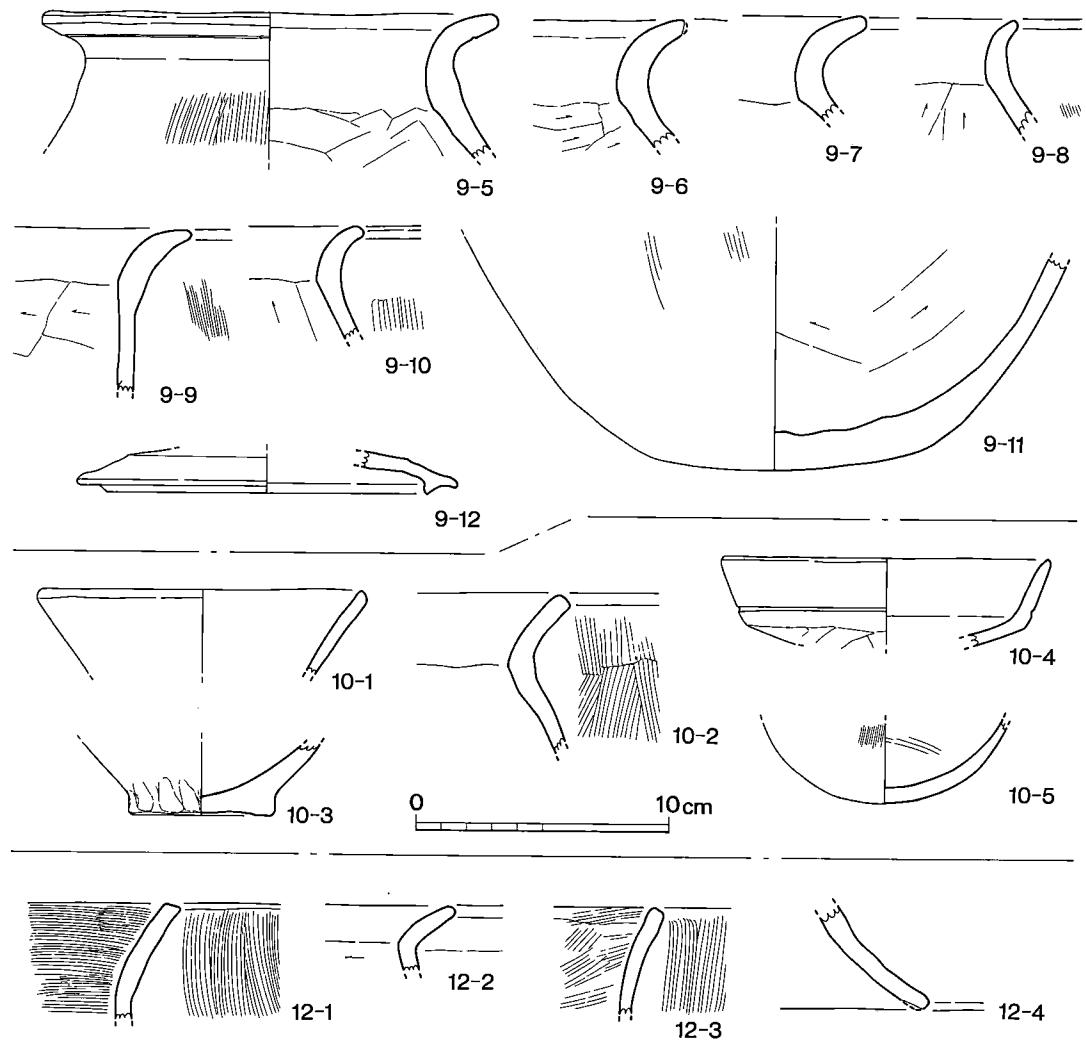
第32図 8号竪穴住居出土土器実測図 (1/3)

第33図 9号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/3)



第34図 9号堅穴住居跡出土土器実測図その2 (1/3)





第35図 9号・10号・12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第25図1-1	東台地 1号住居跡	土師器 壺	①14.51 ② ③	頸部から口唇まで直につくる。肩部以下を欠損精製土器。	内・外一ヘラ磨きとナデ	埋土上層出土
第25図1-2	1号住居跡	土師器 二重口縁壺	① ② ③	口縁と擬口縁との屈折度は鋭く、凸帯が巡る。	内・外一ハケのちヨコナデ	埋土上層出土 内面煤付着
第25図1-3	1号住居跡	土師器 甕	①16.2 ② ③	口唇部肥厚。口縁は直線的。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデとヘラ削り	口縁部煤付着
第25図1-4	1号住居跡	土師器 甕	①15.5 ② ③	口縁部僅かに内湾、口唇部摘み上げ。	外一ハケとヨコナデ 内一ハケとヘラ削り	外面煤付着
第25図1-5	1号住居跡	土師器 甕	①19.0 ② ③	頸部から口唇部まで直接的に仕上げ「く」字状に外反させる。以下は欠損	外一ヨコナデ 内一ハケとヘラ削り	埋土上層出土
第25図1-6	1号住居跡	土師器 甕	①15.0 ② ③	口縁部を若干反り気味に外反。以下は欠損。	内・外一ヨコナデ	外面煤付着 埋土から出土
第25図1-7	1号住居跡	土師器 甕	①12.0 ② ③	口縁部の外反度は緩く上方に開く。肩部はやや張り、胴下半は欠損。	外一ハケとナデ 内一ハケ、ナデ、ヘラ削り	埋土上層出土
第25図1-8	1号住居跡	土師器 小型甕	①11.0 ② ③	緩く上方に外反する口縁部。	内・外一ハケとナデ	埋土上層出土
第25図1-9	1号住居跡	土師器 甕	① ② ③	緩く「く」字状に外反する口縁部。	内・外一ナデ	
第25図1-10	1号住居跡	土師器 甕	① ② ③	尖り気味の丸底。上半は欠損。	外一摩耗 内一ハケのちナデ	埋土下層出土
第25図1-11	1号住居跡	土師器 甕	① ②4.4 ③	不安定な平底。	内一ナデ 外一ハケ	埋土中から出土
第25図1-12	1号住居跡	土師器 甕か蓋	① ②4.4 ③	甕か蓋か不明瞭。3方向に孔を穿つ。	外一ナデ、ハケ、ヘラ磨き 内一ナデ	混入土器の可能性あり
第25図1-13	1号住居跡	土師器 甕	① ② ③	器壁が薄く、布留併行期の技法。	外一ハケとナデ 内一ヘラ削り	外面煤付着 埋土上層出土
第25図1-14	1号住居跡	土師器 甕	① ② ③	器壁が薄く、布留併行期の技法。	外一ハケ 内一ヘラ削り	埋土下層出土
第25図1-15	1号住居跡	土師器 壇	① ② ③	口縁部を僅かに外反。器壁を薄くつくる。	内・外一摩減しているがナデかヘラ磨き	埋土上層出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第25図1-16	東台地 1号住居跡	土師器 壺	①10.0 ② ③	口縁部を僅かに外反。器壁を薄くつくる。	内・外一摩滅しているがナデかヘラ磨き	埋土下層出土
第25図1-17	1号住居跡	土師器 鉢	①9.0 ② ③	口縁僅かに外反。胴下半は尖り気味。	外一ナデ 内一削り	埋土下層出土
第26図1-18	1号住居跡	土師器 鉢	①8.5 ② ③	手捏土器のようなつくり底部欠損。	内・外一指ナデ	埋土中出土
第26図1-19	1号住居跡	土師器 鉢	① ②1.8 ③	器壁の薄い不安定な小さな平底	外一ハケ 内一ナデ	埋土下層出土
第26図1-20	1号住居跡	土師器 高壺	① ② ③	口縁と脚部を欠く。杯部は深く体部と底部の屈折は明瞭。	内・外一ナデ	埋土上層出土
第26図1-21	1号住居跡	土師器 高壺	①13.2 ②17.4 ③9.4	椀形の壺部、柱状部が短く裾部は大きく広がる。孔は4箇所に穿つ。	壺内・外一ヘラ磨き 裾内一ハケ	精製土器 埋土下層出土 完形品
第26図1-22	1号住居跡	土師器 壺	①10.2 ② ③8.3	扁平な形状。精製土器	内・外一ナデ	埋土下層出土 完形品
第26図1-23	1号住居跡	土師器 壺	①13.2 ② ③8.9	口縁から底部にかけての湾曲度が少ない。底部は尖り気味。	外一細かいハケ 内一ヘラ磨き	内外面煤付着 精製土器 埋土下層出土
第26図1-24	1号住居跡	土製器 支脚	① ②10.5 ③10.5	すんぐりした支脚。二次火熱を受け赤変し、器面が剥離する。	指ナデ	埋土下層出土
第26図2-1	2号住居跡	須恵器 壺蓋	①13.0 ② ③	口唇部が尖る。体部に台形凸帯が巡る。	外一ヨコナデと回転 ヘラ削り 内一ヨコナデ	天井部外面に ヘラ記号
第26図3-1	3号住居跡	土師器 甕	①18.0 ② ③	外反度の鈍い口縁部。肩部から胴部の張りがない	外一摩耗 内一ヘラ削り、不明瞭	埋土中から出土
第26図3-2	3号住居跡	土師器 甕	①15.0 ② ③	やや口縁部が厚く、緩く外反する。	外一指圧痕とナデ 内一ヘラ削り	埋土中から出土
第26図3-3	3号住居跡	土師器 甕	① ② ③	口縁部が長く弓なりに外反する。肩部がやや張る	外一ハケとヨコナデ 内一ヘラ削りとヨコナデ	埋土中から出土
第26図3-4	3号住居跡	土師器 甕	① ② ③	僅かに外反する口縁部。	外一ハケか 内一ヘラ削り	埋土中から出土
第26図3-5	3号住居跡	土師器 高台付鉢	①10.6 ②7.0 ③8.9	口縁部が若干外反。胴部は直線的につくり、やや高めの高台を付す。	内・外一摩耗し不明	埋土中から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

插図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第26図3-6	東台地 3号住居跡	須恵器 坏蓋	①16.0 ② ③	大きな身受けの返りのある坏蓋。摘みは欠損。	外-ヨコナデと回転 ヘラ削り 内-ヨコナデ	埋土中から出土
第26図3-7	3号住居跡	須恵器 坏蓋	①14.0 ② ③	身受けの返りのある坏蓋 6よりやや小型。	外-ヨコナデと回転 ヘラ削り 内-ヨコナデ	埋土中から出土
第26図3-8	3号住居跡	須恵器 坏身	①12.4 ② ③	口縁部から体部は直線的につくる。底部は厚く、焼き歪みがある。	外-ヨコナデと回転 ヘラ削り 内-ヨコナデ	埋土中から出土。外面底部 ヘラ記号
第27図3-9	3号住居跡	須恵器 坏身	①8.5 ②6.0 ③3.0	口縁から体部は直で底部は厚い。	内・外-ナデ	
第27図3-10	3号住居跡	須恵器 坏身	①12.3 ②7.0 ③3.7	口縁部から体部にかけては直線的で、屈折部は丸い。若干上げ底。	外-ナデとヘラ削り 内-ナデ	
第27図3-11	3号住居跡	須恵器 高台付椀	①14.0 ②11.0 ③4.9	体部から口縁部は直につくり、屈折部は丸く高く端部の広い高台がつく。	外-ヨコナデと回転 ヘラ削り 内-ヨコナデ	埋土中から出土
第27図3-12	3号住居跡	須恵器 高台付椀	①13.2 ②9.8 ③4.3	口縁片は若干外反。体部から底部にかけては丸みがあり、高い高台貼付。	外-ヨコナデと回転 ヘラ削り 内-ヨコナデ	埋土中から出土
第27図3-13	3号住居跡	須恵器 提瓶	①9.0 ② ③	口縁部若干内湾。口縁下2条の沈線。頸部以下は欠損。	内・外-ヨコナデ	埋土中から出土
第27図4-1	4号住居跡	土師器 壺	①19.5 ② ③	頸部から口縁部まで直線状。体部は球状。下半は欠損。	外-ナデとハケ 内-ナデ(粘土紐の 巻き上げ痕残)	下層埋土から 出土 外面煤付着
第27図4-2	4号住居跡	土師器 小型壺	①10.0 ② ③12.4	口縁部は直線的なつくりで口唇部が尖る。体部は扁平な球状。	内・外-ハケとナデ	下層埋土から 出土 外面煤付着
第27図4-3	4号住居跡	土師器 壺	①11.5 ②7.0 ③2.8	口縁部若干内傾。	内・外-ヘラ磨き (外面摩耗)	下層埋土から 出土 外面煤付着
第27図4-4	4号住居跡	土師器 甕	①23.1 ② ③	口縁部が大きく外反。肩部は張る。	外-ハケとナデ 内-ヘラ削り	上層埋土出土 混入土器 外面煤付着
第27図4-5	4号住居跡	土師器 小型甕	①11.3 ② ③	「く」字状に外反する口縁部。	外-ハケとヨコナデ 内-ヨコナデとヘラ 削り	外面煤付着 埋土上層出土 混入土器
第27図4-6	4号住居跡	土師器 小型甕	①12.0 ② ③	「く」字上に外反する口縁部。肩部の張りは鈍い	外-ハケ 内-ヨコナデとヘラ 削り	埋土上層出土 混入土器
第28図4-7	4号住居跡	土師器 甕	① ② ③	弓なりに外反する口縁部 肩部の張りは鈍く、器壁薄くつくる。	内・外-摩滅	埋土上層出土 混入土器

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第28図 4-8	東台地 4号住居跡	土師器 甕	① ② ③	短い口縁で、上方に開く。肩部が張り器壁が厚い。	外一摩耗 内一ヘラ削り	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-9	4号住居跡	土師器 小型甕	①14.0 ② ③	短い口縁部で緩く外反する。肩部は直線的につくる。	外一摩耗 内一ヘラ削り	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-10	4号住居跡	土師器 小型甕	①14.0 ② ③	口唇部を肥厚させる。肩部の膨らみはない。	外一ナデ 内一ヘラ削り	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-11	4号住居跡	土師器 小型甕	①15.0 ② ③	口縁を僅かに外反。体部は細まり器壁が厚い。	外一ヨコナデとハケ 内一ヘラ削り	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-12	4号住居跡	土師器 甕か壺	① ② ③	つくりが粗く、胴部上半を欠損。	外一ハケ 内一ナデ	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-13	4号住居跡	土師器 鉢	①13.0 ② ③	口縁部が上方に開く。底部を欠損。	内・外一摩耗	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-14	4号住居跡	須恵器 甕	①23.0 ② ③	口唇部を肥厚させ、口縁は朝顔状に外反。	外一ナデ(一部カキ目) 内一ナデと青海波	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-15	4号住居跡	須恵器 壺蓋	①12.5 ② ③4.2	口縁が僅かに内傾。体部から天井部は丸くつくる	外一ヨコナデと回転 ヘラ削り 内一ヨコナデ	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-16	4号住居跡	須恵器 壺蓋	①10.7 ② ③	小型の壺蓋。体部から天井部にかけては丸くつくる。	外一ヨコナデと回転 ヘラ削り。 内一ヨコナデ	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-17	4号住居跡	須恵器 壺蓋	①14.9 ② ③	浅い身受けの返りのある壺蓋。摘みがつくと思われる。	外一ヨコナデと回転 ヘラ削り 内一ヨコナデ	埋土上層から 出土 混入土器
第28図 4-18	4号住居跡	須恵器 壺蓋	①14.0 ② ③	身受けの返りのつく壺蓋 摘みを欠損。	外一ヨコナデとヘラ 削り 内一ヨコナデ	埋土上層から 出土 混入土器
第28図 4-19	4号住居跡	須恵器 壺蓋	①12.5 ② ③	身受けと返りのつく壺蓋 体部と天井の境の稜が明瞭。	外一ヨコナデと未調整 内一ナデ	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-20	4号住居跡	須恵器 高台付椀	① ②8.4 ③	体部上半欠損。体部と底部の境は丸み。低い高台で外方に開く。	外一ヨコナデと回転 ヘラ削り 内一ナデ	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-21	4号住居跡	須恵器 高台付椀	① ② ③8.4	体部上半欠損。体部と底部の境は丸み。低い高台で外方に開く。	外一ヨコナデとヘラ 削り 内一ナデ	埋土上層出土 混入土器
第28図 4-22	4号住居跡	須恵器 高壺	① ②9.6 ③	裾端部は尖る。	内・外一ヨコナデ	埋土上層出土 混入土器

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第29図5-1	東台地 5号住居跡	土師器 甕	①22.1 ② ③30.0	「く」字状に外反した長い口縁部。胴部は長く、尖り底。	外一ハケとナデ 内一ナデ(下半指圧痕)	在地系土器 外面煤付着 埋土中出土
第29図5-2	5号住居跡	土師器 甕	①18.0 ② ③20.3	「く」字状に外反する口縁部。肩部から胴部は丸みがある。器壁が薄い。	外一ハケとナデ 内一ヘラ削りとハケ	埋土中から出土
第29図5-3	5号住居跡	土師器 鉢	① ② ③	口縁部を僅かに外反	外一ナデとヘラ削り 内一ハケ	埋土中から出土
第29図5-4	5号住居跡	土師器? 鉢	①12.0 ② ③7.2	口唇部が尖る。体部にやや張りがあり、底部は尖り気味。	外一ハケ 内一ハケ	床面から出土
第29図5-5	5号住居跡	弥生土器 鉢	① ②4.2 ③	平らな底部。	外一ナデ 内一ハケ	埋土中から出土。 混入か古いのが残る。
第29図5-6	5号住居跡	弥生土器 鉢	①9.0 ②3.5 ③4.9	体部から口縁部は直につくる。底部は厚い平底。	外一ナデと指圧痕 内一ナデ	埋土中から出土。 混入か古いのが残る。
第29図5-7	5号住居跡	弥生土器 器台	①14.3 ②19.2 ③20.5	最小径が上半にあるタイプ。口唇部は肥厚。	外一叩キとハケ 内一ハケとナデ	完形品 床面から出土
第30図5-8	5号住居跡	土師器 壺	① ② ③	口縁部から体部までは直線的。底部にヘラ記号らしき刻みあり。	外一ヨコナデとヘラ 削り 内一ナデ	混入土器
第30図5-9	5号住居跡	須恵器 壺身	①13.4 ② ③	口唇部が段をなし尖る。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	埋土上層から出土
第30図5-10	5号住居跡	須恵器 壺身	①12.0 ② ③3.1	口縁部が直立。口唇部に有段。器高が低い。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内ヨコナデ	埋土上層から出土
第30図5-11	5号住居跡	須恵器 壺身	①13.2 ② ③	口縁部が僅かに内湾。体部に丸みあり。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	埋土上層から出土
第30図6-1	6号住居跡	土師器 大型甕	①40.0 ② ③	長い口縁部が緩く開く。口縁下に刻みを付けた1条の台形凸帶。	内・外一ハケとナデ	
第30図6-2	6号住居跡	弥生土器 甕	①26.0 ② ③	逆「L」字状に外反した口縁部。	外一ハケのちナデ 内一ナデ	混入土器
第30図6-3	6号住居跡	土師器 甕	① ② ③	緩く外反した長い口縁部	外一ハケとナデ 内一ハケ	
第30図6-4	6号住居跡	土師器 甕	① ② ③	器壁の厚い尖り底。	内・外一ナデ	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第30図 6-5	東台地 6号住居跡	土師器 鉢	① ② ③	僅かに外反する口縁部。	外一ハケ 内一ナデ	
第30図 6-6	6号住居跡	土師器 大型鉢	①25.0 ② ③	口唇部は粘土紐を貼付し 肥厚。口縁は内傾。底部 は欠損。	外一ハケのちナデ(下 半は削り) 内一ハケ	
第30図 6-7	6号住居跡	土師器 鉢	① ② ③	小片のため不明。	内・外一ナデ	
第30図 6-8	6号住居跡	土製品 玉杓子	現長-6.3 径 -2.0 ×1.6			
第31図 7-1	7号住居跡	土師器 壺	①22.0 ② ③	反り気味の長い口縁部	外一摩滅 内一ナデ	
第31図 7-2	7号住居跡	土師器 甕	①17.0 ② ③	「く」字状に外反する口 縁部。口唇部は尖る。体 部は球形。	外一ハケとヘラ削り 内一ハケ	床面から出土
第31図 7-3	7号住居跡	土師器 高环	① ②15.0 ③	口縁部が接合面で剥離。 スマートな脚。穿孔は3 箇所。	内・外一ハケとナデ	
第31図 7-4	7号住居跡	土師器 大型鉢	①24.0 ② ③12.8	口縁部が若干内傾。口唇 部を肥厚。体部は丸く、 尖り気味の底部。	外一ナデとハケ 内一ハケで一部ナデ	床面から出土
第31図 7-5	7号住居跡	土師器 大型鉢	①26.0 ② ③	口縁部が直で、口唇部を 肥厚させる。底部を欠損	外一ハケのちナデ, 下半はヘラ削り 内一ハケのちナデ	床面から出土
第31図 7-6	7号住居跡	土師器 鉢	①11.7 ② ③6.4	口縁部僅かに内傾。半球 形の体部。口縁の器壁が 厚い。	外一削りのちナデ 内一ナデ	床面から出土
第31図 7-7	7号住居跡	土師器 鉢	①13.0 ② ③6.6	口縁部から底部は半球形 底部の器壁が厚い。	外一叩きのちナデ 内一ハケのちナデ	床面から出土
第31図 7-8	7号住居跡	弥生土器 鉢	①12.8 ②4.0 ③6.7	口縁部若干内湾。底部は 不安定な平底。	外一叩きのちナデ(一 部ハケ残る) 内一ハケ一部ナデ	床面から出土
第31図 7-9	7号住居跡	土製品 玉杓子	現長-9.0 径 -2.0		指ナデ	
第32図 8-1	8号住居跡	土師器 二重口縁壺	①18.0 ② ③	口縁部から疑似口縁まで は反り気味。	内・外一ハケの上か らヨコナデ	混入土器 埋土中から出 土
第32図 8-2	8号住居跡	土師器 小型壺	①12.0 ② ③14.5	「く」字状に外反した短 い口縁部。体部は球状を なす	外一ナデ 内一ヘラ削り	ほぼ完形土器 外面煤付着 カマド東傍

出土土器観察表

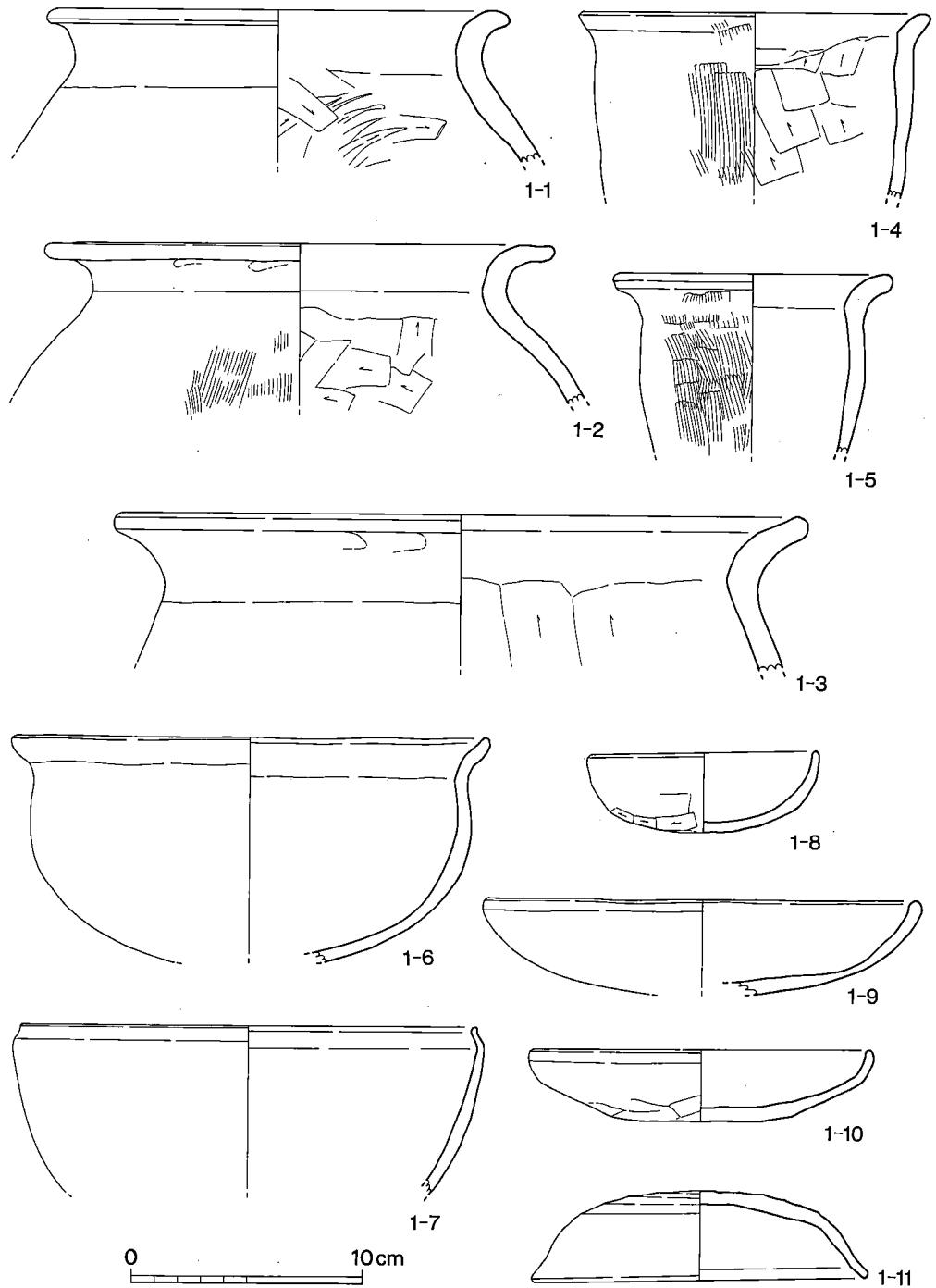
①口径 ②底径 ③器高(cm)

擲団土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第32図8-3	東台地 8号住居跡	土師器 高壺	① ② ③	杯部の小片	外-ナデ 内-ハケ	混入土器 埋土中から出土
第32図8-4	8号住居跡	土師器 椀	①13.2 ② ③	口縁部が内湾。	内・外-黒色磨研	漆塗が殆ど剥落 埋土中出土
第32図8-5	8号住居跡	土師器 椀	①12.3 ② ③5.5	4と同タイプの椀。胴部 が扁平球状。	内・外-黒色磨研	完形土器 漆が剥離 埋土中出土
第32図8-6	8号住居跡	土師器 椀	①12.5 ② ③5.0	前者と同タイプの椀。口 縁部が厚く、体部は薄つ くり	内・外-黒色磨研	漆が剥離 埋土中出土
第32図8-7	8号住居跡	土師器 椀	①12.0 ② ③	他の椀よりも口縁部が内 傾。底部欠損。	内・外-黒色磨研	漆殆ど剥離 埋土中から出土
第32図8-8	8号住居跡	土師器 瓶	①27.8 ②9.6 ③31.6	器壁が薄く底部が細まる タイプの瓶。両方の把手 が欠損。	外-ナデ(下半はヘ ラ削り) 内-ヘラ削り	床面から出土
第33図9-1	9号住居跡	土師器 甕	①18.2 ② ③35.8	口縁部が短く、弓状に外 反する。肩部が張り、長 胴をなす。	外-ハケ 内-ヘラ削り	完形土器 外面に煤が付 着
第33図9-2	9号住居跡	土師器 甕	①17.7 ② ③34.3	口縁の外反度は1ほどで なく、頸部が長い。肩 部が張り、やや長胴。	外-ハケ 内-ヘラ削り	口縁内面から から外面全体に化粧土を塗 布。
第34図9-3	9号住居跡	土師器 甕	①19.5 ② ③	頸部から外反し、口縁は 直線的。最大径が胴中央 部にあり、長胴をなす。	外-ハケ 内-ヘラ削り	床面から出土
第34図9-4	9号住居跡	土師器 甕	①18.0 ② ③30.3	口縁部のつくりは3と同じ。 肩部が張り、最大径 が胴部上半にある。	外-ハケ 内-ヘラ削り	外面に煤付着 床面から出土
第35図9-5	9号住居跡	土師器 甕	①18.0 ② ③	口縁が大きく外反。肩部 は撫で肩。口縁に細い 沈線。	口縁内外-ヨコナデ 外-ハケ 内-ヘラ削り	
第35図9-6	9号住居跡	土師器 甕	① ② ③	銳く外反する口縁部。	外-ヨコナデ 内-ヘラ削り	
第35図9-7	9号住居跡	土師器 甕	① ② ③	弓状に反る長い口縁部		カマド周辺出 土
第35図9-8	9号住居跡	土師器 甕	① ② ③	短く外反度の鈍い口縁部 器壁が薄い。		カマド周辺出 土
第35図9-9	9号住居跡	土師器 甕	① ② ③	厚くつくり大きく開く口 縁部	外-ハケ 内-ヘラ削り	埋土中から出 土

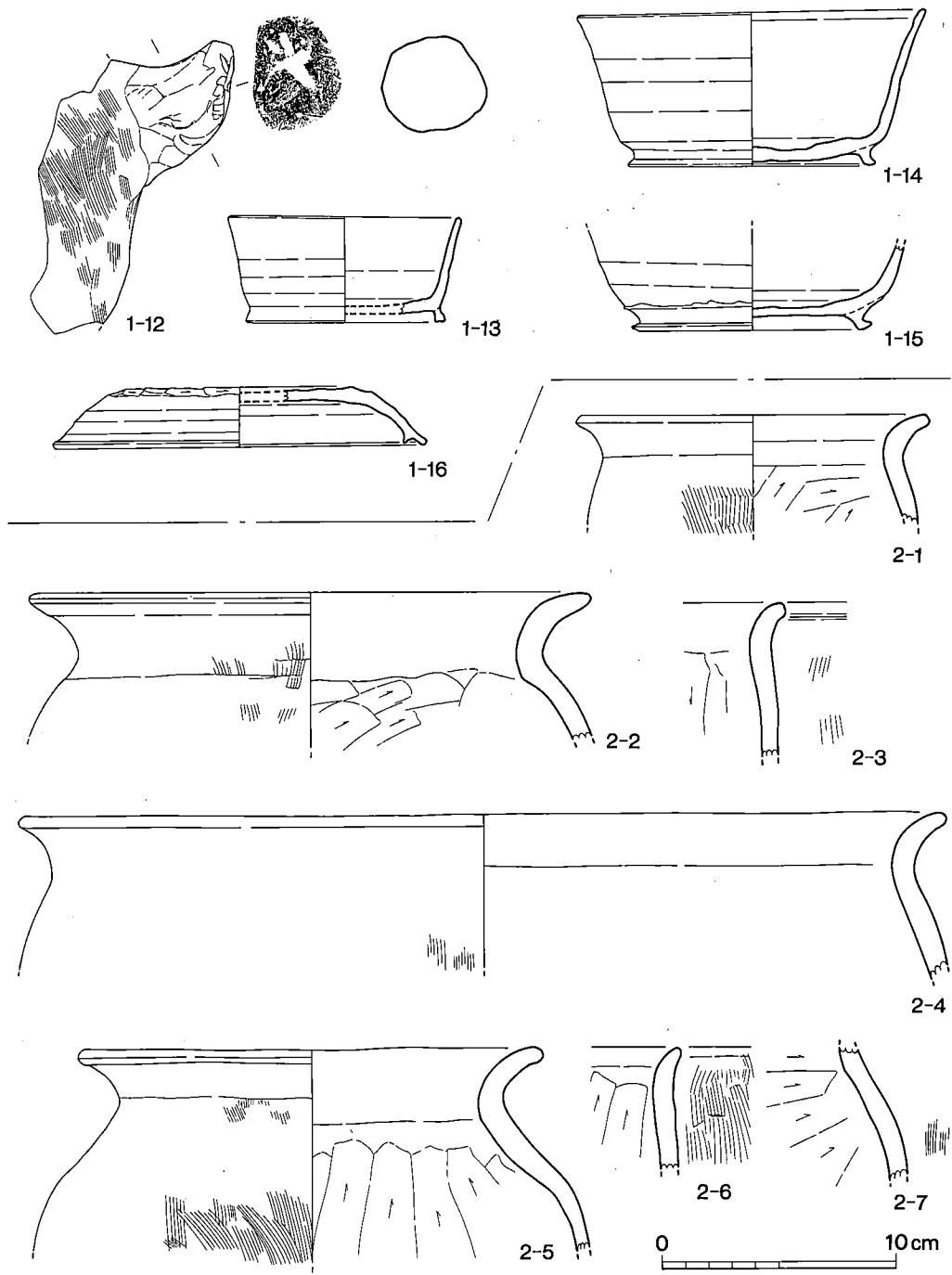
出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

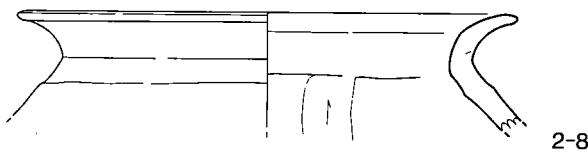
挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第35図9-10	東台地 9号住居跡	土師器 甕	① ② ③	6と同じタイプ。		カマド周辺出土
第35図9-11	9号住居跡	土師器 甕	① ② ③	安定感のある底部	外一ハケ後ナデ 内一ヘラ削り	埋土中から出土
第35図9-12	9号住居跡	須恵器 壺蓋	①15.0 ② ③	見受けの返りのある蓋。 摘みがつくと思われる。		埋土中から出土
第35図10-1	10号住居跡	土師器 小型壺	①13.0② ③	直線的な口縁部。	内・外一ナデが磨き 風化している	
第35図10-2	10号住居跡	土師器 甕	① ② ③	「く」字状に外反する口 縁部。	外一ハケ 内一ナデ	混入土器
第35図10-3	10号住居跡	弥生土器 甕	① ②5.6 ③	若干上げ底。壺の可能性 もある。	内・外一摩滅	混入土器
第35図10-4	10号住居跡	土師器 壺?	①13.0 ② ③	口縁から体部にかけては 直で、体部に1条の沈線 が巡る。	外底一ヘラ削り 外・内一ヨコナデ	
第35図10-5	10号住居跡	土師器 小型壺か 壺	① ② ③			
第35図12-1	12号住居跡	土師器 甕	① ② ③	口縁部の長く外反度の鈍 い甕。口唇部を若干把厚 させる。	外一ハケ 内一ハケ	
第35図12-2	12号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小片のため不明瞭。	外一不明 内一ヘラ削り	
第35図12-3	12号住居跡	土師器 甕	① ② ③	12-1と同タイプの甕	外一ハケ 内一ハケ	
第35図12-4	12号住居跡	土師器 高壺?	① ② ③	小片で不明瞭。		



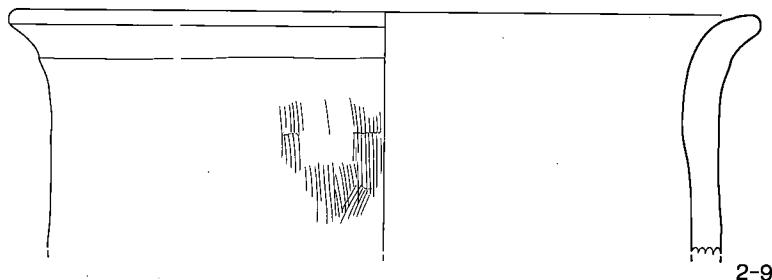
第36図 1号土壙出土土器実測図 (1/3)



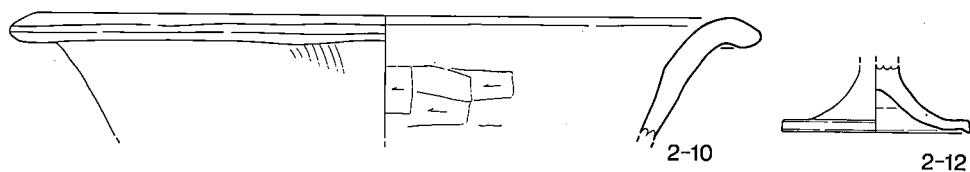
第37図 1号・2号土壤出土土器実測図 (1/3)



2-8

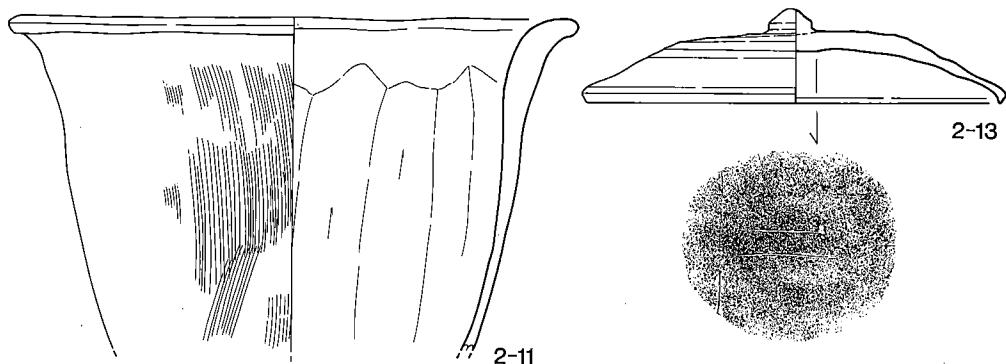


2-9



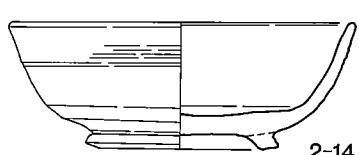
2-10

2-12



2-11

2-13



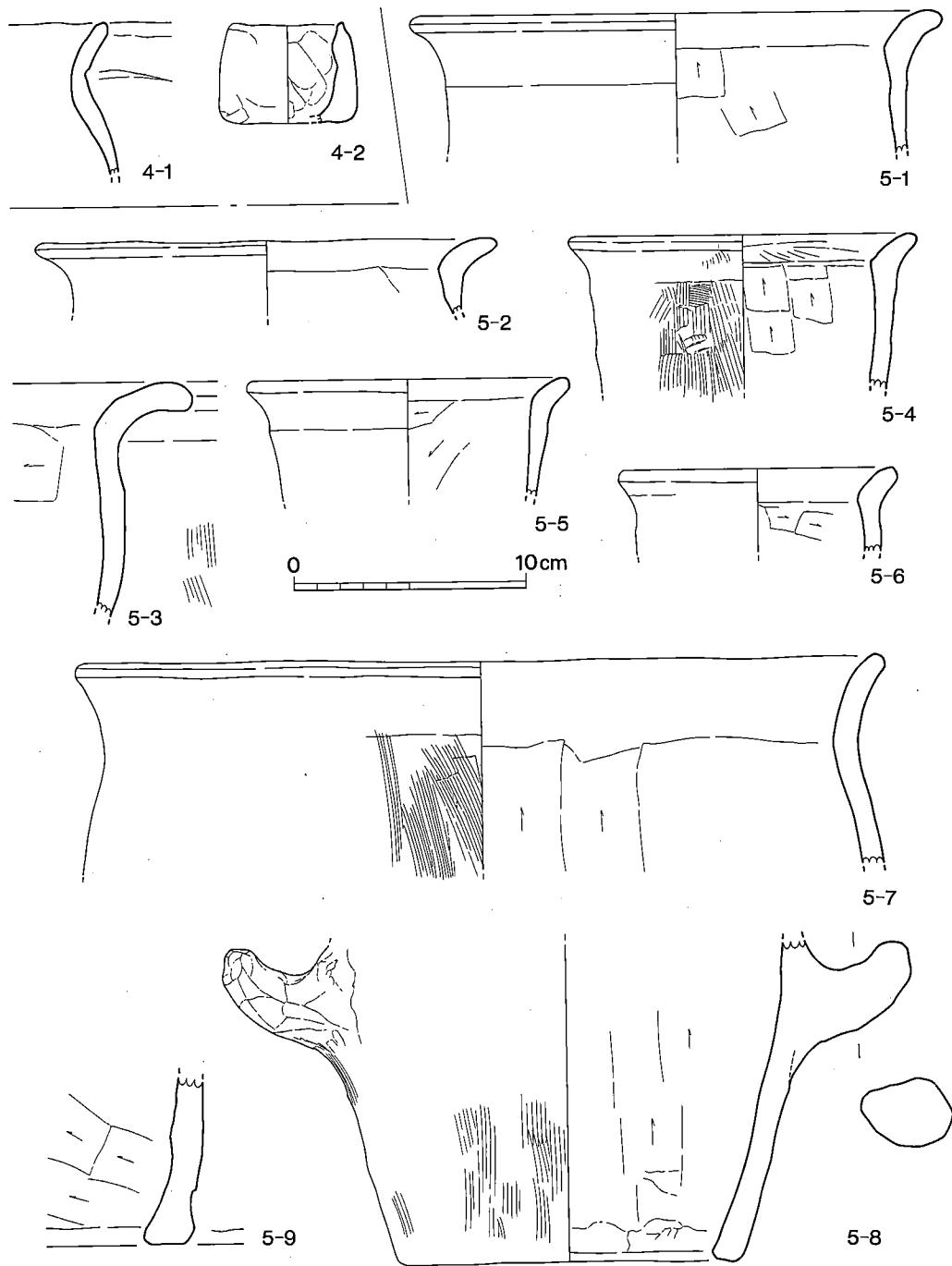
2-14



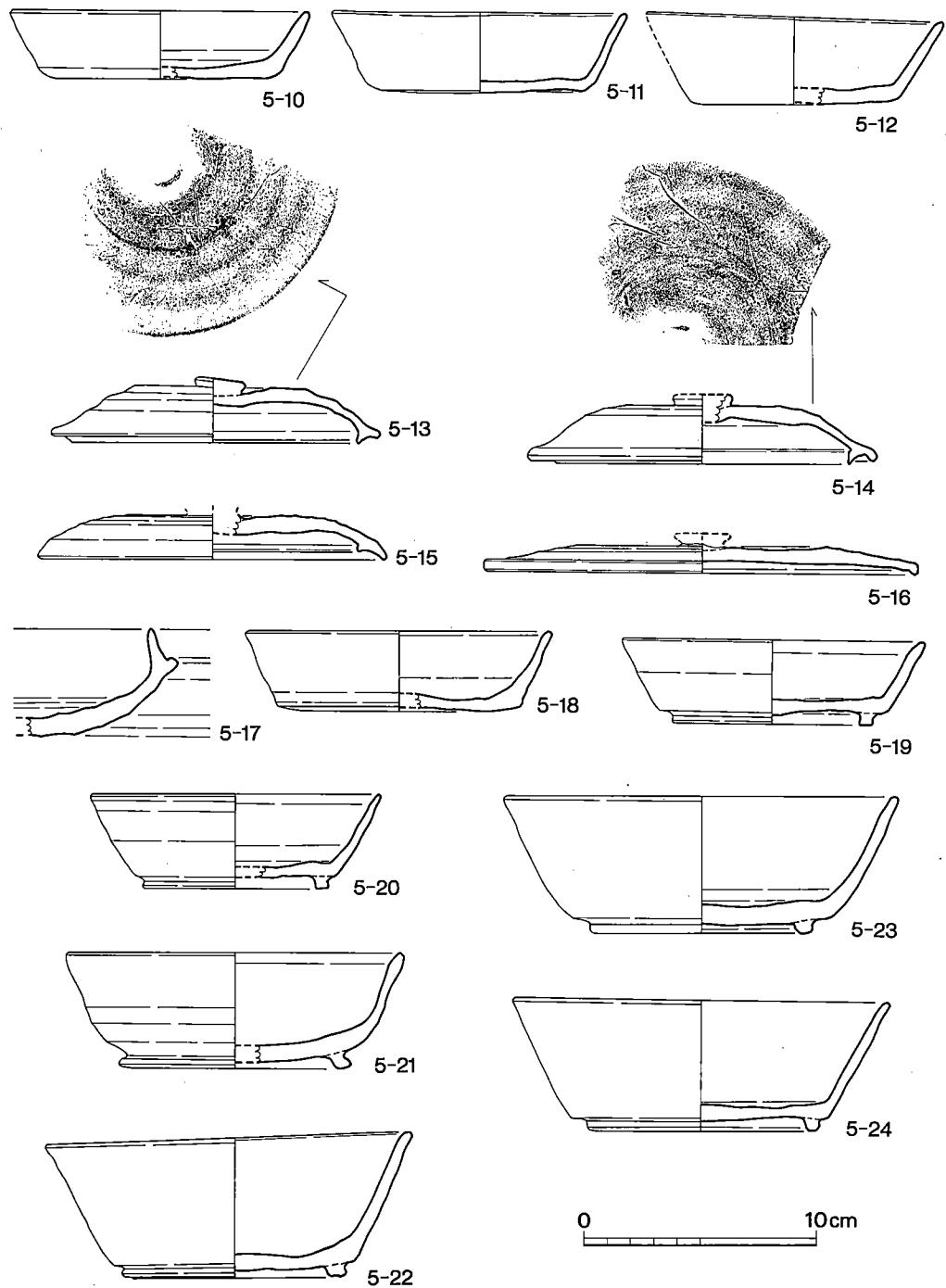
2-15

0 10 cm

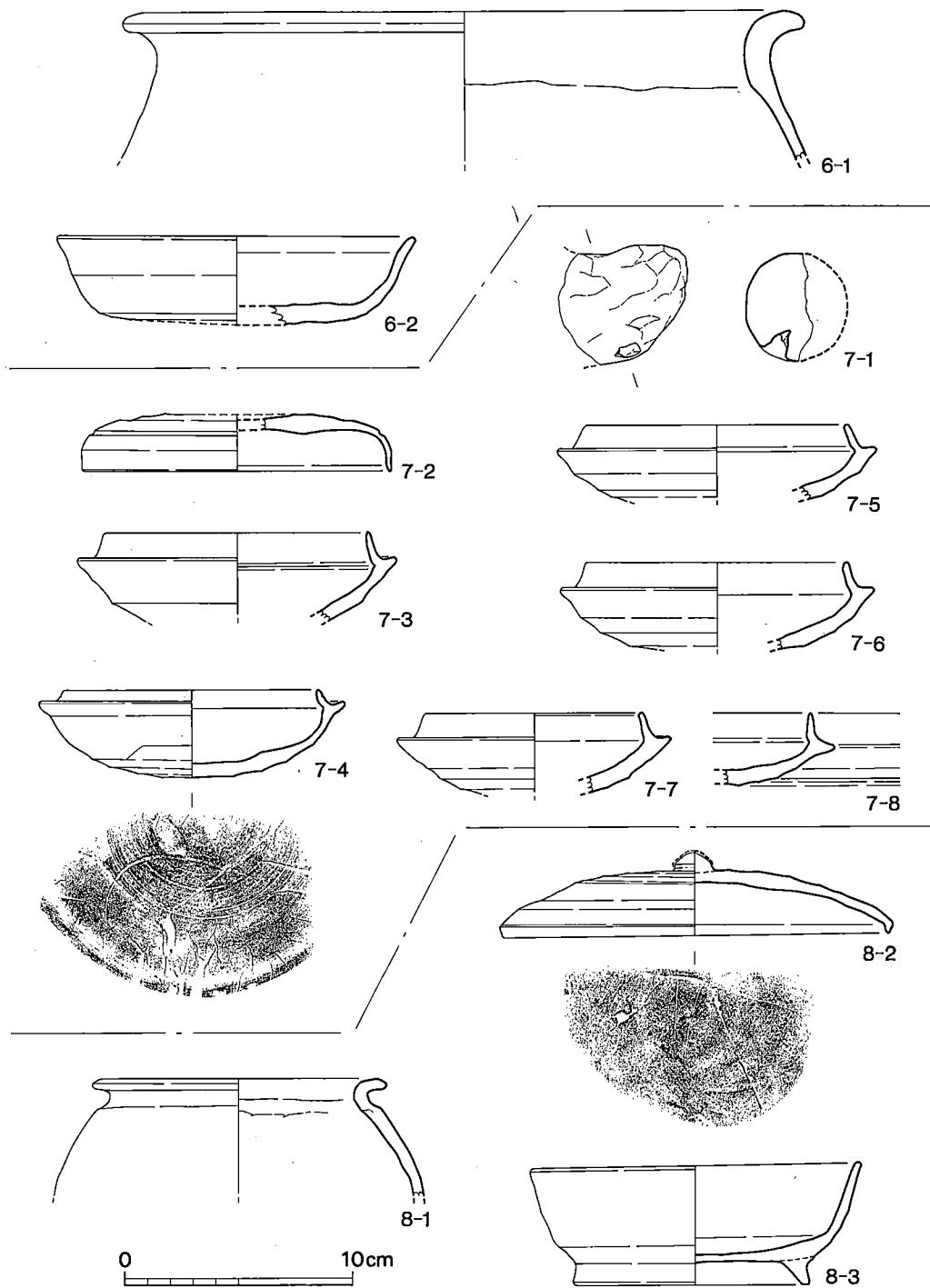
第38図 2号土壤出土土器実測図 (1/3)



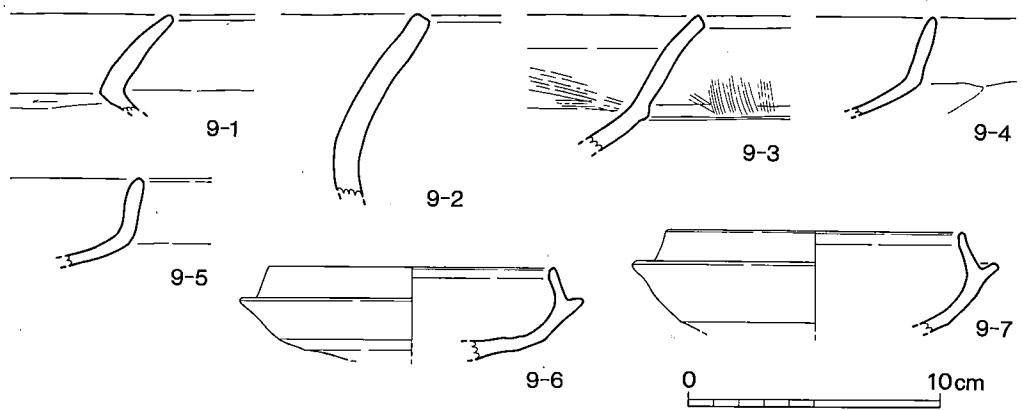
第39図 4号・5号土壤出土土器実測図 (1/3)



第40図 5号土壤出土土器実測図 (1/3)



第41図 6号～8号土壤出土土器実測図 (1/3)



第42図 9号土壙出土土器実測図 (1/3)

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第36図1-1	東台地 1号土壙	土師器 甕	①20.0 ② ③	口縁部は短く緩く外反し 口唇部は尖り気味。肩部 は撫で肩。	外一ナデ 内一ヘラ削り	
第36図1-2	1号土壙	土師器 甕	①22.0 ② ③	口縁部は鋭く外反し肩部 が張る。	外一ハケ 内一ヘラ削り	
第36図1-3	1号土壙	土師器 甕	①30.0 ② ③	「く」字状に外反する口 縁部。	外一ナデ 内一ヘラ削り	内面に煤が付 着
第36図1-4	1号土壙	土師器 甕	①15.0 ② ③	口縁を僅かに外反させる 小型甕	外一ハケ 内一ヘラ削り	
第36図1-5	1号土壙	土師器 甕	①12.0 ② ③	口縁を厚くつくり、緩く 外反させる。胴部が僅か に張る。	外一ハケ 内一ヘラ削り	
第36図1-6	1号土壙	土師器 鉢	①20.6 ② ③	口縁部が若干内湾。胴部 は膨らみ、底部欠損。	内・外一摩滅	混入土器か
第36図1-7	1号土壙	土師器 鉢	①19.6 ② ③	口縁部が内傾し、最大径 が肩部にある。鉢の形 状が呈する。精製土器。	内・外一ナデ	
第36図1-8	1号土壙	土師器 壺	①10.0 ② ③3.5	口縁を僅かに内湾させる 小型の壺。	外底一ヘラ削り 外・内一ナデ	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

捕団土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第36図1-9	東台地 1号土壙	土師器 壺	①18.8 ② ③	口縁部を若干内湾肥厚さ させる。精製土器。	内・外一風化	
第36図1-10	1号土壙	土師器 壺	①14.8 ② ③3.1	口縁部を内傾。全体が扁 平なつくり。	外底一ヘラ削り 外・内一ナデ	
第36図1-11	1号土壙	須恵器 壺蓋?	①14.6 ② ③3.8	口縁部若干開く。体部か ら天井部は丸みあり。	外天井一回転ヘラ削 り 外・内一ヨコナデ	
第37図1-12	1号土壙	土師器 甌か把手 付甌	① ② ③	大きく短い把手で先端部 分に「十」字状の刻み。	外一ハケ 内一ヘラ削り	
第37図1-13	1号土壙	須恵器 高台付椀	①10.0 ②8.6 ③4.5	体部から口縁部は直につ くる。体部と底部の境目に 低い高台を付す。	外底一回転ヘラ削り 内・外一ヨコナデ	小型品
第37図1-14	1号土壙	須恵器 高台付椀	①14.8 ②10.5 ③6.7	口縁部が若干外反。体部 は直で屈折部分に低い高 台を付す。	外底一回転ヘラ削り 内・外一ヨコナデ	
第37図1-15	1号土壙	須恵器 高台付椀	① ②10.2 ③	体部から底部は丸みを持 つ。高台の端部が広がる	外底一回転ヘラ削り 内・外一ヨコナデ	体部上半欠損
第37図1-16	1号土壙	須恵器 壺蓋	①16.0 ② ③	扁平な摘みがつか。身 受けの返りのある蓋。	外一手持ちヘラ削り ヨコナデ 内一ヨコナデ	
第37図2-1	2号土壙	土師器 甌	①15.0 ② ③	反り気味の口縁部で小型 品。	外一ハケ 内一ヘラ削り	
第37図2-2	2号土壙	土師器 甌	①24.2 ② ③	口縁部は長く鋭く外反す る。肩部が張る。	外一ハケ後ナデ 内一ヘラ削り	
第37図2-3	2号土壙	土師器 甌	① ② ③	小片の外反度の鈍い甌。	外一ハケが摩耗 内一ヘラ削り	
第37図2-4	2号土壙	土師器 大型甌	①40.0 ② ③	外反度の緩やかな口縁部 肩部が若干張る。	外一ハケが摩耗 内一ヘラ削り	
第37図2-5	2号土壙	土師器 甌	①20.1 ② ③	口縁部が鋭く外反し肩部 が張る。	外一ハケとナデ 内一ヘラ削り	外面煤付着
第37図2-6	2号土壙	土師器 甌	① ② ③	小破片の外反度の鈍い甌	外一ハケ 内一ヘラ削り	
第37図2-7	2号土壙	土師器 甌	① ② ③	肩部の小破片。	外一ハケ若干 内一ヘラ削り	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第38図2-8	東台地 2号土壙	土師器 甕	①20.0 ② ③	鋭く外反する口縁部で、 口唇部は尖る。肩部は張 る。	外一ナデ 内一ヘラ削り	
第38図2-9	2号土壙	土師器 把手付甕か 瓶	①30.0 ② ③	器壁の厚い緩い外反度の 口縁部。	外一ハケとナデ 内一ヘラ削り	
第38図2-10	2号土壙	土師器 土鍋	①30.0 ② ③	垂れ下がり気味の口縁部 で体部は細まる。	外一摩耗 内一ヘラ削り	
第38図2-11	2号土壙	土師器 甕	①21.7 ② ③	厚手の外反度の緩い口縁 部で、体部は細まる。	外一ハケ 内一ヘラ削り	
第38図2-12	2号土壙	須恵器 高坏	① ②7.5 ③	小型の高坏の脚部。裾端 部は肥厚する。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデ	
第38図2-13	2号土壙	須恵器 坏蓋	①16.3 ② ③3.7	擬宝珠の摘み。天井部か ら体部は丸み。口唇部は 肥厚。内面ヘラ記号。	外一ヨコナデと回転 ヘラ削り 内一ナデ	完形品
第38図2-14	2号土壙	須恵器 高台付椀	①13.9 ②7.7 ③5.0	体部から底部は丸み。低 い高台。焼きが悪い。	外底一回転ヘラ削り 内・外一ヨコナデ	
第38図2-15	2号土壙	須恵器 坏身	①8.3 ② ③2.8	小型品。外面底部に弧状 のヘラ記号あり。	外底一手持ちヘラ削 り 内・外一ヨコナデ	
第39図4-1	4号土壙	土師器 甕	① ② ③	緩く「く」字状に外反す る口縁部	外一ナデ 内一ヘラ削り	
第39図4-2	4号土壙	土師器 手捏土器	①4.8 ②5.6 ③4.2	体部から口縁部にかけて は若干内挽。口唇部は尖 る。安定した底部。	内・外一指ナデ	
第39図5-1	5号土壙	土師器 甕	①23.0 ② ③	口縁を厚くつくり、外反 度は緩い。	外一ナデ 内一ヘラ削り	
第39図5-2	5号土壙	土師器 甕	①19.3 ② ③	厚みのある口縁部で外反 度は鈍い。肩部は僅かに 張る。	外一ナデ 内一ヘラ削り	二次火熱を受 け赤変する
第39図5-3	5号土壙	土師器 甕	① ② ③	口縁は長く、鋭く外反す る。	外一ナデ 内一ヘラ削り	
第39図5-4	5号土壙	土師器 小型甕	①15.0 ② ③	口縁の外反度は鈍い。頸 部内面はヘラ削りで稜が つく。胴は細まる。	外一粗いハケ 内一ヘラ削り	外面煤付着
第39図5-5	5号土壙	土師器 小型甕	①14.0 ② ③	口縁部は僅かに外反。胴 部以下は細まる。	外一ナデ 内一ヘラ削り	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

掲図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第39図5-6	東台地 5号土壙	土師器 小型甕	①12.0 ② ③	口縁の外反度は鈍い。器壁が全体に厚い。	外一ナデ 内一ヘラ削り	-
第39図5-7	5号土壙	土師器 甕	①35.0 ② ③	やや大型品で緩く外反する口縁部。形状が外の甕より古く、17と共に。	外一ハケ 内一ヘラ削り	混入土器。
第39図5-8	5号土壙	土師器 甕	① ②15.0 ③	胴下半は直線的で、安定感がある。把手は細みづくり。	外一ハケ 内一ヘラ削り	底部付近焼付着。
第39図5-9	5号土壙	土師器 甕	① ② ③	底部裾を肥厚させる。	外一 内一ヘラ削り	
第40図5-10	5号土壙	土師器 坏	①13.0 ②10.6 ③3.9	他の坏に比べて器壁が厚い。	外底一回転ヘラ削り 外・内一ナデ	
第40図5-11	5号土壙	土師器 坏	①12.7 ②9.0 ③3.4	体部から口縁部は直につくる。器壁が薄い。	外底一回転ヘラ削り 外・内一ナデ	
第40図5-12	5号土壙	土師器 坏	①12.8 ②9.0 ③3.8	体部から口縁部は直につくる。	外底一回転ヘラ削り 外・内一ナデ	
第40図5-13	5号土壙	須恵器 坏蓋	①14.1 ② ③2.8	扁平な摘み、身受けの返りのある口縁部。やや焼き歪みあり。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	外面天井にヘラ記号
第40図5-14	5号土壙	須恵器 坏蓋	①15.0 ② ③3.1	扁平な摘み、身受けの返りのある口縁部。摘み部大半欠損。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	外面天井部に ヘラ記号
第40図5-15	5号土壙	須恵器 坏蓋	①15.0 ② ③	摘み欠損。浅い身受けの返りの口縁部。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	反転実測
第40図5-16	5号土壙	須恵器 坏蓋	①18.7 ② ③	摘み欠損。天井部と体部の境は屈折。口唇部は嘴状に肥厚。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	
第40図5-17	5号土壙	須恵器 坏身	① ② ③	蓋受けのある坏身。7の土師器甕と共に。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	小片、混入土器。
第40図5-18	5号土壙	須恵器 坏	①13.2 ②10.4 ③3.4	口縁部僅かに外反。	外・内一ヨコナデ 外底一回転ヘラ削り	
第40図5-19	5号土壙	須恵器 高台付椀	①12.9 ②8.6 ③3.6	口縁から体部にかけては直線的で、底部にかけては屈折する。高台は低い。	外底一回転ヘラ削り 外・内一ヨコナデ	
第40図5-20	5号土壙	須恵器 高台付椀	①12.6 ②8.0 ③4.1	特徴は19と同じ	外底一回転ヘラ削り 外・内一ヨコナデ	

出土土器観察表

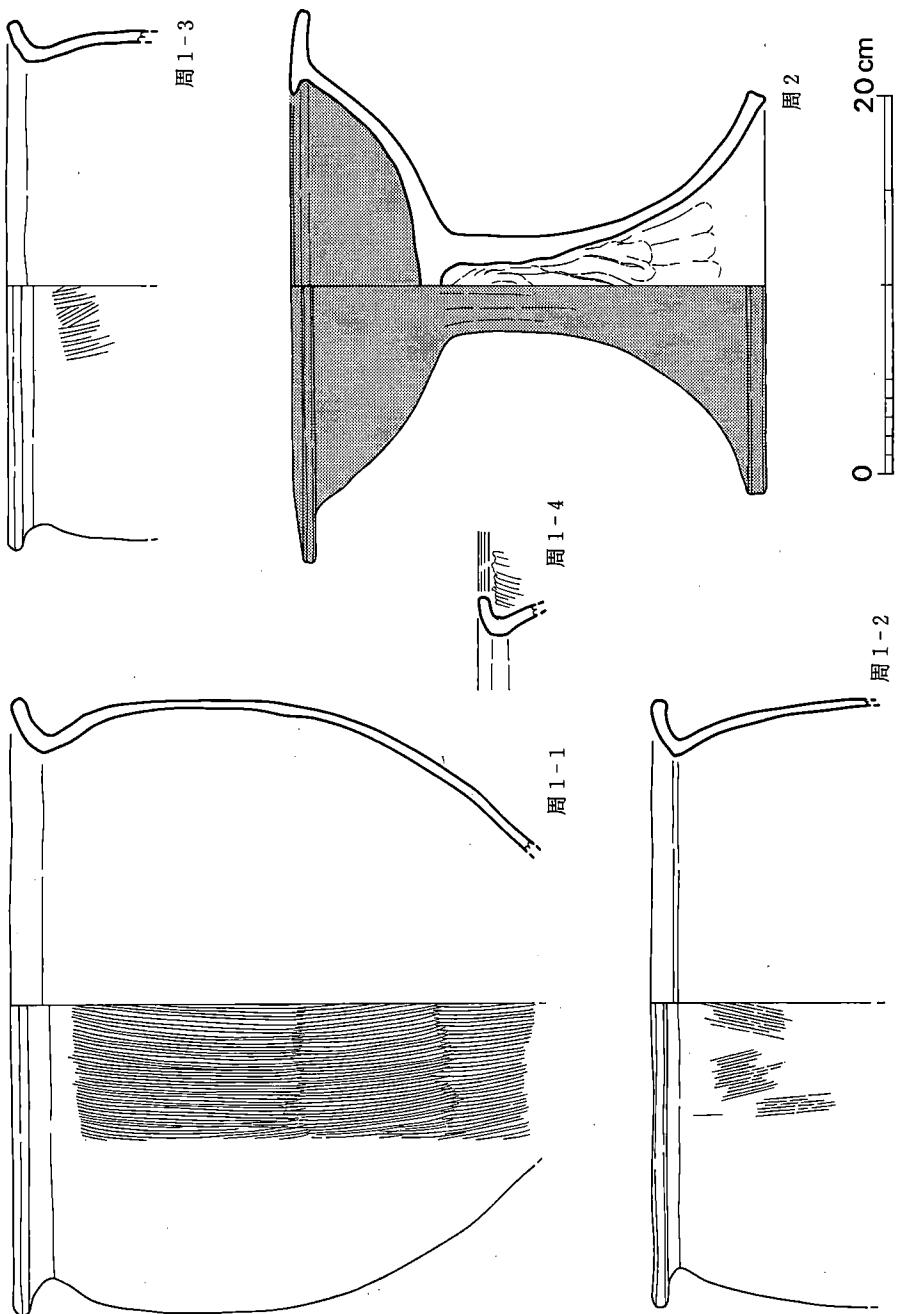
①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第40図 5-21	東台地 5号土壙	須恵器 高台付椀	①14.3 ②10.0 ③4.9	口縁が僅かに外反。体部から底部にかけては丸みがある。脚は低く開く。	外底一回転ヘラ削り 外・内-ヨコナデ	
第40図 5-22	5号土壙	須恵器 高台付椀	①15.6 ②9.7 ③5.9	口唇部若干外反。体部は直で、屈折して底部に統く。高台は低い。	外底一回転ヘラ削り 外・内-ヨコナデ	
第40図 5-23	5号土壙	須恵器 高台付椀	①17.0 ②9.6 ③5.9	口縁から体部まで直線的で底部にかけては屈折し稜がつく。高台は低い。	外底一回転ヘラ削り 外・内-ヨコナデ	
第40図 5-24	5号土壙	須恵器 高台付椀	①16.2 ②9.6 ③5.6	口縁から体部まで直線的で底部にかけては屈折し稜がつく。高台は低い。	外底一回転ヘラ削り 外・内-ヨコナデ	焼成が悪い。 底部外面に板圧痕あり
第41図 6-1	6号土壙	土師器 甕	①30.0 ② ③	口縁部を厚くつくり反り 気味に外反。	外-ナデ 内-ヘラ削り	
第41図 6-2	6号土壙	須恵器 坏身	①15.7 ② ③3.9	僅かに外反する口縁部。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内-ヨコナデ	底部内外面に 薄いヘラ記号 あり
第41図 7-1	7号土壙	土師器 飯把手	① ② ③	把手下部に穿孔あり。		
第41図 7-2	7号土壙	須恵器 坏蓋	①13.5 ② ③2.5	体部に1条の沈線	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内-ヨコナデ	
第41図 7-3	7号土壙	須恵器 坏身	①11.5 ② ③		外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内-ヨコナデ	外面灰かぶり
第41図 7-4	7号土壙	須恵器 坏身	①11.1 ② ③3.8		外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内-ヨコナデ	完形品 外面底部ヘラ 記号
第41図 7-5	7号土壙	須恵器 坏身	①11.3 ② ③	器壁が厚い	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内-ヨコナデ	
第41図 7-6	7号土壙	須恵器 坏身	①11.4 ② ③		外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内-ヨコナデ	
第41図 7-7	7号土壙	須恵器 坏身	①9.5 ② ③	小型の坏身	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内-ヨコナデ	
第41図 7-8	7号土壙	須恵器 坏身	① ② ③	口縁部直に立ち上がる。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内-ヨコナデ	
第41図 8-1	8号土壙	土師器 甕	①12.8 ② ③	鋭く外反する短い口縁部 肩部は張る。	外-ナデ 内-ヘラ削り	外面煤が付着

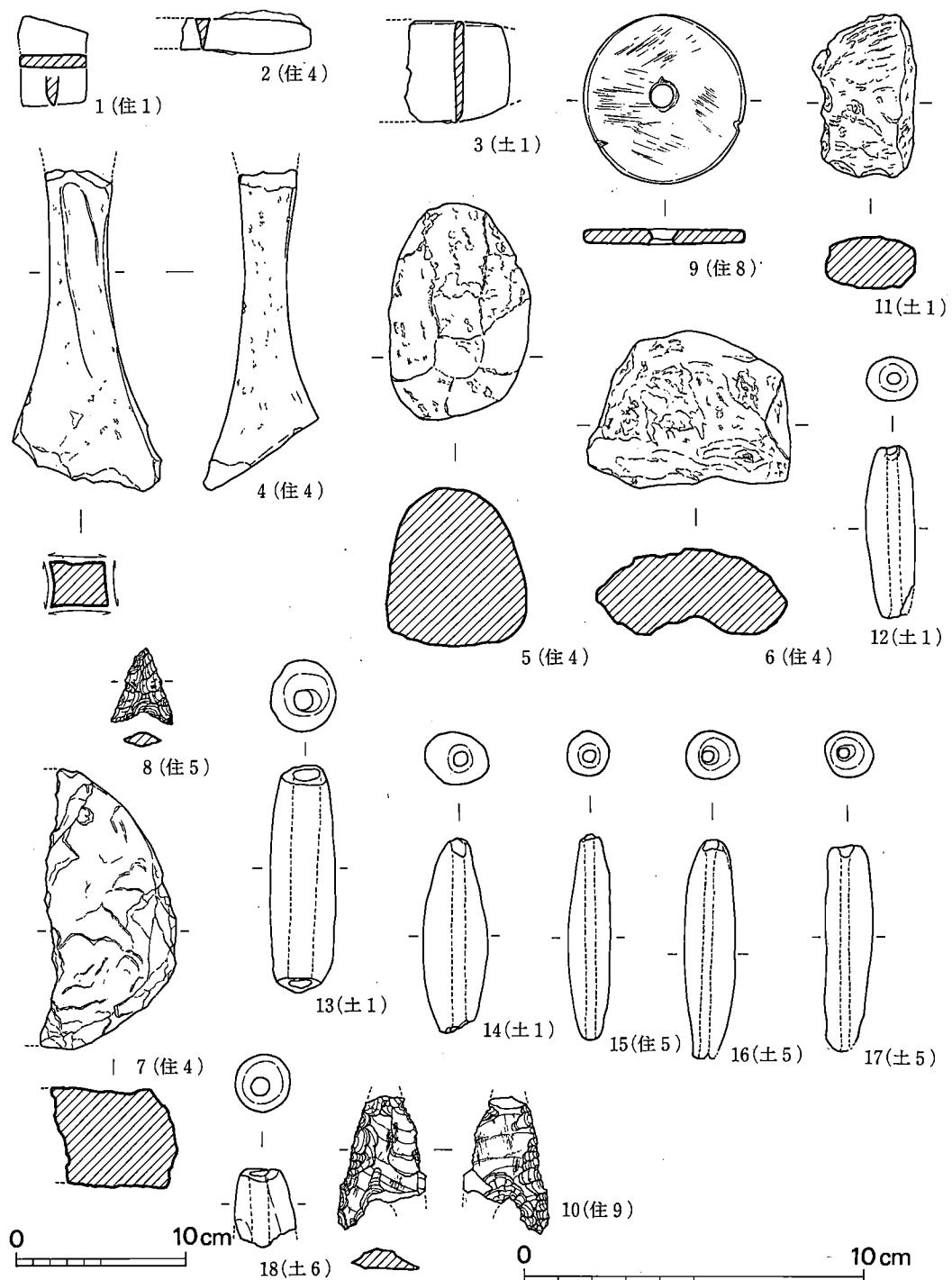
出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第41図8-2	東台地 8号土壙	須恵器 坏蓋	①16.9 ② ③3.6	擬宝珠の摘み。口唇部は 嘴状に屈折	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	天井部内面に ヘラ記号
第41図8-3	8号土壙	須恵器 高台付碗	①12.4 ②10.4 ③5.2	高めの高台。体部から底 部にかけて丸くつくる	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	焼成が悪い
第42図9-1	9号土壙	土師器 甕	① ② ③	「く」字状に外反する長 い口縁部	内一頸部下からヘラ 削り	
第42図9-2	9号土壙	土師器 大型甕	① ② ③		内・外一磨滅が著し い	
第42図9-3	9号土壙	土師器 高坏か二重 口縁壺	① ② ③	小片のため器種がはつき りしないが、高坏の可能 性が強い。	内・外一ヨコナデで ハケが残る	
第42図9-4	9号土壙	土師器 坏	① ② ③		外一削りとナデ 内一ヘラ磨き	
第42図9-5	9号土壙	土師器 坏	① ② ③			
第42図9-6	9号土壙	須恵器 坏身	①11.4 ② ③	口唇部が尖り気味。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	
第42図9-7	9号土壙	須恵器 坏身	①11.7 ② ③	口唇部が段をなす。器高 が高い。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	
第43図1-1	1号周溝状遺構	弥生土器 甕	①32.6 ② ③	「く」字状に外反する口 縁に肩部から胴部が張る 底部欠損	外一ハケ 内一ナデ	外面煤が付着
第43図1-2	1号周溝状遺構	弥生土器 甕	①32.2 ② ③	「く」字状に外反する口 縁、口唇部が肥厚。内面 頸部の稜不明瞭。	外一ハケ 内一ナデ	外面広範囲に 煤が付着
第43図1-3	1号周溝状遺構	弥生土器 甕	①28.0 ② ③	「く」字状に外反する短 い口縁部。頸部内面の稜 は不明瞭。	外一ハケ 内一ナデ	
第43図1-4	1号周溝状遺構	弥生土器 甕	① ② ③	短い口縁の小型甕の小片	外一ハケ 内一ナデ	
第43図2	2号周溝状遺構	弥生土器 高坏	①29.2 ②21.4 ③25.0	鋤先口縁部。脚据部はヨ コナデにより肥厚。	外と坏部一丹塗り磨 研 内一絞り痕	器面が風化し 丹がほとんど 剥離



第43図 1号・2号周溝状遺構出土土器実測図 (1/4)



第44図 東台地出土鐵器・石器・土製品実測図 (1/2・1/4)

第2節 西台地の調査

西台地（第1次調査は昭和59年度に、第2次調査は昭和60年度に実施）は、他の工事に先行して路線の南側に工事用道路を建設するため、工事用道路部分から調査を開始した。すなわち、1号～13号竪穴住居跡等が分布する部分である。

工事用道路部分の遺構検出が終了した時点で写真撮影を行い、遺構実測を開始した。一方では、調査区西側から遺構検出を行い、隨時、写真撮影及び遺構実測を行った。このように、南・西側から遺構検出を行い、遺構の資料化を継続する過程で、調査担当者（児玉）の不注意により、実測図、遺構番号を付した図面及び写真フィルムを保管するプレハブを火災により消失する事態を招いた。

したがって、以下の報告では遺構番号が不連続であったり、出土遺物の所属遺構が記録上は明確であっても図面では特定できない場合が含まれている。個別遺構を1/10縮尺で実測した図面及び遺物取り上げの際のメモ的図面も消失した。よって、個別図を報告していない遺構もあることをあらかじめお断りしておく。

報告する遺構は、竪穴住居跡48軒、掘立柱建物跡8棟、土壙77基、井戸8基、周溝状遺構4基、溝12条である。

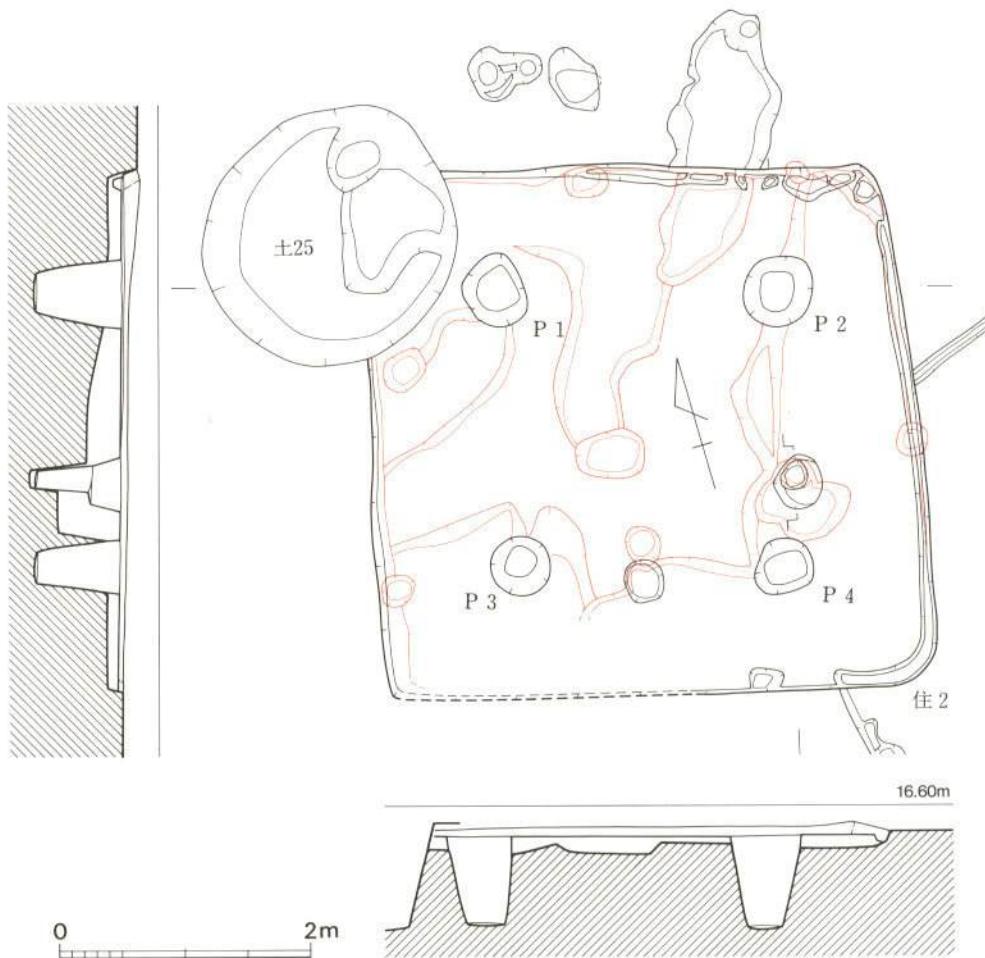
竪穴住居跡は、弥生時代23軒、古墳時代21軒で、所属時期を特定できないものが4軒である。弥生時代の住居はほとんどベット状遺構を付設している。また、古墳時代後期の住居は北側の壁にカマドを付設する。主に後世の流入により、瓦片が混入する住居がある。

掘立柱建物跡のうち、プランを確認できるものはクラと考えられる総柱のものが多く、比較的大型の建物と思われるものは1棟（7号）である。

土壙は古墳時代後期～中世の間、間断的に営まれており、瓦片を出土するものが多い。

井戸や溝から多くの瓦片が出土している。また、東台地東側の大溝の調査では、木簡をはじめとして6世紀末頃のものを含む墨書き土器、多量の瓦や木製品が出土しており（註1）、大溝とともにこの遺跡は、直線距離で北西200m程に位置する井上廃寺との関係が極めて高い。

註1 福岡県教育委員会『井上薬師堂遺跡』（「九州横断自動車関係埋蔵文化財調査報告書」-10-）



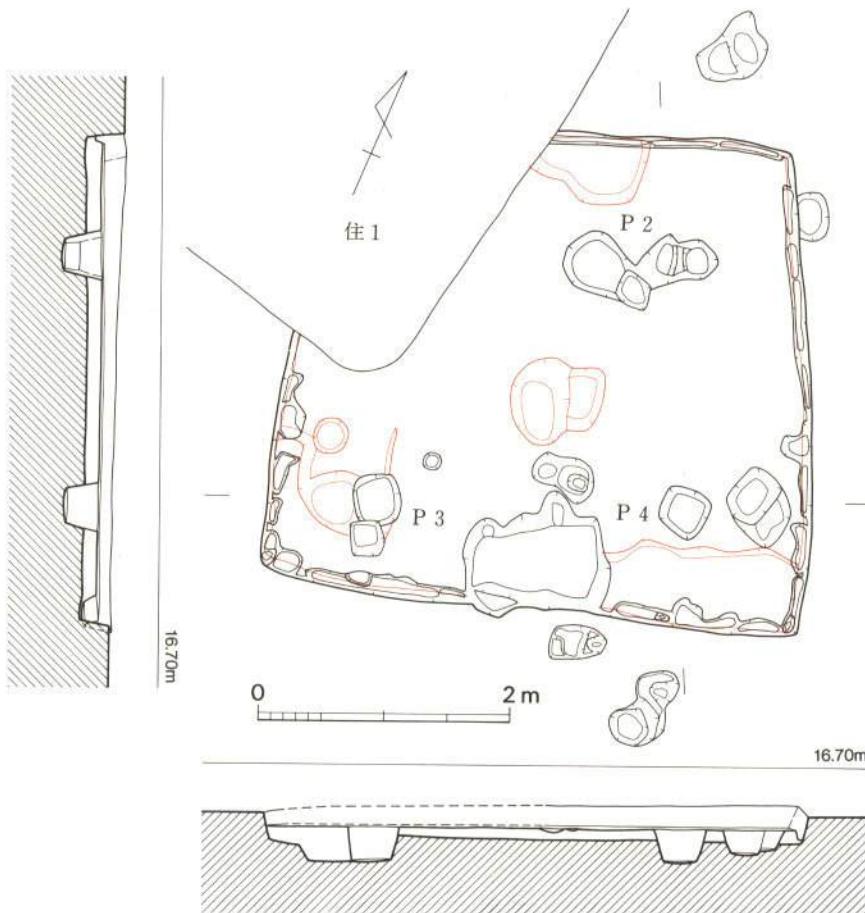
第45図 1号竖穴住居跡実測図 (1/60)

(1) 竖穴住居跡

1号竖穴住居跡 (図版14-(1), 第45・106図)

調査区の南西隅に検出した。2号住居を切り、25号土壙に切られる。竖穴部は一辺の長さ約4mの方形に近い菱形を呈する。壁高は最も遺存状態の良い部分で10cmを測り、南壁の西半部は削平されている。壁小溝は東壁と北壁の東半部に検出した。主柱穴(P1~P4)は貼床面で検出し、すでに主柱は抜き取られていた。カマドは北壁の中央部に付設していたと想定される。貼床下の中央土壙は存在しない。

出土遺物は、覆土中において検出した弥生土器・土師器・須恵器の破片資料である。本住居に伴う出土品は皆無である。なお、小型甕(2)は、カマドの支脚であろう。



第46図 2号竖穴住居跡実測図 (1/60)

2号竖穴住居跡 (図版14-(1), 第46・106図)

調査区の南西隅に検出した。北西隅を1号住居に切られる。竖穴部は南辺の長さ4.3m同東辺3.8mを測り、略台形を呈する。壁高は最も遺存状態の良い部分で15cm程を測る。壁小溝は一巡するようである。主柱穴(P2～P4)は貼床面で検出し、すでに主柱は抜き取られていた。カマドは北壁の中央部に付設していたと想定される。貼床下の中央土壙は存在しない。

出土遺物は、覆土中において検出した弥生土器・土師器・須恵器の破片資料、不明鉄製品、及び砥石、貼床下層埋土から土錐、砥石が出土した。

出土遺物

土製品 (図版54, 第152図)

土錐(2)両端を欠失し、器面も摩滅する。砂粒が目立ち、焼成良好で暗灰色を呈する。

鉄製品

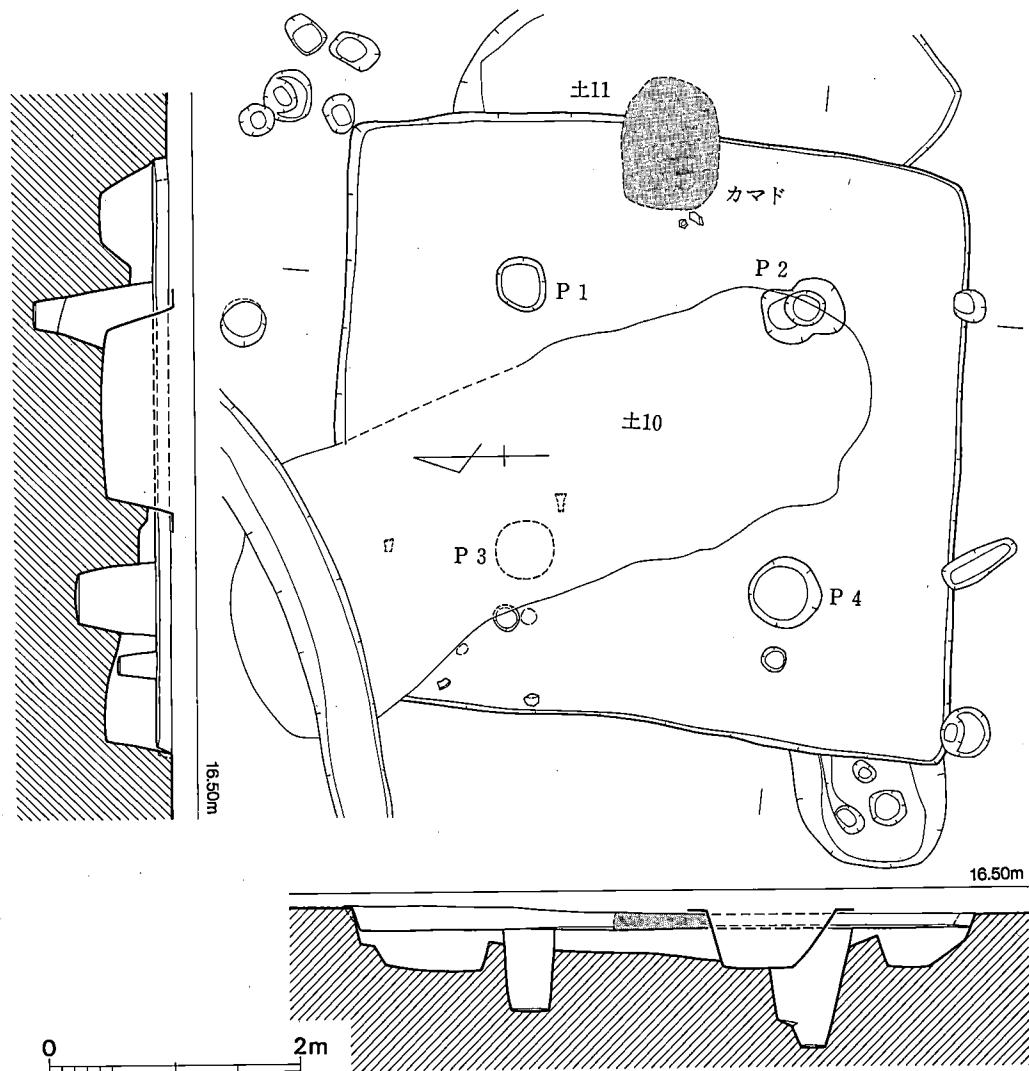
鉸具状のものかと思われるが、錆がひどく不明である。

石製品（図版54、第152図）

砥 石(1) 板岩製の仕上砥で4面とも使用している。床面で検出。

3号竪穴住居跡（図版14-(1), 第47図）

調査区の南西隅に、1・4号住居に挟まれた状態で検出した。大部分を10号土壌に切られ、9号住居及び11号土壌を切る。竪穴部は現存する壁で長辺4.9m、短辺4.6mを測るやや長方形に



第47図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

近い方形を呈する。壁高は最も遺存状態の良い東壁で20cmを測る。壁小溝は検出されていない。主柱穴（P1～P4）は貼床面で検出され、すでに主柱は抜き取られていた。カマドは東壁中央に検出され、他の住居とカマドの付設位置が異なっている。貼床をはずし、下層遺構を調査した結果、中央土壙は10号土壙に切られて不明であるが、壁際土壙を検出した。それは、竪穴部の北東隅・南東隅において検出した。ともに長方形に近いプランを示し、北東隅の壁際土壙の底面は貼床上面からの深さ25～30cm、南東隅壁際土壙は同じく45cm前後である。また、南壁に平行して溝状の掘込みを検出した。この種の土壙及び掘込みは他の遺跡においても検出されている。

出土遺物は他の住居と比較して量が多く、多彩である。すなわち、弥生土器・土師器・須恵器・磁器・瓦・鉄斧である。これらは、覆土中や貼床下層からの出土資料が主体を占め、床面直上で検出した資料であっても層位的には本住居に伴う資料である確証はない。

出土遺物

土 器（図版55、第106～108図）

若干量の弥生土器は図示していない。主体を占めるのは土師器である。6世紀後半から7世紀後半の土器が主体を占める。11はカマド内から出土しており、また、10はカマドの支脚で床面から出土している。ただし、10が本住居に伴う確証はない。

瓦（図版70、第155図）

覆土中から平瓦の破片が1点出土している。詳細は後述する。

鉄製品（図版55、第152図）

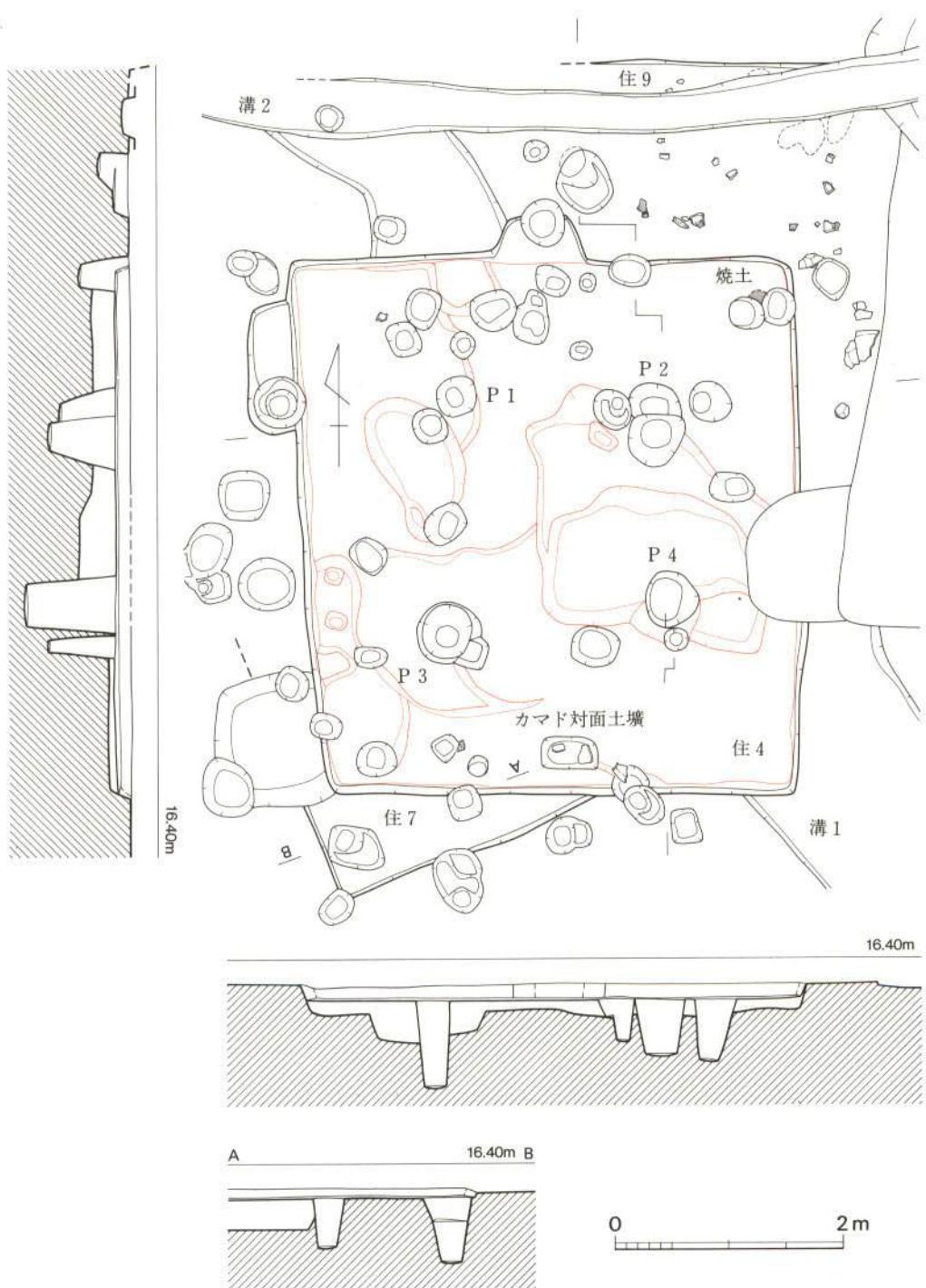
鉄 斧(2) 貼床下層から検出した破片資料で、図上復元をしたが全形は不明である。

不明鉄器(1) 幅1.7m、現在長6.2cm、厚さ2mmの鉄片で、折れ曲がっており、詳細は不明である。

4号竪穴住居跡（第48図）

調査区の南西隅、3号住居に西接した状態で検出した。竪穴部の一辺は北壁がほぼ4.4m、南壁がほぼ4.1m、東西壁がほぼ4.6mを測る方形を呈する。カマドは北壁に付設されていた。貼床面で主柱穴（P1～P4）を検出したが、すでに主柱は抜き取られていた。壁小溝は存在しないが、南壁際の中央にカマド対面土壙を検出した。貼床をはずし、下層遺構を調査したところ、主柱穴（P1～P2）に切られて土壙を検出した。埋土は貼床下層の他の部分の埋土と同様に、暗褐色土に地山の黄褐色の粘質土のブロックを混入したものであった。

また、北東隅の床面上に焼土を検出したが、この住居が火災に遭ったことを示すものではなく、住居の廃棄時に捨てられたものと思われる。



第48図 4号・7号・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

覆土から、弥生土器・土師器・須恵器・砥石・權を検出した。

出土遺物

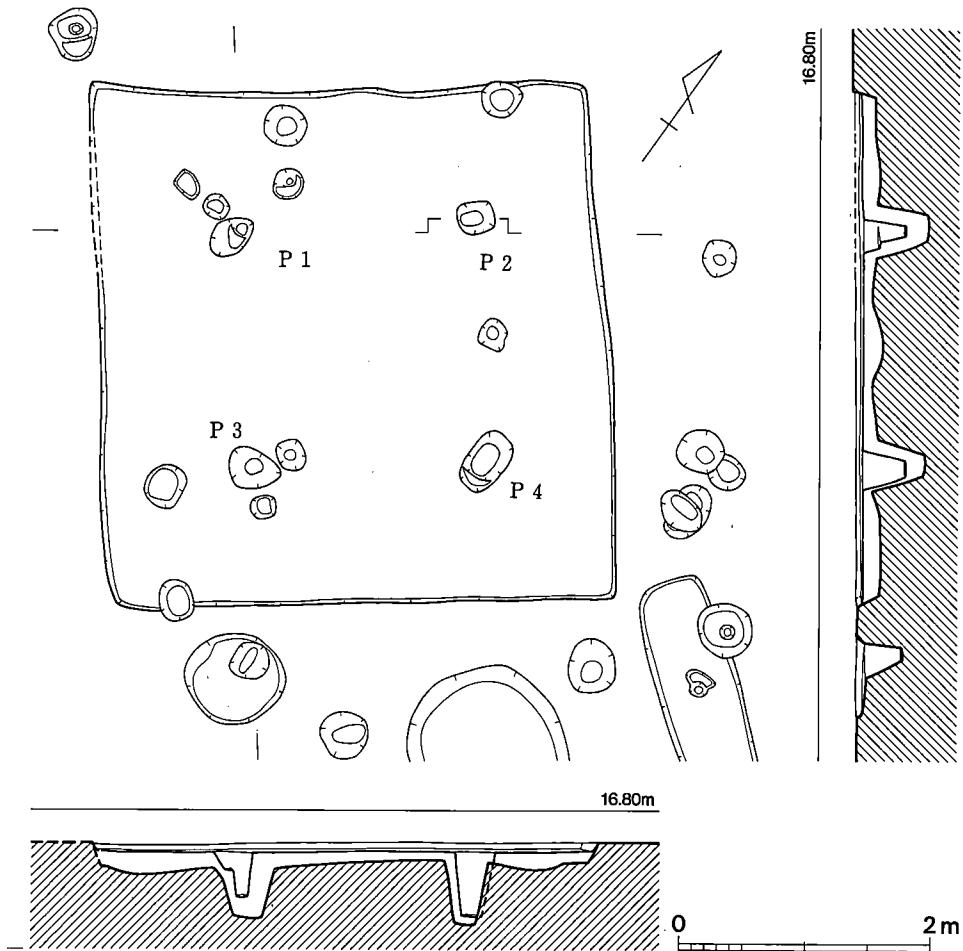
土 器 (図版55, 第109・110図)

壺蓋1カマド内から、甌片21・23はカマド対面土壙付近の床面から、壺蓋6は貼床中から、甌26は貼床下層から、その他の土器は覆土から出土した。この住居の廃絶時期を示すのは壺蓋1であり、7世紀前半の所産であろう。

石製品 (図版55, 第152図)

砥 石(1) 軟質砂岩製の仕上砥で、4面とも使用している。

權(2) 雲母片岩製のほぼ完形品で、一部を欠く。ほぼ台形で、上辺の幅2.8cm, 下辺の幅3.6cmでやや弧状を呈する。中央部で長さ5.8cmである。厚さは上部で1.4cm, 下部で2.1cmである。

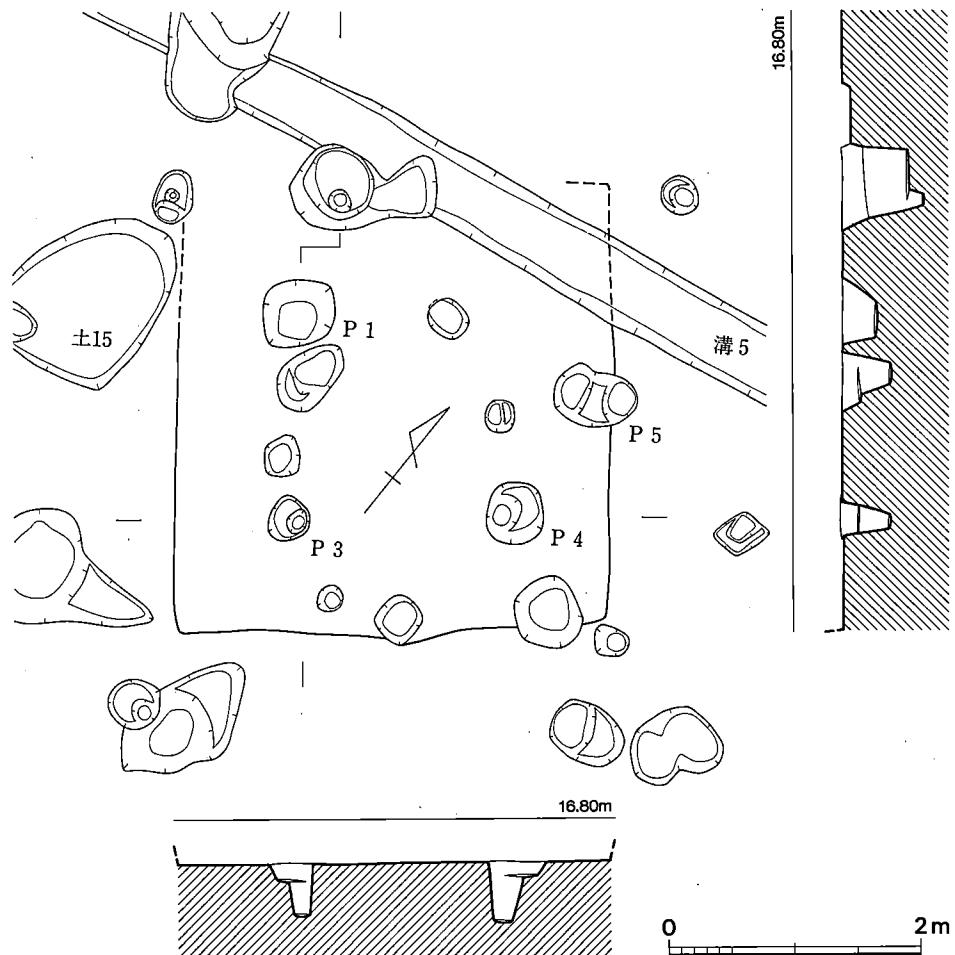


第49図 5号竪穴住居跡実測図 (1/60)

上部の左に偏って、径 6 mm弱の孔を穿つ。重量は87gである。

5号竪穴住居跡 (図版15, 第49・111図)

調査区の南西部に位置し、西半部を溝3によって切られている。竪穴部は一辺が4m程の方形を呈する。周壁は約5cmの高さしか遺存しない。主柱穴(P1~P4)は貼床下で検出した。壁小溝は存在しない。



第50図 6号竪穴住居跡実測図 (1/60)

弥生時代終末期～古墳時代初期の土器が覆土から少量出土した。

6号竪穴住居跡 (第50図)

調査区の南西部、5号住居の北西に位置する。竪穴部の遺存状態は悪く、貼床は削平されて

いた。4つの主柱穴（P1～P4）のうちP2の位置にあるべきものが検出されなかった。

先述の理由で出土遺物も少なく、図示できるのは1点のみである。

出土遺物

土 器（第111図）

P5から出土した弥生時代終末期ころの鉢で、ほぼ完形品である。

7号竪穴住居跡（第48図）

調査区の南西隅に、4号住居に大きく切られた状態で検出した。竪穴部も南隅部のみしか検出できず、また、4号住居により深く切られているため、主柱穴も特定できる状態ではない。

出土遺物は無きに等しい。

8A・B号竪穴住居跡（図版15・55、第51・111・112図）

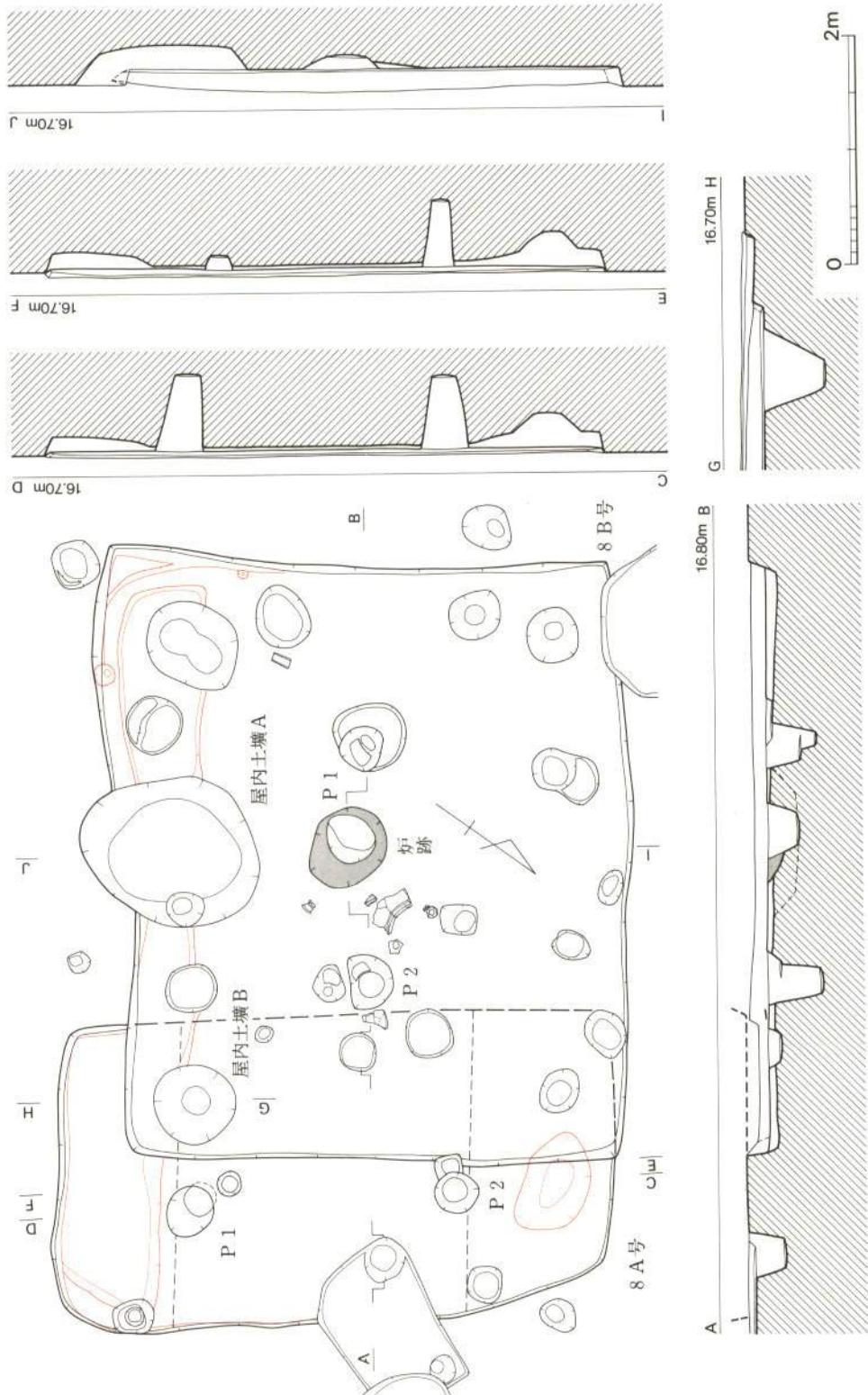
調査区の南東に検出した。遺構検出の時点で1軒の住居として調査を進めたため、出土遺物は8号住居として取り上げている。1軒の住居と誤認した理由は、重複した部分のうち、A号の南東側短壁がB号の同長壁から60cm程張り出している部分をB号の出入口と想定したためである。調査の結果、2軒の住居が紛らわしい形で重複していることが判明し、古い方をA、新しい方をBとして以下に説明する。

A号住居の竪穴部は長辺4.9m、短辺2.7m程の長方形プランを呈し、南西部をB号住居に削平される。その際、B号の方をA号床面より深く掘り下げている。主柱穴はP1・P2である。壁高は5～10cm程しか遺存せず、ベッド状遺構は明確には検出していない。よって、南東側短壁際の貼床下層の掘り込みの状態から、ベッド状遺構を平面的に破線で推定復元した。

B号住居の竪穴部は、長辺5.4m、短辺4.4m程の正方形に近いプランを呈する。貼床面で主柱穴（P1・P2）、炉跡、屋内土壙（A・B）を検出した。このプランの住居はコ字形のベッド状遺構を付設するのが通例であるが、本住居では、検出できなかった。屋内土壙は、長側壁中央にひとつ（A）設置する例が多いが、まれな例として竪穴部の隅にさらにひとつ（B）設置することがあり、本住居もそのまれな例に属する。また、屋内土壙（A）は竪穴部長側壁からはみ出した状態で掘り込まれている。

竪穴部のプランや柱配置等から、住居のタイプ面から、東台地1号住居の直前に位置する住居だと思われる。

出土遺物は、弥生土器を中心に土師器がある。1・4・7・10・11・14・17は床面から、6・15は屋内土壙A埋土中から、13は貼床下層から、他は覆土中から出土した。しかし、本住居に直接伴う資料はない。



第51図 8A号・8B号竪穴住居跡測図 (1/60)

詳細は観察表によられたい。

9号竪穴住居跡 (図版55, 第48・113図)

調査区の南西隅に、3・4号住居及び1・2号溝に大きく切られた状態で検出した。この部分は大きく削平されており、貼床さえ一部に残る程度である。竪穴部の北壁の一部を2号溝の北側に検出したが、他の壁についてはまったく検出できる状態ではなく、本住居竪穴部のプランは確定できない。したがって、主柱穴も特定できる状態ではない。貼床が一部遺存しており、土器片が散乱していた。

出土遺物は覆土及び床面から検出した弥生土器である。中期後半のものが主体を占め、丹塗土器が含まれる。

詳細は土器観察表によられたい。

10号竪穴住居跡 (図版16, 第52・114図)

8A・B号住居の東にあり、11号住居を切り、13号住居に平行して営まれている。竪穴部は8B号住居と同様に正方形に近い方形プランを呈し、長辺5.8m、短辺4.4m～4.6mを測る。北東側の短側壁の北側に出入り口と推測する張出部がある。

貼床面は31号土壙が一部を破壊するが、おおむね遺存する。竪穴部プランと通常のこのタイプの住居の柱配置の関係から、主柱穴はP1・P2であろうと推測する。主柱穴の間に炉跡を検出した。炉跡の東に屋内土壙が南東側長側壁からはみだした状態で掘り込まれている。不整形なのは壁の崩壊によるものであろう。出入り口と推測する張出部は、幅1.68m、奥行0.75mを測り、P3～P5はそれに関係する柱穴であろうと推測する。また、P6・P7は、壁の中央付近に壁と並行した配置状況から、本住居に関係する何らかの施設の柱穴ではないだろうか。

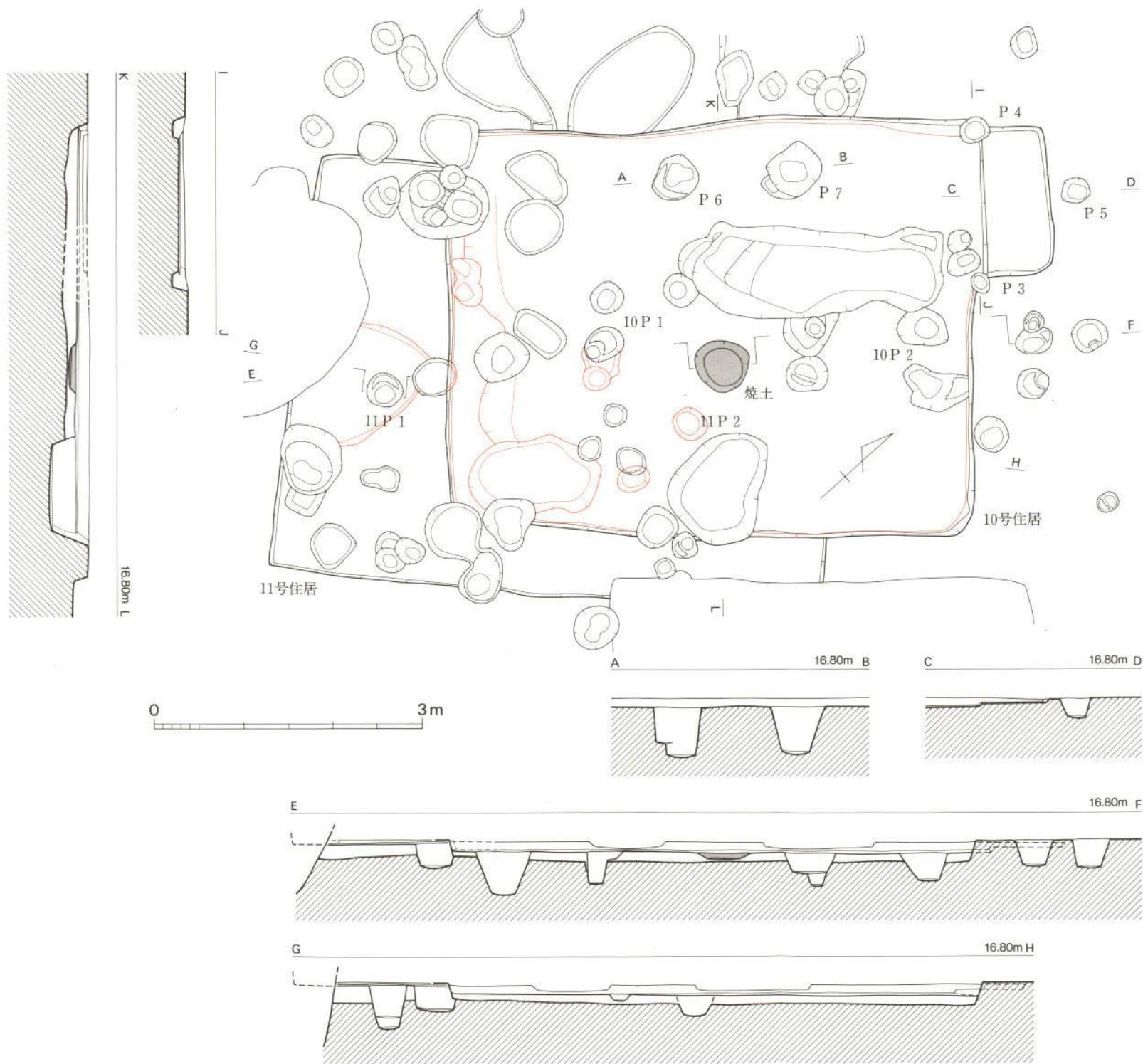
出土遺物はごく少量の弥生土器片で、1は床面から、2は屋内土壙の下層埋土から検出した。いずれにせよ、本住居に直接伴うものではない。

11号竪穴住居跡 (図版16, 第52・114図)

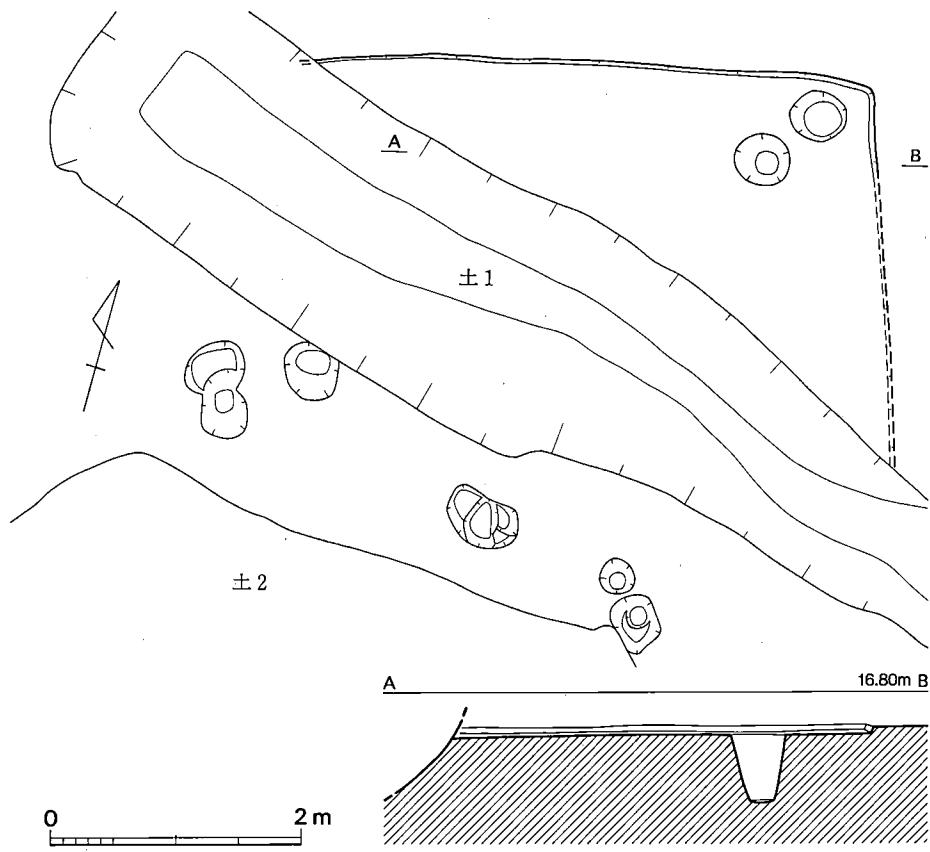
8A・B号住居の東にあり、10・13号住居及び28号土壙から大きく切られている。遺存する竪穴部から判断すれば、長壁長6.2m、短壁長4.6m程であり、10号住居の竪穴部よりも長方形に近いプランを呈する。主柱穴はP1・P2であろうと推測する。屋内土壙や炉跡は検出していない。

出土遺物は弥生土器及び古墳時代後期に属する土師器甕形土器の破片資料である。本住居に直接伴う土器は検出していない。

詳細は土器観察表によられたい。



第52図 10号・11号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第53図 12号竪穴住居跡実測図 (1/60)

12号竪穴住居跡 (図版16, 第53・114図)

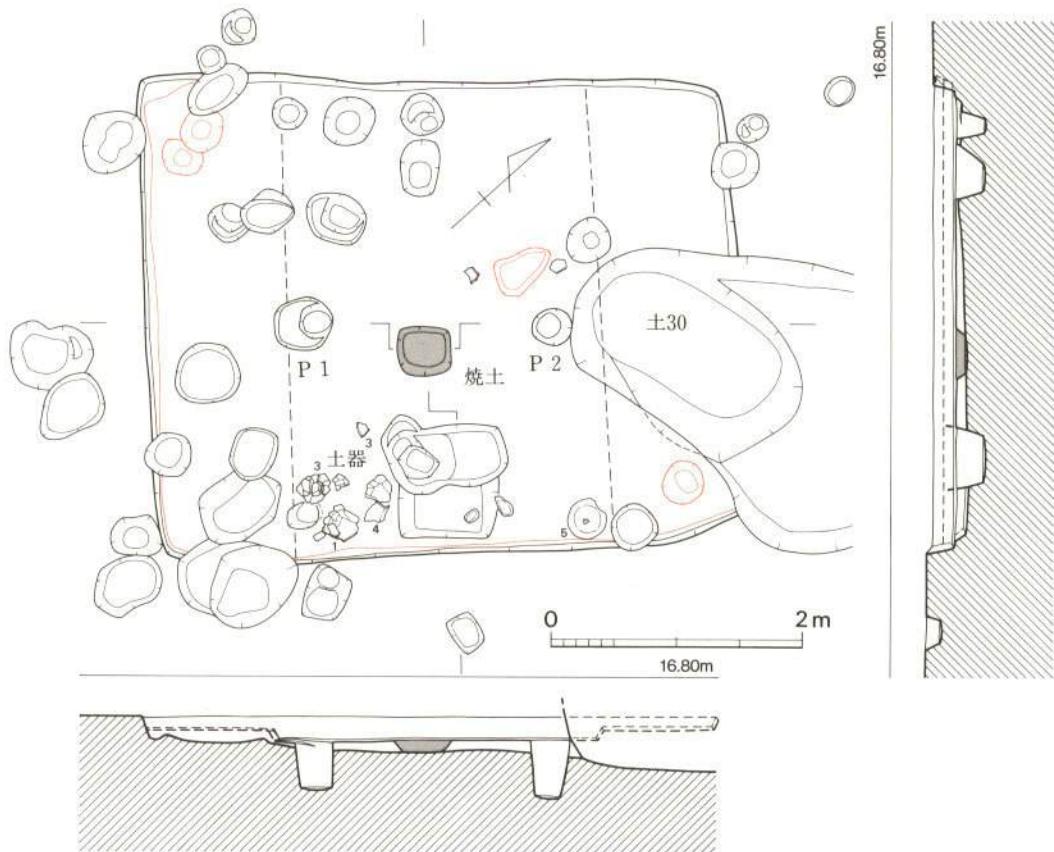
調査区の西側に検出した。この部分を含めて周辺はかなり深く削平を受けており、竪穴部はほとんど遺存しない。貼床面下層の東側壁の一部と北側壁が、かろうじて残っており、竪穴住居跡と判断した次第である。

先述のように、貼床は遺存しない。竪穴部のプランが不明であり、また、出土土器がないので所属時期が不明であるため、柱配置を推測することができず、主柱穴の特定は困難である。

上述のように、出土遺物はない。

13号竪穴住居跡 (図版16, 第54図)

10号住居の東に接するように検出した。西側長壁は11号住居を切り、北東短壁は30号土壙に大きく切られる。竪穴部の中央付近では貼床面が遺存するが、短壁側はベッド状遺構を図化できる状態ではなかったので、破線により、推定復元している。主柱穴はP1・P2であろうと推



第54図 13号竪穴住居跡実測図 (1/60)

測する。その間に炉跡を検出した。屋内土壤は、炉跡側の後世のピットが破壊しているが、ほぼ方形を呈し、壁から10cm程離れて掘り込まれている。

出土遺物は弥生土器で、ほとんどが投棄されたものである。

出土遺物

土器 (図版55, 第114図)

2は覆土から、5は床面に密着して、1・3・4は住居廃棄後の流入土層中から検出した。よって、壁近くで検出したものは床面との間層が厚く、3はほぼ床面近くで検出した。これら3個体の土器は、本住居廃絶直後頃に捨てられた土器であろう。5の坏部はこの状態で完形品であり、裏返されて床面に密着した状態で検出した。脚部を欠失するが、打ち欠いたものであろう。本住居に伴う可能性が高い唯一の資料である。

14号竪穴住居跡

(図版16, 第55図)

調査区のほぼ中央付近に検出した。竪穴部の南壁を20号土壌が、北隅付近を5号溝が切っている。この部分及び周辺の削平が著しいため、竪穴部の遺存状態が悪く、平面プランは破線で推定復元している。

本住居はカマドを付設する古墳時代後期の一般的な住居と思われる。カマドの位置は判然としないが、北東壁に付設されていたものと想定して、主柱穴の番号は便宜的にP1・P2とした。しかし、カマドの位置が北西壁に変われば、主柱穴番号

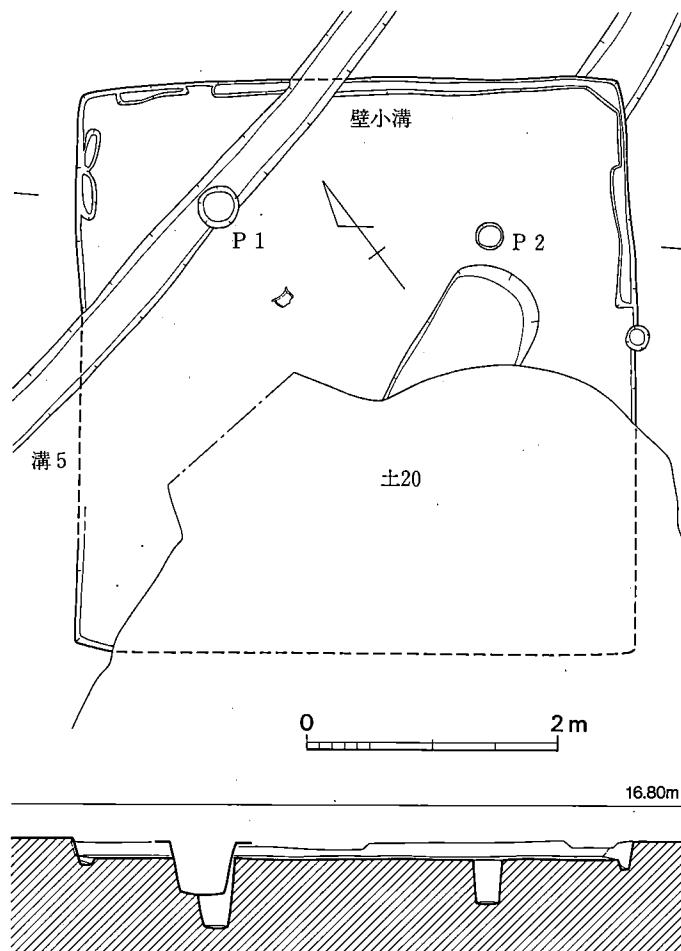
はP1がP2に、P2がP4に変更される。

竪穴部の一辺の長さは4.4m程で方形プランを呈する。壁小溝は壁が遺存する部分に残存している。

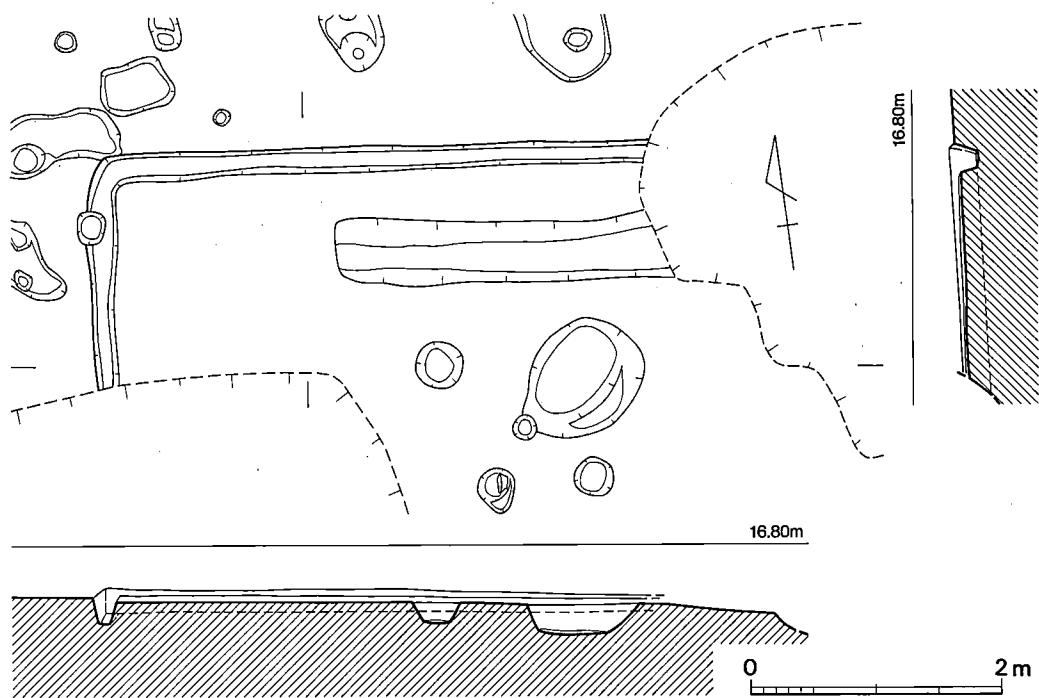
出土遺物は、弥生土器片、古墳時代後期の土師器片、陶磁器片等である。とくに、陶磁器類は、5号溝が切っていることと勘案すれば、遺構検出の段階での混乱があったことが原因であろう。とりあえず、中世以降の出土品については、ここに納めておく。

出土遺物 (第115図)

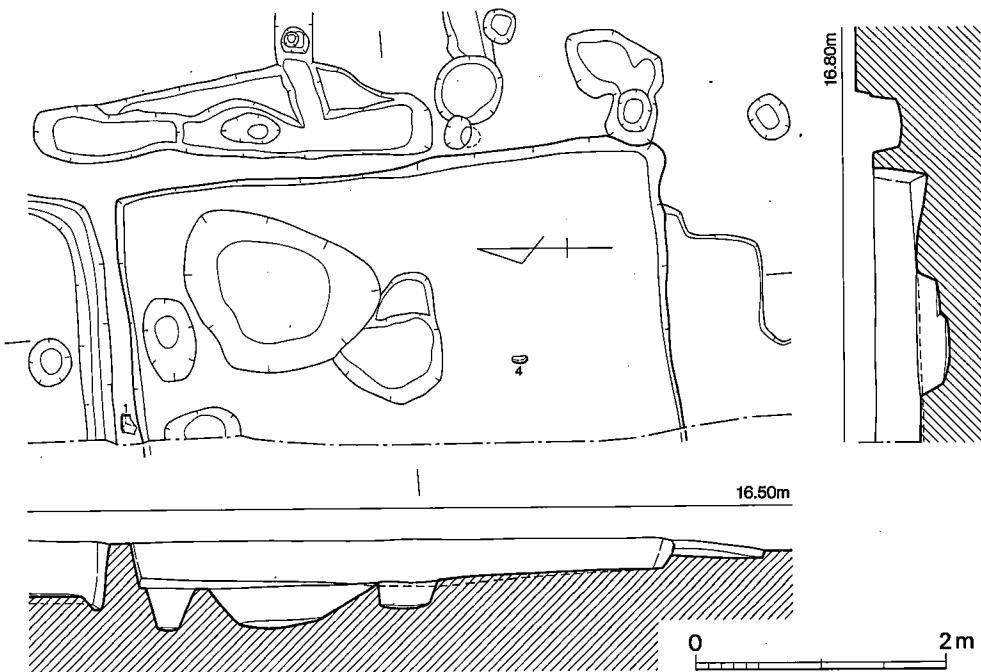
先述のように、中世以降の出土品については5号溝に所属し、弥生土器は混入品と考えられる。古墳時代後期の土師器片もこの住居に伴うものではない。



第55図 14号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第56図 15号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第57図 16号竪穴住居跡実測図 (1/60)

15号竪穴住居跡 (第56・115図)

土取りとはげしい削平を受け、竪穴部は一部分しか遺存しない。幅・深さとも20cm弱の壁小溝を検出したが、貼床はすでに削平を受け検出していない。また、柱配置は不明である。

出土遺物は、弥生土器及び土師器ま極小片で、本住居に直接伴う資料ではない。

16号竪穴住居跡 (第57図)

調査区の西端部に検出した。竪穴部の過半は田圃の段落ちのため欠失している。竪穴部の深さは30cm程で、貼床については不明である。主柱穴を特定できず、柱配置は不明である。

出土遺物は、弥生土器及び須恵器で、本住居に直接伴うものではない。

出土遺物

土 器 (第115図)

弥生土器(1・2) 1は竪穴部北壁のすぐ外に検出した。あるいは、18号住居に関係するものかも知れない。2は覆土から検出した。

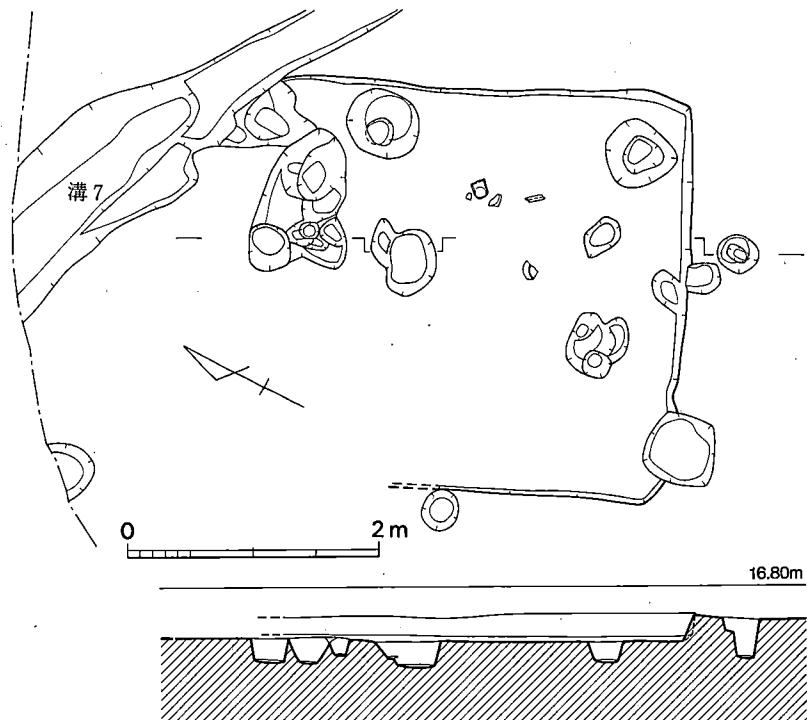
須恵器(3・4) 3は覆土から、4は床面で検出した。

17号竪穴住居跡

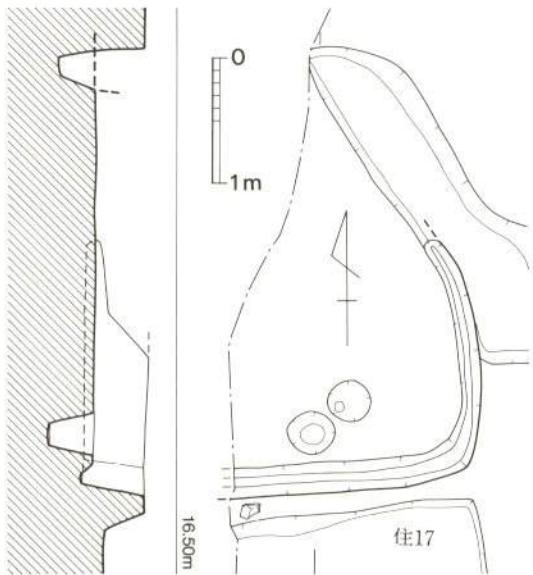
(第58・115図)

調査区の西端部に検出した。竪穴部の北半は削平され、北壁は検出できなかった。また、貼床も確認していない。主柱穴を特定できず、柱配置は不明である。

覆土及び床面で弥生土器を検出した。



第58図 17号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第59図 18号竪穴住居跡実測図 (1/60)

18号竪穴住居跡 (第59図)

調査区の西端部、16号住居の北、17号住居の西に接するかのような状態で検出した。東側の壁小溝が直線をなさずに弧を描いており、住居と考えるには不安だが、竪穴住居跡として報告する。

竪穴部の大半は16号住居と同じ理由により、調査区外の部分は欠失している。貼床は確認していない。壁小溝は、床面で幅16cm、深さ10cm程である。床面でピットを二つ検出したが、主柱穴の確認はなく、本住居の柱配置は不明である。

出土遺物は、弥生土器を中心に土師器等の極小片を検出した。



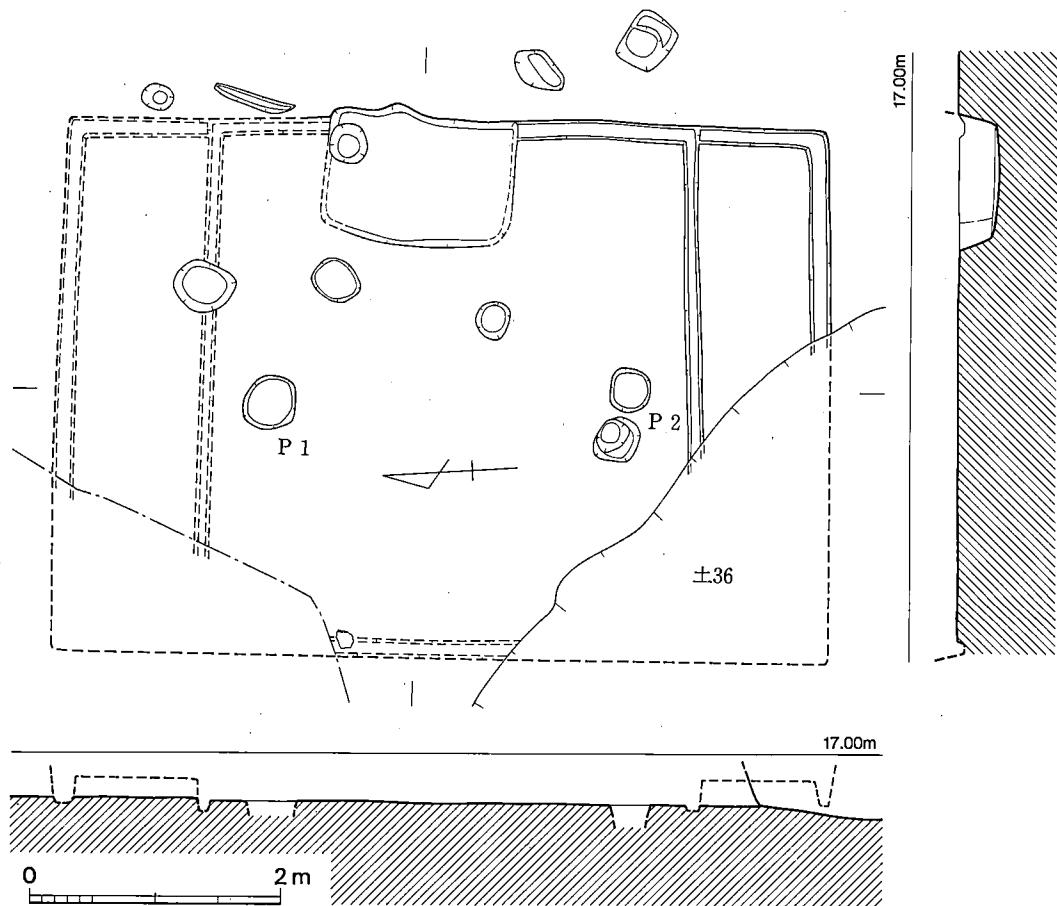
第60図 25号竪穴住居跡実測図 (1/60)

25号竪穴住居跡 (図版19, 第60図)

調査区の南半部に検出した。竪穴部の北半部は削平され、また、土壌に大きく切られ、推定復元図を掲載している。竪穴部は正方形に近い方形を呈すると考えられ、カマドの位置は特定できないが、主柱穴はP 1～P 3でP 4は下層のピット内にあったと思われるが確認していない。貼床は削平されており、遺存しなかった。古墳時代後期及びそれ以降の住居と考える。

26号竪穴住居跡 (図版19, 第61図)

削平の著しい部分であり、竪穴部は一部分しか検出しておらず、遺存部分と主柱穴 (P 1・P 2) 及び屋内土壌の配置から大胆に推定復元した図を掲載している。弥生時代終末頃の所産と考えられる。



第61図 26号竪穴住居跡実測図 (1/60)

西台地での第2次調査は、台地の東側約1/3の部分で、特に大溝（溝11）を中心とした東西付近である。

この付近の竪穴住居跡は、中世を中心とした生活遺構が営まれる時点でかなりの削平を受けてい るらしく、遺存状態が悪い。特に古墳時代の竪穴住居の残りが悪く、調査時点で既に床面が露出しており、カマドも基底部が遺存していたに過ぎない。以下、個別の住居について説明する。

27号竪穴住居跡

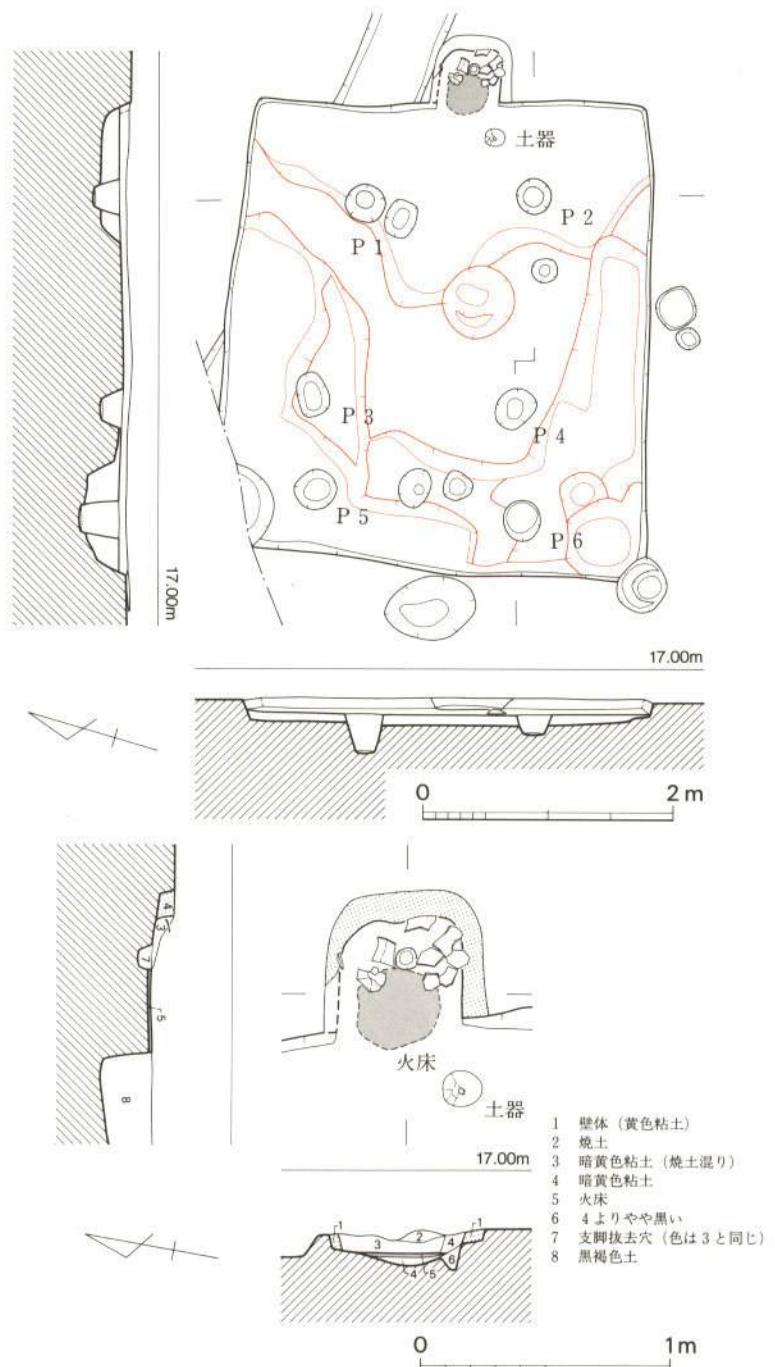
（図版20-(1)・(2)・

21-(1), 第62図）

調査区の北端で検出した竪穴住居跡である。他の遺構との重複は12号溝があり、住居の方が新しい。

住居の平面形状は長方形に近い形状をなし、その規模は長辺が3.80m・3.55m、短辺が3.10mと北側の未掘部分をを復原すると3.50mを測り、全体的には歪な感がある。

支柱穴はP 1-P 4 が



第62図 27号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/30・1/60)

考えられるが、P5・P6の柱穴も可能性があり、いずれにしても歪な配置である。各柱間はP1-P2が1.35m、P1-P3が1.60m、P1-P5が2.35m、P2-P4が1.70m、P2-P6が2.60m、P3-P4が1.60m、P5-P6が1.60mを測る。床面は貼り床をし、下層の状況は住居の中央部分を除いて掘り下げられている。

カマドは東側の短辺壁の中央部に突出した形で「U」字形に付設されている。内部には上部の壁体と思われる焼土を含んだ土黄色粘土が詰まっていた。カマドの壁際には黄色粘土が貼り巡らされ、その内側は真っ赤に焼けている。最終火床面の下層は灰などの搔き出しによる凹面がみられる。カマドの規模は幅が65cm、奥行きは60cmを測る。カマド内部には円形に火床が残り、中央部には支脚の抜去痕と思われる小さなピットを検出した。その周囲には煮炊きに使用した甕か甌の破片が散在していたが、いずれも胴部片で復原できていない。カマドの前面には底部を穿孔した壺が伏せた状態で出土している。

出土遺物は、住居の残りが悪いこともあって少なく、図示可能な土器は2個の壺があるに過ぎない。

出土遺物

土 器 (図版56、第116図)

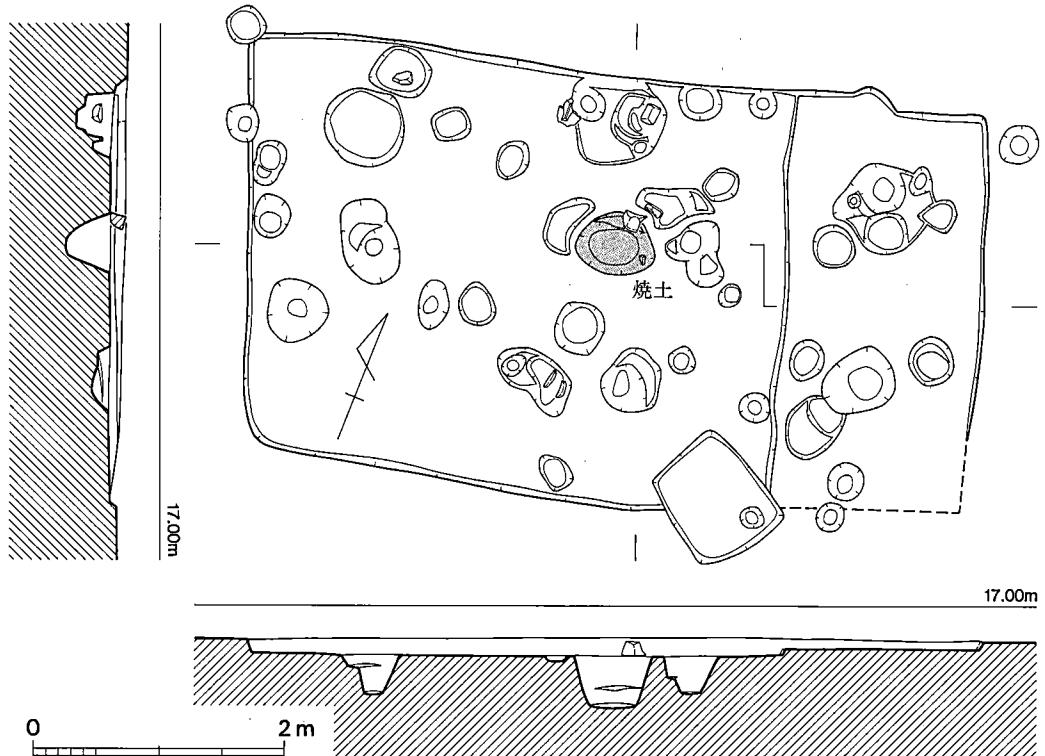
土師器 タイプの異なる壺が2点出土している。1は口縁部が屈折するタイプで精製土器である。2は底部に大きめの孔を穿つ浅い壺で、内外面に煤が付着していることから実際に使っていたと思われるが、器種及び形状から甌としての用途ではなく、カマド祭祀の関係遺物の可能性がある。

28号竪穴住居跡 (図版21-(2)、第63図)

円形の周溝状遺構の南隣で検出した竪穴住居跡である。無数にあるピットとの重複はあるが主だった遺構との重なりはない。平面プランはやや歪んだ長方形を呈し、削平を受けているためか全体に遺存状態は良くない。住居の規模は長辺が5.90m・5.70m、短辺が3.20m・3.25m、床面までの深さは15cm前後である。

東壁側には幅1.5m前後、高さ5.0cmほどの削り出しのベットを設けているが、西側には見当たらない。西側の支柱穴の位置からするとベットは付設していなかったと思われる。支柱穴は東西ライン上にある2本と思われ、柱間は2.50mを測る。東側の柱の傍には円形の深さ40cmのピットが配されているが、中には焼土の混じった灰が堆積していたものの炉にしてはやや深い。その傍からは焼けた石が検出されている。北側の壁沿いには屋内土壙が掘られ、中から用途の分からぬ石が出土した。

出土遺物は少なく、図示できる土器は弥生の器台が1点ある。



第63図 28号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物

土 器 (第116図)

弥生時代の終末頃の器台の脚部片で、非常に器壁の厚いものである。

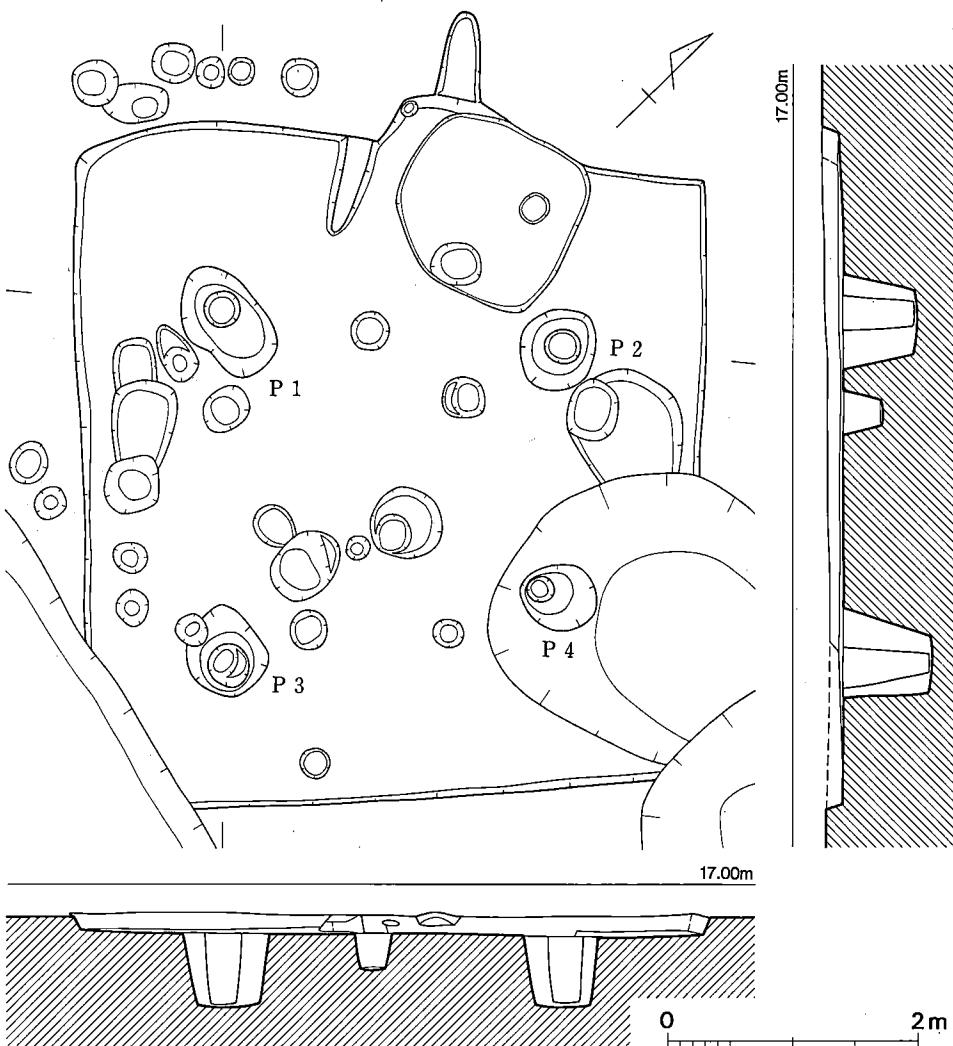
29号竪穴住居跡 (図版22-(1), 第64図)

28住居の東側で検出した竪穴住居跡で、65号土壙と10号溝と重複しており、いずれの遺構よりも古い。住居の平面形状は歪んだ方形に近いを呈し、その規模を復原すると $5.20m \times 4.75m$ と $5.05m \times 4.80m$ 、床面までの深さは15.0cmを測る。

支柱穴はP 1 - P 4までの4本で、各柱間はP 1 - P 2が $2.75m$ 、P 1 - P 3が $2.80m$ 、P 2 - P 4が $1.95m$ 、P 3 - P 4が $2.60m$ を測り、P 2 - P 3間が異常に短く変則的な配置である。

北西側の東寄りの壁際には袖を持つ突出したタイプのカマドを付設しているが、土壙様遺構で破壊され不明な点が多く、黄褐色の粘土の一方の袖と長さ70cmの煙道が残っていた。

出土遺物は、土師器の甕・把手付甕、須恵器の平瓶・高坏の他、管玉状土製品と金銅製の耳



第64図 29号竪穴住居跡実測図 (1/60)

環が1点出土している。

出土遺物

土 器 (図版56, 第116・117図)

土師器 甕は3タイプがある。1の口縁が弓なりに外反し肩部の張るもの、緩く外反する口縁に肩部が若干張るタイプ、口縁が殆ど外反せず直線的につくるタイプとがある。2の甕は支柱穴内から出土している。4の把手付甕も支柱穴内から出土した。

須恵器 5・6は平瓶であろう。5は頸部から上半部が欠損している。底部外面には「×」状のヘラ記号が刻まれる。7・8は高坏で、8の脚部内面には「ハ」字状のヘラ記号がみられる。

装身具 (図版56, 第152図)

耳環(1) 住居の床面から出土した金銅製の耳環で豊穴住居内からの出土例としては稀である。おそらく住人が落としたものであろう。全体的に腐食が激しく鍍金はすべて剥落し地銅も剥落が著しい。大きさは2.9cmで直径は7.0mmを測る。

土製品 (図版56, 第152図)

管玉状土製品 (2・3) 石製の管玉と同じぐらいの大きさの土製品で、管状土錘とするには法量が小さい。長さは2.6cm, 最大径は1.1cm, 孔は3.5mm, 重さは3.2gである。胎土は精製された粘土を使い、橙褐色を呈している。

30号豊穴住居跡 (図版22-(2)・23-(1), 第65図)

29号豊穴住居跡の東側で検出した住居跡で、著しい削平を受け遺存状態は良くない。重複関係は42号・47号住居、大溝(溝11)とがあり、新旧関係は大溝→30号住居→42号・47号住居の順になる。

平面プランははっきりしないが方形であろう。規模は北壁で5.10mを測るがほかは不明な点が多い。床面上にははっきりとした支柱穴は見当たらない。

調査時点では北壁側に若干の焼土が散在していたことからカマドの設営を考えたが、実際掘り下げてみるとカマドの痕跡はなく、27号住居のように削平された東側に付設されていたと思われる。

出土遺物は、住居の遺存状態が悪いために少なく、図示可能な土器は須恵器の坏身が1点あるのみである。

出土遺物

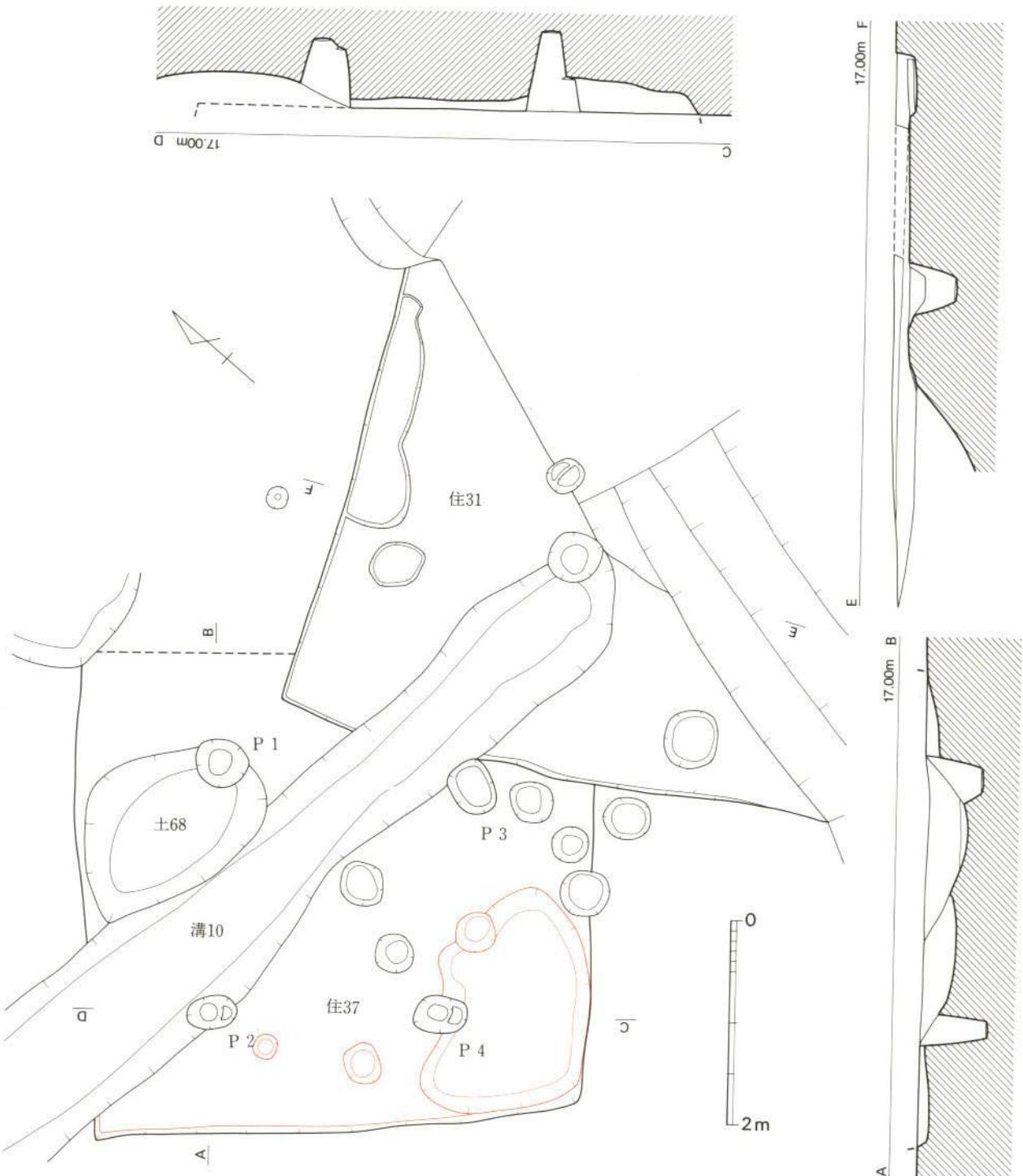
土器 (第117図)

須恵器 破片の復原実測である。全体に器壁が厚く、6世紀末から7世紀にかけての所産である。外面底部には「く」字状のヘラ記号が刻まれている。

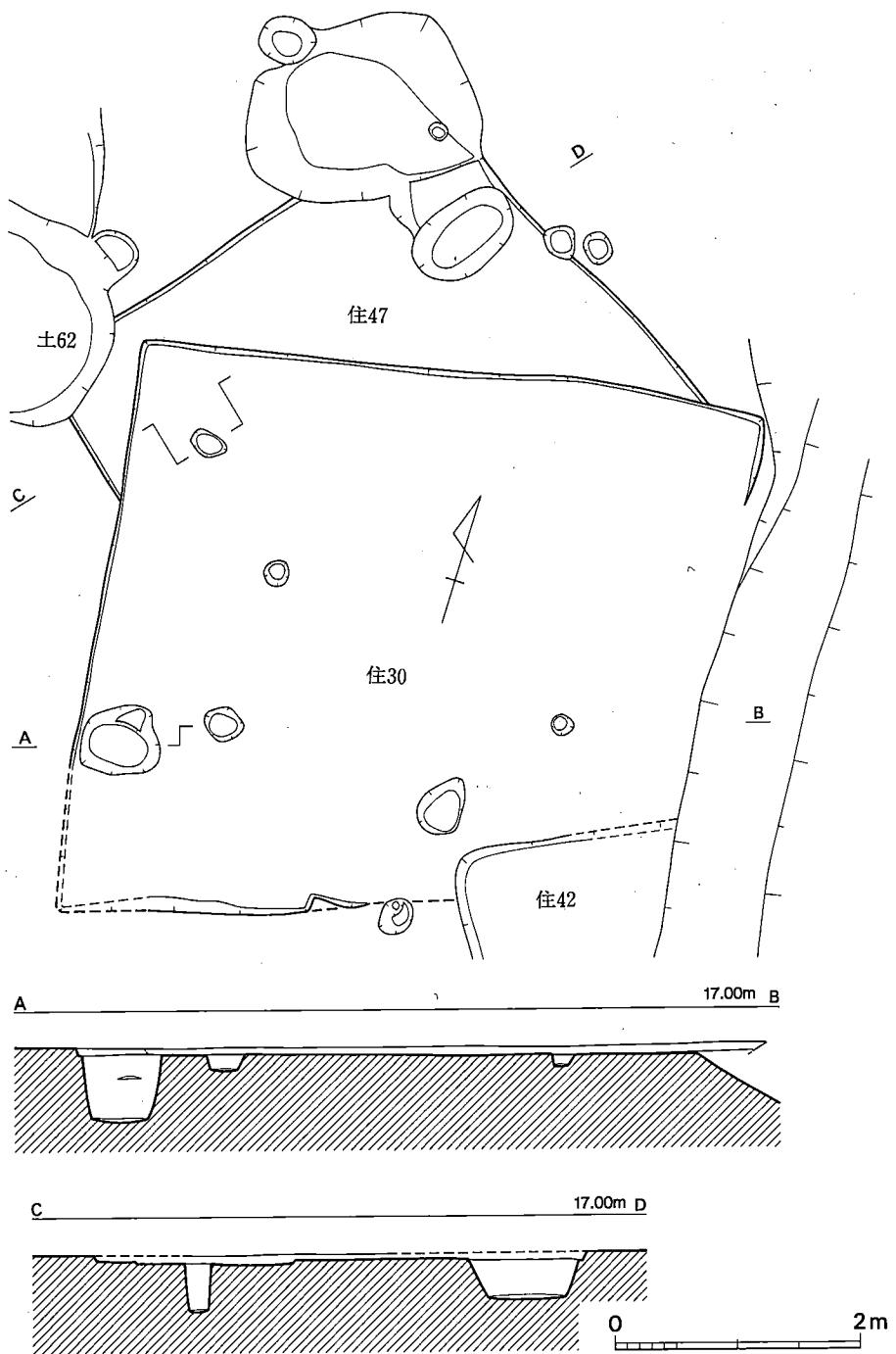
31号豊穴住居跡 (図版23-(2), 第66図)

30号住居の南側で検出した豊穴住居跡で、中世の大溝(溝11)で約1/2が削られている。この他重複した遺構としては、37号住居跡、10号溝とがあり、新旧関係は10号・11号溝→31号住居→37号住居の順になる。

住居のプランや規模、支柱穴などについては分からぬ。遺物も図示可能な土器はない。



第66図 31号・37号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第65図 30号・47号竖穴住居跡実測図 (1/60)

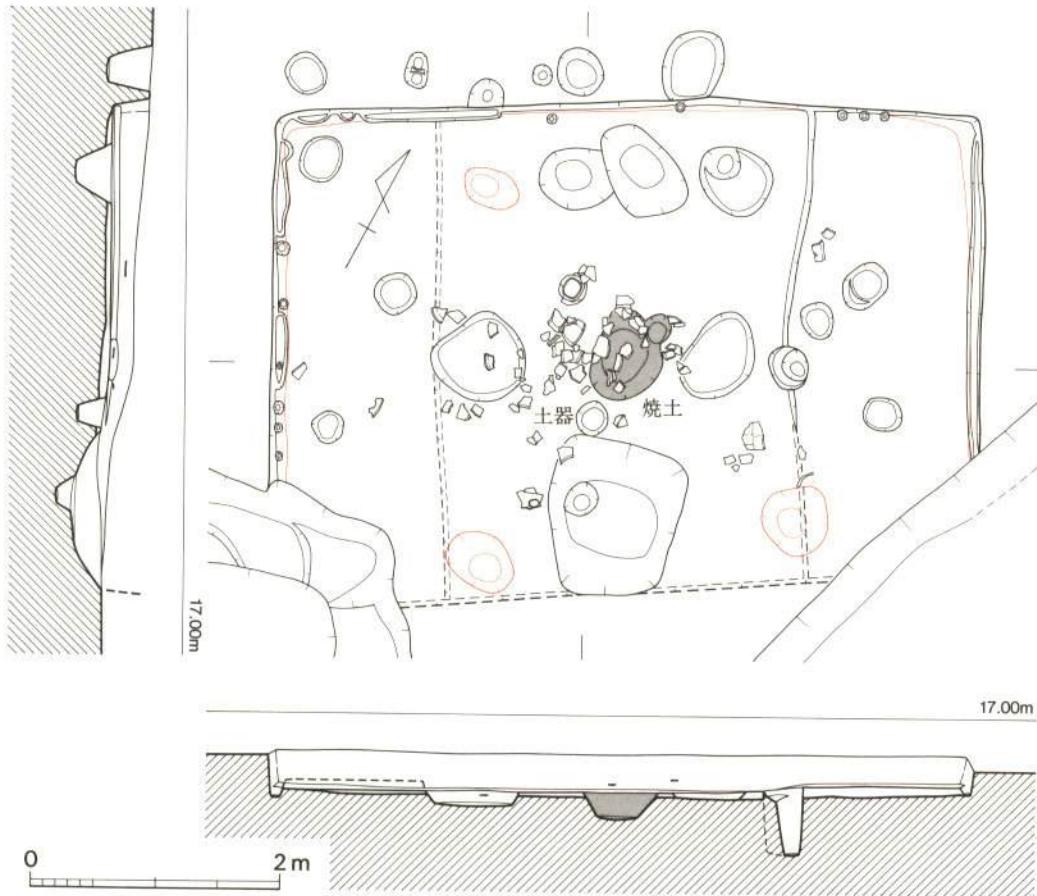
32号竪穴住居跡 (図版24-(1)・(2)・25-(1), 第67図)

31号住居の南西隣で検出した竪穴住居跡で、大溝（11号溝）と7号井戸とに南東・南西側の一部が重複しており、住居の方が古い。

住居の平面プランは長方形を呈し、その規模は長辺が5.60、南側は復原すると5.70m、短辺は3.95m・3.65m、床面までの深さは30cmを測る。両短辺の壁添いには幅1.40mの貼り床のベットが付されていたが、西側のベットは調査時に気づかず掘り過ぎてしまった。貼り床は床面全体に施されている。

支柱決は2本と思われるが、西側の1本は検出できていない。床面の中央には炉が設置されている。東西壁際には部分的に壁溝が掘られ、不規則な箇所に小ピットが掘られている。南壁の中央部には不整方形の屋内土壙が掘られている。

出土遺物は、弥生土器の破片が数多く床面に散在しており、器種は壺・甕・鉢・高坏・器台



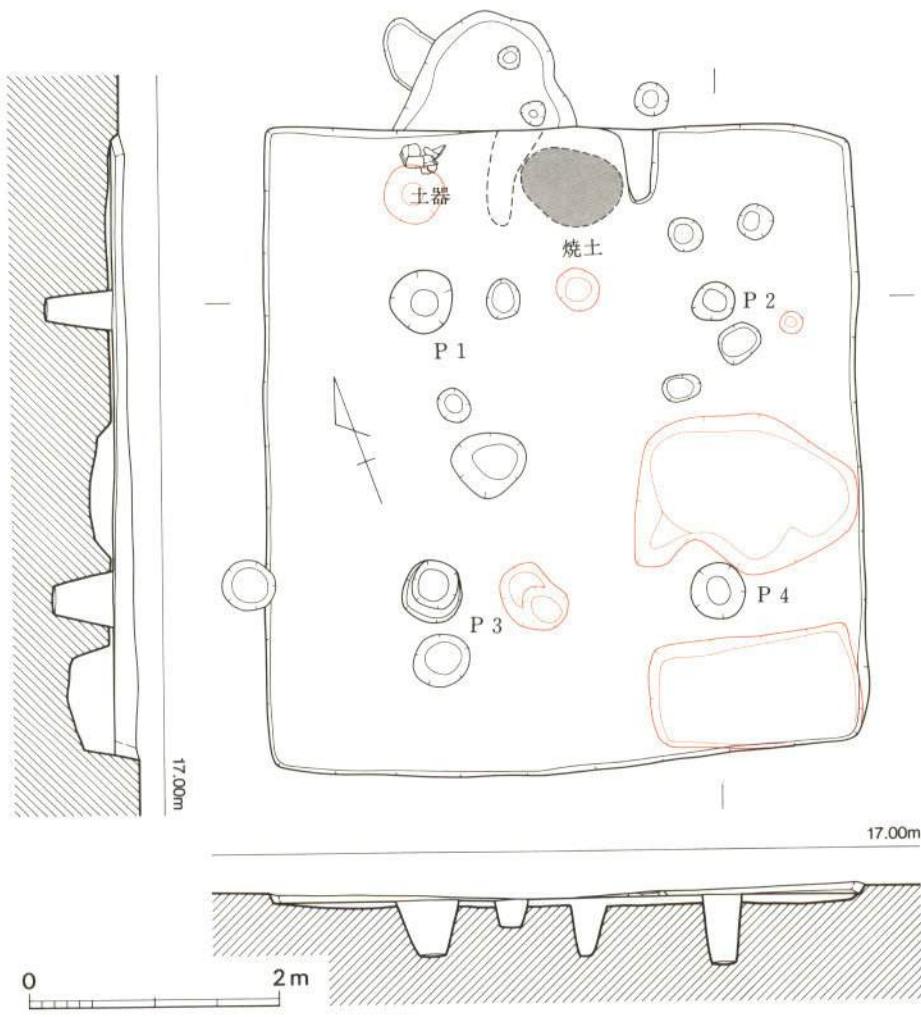
第67図 32号竪穴住居跡実測図 (1/60)

支脚の他、砥石が2点出土している。

出土遺物

土 器 (図版56, 第118・119図)

壺は鋤先口縁部と複合口縁部の2タイプがあり、2は鋤先口縁部の発達したものである。甕は「く」字状に外反するもので、やや時期の異なる土器が混在している。その他高壙や鉢、器台などでは時期的に2時期あり、弥生時代中期末から後期初頭頃に比定される土器群である。



第68図 33号竪穴住居跡実測図 (1/60)

石 器 (図版56, 第152図)

砥 石(1・2) 1は砂岩製の手持ち砥石で、使用面は6面ある。図示した裏面は使用頻度が高いためか凹面となっている。長さは4.2cm, 幅が2.9cm, 厚さは1.2cmを測る。2も手持ち砥石で硬質砂岩製である。長さは4.8cm, 幅は1.4cm, 厚さが7.0mmを測り、断面は蒲鉾形を呈している。使用面は6面である。

33号竪穴住居跡 (図版25-(2), 第68図)

西台地の北東側で検出した竪穴住居跡で、34号住居との重複があり当該住居の方が新しい。住居の平面形態は方形に近い形状で、その規模は、東・西壁が4.80m・5.10m, 南・北壁は4.70m・4.65m, 床面までの深さは10cm前後を測り、遺存状態は良くない。

支柱穴はP1-P4の4本で、各柱間はP1-P2が2.30m, P1-P3が2.25m, P2-P4が2.30m, P3-P4が2.30mを測る。床面は粘土ブロック混じりの土で貼り床しており、南東側の下層から土壙様の掘り込みがある。

北側の中央壁には「U」字状のカマドが付設されていたが、著しく削平され右側の袖の一部と中央部の火床が遺存していたに過ぎない。

出土遺物は少なく、カマドの左側から土器片が出土しているが図示できていない。

34号竪穴住居跡 (図版26-(1)・(2), 第69図)

33号住居跡と大溝(11号溝)とが重なり合った竪穴住居跡で、約1/3が溝によって削平されている。

住居の形態は方形であろう。規模は新しい遺構が重複しているため不明であるが、東側の壁辺を復原すると5.65m、床面までの深さは15cmを測るが、北側は床面が露出していた。支柱穴は4本であるが、西側の2本は残っていない。東側の2本の柱間は2.75mを測る。床面は黄褐色の粘土混じりの土で貼り床を施している。

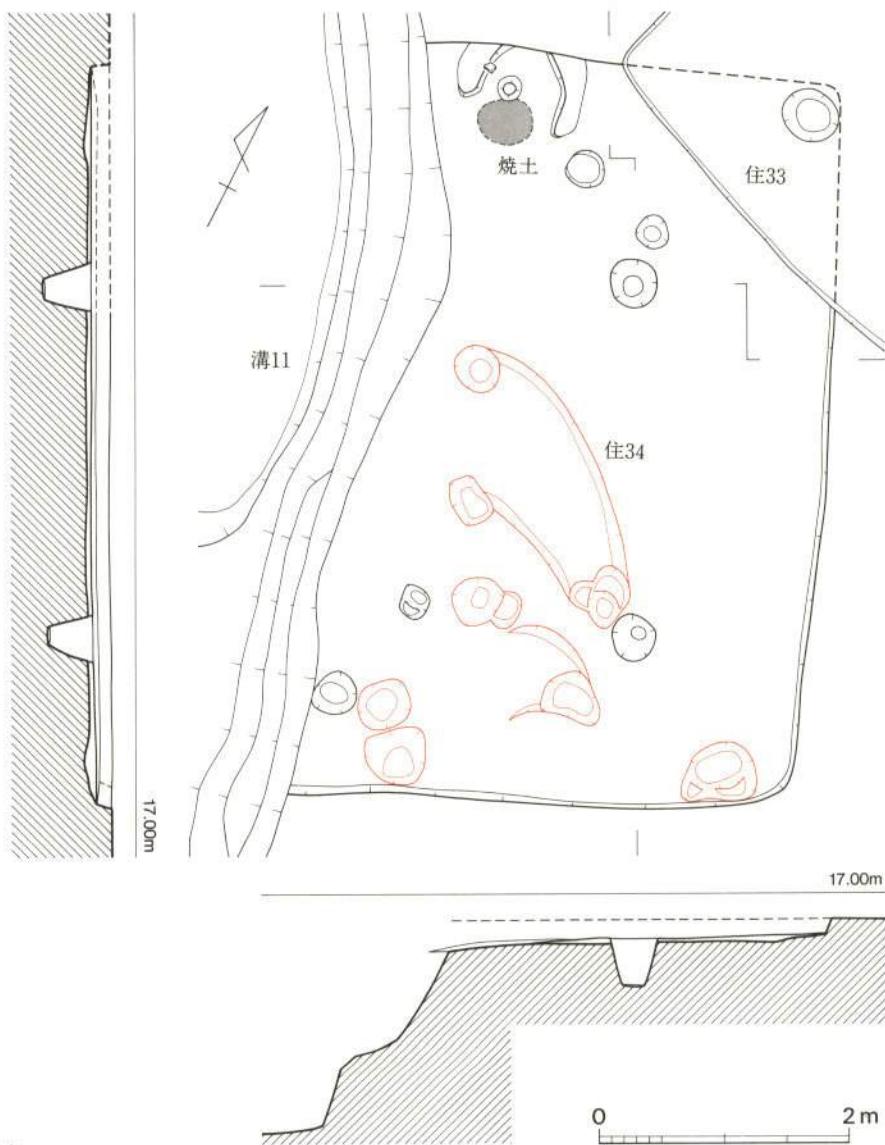
北側壁沿いには「U」字状のカマドが付設されているが、激しく削平されカマドの基部が遺存していたに過ぎず、袖と中央に支脚の土台の粘土、その前面に円形の火床が残っていた。

出土遺物は破片があるものの、図示できる土器はない。

35号竪穴住居跡 (図版27-(1)・(2), 第70図)

34号住居の南東側で検出した竪穴住居跡であるが、カマドを有す36号竪穴住居と重複していて、この住居よりは古い。他にも重複する住居かどうかはっきりしない掘り込みがあるが、これらよりは新しい。

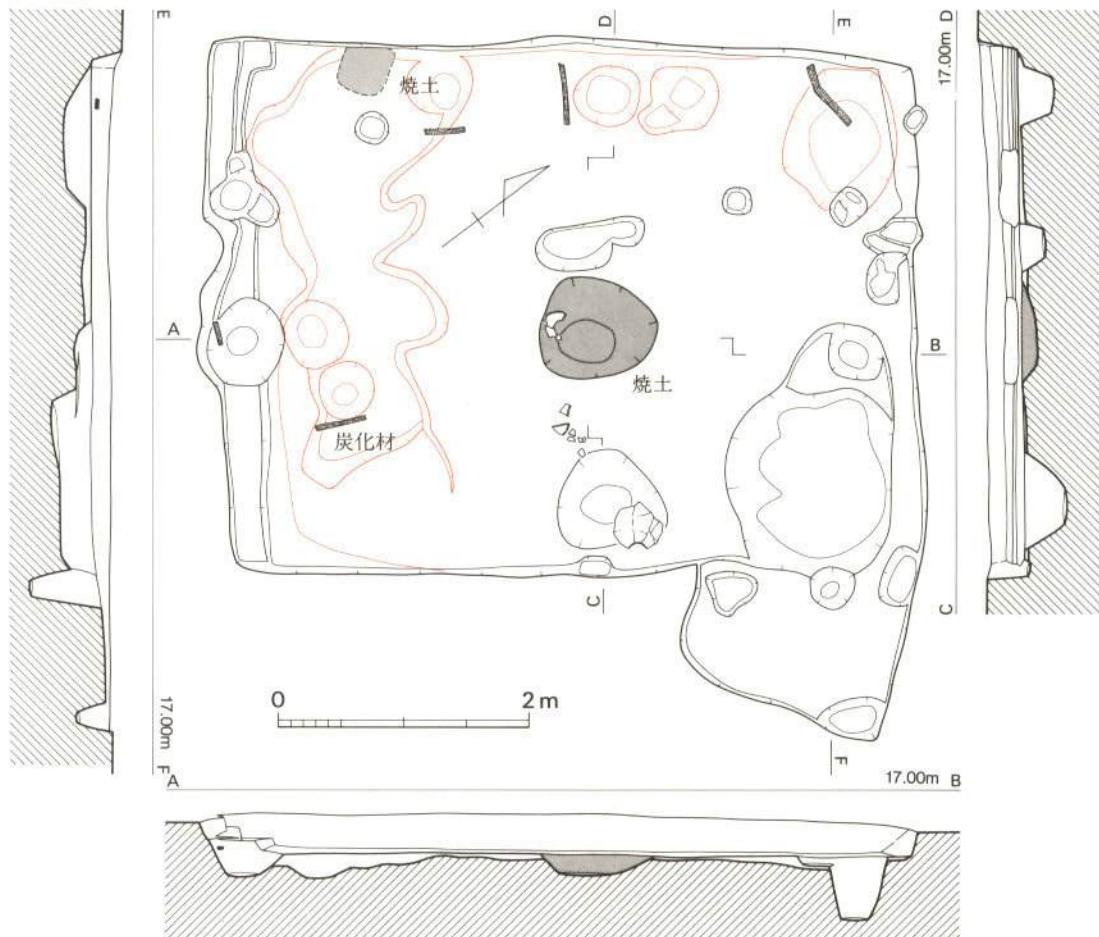
住居の平面プランは長方形を呈し、その規模は長辺が5.60m・5.50m、南西側の短辺が4.15m



第69図 34号竪穴住居跡実測図 (1/60)

を測り、北東側は別の掘り込みがありはっきりしない。床面は貼り床をしており、南側の下層には住居掘削時の不明瞭な掘り込みがある。南西側の壁際にはテラス状の段をなし、これが住居に伴うことは、所どころに見られる焼失住居と思われる炭化材がこのテラス上にも存在することで分かる。

支柱穴は2本と思われるが、通常の2本柱にしては壁に近すぎるし、南西側の柱穴が浅い。床面の中央には不整円形の断面擂り鉢状の炉が掘られている。内部には焼土混じりの灰が詰ま



第70図 35号竪穴住居跡実測図 (1/60)

っていた。

東側の壁沿いには不整円形の屋内土壤が掘られており、中から甕の底部が出土している。床面上での炭化材の量は少ないが床面全体に散在しており、西壁の隅には小範囲に焼土が確認された。支柱穴の配置からベットは設置していないと思われる。

焼失住居のわりには出土遺物は少なく、弥生土器の壺・甕・高坏の破片が出土している。

出土遺物

土 器 (図版56、第120図)

1は丹塗りの壺の口縁部片、2は無頸壺の破片である。3は径の大きな甕の底部で、屋内土壤の上層から出土した。強い二次火熱で器表面がヒビ割れている。4は鋤先口縁部の高坏の坏部片で、内外面に丹を塗布している。床面と炉内から出土した。

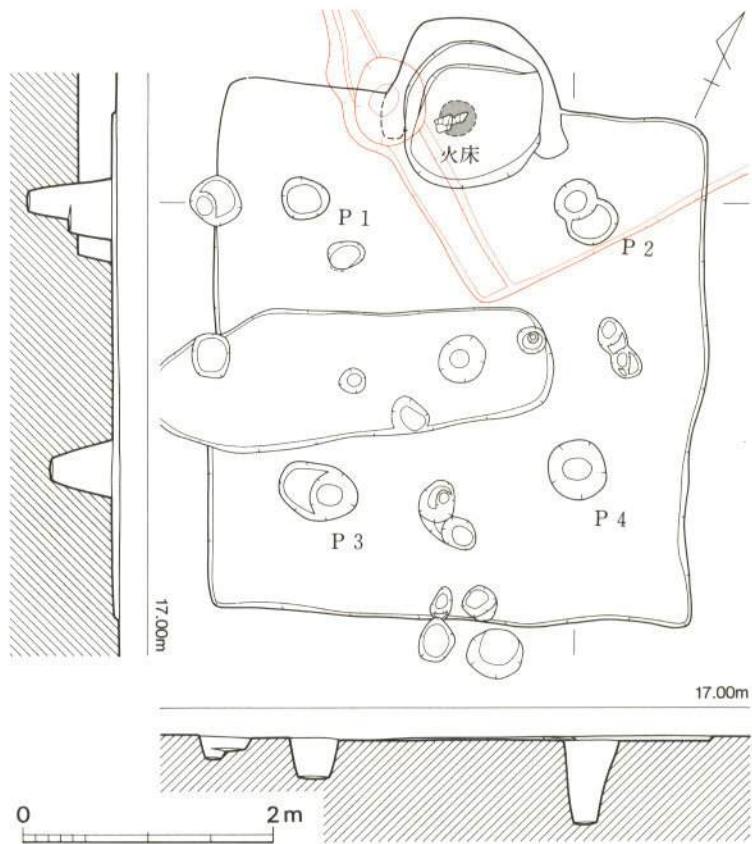
36号竪穴住居跡 (図版28-(1)・(2), 第71図)

35号住居と重なった

状態で検出した古墳時代終り頃の竪穴住居跡で、一部38号住居とも重複し、両者よりも新しい。

住居の平面形状は方形に近い形状を呈し、その規模は東・西壁が3.90m・4.15m, 南・北壁は3.80m・3.85m, 床面までの深さは5.0cm前後で、一部床面が露出している所もある。

支柱はP 1-P 4 の4本で、各柱間はP 1-P 2 が2.15m, P 1-P 3 が2.35m, P 2-P 4 が2.10m, P 3-P 4 が2.00mを測る



第71図 36号竪穴住居跡実測図 (1/60)

北壁には突出するタイプのカマドが付設されているが基底部しか残っておらず、カマドの周囲には「U」字状に粘土を巡らし、両袖は住居内に僅かに突出している。カマドの床面には小さな火床があり、甕の小片が出土している。

出土遺物はこの小片のみで、図示できる土器はない。

37号竪穴住居跡 (第66図)

31号住居、10号溝、68号土壙と重複し、すべてに切られた竪穴住居跡である。住居の平面プランは方形であるが、調査の時点で住居の壁面は殆ど削られ床面が露出していた。その規模は北と西が4.80m・4.75mを測る。支柱はP 1-P 4 の4本で、各柱間はP 1-P 2 が2.45m, P 1-P 3 が2.50m, P 2-P 4 が2.25m, P 3-P 4 が2.25mである。床面は粘土混じりの土で貼り床をし、南側の下層には土壙様の掘り込みがある。

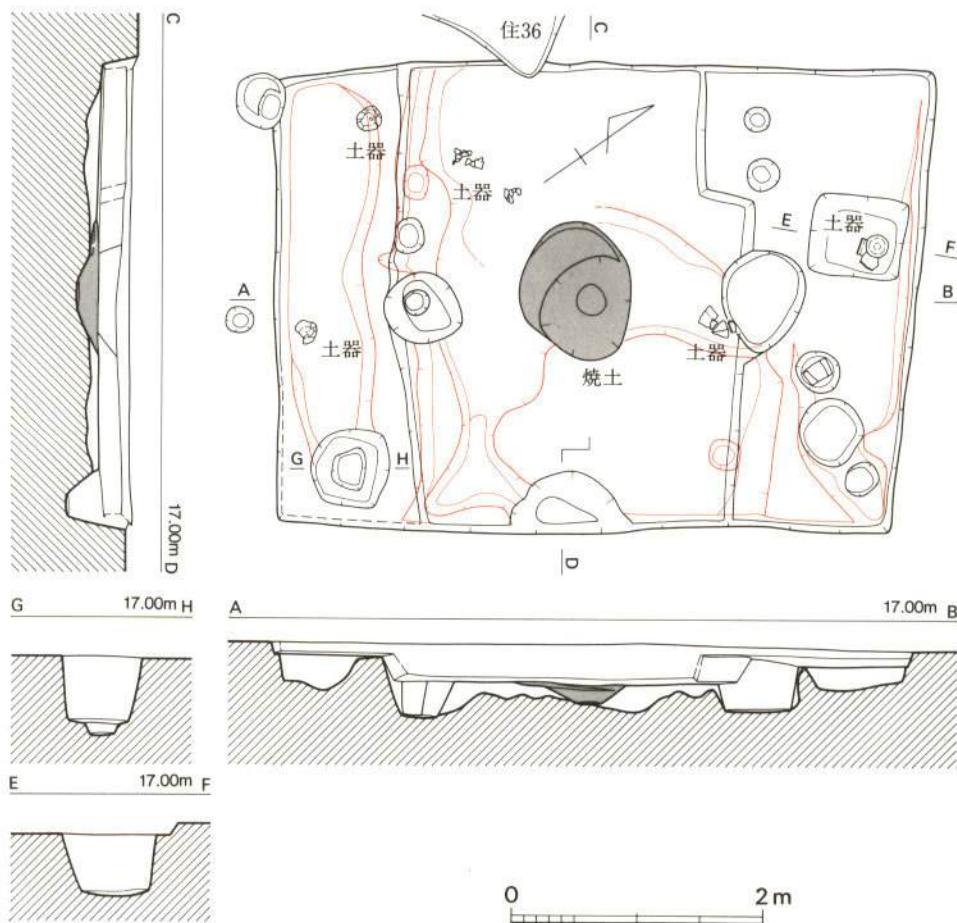
出土遺物はない。

38号竪穴住居跡 (図版29-(1)・(2)・30-(1)・(2), 第72図)

台地の東端で検出した竪穴住居跡で、36号・39号の古墳時代の住居との重複があり、この住居よりは古い。平面プランは長方形で、その規模は長辺が $5.25m \cdot 4.87m$ 、短辺が $3.70m \cdot 3.52m$ を測り、床面までの深さは30cm前後である。

支柱は2本で、柱間は2.80mである。床面の中央には擂り鉢状の炉が掘られ、内部には焼土と灰が詰まっていた。短辺の壁沿いには0.9m~1.3m幅の貼り床ベットが付設されており、床面の下層は凹凸のある掘削で茶褐色粘質土と黄褐色粘質土で客土している。

東壁の中央には不整形の屋内土壙が掘られ、北東側のベット上には $65cm \times 75cm$ 、深さ50cmの屋内貯蔵穴、南西側のベット上には不整形のピットが掘られている。屋内貯蔵穴の中からは甕と鉢が出土しており、その他の出土遺物は、壺・甕・鉢・器台の他、鐵鑿の完形品が埋土中から出土している。



第72図 38号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物

土 器 (図版57, 第120図)

出土した土器群は弥生時代終末から古墳時代初頭に移行する段階のもので、所謂庄内並行期の土器類が伴っても良い時期の一群である。

壺には2タイプがあり、1は無頸壺でベット上から出土した。2の小型壺は住居の埋土中からの出土である。

甕は完形に近い3と底部片の4がある。底が尖り氣味で土師器の範疇に入れてもよいかも知れない。炉の傍の床面から出土し、煤が付着しており煮炊きに使用したのであろう。4は不安定な平底で弥生時代終末頃の所産である。ベットの屋内貯蔵穴内から出土した。

鉢には砲弾形と口縁部をつくり出すタイプとやや浅いタイプの3種類がある。外面底部付近をヘラ削りしており、終末から古墳時代初頭にみられる形状の土器である。5は埋土中から出土し、6・8はベット上の屋内貯蔵穴内から出土した。7はベット上からの出土である。

9は器種の不明瞭な土器で、ここでは器台形土器としたが、裾内部に1箇所貫通しない孔がある。埋土中からの出土である。

鉄 器 (図版57, 第152図)

鑿(38) 長さ5.3cm、幅1.4cm、厚さ8mmの完形の鑿がある。最大幅は頭部にあり、刃部にいくにしたがって細くなる。刃部は片刃に近い造りで、埋土中から出土した。

39号竪穴住居跡 (図版30-(2)・31-(1), 第73図)

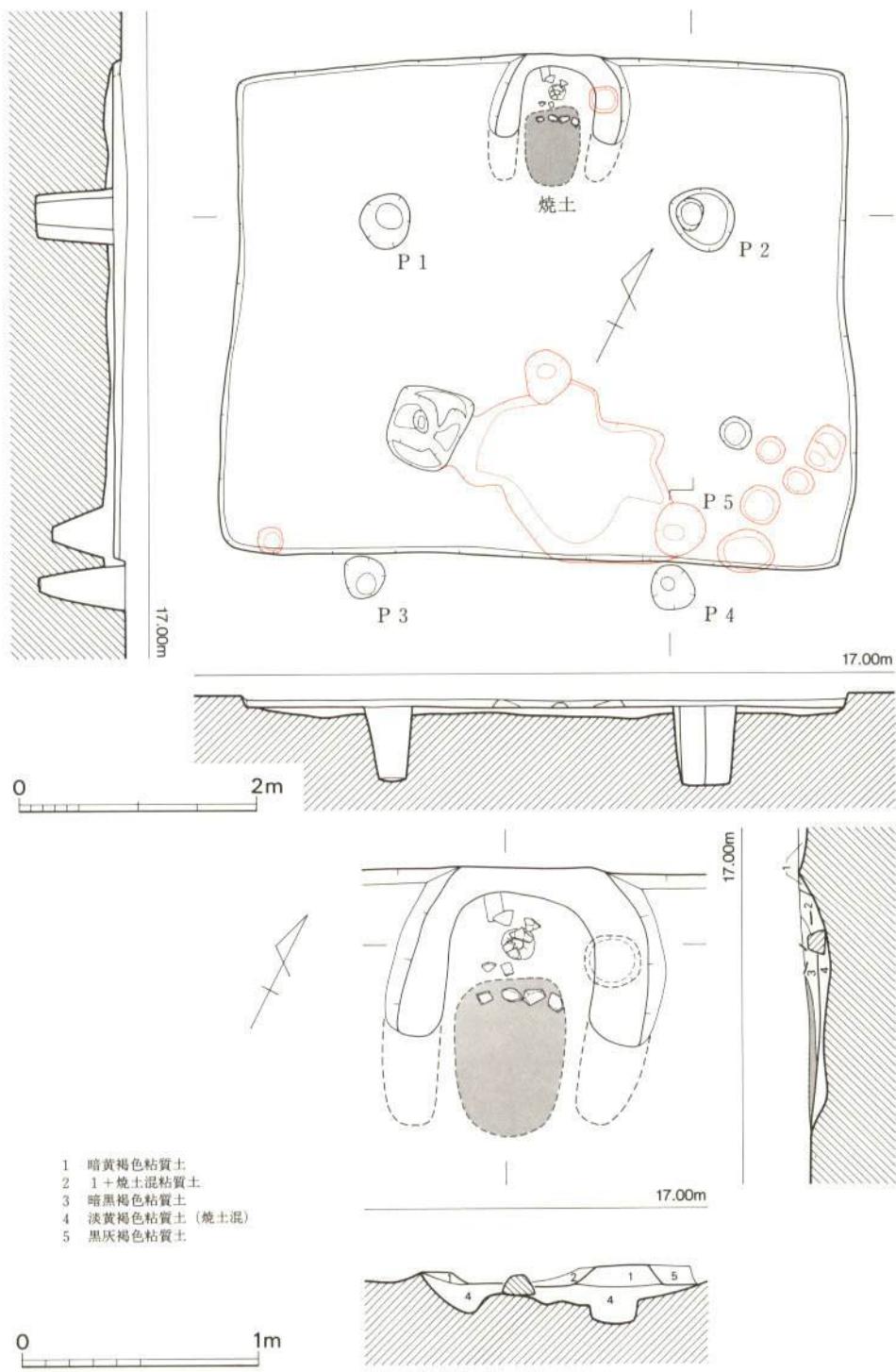
西台地の東端で検出した竪穴住居跡である。当該住居を含めて38号・43号・45号の4軒の住居が重複しておりこの住居が最も新しく、古墳時代の住居で他は弥生時代の所産である。

住居の平面形態は長方形に近く、その規模は南・北壁が5.20m・5.10m、東・西壁は4.15m・3.90m、床面までの深さは10cm前後を測る。主柱穴はP1-P4までの4本と思われるが、P3・P4は壁の外側に掘られており通常のパターンとは配置が異なる。また、P4の内側の壁際の下層からP5を検出し、位置的には適応するが対峙する西側の柱穴が見当たらない。この柱穴は住居に伴わないことが考えられる。各々の柱間は、P1-P2が2.55m、P1-P3が3.10m、P2-P4が3.10m、P3-P4が2.55mを測り、柱間に規格性があることが分かる。

床面は粘土混じりの土で貼り床を施し、その厚さは5.0cm~10cmで、南壁側には不定形の土壙様の掘り込みがある。

北壁の中央には「U」字状のカマドが付設されているが、遺存状況は悪く基底部が残っているに過ぎない。カマドの床面には楕円形の火床があり、その奥には小型甕を倒立した支脚が立てられていたと思われる粘土が残っていた。その周囲には甕の破片が散在していた。

出土遺物はカマド内の甕の破片の他はなく、図示できる土器はない。



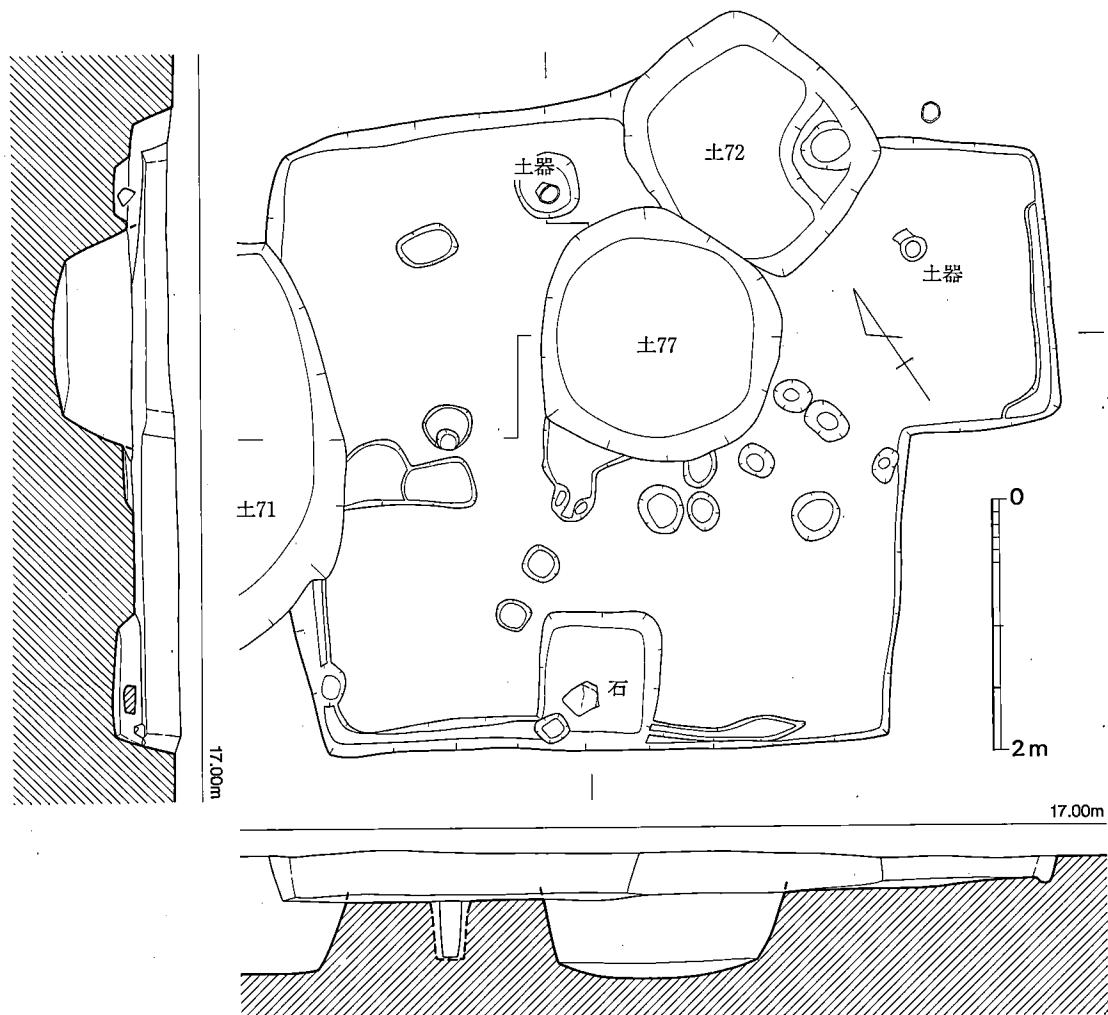
第73図 39号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/30・1/60)

40号竪穴住居跡 (図版31-(2), 第74図)

西台地の東側で検出した一群の竪穴住居跡のひとつで、住居どうしの重複はないものの、71号・72号・77号土壙との切り合いがあり、土壙の方が新しい。

住居の平面形態は方形を呈し、調査区内で検出した住居では珍しい造り出し部が北東側にある。住居の規模は、南・北壁が4.50m・6.00m、東・西壁が4.75m・4.80m、床面までの深さは20cm~40cmを測り、造り出し部側が浅くなる。造り出し部は奥行きが1.20m、幅は2.15mを測りこの部分が住居の出入り口に相当すると考えられる。

支柱穴ははっきりしないが、2本の可能性がある。断面の東一西ライン上の西側に掘られた



第74図 40号竪穴住居跡実測図 (1/60)

柱穴がその内の1本であるが、対峙するもう1本の柱穴が不明瞭で、東側で検出した柱穴は深さが20cm前後と浅いことから支柱穴ではなかろう。

造り出し部と南と西壁の一部に壁溝が巡っており、壁溝と繋がった形で1.10m×0.95m、深さ20cmの方形の屋内土壙が掘られている。屋内土壙内からは作業台的な用途が考えられる石が出土している。

出土遺物は、弥生時代中期末ごろを中心とした壺・甕・鉢・器台の他、鉈の破片が出土している。

出土遺物

土 器 (図版57、第121図)

壺は1の鋤先口縁壺と2・3・4の無頸壺とがあるが、1はやや古相を呈している。頸部に断面三角凸帯が巡る。2は口縁部に孔が穿たれ、本来蓋がつくものである。3・4は同一個体で丹塗磨研土器である。

5の甕は逆「L」字状口縁部で、頸部内面には僅かに稜がつく。7は「く」字状に外反する口縁部で、頸部に三角凸帯が巡る。

8の鉢はほぼ完形品で、逆「L」字状の口縁に体部がやや張るタイプで、底部を大きくつくる。住居の北側のピットから出土した。9は口縁部平坦面が内傾するタイプで小型の土器である。11の鉢は口縁部が内傾するタイプで、住居の造り出し部の床面から出土した。

12は器壁の薄い器台で、中期後半から末頃の特徴を示している。

鉄 器 (図版58、第152図)

鉈(40) 住居の埋土の下層から出土した刃部片がある。断面蒲鉾形を呈している。幅は1.3cmを測る。

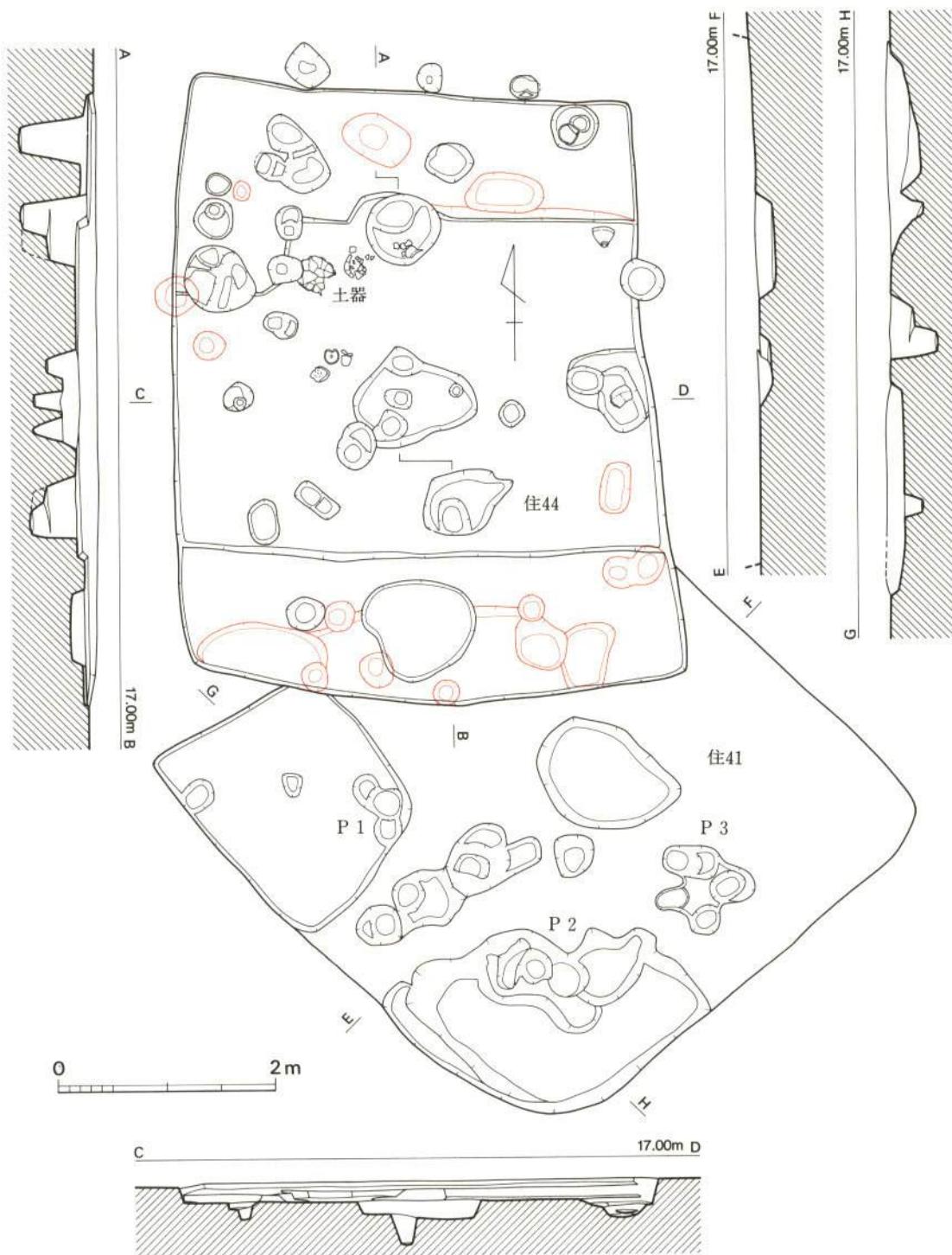
41号竪穴住居跡 (図版33-(1)、第75図)

40号住居跡の南東に位置する竪穴住居跡で44号住居と重複している。この住居跡は、調査時点で既に床面が完全に露出し、壁はまったく遺存していない。

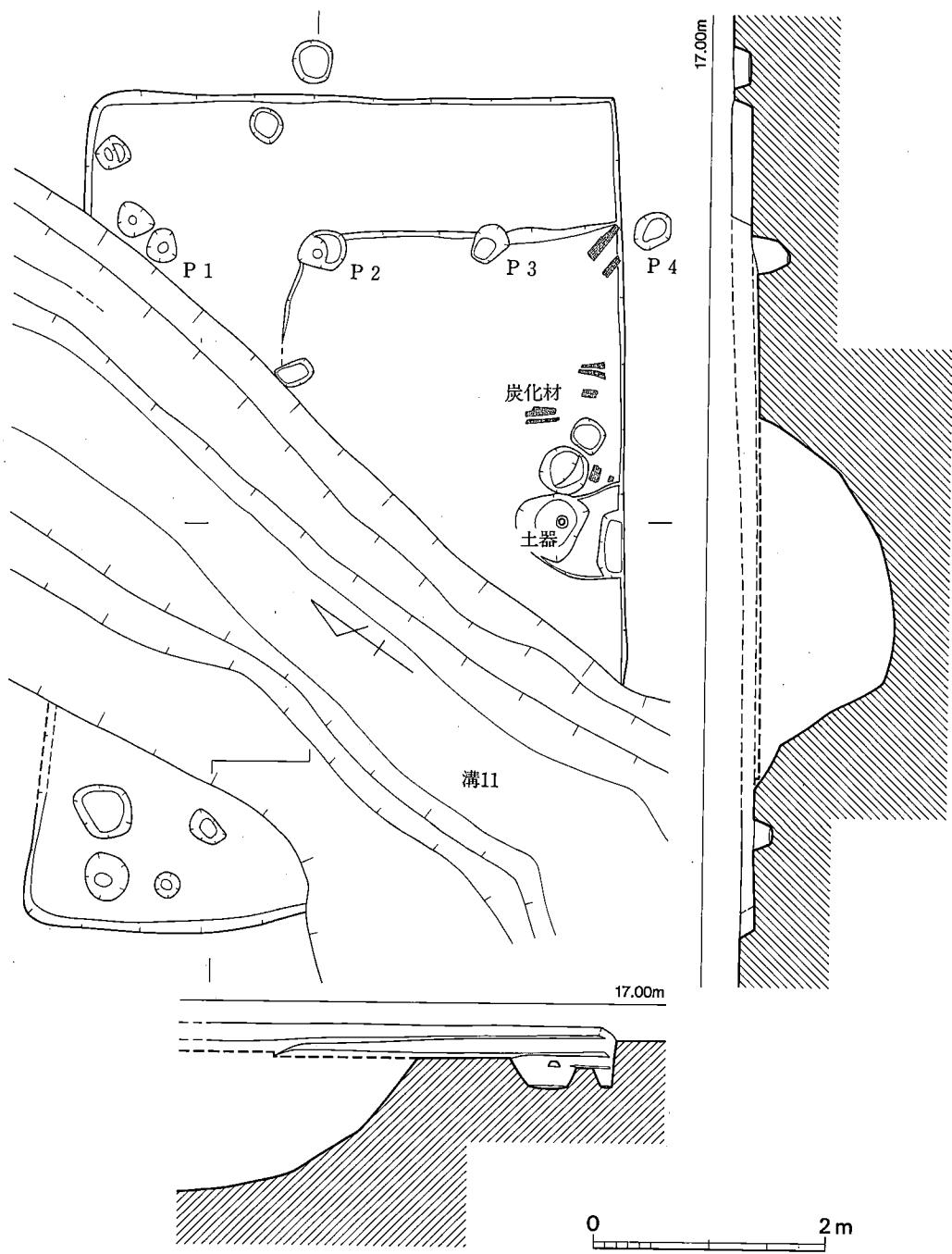
住居のプランは、周囲の地山と床面との土質の違いから方形であることが分かる。その規模は4.50m×5.00mである。支柱穴はA-Cの3本は確認できたが、東側の1本は検出できていないが4本柱の可能性がある。

南側と西側の下層には住居のプランに沿って土壙様の掘り込みがあり、住居の掘削時に掘られたものであろう。床面の中央にあるピットは炉跡かも知れない。

出土遺物は殆どない。



第75図 41号・44号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第76図 42号竪穴住居跡実測図 (1/60)

42号竪穴住居跡 (図版32-(1), 第76図)

台地の東側の大溝（溝11）が巡る箇所で検出した竪穴住居跡で、重複した遺構はこの溝の他30号住居がある。溝は中世で30号住居は古墳時代後期頃であり、当該住居が最も古い。

住居は中央部が溝により削られているが、平面プランは長方形である。その規模は東の短壁が4.45m、北壁は7.15m、床面までの深さは20cm前後を測る。住居の形態や設置方向を見ると東台地の5号竪穴住居跡と同じで、住居からの出土遺物が少ないが弥生時代終末から古墳時代初期頃の所産であろう。調査した東台地でのこのタイプの住居は殆どないといってよい。

支柱穴は5号住居が2本であるのに対して、この住居は明確な支柱穴が見当たらない。強いてあげればP1-P3（P4までが含まれるかも知れない）があり、6本柱の可能性もある。ちなみに各柱間はP1-P2が1.35m、P2-P3が1.45m、P3-P4が1.45mを測る。

ベットは「コ」字状に巡らされていたと推測される。南東側の壁沿いには不整形の屋内土壙があり、中から小型の壺が出土している。また、南東側の床面には炭化材がみられることから焼失住居と判断される。

出土遺物は、住居の遺存状態が悪いためか少なく、複合口縁壺の破片、混入土器と思われる丹塗磨研の無頸壺、小型壺の他、屋内土壙の上層から孔を穿っていない土玉状の土製品が出土している。

出土遺物

土 器 (図版57, 第122図)

1は複合口縁の壺の小片で、住居の覆土の下層から出土した。2は覆土中から出土した丹塗磨研の無頸壺の復原実測である。混入土器であろう。

3は壺の完形品で、屋内土壙から出土した。唯一当該住居にともなう土器である。

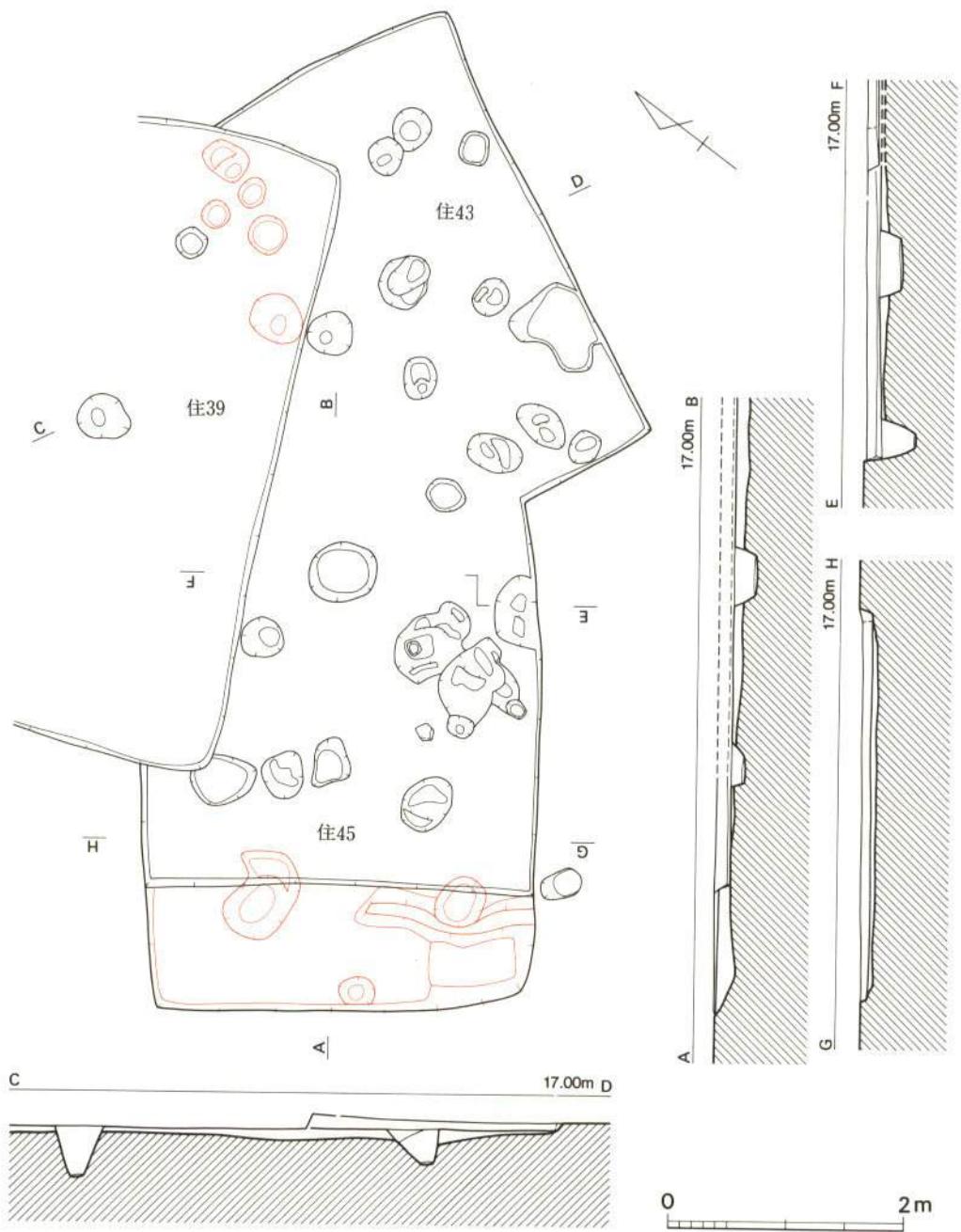
土製品 (図版58, 第152図)

土玉状土製品⁽⁴²⁾ 屋内土壙の上層から出土した楕円形の土玉状土製品があるが、孔は穿っていない。胎土には砂粒が多く、茶黄色を呈している。長さは2.9cm、径は2.1cm×2.2cmを測り、重さは12.1gである。

43号竪穴住居跡 (図版32-(2), 第77図)

西台地調査区の南東側で検出した遺存状態の悪い竪穴住居跡で、古墳時代の39号住居と45号の出土遺物がなく定かでないが、弥生時代後期の住居との重複があり、39号住居より古く、45号住居との新旧関係は不明である。

住居の形態はC-Dライン上にある2本の柱穴から長方形と推測される。規模は分からぬが、東壁は4.0mを測る。出土遺物などはない。



第77図 43号・45号竪穴住居跡実測図 (1/60)

44号竪穴住居跡 (図版33-(1), 第75図)

40号住居の南東傍で検出した竪穴住居跡で、41号住居と重複しているが遺存状況が悪いため新旧関係は分からぬ。住居の平面プランは長方形で、その規模は東・西壁が5.25m・5.40m, 南・北壁が4.55m・4.05m, 床面までの深さは20cm前後を測る。

支柱穴は2本であるが、中心が40cm程度ずれている。柱間は2.85mで、その間には不整形な掘り込みがあり、炉の可能性があるが内部には焼土や灰の堆積は認められない。南北の壁沿いには1.0m~1.30mの幅で貼り床ベットを設置し、北側のベットは「L」字状を呈している。床面には貼り床を施していない。

東側の壁際には不整形の室内土壙が掘られていて、中から坏が出でている。遺物の出土状態は大半が床面上から出土している。

出土遺物は弥生時代終末頃の甕・鉢・椀・坏・高坏がある。

出土遺物

土 器 (図版58, 第122図)

出土した一群の土器は、所謂西新式と呼称されるタイプのもので、外面底部付近をヘラ削りする特徴を持つ。1の甕は口縁部を緩く「く」字状に外反させ、口唇部を外側に肥厚させる。肩部はやや張り、最大径が胴部上半にあるやや長胴の甕である。外面に煤が付着しており煮炊きに使用したものであろう。北側の支柱穴の傍から出土した。2も同様の甕であるが1ほど肩部が張らない。煤が付着し強い二次火熱を受けている。西側の床面から出土した。3は外反度の鈍い口縁を有す小型の甕である。

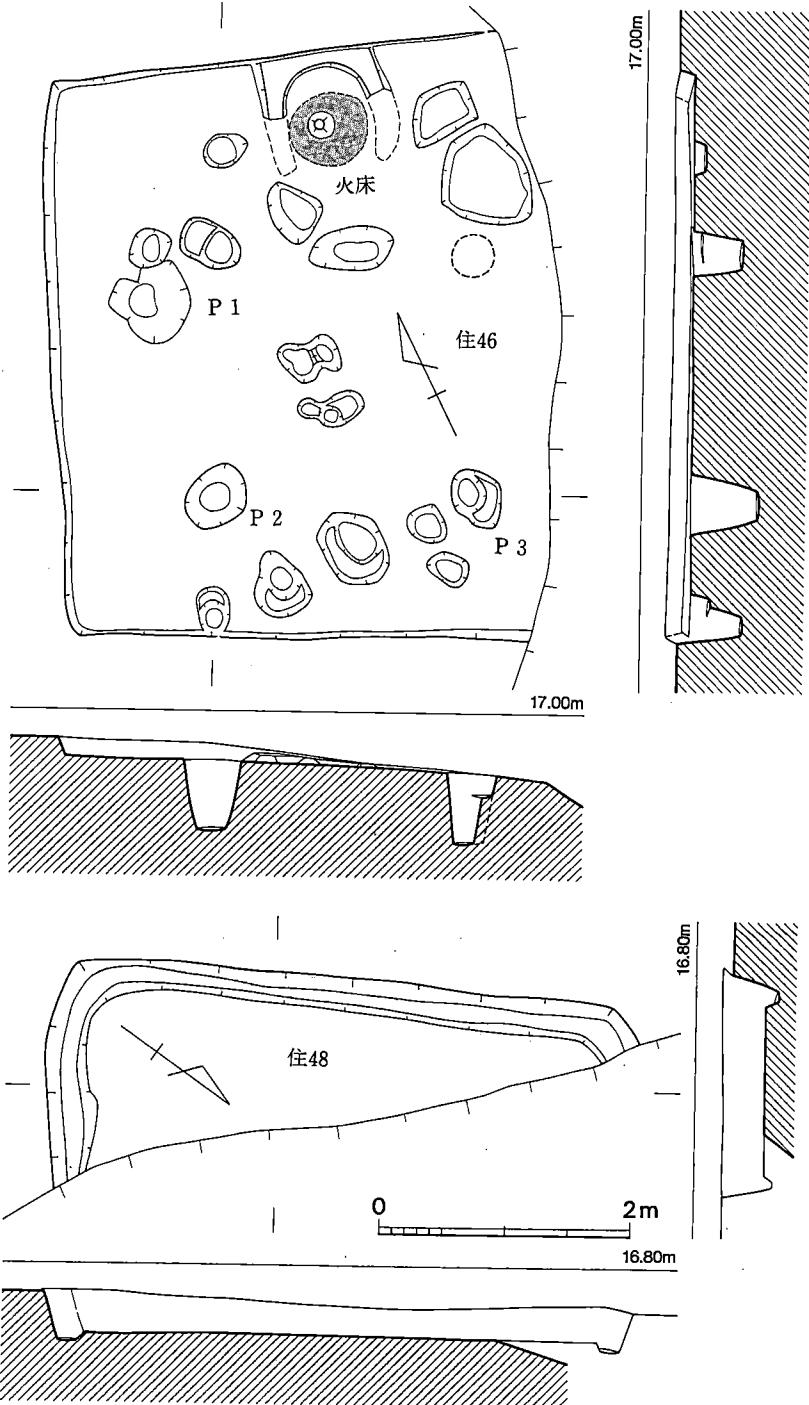
4・5は鉢で、前者は1の甕の傍から出土し、後者は埋土中から出土した。6は椀の破片で復原実測である。7は室内土壙から出土した坏である。8は坏部の深い高坏で、口縁を僅かに外反させる。北東側の床面から出土した。

45号竪穴住居跡 (図版32-(2), 第77図)

39号・43号住居との切り合いがあり、39号住居よりは古いが、43号住居との新旧関係は分からぬ。住居の平面プランは長方形を呈し、一方の短辺の長さは3.15m, 床面までの深さは10cm前後を測るが、ベット側の壁は殆ど残っていない。

このタイプの支柱穴は2本と思われるが、明瞭な柱穴は検出できていない。南西側の短辺沿いには幅1.10mの貼り床ベットが付設され、下層には不明瞭な掘り込みがある。南東側の壁際には楕円形の室内土壙が掘られている。

炉跡が不明であるが、A-Bライン上にある円形のピットが炉とすれば位置的には適しており、その延長線上にあるピットを支柱穴の1本と仮定すると短辺に対して異常に縦方向が長く



第78図 46号・48号竪穴住居跡実測図 (1/60)

なり考えにくい。

図示できる出土遺物はない。

46号竪穴住居跡 (図版33-(2), 第78図)

台地の南東端で検出した竪穴住居跡であるが、東側が崖面となり削平を受けている。他の遺構との重複はなく、住居の平面形状は方形であろう。

住居の規模は削平で定かでないが、西側の壁辺は4.40mを測り、床面までの深さは15cm前後である。支柱穴はP1-P3の3本を検出したが、なぜかしら1本が見当たらない。柱間はP1-P2間が1.95m、P2-P3間が2.05mを測る。

北壁には淡黄褐色粘土で「U」字形のカマドが付設されているが、柱軸の方向に対して東に振れている。中央部分には小型の甕を倒立させ支脚にしたと思われる粘土のベースが遺存していた。その周囲には円形の火床が残っていた。

出土遺物は殆どなく、図示できる土器もない。

47号竪穴住居跡 (図版22-(2), 第65図)

中世の溝である11号溝の内側で検出した竪穴住居跡である。他の遺構との重なり具合は30号住居と大半が重複しており、62号土壙とも一部重なっており、すべての遺構よりも当該住居の方が古い。

住居の平面プランや規模及び支柱穴などは分からぬ。床面までの深さも5.0cmほどで出土遺物も皆無に近い状態である。

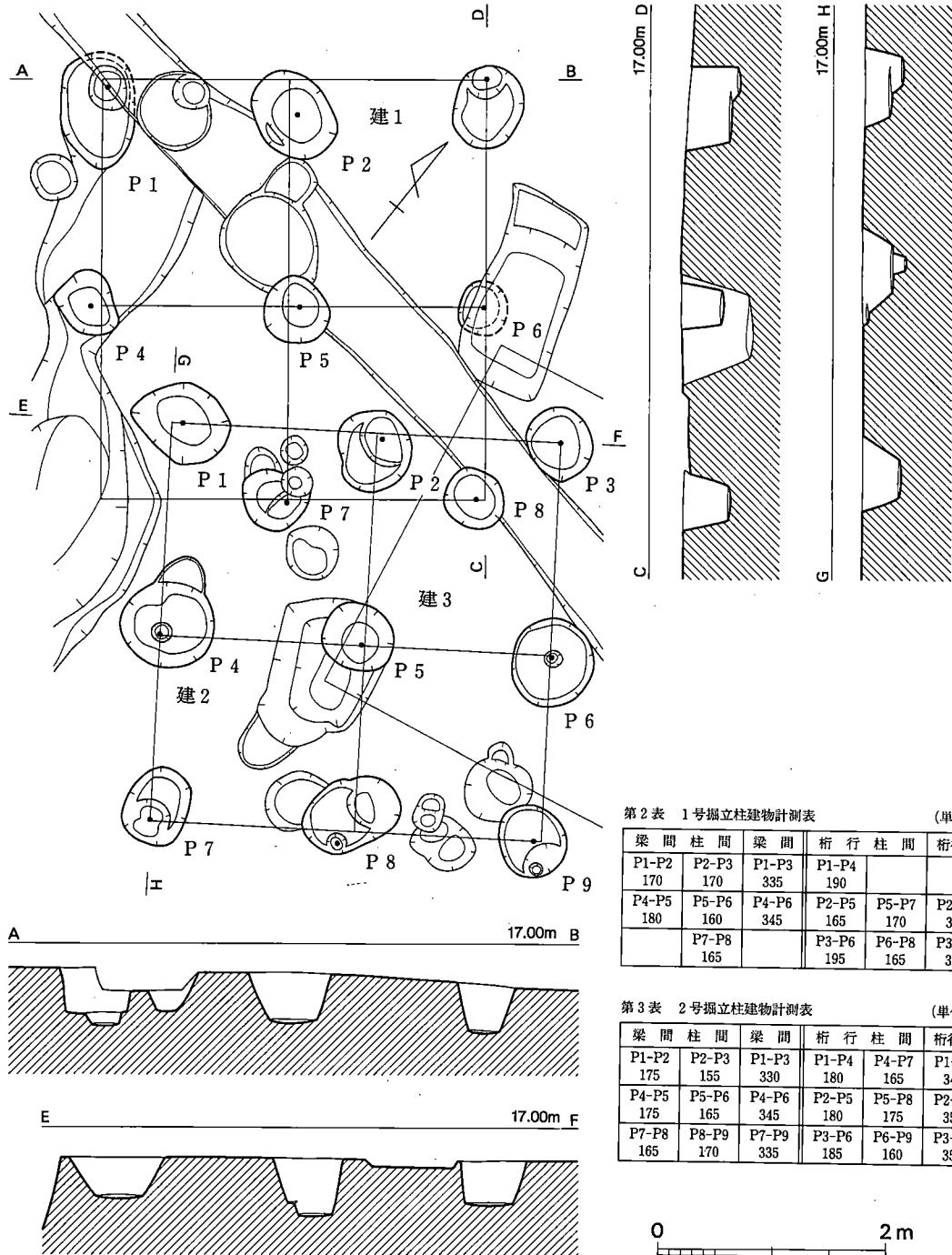
48号竪穴住居跡 (第78図)

西台地の最も東側に位置する竪穴住居跡で、2/3以上が削られ消失している。他の遺構との重複はない。

住居の形状は分からぬが、西側の壁面のみが遺存しており、その長さは4.5mを測り、床面までの深さは30cm前後である。床面は貼り床ではなく、硬く踏み固められていた。この住居には他の住居と違い、幅30cmぐらいの壁溝が巡っている。その他のこととは不明である。

出土遺物も図示できるものはない。

(2) 掘立柱建物



第79図 1号・2号掘立柱建物実測図 (1/60)

西台地での図上で復原した掘立柱建物は総数8棟を数えるが、他にも多くのピットがあり、図上で確認した掘立柱建物は古墳時代頃の所産と考えられ、弧状に巡る濠の内部に中世頃の掘立柱建物が存在する可能性はあるものの、ここでは確実な建物についてのみ説明する。

1号掘立柱建物 (図版34-(1), 第79図)

調査区の北東側で検出した掘立柱建物で、主だった重複関係は、2号・3号掘立柱建物、12号溝、4号井戸との重なりがあり、その新旧関係は溝と3号掘立柱建物よりは新しいが、井戸よりは古く、2号建物との新旧関係は分からぬ。

建物の規模は2間×2間の総柱で、高床式の貯蔵庫と推測される。各柱間は計測表に示しているとおりである。2号掘立柱建物の規模と変わらないことから建て直しが図られたとも考えられよう。柱穴内からの出土遺物がないため時期決定が難しいが、おそらくカマドを持った時期の竪穴住居に伴う建物と思われる。

2号掘立柱建物 (図版34-(1), 第79図)

1号掘立柱建物と北側で重なる2間×2間の総柱建物で、新旧関係は3号掘立柱建物よりは新しいが、溝との関係ははっきりしない。1号掘立柱建物とは面的に重複してはいるもののピットの切り合いかないため新旧関係は分からぬ。規模的にも1号建物と同等であることから時期的にもそう掛け離れたものではないと考えられる。

3号掘立柱建物 (第80図)

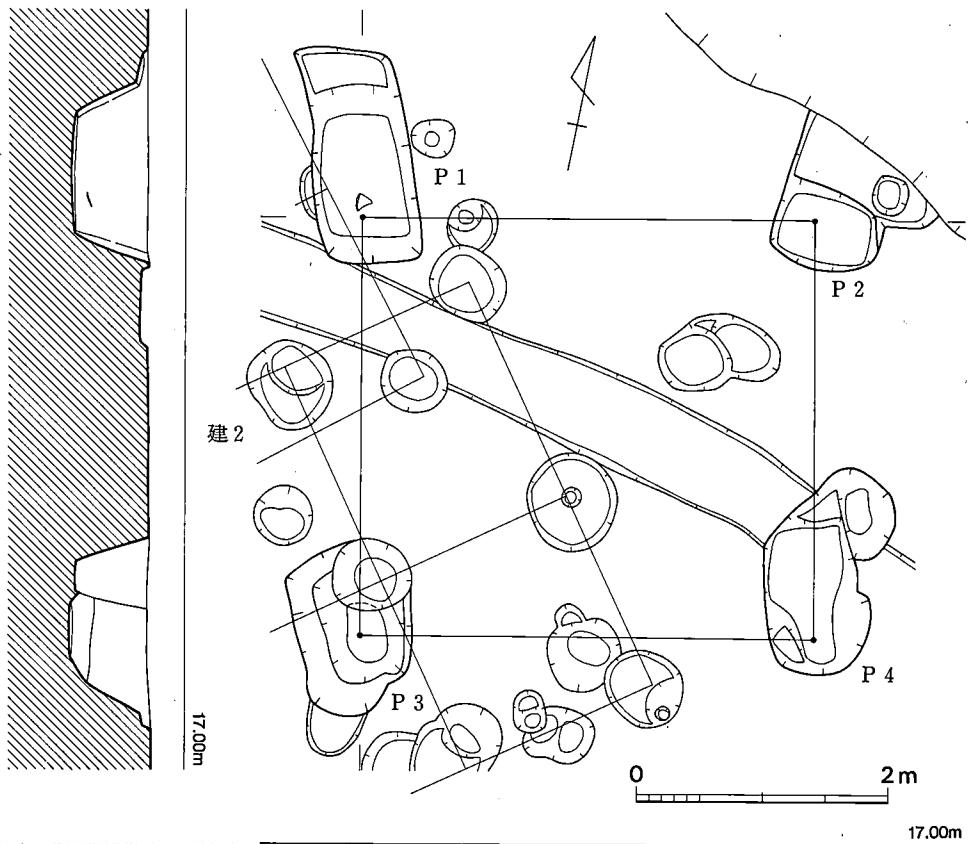
この建物は他の掘立柱建物とは違って各柱間の規模や柱穴の形態が異なる建物で、柱穴の掘方が長方形を呈している。重複関係は1号・2号建物や中世の大溝よりも古く、柱穴の数が4本なのかさらに北側に延びるのかははっきりしないが、延びるとしたら大溝の肩部でピットが検出されているはずであるがないことから、おそらく1間×1間の規模と推測され、弥生時代後期の集落に伴う建物と考えられる。

4号掘立柱建物 (第81図)

調査区の西端で検出し、5号建物と重複している。一筋2間分の柱列しか検出しておらず、建物になるのかどうか不明だが、柱穴の大きさ及び深さが近似しているので建物として取り上げる。柱間寸法は1.7m等間である。建物の性格は不明である。

5号掘立柱建物 (第81図)

4号建物と重複し、同様に一筋の柱列しか検出していない。柱間を3間として図示したが、

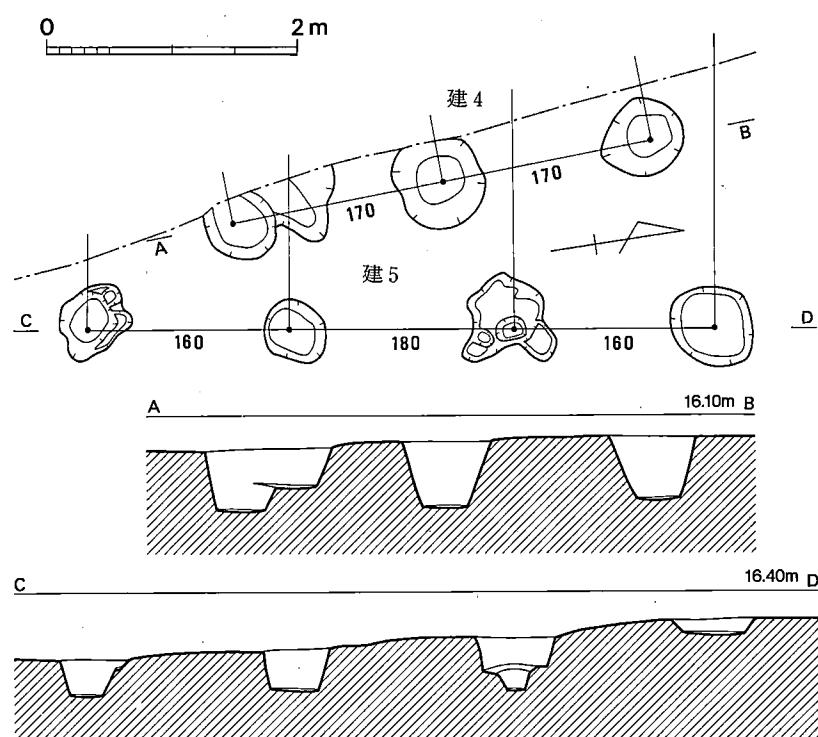
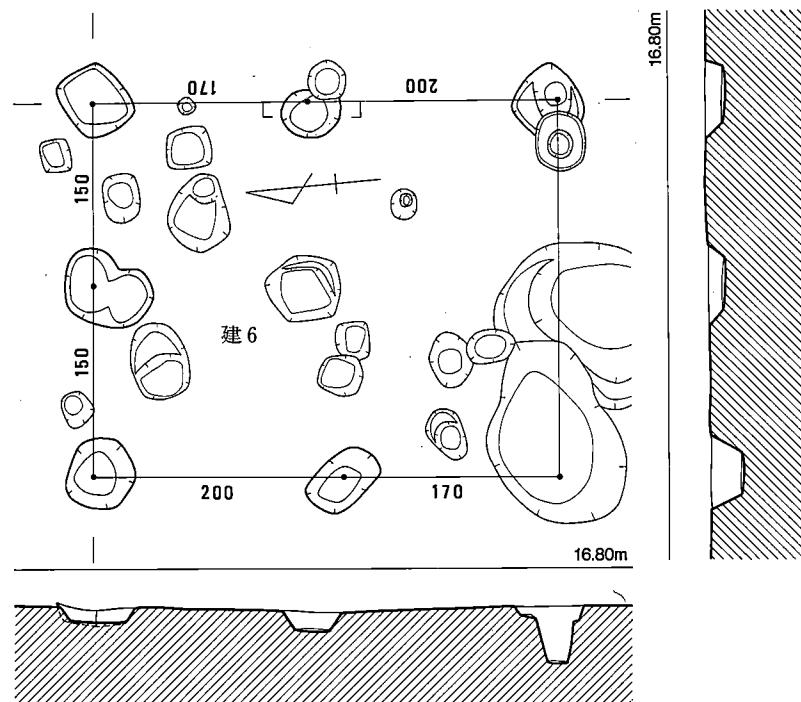


第80図 3号掘立柱建物実測図 (1/60)

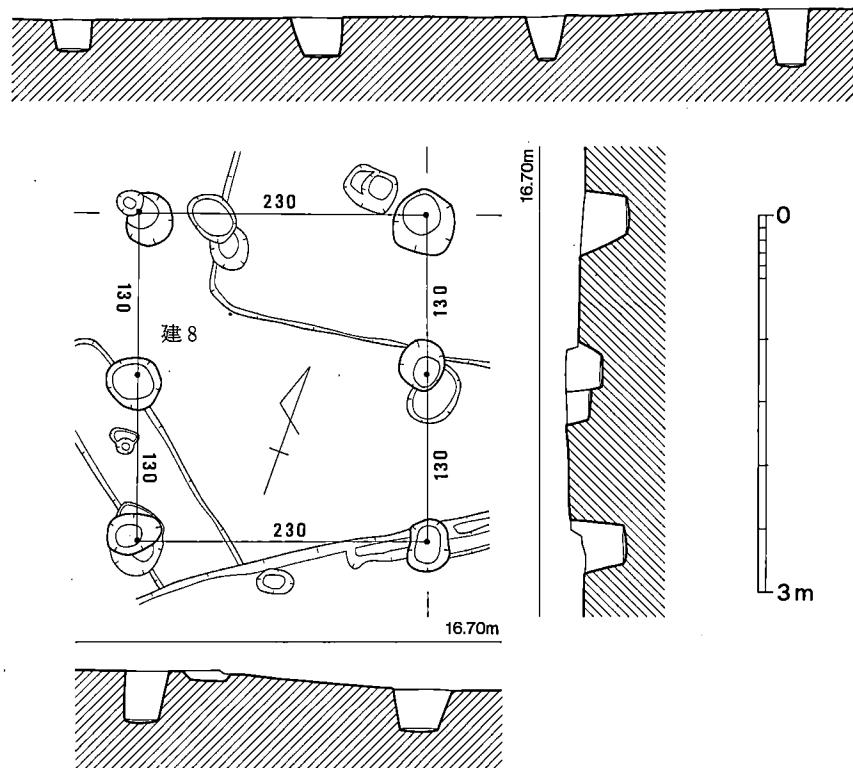
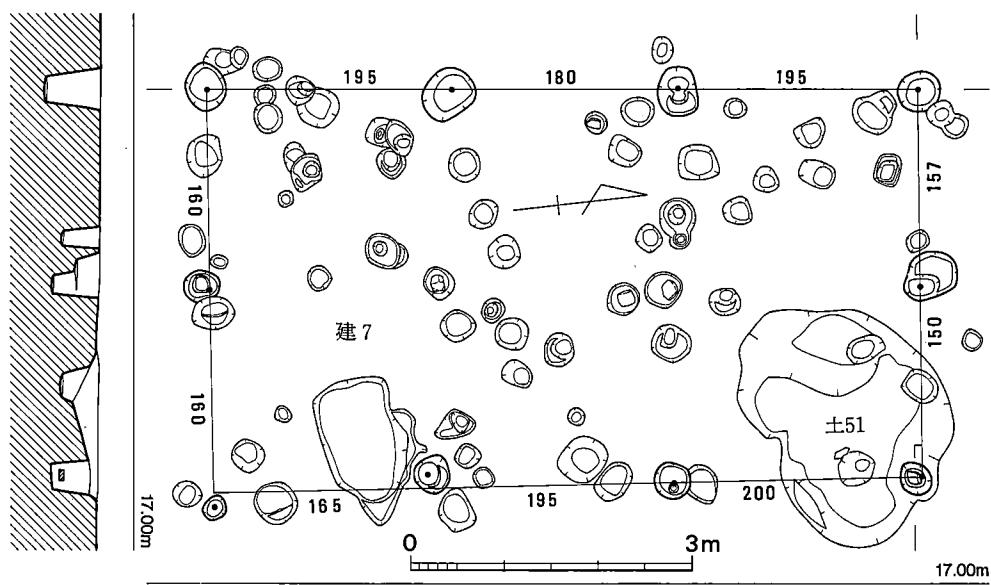
一番北のピットは浅く、柱穴ではないかも知れない。柱間寸法は、南から、 $1.60m \cdot 1.80m \cdot 1.60m$ である。

6号掘立柱建物 (第81図)

6号竪穴住居と重複し、住居を切っている。西柱列の一番南の柱穴が大きなピットにより破壊され、検出していないが、梁行2間・桁行2間の倉庫であろうと推測する。柱間寸法は、東柱列が南から、 $2.0m \cdot 1.70m$ 、西柱列が北側から、 $2.0m \cdot 1.70m$ である。北柱列は西から、 $1.50m \cdot 1.40m$ である。



第81図 4号～6号掘立柱建物実測図 (1/60)



第82図 7号・8号掘立柱建物実測図 (1/60・1/80)

7号掘立柱建物 (第82図)

調査区の北辺部で検出した。東柱列は一部で51号・55号土壙と重複している。柱配置がやや不揃いであるが建物として取り上げ、桁行3間・梁行2間と考える。桁行方向の柱間寸法は、東柱列は南から、1.70m・1.95m・1.98m、西柱列は同じく1.99m・1.80m・1.90mである。梁行寸法は北柱列で西から、1.56m・1.50mである。家屋であろうか。

8号掘立柱建物 (第82図)

8号B住居と一部重複し、住居を切っている。桁行2間・梁行1間の建物で倉庫であろう。柱間寸法は、桁行方向が東西東柱列とも1.30m等間、梁行方向は、2.30mである。

(3) 土 壙

調査区全域にわたって土壙と考える遺構を検出した。これらは、他の遺跡で検出した土壙がそうであるように、営まれた時期によってその形状が異なっている。本遺跡では、調査時に土壙・溝・竪穴等として遺物を取り上げたが、それらはここで土壙として報告する。

1号土壙 (図版34-(2)・58、第83・124図)

調査区の西側に検出した。12号住居を切り、南接して2号土壙がある。溝状に細長いプランを呈するため、調査時は9号溝として遺物を取り上げた。この部分の削平は著しく、現状で長軸10.9m、最大幅1.9m、深さ1.2m弱を測る。出土遺物は土師器・須恵器・瓦が主体で、土錘がある。その時期幅は奈良時代～中世であり、この土壙は中世の所産であろう。

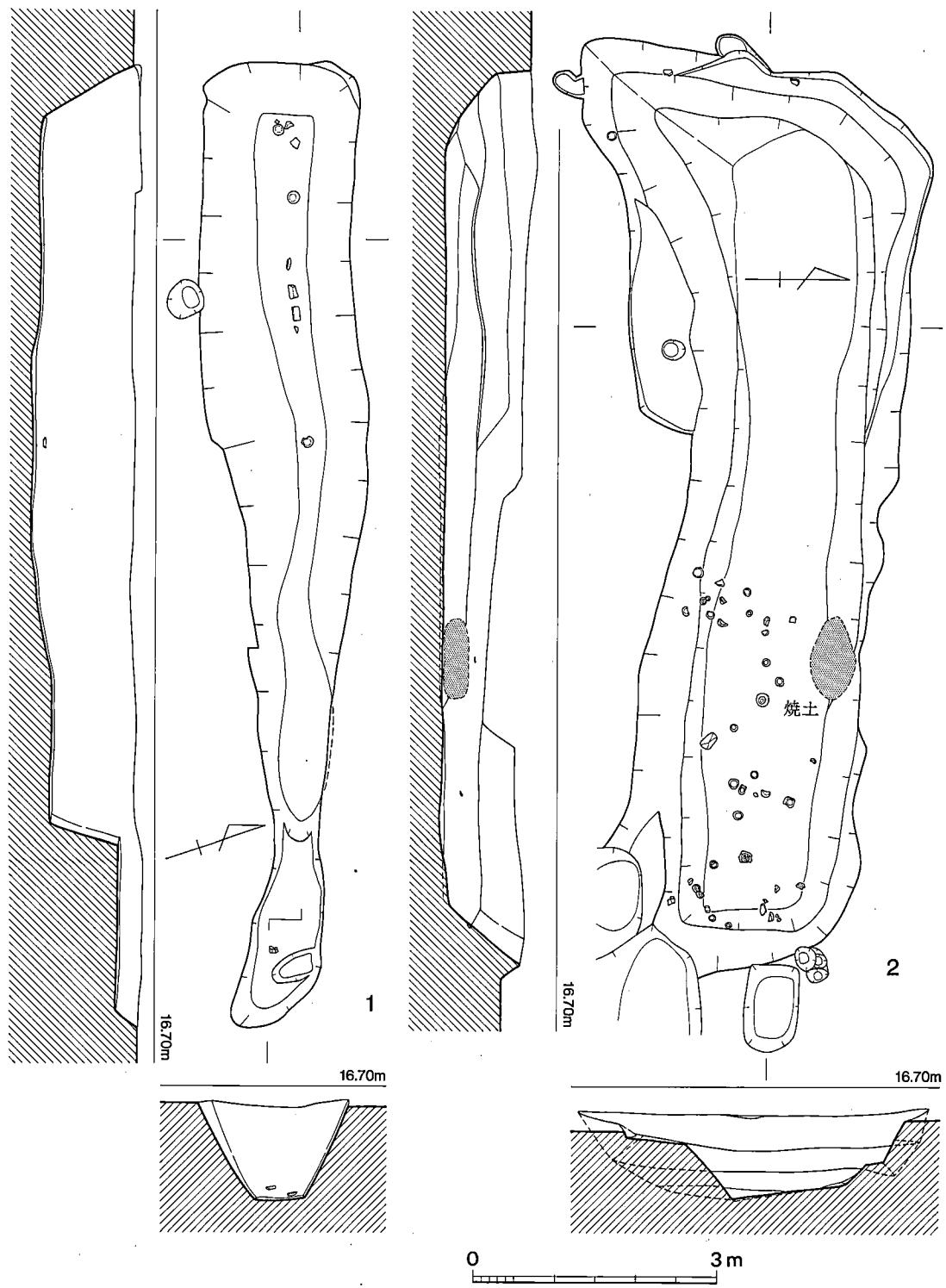
2号土壙 (図版34・59・60、第83・125・126図)

1号土壙の南に検出した。溝状に細長いプランを呈するため、調査時は10号溝として遺物を取り上げた。この部分も削平が著しく、現状で長軸10.65m、最大幅4.2m、深さ1.2m弱を測る。出土遺物は土師器・磁器・瓦で、所属時期は1号土壙と同様に中世であろう。

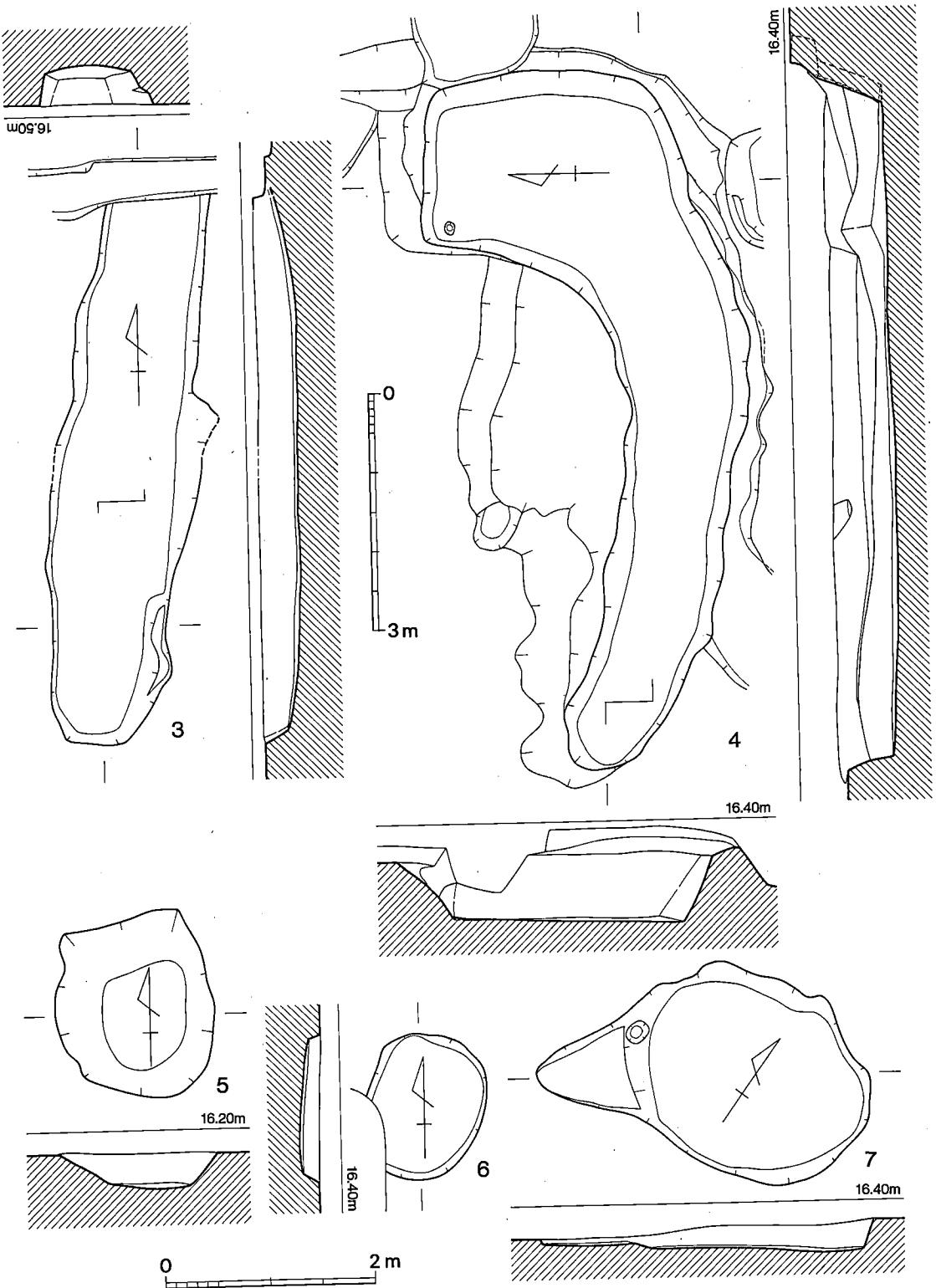
3号土壙 (図版60～62、第84・126・127図)

調査区の西側、4・5号溝に切られた状態で検出した。1・2号土壙と同様に溝状に細長いプランを呈する。現存のプランで長軸6.1m、最大幅1.95m、深さ0.5m程を測る。出土遺物は、土師器・須恵器・陶磁器・瓦が主体を占める。所属時期は1・2号土壙と同様に中世であろう。

4号土壙 (図版62、第84・128図)



第83図 1号・2号土壤実測図 (1/80)



第84図 3号～7号土壤実測図 (1/60・1/80)

3号土壙の南に検出した。9号土壙と一部重複し、2号溝が本土壙の南側掘り込みの肩のラインに沿うように走る。プランは矩形を呈し、長軸9.15m・最大幅2.5m・深さ1.2mである。出土遺物は、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・瓦で、所属時期は中世であろう。

5号土壙 (第84・128図)

4号土壙の北に検出した不整形の土壙である。南北軸長1.8m、東西幅1.5mを測る。出土遺物は弥生土器・土師器・瓦等である。所属時期は中世であろう。

6号土壙 (第84・128図)

2号土壙のすぐ南に検出した。検出時においては、長軸1.4m、短軸長1.1m、深さ20cm弱を測る。出土遺物は、中世の土師器である。

7号土壙 (第84図)

6号土壙のすぐ南に検出した。検出時においては、長軸2.4m、短軸長1.9m、深さ30cm弱を測る。出土遺物は皆無で、所属時期は不明である。

8号土壙 (図版62、第85図)

2号土壙の西、6・7号溝の間に検出した。東西二つの土壙が重複しているが、一つの土壙として報告する。長軸は共に2m程、幅は1.28m、0.7m、深さは共に30cm程である。出土遺物は図示できない若干の土器小破片と瓦類であり、所属時期は奈良時代以降である。

9号土壙 (第85図)

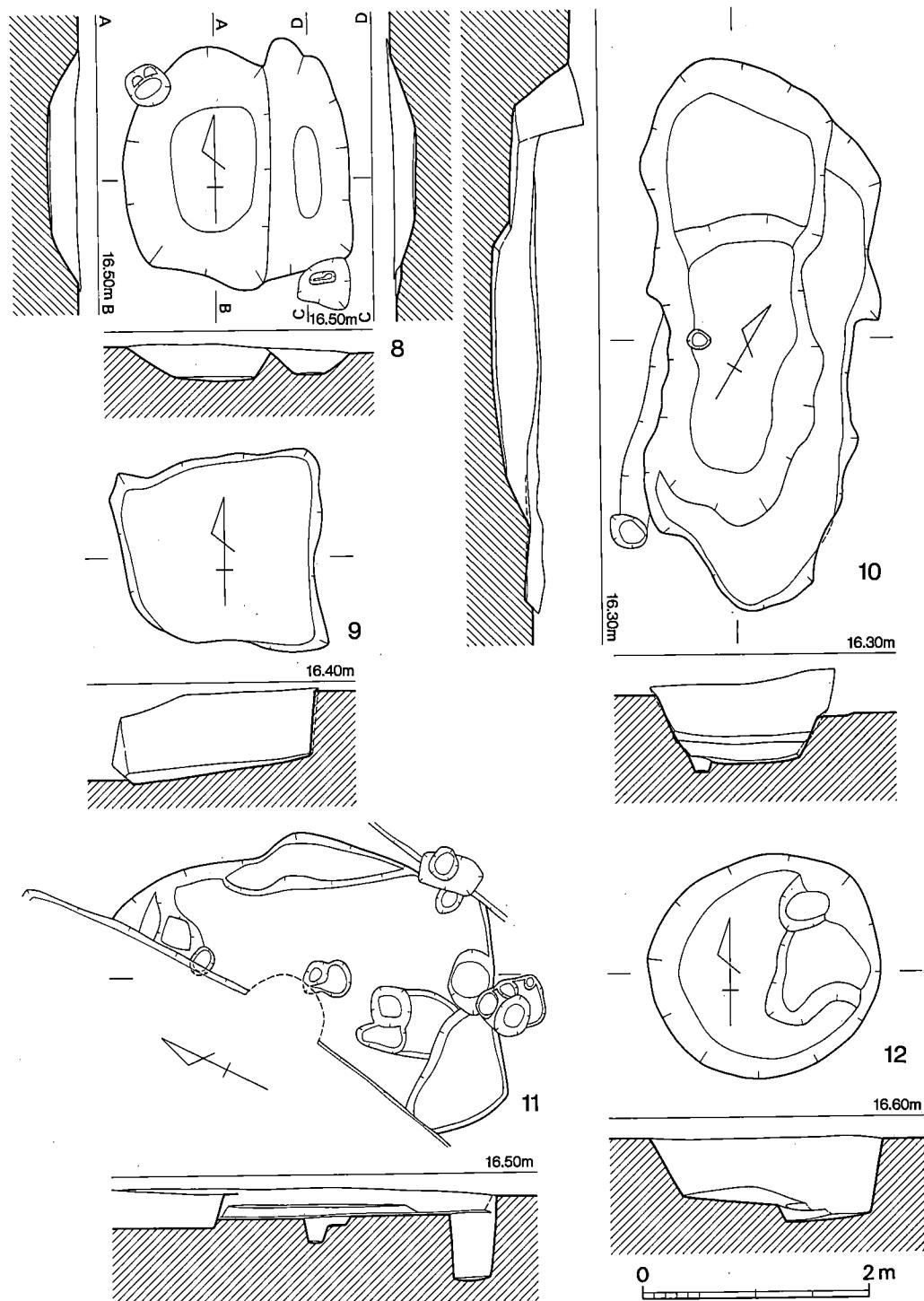
4号土壙に東接して検出した。不整形ではあるが、ほぼ方形を呈する。長・短軸共2m弱、深さ80cm弱である。出土遺物は、土師器・磁器・瓦類で、所属時期は中世であろう。

10号土壙 (図版62、第85・130・131図)

3号住居の中央に掘り込まれ、プランは不整形で二段掘りのものである。上端で長軸4.95m、幅は2.1m～1.6m、深さは最深部で80cmを測る。出土遺物は、土師器・磁器・瓦類で、所属時期は中世であろう。

11号土壙 (図版62、第85・130・131図)

3号住居の東壁に切られた状態で検出した。長方形に近いプランで、遺存部で、長さ3.3m、幅2.3m、深さ20cm程である。出土遺物は須恵器・土師器である。



第85図 8号～12号土壙実測図 (1/60)

12号土壙 (第85・132図)

調査区の西端部、4号土壙の北に検出した。径1mのほぼ円形のプランを呈し、深さは70cm程度である。出土遺物は須恵器・土師器である。

13号土壙 (第86・132図)

3号溝の北辺に接して検出した。上端で長軸1.4m、幅は1.2m、深さ30cm程度である。出土遺物は須恵器・土師器である。

14号土壙 (第86・132図)

3号溝の西端部に検出し、ピットと重複している。上端で長軸1.3m、幅は1m、深さ30cm程度である。出土遺物は、須恵器・土師器・瓦である。

15号土壙 (第86図)

6号住居の西に検出した。上端で長軸1.5m、最大幅1.15m、深さ20cm程度である。

16号土壙 (第86・132図)

15号土壙の北に近接して掘り込まれ、4号溝に切られている。長軸1.8m、幅0.9m、深さは北部が40cm、南部の浅い方が10cm程度である。

17号土壙 (図版16・19・35・62・63・133・134、第86図)

18号土壙と重複し、25号住居の北西隅を切った状態で検出した。不整長円形で、長軸2.7m、幅1.9m、深さ30cm程度である。出土遺物は須恵器・土師器である。

18号土壙 (図版16・19・35・135、第86図)

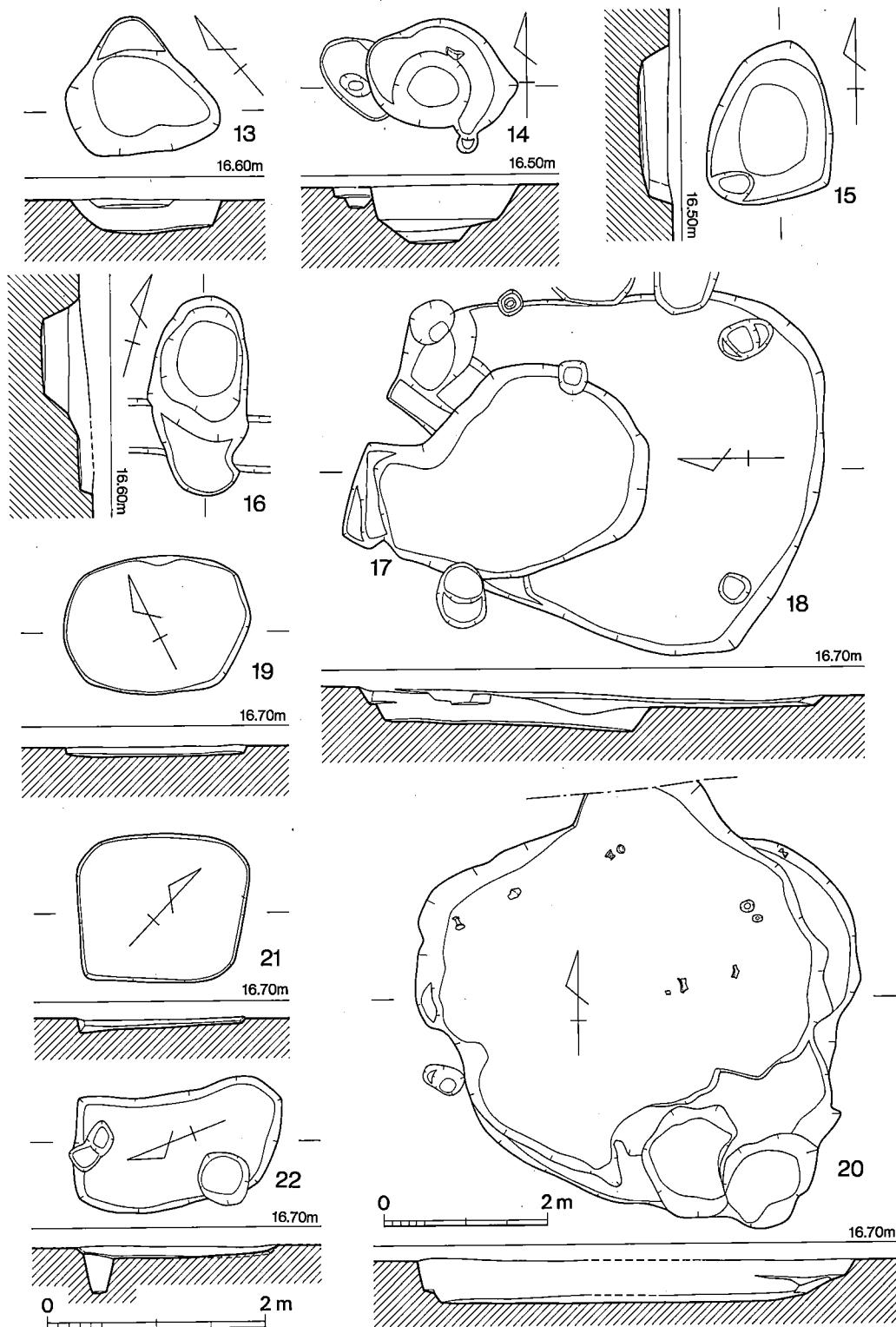
17号土壙と重複し、25号住居の北西隅を切っている。不整長円形で、長軸4m、幅3.2m、深さ10cm程度である。出土遺物は須恵器・土師器である。

19号土壙 (第86図)

8号住居の北西隅に検出した。長円形を呈し、長軸1.9m、幅1.25m、深さ10cm程度である。

20号土壙 (図版16・19・63・135・136、第86図)

17・18号土壙の北に、14号住居の西半部を切った状態で検出した。径5.4m程度の不整円形を呈する。深さは50cmである。出土遺物は弥生土居・須恵器・土師器である。



第86図 13号～22号土壤実測図 (1/60・1/80)

21号土壙 (第86図)

14号住居の南東隅に検出した。ほぼ方形を呈し、軸長1.7m、幅1.3m、深さ10cm弱である。

22号土壙 (第86図)

21号土壙のすぐ東に検出した。長軸1.85m、幅1m、深さ10cm程である。

23号土壙 (図版16・36・64、第87・136・137図)

25号住居の東辺を切る状態で検出した。調査の結果、二つの土壙が重複していることが判明した。すなわち、大きな不整円形の土壙Aと、その南側に東西方向に掘り込まれた不整長方形の土壙Bである。しかし、出土品は23号土壙として取り上げているので、どちらに所属するかは不明である。土壙Aは長軸6.27m、短軸5.5m、深さ40cm程である。土壙Bは5m、幅2.5m程、深さは40cm程である。出土遺物は上述の状況であるが、須恵器・土師器・磁器・瓦である。

24号土壙 (図版16、第87図)

23号土壙の東に検出し、小ピットと重複している。不整形で、南北長1.62m、東西幅1.3m程、深さは15cm程である。

25号土壙 (図版16、第87・137図)

24号土壙に東接して掘り込まれている。不整形で、南北長2.8m、東西最大幅2m程、深さ70cm程である。出土遺物は、須恵器・土師器・瓦である。

26号土壙 (図版16、第87図)

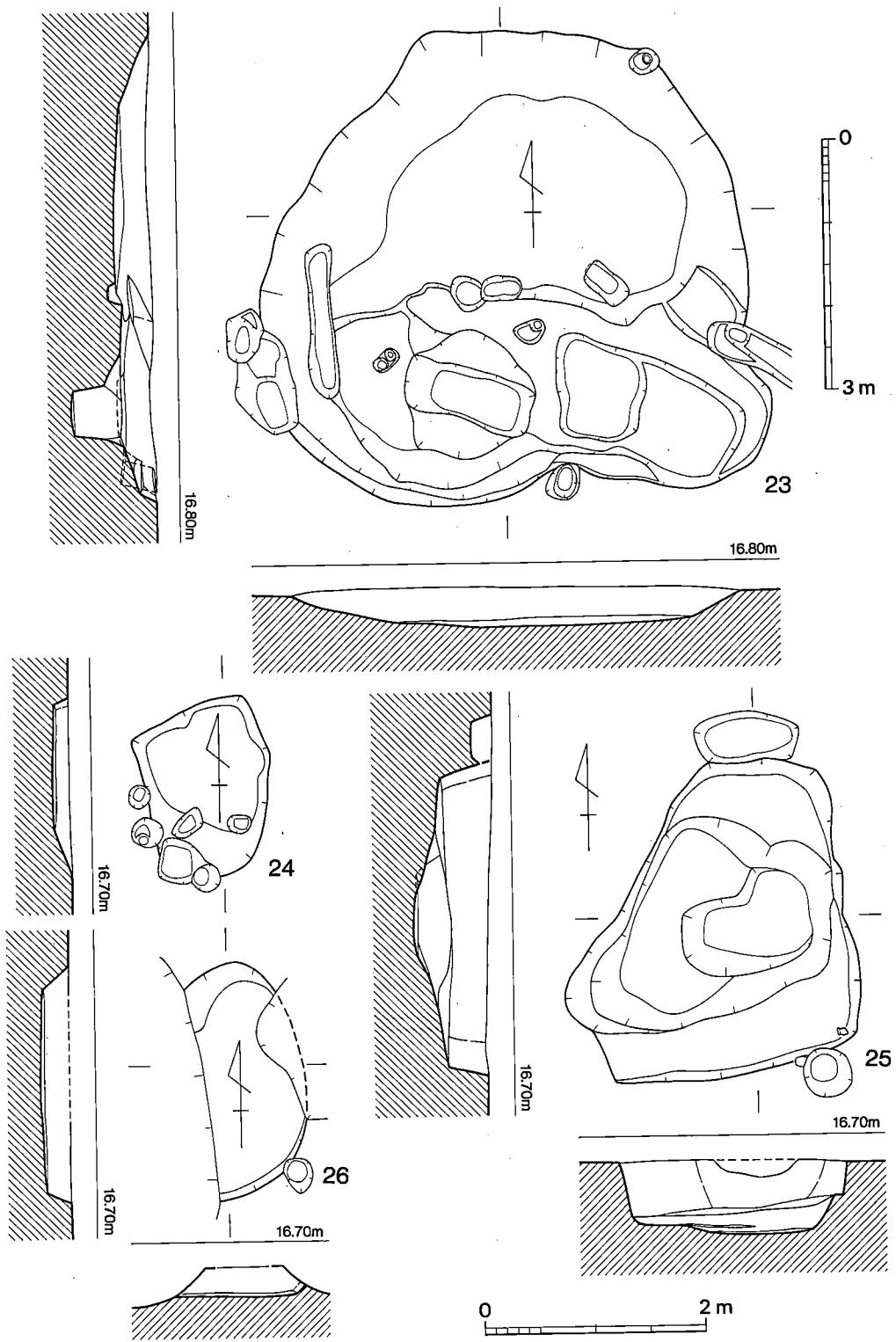
23・25号土壙の間に検出した。西は23号土壙に、東は25号土壙に切られる。南北長2.1m、遺存部で幅1m弱、深さ30cm程である。

27号土壙 (第88図)

8 A号住居の東に検出した。長軸1.5m、幅1m程、深さ20cm程である。出土品は中世の土師器である。

28号土壙 (図版16、第88図)

11号住居の西壁を切る。長円形のプランを呈し、長軸2.9m、幅2.2m程、深さ1m程を測る。



第87図 23号～26号土壤実測図 (1/60・1/80)

29号土壙 (図版16・64, 第88・137図)

28号土壙・11号住居の南に検出した。長円形のプランを呈し、長軸2.5m, 幅1.45m, 深さ80cm程である。須恵器・土師器が出土している。

30号土壙 (図版16, 第88・137図)

13号住居の東壁を切る状態で検出した。二つの土壙が重なっているようであるが、一つの土壙として報告する。長軸3.3m, 最大幅2.4m, 深さは西で90cm, 東で65cm程である。土師器が出土している。

31号土壙 (図版16, 第88・137図)

10号住居竪穴部の東側中央に掘り込まれている。長軸2.9m, 幅1m, 深さ60cm程を測る。須恵器・土師器等が出土している。

32号土壙 (図版16, 第88図)

10号住居の北壁と重複して検出した。長円形で、幅1m弱、長軸は1.7m程であろう。深さは10cmほどである。

33号土壙 (第88図)

10号住居の北東に検出した不整円形プランの土壙である。径2.8m, 深さ45cm程である。

34号土壙 (第89図)

5号溝東端部の南に検出した。ほぼ円形の土壙で、長軸1.6m, 幅1.35m, 深さ20cm程である。

35号土壙 (第89図)

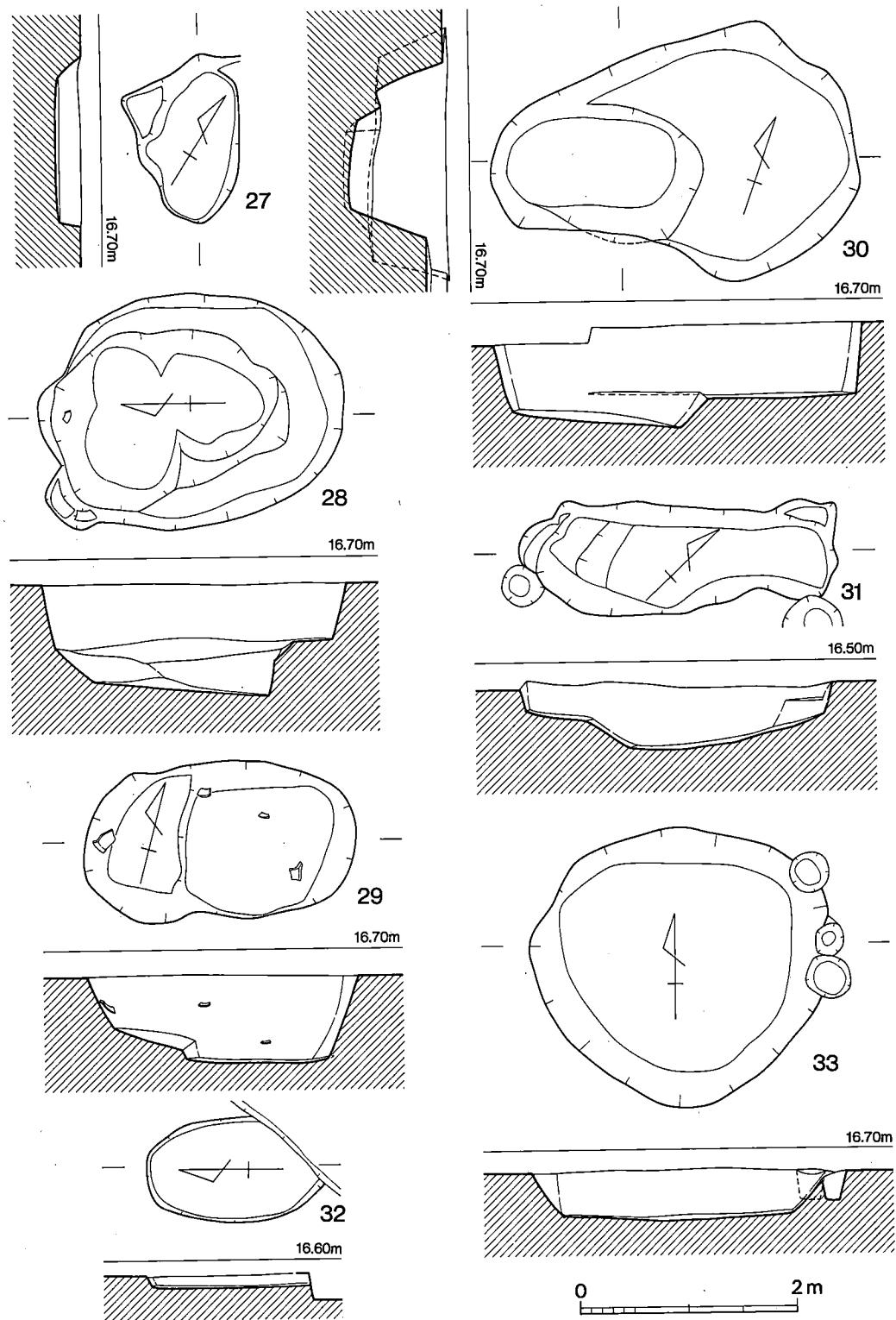
5号溝東端部で重複して検出した方形の土壙で、長軸1.7m, 幅1.55m, 深さ20~30cmである。

36・37号土壙 (図版19・64, 第89・138図)

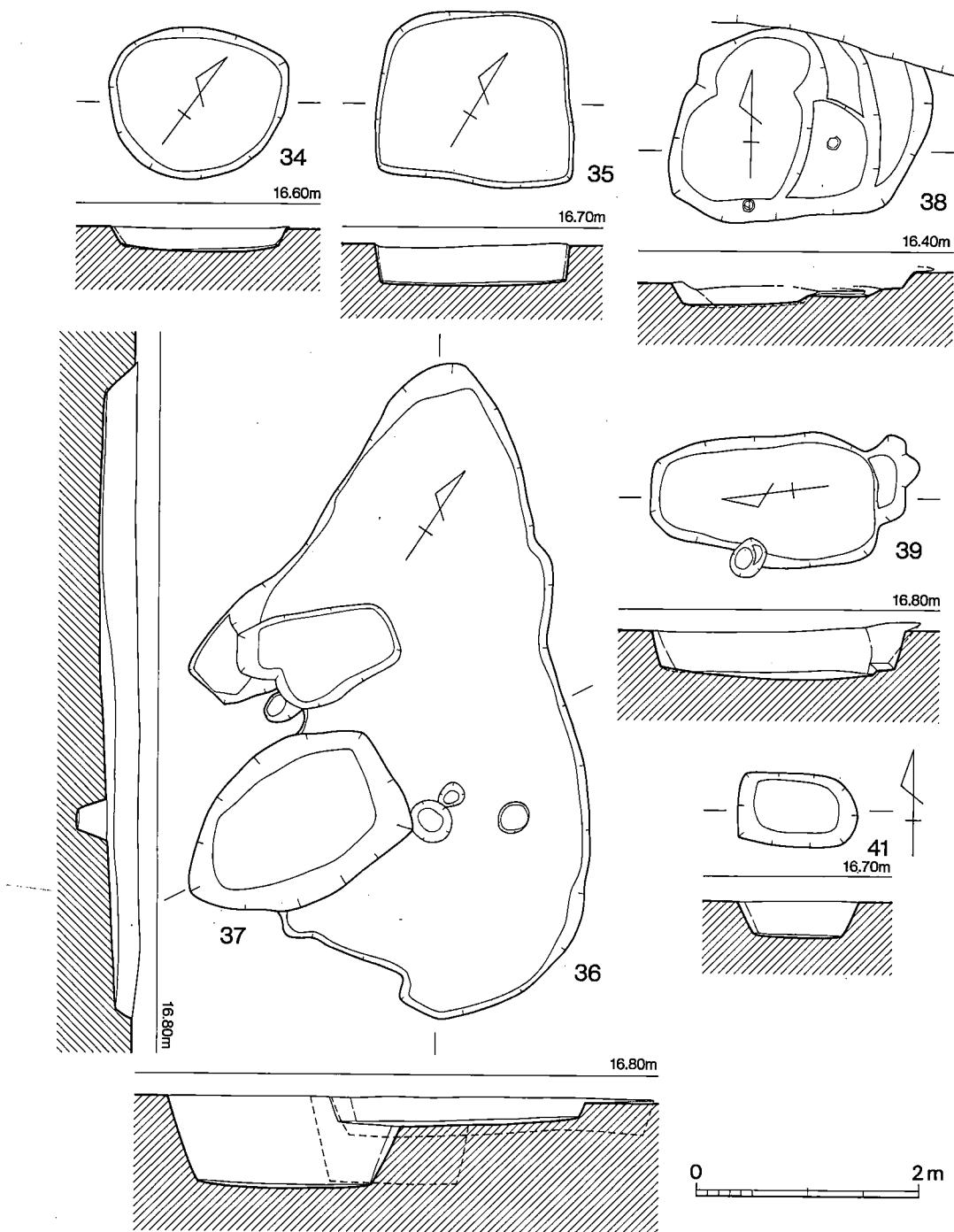
26号住居の南西隅を切る状態で検出した。36号は長軸5.85m, 幅2.4m, 深さ30cm前後である。須恵器・土師器・瓦が出土している。37号は長軸2.1m, 幅1.45m, 深さ80cm前後である。

38号土壙 (図版19・64, 第89・138図)

2号土壙の南に検出した。底は東から西へ階段上に深くなる。長軸2.23m, 幅1.7m, 深さは15cm~20cm程である。中世の土師器が出土している。



第88図 27号～33号土壤実測図 (1/60)



第89図 34号～38号・41号土壤実測図 (1/60)

39号土壙 (図版64, 第89・138図)

26号住居の東に検出した。長軸2.1m, 幅1.2m, 深さ30cm程である。中世の土師器が出土している。

40号土壙 (図版64, 第91図)

39号土壙の南に検出した。不整形の2基の土壙(東側; A, 西側; B)が重複し, AがBを切っている。しかし, 調査時は1基の土壙として出土品を取り上げている。土壙Aは, 長軸3.6m, 幅2.2m, 最深部で深さ65cm程である。西側に, 投げこまれた状態で焼土を検出した。土壙Bは, 東半部を土壙Aに切られており, 遺存部で長さ3m, 幅2.3m程である。出土品は瓦・中世の土師器である。

41号土壙 (図版36, 第89図)

2号土壙の東肩に切られる。長軸1.1m, 幅0.7m, 深さ35cmである。

42号土壙 (図版36・64, 第90・138図)

2号土壙の東肩部分と重複する。長軸3.9m, 幅1.6m, 深さ40cmである。出土遺物は, 土製管玉・土師器・瓦である。

43号土壙 (図版37, 第90・138図)

42号土壙のすぐ南に検出し, 東の44号土壙と接している。方形の深い部分が43号土壙で, 東西の長軸1.54m, 南北幅1.3m, 深さ30cmである。土師器・磁器が出土している。

44号土壙 (図版37・64・65, 第90・139図)

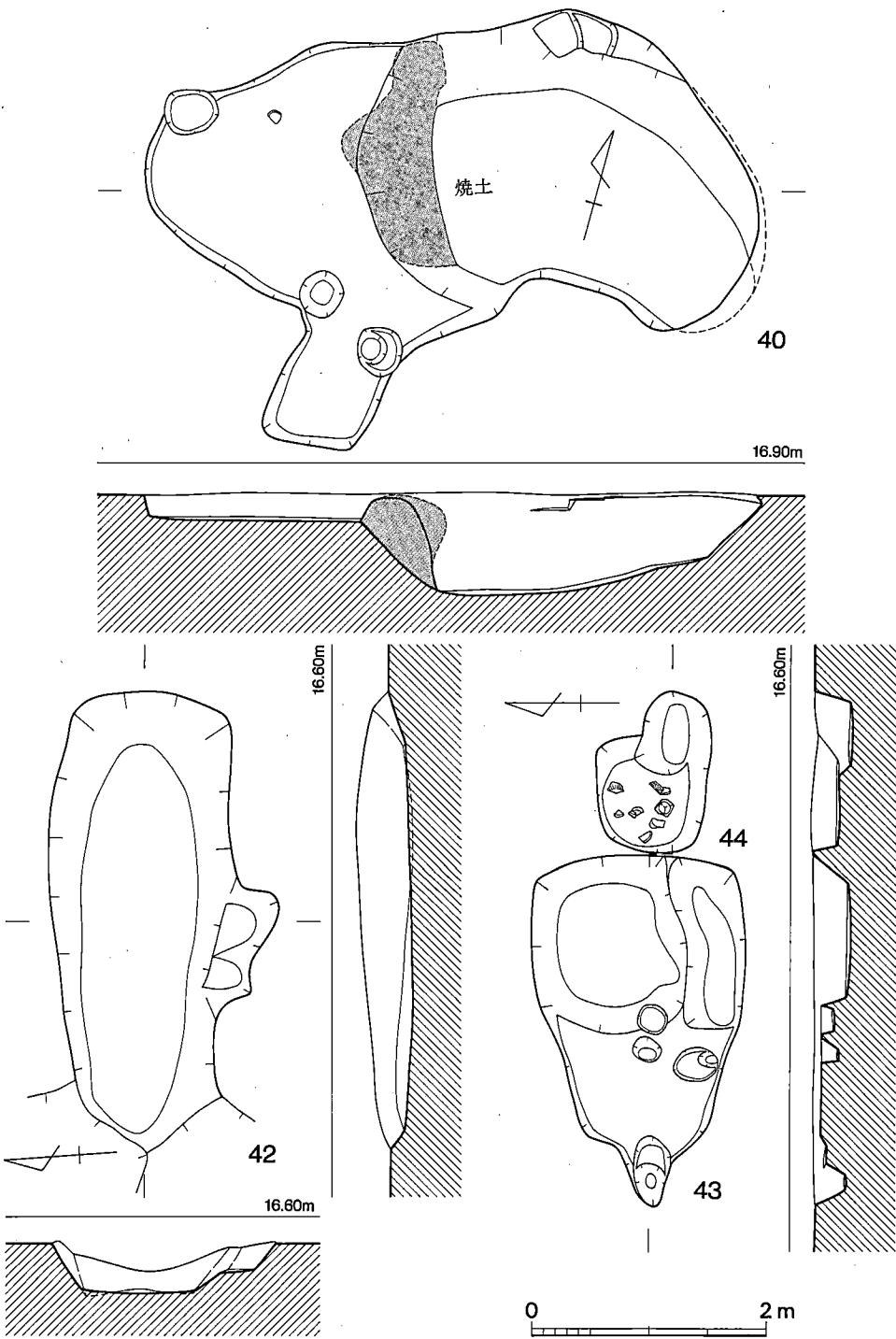
42号土壙のすぐ南に検出し, 西の43号土壙と接している。南東隅をピットに切られる。東西の長軸1m, 南北幅0.95m, 深さ20cmである。出土品は土師器である。

45号土壙 (図版37・65, 第91・139・140・141図)

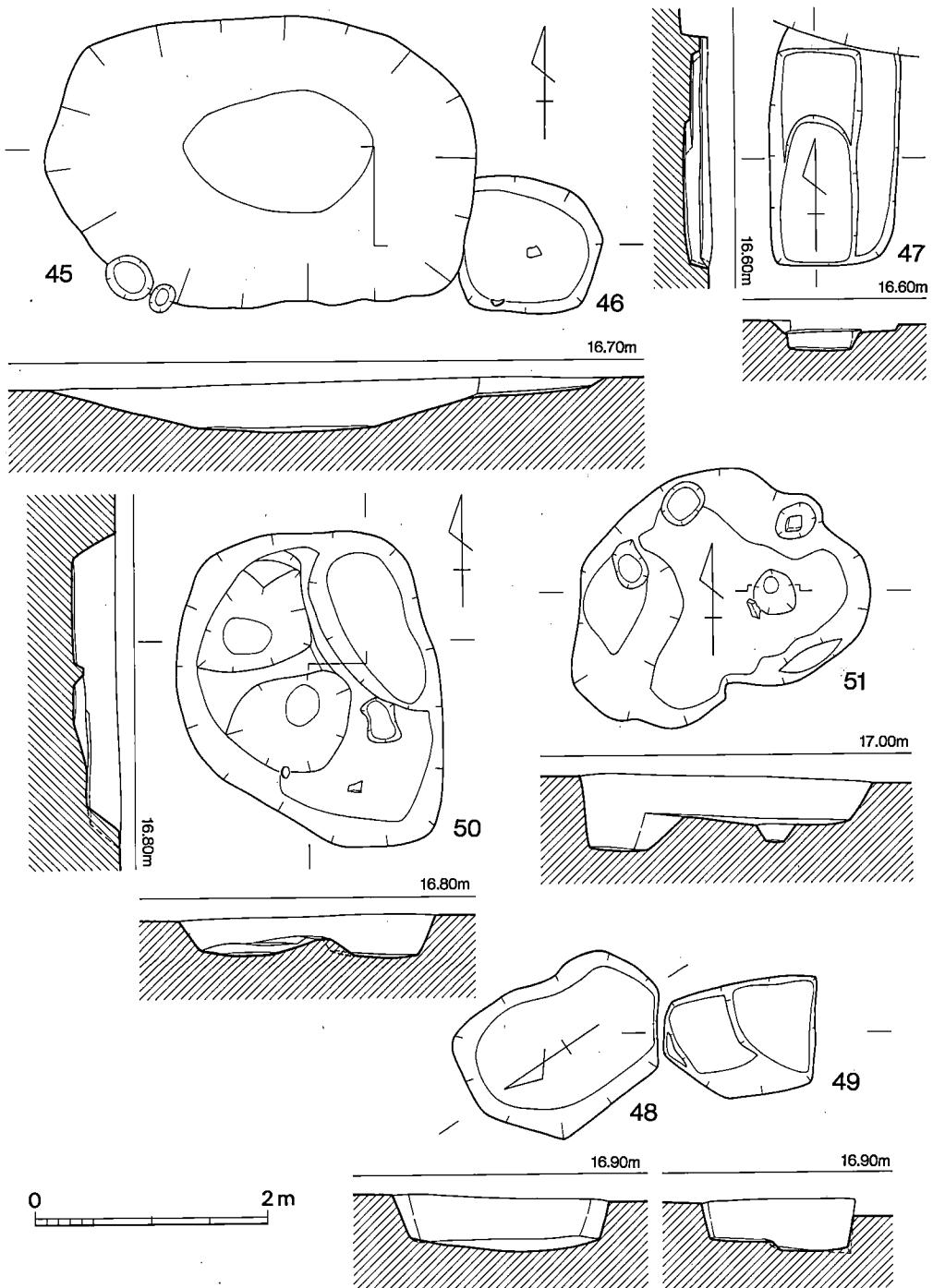
8号溝, 46号土壙と重複する。長軸3.7m, 幅2.5m, 深さ40cmである。多量の須恵器・土師器が出土している。

46号土壙 (図版37, 第91・141図)

45号土壙と重複する。東西長1.2m強, 幅1.18m, 深さ20cm程である。出土遺物は擂り鉢の破片である。



第90図 40号・42号～44号土壤実測図 (1/60)



第91図 45号～51号土壤実測図 (1/60)

47号土壙 (図版37-(1), 第91図)

47号土壙の東に検出した。長軸2m, 幅1.1m, 二段掘りで深さは一段目は10cm, 二段目までは28cmである。土壙墓の可能性を残す。

48号土壙 (図版37-(2), 第91図)

調査区の北辺部に検出した。長軸1.83m, 幅1.2m, 深さ44cmである。

49号土壙 (第91・141図)

48号土壙のすぐ南に接して検出した。長軸1.3m, 幅1m, 深さ46cmである。須恵器の破片が出土している。

50号土壙 (第92図)

49号土壙の南で、9号溝と重複している。不整円形で、長径3m, 短径2.3mである。底面は3つのピットがある。深さは30cm程である。

51号土壙 (図版65, 第92図)

7号建物の北東隅に建物と重複した状態で検出した。不整形なプランを呈し、東西長2.5m, 南北幅2m程, 深さは最深部で68cmを測る。瓦・砥石が出土している。

52号土壙 (第93図)

西の肩の一部を後世に深く掘り切られている。長軸2.9m, 幅2m程, 深さ32cmを測る。

53号土壙 (第93図)

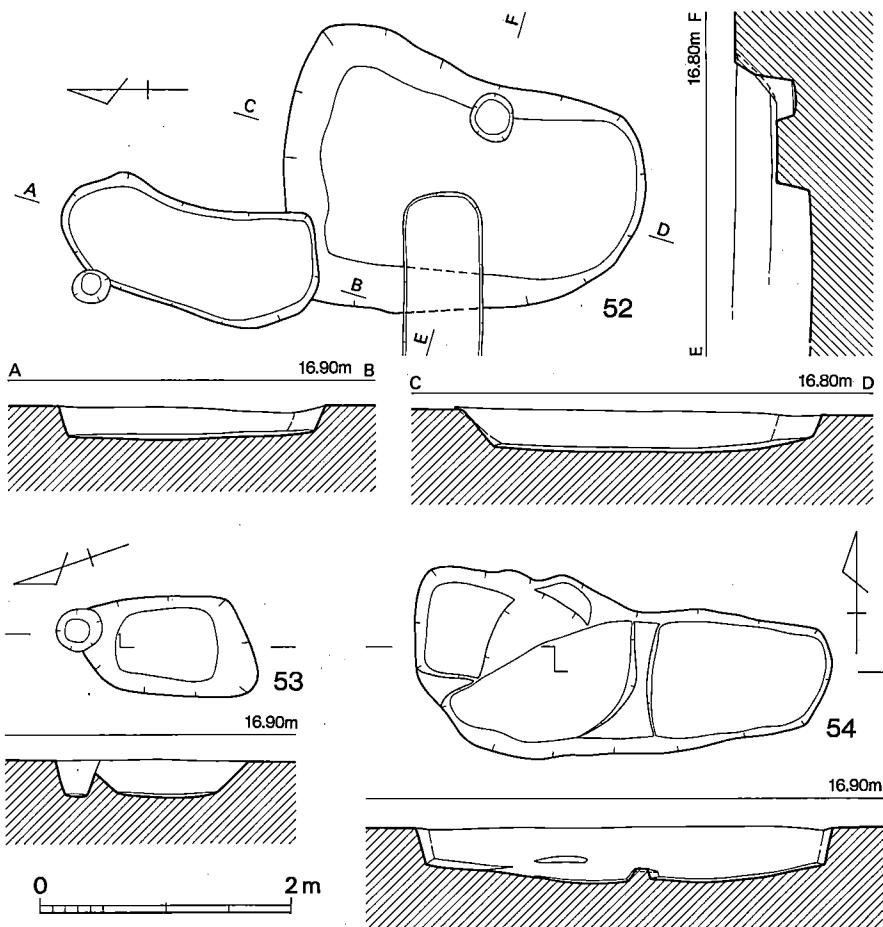
52号土壙の東に検出し、長軸1.35m, 幅0.8m程, 深さ28cmを測る。瓦が出土している。

54号土壙 (第93図)

52号土壙の南に検出し、長軸3.3m, 幅1~1.4m程, 深さ40cmを測る。

55号土壙 (図版38-(1), 第93図)

4号周溝状遺構の北西隣で検出した土壙で、平面形状が瓢箪形をしているが、両者の深さが異なることから2基の土壙が重複していることも考えられる。土壙の大きさは西側のテラス状部分を含めると東西軸が2.90m, 東側の円形状の土壙は2.30m×2.05m, 深さは西側の浅い方が35cm, 深い方は60cmを測る。西側と北側の一部は断面が袋状に掘られている。



第92図 52号～54号土壤実測図 (1/60)

主だった出土遺物はない。

56号土壤 (図版38-(2), 第93図)

調査区の北端の大溝の西側に隣接して検出した土壤で、調査区外に延びて完掘していない。平面プランは方形か長方形で、断面は舟底状を呈している。規模ははっきりしないが、南側の一辺は2.50m、深さは55cm前後を測る。

図示できるような出土遺物がなく時期がはっきりしない。

57号土壤 (図版39-(1), 第94図)

調査区の北側、27号竪穴住居跡の西側で検出した小形の土壤で、平面プランは隅丸長方形を

呈している。その規模は長軸が1.35m、短軸は90cmで深さが15cmと浅い。

出土遺物はない。

58号土壙 (図版39-(2), 第94図)

4号周溝状遺構の北東傍から検出した土壙で、平面形状が隅丸方形を呈している。断面が逆台形を呈し、その規模は四方が1.50m、深さは25cmを測る。

出土遺物はない。

59号土壙 (図版40-(1), 第94図)

58号土壙の東側で検出した楕円形の小形の土壙である。大きさは長軸が1.70m、短軸は1.0mで深さが35cm前後を測り、断面が舟形を呈している。

出土遺物は、土師器の特小皿と坏が出土している。

出土遺物

土 器 (第142図)

土師器 1は特小皿と呼称されている類の皿で、底部は糸切り痕が残る。口径は7.4cm、底径は6.0cm、器高は1.3cmである。

2～7は坏である。体部に丸みのあるタイプ、直線的につくるタイプ、口唇部を尖らすタイプや丸くつくるものなどがある。すべて底部は糸切りで、板圧痕が残るものもある。

60号土壙 (図版40-(2), 第94図)

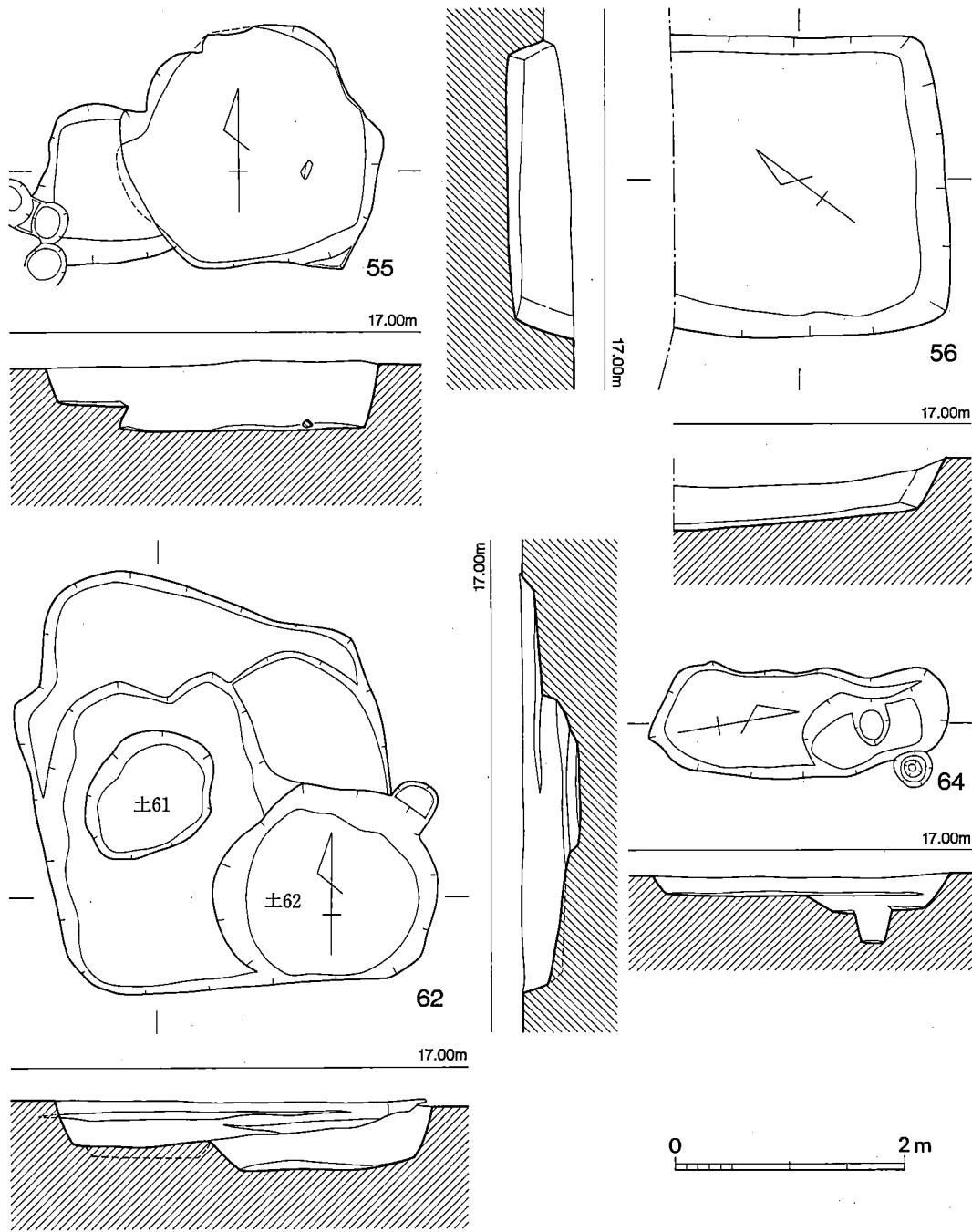
F-3区の59号土壙の東北側で検出した土壙で、平面形態が隅丸長方形を呈している。その大きさは長軸が1.35m、短軸が85cm、深さは65cmと深い。断面形が逆台形を呈し、床面の中央には小ピットがある。

出土遺物はない。

61号土壙 (図版41-(1), 第93図)

60号の東隣に位置する土壙であるが、遺構自体がかなり錯綜してはっきりしない。複雑な落ち込み内に少なくとも2基の土壙が存在しているようで、新旧関係は62号土壙が新しい。土壙の形状は隅丸長方形を呈していて、床面の北寄りには不整円形の土壙が掘られ二段掘りとなる。

中からの出土遺物は、弥生時代の丹塗り甕の破片と3方向に孔を穿った蓋と思われる土器片がある。



第93図 55号・56号・61号・62号・64号土壤実測図 (1/60)

出土遺物

土 器 (図版66, 第142図)

1は逆「L」字状の口縁の小型甕の破片で、口縁部内面から外面にかけては丹を塗布している。

2は器種がはっきりしないが、孔を穿った蓋形土器であろう。孔は3箇所に穿っている。

62号土壙 (図版41-(1), 第93図)

61号土壙との切り合いのある平面プランが円形を呈する土壙である。土壙の大きさは1.95m×1.70m, 深さは掘り込み面から55cm程度である。

主だった出土遺物はない。

63号土壙 (図版41-(2), 第94図)

55号土壙の北側に位置する土壙で、ピットとの重複はあるが、主だった遺構との重なりはない。平面形状は橢円形を呈し、その規模は長軸で2.60m, 短軸では1.25m, 深さは65cm前後を測る。

出土遺物は下層から土師器の皿が出土していたが、調査から10年が経過し遺物が行方不明になってしまっている。

64号土壙 (第93図)

57号土壙と27号竪穴住居跡の間で検出した土壙で、平面形状が不整橢円形を呈している。長軸が2.60m, 短軸は90cm前後を測り、深さは20cm弱である。

出土遺物はない。

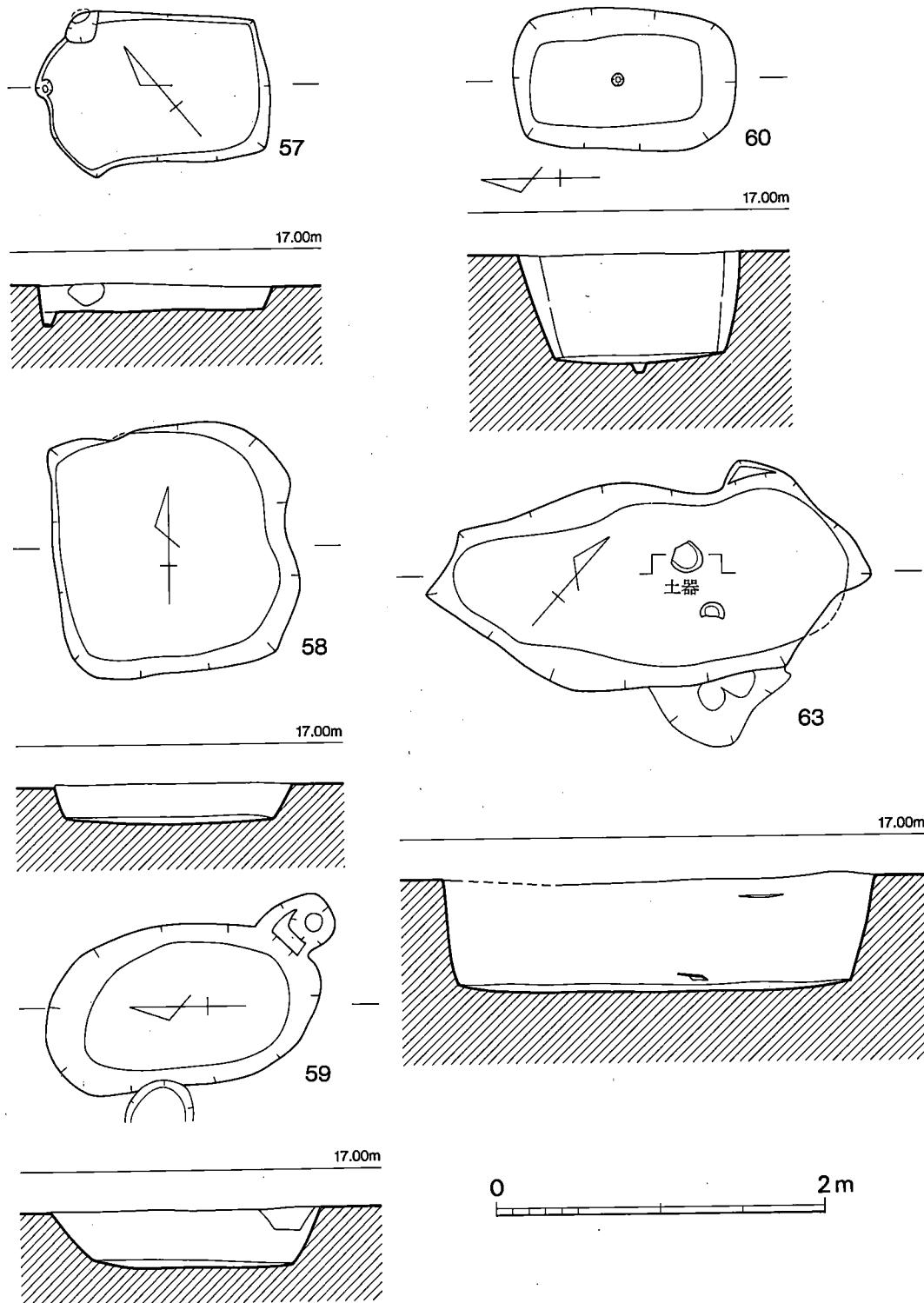
65号土壙 (図版42-(1), 第95図)

29号・30号竪穴住居跡の間に位置する土壙で、重複しているのは29号・30号住居とそれを切った不明瞭な浅い落ち込み、南側に接する土壙様の落ち込みで、いずれよりも新しい。平面プランは不整円形を呈し、断面は舟底状をなしている。大きさは3.15m×2.70m, 深さは50cmを測る。

出土遺物は、淡黄橙色を呈する土師質の鉢(火舎)の破片がある。この種の鉢は瓦質土器に多いタイプである。

出土遺物

土 器 (図版66, 第142図)



第94図 57号～60号・63号土壤実測図 (1/40)

土師器(瓦質土器) 65は口縁部から胴部にかけて直線的につくるタイプの鉢(火舎)で、口縁下には間隔を置いて2条の凸帯を貼付し、その間に2個一対の竹管文を重ねてスタンプしている。内面はハケを施している。

66号土壙 (第96図)

37号竪穴住居跡と67号土壙の間で検出した小形の土壙である。67号土壙とは接しているものの重複はない。平面の形状は橢円形を呈し、南側にテラスを設け二段掘りとなる。規模は長軸が1.80m、短軸は1.0m、深さは75cmを測る。

出土遺物は、土師器の甕・壺の他、焼塩壺と平瓦の破片がある。壺の中には底部内面にヘラで「殿刀」と書いた破片がある。

出土遺物

土 器 (図版66, 第142図)

土師器 1・2の甕は口縁部が鋭く外反するタイプで、2の方が外反度が強い。3は甕の底部片と思われ、孔の大きなタイプであろう。4は堅塙をつくる所謂「焼塩壺」で、円錐形を呈するタイプである。5～8は壺である。5はやや小型の壺で、口縁を若干外反させ不安定な底部をなす。7は上げ底である。8は底部の小片でヘラで「殿刀」と刻んでいる。

67号土壙 (第96図)

66号土壙と5号井戸との間に位置する土壙で、平面形状が瓢箪形に近い形である。大きさは長軸が1.90m、最大幅が1.45m、深さは15cm前後と浅い。

出土遺物は、土器類はなく、刀子の切先片があるに過ぎない。

出土遺物

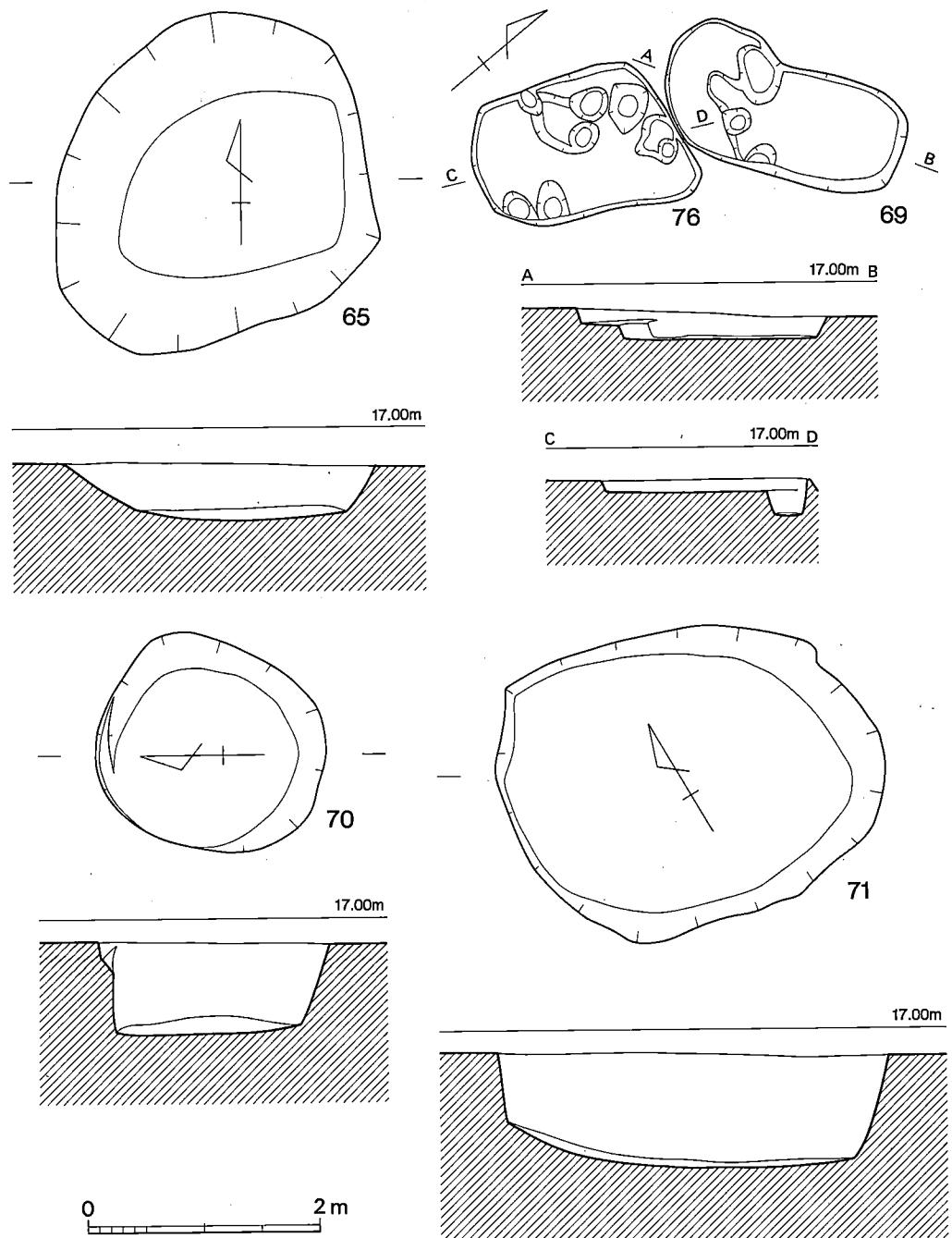
鉄 器 (図版66, 第153図)

刀 子(⁶⁷) 切先部から5cmの所で折れている。幅が1.4cm、背の厚さは4mmを測る。

68号土壙 (第96図)

37号竪穴住居跡内で検出した土壙で住居よりも新しく、住居を切った10号溝との重複があるが、この新旧関係は土壙内からの出土遺物がないためはっきりしない。平面プランは不整橢円形を呈し、その規模は長軸2.0m、短軸は1.45m、深さ35cmを測る。

69号土壙 (第95図)



第95図 65号・69号～71号・76号土壤実測図 (1/60)

西台地の北東端で検出した土壙である。76号土壙と接しているが重複はしていない。平面形態は不整楕円形を呈し、その大きさは長軸2.15m、短軸は95cmを測り、西側には一段浅いテラスをつくっている。深い所では25cmである。

出土遺物は、弥生時代終末頃の甕・器台か高壙と思われる脚裾部片（裾部が内湾しているタイプはあまり知らない。別の器種の可能性もある）、底部外面をヘラ削りした西新式の技法を持つ鉢、砂岩製の砥石（図版66）などがある。

出土遺物

土 器（第143図）

1は胴部上半の一部を欠くが、緩く外反する長い口縁部を持つ甕で、肩部の張りが鈍く長胴をなすタイプである。底部は細みで不安定な丸底に近い形状をなす。内外面に煤が付着し、煮炊きに使われた什器である。

2は器種の不明瞭な土器で、器台の脚部か高壙の脚部かと推測されるが裾部の内湾するタイプのものは知らない。

3は底部を欠くやや深い鉢で口縁部に一条の沈線が巡る。つくりの粗い土器である。

70号土壙（図版31-(2), 第95図）

44号竪穴住居跡の西側傍で検出した土壙である。他の遺構との重複はない。平面プランは円形で、断面形は逆台形を呈する。その大きさは1.80m×2.00m、深さは80cmを測る。

図示できる出土遺物は少なく、須恵器の高壙の壙部片が1点ある。

出土遺物

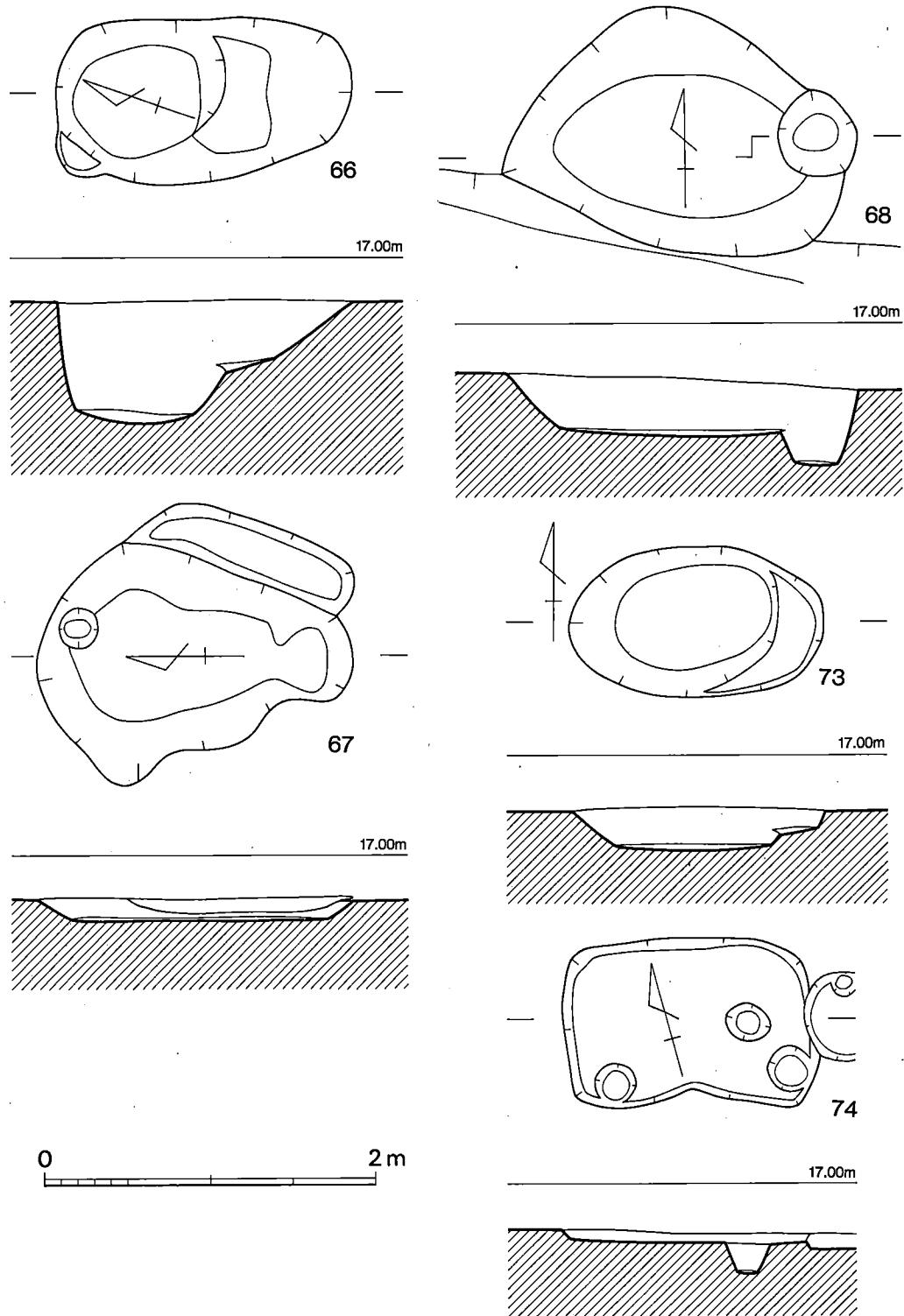
土 器（第143図）

須恵器 口縁部と脚部を欠損する高壙で、体部に2条の沈線、底部にカキ目がみられるもので、壙部が深くつくられている。

71号土壙（図版31-(2), 第95図）

弥生時代中期末頃に比定される40号竪穴住居との重複があり、当該土壙の方が新しい。平面形態は楕円形に近い形態で、その規模は、長軸が3.35m、短軸は2.60mを測り、やや大形の土壙である。深さは95cmで床面がレンズ状に掘られている。

出土遺物は須恵器の胴部片の他、鉄鎌（図版66）の破片が出土している。



第96図 66号～68号・73号・74号土壤実測図 (1/40)

出土遺物

土 器 (第143図)

須恵器 71の頸部と底部を欠損するの胴部である。前面にカキ目を施し、胴部上半に板の小口による刺突文を密に配する。胴部の穿孔は遺存していない。

72号土壙 (図版31-(2), 第97図)

71号土壙同様40号住居跡との重複があり、さらに、77号土壙とも重なっていて新旧関係は77号土壙→72号土壙→40号住居の順になる。

平面プランは隅丸方形に近い形状をなし、その規模は $1.65m \times 1.90m$ を測り、深さは50cm前後である。

出土遺物は、胴下半部を欠損した土師器の把手付甕がある。

出土遺物

土 器 (図版66, 第143図)

土師器 「く」字状に緩く外反した口縁部を有し、扁平で上部に折り曲げた把手を付けた甕である。復原口径は20cmを測る。

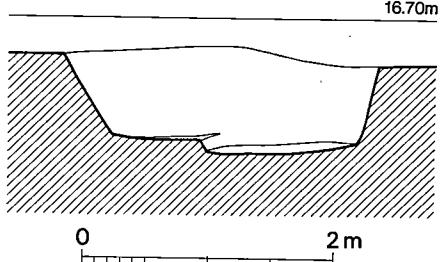
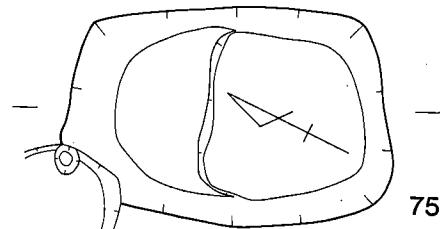
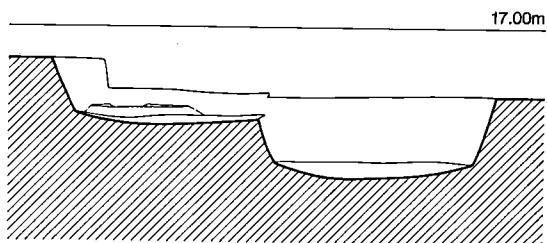
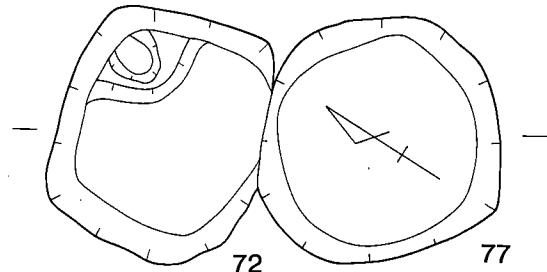
73号土壙 (第96図)

67号土壙の南側で検出した土壙で、平面プランが橢円形を呈している。大きさは長軸が $1.50m$ 、短軸は $90cm$ 、深さは $25cm$ を測る。東側はテラス状に掘られている。

出土遺物は土師器の特小皿が1点ある。

出土遺物

土 器 (第143図)



第97図 72号・75号・77号土壙実測図 (1/60)

土師器 73は口径が8.0cm、底径が6.8cm、器高が1.2cmの所謂特小皿と言われる土器である。底部は糸切りで、板圧痕が残る。

74号土壙 (第96図)

2号掘立柱建物と61号土壙との間で検出した土壙であるが、現状では重複はないものの、掘立柱建物の床面の範囲内になり、結果的に重複する形となる。土壙の形状は隅丸長方形で、長軸の規模は1.55m、短軸は1.0m前後、深さは浅く10cm弱である。

出土遺物は、土製の管状土錐が1点あるに過ぎない。

出土遺物

土製品 (図版66、第153図)

管状土錐 74の管状土錐の完形品がある。管状土錐としては大形のもので、長さが6.0cm、最大径が2.0cmを測り、直徑が6mmの孔を穿っている。

75号土壙 (図版42-(2)、第97図)

ほぼ東西に走る細い溝と重複し、溝より新しい土壙である。平面プランは隅丸長方形を呈していて、その大きさは長軸が2.50m、短軸は1.70mを測る。床面は二段掘りで、南側が深く掘られていて深さは85cm前後である。出土遺物はない。

76号土壙 (第95図)

弥生時代終末頃に比定される69号土壙の南側に接する状態で検出した土壙で、平面形状が不整隅丸長方形を呈している。その規模は長軸で1.75m、短軸で1.20m、深さは10cmと浅い。

図示できる出土遺物はない。

77号土壙 (図版31-(2)、第97図)

40号竪穴住居跡内で検出した土壙で住居と72号土壙と重複しているが両者よりも新しい。平面プランは円形で、その大きさは直径が1.90mの正円に近い。深さは住居の床面の検出時に確認したことから、現状では65cmであるが、住居の確認面からでは90cmを測る。

出土遺物は、土師器の把手付甕と須恵器の坏蓋片が出土している。

出土遺物

土 器 (第144図)

土師器 1は口縁部が鋭く外反し肥厚するタイプの把手付甕で、胴部下半を欠損する。把手

は短く先端は尖る。

須恵器 2は身受けの返りのある壺蓋で、撮みの付くタイプであろう。

(4) 井 戸

第1次調査では、素掘りの井戸を2基検出していたが、発掘調査が終了し実測も完了した段階で、プレハブ事務所が火災に遭遇して図面が焼失したので掲載していない。しかし、付与した号数はそのまま踏襲して、第2次調査で検出した井戸は3号からとした。

3号井戸 (図版43-(1), 第98図)

西台地の北端で検出した井戸で1/2強を調査したが、残りは調査区外で完掘していない。井戸の掘方の平面形状は円形に近いと思われる。検出面から1.30m掘り下げた段階で直径60cm弱の桶を使用したと推測される井戸枠の痕跡を確認したが、その上層では検出できていないことと土層図を観察した箇所が井戸枠からずれていたためはっきりしないが、上層部の井戸枠は崩壊していた可能性もある。

井戸の規模は掘方の径が2.20m、深さは2.27mを測る。掘方の上層には茶褐色、灰黒色、黄褐色などの粘質土で充填していた。井戸枠の痕跡を確認した下層は黄褐色の粘土層の地山で、井戸枠に使った桶はその直径と殆ど変わらないほどの掘方を掘ったと考えられる。

出土遺物は、土師器の皿、鉢か湯釜の破片の瓦質土器、陶器の甕（常滑焼きか）の破片の他平瓦の破片、砥石と作業台を兼用した石製品（第153図）がある。

出土遺物

土 器 (図版66, 第144図)

土師器(1・2) 皿と壺の2点がある。皿は覆土の上層から出土したもので、直接井戸には伴わない土器である。底部は回転ヘラ削りで板圧痕が残る。壺も埋土の上層からの出土である。

瓦質土器(3) これも上層の埋土中から出土した鉢（湯釜）の胴部片である。間隔の空いた2条の凸帯を巡らし、その間に雷文をスタンプしている。

陶 器(4) 大型の甕の口縁部片で、口縁部を折り曲げ口唇部を水引きにより上下に肥厚させている。暗い海老茶色を呈していて常滑焼の可能性がある。埋土中から出土した。

4号井戸 (図版43-(2)・44-(1), 第98図)

調査区の北東側で検出した桶枠を使った井戸で、重複する遺構としては12号溝、1号掘立柱建物とがあり、掘立柱建物よりは新しいが12号溝との切り合い関係がはっきりしない。

この井戸は北側から井戸に下っていく蛇行した緩斜面があり、井戸本体の掘方は不整形の楕円の形を呈している。この緩斜面は水汲み場と推測され、井戸枠の桶の上端と水汲み場のレベルとがほぼ同じであることから、井戸枠の桶は一段であったと理解される。桶の材料は杉材が使われ、3箇所をタガで継めている。井戸枠の掘方内には黒灰色・青白色・白黄色などの粘土で裏込めしていた。井戸の規模は、南北方向の緩斜面を含めると長さが5.0m、幅は1.9m、井戸枠までの深さは1.3m、底の深さは2.1mを測る。

出土遺物は瓦質の火舎と青磁の椀の他、平瓦の破片がある。

出土遺物

土 器 (図版66、第144図)

瓦質土器(1) 火舎の底部付近の復原実測である。底部付近に間隔の空いた断面台形凸帯を貼付し、その間に菱形文をスタンプしている。その上面は横方向のヘラ磨き、内面はハケの上をナデている。内外面底部に煤が付着している。外面は黒灰色、内面は褐色である。井戸の最下層から出土している。

青 磁(2) 龍泉窯系の椀の底部片がある。高台径は6.1cmで、胎土は精製され、釉調はオリーブ色に発色する。

5号井戸 (図版44-(2)、第98図)

67号土壙の西側で検出した井戸で、周囲には遺構が希薄で他の遺構との重複はない。平面プランはやや歪な円形を呈し、検出面から1.40mの深さでテラスをつくり、さらに55cmほど掘り込んで径65cm以内の井戸枠を埋めていたらしいが、枠は遺存していない。

井戸の規模は上面で2.20m×1.90m、深さは2.00mを測る。テラス部分に接するかやや上層で砥石や瓦を含む石塊類が投棄されている。このことから、井戸枠は重ねられていないことが分かる。

出土遺物は、青磁の椀の他、上記の瓦片・砥石などがある。

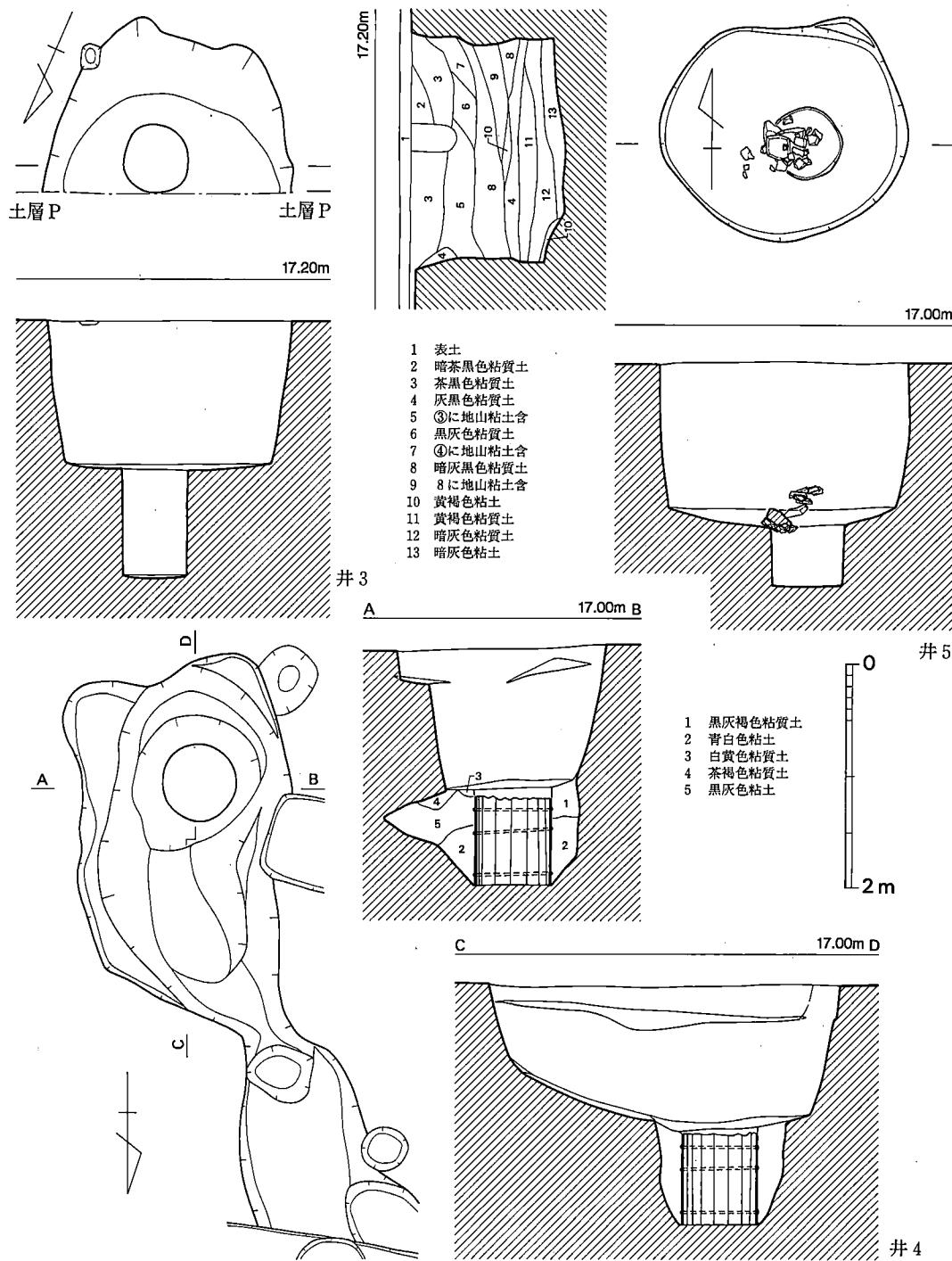
出土遺物

土 器 (図版67、第144図)

青 磁(1) 見込部に花文を彫り込んだ龍泉窯系の椀で、胎土は精製され、白灰色を呈している。釉調はオリーブ色である。外底面に墨書があるが判読できない。

石 器 (図版67、第153図)

砥 石(5) 砂岩製の砥石の破片がある。研ぎ面は4面である。



第98図 3号～5号井戸実測図 (1/60)

6号井戸 (図版45-(1)・(2), 第99図)

大溝（11号溝）の完結する南側で検出した素掘りの井戸である。他の遺構との重複はなく、井戸本体の平面プランが歪な円形を呈しているが、北側に舌状のテラスを設けていて水汲み場としているようである。

大きさは $2.10m \times 1.70m$ （テラスを含めると $2.40m$ ），上面から $1.00m$ の所に三日月状のテラスをつくりだしている。井戸の深さは $2.05m$ である。井戸の底から $70cm$ 上層には石塊や花崗岩の石臼などが投棄された状態で出土し、最下層からは炭化した木材が検出された。この炭化材は「コ」字状に組んだような形をしているが、井戸枠に関係するものか否かははっきりしないし、井戸枠の痕跡も遺存していない。

出土遺物

石 器 (図版67, 第154図)

石臼(1・2) 1は扇状をした花崗岩であるが、弧の一部分が原形を保っていておそらく石臼の破片が風化したものと考えられ、放射状の溝はまったくない。図示した表には1箇所窪みがみられ、石臼を作業台に再利用したのかも知れない。2は石臼の上片方で、中心軸を通す孔は漏斗状を呈している。孔の周囲は凸帯が巡り、その外側は凹面をなしている。摺り面の片側は著しく磨り減っているが放射状溝は僅かに残っている。

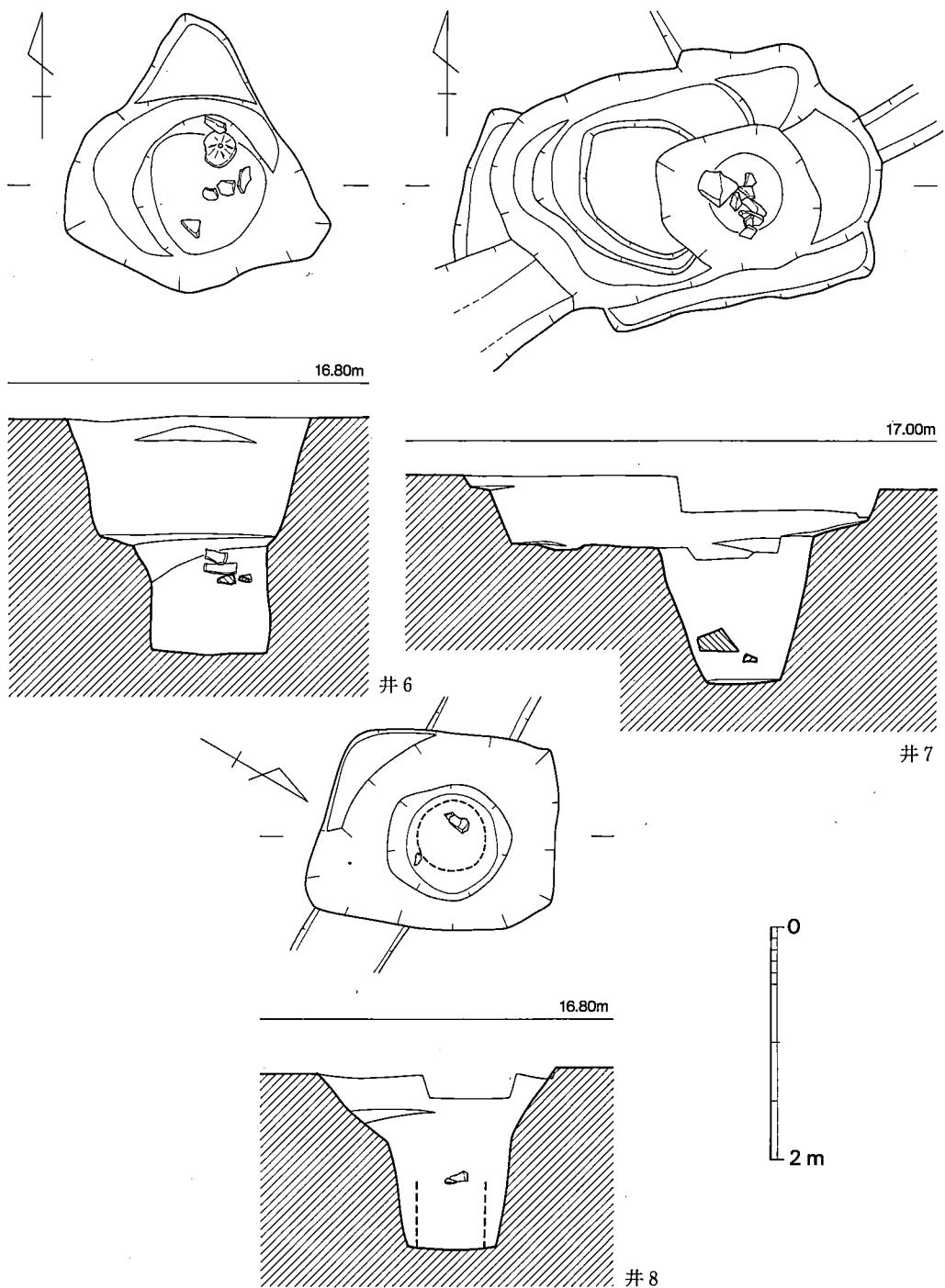
7号井戸 (図版46-(1)・(2), 第99図)

ほぼ東西に走り大溝に繋がる細い溝と32号竪穴住居跡と重複した井戸で、いずれの遺構よりも新しい。平面形態は歪な橢円形を呈し、周囲にはテラスを設けており、西側のテラスには僅かな高まりがありその周囲に「U」字状の浅い溝が巡って井戸内に流れ込む形になっている。この部分が水汲み場であろう。

全体の規模は、東西軸が $3.60m$ 、南北軸が $2.10m$ 前後で、掘り込み面から $60cm$ の所に平面が不整円形、断面が逆台形の素掘りの井戸を掘り込んでいる。井戸の下層には焼けた花崗岩の石塊類が投棄されていた。その中には平瓦の破片も混じっている。

8号井戸 (図版47-(1), 第99図)

75号土壙の西側で検出した井戸で、土壙同様細い溝より古い。平面形状は歪な隅丸方形を呈している。掘方の東側には三日月状のテラスを設けている。断面形状は漏斗状を呈している。井戸の規模は、東西軸が $2.05m$ 、南北軸が $1.70m$ 、深さは $1.50m$ を測り、下層には径が $60cm$ の井戸枠の痕跡が残っていた。底から $60cm$ 上層から石塊が投棄されていたが、図示できる土器類はなく、出土した瓦の説明は後述する。



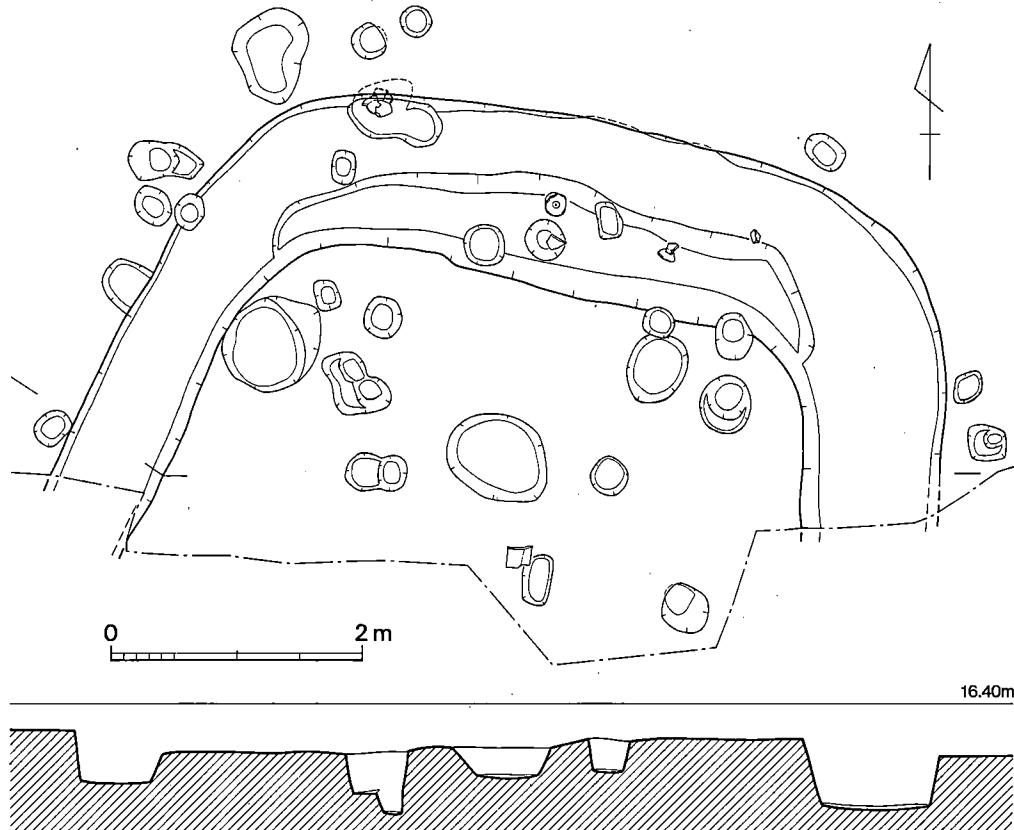
第99図 6号～8号井戸実測図 (1/60)

(5) 周溝状遺構

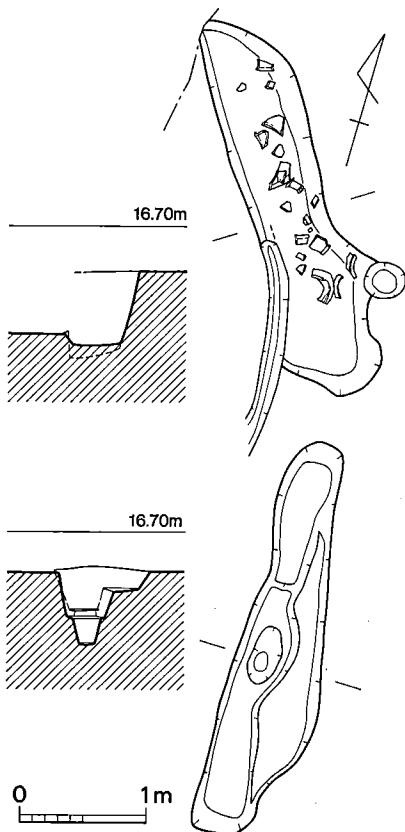
調査区西半部に4基の周溝状遺構を検出した。ともに形状が異なり、1・2号では弥生土器を多量に検出したが、3号は中世の土器を、4号は弥生・中世の土器を検出している。ここでは、周溝状遺構として一括して報告するが、性格や所属時期に共通性は認められない。

1号周溝状遺構 (図版14-(1), 第100図)

調査区の西南隅に検出し、1号溝と重複している。過半が調査区の外に延びるが、プランは矩形を呈するように見受けられる。北溝は、東西の屈曲点間出の長さは5.0m程である。底部の溝の内側は、二段掘で深く掘り下げられており、その周辺に弥生土器を多量に検出した。溝の深さは、溝外側の浅い部分の一段目では50~60cm、内側の深い二段目は、下図のように長さ4.4m、幅50cm前後でさらに10cm程深く掘りこまれている。ただし、この掘り込みが当初からのものであったのか、あるいは、この周溝状遺構が営まれた直後頃に掘り込まれたものは、垂直



第100図 1号周溝状遺構実測図 (1/60)



第101図 2号周溝状遺構実測図 (1/60)

北溝には多量の弥生土器が検出されているが、南溝からの目立った出土品はない。また、調査区外は削平されており、この遺構の全容が不明である。場合によれば、北溝単独の土壙である可能性もある。

北溝は主軸長3.1m、幅0.7m以上、深さは現状で60cm程である。床面から浮いた状態で多量の弥生土器を検出した。

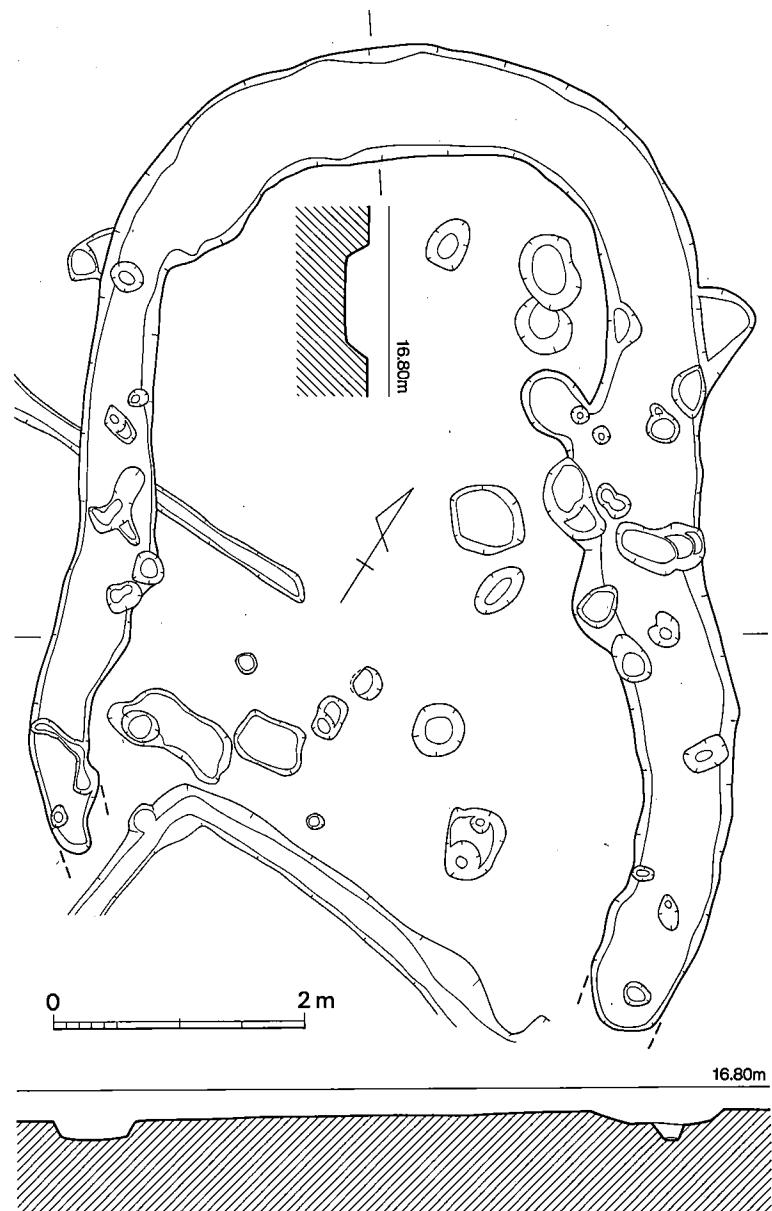
南溝は北溝の40cm南に検出した。埋土は北溝と同様であるが、出土品はない。主軸長3.2m、二段掘りで一段目の最大幅0.78m、二段目の最大幅0.46m、深さは40cm程である。なお、中央に深さ20cmほどのピットがある。

出土遺物 (第145・146図)

北側の溝で多量の弥生土器を検出したが、意識的に置かれた状態で検出したわけではない。

3号周溝状遺構 (図版47-(2), 第102図)

調査区の西半部に検出した。南部は15号住居と重複し、馬蹄形のプランを呈する。規模は、南北長7.5m程、東西最大幅は南側で計測して5.2m程、深さは20cm前後である。



第102図 3号周溝状遺構実測図 (1/60)

出土遺物 (第146図)

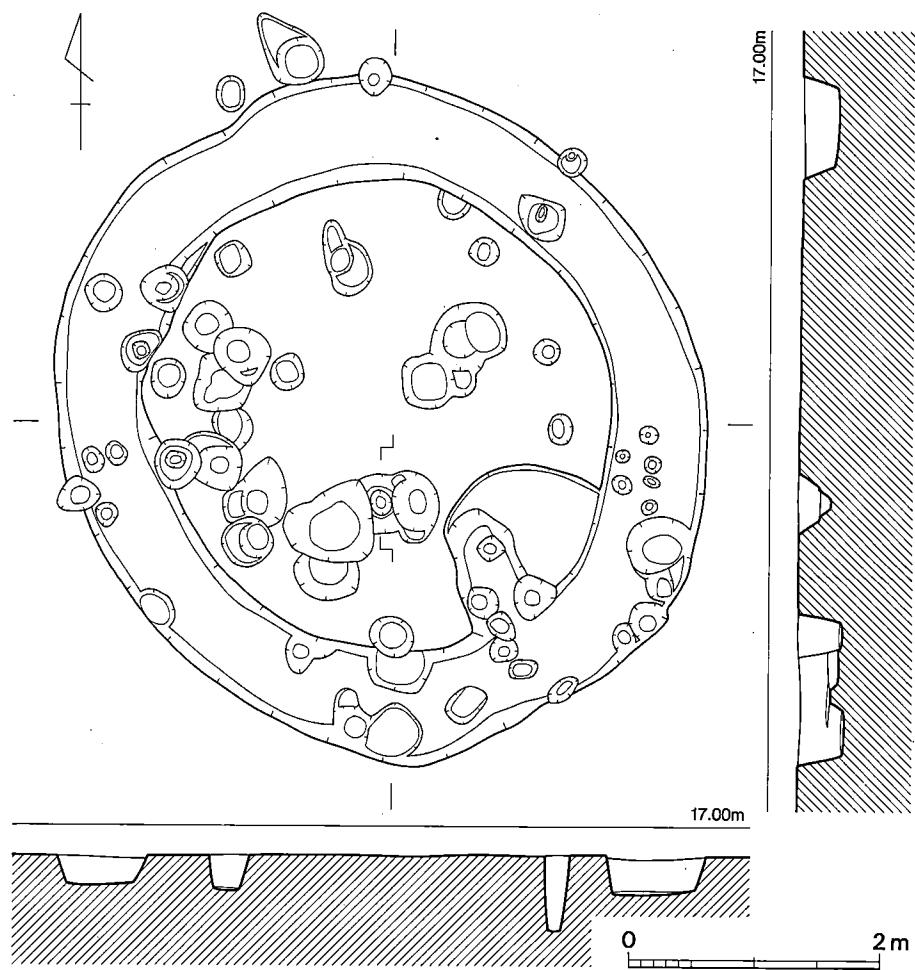
1・2号周溝状遺構と比較して時期的に新しい土器が出土し、出土状態も異なることから、両土壙とはまったく異質の遺構である。

4号周溝状遺構 (図版48-(1), 第103図)

西側台地では4基の周溝状遺構を検出したが、これらの中で最も形の整ったもので、28号竪穴住居の北側に隣接する形で検出した。主だった遺構との重複はない。

平面プランは円形を呈し、その規模は、外周の径が $5.15m \times 5.45m$ 、内周が $3.70m$ の正円をなす。周溝の深さは、 $25cm \sim 30cm$ を測る。内周には数多くのピットがあり伴うか分からぬ。

出土遺物は土器片はあるものの、図示できる土器は弥生時代中期末頃の甕棺片と中世の土器片があるが当該周溝状遺構に伴うかどうかははつきりしない。この他に軽石が出土している。



第103図 4号周溝状遺構実測図 (1/60)

出土遺物

土 器 (第147図)

出土した甕棺の胴部片は凸帯の部分で、「コ」字状に発達した凸帯を有した甕棺である。周囲に甕棺墓が発見されていないことから、混入遺物と考えるならば住居で使用していた甕が混入したと考えられる。

石 器 (第154図)

軽 石(4) 不整形の軽石がある。浮子に使用したものなのかも緊縛痕が不明瞭ではっきりしない。

(6) 溝

1号溝 (付図・第148図)

調査区の南西隅に検出した北西→南東に走る溝で、調査区外に延び、8.0m分を検出した。1号周溝状遺構、4号住居を切る。浅いため4号住居に僅かに重複した状態で溝は消えている。幅1.6m前後、深さ5~15cmで、南東側が深い。

中世の土師器片が若干量出土している。

2号溝 (付図)

4号土壙の南に検出した。弧描いて東→西に走る細い溝で、3・4・9号住居を切る。長さ12m強、幅50cm前後、深さ10cm前後で西側が深い。

図示できる出土遺物はない。

3号溝 (付図)

2号溝の北東に検出した。弧を描いて南東→北西に走る溝で、5号住居を切る。長さ13m、幅40~60cm、深さ6cm前後で、北西側が深い。

図示できる出土遺物はない。

4号溝 (付図)

3号溝の北を東→西に走る。6・14号住居、3・16・20号土壙を切る。東端は11号溝に接続し、その西で5号溝に切られている。西端は調査区外に延びる。埋土は灰色で、極めて新しい溝である。長さ38m程、幅40cm前後、深さ10cm前後で、西側が深い。

図示できる出土遺物はない。

5号溝（付図、第148図）

4号溝の北を東→西に走る。14・15号住居、3・35号土壙、4・6号溝を切る。4号溝同様に埋土は灰色で、極めて新しい溝である。長さ58m程、幅40m前後、深さ40cm前後で、西側が深い出土遺物は、奈良時代の須恵器や中世の土師器片である。

6号溝（付図、第148図）

5号溝の北を東→西に走る。7・8号井戸を切り、東部は11号溝と重複している。4・5号溝と同様に埋土は灰色で極めて新しい溝である。長さ30m程、幅60cm前後、深さ10cm前後である。

出土遺物は、中世の土師器片がある。

7号溝（付図）

調査区の北西隅に検出し、17号住居を切っている。北西→南東に走り、調査区外に延び、10m分を検出した。幅30cm前後、深さ5cm前後である。

出土遺物はない。

8号溝（付図、接148図）

調査区の西部を北→南に走り、42・45・47号土壙を切る。北で9号溝と重複している。長さ32m分を検出した。幅0.4~1.0m、深さ15cm前後である。

出土遺物は、中世の土師器片がある。

9号溝（付図、第148図）

調査区の西部を北→南に走り、50号土壙を切る。北で9号溝と重複している。長さ22m分を検出した。幅0.6m~1.0m、深さ15cm前後である。

出土遺物は、陶磁器片がある。

10号溝（付図）

11号溝の内側で検出したほぼ東西に走る直線状の溝で、両端は各々完結している。他の遺構との重複関係は、29号・31号・37号住居跡、68号土壙、11号溝とがあり、すべての住居よりは新しいが、11号溝とは同一時期の可能性があり、68号土壙とははっきりしない。

検出した溝の総延長は12m、深さは30cm前後を測る。調査区内の西側には規模の差こそあれ同じような溝状遺構があるが、いずれも単独で掘られていて何の目的で掘られたのかが分からぬ。

出土遺物は、土師器の壺・捏鉢・土鍋、古備前焼の擂鉢、平瓦の他、龍泉窯の青磁碗の破片

があるが、椀は前者の土器類には伴わず13世紀代のものである。溝の時期は土師器類から16世紀代の所産である。

出土遺物

土 器 (第147図)

土師器(1~3・5) 1・3は土鍋の破片であるが、タイプの異なるものである。内面はハケ、外面はハケとナデである。外面には広く煤が付着。2は玉縁状の口縁部の捏鉢である。5は口径に対して底部の小さい坏で、糸切り底である。

陶 器(4) 口縁部を直上させる古備前の擂鉢で、7条をひとつの単位とする櫛描条痕があり紫褐色を呈する。

磁 器(6) 龍泉窯の高台付椀の破片である。上記の土器類とは時期が異なることから混入土器であろう。

11号溝 (図版14-(2)・48-(2), 付図, 第104図)

東側で台地に添った形で弧状に巡っている規模の大きな溝で、濠とも言えるものである。この溝は調査区の中央付近で完結していて、西側では検出されていないことから環濠にはなりえない。重複関係では、溝や豎穴住居などとの重なりがあるが、すべての遺構よりも新しい。

調査した溝の総延長は44mで、溝幅は広い所で4.5m、狭い箇所で3.0mを測り、底面は北側が南側に比べて深く掘られていて、その深さは北側で現表土面から1.95m、切り込み面からは1.60mを測り、南側では1.15mを測る。

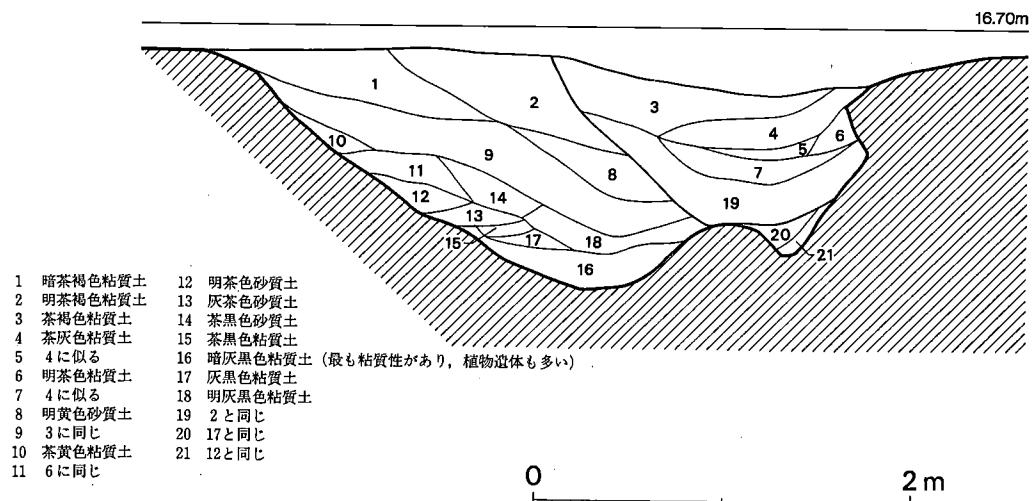
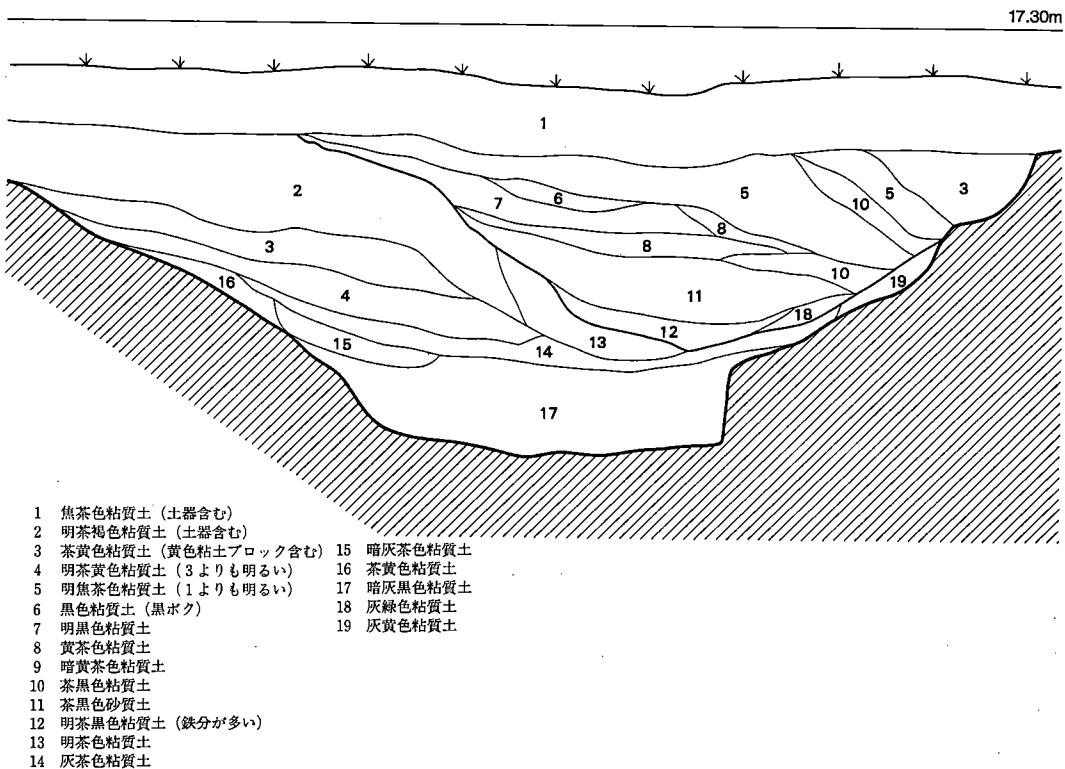
この溝は土層断面図で分かるように2期にわたって使用されている。最初に掘られた溝は深くしかも幅広であり、後の溝はなだらかで浅く既に濠としての機能は失われている。最下層に堆積している覆土からは植物遺体や流木片、若干の木器類が出土しているが、諸般の事情で図示できていない。しかも、この溝に伴う生活遺構が不明瞭で、弧状に巡る溝の内側に掘られた無数のピットと井戸が付随するものと思われるが、ピットについてははっきりしない。

出土遺物は多くの土器類があるが、主だったものは土師器の坏・小皿・土鍋・捏鉢・鼎、須恵器の坏身・すり鉢、青磁・白磁の椀、陶器の擂鉢、染付椀、瓦質土器の湯釜・土鍋、平瓦、フイゴの羽口、砥石などがあり、時期も11・12世紀から16世紀の土器類で時期幅があるが、1期が12~13世紀頃で2期目の溝が機能していた時期は15世紀~16世紀頃と推定される。

出土遺物

土 器 (図版67・68・69, 第149・150図)

土師器(1・2・5・6) 1は糸切り底の皿の完形品である。口径は7.6cm、底径5.8cm、器高1.



第104図 11号溝土層断面実測図 (1/60)

8cm。溝の南端から出土。2は僅かな上げ底の坏で、糸切り底である。復原口径が12.0cm、底径は8.0cm、器高は2.9cmを測る。溝の中央部付近から出土した。

5・6は土師質の鼎の復原実測で、両者は胎土・色調・焼成が酷似することから同一個体であろう。5は胴部中央に整美な凸帯を貼付する。凸帯以下に煤が付着する。6の脚は内湾するタイプで、上部に切れ目を入れ体部を挟み込む形であることから、体部下半には袴状の突出部が巡っていたと思われる。内側の上部には煤が付着している。

須恵器(3・4) 3は壊身の復原実測である。底部は手持ちのヘラ削りをしている。4はすり鉢の破片である。

瓦質土器(7~12) 7は土鍋の口縁部片である。8・9・12は捏鉢の破片で、内面にはハケの上から筋目がみられ、9は5本を1単位、12は4本を1単位とする。11は湯釜の胴部片である。肩部に不揃いの菊花文をスタンプする。

陶 器(13・14・25・26) 捺鉢の底部片である。内面の条痕は粗めと細めの2タイプがある。溝の南側端から出土した。

25は唐津焼きの鉢の高台部である。高台周辺は露胎で茶色を呈している。釉調は白黄色を呈し、見込部に界線が巡り内部に重ね焼きの目跡が残る。

26は李朝の椀で、釉はねずみ色に発色している。見込部に重ね焼きの目跡が残る。溝の北側から出土した。

青 磁(15~17) 椥の破片であるが、15・16は13世紀頃の龍泉窯で、16は16世紀頃の所産である。前者は外面にヘラがき連弁文を配していて、後者は見込部に草花文のスタンプがみられる。

白 磁(18~22) 5個体の椀の高台部分があるが、19~21は11・12世紀頃のもので、当該溝I期に伴うものである。高台部が高く尖ったタイプと低く丸みのあるタイプとがある。20には外面に煤が付着している。18・22は露胎の低い高台を有するタイプで、16世紀頃の所産で、当該溝II期に伴うものである。18には重ね焼きの目跡がついている。

染 付(23・24) 2個体の明代の椀があるが、胎土・釉調などから同一個体であろう。23の口縁部には2線を染め付け、外面には菊花文がみられる。釉調は水色気味の白色である。24は高台部分で、見込部には判読不明の吉祥文字を描く。外面には唐草文が巡り、高台部には2条の界線が巡る。両者とも16世紀頃の所産と思われる。

フイゴ羽口（第154図）

3は断面が隅丸方形を呈した羽口で、先端に近い部分と思われ焼痕が著しい。

石 器（図版69、第154図）

砥 石(1・2) 硬質砂岩質の砥石が2点ある。1は自然石を利用し、1/2弱が欠損していて研ぎ面は4面で全体に煤が付着している。2も表裏が平滑で砥石に使われ、煤が付着する。

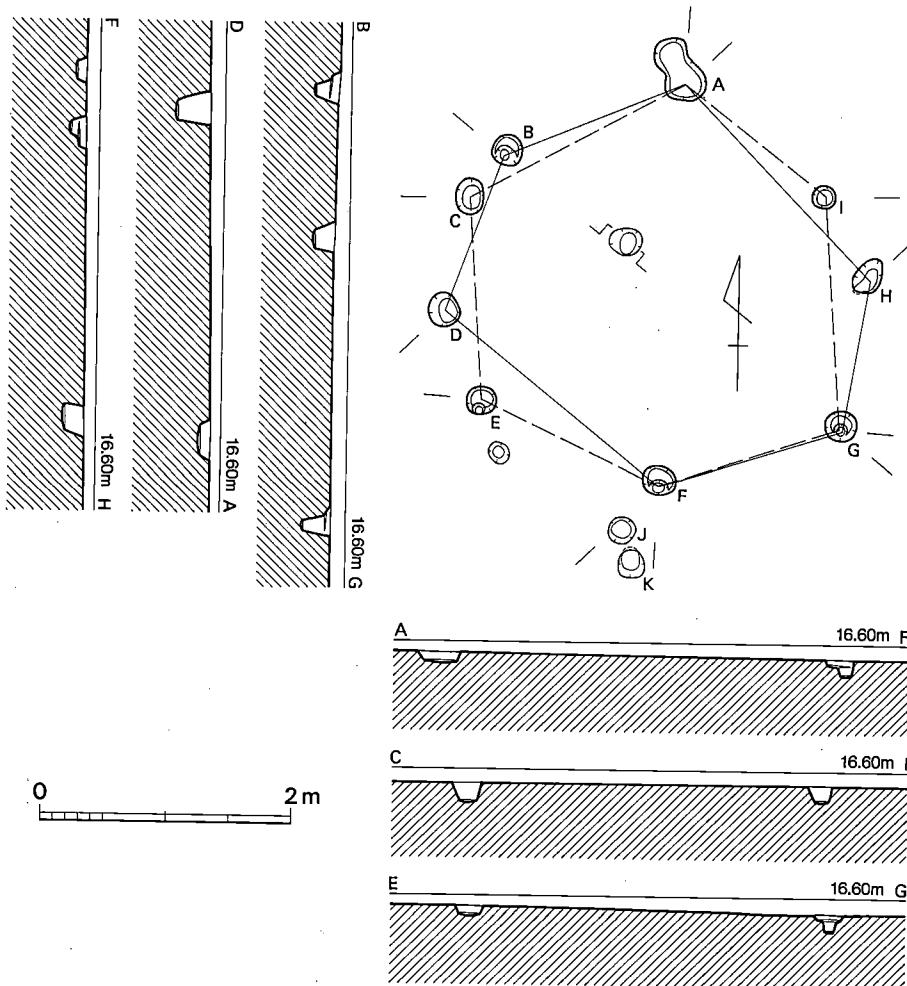
(7) 不明遺構

調査区の北西隅、17・26号住居の間に存在する。埋土が暗褐色、径30cm前後、深さ10~30cm程の小ピットが円を描いて思わせぶりに並ぶ。正体は不明であるが、二通りの復元案を示す。

A案：A・B・D・F（JまたはK）・G・H（またはI）のピットを実線で結ぶ案。

B案：A・C・E・F（JまたはK）・G・Iのピットを破線で結ぶ案。

ピットの埋土が灰色ではなく暗褐色であることから、4~6号溝程のようには新しいものとは考えられない。所属時期は明らかにしがたいが、ピットも竪穴住居のものほどしっかりととしてはおらず、簡単な小屋か囲いのようなものではないか、と推測する。



第105図 不明遺構（柱穴群）実測図（1/60）

(8) 西台地出土の焼塙土器 (図版69, 第151図)

この種の土器は、27・51土壙で集中的に検出した。この土器は観察表を作っていないので、ここで説明する。

51号土壙の焼塙土器 (1~7)

7個の破片が出土した。破片資料が多いので、器形的な面での組成は不明である。これらは内外面ともに、指圧痕が明瞭に観察され、内面に布の圧痕がわずかに残る。1・2は8~11のように、楕形を呈すると思われるが小片のため詳細は不明である。7は砲弾形を呈する。3~6は小片のため不明であるが、5は7と同様な器形になると思われる。胎土に多量の砂粒を含み、器面がざらつくが、4は他と比して、胎土に含まれる砂粒は少ない。1~4は淡茶褐色、5~7は、明茶褐色を呈する。焼成は良好である。

その他焼塙土器 (8~14)

8は遺構検出面において出土した破片資料で、口径15.2cm、現存高5.1cmに復元される。外面に指圧痕が、内面には条痕が観察される。砂粒を多量に含み、焼成は良好で明茶褐色を呈する。

9~14は旧27号土壙から出土した破片資料である。楕形のものが多い。すべて破片なので、図は推定復元図である。9は反転複原図で、口径15.3cm、現存高3.1cmである。内外面に指圧痕が残る。10は口径12.5cm、現存高4.7cmである。外面に指圧痕が、内面には条痕が観察される。11は口径14.6cm、現存高4.7cmである。外面に指圧痕が、内面には条痕が残る。9の器面は灰褐色を、割れた断面は灰色を呈する。他は明茶褐色を呈する。12~14は小片のため詳細は不明である。総じて、砂粒を多量に含み、焼成は良好である。残念なことに、先述の火災により遺構配置図の一部を消失したので、旧27号土壙に相当する土壙を特定できない。

(9) 西台地出土の瓦

竪穴住居跡・土壙・溝・ピットから、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・搏等が多量に出土している。

3号竪穴住居跡の瓦 (図版70, 第155図)

平 瓦(1) 表面にわずかに布目が残り、裏面は平行四辺形の叩き目が残る。焼成は軟質で、淡茶灰色を呈す。覆土から出土した。

28号竪穴住居跡の瓦 (図版70, 第155図)

平 瓦(1) 表面に布目が残り、裏面はナデて平滑に仕上げている。非常に硬質にやき上がっている。表面は黒灰色、裏面は灰色である。覆土から出土した。

29号竪穴住居跡の瓦 (図版70, 第155図)

丸 瓦(1) 覆土から出土した。表面はナデ、裏面には布目が残る。軟質で淡茶灰色を呈す。

1号土壙の瓦 (図版70, 第155図)

平 瓦(1~6) 中世の土師器とともに埋土から出土した。裏面の叩きは肉太の格子目が多いが、6だけは縄目である。両者とも、側端部はヘラで面取りされている。1・6は硬質にやき上がっている。

丸 瓦(7・8) ともに破片資料である。8は側端部を一部残す。内面は布目が残るが外面はナデ仕上げである。

2号土壙の瓦 (図版71, 第156図)

平 瓦(1~4) ともに小片である。4は縄目の叩きであるが他は肉太の格子叩きである。表面の布目は明瞭に観察される。2・4は焼成が軟質であるが他は硬質に焼き上がっている。

3号土壙の瓦 (図版71, 第156図)

埠(1) 破片資料である。表裏面に煤が付着し、真っ黒である。

平 瓦(2) 表面には布目を残し、裏面は肉太の雄大な叩き目を残す。軟質に焼き上がる。

4号土壙の瓦 (図版71・72, 第157・158図)

平 瓦(1~5) 1・2は格子目、4は縄目の叩き、3・5は摩滅しているため叩き目が残らない。1は丁寧な作りで、側端部はヘラで面取りされている。3~5は焼成が軟質であるが、1・2は硬質に焼き上がっている。

丸 瓦(6~9) 8は玉縁の一部が残っているが、他は極小片である。焼成が軟質のため、表面が摩滅し、8だけは内面の布目が残っている。

5号土壙の瓦 (図版72, 第158図)

平 瓦(1) 良く焼き上がった厚さ2cm程の、本遺跡出土の平瓦の中では薄手のものである。裏面は格子叩き目の上にヘラ削りを行い、格子目の一部を消している。

8号土壙の瓦 (図版73, 第158図)

平 瓦(1・2) ともに焼成が不良のため、摩滅しているが、2は格子の叩き目が残っている。側端部は面取りされ、2の下端部もヘラで整形している。1は二次加熱により、桃色に変色する。

9号土壙の瓦 (図版73, 第158図)

平 瓦(1) 良く焼き上がった硬質の瓦で、表面には布目が、裏面には肉太の格子の叩き目が明瞭に残る。

14号土壙の瓦 (図版73, 第158図)

平 瓦(1) 硬質に焼き上がっているが、裏面は剥落しており、叩き目は見えない。ナデ仕上げの可能性もある。表面は布目の上をナデしている。

23号土壙の瓦 (図版73・74, 第158・159図)

平 瓦(1~10) 1は摩滅して不明だが、格子目の叩きが多く、9だけが縄目の叩きである。格子の叩き目は、肉細の平行四辺形状の叩き(2), 肉太の平行四辺形状の叩き(10), 肉細の方形格子の叩き(4・6・8), 肉太の小さい方形格子の叩き(3・7), 肉太の大きい方形格子の叩き(5)の5種類がある。1~3は側端部を残し、ヘラで面取りしている。1は二次加熱により、桃色に変色する。2・5・7~9は焼成が軟質で他は硬質に焼き上がっている。

丸 瓦(11) 焼きの甘い小片であるが、内面には布目が明瞭に残る。

36号土壙の瓦 (図版74, 第160図)

平 瓦(1) 肉細の方形格子の叩き目が残る。布目はナデ消している。

40号土壙の瓦 (図版74, 第160図)

平 瓦(1) 表裏面ともヘラ削りの後、布目及び格子目をナデ消している。下端部はヘラで整形している。焼成は不良で軟質である。

42号土壙の瓦 (図版74~76, 第160・161図)

平 瓦(1~19) 23号土壙の瓦と同様に多くの種類の叩き目が見られる。12の叩き目は初出で、「田」字状の叩きで、小片のため不明な部分を残すが、連続せずに1個だけ独立している。4は肉太の大きい方形格子の叩き板の格子目を削って肉細くし、格子目を大きくしたものだろう。この土壙でも、縄目の叩き目は15の1点があるだけである。1・2の側端部、3・6の下端部はヘラで面取り、整形されている。

丸 瓦(20) 焼きの甘い小片であるが、内面には布目が明瞭に残る。側端部はヘラで面取りされている。

69号土壙の瓦 (図版76, 第253図)

平 瓦(1) 焼きの甘い小片で摩滅しているが、叩き目・布目は見える程度に残る。

2号井戸の瓦 (図版76, 第162図)

平 瓦(1~3) 1は表面に布目がわずかに見え、裏面はナデて仕上げている。2・3は摩滅するが、3の裏面に格子の叩きが残る。1の下端部はヘラで整形されている。

3号井戸の瓦 (図版76, 第162図)

丸 瓦(1) 玉縁部にかかる部分の破片である。側端部はヘラ削りを施している。外面はナデ、内面は布目が残る。

4号井戸の瓦 (図版76, 第162図)

平 瓦(1・2) ともに模骨の痕跡が明瞭に残る。裏面は格子目の叩きを施し、表面は、1はナデで布目を消している。

5号井戸の瓦 (図版76・81, 第162図)

軒平瓦(1) 左行する忍冬唐草文を表現したもので、先に谷部の報告(註1)の中で井上A I式としたものに相当する。A II式には忍冬唐草文の周囲に珠文を配すが、本例には珠文が見られない。瓦当面の彫りは深く、唐草文も簡素である。瓦当裏面と平瓦の接着角度はほぼ直角であり、差し込み技法によると見られる。顎の作りはしっかりとしている。平瓦裏面の残りが悪いので、叩きは確認できないが、上記報告第62図-16の表採資料では肉太の格子目の叩きが施されている。胎土は微砂粒を含み精選されている。焼成は良好で硬質に焼き上がっており、外面は暗灰色を、断面は白灰色を呈する。

平 瓦(2) 側端部をヘラできれいに面取りされている。表面は布目をナデ消し、裏面は肉太の格子目の叩きが残る。焼成は不良で軟質である。

6号井戸の瓦 (図版76, 第163図)

平 瓦(1) 側端部・下端部をヘラできれいに面取りされている。表面は布目をナデ消し、裏面は肉太の格子目の叩きが残る。焼成は良く硬質に焼き上がっている。

7号井戸の瓦 (図版76, 第163図)

平 瓦(1) 側端部はヘラできれいに面取りされている。表面の布目を一部ナデ消し, 裏面は肉太の格子目の叩きが残る。焼成は普通程度である。

4号溝の瓦 (図版81, 第163図)

軒平瓦(1) 左行する忍冬唐草文を表現したもののように見受けられ, 唐草文の周囲に珠文を配するようなので, 井上A II式としたものに相当すると思われる。摩滅がひどく, また, 残存状態が極めて悪いので拓本と写真のみを掲載する。

5号溝の瓦 (図版76・77, 第163図)

平 瓦(2) 側端部はヘラできれいに面取りされている。表面の布目をナデ消し, 裏面は平行四辺形の叩き目が残る。焼成は軟質で, 灰白色を呈する。

丸 瓦(1) 硬質に焼き上がった瓦で, 裏面は布目の上から縦方向に強いナデが見られる。

9号溝の瓦 (図版77, 第163図)

平 瓦(1) 側端部はヘラできれいに面取りされている。表面の布目を一部ナデ消し, 裏面は肉太の格子目の叩きの後, ヘラ削り, ナデを施す。焼成は普通程度である。

10号溝の瓦 (図版77, 第163図)

平 瓦(1) 側端部はヘラできれいに面取りされている。表面の布目を一部ナデ消し, 裏面は縄目の叩きを施す。硬質に焼き上がっている。

11号溝の瓦 (図版77・78・81, 第164・165図)

軒平瓦(1) 左行する忍冬唐草文を表現したもので, 5号井戸の出土例と同様で井上A I式に相当する。瓦当面の彫りは深く, 唐草文も簡素である。瓦当裏面と平瓦の接着角度はほぼ直角のようであり, 差し込み技法によると見られる。顎の作りはしっかりとしている。胎土は微砂粒が目立ち, 烧成は良好で硬質に焼き上がっており, 暗灰色を呈する。

平 瓦(2・3, 5~11) 10が縄目の叩きである以外は, 格子目の叩きである。しかし, 2~8が肉太の格子であるのに対して, 9は肉細の斜格子である。2は上端部を, 10は下端部を, 3・5・6・8・9は側端部を面取りしている。総じて, 烧成は良好である。

丸 瓦(1) 側端部をきれいに面取りしている。裏面は布目が明瞭に残る。なお, 11号溝の瓦の図で11-4として図示した瓦は, 谷部の第二次調査で出土したものを過って掲載した。上端部, 側端部を面取りし, 肉太の格子目の叩きが良く残る。

ピット出土の瓦 (図版78・79・81, 第166・167図)

軒丸瓦(1) 先に谷部の報告(註1)の中で井上A式としたものに相当する。本例は極小片のためわかりにくいが、上記報告の第61図-11と照合すれば、断面図が相似することから明らかであろう。ここに報告する瓦が完形品であるならば、高い中房に7個(1+6)の蓮子を入れ、その周囲に縁取りがなく、鎬の通らない六弁の蓮華文を配する。左右に撥形の間弁を控えた紡錘形の鎬の通る間弁を配する。また周縁には一重圏をめぐらすものである。本例は、周縁の一重圏及び六弁蓮華文の一部に相当する部分の破片である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は硬質に焼き上がり、灰色を呈する。

平 瓦(2~9) すべて格子目の叩きの瓦である。2・4~6は側端部及び下端部をヘラで面取りしている。2~4・6は硬質に焼き上がるが他は焼成が甘い。

丸 瓦(10~12) 10は側端部が残り、きれいにヘラで整形されている。10・12は裏面に布目が残るが、11は摩滅しており、布目は見えない。10・12は硬質に焼き上がるが11は焼成が甘い。

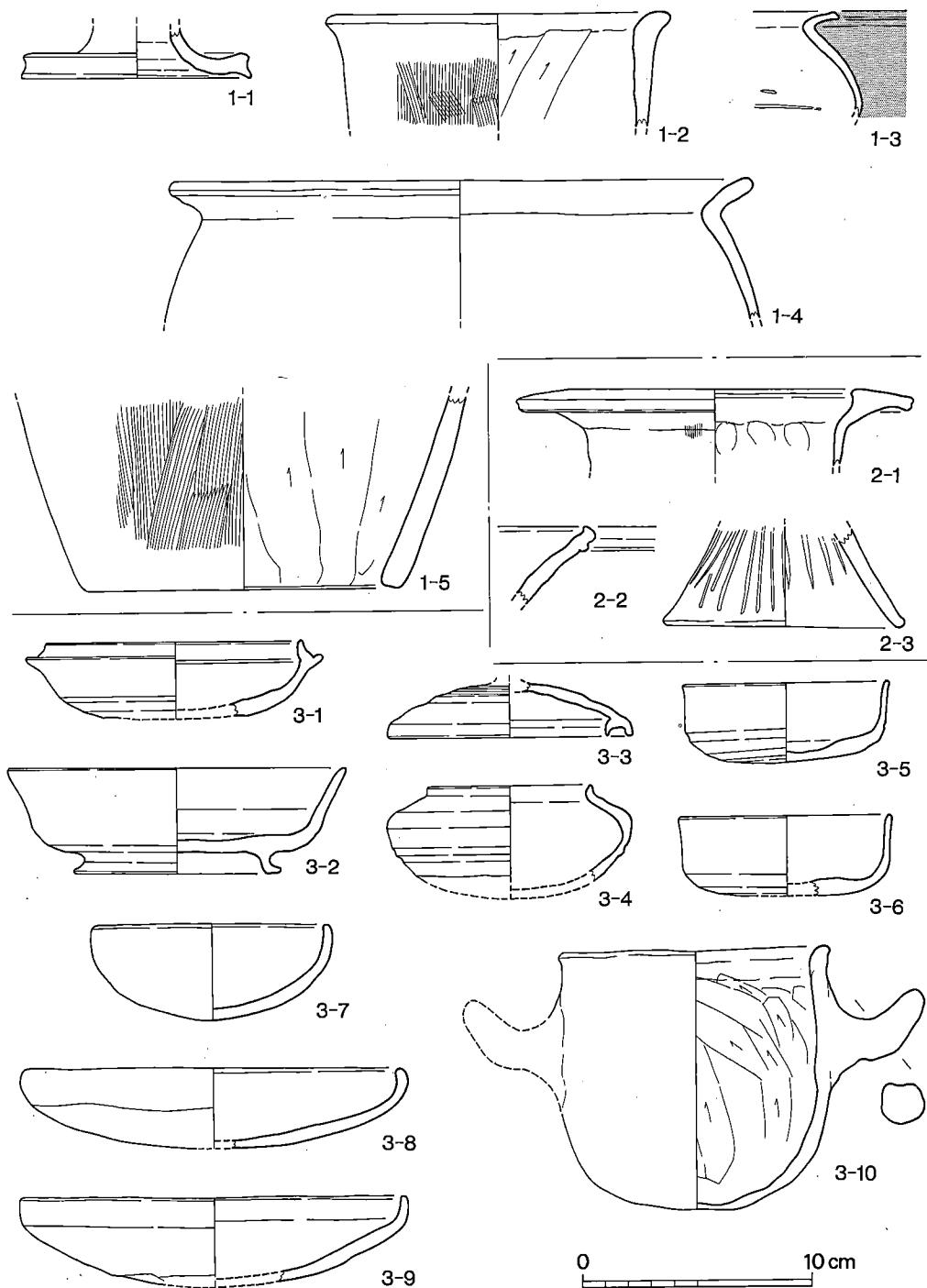
その他の出土瓦 (図版79・80, 第167~169)

平 瓦(1~12) 格子目の叩きが主体で布目の叩きはないが、1だけは須恵器の大甕の叩き板を使用している。井上薬師堂遺跡及び周辺で、この種の叩きが平瓦に施された例は初見である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で、茶色を帯びた暗灰色を呈する。側端部、下端部が残存する瓦は、そのすべてがヘラで面取りされている。1及び8は極めて厚い。

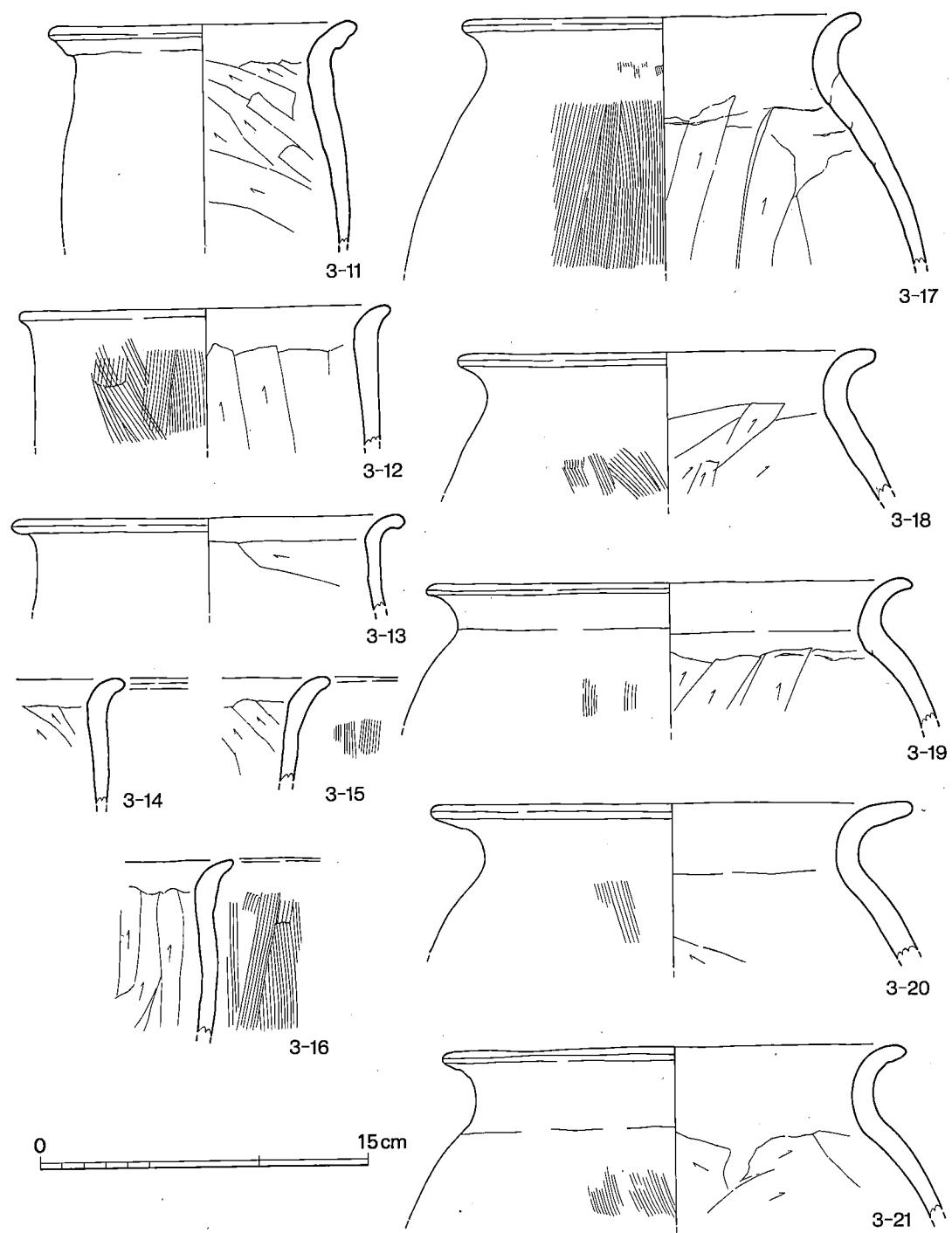
丸 瓦(15~21) 丸瓦の表面はナデ調整などにより、叩き目がない場合が多いのであるが、19は表面に格子の叩きが施されている。この格子目自体は、「井上廃寺」創建時の瓦に見られるものではない。この他の丸瓦は、側端部をヘラで整形される。また、先述の遺構からの丸瓦の出土率は極めて低いものであった。ここで説明を加える瓦は、出土遺構が特定できないという限界はあるが、丸瓦の出土率が高い。これらは、焼成が軟質のものが多い。

第5表 西台地出土遺構新旧対照表

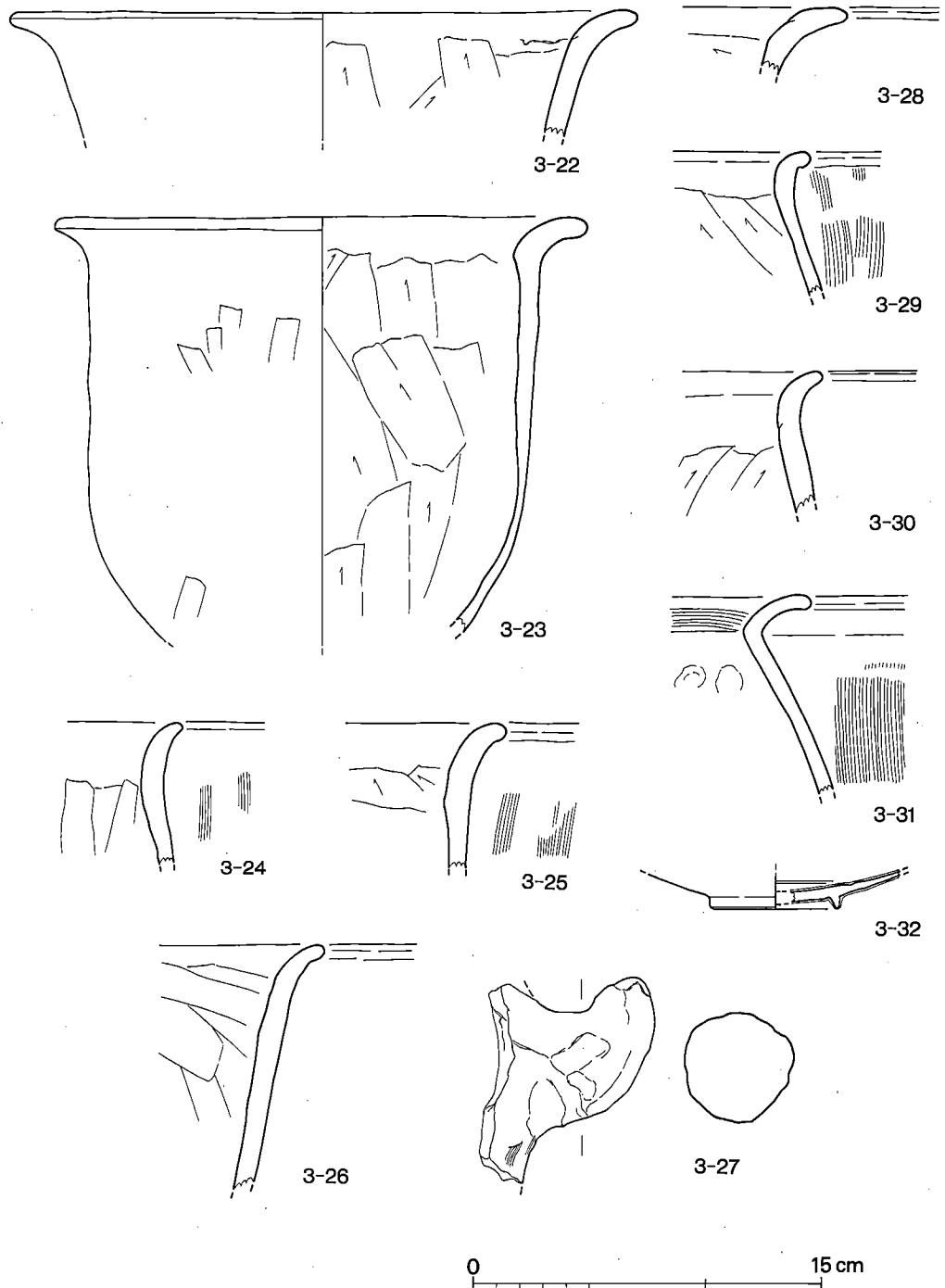
住居跡			井戸(新→旧)
19号から24号 まで欠番	24号 → 竪穴85 25号 → 土壙23 26号 → 土壙18 27号 → 土壙20 28号 → 土壙71 29号 → 土壙70 30号 → 土壙24 31号 → 土壙88 32号 → 土壙87 33号 → 土壙25 34号 → 土壙26 35号 → 土壙83 36号 → 土壙35 37号 → 土壙84 38号 → 土壙37 39号 → 土壙91 40号 → 土壙28 41号 → 土壙94 42号 → 土壙29 43号 → 土壙36 44号 → 土壙92 45号 → 土壙30 46号 → 土壙31 47号 → 土壙93 48号 → 土壙96 49号 → 土壙97 50号 → 土壙98 51号 → 土壙102 52号 → 土壙100 53号 → 土壙101	54号 → 土壙99 55号 → 土壙103 56号 → 土壙105 57号 → 土壙107 58号 → 土壙107 59号 → 土壙109 60号 → 土壙110 61号 → 土壙111 62号 → 土壙112 63号 → 土壙116 64号 → 土壙117 65号 → 土壙119 66号 → 土壙121 67号 → 土壙122 68号 → 土壙123 69号 → 土壙125 70号 → 土壙127 71号 → 土壙128 72号 → 土壙130 73号 → 土壙134 74号 → 土壙135 75号 → 土壙138 76号 → 土壙139 77号 → 土壙142	10号 → 井戸3 11号 → 井戸4 12号 → 井戸5 13号 → 欠番 14号 → 欠番 15号 → 欠番 16号 → 井戸6 17号 → 井戸7 18号 → 井戸8
土壙(新→旧)			周溝状遺構(新→旧)
1号 → 溝9 2号 → 溝10 3号 → 溝2 4号 → 竪穴1 5号 → 竪穴2 6号 → 土壙3 7号 → 土壙83 8号 → 竪穴3 9号 → 土壙1 10号 → 住3内土 11号 → 土壙5 12号 → 土壙2 13号 → 土壙7 14号 → 土壙8 15号 → 土壙10 16号 → 土壙15 17号 → 土壙81 18号 → 土壙82 19号 → P109 20号 → 竪穴6 21号 → 土壙89 22号 → 土壙90 23号 → 竪穴5		3号 → M5 4号 → SM10	
			溝状遺構(新→旧)
			1号 → 3号 2号 → 1号 3号 → 4号 4号 → 6号 5号 → 7号 7号(住17と重複) 8号 → 11号 9号 → 12号 10号 → 14号 11号 → 16号 12号 → 17号



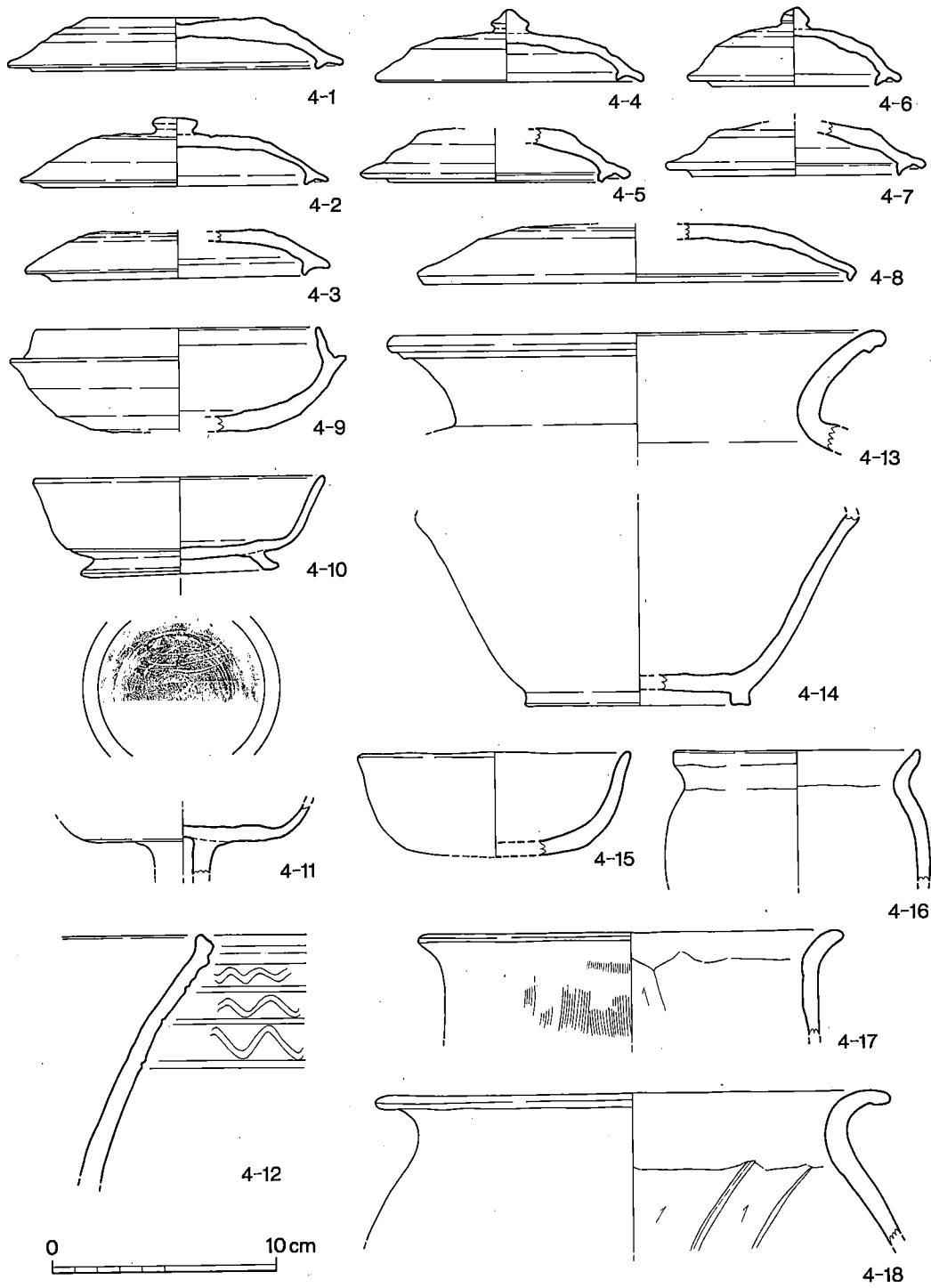
第106図 1号～3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



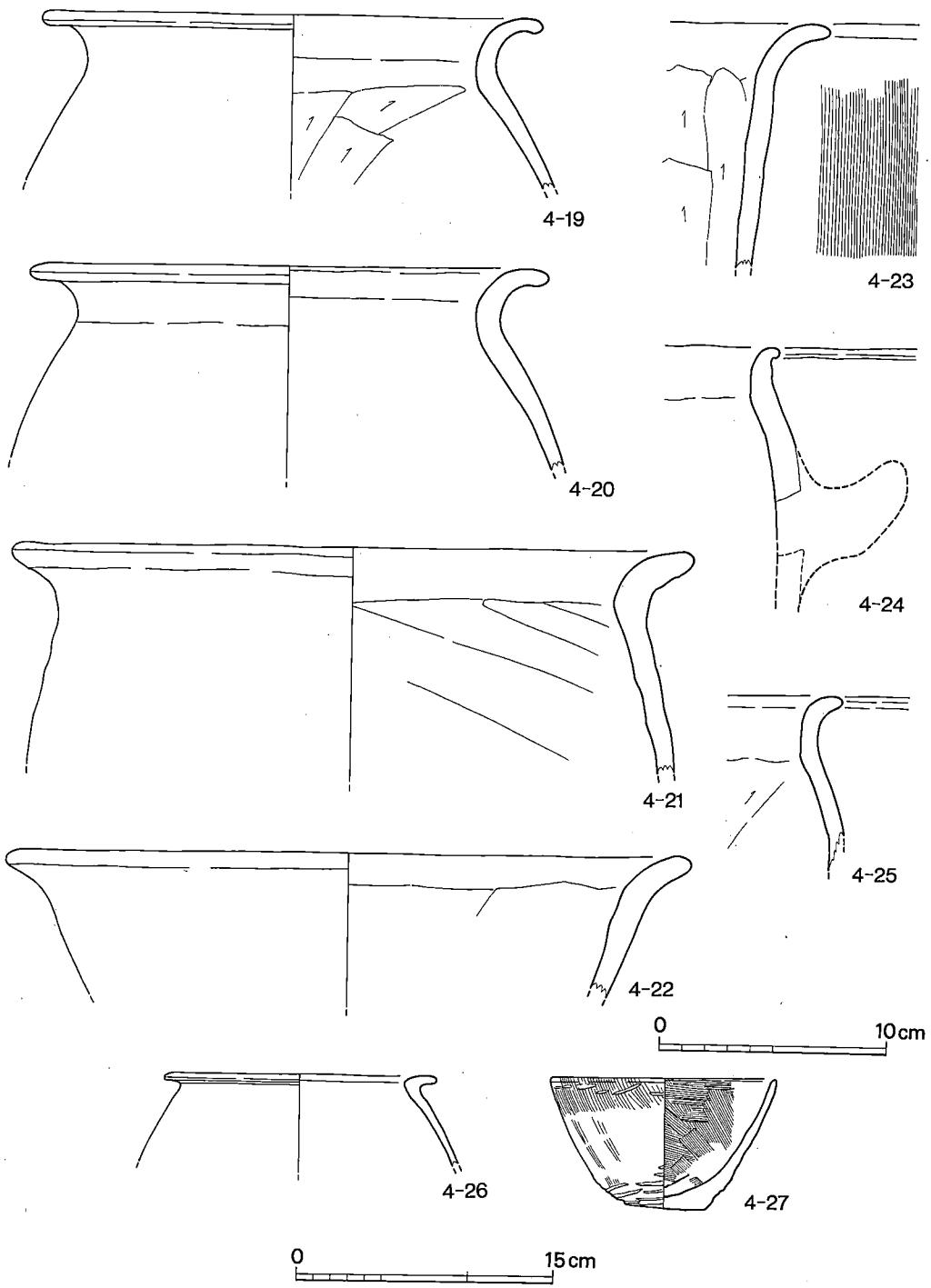
第107図 3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



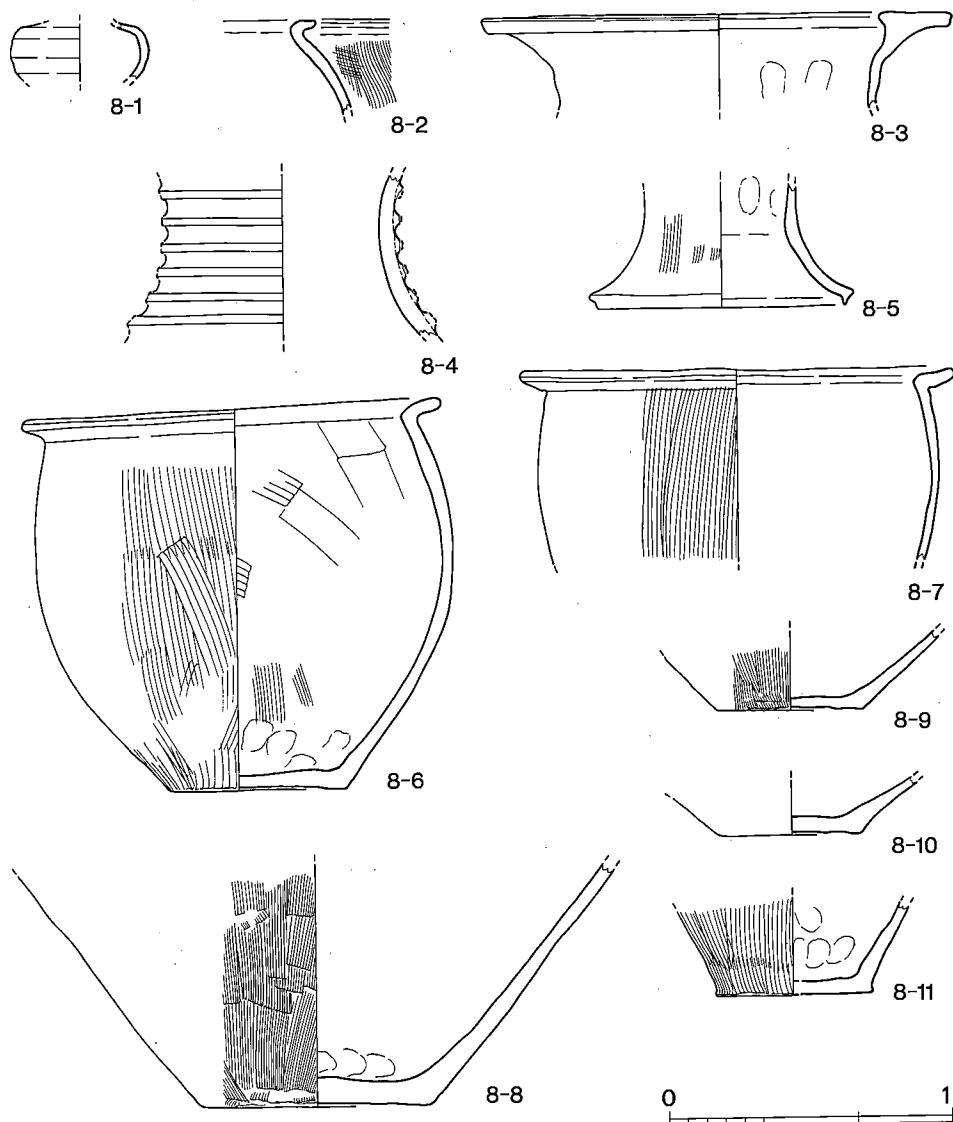
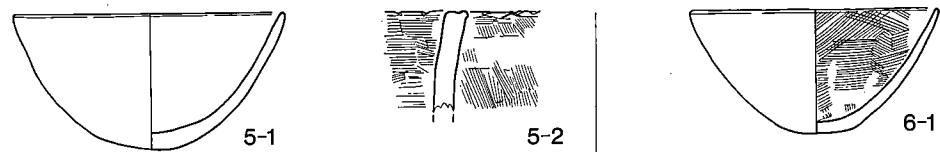
第108図 3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第109図 4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

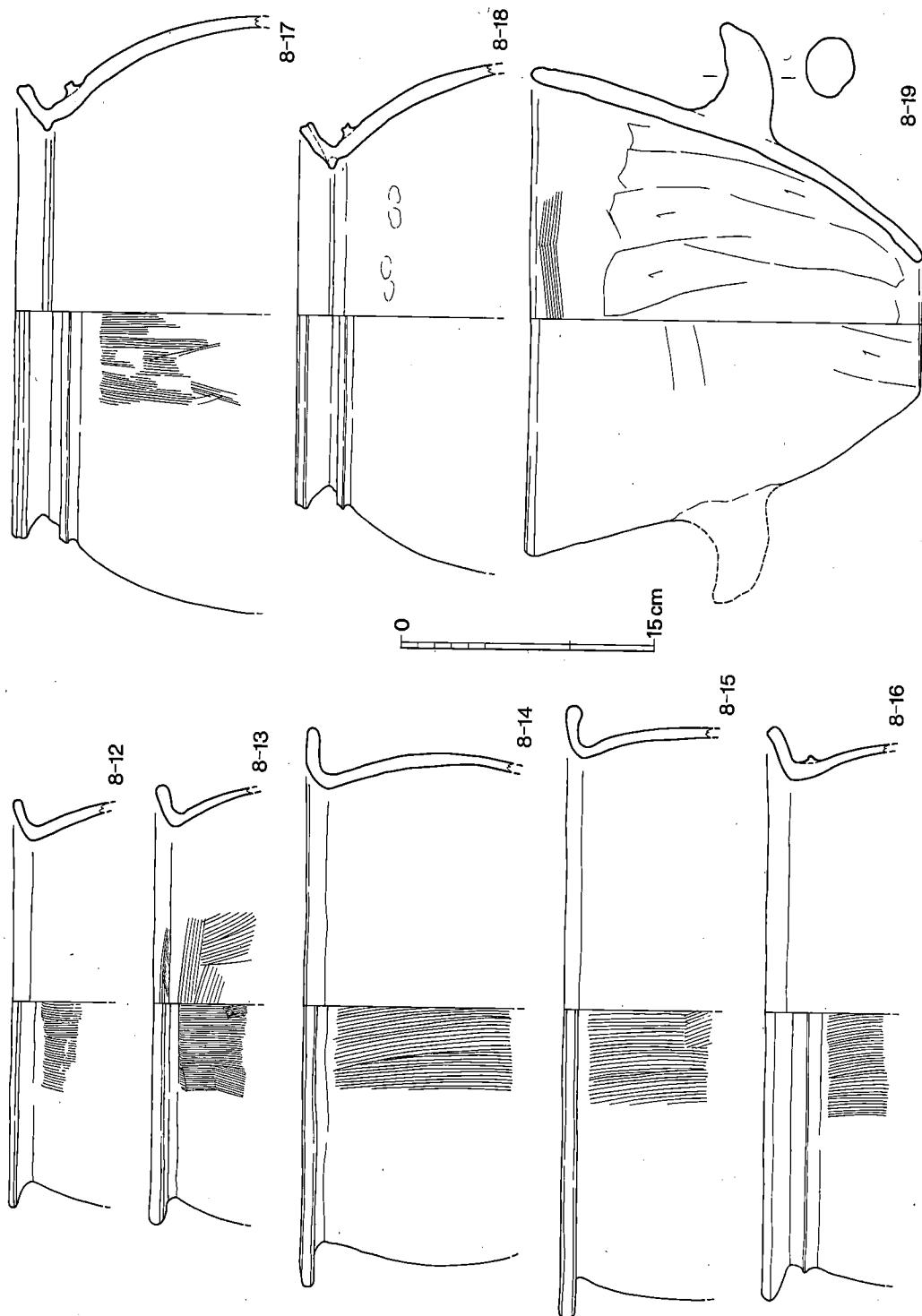


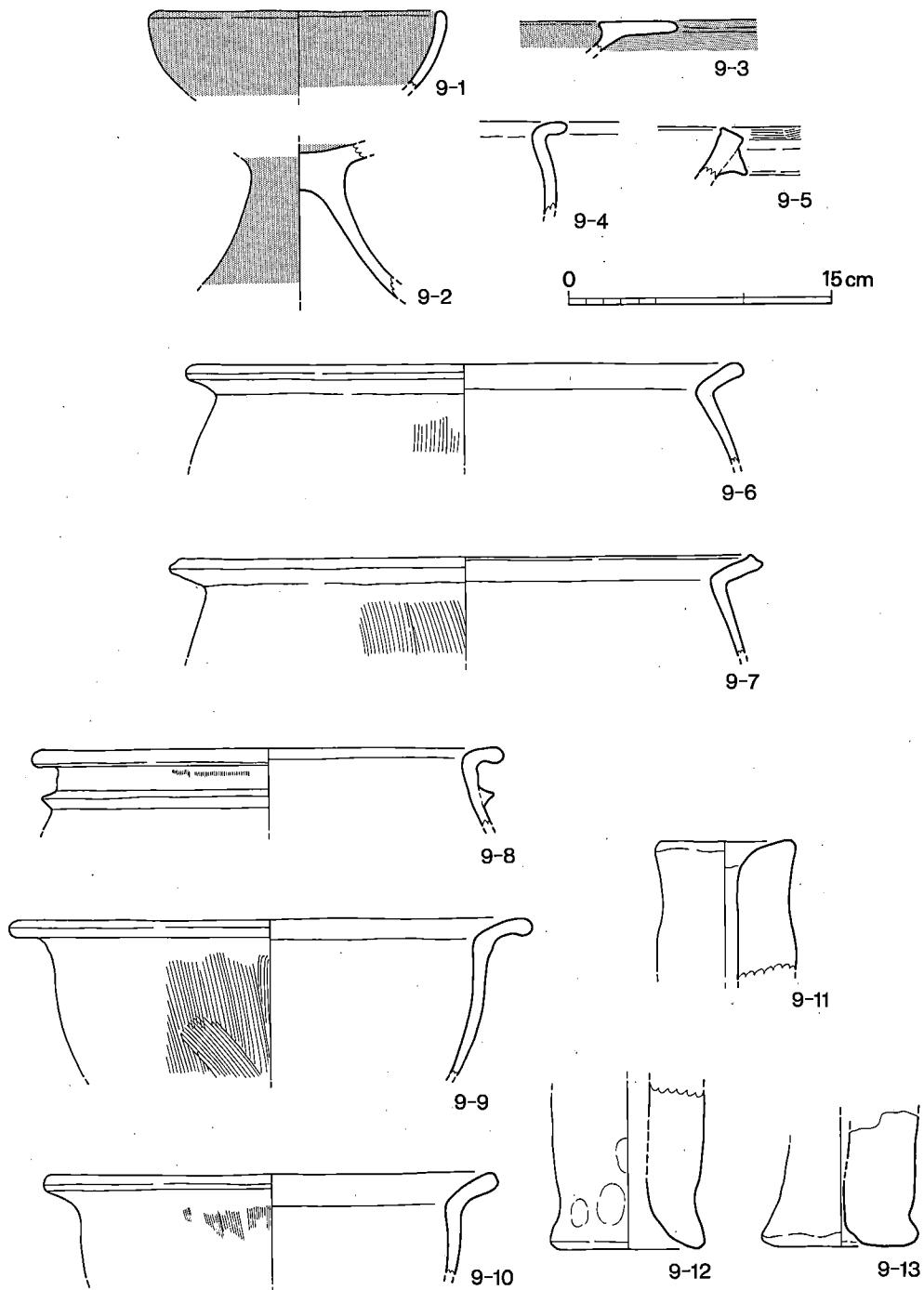
第110図 4号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



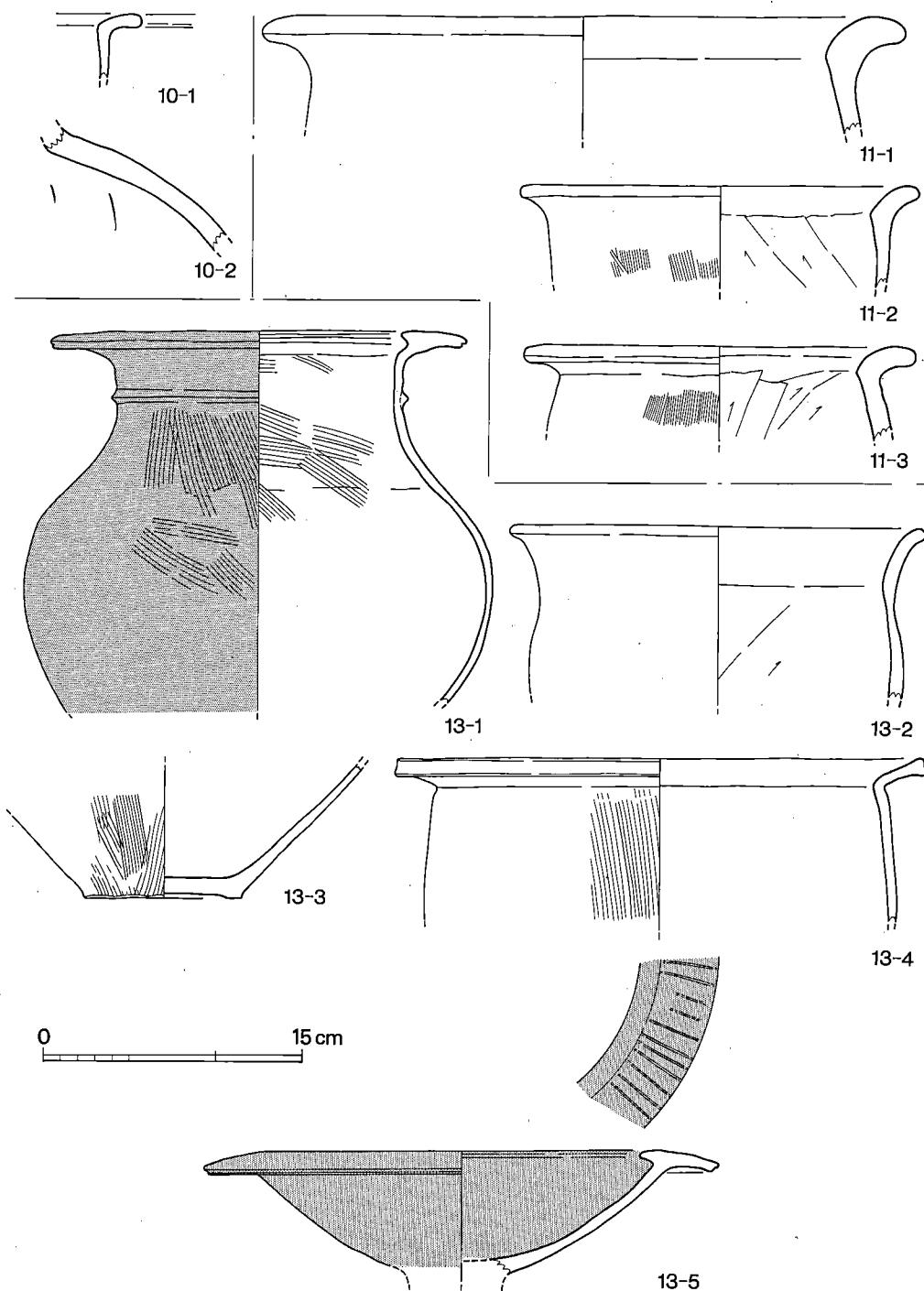
第111図 5号・6号・8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

第112図 8号竪穴住居跡出土土器集測図 (1/3)

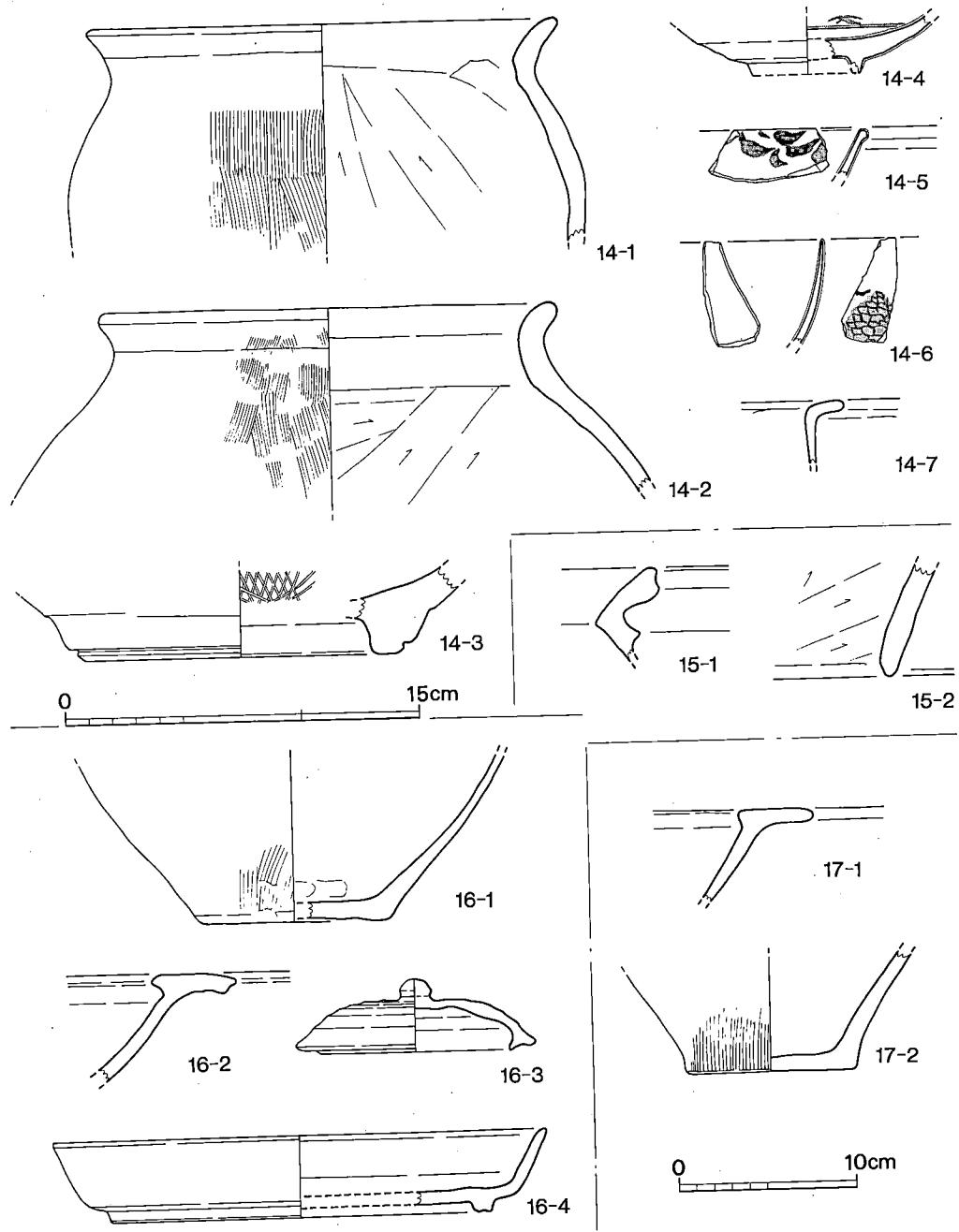




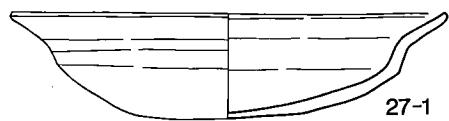
第113図 9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



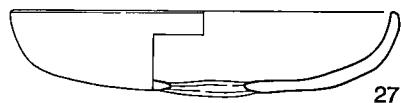
第114図 10号～13号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3・1/4)



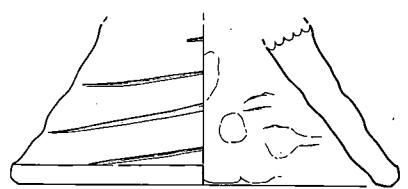
第115図 14号～17号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



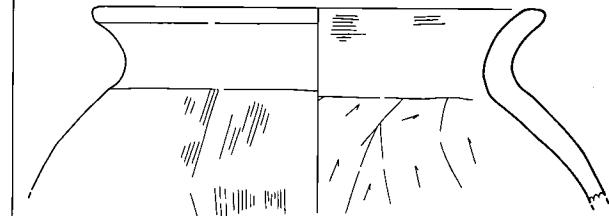
27-1



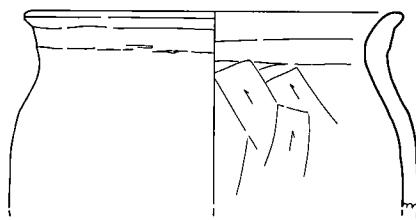
27-2



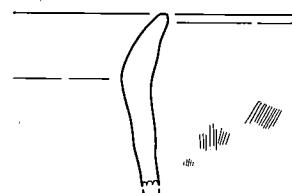
28



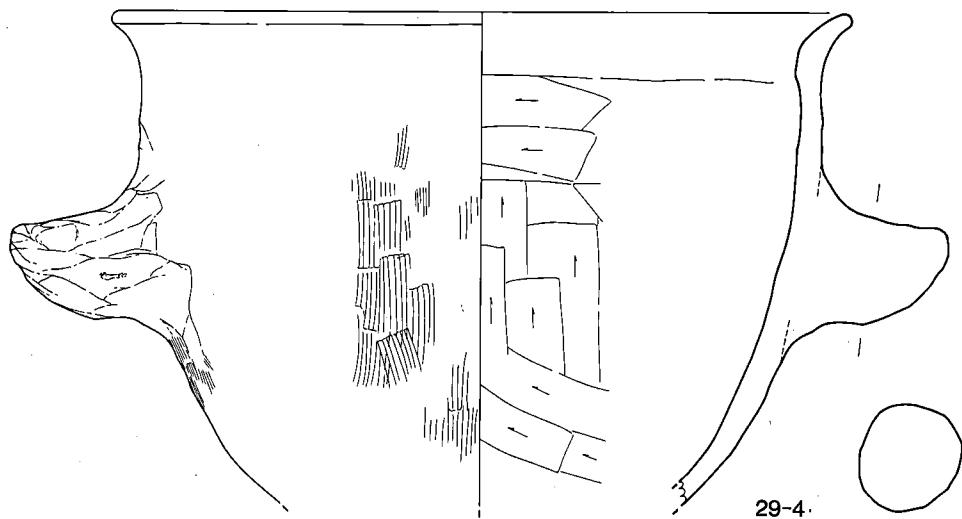
29-1



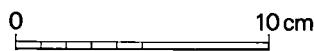
29-2



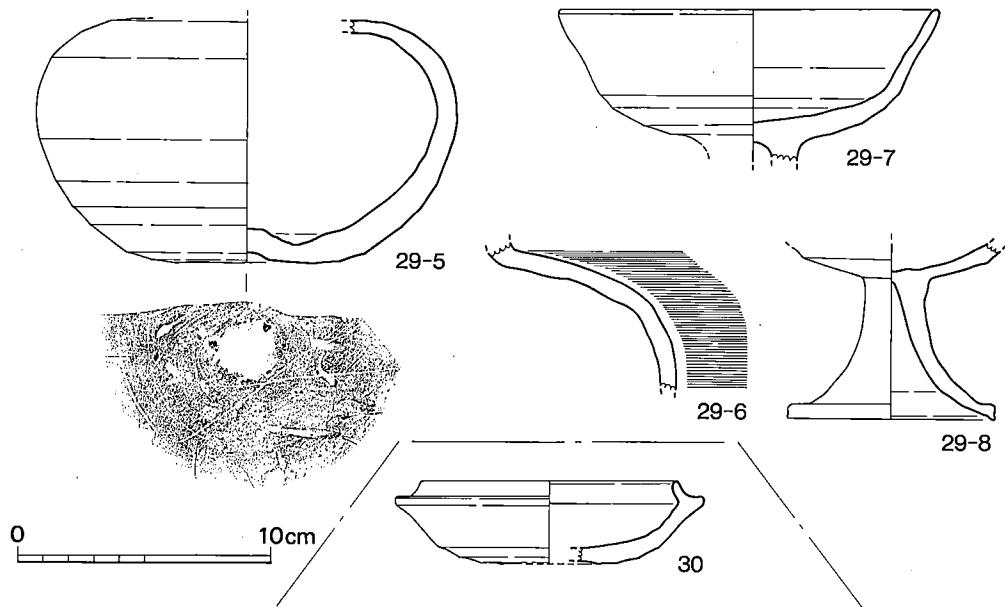
29-3



29-4



第116図 27号～29号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

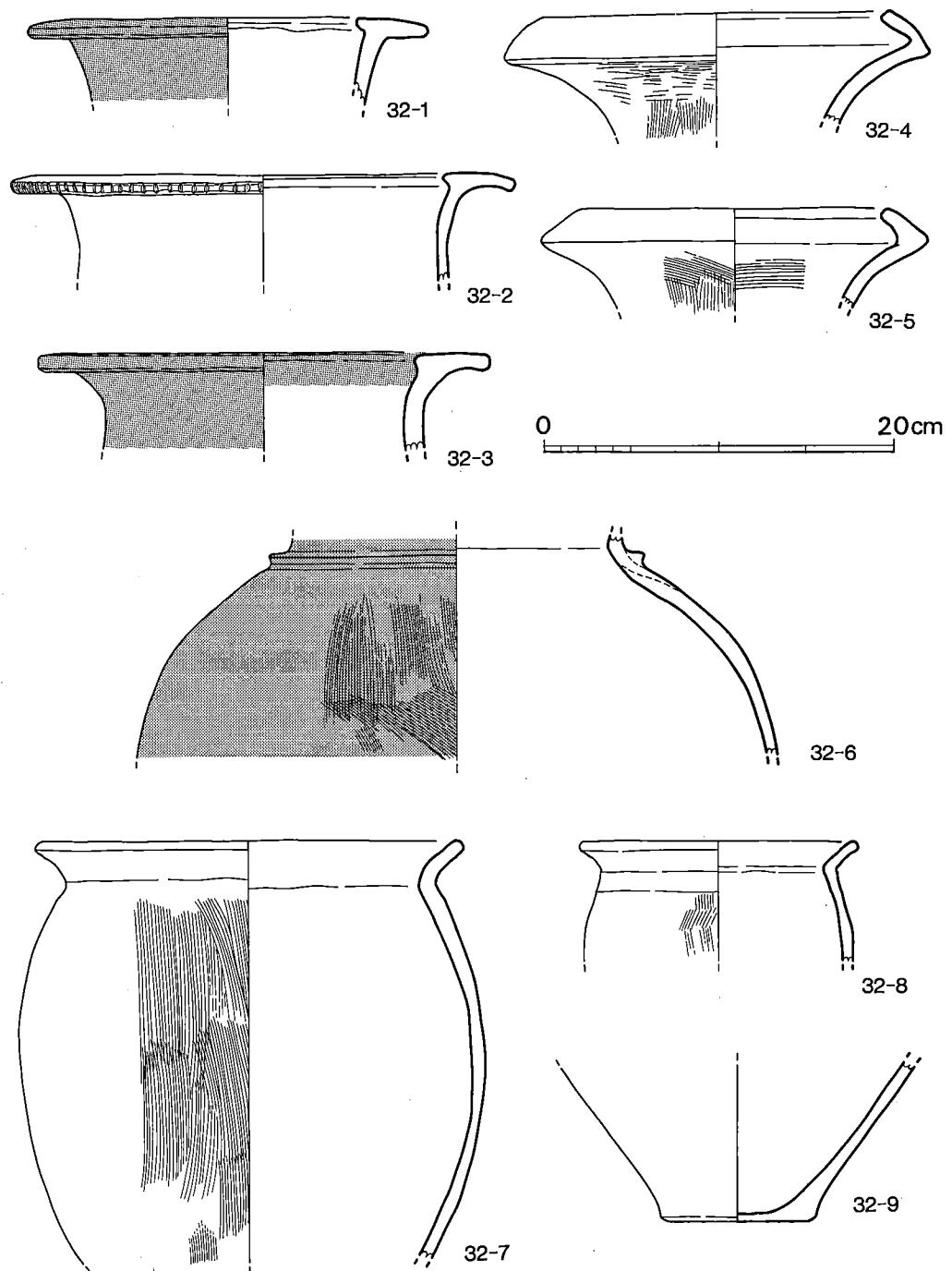


第117図 29号・30号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

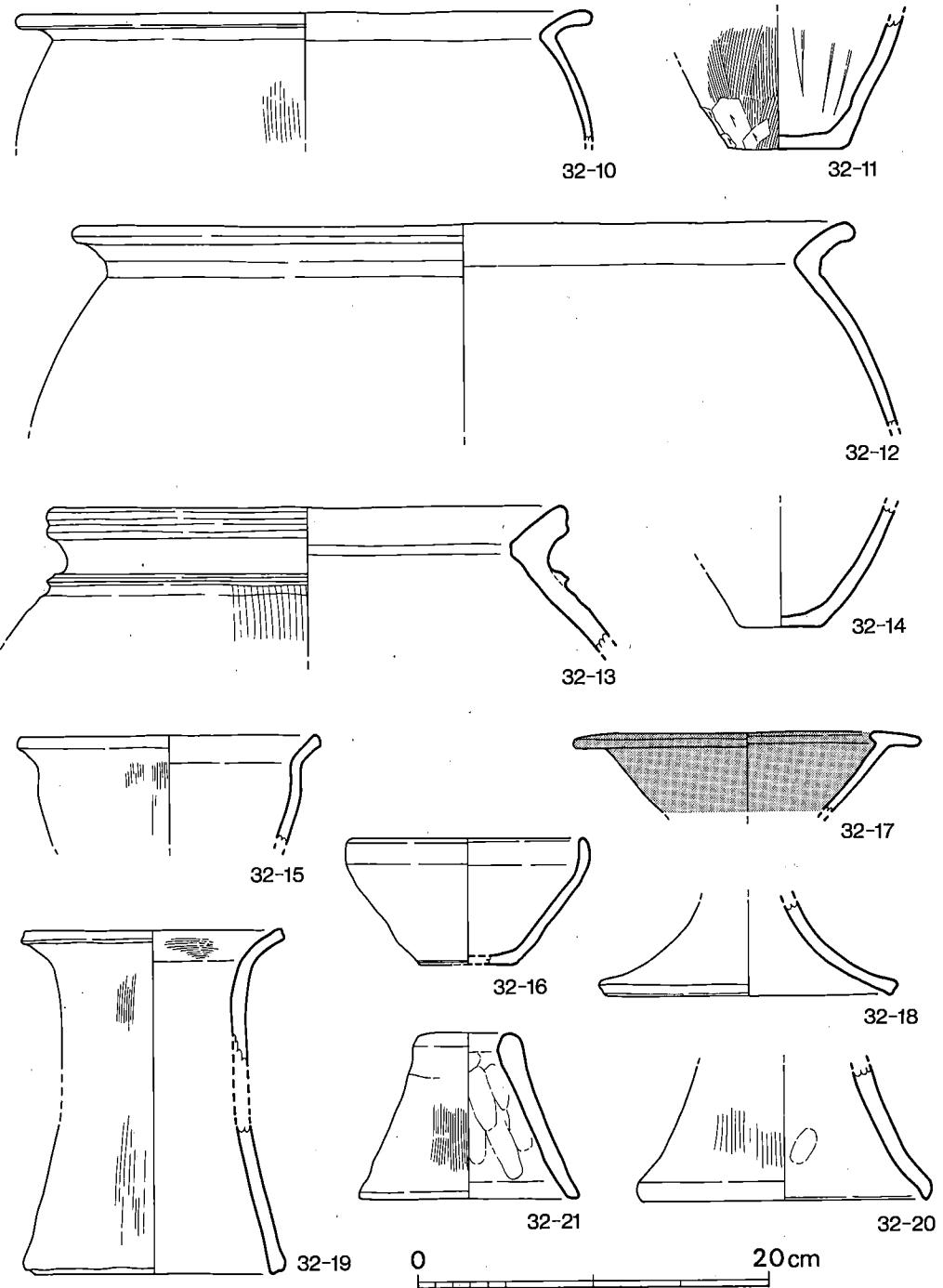
出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

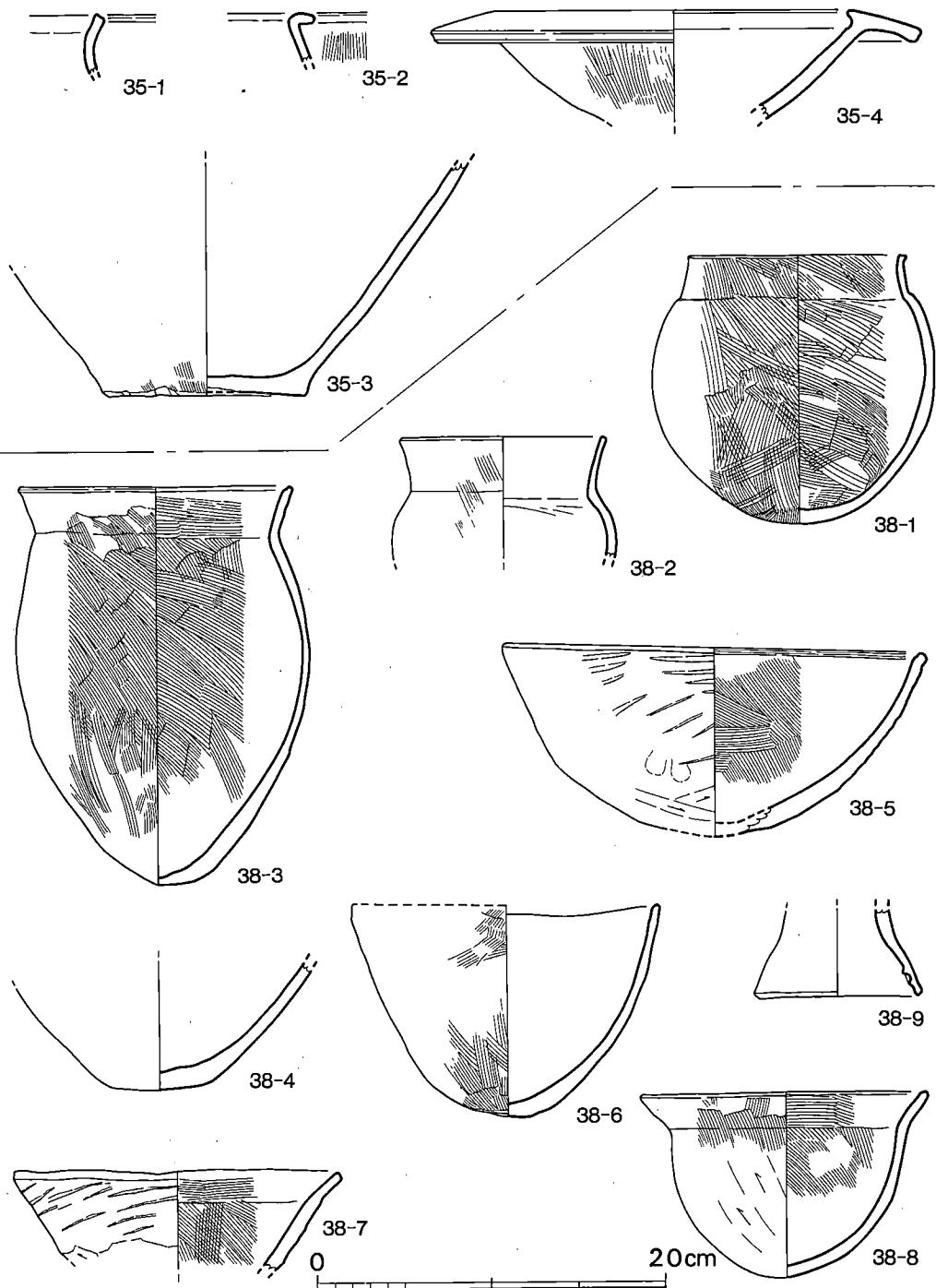
挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第106図 1-1	西台地 1号住居跡	須恵器 高坏	① ②9.8 ③2.2	小片のため不明。	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	貼床中出土
第106図 1-2	1号住居跡	土師器 小型甌	①14 ② ③5	口縁部は肥大し、わずかに外に折り曲げる。	外-ナデとハケ目 内-削り	覆土から出土
第106図 1-3	1号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③6.3	小片であるが、整ったつくりである。	外-摩滅して不明 内-ナデ	貼床中出土 丹塗り土器
第106図 1-4	1号住居跡	弥生土器 甌	①(33) ② ③8	く字形口縁。	外-ナデとヨコナデ 内-ナデとヨコナデ	貼床中出土
第106図 1-5	1号住居跡	土師器 甌	① ②13.5 ③8.2	小片のため不明。	外-ハケ目 内-削り	貼床から出土
第106図 2-1	2号住居跡	弥生土器 壺	①(22.7) ② ③4, 4	直立気味の頸部の上部を大きく外反させ、口縁部を鋤先状に作る。状	外-摩滅 内-ナデ	床面から出土 丹塗土器
第106図 2-2	2号住居跡	須恵器 甌	① ② ③	小片のため不明。	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	覆土から出土 灰をかぶる



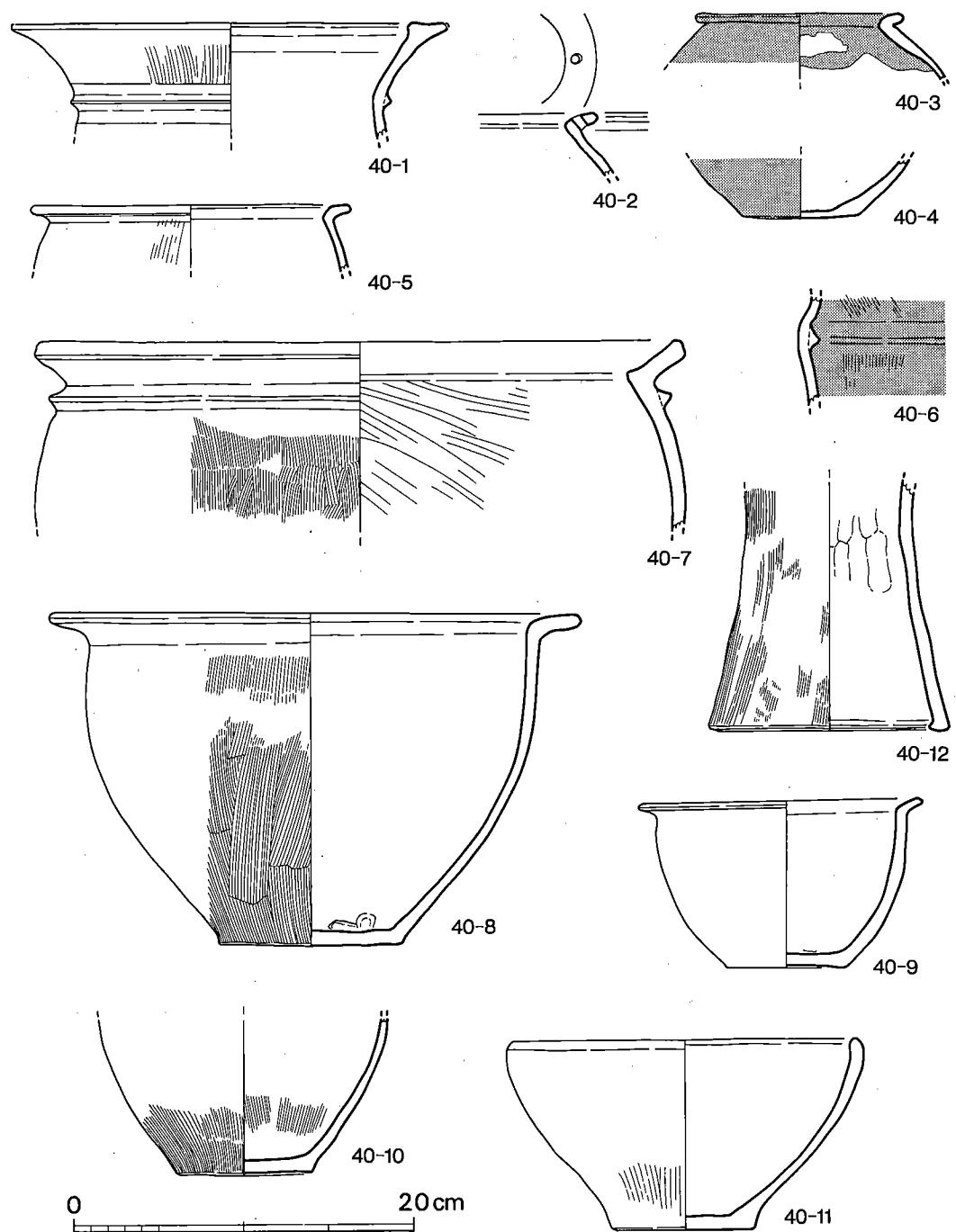
第118図 32号竪穴住居跡出土土器実測図その1 (1/4)



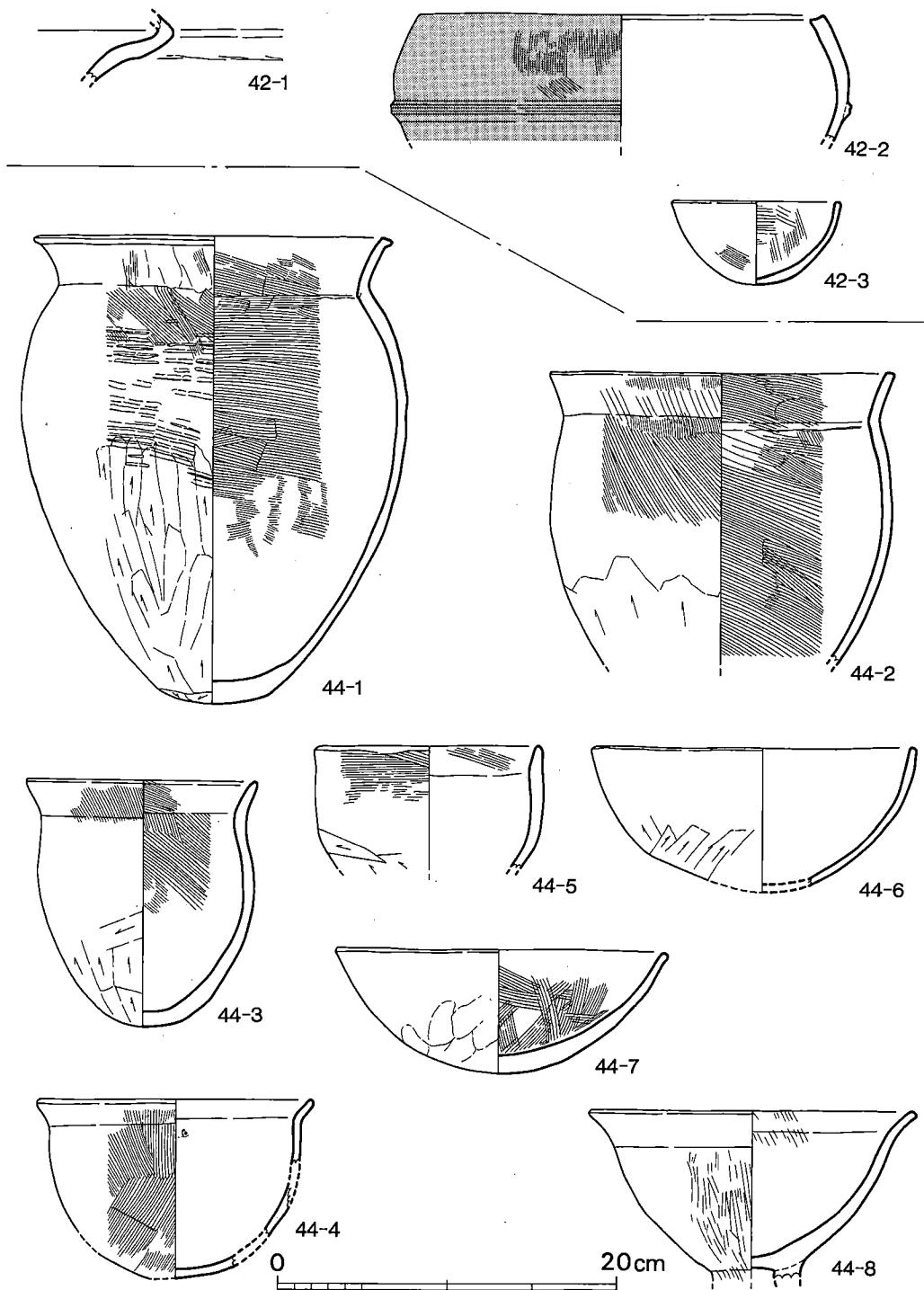
第119図 32号竪穴住居跡出土土器実測図その2 (1/4)



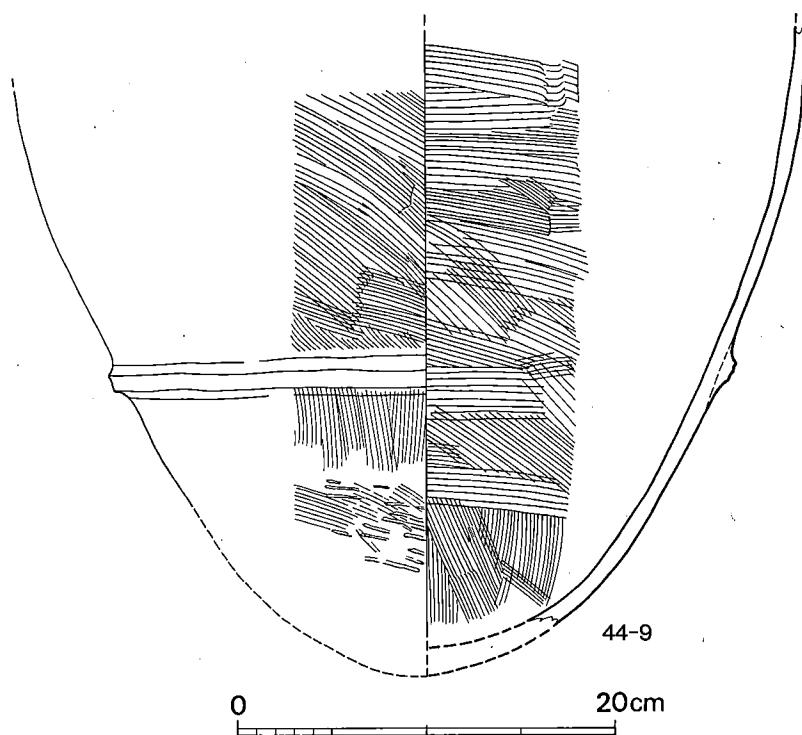
第120図 35号・38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



第121図 40号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



第122図 42号・44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)



第123図 44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

捕団土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第106図2-3	西台地 2号住居跡	弥生土器 脚部	① ②(13.8) ③5, 7	ラッパ状の脚部。	外一ナデ後むへら磨 き 内一ナデ後へラ磨き	覆土から出土 丹塗土器
第106図3-1	3号住居跡	須恵器 坏身	①(11.3) ② ③3, 8	口縁部は内傾し、矮小化 している。	外一ヨコナデとヘラ 削り 内一ヨコナデ	床面から出土
第106図3-2	1号住居跡	須恵器 坏身	①(14.5) ②9 ③4, 6	高台は裾開きで、よく踏 ん張った形状。	外一ヨコナデとナデ 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第106図3-3	1号住居跡	須恵器 坏蓋	①(10.5) ② ③2, 8	ツマミを決失する。返り はしっかりととした作り。	外一ヨコナデ、ナデ とカキ目 内一ヨコナデとナデ	貼床下層
第106図3-4	3号住居跡	須恵器 壺	①(7) ② ③(5)	肩の張った短頸壺。	外一ヨコナデと削り 内一ヨコナデ	床面から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第106図3-5	西台地 3号住居跡	須恵器 壺身	①(8) ② ③3.4	壺身としたが、口縁部等の作りから、壺の蓋かもしれない。	外-ヨコナデと削り 内-ヨコナデとナデ	床面から出土
第106図3-6	3号住居跡	須恵器 壺身	①(9) ② ③(3.5)	底部を厚く作る。	外-ヨコナデと削り 内-ヨコナデとナデ	カマド内から出土
第106図3-7	3号住居跡	土師器 椀	①(10) ② ③4.2	浅い半球形。	内外面とも摩滅	覆土から出土
第106図3-8	3号住居跡	土師器 壺	①(16.2) ② ③(3.5)		外-ヨコナデ、ナデと削り 内-ヘラ削り	貼床から出土
第106図3-9	3号住居跡	土師器 壺	①(16.5) ② ③(3.8)	口縁部を直立気味に折り曲げている。	外-ヨコナデ、ナデと削り 内-ヨコナデとナデ	覆土から出土 二次加熱 煤付着
第106図3-10	3号住居跡	土師器 甕	①(11.5) ② ③11.1	把手付の小型の甕でカマドの支脚に転用されたもの。二次加熱。煤付着。	外-ナデ 内-ヨコナデと削り	床面から出土
第106図3-11	3号住居跡	土師器 甕	①(13.2) ② ③10	頸部外面は強いナデのため稜がつく。体部は直線的で丸みがない。	外-ナデ 内-ヨコナデと削り	カマド内から出土
第107図3-12	3号住居跡	土師器 小型甕	①(16.5) ② ③6.3	口縁部は体部上端をわずかに外反させ、口唇部を薄く作る。	外-ハケ 内-ナデと削り	床面から出土
第107図3-13	3号住居跡	土師器 甕	①(17.1) ② ③4.4	口縁部は外に折り曲げ、口唇部を肥厚させる。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第107図3-14	3号住居跡	土師器 甕	① ② ③	12と同じ作りである。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第107図3-15	3号住居跡	土師器 甕	① ② ③	12と同じ作りである。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	床面から出土
第107図3-16	3号住居跡	土師器 甕	① ② ③	12と同じ作りである。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第107図3-17	3号住居跡	土師器 甕	①(17.3) ② ③11.3	内面に粘土の継ぎ目が残る。ナデ肩の土器である。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデ、ナデと削り	床面から出土
第107図3-18	3号住居跡	土師器 甕	①(18.2) ② ③6.8	器形は17と同じ。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	床面から出土
第107図3-19	3号住居跡	土師器 甕	①(20.2) ② ③6.4	肩がやや張り、口縁部は強く外反する。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第107図3-20	西台地 3号住居跡	土師器 甕	①(22) ② ③7.2	肩がやや張り、口縁部は強く外反する。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第107図3-21	3号住居跡	土師器 甕	①(22) ② ③8	頸部は直立し、肩は張っている。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第108図3-22	3号住居跡	土師器 甌	①(26.2) ② ③5.2	深めの洗面器形を呈す。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第108図3-23	3号住居跡	土師器 甕	①23 ② ③17.7	頸部～体部は筒形を呈する。口縁部～体部上半は器内が厚い。	外-ヨコナデ、ナデ 内-ヨコナデと削り	カマド西側から出土
第108図3-24	3号住居跡	土師器 甌	① ② ③	小片のため不明。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第108図3-25	3号住居跡	土師器 甌	① ② ③	小片のため不明。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第108図3-26	3号住居跡	土師器 甌	① ② ③	小片のため不明。	外-摩滅 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第108図3-27	3号住居跡	土師器 甌	① ② ③	小片のため不明。	外-ナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第108図3-28	3号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小片のため不明。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデと削り	貼床から下層 から出土
第108図3-29	3号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小片のため不明。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	床面から出土
第108図3-30	3号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小片のため不明。	外-摩滅 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第108図3-31	3号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小片のため不明。	内外面ともヨコナデ とハケ	床面から出土 煤付着
第108図3-32	3号住居跡	磁器 鉢?	① ②(5.2) ③1.7	見込に沈線をめぐらす。 高台は、低小で浅鉢形を呈すると思われる。	釉調は白色気味水色	覆土から出土
第109図4-1	4号住居跡	須恵器 壺蓋	①(12.6) ② ③2.3	天井部は底平である。ツマミはない。返りはしっかりとしている。	外-ヨコナデと削り 内-ヨコナデとナデ	カマド内から 出土
第109図4-2	4号住居跡	須恵器 壺蓋	①(11.7) ② ③3.1	低いツマミを付す。1と比べて器形に丸みを持つ。 返りは1と同じ。	外-ヨコナデと削り 内-ヨコナデとナデ	覆土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第109図4-3	西台地 4号住居跡	須恵器 坏蓋	①(11.4) ② ③2.1	全体に器肉が厚い。返りはしっかりしている。	外一ヨコナデと削り 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第109図4-4	4号住居跡	須恵器 坏蓋	①(9.9) ② ③3.2	宝珠形のツマミ。返りはしっかりしている。	外一ヨコナデと削り 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第109図4-5	4号住居跡	須恵器 坏蓋	①(9.5) ② ③3.3	返りはしっかりしている。	外一ヨコナデと削り 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第109図4-6	4号住居跡	須恵器 坏蓋	①(7.4) ② ③4.4	宝珠形のツマミ。返りはしっかりしている。	外一ヨコナデと削り 内一ヨコナデとナデ	貼床から出土
第109図4-7	4号住居跡	須恵器 坏蓋	①(9.2) ② ③3.3	返りはしっかりしている。	外一ヨコナデと削り 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第109図4-8	4号住居跡	須恵器 坏蓋	①(19) ② ③2.5	大型の蓋で、折り返しの返りである。	外一ヨコナデと削り 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第109図4-9	4号住居跡	須恵器 坏身	①(12.6) ② ③4.6	大振りでしっかりとした作り。	外一ヨコナデと削り 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第109図4-10	4号住居跡	須恵器 坏身	①13 ②8.8 ③4.3	高台は裾開きで、しっかりと踏んで張っている。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第109図4-11	4号住居跡	須恵器 高坏	① ② ③2.9	細く、高い脚部がつく高坏。現存部分で透孔はない。	外一ヨコナデと削り 内一ヨコナデとナデ	貼床下層埋土 から出土
第109図4-12	4号住居跡	須恵器 大甕	① ② ③	小片のため不明。	外一ヨコナデと波状文 内一ヨコナデ	覆土から出土
第109図4-13	4号住居跡	須恵器 甕	①(21.2) ② ③5.3	外面の口縁直下に突帯が巡る。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第109図4-14	4号住居跡	須恵器 壺	① ②10 ③8.4	高台は直立する。体部中央で屈曲して肩に移行する。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第109図4-15	4号住居跡	土師器 椀	①(11.9) ② ③4.5	器肉の厚さはほぼ均一。	外一摩滅 内一摩滅	覆土から出土
第109図4-16	4号住居跡	土師器 甕	①(10.8) ② ③5.9	口縁部外面に、調整時の強いナデのためか稜が入る。	外一摩滅 内一摩滅	覆土から出土
第109図4-17	4号住居跡	土師器 甕	①(10.8) ② ③5.9	肩が明確ではない。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデと削り	覆土から出土 外面に煤付着

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第109図 4-18	西台地 4号住居跡	土師器 甕	①(21.3) ② ③6.8	口縁部は外方に強く折り 曲げられている。	外一摩滅 内一部摩滅、削り	覆土から出土 外面化粧土?
第110図 4-19	4号住居跡	土師器 甕	①(22) ② ③7.4	口縁部は外方に強く折り 曲げられている。なで肩 である。	外一摩滅 内一部摩滅、削り	覆土から出土 外面化粧土?
第110図 4-20	4号住居跡	土師器 甕	①(22.8) ② ③8.7	口縁部は外方に強く折り 曲げられている。なで肩 である。	外一摩滅 内一摩滅	覆土から出土
第110図 4-21	4号住居跡	土師器 甕	①(29) ② ③9.7	口縁部はく字状に外反す る。	外一ヨコナデとナデ 内一ヨコナデと削り	覆土から出土
第110図 4-22	4号住居跡	土師器 鉢?	①(28.9) ② ③6.3	深い洗面器形。	外一摩滅 内一部摩滅	覆土から出土
第110図 4-23	4号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小片のため不明。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデと削り	カマドから出 土
第110図 4-24	4号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小さな、甕形の口縁部を 有する。	外一部摩滅、ハケ 内一部摩滅、削り ナデ	覆土から出土
第110図 4-25	4号住居跡	土師器 甕	① ② ③	小片のため不明。	外一摩滅 内一ヨコナデと削り	覆土から出土
第110図 4-26	4号住居跡	弥生土器 無頸壺	①(16) ② ③5.3	口縁部をほぼ水平に折り 曲げた短頸壺である。	外一摩滅 内一ナデ	貼床下層から 出土 丹塗磨研土器
第110図 4-27	4号住居跡	弥生土器 鉢	①13.1 ② ③7.5	底部の器肉は厚く、直線的 的な作りの体部の器肉は 薄い。	外一タタキ、ハケと ナデ 内一ハケ	覆土から出土
第111図 5-1	5号住居跡	弥生土器 鉢	①14.3 ②4.6 ③7.2	口縁部は外方に強く折り 曲げられている。なで肩 である。	外一ナデ 内一ナデ	覆土から出土
第111図 5-2	5号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③	小片のため不明。	外一ヨコナデハケ 内一ハケ	覆土から出土
第111図 6-1	6号住居跡	弥生土器 鉢	①13.1 ② ③6.5	全体に器肉の厚さは均一 である。端整な作りであ る。	外一ナデ 内一ハケ	床面から出土
第111図 8-1	8号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③3	小型の土器だが、丁寧な 作りである。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデ	床面から出土
第111図 8-2	8号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③	小片のため不明である。	外一ヨコナデとハケ 内一ナデ	覆土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第111図 8-3	西台地 8号住居跡	弥生土器 壺	①(34.8) ② ③5	ほぼ直立気味の頸部に鋤 先状口縁が付く。	外一摩滅 内一部摩滅, ナデ	覆土から出土
第111図 8-4	8号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③8.7	頸部に口唇上突帯が多巡 する。	外一摩滅 内一摩滅	床面から出土
第111図 8-5	8号住居跡	弥生土器 器台?	① ②(14) ③6.4	脚裾端部は嘴状に納めた 作りである。	外一ヨコナデとハケ 内一ナデ	覆土から出土
第111図 8-6	8号住居跡	弥生土器 甕	①21.7 ②9.5 ③20.4	く字形口縁。体部は丸み 持つ。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデ, ナデ とハケ	屋内土壙から 出土
第111図 8-7	8号住居跡	弥生土器 甕	①(23) ② ③10.2	体部の丸みは6より少な く、口縁部の上面はやや 内湾する。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとナデ	床面から出土
第111図 8-8	8号住居跡	弥生土器 壺	① ②12 ③12.6	大型の壺であるが、口縁 部の形状は不明である。	外一ハケ 内一ナデ	覆土から出土
第111図 8-9	8号住居跡	弥生土器 壺	① ②8 ③4.1	小型の壺である。口縁部 の形状は不明である。	外一ハケ 内一ナデ	覆土から出土
第111図 8-10	8号住居跡	弥生土器 壺	① ②7.4 ③3	小型の壺である。口縁部 の形状は不明である。	外一部摩滅 内一ナデ	床面から出土 丹塗磨研出土
第111図 8-11	8号住居跡	弥生土器 甕	① ②8 ③4.7	しっかりとした作りの底 部である。	外一ハケ 内一ナデ	覆土から出土
第112図 8-12	8号住居跡	弥生土器 甕	①(24) ② ③5.5	体部の上部を折り曲げて 口縁部とする。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとナデ	床面から出土
第112図 8-13	8号住居跡	弥生土器 甕	①(26) ② ③5.8	体部の上部を折り曲げて 口縁部とする。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデ, ナデ とハケ	覆土から出土
第112図 8-14	8号住居跡	弥生土器 甕	①(32.8) ② ③12.5	体部の上部を折り曲げて 口縁部とする。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデ, ナデ	貼床下層から 出土
第112図 8-15	8号住居跡	弥生土器 甕	①(35.4) ② ③8.5	体部の上部を折り曲げて 口縁部とする。端部は把 厚する。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデ, ナデ	覆土から出土
第112図 8-16	8号住居跡	弥生土器 甕	①(34) ② ③7.3	体部の上部を折り曲げて 口縁部とする。その上面 はやや内湾する。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデ, ナデ	屋内土壙埋土 から出土
第112図 8-17	8号住居跡	弥生土器 甕	①(39.2) ② ③22	T字形口縁の系譜にある もので、頸部内側には突 帯状に巡る。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデ, ナデ	覆土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第112図 8-18	西台地 8号住居跡	弥生土器 甕	①(32.6) ② ③17.2	17より小型であり、形状は17と同様である。	外一摩滅 内一ヨコナデ、ナデ	床面から出土
第112図 8-19	8号住居跡	土師器 甌	①28 ②8 ③23.2	小型の甌である。器肉は均一で、端整な作りである。	外一ナデ、ケズリ 内一ナデ、ヨコナデと削り	覆土から出土
第113図 9-1	9号住居跡	弥生土器 椀	①(16.1) ② ③4.5	椀としたが、椀形高杯の杯部かも知れない。	外一摩滅 内一摩滅	覆土から出土 丹塗土器
第113図 9-2	9号住居跡	弥生土器 高杯	① ② ③8.7	1と接合する同一個体の可能性あり。	外一ヘラミガキ 内一ヘラミガキとナデ	床面から出土 丹塗磨研土器
第113図 9-3	9号住居跡	弥生土器 高杯	① ② ③	鋤先状口縁。小片のため不明。	外一ヨコナデ内一ヨコナデ	床面から出土 丹塗土器
第113図 9-4	9号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③5.3	小片のため不明。	外一摩滅 内一ナデ	覆土から出土
第113図 9-5	9号住居跡	弥生土器 椀?	① ② ③	小片のため不明。	外一ヨコナデとハケ 内一ナデ	床面から出土
第113図 9-6	9号住居跡	弥生土器 甕	①(31) ② ③5.7	く字形口縁。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとナデ	床面から出土
第113図 9-7	9号住居跡	弥生土器 甕	①(32.7) ② ③5.7	く字形口縁で、端部はつまみあげている。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第113図 9-8	9号住居跡	弥生土器 甕	①(26.2) ② ③4.6	口縁部は外方に折り曲げている。口唇部は肥厚する。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第113図 9-9	9号住居跡	弥生土器 甕	①(29) ② ③9	口縁部は外方に折り曲げている。口唇部は肥厚する。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとナデ	床面から出土
第113図 9-10	9号住居跡	弥生土器 甕	①(25) ② ③5.8	口縁部は外方に折り曲げている。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとナデ	床面から出土
第113図 9-11	9号住居跡	弥生土器 器台	①8 ② ③7.3	器肉の厚い、この器台通有の作りである。	外一ナデ 内一ナデ	床面から出土
第113図 9-12	9号住居跡	弥生土器 器台	① ②8 ③9	器肉の厚い、この器台通有の作りである。	外一ナデ 内一ナデ	床面から出土
第113図 9-13	9号住居跡	弥生土器 器台	① ②7.2 ③7.8	器肉の厚い、この器台通有の作りである。	外一ナデ 内一ナデ	床面から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第114図10-1	西台地 10号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③3.8	口縁部は外方に折り曲げ ている。	外-摩滅 内-摩滅	床面から出土
第114図10-2	10号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③7.1	小片のため不明である。	外-工具によるナデ 内-工具痕あり	覆土から出土
第114図11-1	11号住居跡	土師器 甕	①(28) ② ③5.1	大型の甕で、口頸部の器 肉が厚い。	外-ヨコナデ 内-摩滅	覆土から出土
第114図11-2	11号住居跡	土師器 甕	①(17.3) ② ③4.4	中型の甕である。強いヘ ラ削りのため、体部の器 肉は薄い。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第114図11-3	11号住居跡	土師器 甕	①(16.9) ② ③4.1	中型の甕である。現存部 では2と異なり、器肉は 薄い。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第114図13-1	13号住居跡	弥生土器 壺	①(24.1) ② ③21.5	鋤先口縁の壺。体部は球 状で、器肉の厚さは均一 で薄い。	内外面とも、ナデ、 ヨコナデ、ハケ	床面から出土 丹塗磨研土器
第114図13-2	13号住居跡	土師器 甕	①(18.2) ② ③7.3	中型の甕。小片の反転復 原図。	外-摩滅 内-削り	覆土から出土
第114図13-3	13号住居跡	弥生土器 壺	① ②9.2 ③7.8	丹塗の痕跡はない。1と 同一個体か否かは不明。	外-ハケ 内-ナデ	床面から出土
第114図13-4	13号住居跡	弥生土器 甕	①(30) ② ③9.6	口縁部は折り曲げて作り、 端部は肥厚する。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデとナデ	床面から出土
第114図13-5	13号住居跡	弥生土器 高坏	①(29.9) ② ③7.2	鋤先口縁の高坏。脚部の 形状は不明。	外-かなり摩滅 内-かなり摩滅	床面から出土 丹塗磨研土器
第115図14-1	14号住居跡	土師器 甕	①(20) ② ③10.6	体部の膨らむ甕。なで肩 である。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第115図14-2	14号住居跡	土師器 甕	①(19.4) ② ③9.2	体部から口頸部にかけて 一体の作りで、口縁部は 折り曲げている。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデと削り	覆土から出土
第115図14-3	14号住居跡	陶器 鉢	① ②(13.3) ③3.5	小片のため不明。	外-削り 内-網目状の櫛目	覆土から出土
第115図14-4	14号住居跡	磁器 碗	① ②(4.5) ③2.3	碗としたが、鉢の可能性 を残す。	外-削り 内-吳須による絵付 け	覆土から出土
第115図14-5	14号住居跡	磁器 碗	① ② ③2	小片のため不明。	外- 内-吳須による絵付 け	覆土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第115図14-6	西台地 14号住居跡	磁器 碗	① ② ③	小片のため不明。	外一呉須による絵付 け 内一	覆土から出土
第115図14-7	14号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③3.5	小片のため不明。	外一ヨコナデとナデ 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第115図15-1	15号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③5.2	弥生時代後期の特徴を持つ破片。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデとナデ	床面ピットから出土
第115図15-2	15号住居跡	土師器 甕	① ② ③4.7	小片のため不明。	外一ハケ 内一削り	覆土から出土
第115図16-1	16号住居跡	弥生土器 壺	① ②(10.4) ③9.1	だが、作りはしっかりしている。	外一摩滅、一部ハケ 内一部摩滅、ナデ	16, 17号住居の間
第115図16-2	16号住居跡	弥生土器 高坏	① ② ③6	小片のため不明である。 口縁部は鋤先状を呈す。	外一ヨコナデとナデ 内一ヨコナデとナデ	床面から出土
第115図16-3	16号住居跡	須恵器 蓋	①8 ② ③3.1	宝球状のツマミを持つ蓋である。	外一ヨコナデと回転 ヘラ削り 内一ヨコナデとナデ	床面から出土
第115図16-4	16号住居跡	須恵器 坏	①(21) ②(16) ③3.4	直立し、断面が方形の高台を有する。	外一ヨコナデとナデ 内一ヨコナデとナデ	覆土から出土
第115図17-1	17号住居跡	弥生土器 高坏	① ② ③5.1	鋤先口縁を持つ。	外一摩滅 内一摩滅	床面ピットから出土
第115図17-2	17号住居跡	弥生土器 甕	① ②9.2 ③6.6	しっかりした作りのものである。	外一ハケ 内一摩滅	覆土から出土
第116図27-1	27号住居跡	土師器 坏	①17.2 ② ③4.2	体部から口縁部が屈折し 体部上半にヘラ削りによる稜がつく。	外一削りとヨコナデ 内一ヨコナデ	精製土器
第116図27-2	27号住居跡	土師器 坏	①15.42 ② ③3.3	口唇部を僅かに内傾。 底部に不整円形の穿孔。 精製土器。	内・外一二次火熱を受け不明	カマド前から出土。内外面に煤が付着。
第116図28	28号住居跡	弥生土器 器台	① ②15.4 ③	器壁の厚い器台	外一叩きののちナデ 内一ナデ	
第116図29-1	29号住居跡	土師器 甕	①18.0 ② ③	頸部から大きく開く口縁部。肩部が張る。	外一ハケとナデ 内一ヘラ削り	
第116図29-2	29号住居跡	土師器 甕	①15.0 ② ③	口縁部は僅かに外反し、 口唇部がさらに外反する 肩部が張り、胴部は直。	外一摩耗 内一ヘラ削り	支柱穴内出土 外面煤が付着

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

鉢団土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第116図29-3	西台地 29号住居跡	土師器 甕	① ② ③	口唇部が尖る。外反度は鈍く、肩部は張らない。 把手がつくタイプか。	外一ナヨコナデとハ ケ 内一ヘラ削り	口縁内面煤が付着
第116図29-4	29号住居跡	土師器 把手付甕	①29.2 ② ③	口縁や外反度が鈍く、胴部がやや張る。胴部に太く短い把手	外一ハケとナデ 内一ヘラ削り	支柱穴内から出土
第117図29-5	29号住居跡	須恵器 平瓶	① ② ③	頸部上半欠損。胴部は扁平で、底部は凹面	外一ナデと回転ヘラ 削り 内一ヨコナデ	底部外面へラ記号
第117図29-6	29号住居跡	須恵器 平瓶	① ② ③	小片で不明瞭。	外一カキ目 内一ヨコナデ	
第117図29-7	29号住居跡	須恵器 高壺	①15.1 ② ③	体部から口縁部は直線的につくる。脚部は欠損。	外一ヨコナデと回転 ヘラ削り 内一ヨコナデ	
第117図29-8	29号住居跡	須恵器 高壺	① ②8.2 ③	小型の高壺。脚裾部を肥厚させる。	内・外一ヨコナデ	脚内面に「ハ」状のヘラ記号
第117図30	30号住居跡	須恵器 壺身	①10.0 ② ③	器壁の厚い壺身。	外一ヨコナデと回転 ヘラ削り 内一ヨコナデ	底部外面に「く」字状のヘラ記号
第118図32-1	32号住居跡	弥生土器 壺	①23.0 ② ③	鋤先状の口縁部。	外一丹塗り磨研 内一ナデ	床面から出土 丹は殆ど剥落
第118図32-2	32号住居跡	弥生土器 壺	①29.0 ② ③	発達した鋤先口縁部で、口唇部に刻みを配する。	内・外一摩耗しているが、丹塗り磨研か床面から出土	
第118図32-3	32号住居跡	弥生土器 壺	①26.0 ② ③	器壁の厚い鋤先口縁部。	外一丹塗り磨研 内一部丹塗りとナ デ	床面上から出土
第118図32-4	32号住居跡	弥生土器 壺	①19.6 ② ③	複合口縁部。口唇部を僅かに肥厚。	外一ハケとナデ 内一ナデ	床面から出土
第118図32-5	32号住居跡	弥生土器 壺	①17.4 ② ③	複合口縁部。	内・外一ハケとナデ	
第118図32-6	32号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③	頸部上半と胴下半を欠損 肩部に1条の三角凸帯。	外一ハケの上から丹 塗り 内一ナデ	
第118図32-7	32号住居跡	弥生土器 甕	①24.8 ② ③	「く」字状に外反する口縁部で、胴部がやや張る 底部欠損。	外一ハケ 内一ナデ	床面から出土 外面煤が付着
第118図32-8	32号住居跡	弥生土器 小型甕	①16.0 ② ③	口縁部を若干肥厚。「く」字状に外反下口縁部。	外一ハケ 内一ナデ	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第118図32-9	西台地 32号住居跡	弥生土器 甕	① ②9.0 ③		内・外・摩耗	床面から出土
第119図32-10	32号住居跡	弥生土器 甕	①33.2 ② ③	鋭く「く」字状に外反する口縁部で肩部が張る。 7・8よりは古相を示す。	外一ハケ(摩耗) 内一ナデ	床面から出土 外面煤が付着
第119図32-11	32号住居跡	弥生土器 甕	① ②6.6 ③		外一ハケと一部擦過 内一擦過のちナデ	
第119図32-12	32号住居跡	弥生土器 甕	①45.0 ② ③	口唇部を肥厚。「く」字状に外反する口縁部で肩部が張る。	内・外・摩耗	床面から出土
第119図32-13	32号住居跡	弥生土器 甕	①30.0 ② ③	「く」字状に外反する厚手の口縁部で、器壁も厚い。肩部に台形凸帯。	外一ハケとナデ 内一ナデ	床面から出土
第119図32-14	32号住居跡	弥生土器 甕	① ②4.6 ③	やや細みの底部。	内・外一ナデ	
第119図32-15	32号住居跡	弥生土器 鉢	①17.4 ② ③	僅かに開く口縁部で口唇部肥厚。最大径が口縁部にある。	外一ハケ 内一ナデ	床面から出土
第119図32-16	32号住居跡	弥生土器 鉢	①13.2 ②7.1 ③	内傾する口縁部。体部は直で平底	内・外一ナデ(外面に化粧土が残る)	
第119図32-17	32号住居跡	弥生土器 高環	①20.0 ② ③	鋤先口縁部で体部の膨らみは鈍い。脚部は欠損。	内・外一丹塗り磨研	床面から出土
第119図32-18	32号住居跡	弥生土器 高環	① ②17.0 ③	裾端部を肥厚。	外一丹塗り磨研(摩耗し剥離) 内一ナデ	床面から出土
第119図32-19	32号住居跡	弥生土器 器台	①15.0 ②15.0 ③	口縁部は朝顔状に外反し口唇部と裾端部を肥厚させる。	外一ハケが摩耗 内一ナデ	床面から出土
第119図32-20	32号住居跡	弥生土器 器台	① ②16.9 ③	裾端部を尖らせる。	外一ハケが摩耗 内一ナデ	床面から出土
第119図32-21	32号住居跡	弥生土器 支脚	①6.3 ②12.6 ③9.5	口縁部が厚く、裾部方向に薄くなる。台形状の支脚。	外一ハケとナデ 内一指ナデ	二次火熱 床面から出土 完形品
第120図35-1	35号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③	口縁部が僅かに開くタイプ。口唇部が肥厚。精製品	内・外一丹塗り磨研	炉内から出土
第120図35-2	35号住居跡	弥生土器 小型甕	① ② ③	小破片で逆「L」字状に外反する短い口縁部。	外一ハケ 内一ナデ	炉内から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第120図35-3	西台地 35号住居跡	弥生土器 甕	① ②11.4 ③	径の大きな上げ底。二次火熱のため器面全体がひび割れている。	内・外一摩耗	屋内土壙から出土
第120図35-4	35号住居跡	弥生土器 高坏	①28.2 ② ③	鋤先口縁部で上面が外傾している。口縁に対して体部が小さい。	外一ハケと丹塗り磨研 内一丹塗り磨研	丹は殆ど剥離床面から出土
第120図38-1	38号住居跡	弥生土器 壺	①12.5 ② ③15.4	口唇部が肥厚。頸部から口縁部にかけて内傾。体部は球形で丸底	内・外一ハケ	ベット上から出土
第120図38-2	38号住居跡	弥生土器 小型壺	①12.0 ② ③	頸部から口縁部にかけて僅かに開く。体部は扁平球状。底部欠損。	内・外一ナデ(外一部ハケ)	埋土中から出土
第120図38-3	38号住居跡	弥生土器 甕	①15.6 ② ③22.8	口唇部は尖る。緩く「く」字状に外反する口縁やや長胴で尖り気味の底部	内・外一ハケ(底部付近一部ナデ)	炉傍の床面出土 外面煤が付着
第120図38-4	38号住居跡	弥生土器 甕	① ②6.0 ③	不安定な平底	内・外一摩耗	ベット上貯蔵穴から出土 二次火熱赤変
第120図38-5	38号住居跡	弥生土器 鉢	①24.2 ② ③10.7	口縁から底部は僅かに丸みがある。底部は尖り気味。	外一叩きのちナデ底部はヘラ削り 内一ハケとナデ	埋土中から出土
第120図38-6	38号住居跡	弥生土器 鉢	①17.7 ② ③12.1	砲弾形の鉢。口唇部が僅かに外反。底部は尖り気味。	外一ハケのちナデ 内一ナデ	ベット上貯蔵穴から出土
第120図38-7	38号住居跡	弥生土器 鉢	①18.8 ② ③	体部から口縁部まで直線的につくる。底部欠損。	外一叩きのちナデで 底部付近削り 内一ハケ	ベット上から出土
第120図38-8	38号住居跡	弥生土器 土師器 鉢	①16.4 ② ③10.5	僅かに開く口縁部で体部は球状、底部は尖り気味	外一ハケと削り 内一ハケとナデ	ベット上貯蔵穴から出土 完形土器
第120図38-9	38号住居跡	弥生土器? 器台?	① ②9.6 ③	裾部が若干内湾。一か所貫通しない孔がある。小型品で器台か否かは不明	内・外一ナデ	埋土中から出土
第121図40-1	40号住居跡	弥生土器 壺	①26.0 ② ③	未発達の鋤先口縁部。頸部には1条の三角凸帯が巡る。	外一ハケのちナデ 内一ナデ	
第121図40-2	40号住居跡	弥生土器 無頸壺	① ② ③	口縁が短く「く」字状に外反。傾斜面に孔を穿つが小片で個数は不明。	内・外一ナデ(丹塗り磨研の可能性あり)	精製土器
第121図40-3	40号住居跡	弥生土器 無頸壺	①12.2 ② ③	2よりも短く鋭く外反する口縁部で肩部が張る。4の底部と同一個体。	外一丹塗り磨研 内一ナデ	精製土器
第121図40-4	40号住居跡	弥生土器 無頸壺	① ②7.0 ③	僅かなレンズ状底部。 3と同一個体。	外一丹塗り磨研 内一ナデ	精製土器

出土土器観察表

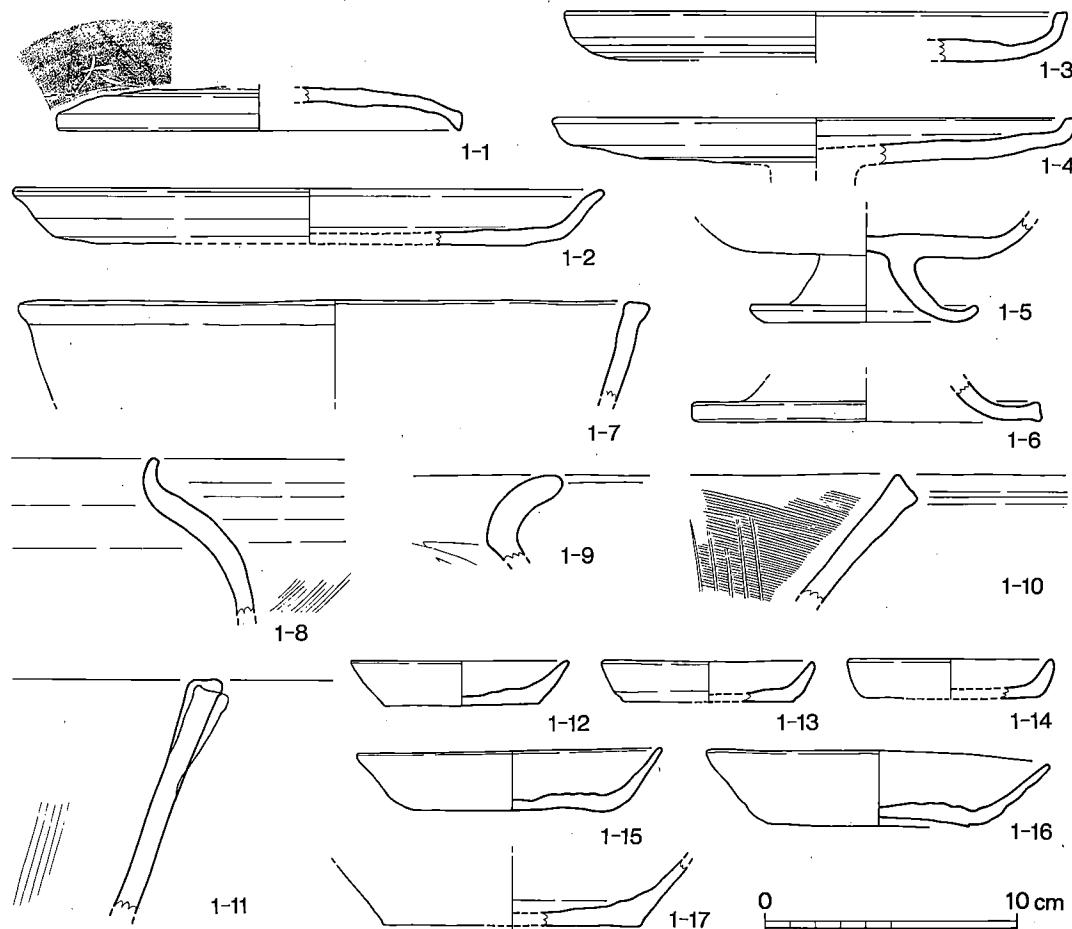
①口径 ②底径 ③器高(cm)

捲図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第121図40-5	西台地 40号住居跡	弥生土器 甕	①19.0 ② ③	逆「L」字状に近い口縁部。	外一ハケのちナデ 内一ナデ	
第121図40-6	40号住居跡	弥生土器 甕	① ② ③	頸部の小破片。	外一丹塗り 内一ナデ	壺の可能性あり
第121図40-7	40号住居跡	弥生土器 甕	①38.6 ② ③	「く」字状に外反する口縁部で頸部内面が突出。肩部は張る。	外一ヨコナデとハケ 内一粗いハケ	
第121図40-8	40号住居跡	弥生土器 鉢	①31.2 ②11.0 ③19.5	逆「L」字状の口縁部、径の大きな平底。	外一ハケ 内一ナデ	
第121図40-9	40号住居跡	弥生土器 鉢	①16.7 ②7.0 ③9.9	逆「L」字に近い口縁部で体部はやや丸みがある若干上げ底。	外一摩耗 内一ナデ	ピット内から出土
第121図40-10	40号住居跡	弥生土器 鉢	① ②8.2 ③	胴部上半欠損。器壁が薄く、若干上げ底。	外一ハケが摩耗 内一ハケとナデ	
第121図40-11	40号住居跡	弥生土器 鉢	①20.0 ②8.4 ③11.0	口縁部を若干内湾し、やや大きめの底部	外一ハケとナデ 内一ナデ	床面から出土
第121図40-12	40号住居跡	弥生土器 器台	① ②14.0 ③	裾端部を内側に肥厚。総じて器壁が薄い。上部を欠損。	外一ハケ 内一ナデ	外面煤が付着
第122図42-1	42号住居跡	弥生土器 壺	① ② ③	複合口縁部の小片	内・外一摩耗	
第122図42-2	42号住居跡	弥生土器 無頸壺	①24.0 ② ③	内傾きする口縁部を僅かに厚くつくり、胴部に「M」字状凸帯を付す。	外一丹塗り磨研(一部ハケ) 内一ナデ	埋土中から出土
第122図42-3	42号住居跡	弥生土器 壺	①10.0 ② ③4.9	口唇部を肥厚。半球形の小型品。	内・外一ハケのちナデ	屋内土壙から出土 内面煤が付着
第122図44-1	44号住居跡	弥生土器 甕	①20.3 ② ③27.7	緩く「く」字状に外反する口縁部で口唇部は肥厚長い胴で不安定な底部。	外一叩きのちハケとヘラ削り 内一ハケとナデ	床面から出土 外面煤が付着
第122図44-2	44号住居跡	弥生土器 甕	①20.4 ② ③	外反度の緩い口縁部。最大径が胴部上半にある。胴下半は欠損。	外一ハケとヘラ削り 内一ハケ	西側床面出土 外面煤が付着
第122図44-3	44号住居跡	弥生土器 甕	①13.5 ② ③14.5	外反度の鈍い小型の甕で丸底。	外一ハケ、ナデとヘラ削り 内一ハケとナデ	
第122図44-4	44号住居跡	弥生土器 鉢	①16.4 ② ③10.4	短く緩い外反度の口縁部で体部は半球形。	外一ハケ 内一ナデ	床面から出土

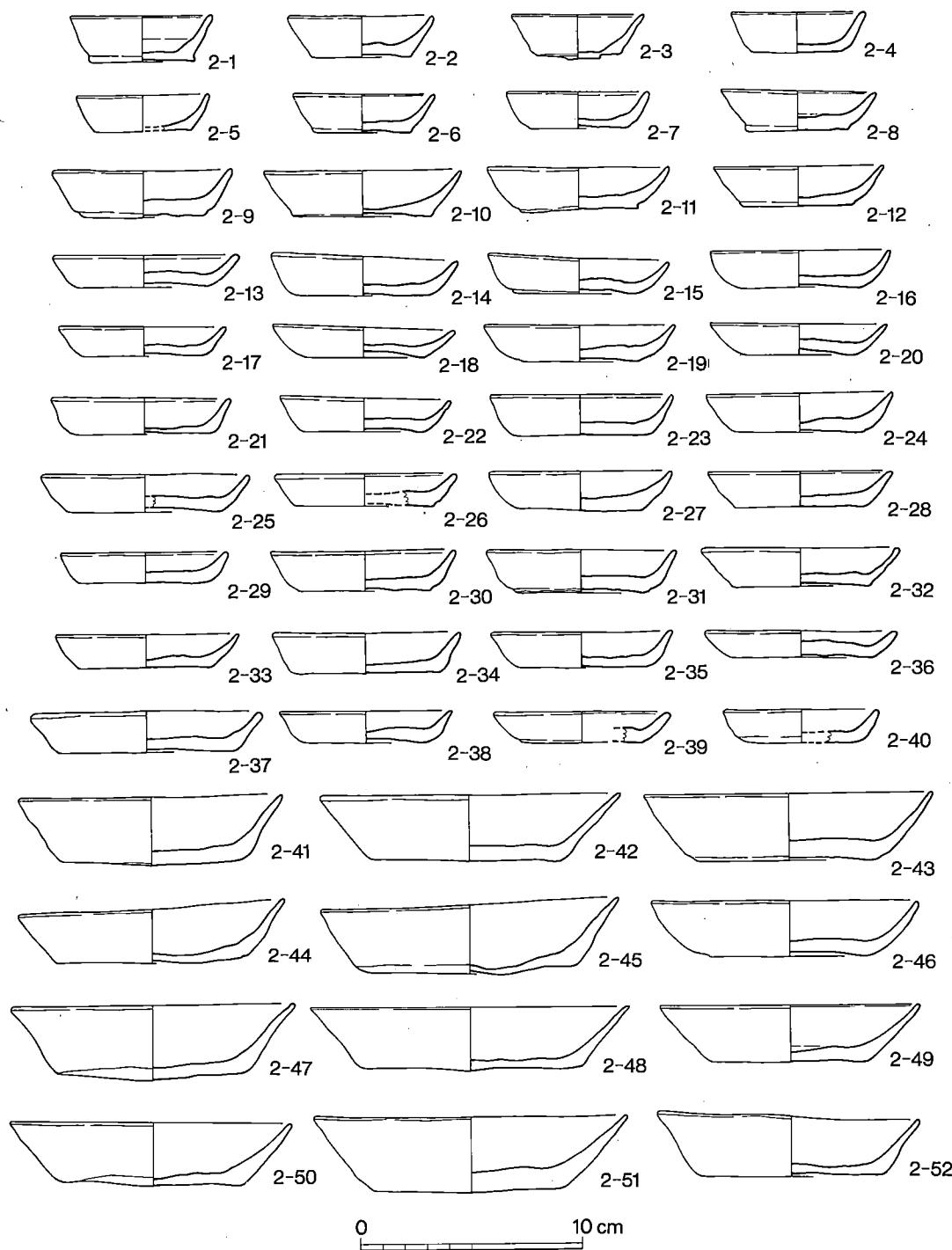
出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

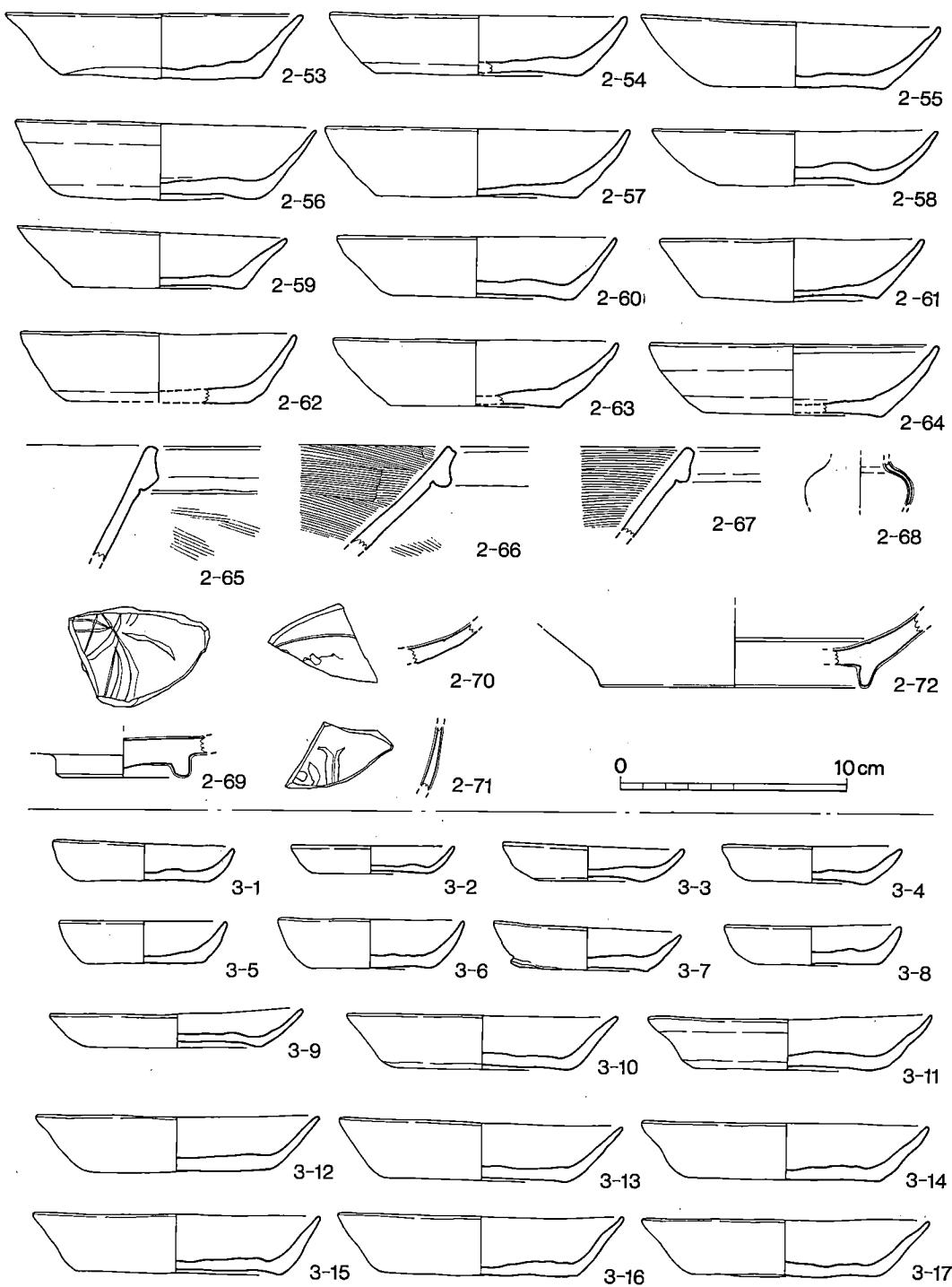
挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第122図44-5	西台地 44号住居跡	弥生土器 鉢	①13.0 ② ③	口唇部は細まる。底部欠損。	外一ハケとヘラ削り 内一ナデ	埋土中から出土
第122図44-6	44号住居跡	弥生土器 坏	①19.0 ② ③	半球形の形状。底部欠損	外一ナデとヘラ削り 内一ナデ	
第122図44-7	44号住居跡	弥生土器 坏	①19.5 ② ③7.3	6よりも器高の低いタイプで底部の器壁が厚い。	外一ナデと指圧痕 内一ナデとハケ	東側床面から出土
第123図44-8	44号住居跡	弥生土器 高坏	①19.6 ② ③	朝顔状に緩く外反する口縁部で坏部が深い。脚部は欠損。	外一粗いハケとナデ 内一ナデ	北東床面から出土。
第123図44-9	44号住居跡	弥生土器 土師器 大甕	① ② ③	胴部上半と底部を欠損 胴下半部に台形凸帯を貼付する。	外一ハケと叩き 内一ハケ	床面から出土



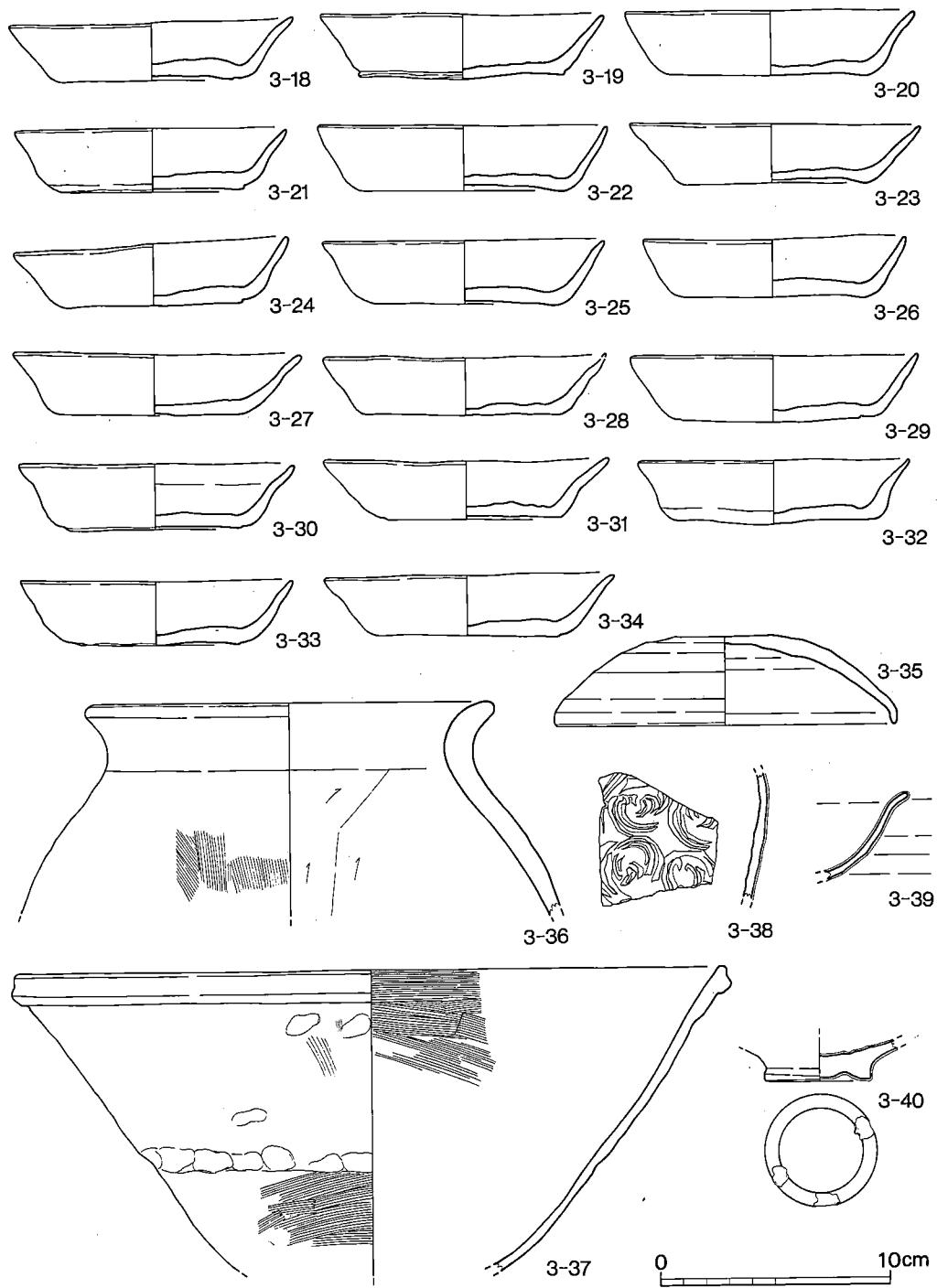
第124図 1号土壙出土土器実測図 (1/3)



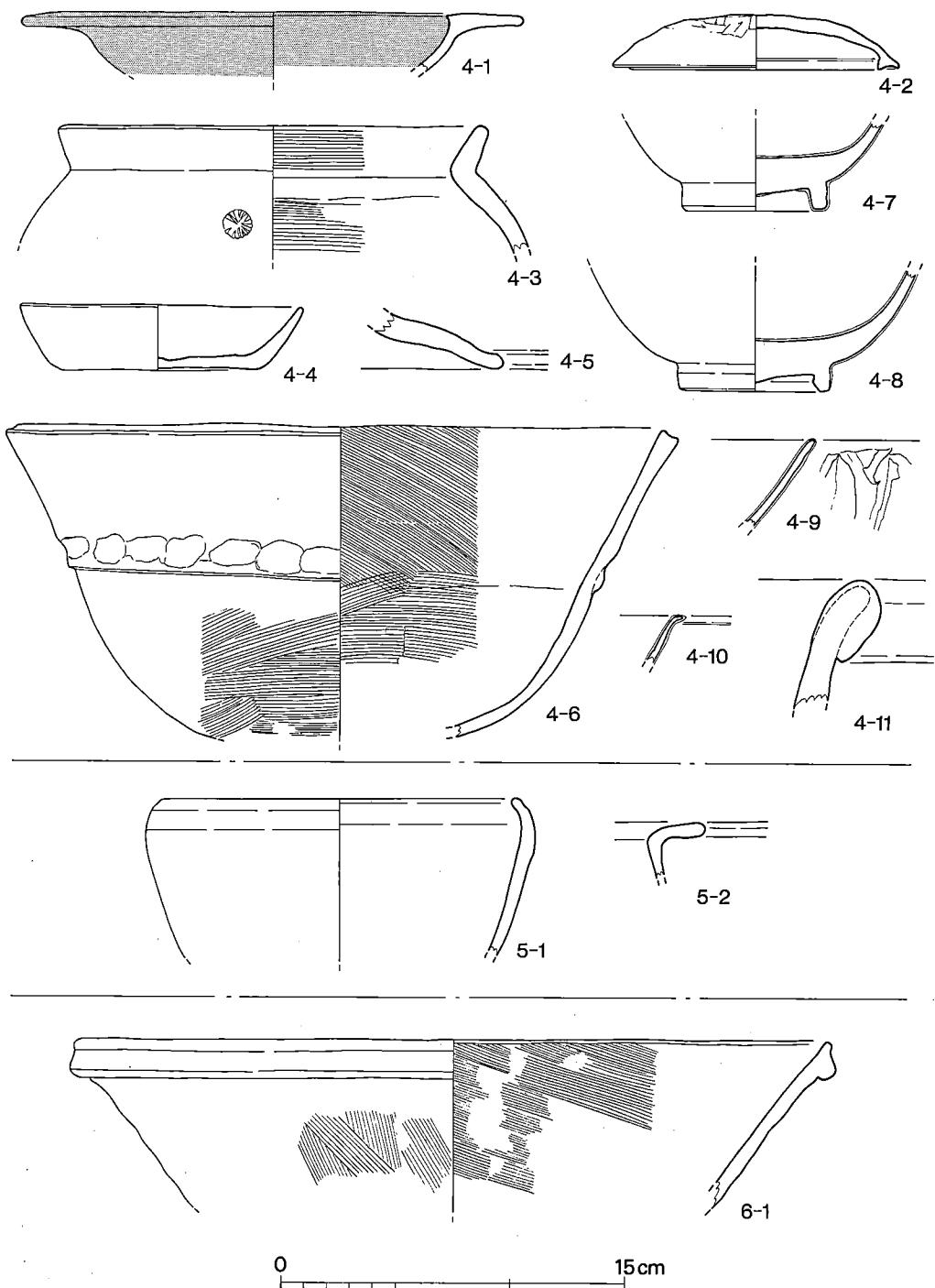
第125図 2号土器出土実測図 (1/3)



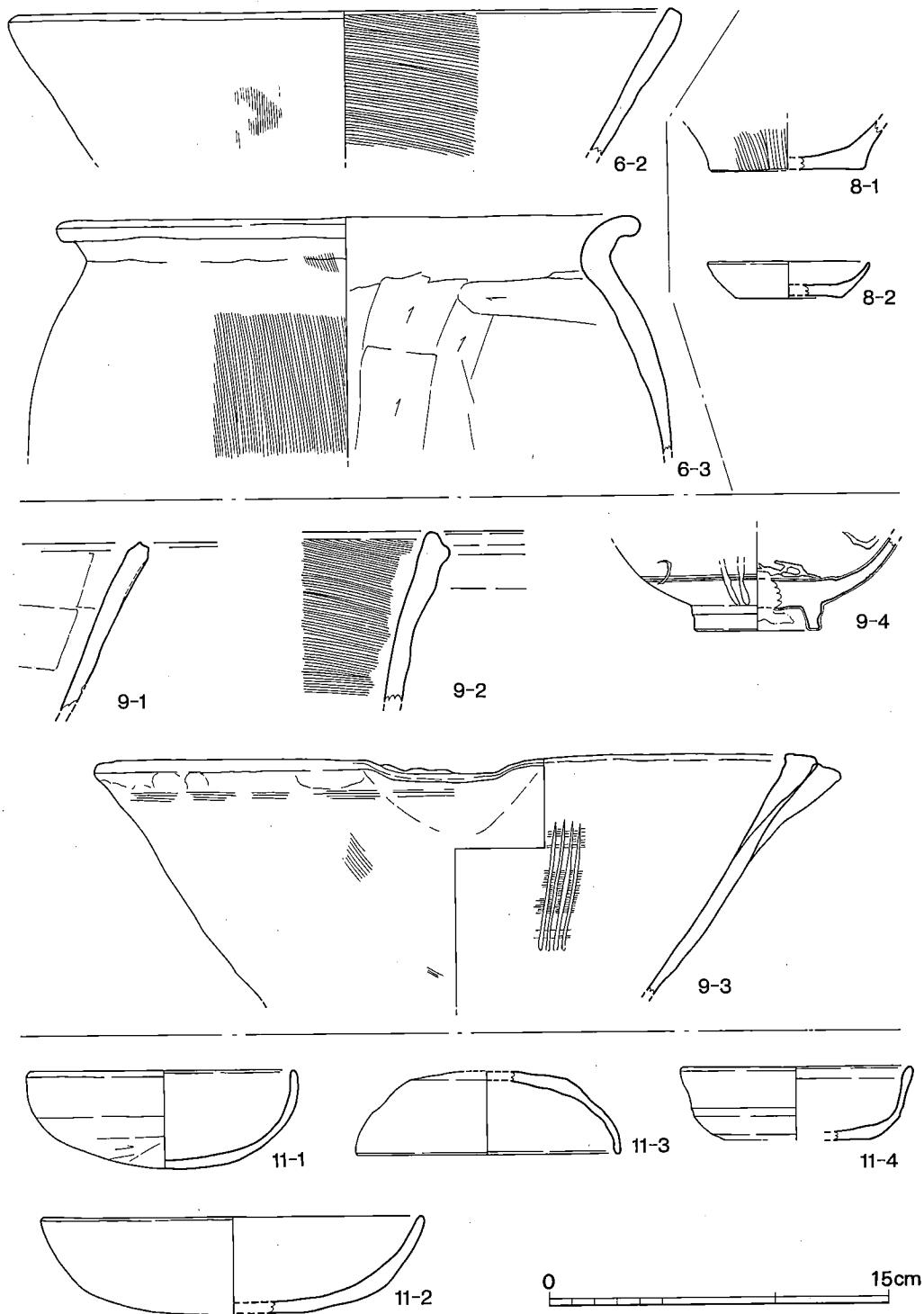
第126図 2号・3号土壙出土土器実測図 (1/3)



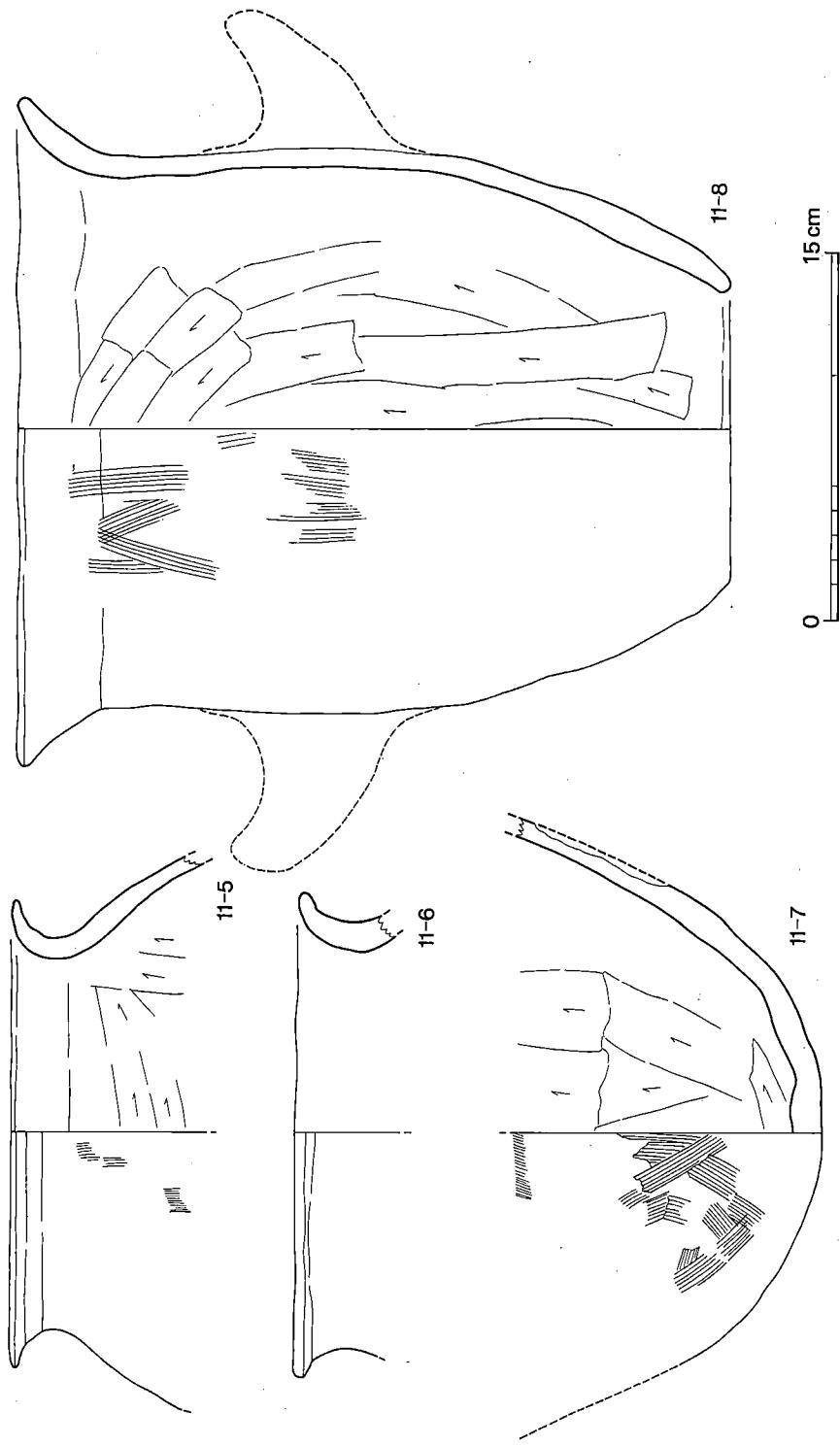
第127図 3号土壙出土土器実測図 (1/3)



第128図 4号～6号土壙出土土器実測図 (1/3)



第129図 6号・8号・9号・11号土壙出土土器実測図 (1/3)



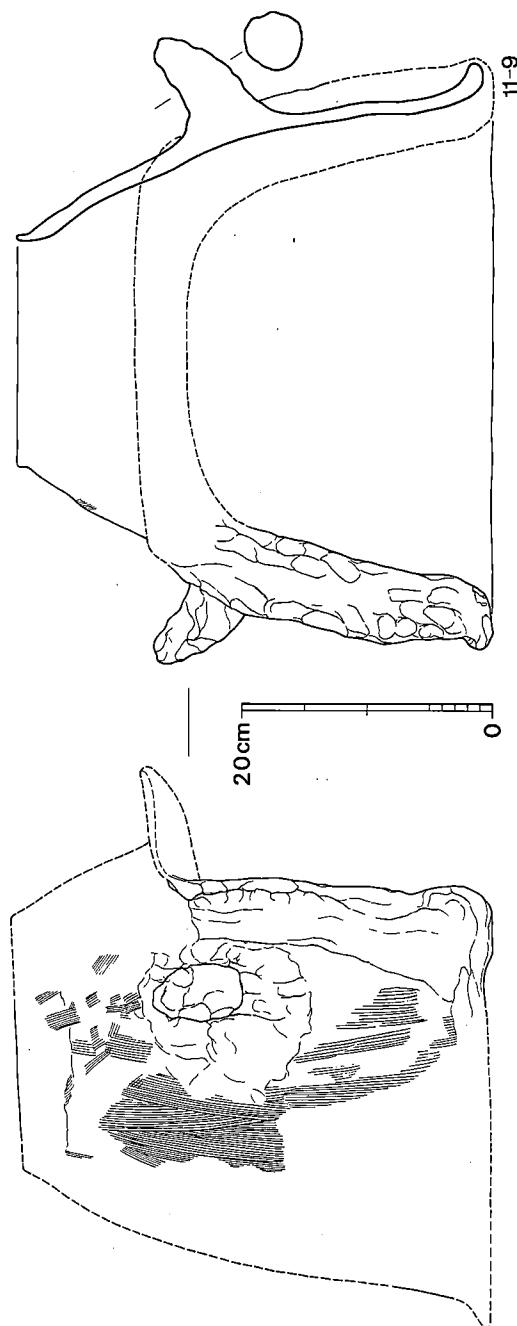
第130図 11号土壇出土土器実測図 (1/3)

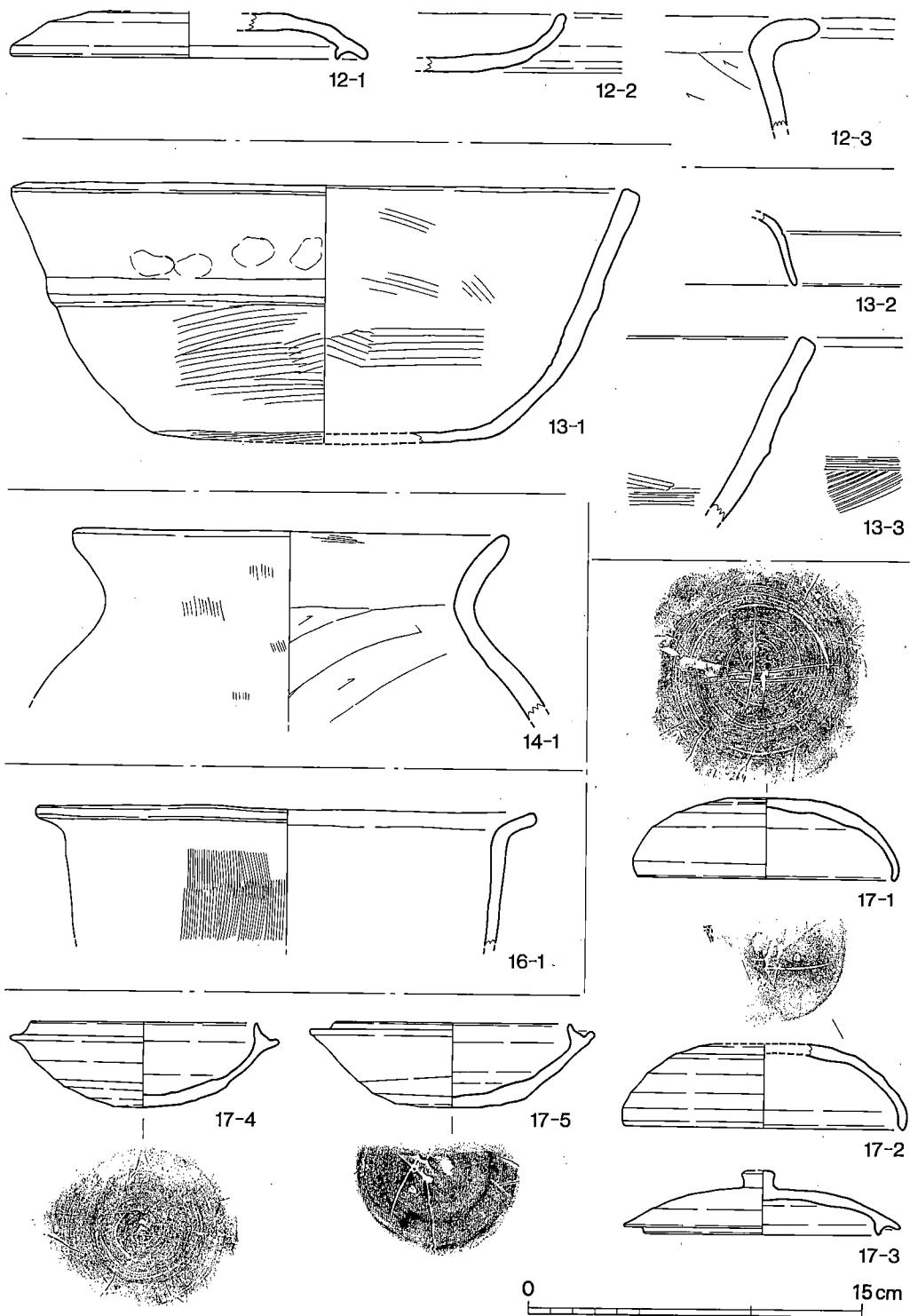
11-9

0

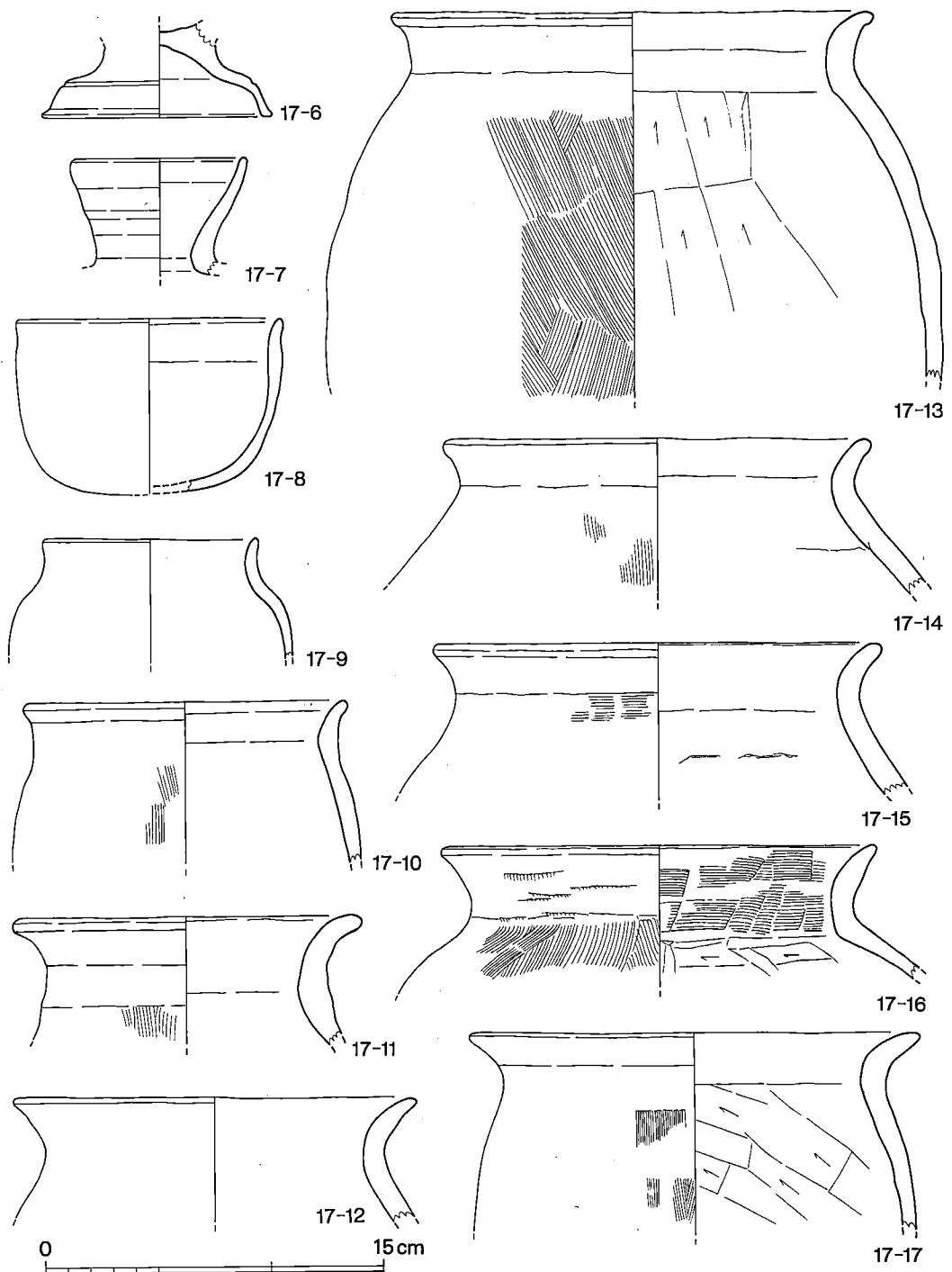
20cm

第131図 11号土壙出土土器実測図 (1/3)

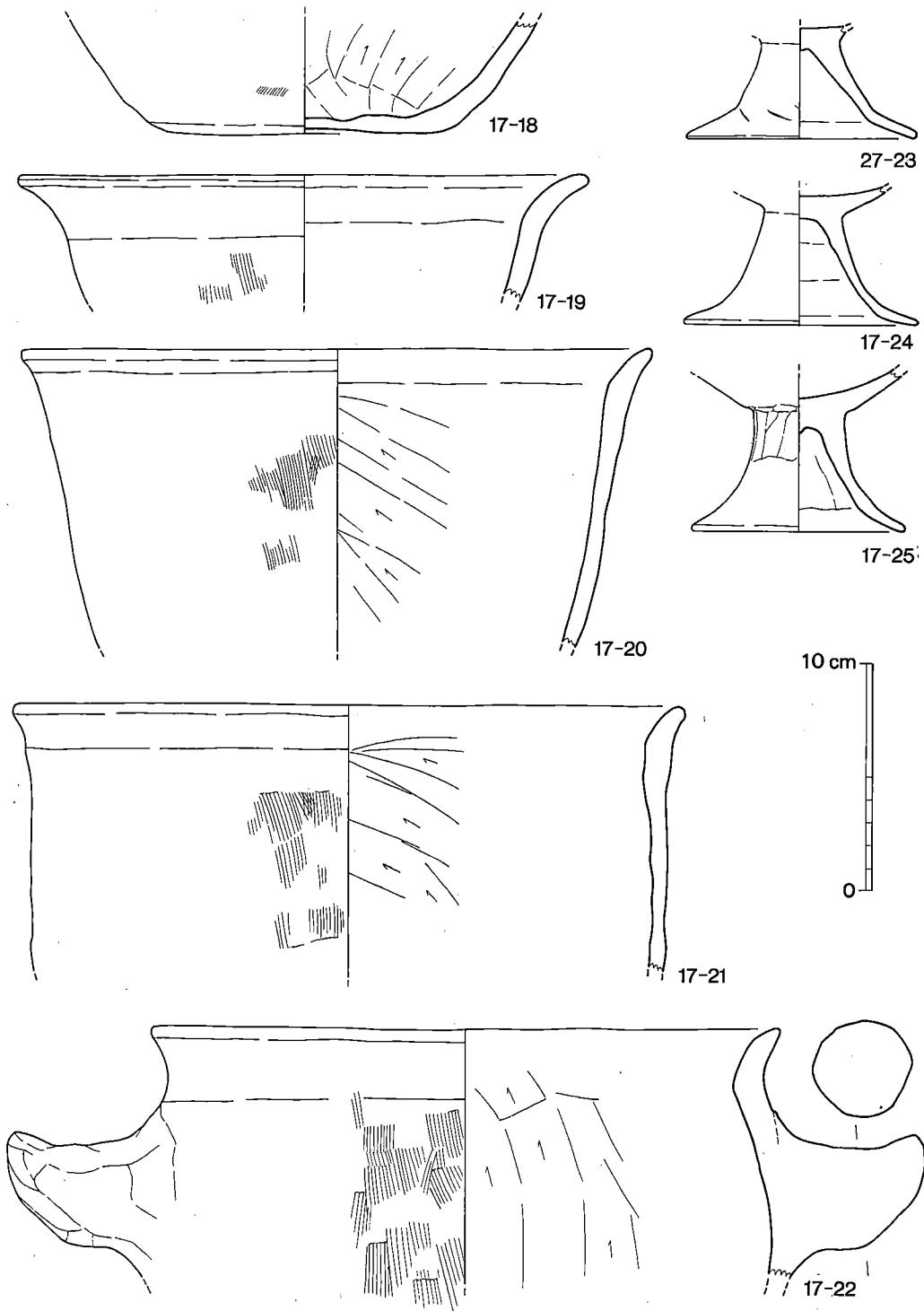




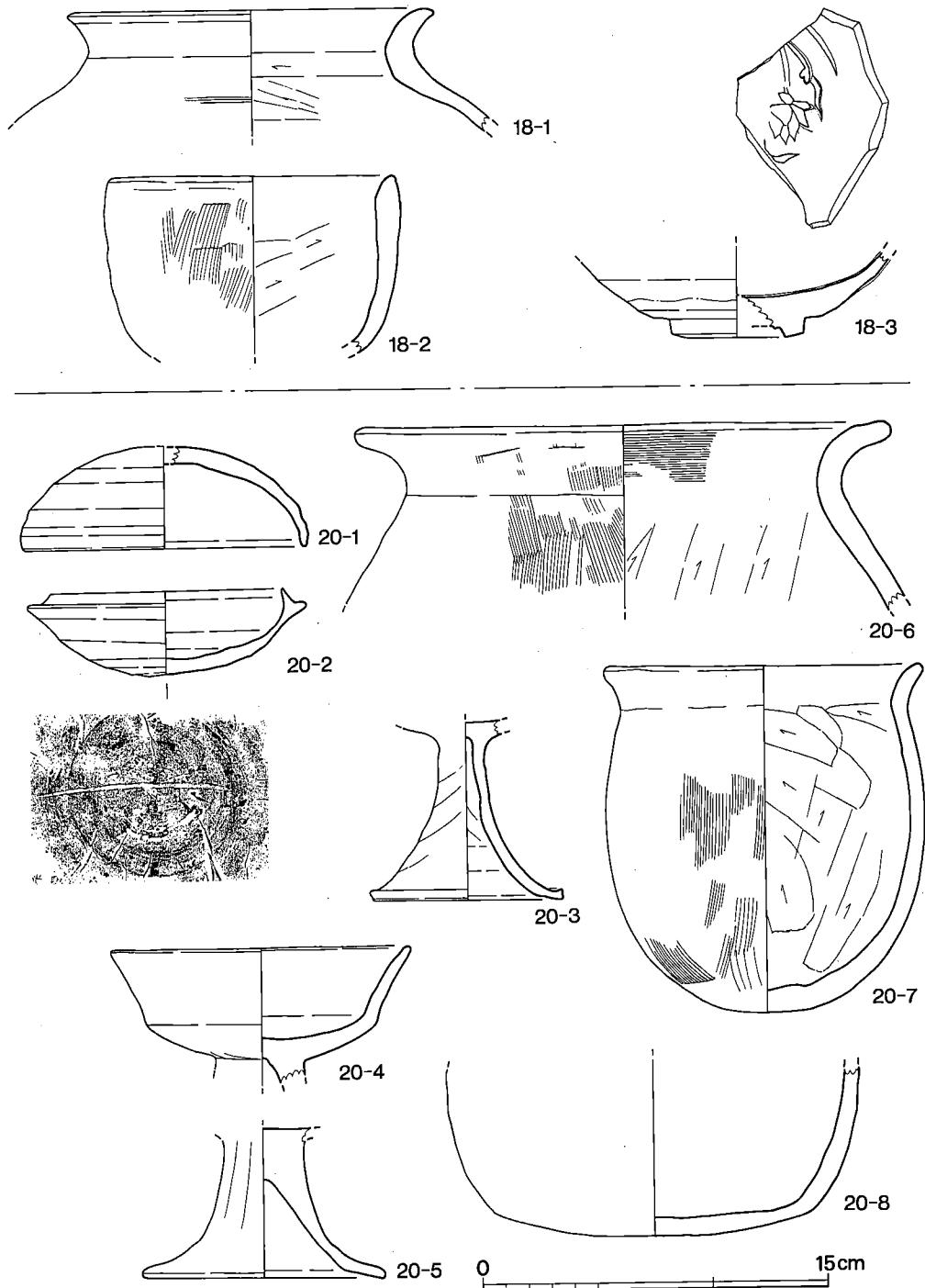
第132図 12号～14号・16号・17号土壤出土土器実測図 (1/3)



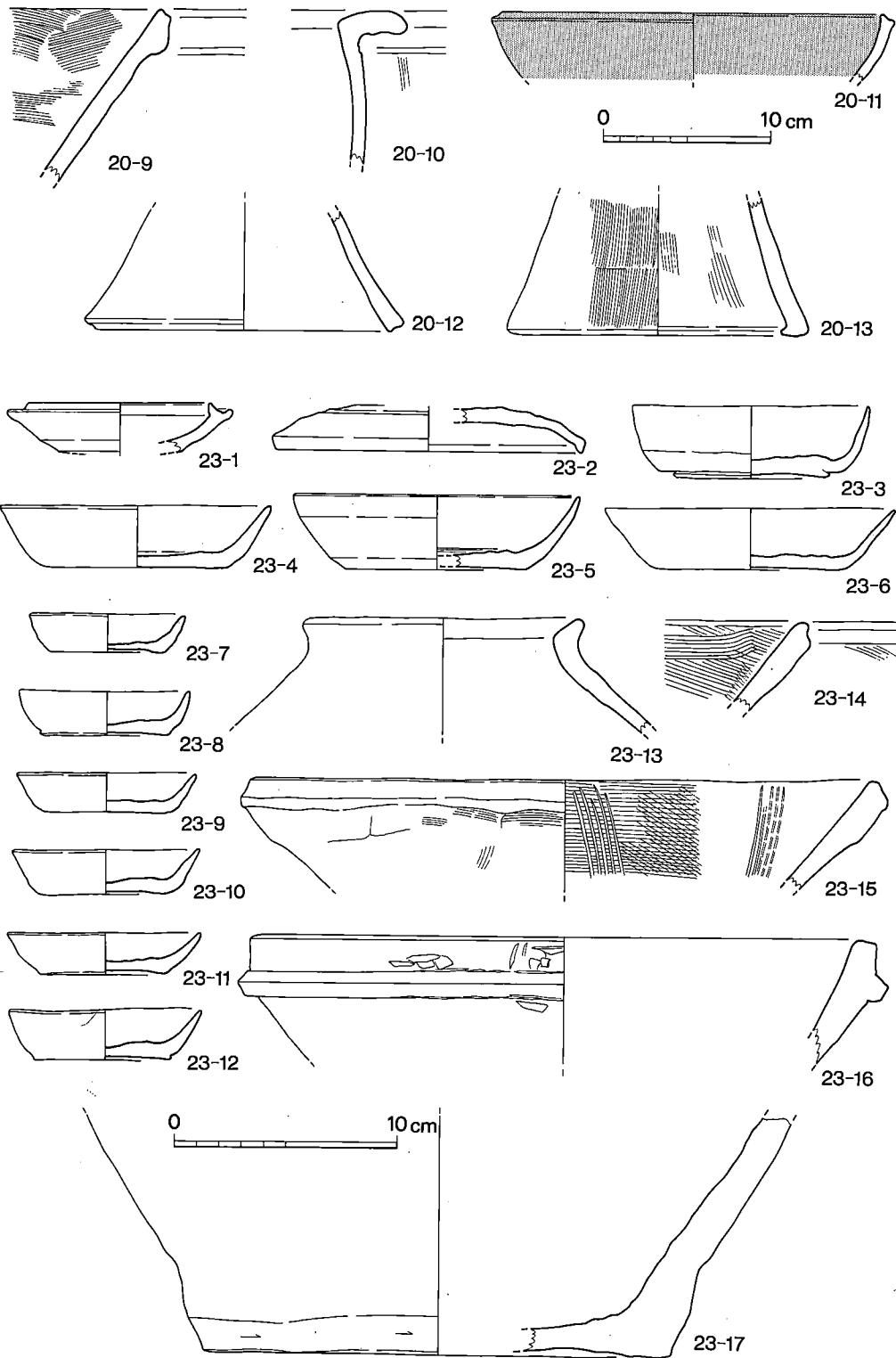
第133図 17号土壤出土土器実測図 (1/3)



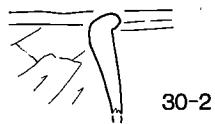
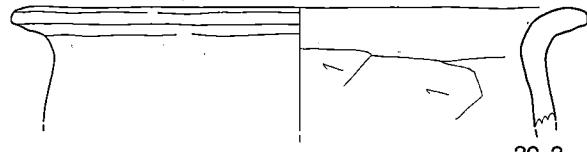
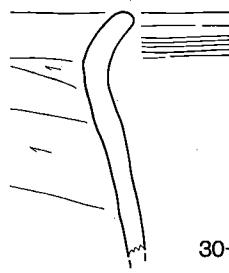
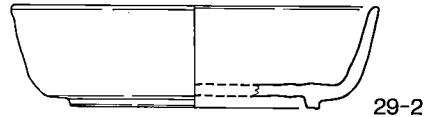
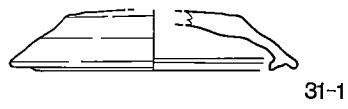
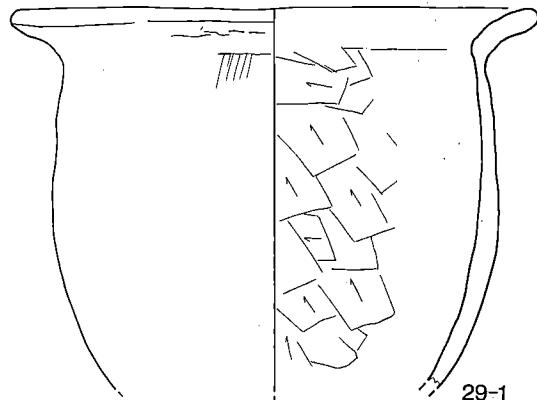
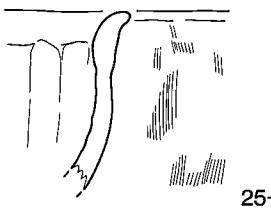
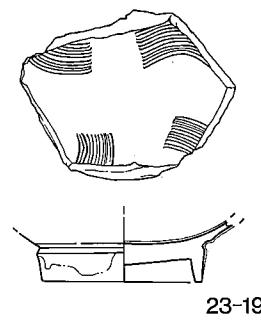
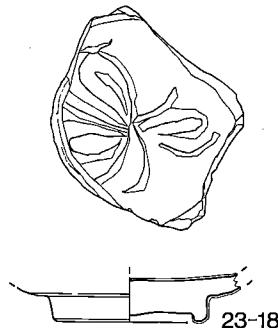
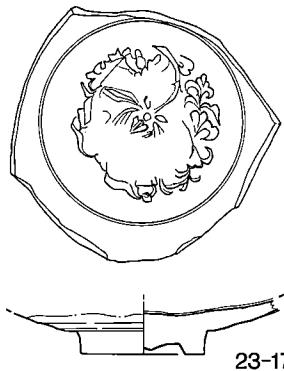
第134図 17号土壤出土土器実測図 (1/3)



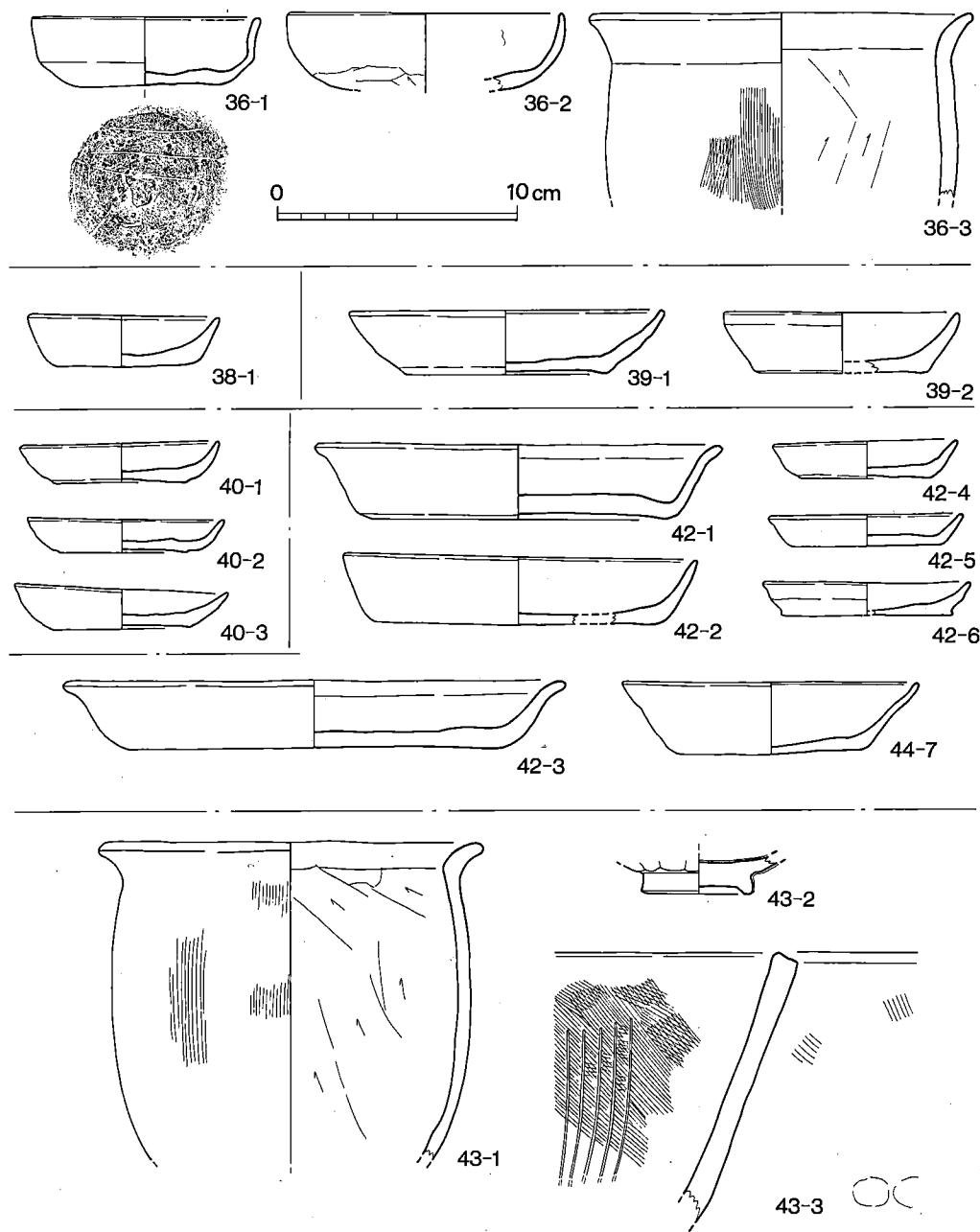
第135図 18号・20号土壤出土土器実測図 (1/3)



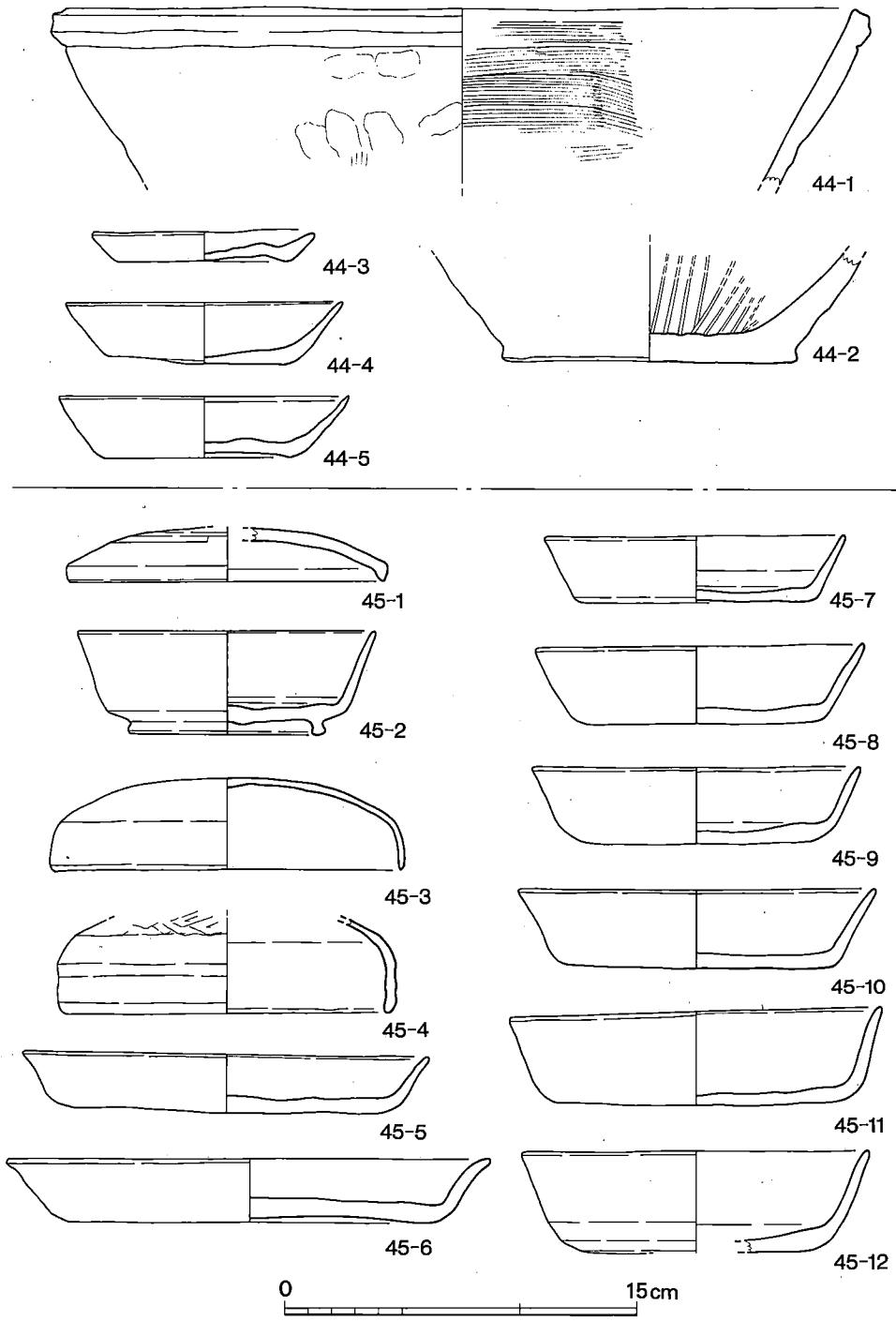
第136図 20号・23号土壤出土土器実測図 (1/3)



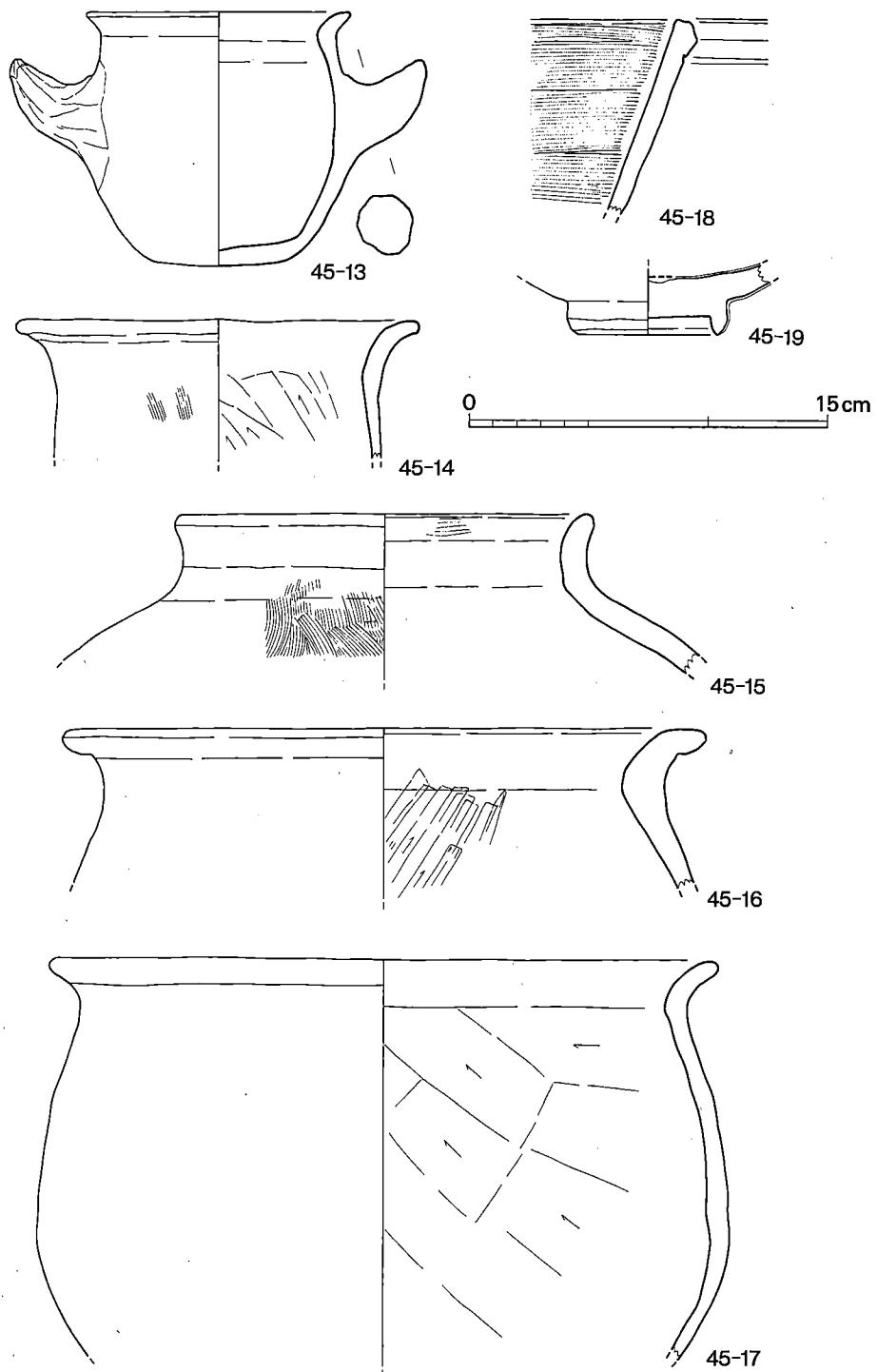
第137図 23号・25号・29号～31号土壙出土土器実測図 (1/3)



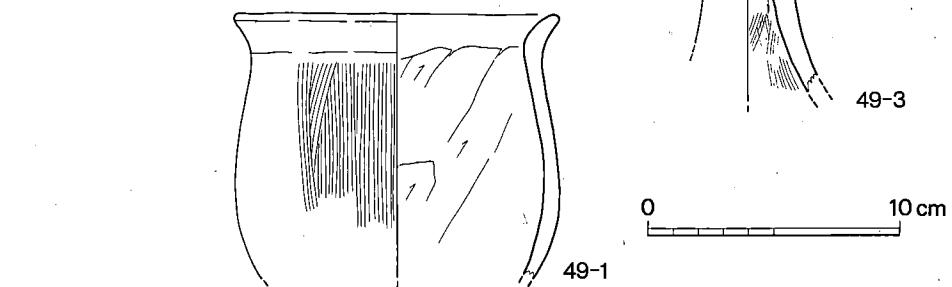
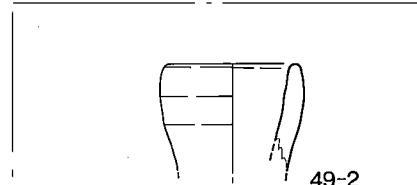
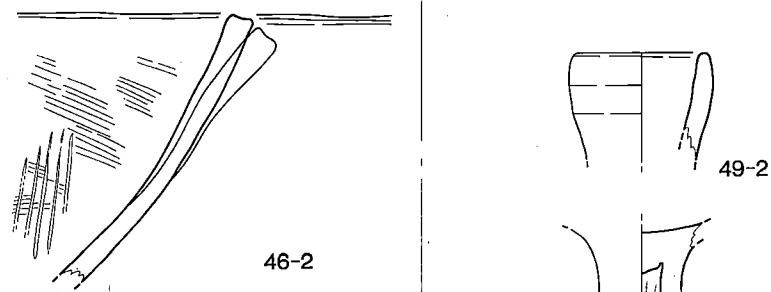
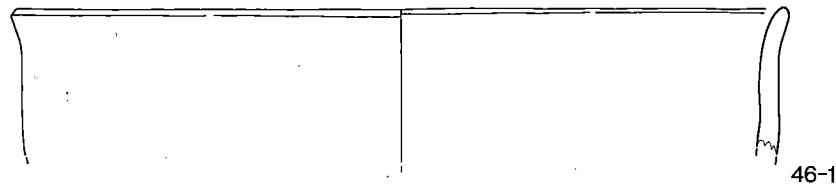
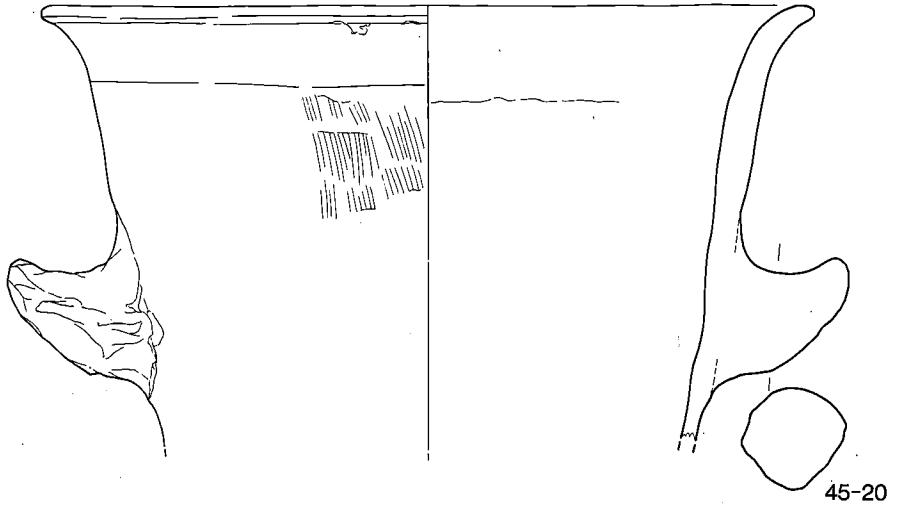
第138図 36号・38号・39号・42号・43号土壤出土土器実測図 (1/3)



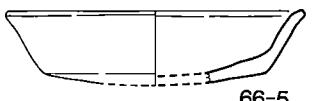
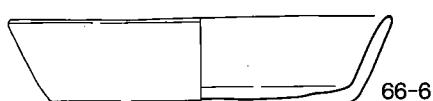
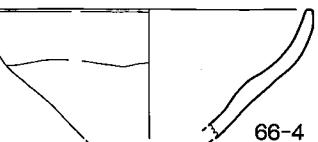
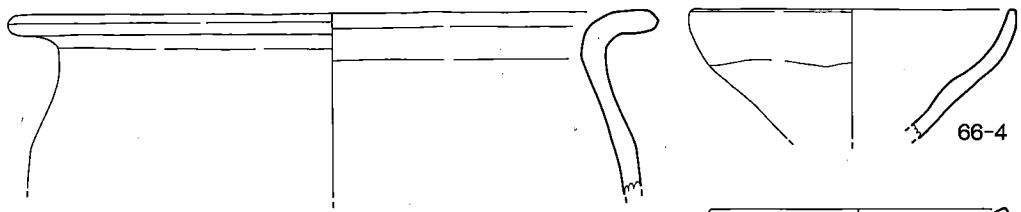
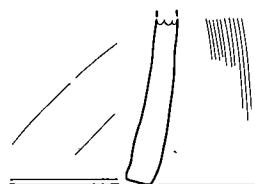
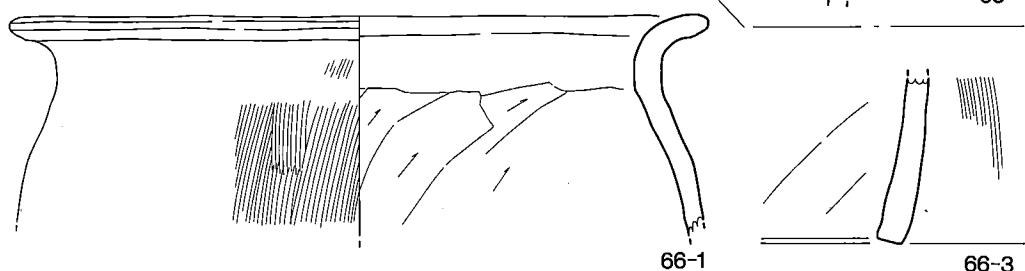
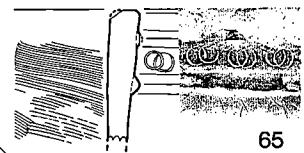
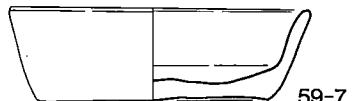
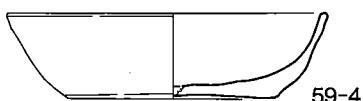
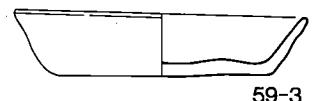
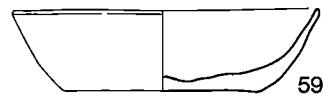
第139図 44号・45号土壤出土土器実測図 (1/3)



第140図 45号土壤出土土器実測図 (1/3)



第141図 45号・46号・49号土壤出土土器実測図 (1/3)

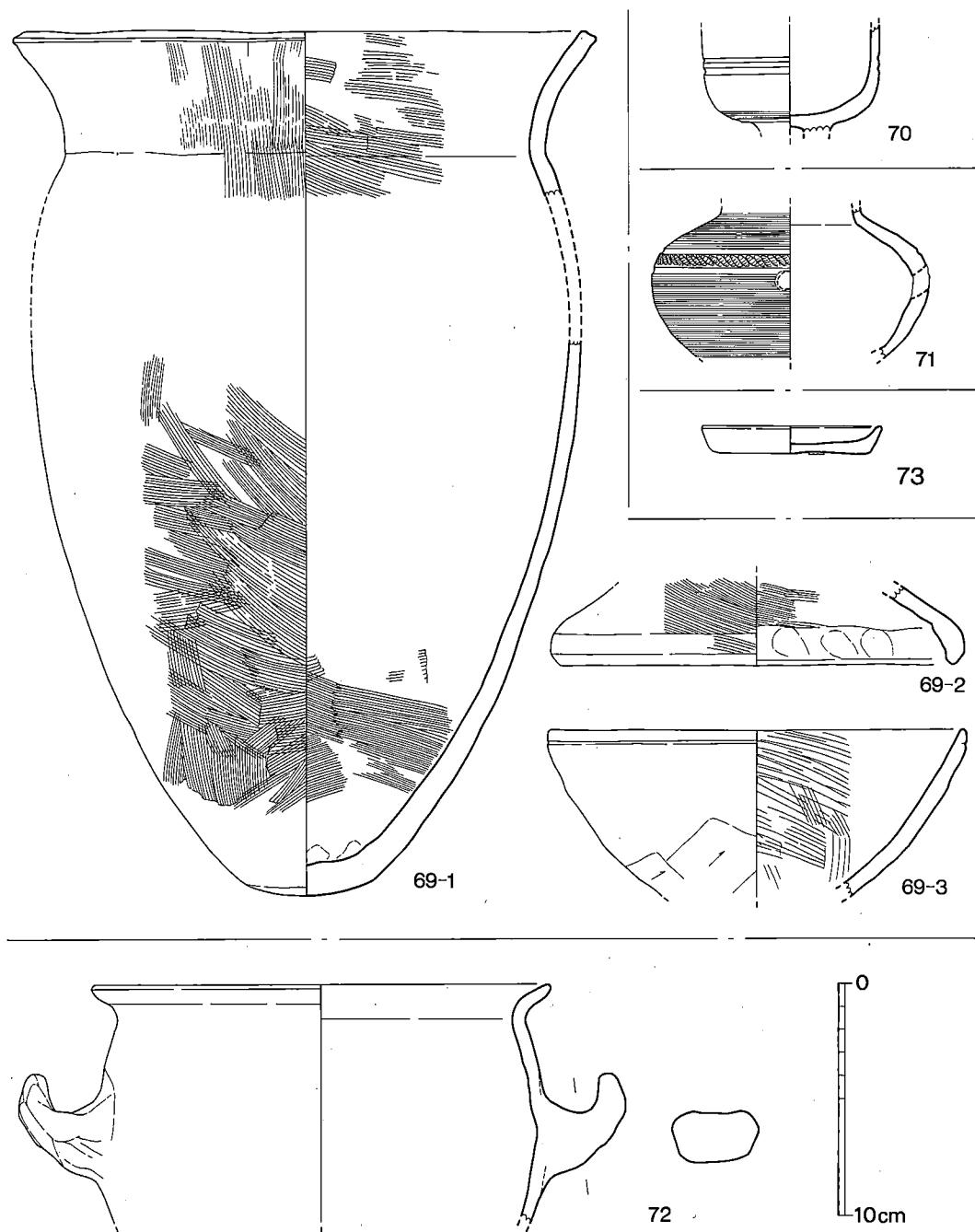


0 15cm

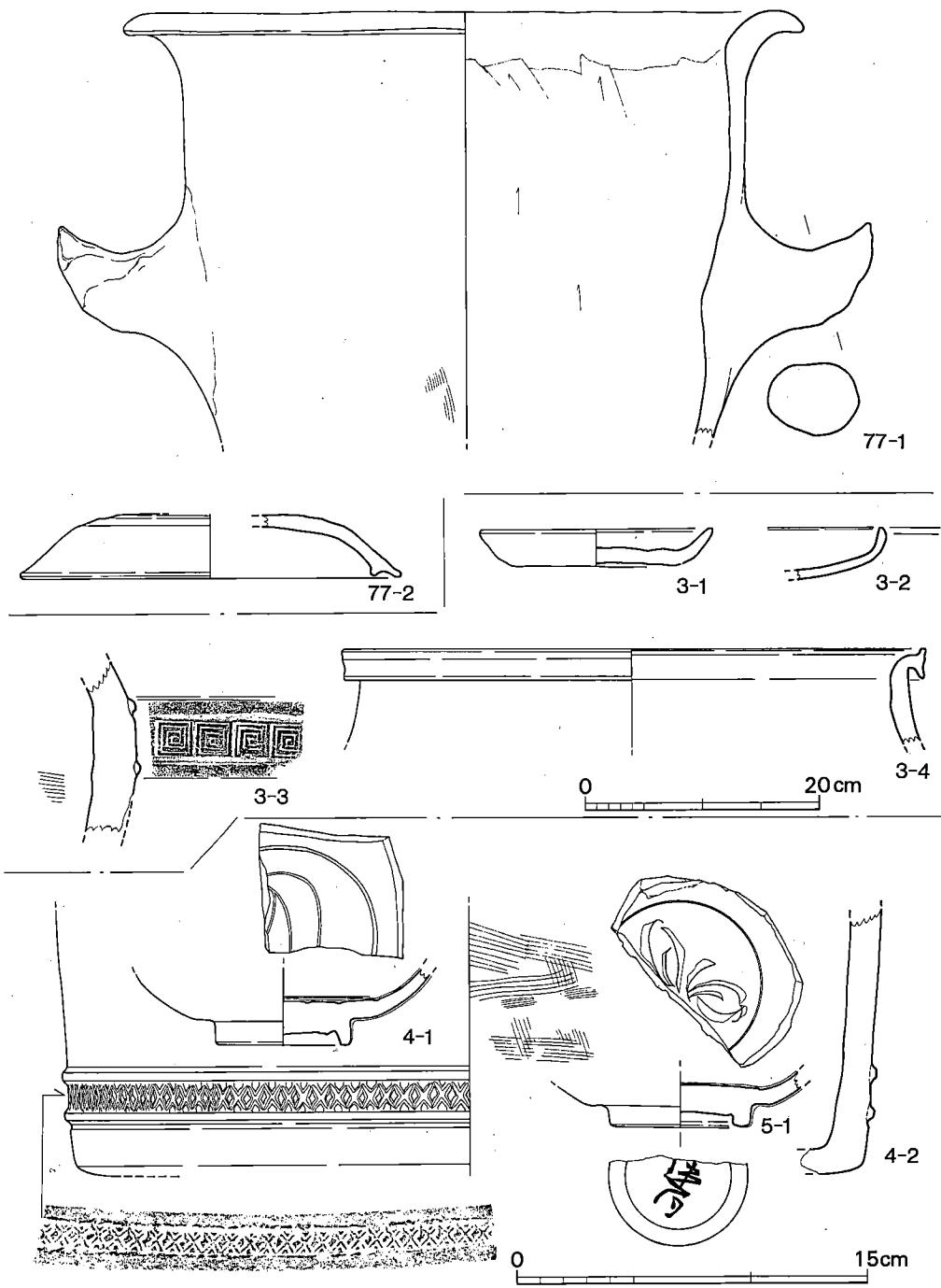


66-8

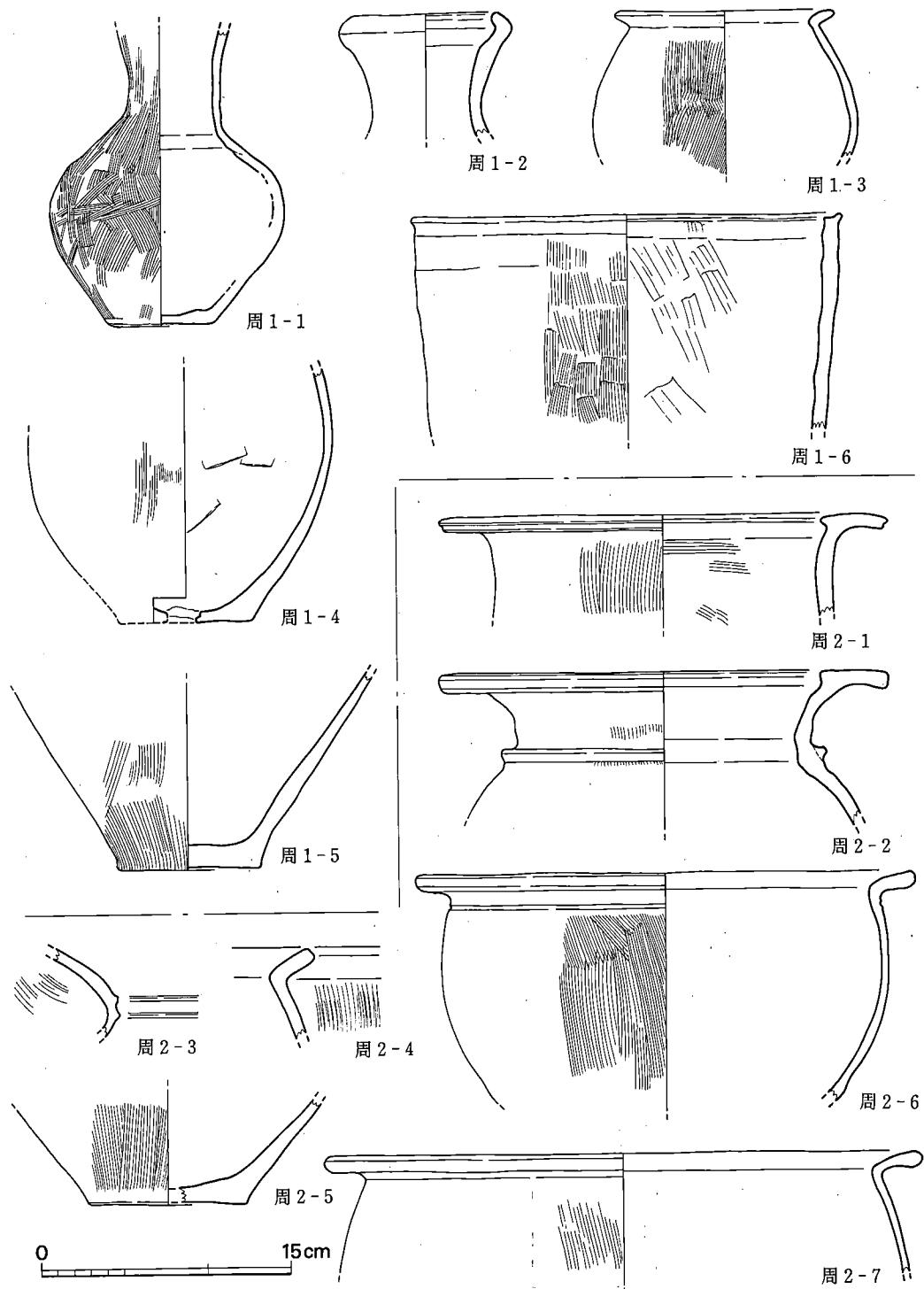
第142図 59号・61号・65号・66号土壙出土土器実測図 (1/3)



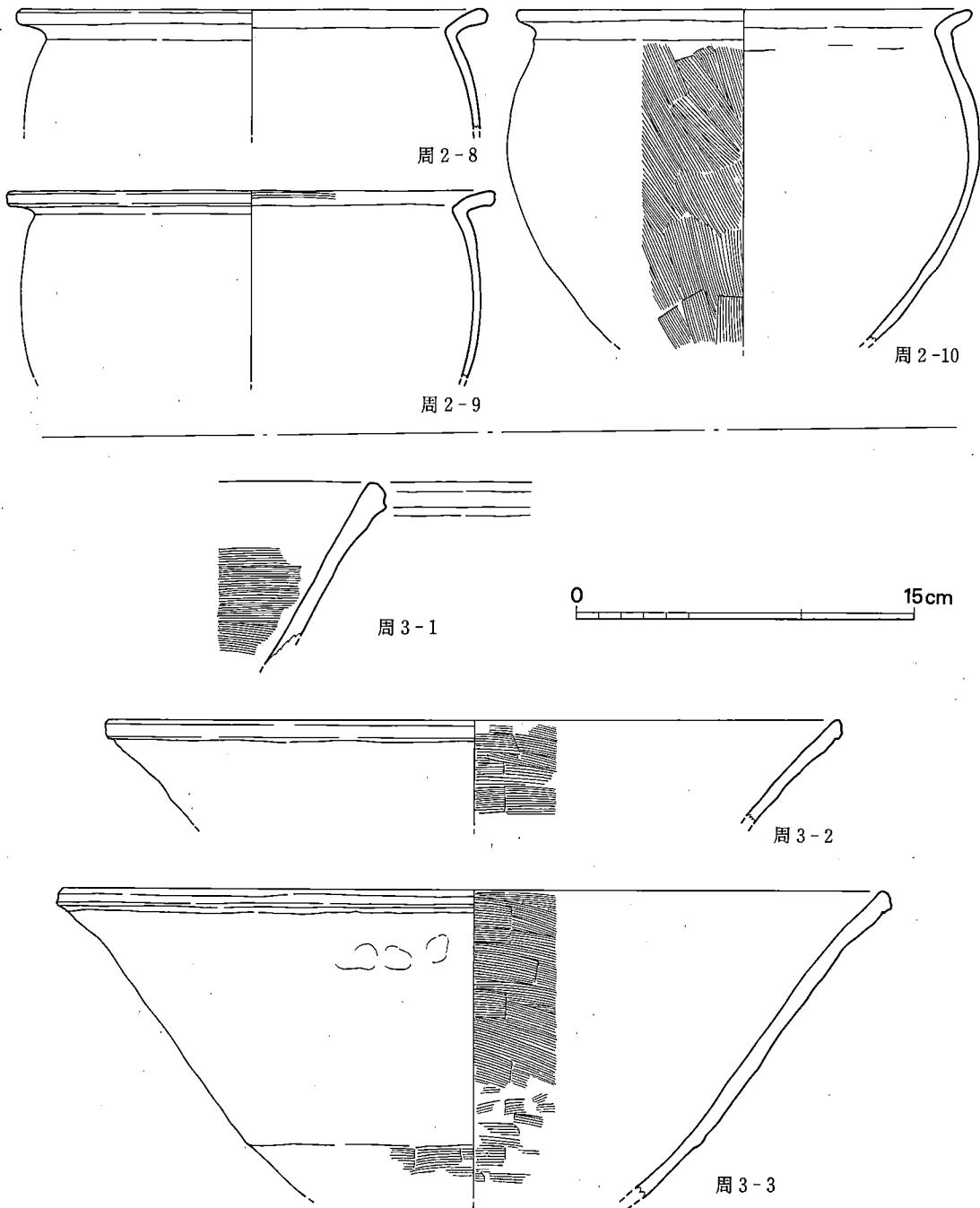
第143図 69号～73号土壤出土土器実測図 (1/3)



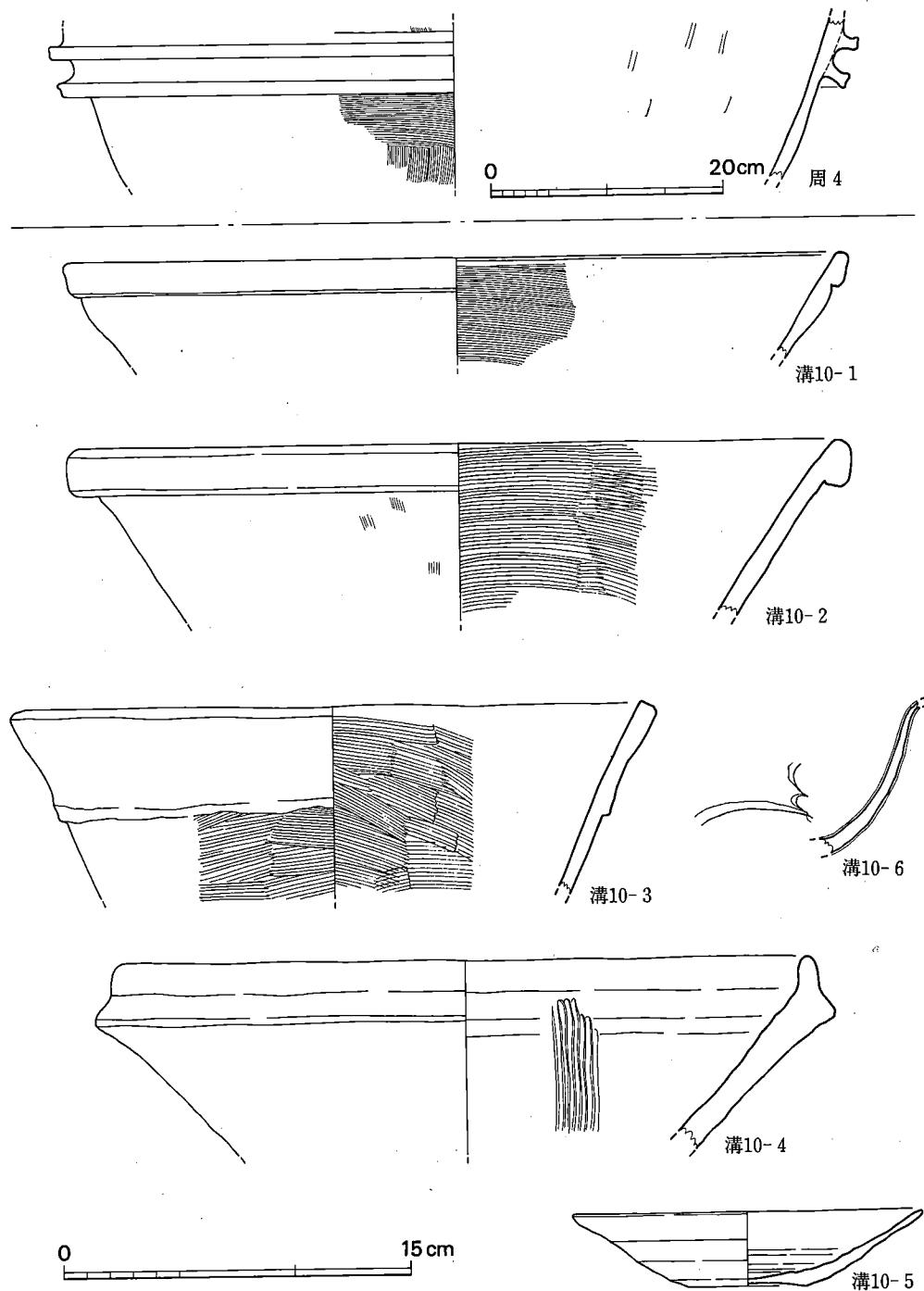
第144図 77号土壙, 3号~5号井戸出土土器実測図 (1/3)



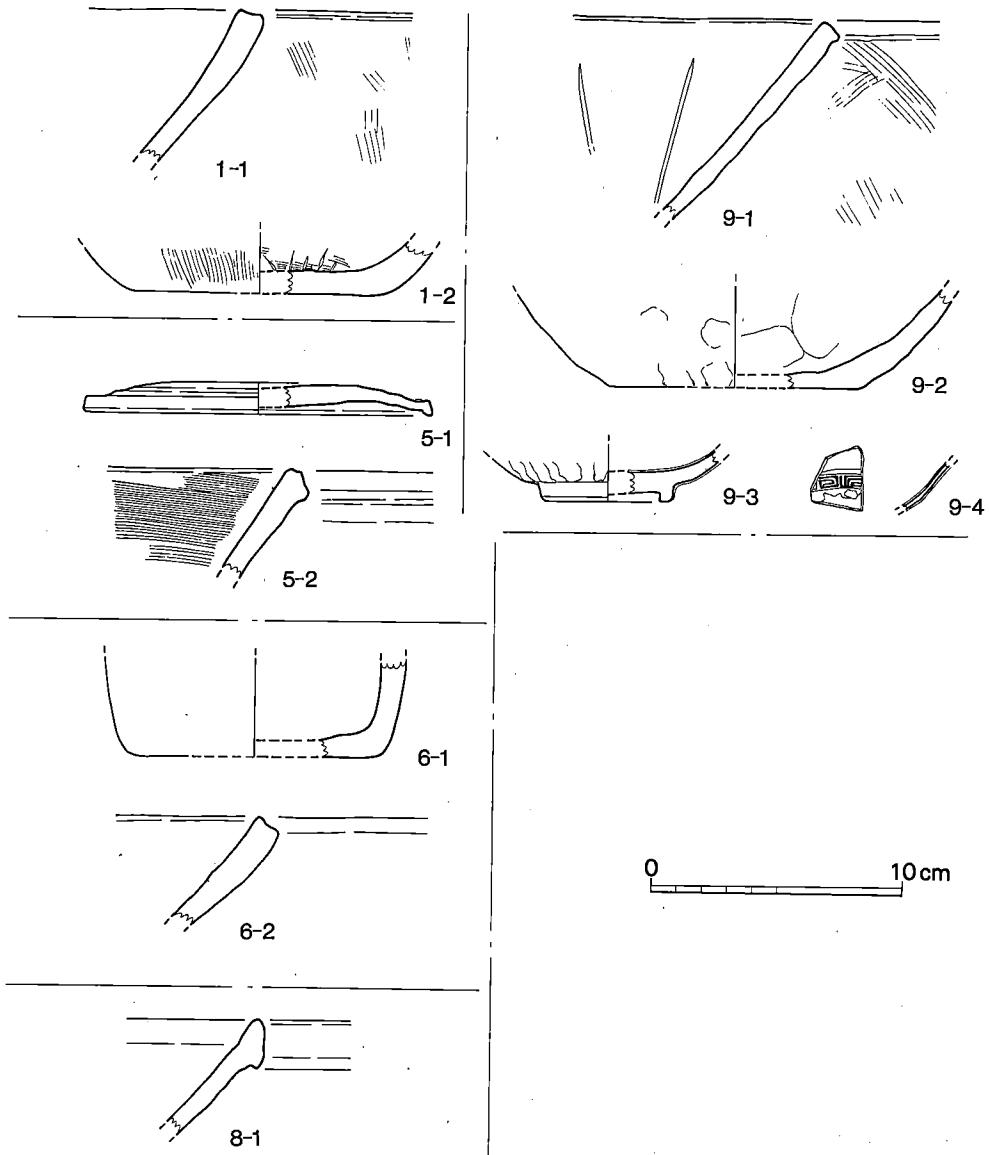
第145図 1号・2号周溝状遺構出土土器実測図 (1/4)



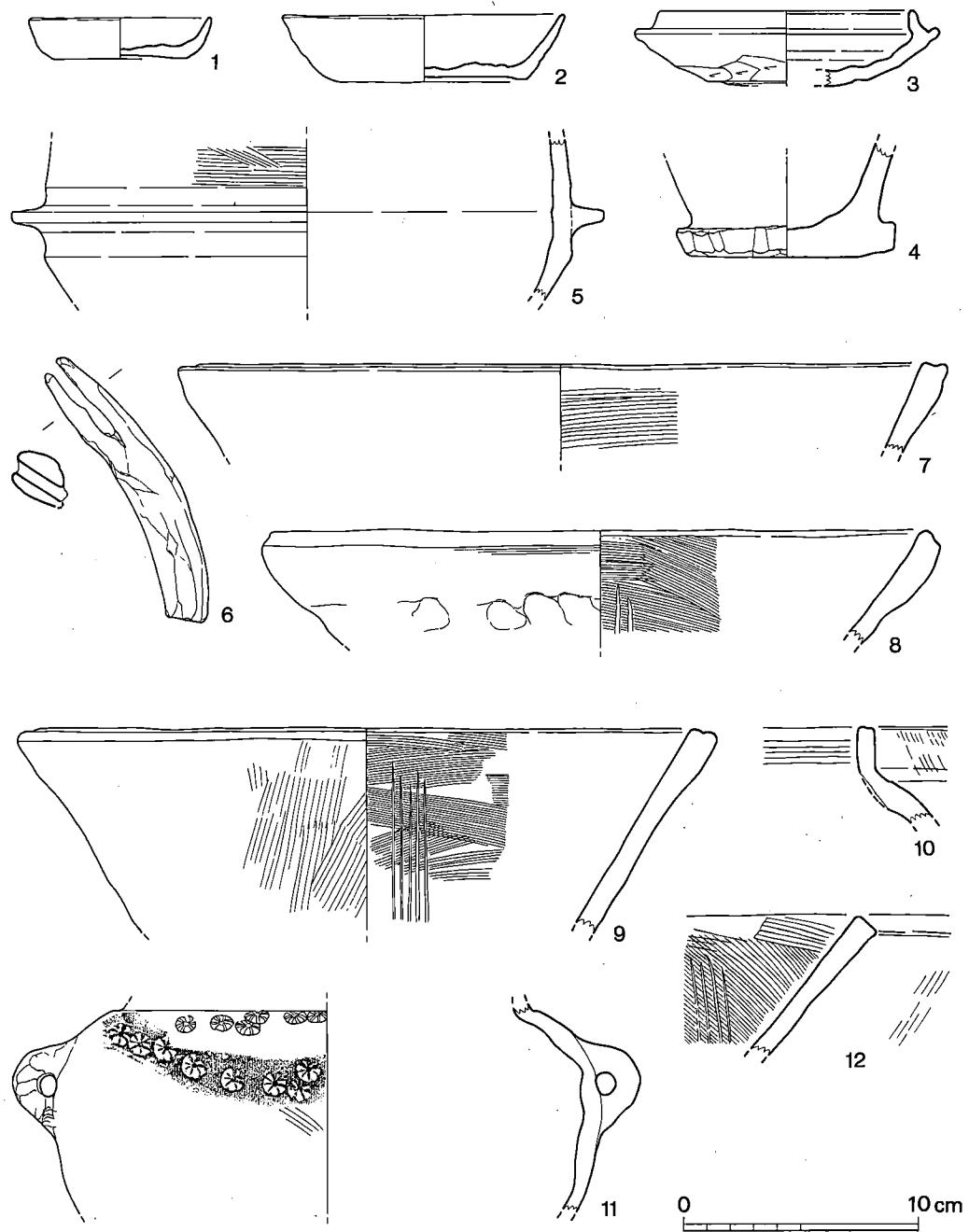
第146図 2号・3号周溝状遺構出土土器実測図 (1/4)



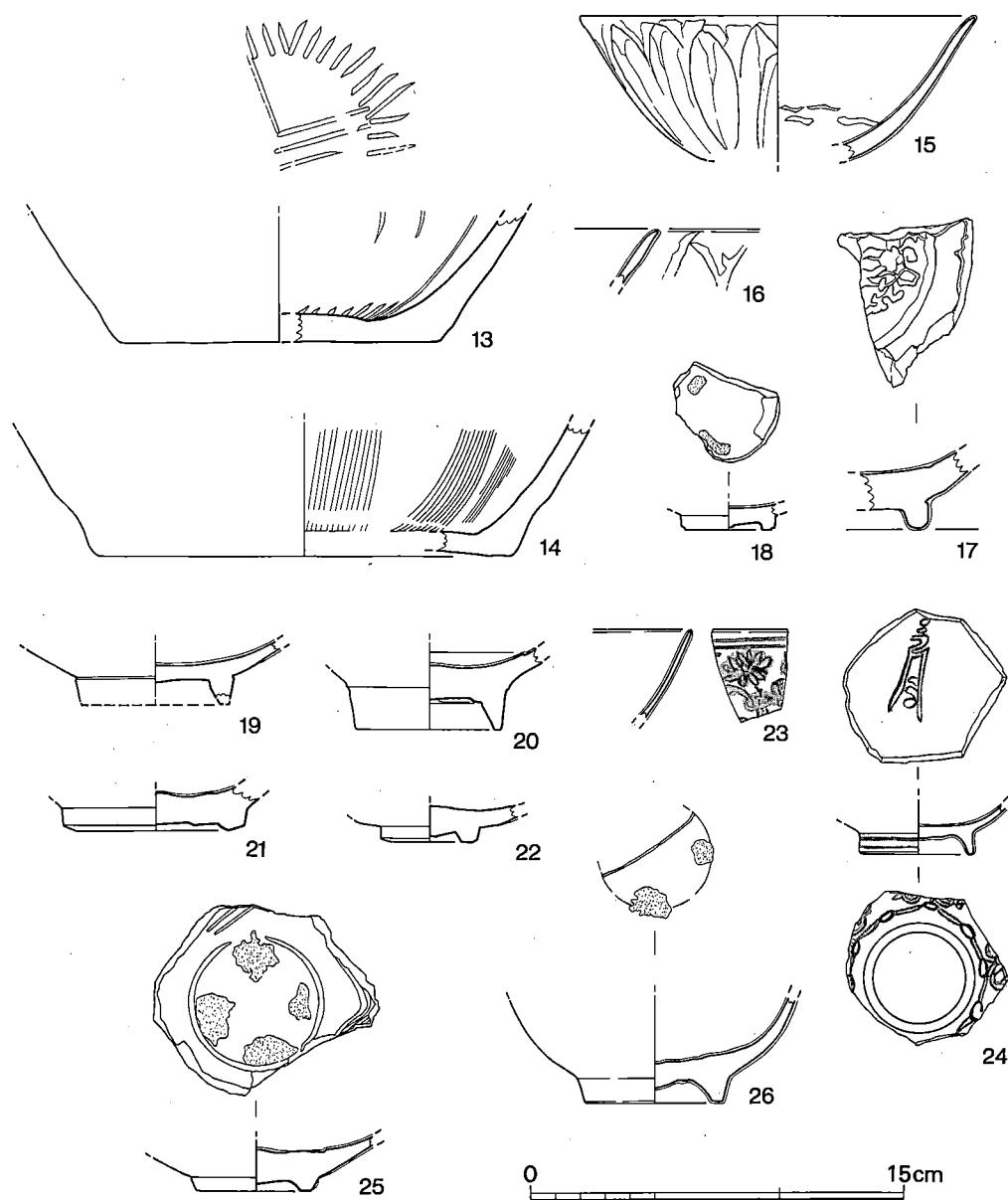
第147図 4号周溝状遺構、10号溝出土土器実測図 (1/3・1/6)



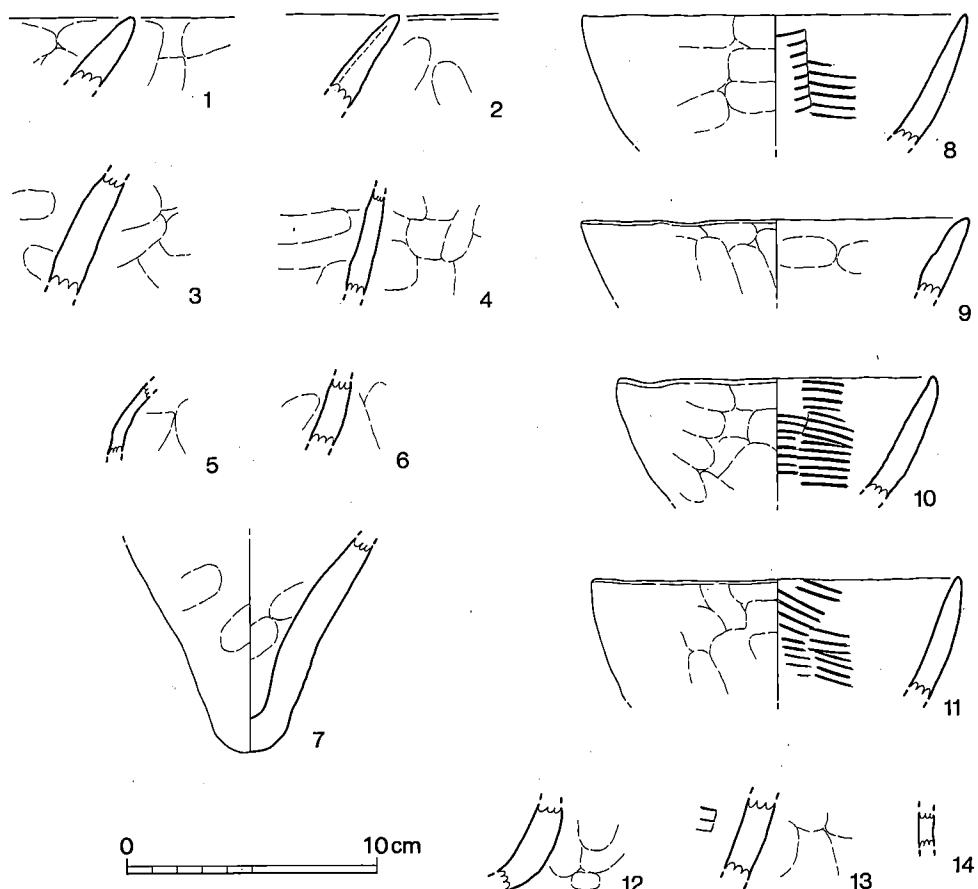
第148図 1号・5号・6号・8号・9号溝出土土器実測図 (1/3)



第149図 11号溝出土土器実測図その1 (1/3)



第150図 11号溝出土土器実測図その2 (1/3)



第151図 西台地出土焼塙土器実測図 (1/3)

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第124図1-1	西台地 1号土壙	須恵器 坏甕	① ②(15.8) ③1.7	外面に「大」のヘラ書文字がある。	外-ヨコナデとヘラ削り 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第124図1-2	1号土壙	須恵器 皿	①(23.4) ② ③2.2	丁寧な作り。	外-ヨコナデとヘラ削り 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第124図1-3	1号土壙	須恵器 高坏	①(18.8) ② ③2.2	極めて浅い、皿形の高坏の破片である。	外-ヨコナデとヘラ削り 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第124図1-4	西台地 1号土壙	須恵器 高坏	①(20.8) ② ③1.8	極めて浅い、皿形の高坏 破片である。	外-ヨコナデとヘラ 削り 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第124図1-5	1号土壙	須恵器 高坏	① ②9.2 ③4	脚部の低い、安定した器形である。	外-ヨコナデとヘラ 削り 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第124図1-6	1号土壙	須恵器 高坏	① ②14 ③1.5	小片のため詳細不明。	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	埋土から出土
第124図1-7	1号土壙	須恵器 鉢形土器	①(23.2) ② ③4	全体の形状は不明。	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	埋土から出土
第124図1-8	1号土壙	須恵器 壺	① ② ③6.1	口頸部の短い短頸壺の部類に属する。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデ	埋土から出土
第124図1-9	1号土壙	土師器 甕	① ② ③3.4	小片のため詳細不明。	外-ヨコナデ 内-ヨコナデと削り	埋土から出土
第124図1-10	1号土壙	土師器 擂鉢	① ② ③5.1	小片のため詳細不明。	外-摩滅 内-ハケ	埋土から出土
第124図1-11	1号土壙	土師器 擂鉢	① ② ③9.2	小片のため詳細不明。	外-摩滅 内-ハケ	埋土から出土
第124図 1-12~14	1号土壙	土師器 小皿	①8.2~ 8.7 ② ③1.8程	大量生産のため、荒い作りである。	外-ヨコナデと糸切 底 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第124図 1-15~17	1号土壙	土師器 坏	①12.5~ 13.4 ② ③3~2.5	口縁部を薄くおさめる。	外-ヨコナデと糸切 底 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第125図 2-1~40	2号土壙	土師器 小皿	①7~8.8 ② ③1.5~2	1~8の口径の小さいものは器高が高く、9以下は器高が低い。	外-ヨコナデと糸切 底 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第125・126図 2-41~64	2号土壙	土師器 坏	①12.5~ 14.5 ③2.5~ 3.5	薄い口縁部は大きく外反する。	外-ヨコナデと糸切 底 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第126図2-65	2号土壙	土師器 鍋	① ② ③	小片のため詳細不明。	外-ヨコナデとハケ 内-ナデ	埋土から出土
第126図2-66	2号土壙	土師器 鍋	① ② ③	小片のため詳細不明。	外-ヨコナデとハケ 内-ハケ	埋土から出土
第126図2-67	2号土壙	土師器 鍋	① ② ③	小片のため詳細不明。	外-ヨコナデとハケ 内-ハケ	埋土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第126図 2-68	西台地 2号土壙	磁器 壺	① ② ③2	小壺の小片である。 生地は灰色。 釉調は茶~黒色。	外一 内一	埋土から出土
第126図 2-69	2号土壙	磁器 碗	① ②6 ③1.8	見込みは草葉文あり。 生地は灰色。 釉調は青緑色。	外一 内一	埋土から出土
第126図 2-70	2号土壙	磁器 皿?	① ② ③	小片のため傾斜等不明。 生地は灰色。 釉調は暗灰色。	外一 内一	埋土から出土
第126図 2-71	2号土壙	磁器 鉢?	① ② ③	小片のため傾斜等不明。 生地は肌色。 釉調は肌色。	外一 内一	埋土から出土
第126図 2-72	2号土壙	磁器 瓶?	① ②(12) ③	小片のため詳細不明。 生地は灰色。 釉調はネズミ色。	外一 内一	埋土から出土
第126図 3-1~8	3号土壙	土師器 小皿	①7.5~ 8.4 ③1.3~ 2.1	口径、器高ともバラエティに富む。	外一ヨコナデと糸切 底 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土
第126図 3-9	3号土壙	土師器 皿	①11.3 ②8.8 ③1.7	器肉が薄く、上げ底気味である。	外一ヨコナデと糸切 底 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土
第126・127図 3-10~34	3号土壙	土師器 坏	①12~ 12.8 ② ③2.2~3	中位で口縁部が外反するもの、直線的に外反するものと二者ある。	外一ヨコナデと糸切 底 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土
第127図 3-35	3号土壙	須恵器 坏甕	①(13) ② ③3.8	口縁部を内側に折り曲げている。	外一ヨコナデとヘラ 削り 内一ヨコナデ	埋土から出土
第127図 3-36	3号土壙	土師器 甕	①(18) ② ③9.3	口縁部はやや外反する程度である。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデと削り	埋土から出土
第127図 3-37	3号土壙	土師器 鍋	①22 ② ③17.7	口縁部に突帯を巡らす。体部中位は指圧痕が巡る。	内外面ともハケ、ナデ、と指圧痕	埋土から出土 外面に煤が付着する。
第127図 3-38	3号土壙	磁器 瓶?	① ② ③	小片のため詳細不明。 釉調は肌色。	外一 内一	埋土から出土
第127図 3-39	3号土壙	磁器 碗	① ② ③	小片のため詳細不明。 生地は灰色。 釉調は灰緑色。	外一 内一	埋土から出土
第127図 4-40	4号土壙	磁器 碗	① ②4.7 ③1.7	小片のため詳細不明。 生地は肌色。 釉調は肌色。	外一 内一	埋土から出土
第128図 4-1	4号土壙	弥生土器 高坏	①(29) ② ③3.3	坏部は丸く鋤先口縁である。	外一風化 内一風化	埋土から出土 丹塗されている。

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第128図4-2	西台地 4号土壙	須恵器 壺蓋	①(12.5) ② ③2.3	器高が低い。返りがしつかりしている。	外一ヨコナデと静止 ヘラ削り 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土
第128図4-3	4号土壙	土師器 甕	①(18) ② ③5.4	肩にスタンプあり。	外一ヨコナデとナデ 内一ハケ	埋土から出土
第128図4-4	4号土壙	土師器 壺	①12.3 ②8.3 ③2.9	器肉の厚さが一樣で、口縁部が外反する。	外一ヨコナデと糸切 底 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土
第128図4-5	4号土壙	須恵器 蓋?	① ② ③	小片のため不明	外一ヨコナデ 内一ヨコナデ	埋土から出土
第128図4-6	4号土壙	土師器 鍋	①28.2 ② ③13.3	体部中位に貼付突帯を巡らし、その際に突帯の上部に指圧痕が残る。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとハケ	埋土から出土 外面に煤が付着する。
第128図4-7	4号土壙	磁器 碗	① ②5.8 ③3.8		外一 内一	埋土から出土
第128図4-8	4号土壙	磁器 碗	① ②6 ③5.3	碗の部分は球形を呈すようである。生地は灰色。釉調は褐色。	外一 内一	埋土から出土
第128図4-9	4号土壙	磁器 鉢?	① ② ③	小片のため不明。 生地は明灰色。 釉調は青緑色。	外一 内一	埋土から出土
第128図4-10	4号土壙	磁器 鉢?	① ② ③	小片のため不明。 生地は灰色。 釉調は灰色。	外一 内一	埋土から出土
第128図4-11	4号土壙	陶器 甕?	① ② ③	口縁部は粘土を貼りたして肥厚させる。 自然釉	外一 内一	埋土から出土
第128図5-1	5号土壙	土師器 鉢?	①(15) ② ③6.9	筒形で口縁部は内側に折り曲げる。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデ	埋土から出土
第128図5-1	5号土壙	弥生土器 甕	① ② ③	口縁部は折り曲げT字形を呈す。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデ	埋土から出土
第128図6-1	6号土壙	土師器 鍋	①(32.8) ② ③7.1	口縁部に突帯を巡らす。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとハケ	埋土から出土 外面に煤が付着する。
第129図6-2	6号土壙	土師器 鍋	①(30) ② ③	口縁部は肥厚する。	外一ハケ(摩滅) 内一ハケ	埋土から出土 外面に煤が付着する。
第129図6-3	6号土壙	土師器 甕	① ② ③	肩がやや張る。強いヘラ削りのため体部の器肉は薄い。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとヘラ削り	埋土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第129図8-1	西台地 8号土壙	弥生土器 甕	① ②(9) ③2.8	小片のため不明。	外一ハケ 内一ナデ	埋土から出土
第129図8-2	8号土壙	土師器 小皿	①(7.2) ② ③1.6	口縁部がやや内湾する。	外一ヨコナデと糸切 底 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土
第129図9-1	9号土壙	土師器 鍋	① ② ③	小片のため不明	外一不明 内一ヨコナデ	埋土から出土
第129図9-2	9号土壙	土師器 鍋	① ② ③	小片のため不明	外一摩滅 内一ハケ	埋土から出土
第129図9-3	9号土壙	土師器 擂り鉢	①(31.8) ② ③11.5	口縁部はやや厚く作り, 体部は直線的に開く。	外一部ハケ 内一ハケとナデ	埋土から出土
第129図9-4	9号土壙	磁器 碗	① ②5.8 ③4.1	竹節高台。見込みに一重 の圈線。生地は灰色。 釉調はオリーブ色。	外一 内一	埋土から出土
第129図11-1	11号土壙	土師器 环	①11.6 ② ③4.8	浅めの半球形を呈する。	外一ヨコナデとヘラ 削り 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土
第129図11-2	11号土壙	土師器 环	①(16.8) ② ③4.3	1より浅めの製品。	外一摩滅 内一摩滅	埋土から出土
第129図11-3	11号土壙	須恵器 坏蓋	①(11.8) ② ③3.7	口縁部はやや内湾し, 天 井部は器肉が厚い。	外一ヨコナデとヘラ 削り 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土
第129図11-4	11号土壙	須恵器 高坏?	①(10) ② ③3.3	口縁部は肥厚し, 体部中 位に浅い凹線が巡る。	外一ヨコナデとナデ 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土
第130図11-5	11号土壙	土師器 甕	①(19.4) ② ③7.9	口縁部を強く折り曲げ, 端部を薄く作る。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとヘラ 削り	埋土から出土
第129図11-6	11号土壙	土師器 甕	①(19.3) ② ③4	小片のため不明。	外一ヨコナデ 内一部摩滅, ナデ	埋土から出土
第129図11-7	11号土壙	土師器 甕	① ② ③12.5	丸底の甕	外一ハケ 内一ヘラ削り	埋土から出土
第129図11-8	11号土壙	土師器 甑	① ② ③	口縁部は外反し, 体部は 筒形で, 同下半部は径を 減じる。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとヘラ 削り	埋土から出土
第131図11-9	11号土壙	土師器 移動式カ マド	①18 ②45 ③40	図上ではほぼ復元。一对の 把手がある。底の痕跡を 残す。	外一ハケ, 指圧痕 内一	埋土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第132図12-1	西台地 12号土壙	須恵器 坏蓋	①(16) ② ③2	天井部は平坦。返りはしっかりとしている。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第132図12-2	12号土壙	土師器 皿	① ② ③	小片のため不明	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとヘラ削り	埋土から出土
第132図12-3	12号土壙	土師器 甕	① ② ③	小片のため不明	外一 内一	埋土から出土
第132図13-1	13号土壙	土師器 鍋	①(27) ② ③11.4	平底の洗面器形を呈す。 体部中位に低い突帯を巡らす。	外-ヨコナデ、ナデ とハケ 内-ナデとハケ	埋土から出土
第132図13-2	13号土壙	須恵器 坏蓋	① ② ③	大振りの蓋。天井部と口 縁部の境に沈線。	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	埋土から出土
第132図13-3	13号土壙	土師器 鍋	① ② ③	小片のため詳細不明。 体部中位に突帯がある。	外-ハケ 内-ハケ	埋土から出土
第132図14-1	14号土壙	土師器 甕	①(19.2) ② ③8.7	口縁部以下器肉の厚さが ほぼ一定である。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとヘラ削り	埋土から出土
第132図16-2	16号土壙	弥生土器 甕	①(30) ② ③8.2	口縁部を折り曲げ、端部 を少し肥厚される。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第132図17-1	17号土壙	須恵器 坏蓋	①11.5 ② ③3.6	口縁部を内側に少し折り 曲げる。天井部外面にヘラ 記号がある。	外-ヨコナデとヘラ 削り 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第132図17-2	17号土壙	須恵器 坏蓋	①(12.8) ② ③3.8	口縁部はやや肥厚氣味で 天井部外面にヘラ記号が ある。	外-ヨコナデとヘラ 削り 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第132図17-3	17号土壙	須恵器 坏蓋	①12.4 ② ③3.8	円筒形のツマミがある。 返りはしっかりしている。 灰をかぶる。	外-灰をかぶり不明 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第132図17-4	17号土壙	須恵器 坏身	①10.1 ② ③3.8	底部は丸味を持つ。口縁 部は直立する。底部外面 にヘラ記号がある。	外-ヨコナデとヘラ 削り 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第132図17-5	17号土壙	須恵器 坏身	①10.6 ② ③3.7	底部は平底氣味。底部外 面にヘラ記号がある。	外-ヨコナデとヘラ 削り 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第133図17-6	17号土壙	須恵器 脚台	① ②10 ③4.1	脚部中位で屈曲し、沈線 を巡らせる。	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	埋土から出土
第133図17-7	17号土壙	須恵器 平瓶	①7.9 ② ③		外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	埋土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第133図17-8	西台地 17号土壙	土師器 鉢	①11.5 ② ③7.7	深めの鉢で、口縁部を少し外反させる。	外一摩滅 内一摩滅	外底部に煤付着。カマド支脚
第133図17-9	17号土壙	土師器 甕	①(9.3) ② ③5.2	口頸部はほぼ直立。肩が張る。	外一摩滅 内一摩滅	埋土から出土
第133図17-10	17号土壙	土師器 甕	①(14) ② ③8.2	口縁部がわずかに外反するズン同形。	外一摩滅、ハケ 内一摩滅	埋土から出土
第133図17-11	17号土壙	土師器 甕	①(15.6) ② ③5.8	全体に器肉が厚い。体部はズン同形か?	外一部摩滅、ハケ 内一摩滅	埋土から出土
第133図17-12	17号土壙	土師器 甕	①(17.5) ② ③5.5	口縁部は外反する。器肉の厚さは均一のようである。	外一磨滅 内一磨滅	埋土から出土
第133図17-13	17号土壙	土師器 甕	①(21) ② ③16	頸部は直立し、口縁部はやや外反する。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとヘラ削り	埋土から出土
第133図17-14	17号土壙	土師器 甕	①(18.4) ② ③6.8	口縁部を軽く外方に折り曲げる。口縁部径に比して体部径が大きい。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとヘラ削り	埋土から出土
第133図17-15	17号土壙	土師器 甕	①(20) ② ③6.6	口縁部を軽く外方に折り曲げる。	外一部摩滅、ハケ 内一摩滅	埋土から出土
第133図17-16	17号土壙	土師器 甕	①(19.5) ② ③6	口縁部は外反し、肩は張るようである。	外一ヨコナデとハケ 内一ハケとヘラ削り	埋土から出土
第133図17-17	17号土壙	土師器 甕	①(20) ② ③8.7	口縁部は外反する。肩は張らない。	外一部摩滅、ハケ 内一ヨコナデとヘラ削り	埋土から出土
第134図17-18	17号土壙	土師器 甕	① ② ③	平底気味で、底部中央の器肉が薄い。	外一摩滅 内一ヘラ削り	埋土から出土
第134図17-19	17号土壙	土師器 器種不明	①(25.4) ② ③5.6	甕か鉢の可能性。	外一部摩滅、ハケ 内一部摩滅、ヘラ削り	埋土から出土
第134図17-20	17号土壙	土師器 飯	①(28) ② ③13.1	口縁部はやや外方に折り曲げてそれと分かる程度である。	外一部摩滅、ハケ 内一部摩滅、ヘラ削り	埋土から出土
第134図17-21	17号土壙	土師器 飯	①(30) ② ③11.8	口縁部はやや外方に折り曲げてそれと分かる程度である。	外一部摩滅、ハケ 内一部摩滅、ヘラ削り	埋土から出土
第134図17-22	17号土壙	土師器 飯	①(28) ② ③10	口縁部は明瞭で、一对の把手が残る。	外一ヨコナデ、ナデ とハケ 内一ヨコナデとヘラ削り	埋土から出土

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第135図18-1	西台地 18号土壙	土師器 甕	①(15.2) ② ③5.3	口縁部は強く外方に折り曲げる。口頸部の器肉は厚い。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとヘラ削り	埋土から出土
第135図18-2	18号土壙	土師器 鉢	①(12.6) ② ③7.3	器肉の厚い鉢である。	外一部摩滅、ハケ 内一ヨコナデとヘラ削り	埋土から出土
第135図18-3	18号土壙	磁器 碗	① ②5.8 ③3.7	見込みに草花文。 生地は白灰色。 釉調は淡水色。	外一ヘラ削り 内一	埋土から出土
第135図20-1	20号土壙	須恵器 环蓋	①(12.4) ② ③4.4	天井部と口縁部の境が不明瞭ではなく、偏球形を呈す。	外一ヨコナデとヘラ削り 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土
第135図20-2	20号土壙	須恵器 环身	①10 ② ③3.6	矮小化した直立する口縁部で、全体に偏球形を呈す。	外一ヨコナデとヘラ削り 内一ヨコナデとナデ	埋土から出土 外底面にヘラ記号がある。
第135図20-3	20号土壙	須恵器 高坏	① ②10.2 ③7.7	脚部はラッパ状に開く。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデ絞り目 が残る。	埋土から出土
第135図20-4	20号土壙	土師器 高坏	①13.2 ② ③6	坏部の口縁部は大きく外反し、整った形である。	外一摩滅 内一摩滅	埋土から出土
第135図20-5	20号土壙	土師器 高坏	① ②10.5 ③6.4	脚裾部は下部で屈曲して外反する。	外一ヨコナデとヘラ削り 内一摩滅	埋土から出土
第135図20-6	20号土壙	土師器 甕	①23.3 ② ③8.1	口縁部を折り曲げ、端部を丸くおさめる。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデ、ハケとヘラ削り	埋土から出土
第135図20-7	20号土壙	土師器 甕	①13.9 ② ③15	口縁部を折り曲げた通常の小型の甕である。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデ、ハケとヘラ削り	埋土から出土 カマドの支脚と思われる。
第135図20-8	20号土壙	土師器 甕	① ② ③7	底部は幅広く、体部は筒形になりそうである。	外一ナデ 内一ナデ	外面に煤が付着する。
第136図20-9	20号土壙	土師器 鍋	① ② ③	小片のため詳細不明。	外一ヨコナデとナデ 内一ハケ	
第136図20-10	20号土壙	弥生土器 甕	① ② ③	小片のため詳細不明。	外一摩滅、ヨコナデ 内一ヨコナデとナデ	
第136図20-11	20号土壙	弥生土器 高坏	①(24) ② ③	小片のため詳細不明。	外一摩滅 内一摩滅	内外面は丹塗りされる。
第136図20-12	20号土壙	弥生土器 器台	① ②18.8 ③7	小片のため詳細不明。	外一摩滅 内一摩滅	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第136図20-13	西台地 20号土壙	弥生土器 器台	① ②18 ③8.1	小片のため詳細不明。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデとハケ	
第136図23-1	23号土壙	須恵器 坏身	①(8) ② ③2.2	小型品である。底部は平底。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとナデ	
第136図23-2	23号土壙	須恵器 坏蓋	①(13.5) ② ③2	小片のためツマミの有無 は不明。口縁部は退化し つつある。	外-ヨコナデとヘラ 削り 内-ヨコナデとナデ	
第136図 23-3~6	23号土壙	土師器 坏	①10.5~ 13 ③2.7~3	3は口縁部が直立気味だ が、外は外反する。	外-ヨコナデ、糸切 底 内-ヨコナデとナデ	
第136図 23-7~12	23号土壙	土師器 小皿	①7~8.7 ③1.5~ 2.3	小型品を含む。器高は比 較的高い。	外-ヨコナデ、糸切 底 内-ヨコナデとナデ	埋土から出土
第136図23-13	23号土壙	陶器 壺	①12.2 ② ③5	口縁部は短く、折り曲げ られる。	外-ヘラ磨き 内-摩滅	
第136図23-14	23号土壙	土師器 鍋	① ② ③	小片のため詳細不明。	外-ヨコナデ、ナデ 一部ハケ 内-ハケ	
第136図23-15	23号土壙	土師器 擂蜂	①(29) ② ③4.8	小片のため詳細不明。	外-ヨコナデとナデ 一部ハケ 内-ハケ	
第136図23-16	23号土壙	石鍋	①(28.2) ② ③5.5	小片のため詳細不明。	外- 内-	外面に煤が付 着する。
第136図23-17	23号土壙	陶器 甕	① ②(21) ③10.5	小片のため詳細不明。	外-ナデ 内-ナデ	
第137図23-18	23号土壙	磁器 碗	① ②5 ③2.2	見込に花文あり。 生地は灰色。 釉調は灰緑色。	外- 内-	
第137図23-19	23号土壙	磁器 碗	① ②6.2 ③2	見込に草文あり。 生地は灰色。 釉調はオーラブ色。	外- 内-	
第137図23-20	23号土壙	磁器 碗	① ②6.4 ③2.4	見込にハケ目あり。 生地は灰色。 釉調は灰色。	外- 内-	
第137図25-1	25号土壙	土師器 飯	① ② ③	小片のため不明	外-一部摩滅、ハケ 内-ヨコナデとヘラ 削り	
第137図25-2	25号土壙	須恵器 坏身	①(14.4) ②(9) ③5.3	体部は大きく外反する。 高台は裾開きで、疊付端 部は外方につまり出す。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとナデ	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第137図29-1	西台地 29号土壙	土師器 甕	①(21) ② ③15	中型の甕。口縁部が体部 に比較して大きい。	外一部摩滅、ハケ 内ヨコナデとヘラ 削り	
第137図29-2	29号土壙	須恵器 环身	①(14.7) ②(10) ③4	底部は平らで、体部は直 立気味に外反する。	外ヨコナデとナデ 内ヨコナデとナデ	
第137図30-1	30号土壙	土師器 甕	① ② ③	小片のため不明	外一摩滅 内一部摩滅、ヘラ 削り	
第137図30-2	30号土壙	土師器 甕	① ② ③	小片のため不明	外一摩滅 内一部摩滅、ヘラ 削り	
第137図30-3	30号土壙	土師器 甕	①(23) ② ③4.9	小片のため不明	外一摩滅 内一部摩滅、ヘラ 削り	
第137図31-1	31号土壙	須恵器 环蓋	①(11.5) ② ③2.4	天井は平ら。返りはしつ かりとしている。	外ヨコナデとヘラ 削り 内ヨコナデとナデ	
第138図36-1	36号土壙	須恵器 环身?	①9.6 ② ③2.8	平らな底部に、直立気味 の体部が続く。	外ヨコナデとヘラ 削り 内ヨコナデとナデ	外底面にヘラ 記号あり。
第138図36-2	36号土壙	土師器 环身	①(11.3) ② ③3.1	小片で詳細は明らかでは ないが、偏球形の器形。	外ヨコナデとヘラ 削り 内ヨコナデとナデ	
第138図36-3	36号土壙	土師器 甕	①(16) ② ③7.5	口縁部はやや外反する。 胴部は丸味を持たない。	外ヨコナデとハケ 内ヨコナデとヘラ 削り	
第138図38-1	38号土壙	土師器 小皿	①8.2 ②6.5 ③2.2	小型品の割には器高が高 く、口縁部の外反度が少 ない。	外ヨコナデと糸切 底 内ヨコナデとナデ	
第138図39-1	39号土壙	土師器 坏	①(13.2) ②8.4 ③2.7	底部はやや上げ底で、体 部は大きく外反する。	外ヨコナデと糸切 底 内ヨコナデとナデ	外底面に煤が 付着する。
第138図39-2	39号土壙	土師器 坏	①(9.8) ②(7.2) ③2.5	全体に器肉が厚い。この 種の坏としては小型であ る。	外ヨコナデと糸切 底 内ヨコナデとナデ	
第138図 40-1~3	40号土壙	土師器 小皿	①8.3~9 ② ③1.3~2	全体に体部~口縁部はし っかりと作られている。	外ヨコナデと糸切 底 内ヨコナデとナデ	
第138図42-1	42号土壙	土師器 皿	①16.6 ② ③3	底部はやや上げ底で、体 部は大きく外反し、口縁 部をやや折り曲げる。	外ヨコナデ、底部 はヘラ切離し 内ヨコナデとナデ	
第138図42-2	42号土壙	土師器 皿	①14.5 ② ③2.8	平底。体部は外反して立 ち上がる。	外ヨコナデ、底部 はヘラ切離し 内ヨコナデとナデ	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第138図42-3	西台地 42号土壙	土師器皿	①(21) ② ③2.8	底部はやや上げ底で、体部は大きく外反し、口縁部をやや折り曲げる。	外-ヨコナデ、底部 はヘラ切離し 内-ヨコナデとナデ	
第138図43-1	43号土壙	土師器皿	①(15.5) ② ③13.2	体部はズン胴形。口縁部 は外方に折り曲げる。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデとヘラ 削り	
第138図43-2	43号土壙	磁器碗	① ②5 ③1.7	詳細は不明。	生地は灰色 釉調は淡黄褐色～ 濃緑色	
第138図43-3	43号土壙	土師器擂鉢	① ② ③	小片のため不明。	外-一部磨滅、ハケ 内-ヨコナデとハケ	
第139図44-1	44号土壙	土師器鍋	①(35) ② ③7.4	小片のため不明。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとハケ	外面に煤が付着する。
第139図44-2	44号土壙	土師器擂鉢	① ②12.6 ③4.6	小片のため不明。	外-ナデ? 内-4本単位の節目	外面に煤が付着する。
第139図44-3	44号土壙	土師器小皿	①(9.5) ②7.3 ③1.4	糸切底の小皿としては大型。上げ底で口縁部は大きく外反する。	外-ヨコナデ、底部 はヘラ切離し 内-ヨコナデとナデ	
第139図44-4	44号土壙	土師器坏	①11.8 ②7.6 ③2.7	口縁部は大きく外反し、器肉を薄く作る。	外-ヨコナデ、底部 はヘラ切離し 内-ヨコナデとナデ	
第139図44-5	44号土壙	土師器坏	①12.4 ②8 ③2.6	上げ底で口縁部は大きく外反し器肉を薄く作る。	外-ヨコナデ、底部 はヘラ切離し 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-1	45号土壙	須恵器坏蓋	①(12.5) ② ③2.2	破片のため、ツマミの有無は不明。	外-ヨコナデとヘラ 削り 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-2	45号土壙	須恵器坏身	①(12.8) ②(8.5) ③4.4	底部は平たく、体部は直線的にやや外反する。高台は極めて若干外開き。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-3	45号土壙	須恵器坏蓋	①(15) ② ③3.8	器肉が薄い。	外-摩滅 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-4	45号土壙	土師器坏蓋	①(14.4) ② ③4	大型の蓋で、天井部と口縁部の区別がしっかりと している。	外-ヨコナデ、ナデ ヘラ削り 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-5	45号土壙	土師器皿	①17.4 ② ③2.5	丁寧な作りで、口縁部は外反する。	外-ヨコナデとヘラ 削り 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-6	45号土壙	土師器皿	①20.6 ② ③2.7	上げ底気味。	外-ヨコナデとヘラ 削り 内-ヨコナデとナデ	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

掲図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第139図45-7	西台地 45号土壙	土師器 壺	①(12.8) ② ③2.8	平底で口縁は直線的に外反する。	外-ヨコナデ、ナデ ヘラ切り離し 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-8	45号土壙	土師器 壺	①13.9 ② ③3.3	平底で口縁は直線的に外反する。	外-ヨコナデ、ナデ ヘラ切り離し 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-9	45号土壙	土師器 壺	①14 ② ③3.2	平底で口縁は直線的に外反する。	外-ヨコナデ、ナデ ヘラ切り離し 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-10	45号土壙	土師器 壺	①15.3 ② ③3.3	平底で口縁は直線的に外反する。	外-ヨコナデ、ナデ ヘラ切り離し 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-11	45号土壙	土師器 壺	①15.9 ② ③4	平底で口縁の開口具合は前者に対して直立気味である。	外-ヨコナデ、ナデ ヘラ切り離し 内-ヨコナデとナデ	
第139図45-12	45号土壙	土師器 壺	①(14.9) ② ③4.3	平底で口縁の開口具合は前者に対して直立気味である。	外-ヨコナデ、ナデ ヘラ切り離し 内-ヨコナデとナデ	
第140図45-13	45号土壙	土師器 甕	①11.2 ② ③10.5	把手が付く。口縁部は折り曲げ、端部は器肉を薄く作る。	外-摩滅 内-摩滅	カマドの支脚
第140図45-14	45号土壙	土師器 甕	①(17) ② ③5.6	小片のため不明。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとヘラ削り	カマドの支脚
第140図45-15	45号土壙	土師器 甕	①(17.6) ② ③6.6	口縁部は直立気味で、肩が張る。	外-ヨコナデとハケ 内-摩滅	
第140図45-16	45号土壙	土師器 甕	①(27) ② ③6.7	口径部の器肉が厚く、口縁端部は強く折り曲げられる	外-摩擦 内-ヨコナデとヘラ削り	
第140図45-17	45号土壙	土師器 甕	①(28) ② ③16.5	口縁部は軽く折り曲げ、体部は球状を呈する。	外-摩滅 内-ヨコナデとヘラ削り	
第140図45-18	45号土壙	土師器 鍋	① ② ③	小片のため不明。	外-摩滅 内-ハケ	
第140図45-19	45号土壙	磁器 碗	① ②6 ③3	竹節高台。 生地は灰色。 釉調はオリーブ色。	外- 内-	
第141図45-20	45号土壙	土師器 瓶	①(31) ② ③17	口縁部はやや外反する。	外-ヨコナデ、ナデ とハケ 内-ヘラ削り	
第141図46-1	46号土壙	土師器 瓶?	① ② ③	小片のため詳細は不明。	外-摩滅 内-摩滅	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第141図46-2	西台地 46号土壙	土師器 擂鉢	① ② ③	小片のため詳細は不明。	外一摩滅 内一ハケ	
第141図49-1	49号土壙	土師器 甕	①(13) ② ③10.5	口縁部を軽く折り曲げた 通常見られる小型の甕で ある。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとヘラ 削り	
第141図49-2	49号土壙	須恵器 平瓶	①5 ② ③4.2	小片のため詳細は不明。	外一ヨコナデ 内一ヨコナデ	
第141図49-3	49号土壙	弥生土器 高环	① ② ③11.7	小片のため詳細は不明。	外一摩滅 内一ハケ、絞目が残 る。	
第142図59-1	59号土壙	土師器 特小皿	①7.2 ②5.9 ③1.3	所謂特小皿といわれる器 種である。底部は糸切り	内・外一ナデ	
第142図59-2	59号土壙	土師器 坏	①12.3 ②8.0 ③3.2	体部は丸みがあり、口唇 部は若干内湾する。底部 は糸切り痕	内・外一ナデ	底部外面に板 圧痕
第142図59-3	59号土壙	土師器 坏	①11.7 ②8.5 ③2.5	口縁から体部にかけては 直線的で、底部は糸切り か。	内・外一摩耗	
第142図59-4	59号土壙	土師器 坏	①12.9 ②8.3 ③3.3	口縁から体部は丸みがあ る。底部は僅かな上げ底 で、糸切り痕。	内・外一ナデ	
第142図59-5	59号土壙	土師器 坏	①13.0 ②9.0 ③2.6	3と同じタイプで底部は 糸切り。	内・外一ナデ	底部に板圧痕 内外面に煤が 付着
第142図59-6	59号土壙	土師器 坏	①13.6 ②10.2 ③2.6	口縁から体部にかけては 直で、体部と底部の境は 屈折。糸切り底。	内・外一ナデ	底部に板圧痕
第142図59-7	59号土壙	土師器 坏	①12.0 ②9.1 ③3.7	口径の割りには器高が高 い。底部は糸切り。	内・外一ナデ	底部に板圧痕
第142図61-1	61号土壙	弥生土器 甕	①11.9 ② ③	逆「L」字状の口縁部	口縁・外一丹塗り磨 研 内一ナデ	
第142図61-2	61号土壙	弥生土器 高环	① ② ③	3方向に孔穿っている		蓋形土器の可 能性もある
第142図65	65号土壙	土師質 鉢か火舎	① ② ③	口縁部が厚く、口縁下に は2条の凸帯を巡らしそ の間に重なった竹管文。	外一磨きかナデ 内一ハケ	
第142図66-1	66号土壙	土師器 甕	①28.0 ② ③	返り返る口縁部。肩部は やや張る。	外一ハケ 内一ヘラ削り	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第142図66-2	西台地 66号土壙	土師器 甕	①26.0 ② ③	1よりも鋭く外反する口 縁部	内・外一摩耗	
第142図66-3	66号土壙	土師器 瓶	① ② ③	小破片。	外一ハケ 内一ヘラ削り	
第142図66-4	66号土壙	土師器 焼塩壺	①13.0 ② ③	底部は欠損。IIb類に分 類されるもの。	内・外一摩耗、指ナ デであろう	
第142図66-5	66号土壙	土師器 环身	①12.0 ② ③	口縁を若干外反。体部か ら底部の屈折は緩い。	内・外一摩耗	
第142図66-6	66号土壙	土師器 坏	①15.0 ②10.5 ③3.7	底部から体部にかけての 屈折は丸く、口縁は直に つくる。	内・外一ヨコナデ 外底部一ヘラ削り	
第142図66-7	66号土壙	土師器 坏	①16.0 ②12.0 ③3.2	6よりも器高が低く、上 げ底である。	内・外一ヨコナデ 外底部一ヘラ削り	
第142図66-8	66号土壙	土師器 坏	① ② ③	底部の小破片。	外一ヘラ削り 内一ナデ	外面に「殿刀」 のヘラ書きあり
第143図69-1	69号土壙	弥生土器 甕	①25.3 ② ③	「く」字状に緩く外反し 長い口縁部。肩部から胴 部の張りは鈍く長胴。	外一ハケ 内一ナデとハケ	内外面煤が付 着
第143図69-2	69号土壙	弥生土器 高坏か器台	① ②17.0 ③	裾部が内湾。器種がはっ きりしない。	外一ハケ 内一ハケと指圧痕	
第143図69-3	69号土壙	弥生土器 鉢	①18.0 ② ③	口縁部に細い沈線が巡る 底部は欠損	外一ナデとヘラ削り 内一ハケ	
第143図70	70号土壙	須恵器 高坏	① ② ③	口縁部と脚部を欠損。体 部に2本の沈線が巡る。	外一底部にはカキ目 内一ナデ	
第143図71	71号土壙	須恵器 甕	① ② ③	頸部上半と底部を欠損。 胴部中央の孔は残ってい ない。凹線が2本巡る。	外一カキ目と刺突文 内一ヨコナデ	
第143図72	72号土壙	土師器 把手付甕	①20.0 ② ③	口縁部を僅かに肥厚。胴 部中央には扁平な把手を 付す。胴下半は欠損。	外一ナデ 内一ヘラ削りが摩耗	
第143図73	73号土壙	土師器 特小皿	①7.8 ②6.7 ③1.2	糸切り底。板圧痕が残る	内・外一ナデ	
第144図77-1	77号土壙	土師器 把手付甕	①29.2 ② ③	厚く反り返る口縁部。大 きく短い把手。	外一ハケとナデ 内一ヘラ削り	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第144図77-2	西台地 77号土壙	須恵器 壺蓋	①16.4 ② ③	見受けの返りのある壺蓋で撮み付くと思われる。	外一回転ヘラ削りと ヨコナデ 内一ヨコナデ	
第144図3-1	3号井戸	土師器 皿	①10.0 ②7.2 ③1.6	若干上げ底。	内・外一ヨコナデ	底部外面板压 痕。 上層埋土出土
第144図3-2	3号井戸	土師器 壺	① ② ③	小破片	内・外一ナデ	上層埋土出土
第144図3-3	3号井戸	瓦質土器 鉢が湯釜?	① ② ③	胴部に雷文のスタンプ。	外一ナデか磨き 内一ナデ(一部ハケ 残る)	上層埋土出土
第144図3-4	3号井戸	陶器 甕	①50.0 ② ③	口縁部を鋭く外反させ、 口唇部は水引きにより上 下に肥厚。	内・外一ヨコナデ	埋土中から出 土
第144図4-1	11号井戸	青磁 高台付碗	① ②6.1 ③	外面底部から畳付部にかけ て露胎。見込部は界線 が巡る。	釉調一オリーブ色に 発色	
第144図4-2	11号井戸	瓦質土器 火舎	① ②33.8 ③	底部近くに2条の台形凸 帶を巡らし、その間に菱 形文を密に配する。	外一ヘラ磨き 内一ハケ後ナデ	最下層から出 土 内外面煤付着
第144図5-1	12号井戸	青磁 高台付碗	① ②6.0 ③	外面底部から畳付部が露 胎。高台は低く、見込部 に界線が巡り花文あり。	釉調一オリーブ色	外面底部に墨 書きあり、判読 不明。
第145図1-1	1号周溝状遺構	弥生土器 壺	① ②6.4 ③17.7	長く直立する頸部に球状 の胴部が続く。	外一ハケ 内一ナデ	
第145図1-2	1号周溝状遺構	弥生土器 壺	①(10.4) ② ③7.3	所謂、袋状口縁。	外一ヨコナデとナデ 内一ヨコナデとナデ	
第145図1-3	1号周溝状遺構	弥生土器 甕	①(13.2) ② ③9.7	く字形口縁。	外一ヨコナデとナデ 内一ヨコナデとナデ	
第145図1-4	1号周溝状遺構	弥生土器 瓶	① ② ③15	焼成後に穿孔する。	外一摩滅、ハケ 内一ナデ	
第145図1-5	1号周溝状遺構	弥生土器 甕	① ②8.4 ③10.5	小片のため詳細は不明。	外一ハケ 内一ナデ	
第145図1-6	1号周溝状遺構	弥生土器 甕	①(26) ② ③15	円筒形。口縁は端部をツ マミ上げて整形する。	外一ヨコナデとハケ 内一ヨコナデとハケ	
第145図2-1	2号周溝状遺構	弥生土器 壺	①(27) ② ③6.3	頸部は直立し、鋤先口縁 である。	外一ハケ 内一ハケ	丹塗りされて いる。

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第145図 2-2	西台地 2号周溝状遺構	弥生土器 壺	①(27) ② ③9.2	鋤先口縁で、頸部は外反する。	外-ヨコナデとハケ 内-摩滅	
第145図 2-3	2号周溝状遺構	弥生土器 壺	① ② ③	2条の三角突帯を巡らしている。	外-ヨコナデ 内-ハケ	
第145図 2-4	2号周溝状遺構	弥生土器 甕	① ② ③	小片のため不明。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデとナデ	丹塗りされている。
第145図 2-5	2号周溝状遺構	弥生土器 甕	① ②9.6 ③6	小片のため不明。	外-ハケ 内-ナデ	
第145図 2-6	2号周溝状遺構	弥生土器 甕	①(30) ② ③14.8	頸部に1条の沈線を巡らす。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデとナデ	
第145図 2-7	2号周溝状遺構	弥生土器 甕	①(36) ② ③7.2	口縁部は折り返し、端部は肥厚する。	外-摩滅、ハケ 内-摩滅、ナデ	
第146図 2-8	2号周溝状遺構	弥生土器 甕	①(28) ② ③7	折り曲げた、く字形の口縁。	外-摩滅 内-摩滅	
第146図 2-9	2号周溝状遺構	弥生土器 甕	①(29) ② ③11.2	折り曲げた、く字形の口縁。	外-摩滅 内-摩滅、ヘラ削り	
第146図 2-10	2号周溝状遺構	弥生土器 甕	①(27) ② ③19.5	頸部に1条の突帯を巡らす。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデとナデ	
第146図 3-1	3号周溝状遺構	土師器 鍋	① ② ③	小片のため詳細は不明。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとハケ	外面に煤が付着。
第146図 3-2	3号周溝状遺構	土師器 鍋	①(44) ② ③	小片のため詳細は不明。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとハケ	
第146図 2-3	3号周溝状遺構	土師器 鍋	①(50) ② ③36	体部下半に1条の鈍い突帯を巡らす。	外-ヨコナデとハケ 内-ヨコナデとハケ	
第147図 4-1	4号周溝状遺構	弥生土器 甕棺片	① ② ③	胴部下半に「コ」字状の凸帯を2条巡らす。	外-ハケ 内-ナデ	
第148図 1-1	1号溝	土師器 鍋	① ② ③	小片のため不明。	外-摩滅 内-摩滅	
第148図 1-2	1号溝	土師器 甕?	① ② ③	小片のため不明。	外-ハケ 内-ナデ	

出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

挿図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第148図5-1	西台地 5号溝	須恵器 壺蓋	①(14) ② ③1.3	破片のため、つまみの有無は不明。	外-ヨコナデとヘラ削り 内-ヨコナデとナデ	
第148図5-2	5号溝	土師器 鍋	① ② ③	小片のため不明。	外-ヨコナデ 内-ハケ	
第148図6-1	6号溝	土師器 甕?	① ② ③	小片のため不明。	外-摩滅 内-摩滅	
第148図6-2	6号溝	土師器 鍋	① ② ③	小片のため不明。	外-摩滅 内-摩滅	
第148図8-1	8号溝	土師器 鍋	① ② ③	小片のため不明。	外-ヨコナデとナデ 内-ヨコナデとナデ	
第148図9-1	9号溝	土師器 擂鉢	① ② ③	小片のため不明。	外-ハケ 内-摩滅	
第148図9-2	9号溝	土師器 甕?	① ② ③	小片のため不明。	外-ナデ 内-ナデ	
第148図9-3	9号溝	磁器 碗	① ②5.4 ③2		外- 内-	
第148図9-4	9号溝	磁器 ?	① ② ③	小片のため不明。 生地は白。 釉調は水色気味白灰色。	外- 内-	
第147図10-1	10号溝	土師質 土鍋	①34.0 ② ③	口縁部を玉縁状に肥厚。	外-ナデ 内-ハケ	外面煤が付着
第147図10-2	10号溝	土師質 捏鉢	①34.0 ② ③	玉縁状の口縁部。	外-ハケのちナデ 内-ハケ	
第147図10-3	10号溝	土師質 土鍋	①26.7 ② ③	口縁部がやや厚く、頸部 が有段をなす。	外-ナデとハケ 内-ハケ	外面に煤が付着
第147図10-4	10号溝	陶器 擂鉢	①30.2 ② ③	口縁部は厚く、口唇部を 直立させる。内面には7 条を単位とする筋目。	内・外-ヨコナデ	
第147図10-5	10号溝	土師器 壺	①15.0 ②5.0 ③3.2	体部から口縁部にかけて 直線的で、底部は上げ底 で糸切り。	内・外-水引き	
第147図10-6	10号溝	青磁 高台付碗	① ② ③	器高の高い碗で、内面に シャープな文様を描く。	釉調-オリーブ色	混入土器

出土土器観察表

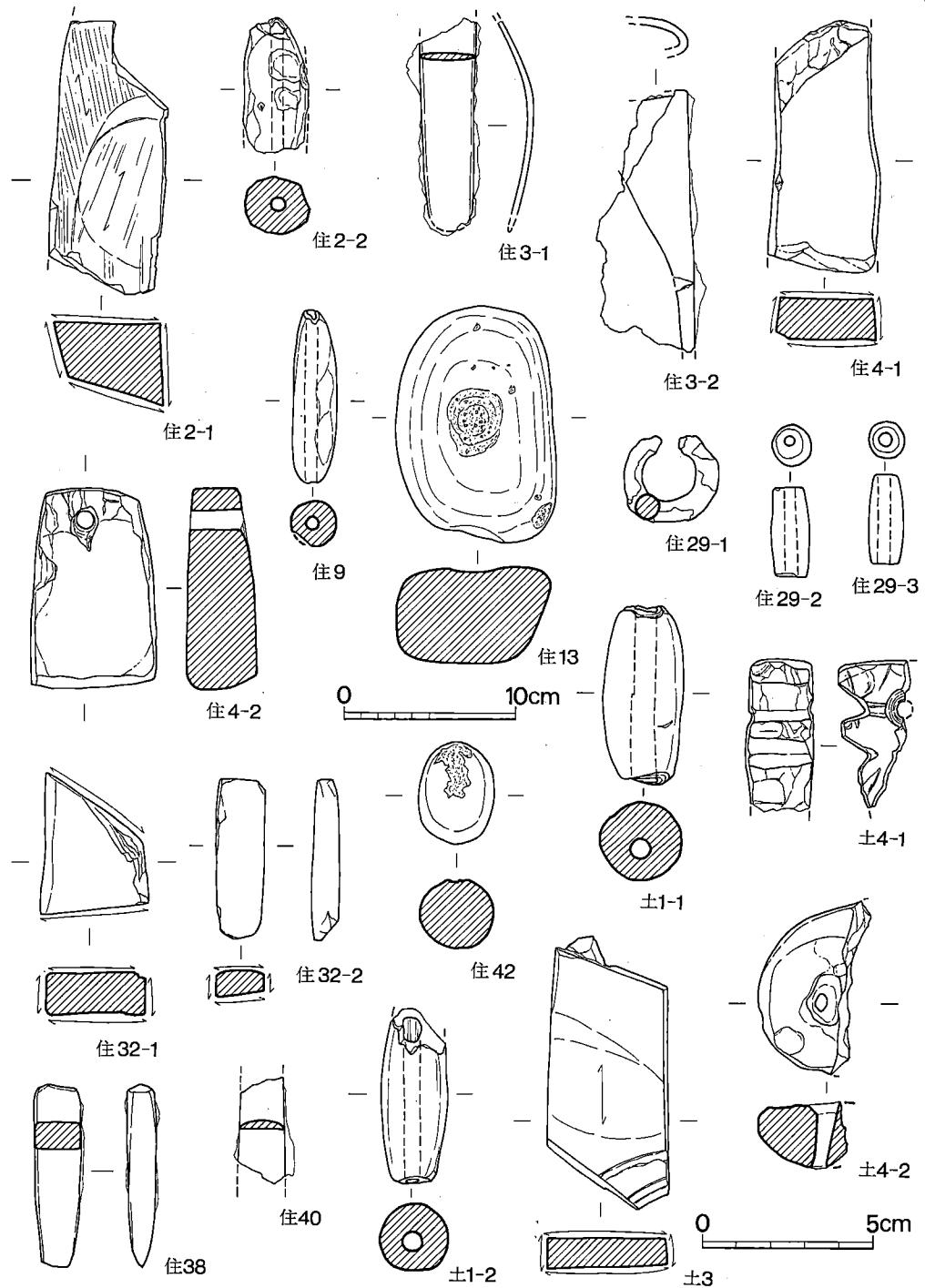
①口径 ②底径 ③器高(cm)

掲図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第149図11-1	西台地 11号溝	土師器 特小皿	①7.8 ②5.8 ③1.8	底部は若干上げ底、糸切り痕。	内・外一ナデ	
第149図11-2	11号溝	土師器 坏	①12.0 ②8.0 ③2.9	口縁部から体部は直線的につくる。上げ底で、糸切り痕が残る。	内・外一ナデ	
第149図11-3	11号溝	須恵器 环身	①11.0 ② ③	器壁がやや厚い。	外一手持ちヘラ削り とヨコナデ 内一ヨコナデ	混入土器
第149図11-4	11号溝	須恵器 擂鉢	① ②9.0 ③		外一底部は手持ちの ヘラ削り 内一ナデ	混入土器
第149図11-5	11号溝	土師質 鼎	① ② ③	胴部に整美な凸帯貼付。 6の脚を胴下半部の鋒に挟み込んだタイプ。	外一ハケと削りの上 からナデ 内一ヨコナデ	外面凸帯下部 に煤が付着
第149図11-6	11号溝	土師質 鼎脚	① ② ③	取り付け部から内湾する タイプで胴部に挟み込む 形。		上部内側に煤 が付着
第149図11-7	11号溝	瓦質土器 土鍋	①33.0 ② ③	口唇部を肥厚。	外一ナデ 内一ハケ	
第149図11-8	11号溝	瓦質土器 捏鉢	①31.0 ② ③	口唇部を肥厚。筋目を刻む。	外一ナデと指圧痕 内一ハケ	
第149図11-9	11号溝	瓦質土器 捏鉢	①30.0 ② ③	口唇部を肥厚。 5本単位の筋目を刻む。	外一ハケとナデ 内一ハケ	
第149図11-10	11号溝	瓦質土器 湯釜	① ② ③	小破片。	外一 内一	
第149図11-11	11号溝	瓦質土器 湯釜	① ② ③	頸部上半を欠損。2個の耳と肩部に不揃いの菊花文のスタンプ。	内・外一ナデか磨き	
第149図11-12	11号溝	瓦質土器 捏鉢	① ② ③	小破片。	外一ナデ 内一ハケ	
第150図11-13	11号溝	陶器 擂鉢	① ②13.0 ③	4本単位の筋目を刻む。	外一ナデ 内一ナデと筋目	
第150図11-14	11号溝	陶器 擂鉢	① ②16.6 ③	6本単位の筋目を刻む。	外一ナデ 内一ナデと筋目	
第150図11-15	11号溝	青磁 高台付碗	①16.0 ② ③	外面に連弁文を配し、内面にも文様を描く。	釉調一うぐいす色	龍泉窯 1期目の溝の 土器か?

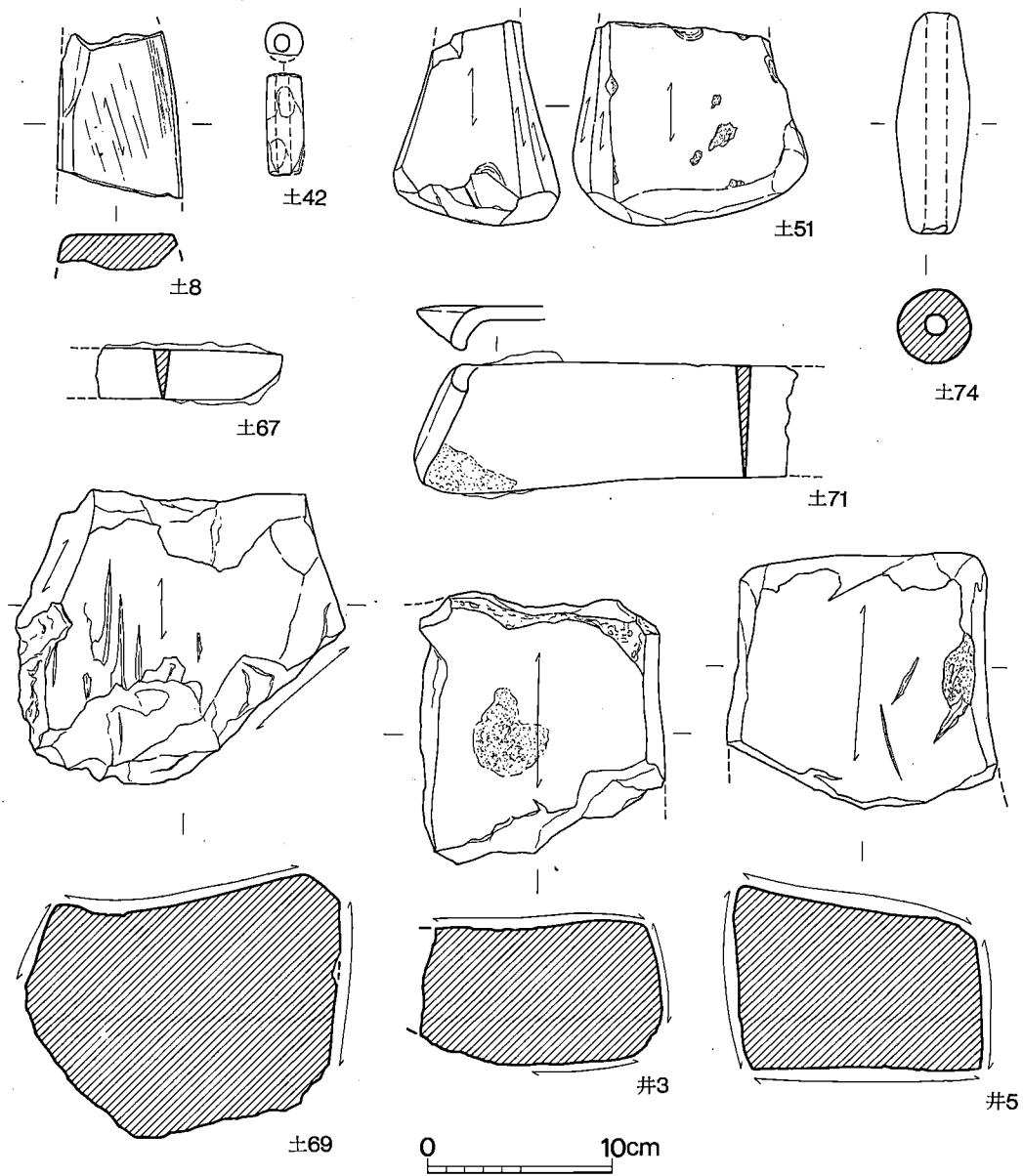
出土土器観察表

①口径 ②底径 ③器高(cm)

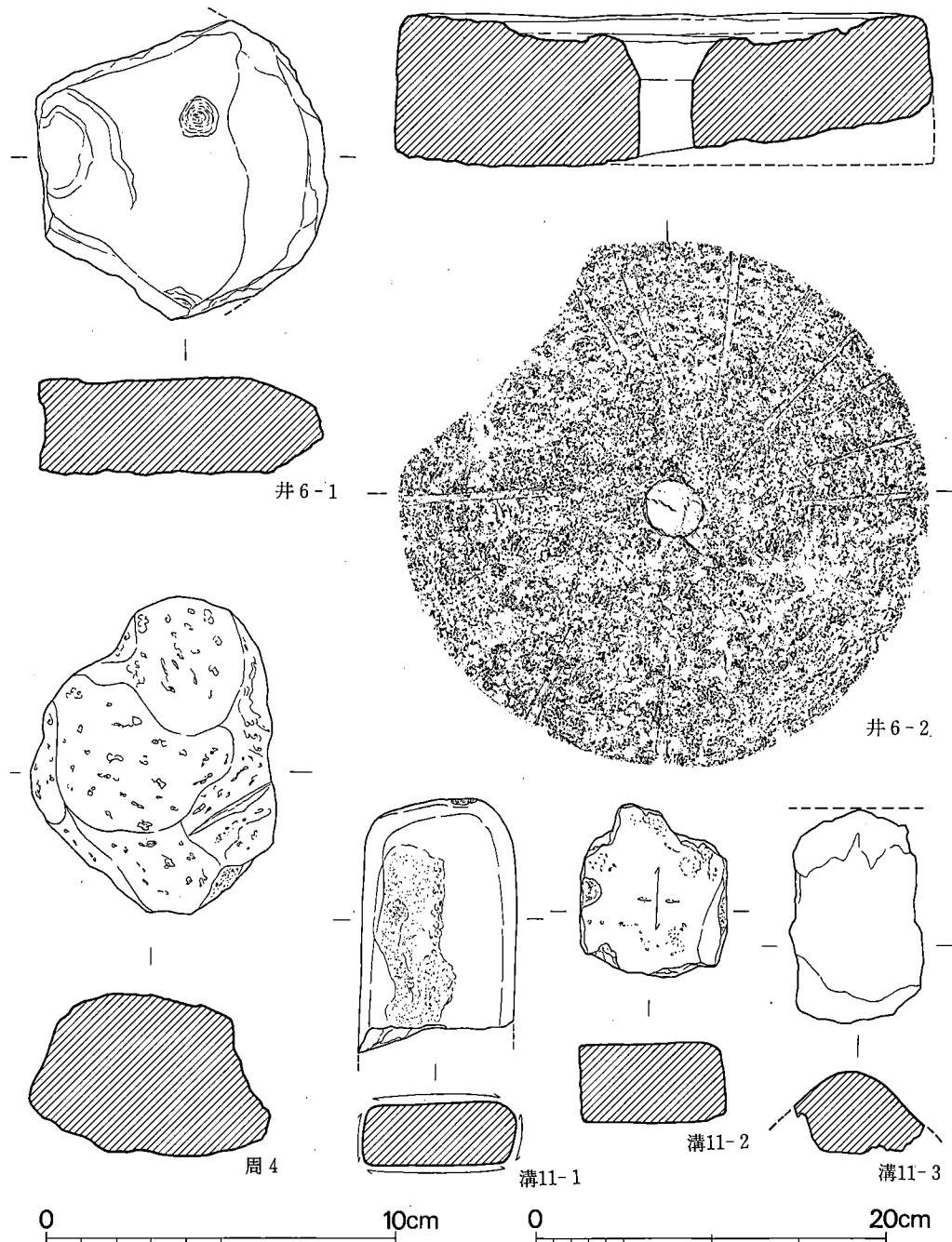
掲図土器番号	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	器面調整	備考
第150図11-16	西台地 11号溝	青磁 高台付碗	① ② ③	口縁部の小破片。連弁文を描く。	釉調—うぐいす色	龍泉窯 1期目の溝の土器か?
第150図11-17	11号溝	青磁 高台付碗	① ② ③	見込部に太い界線が巡り内部に草花文を描く。器壁が厚く高台は低い。	釉調—松葉色	2期目の溝に伴う
第150図11-18	11号溝	白磁 高台付碗	① ②3.8 ③	低い高台で外面底部と畳付部は露胎。 重ね焼きの目跡3箇所。	釉調—白色	2期目の溝に伴う
第150図11-19	11号溝	白磁 高台付碗	① ②5.9 ③	外面底部と畳付部は露胎	釉調—灰白色	1期目の溝に共伴
第150図11-20	11号溝	白磁 高台付碗	① ②7.9 ③	高くスマートな高台。高台周囲は削られ露胎。	釉調—灰色味のオリーブ色	1期目の溝に共伴
第150図11-21	11号溝	白磁 高台付碗	① ②7.3 ③	低い高台で底部と畳付部は削られ露胎。	釉調—白灰色	1期目の溝に共伴
第150図11-22	11号溝	白磁 高台付碗	① ②3.9 ③	低い高台を付し、その周囲は露胎。	釉調—白黄色	2期目の溝に共伴
第150図11-23	11号溝	染付 高台付碗	① ② ③	口縁内外面に2本の界線が巡り、外面に菊花文を描く。	釉調—水色味の白色	24と同一個体 2期目の溝に共伴
第150図11-24	11号溝	染付 高台付碗	① ②4.7 ③	見込部に判読不明のスタンプ。外面は菊花文と唐草文。高台は2本の界線	釉調—水色味の白色	23と同一個体 2期目の溝に共伴
第150図11-25	11号溝	陶器 高台付碗	① ②4.7 ③	高台部の内側は露胎。高台の外側は釉溜りがある見込には界線。	釉調—白黄色	古唐津焼き 重ね焼きの目跡4箇所。
第150図11-26	11号溝	陶器 高台付碗	① ②5.6 ③	畳付部にも釉がかかる。 見込部には重ね焼きの目跡	釉調—ねずみ色	季朝期の所産



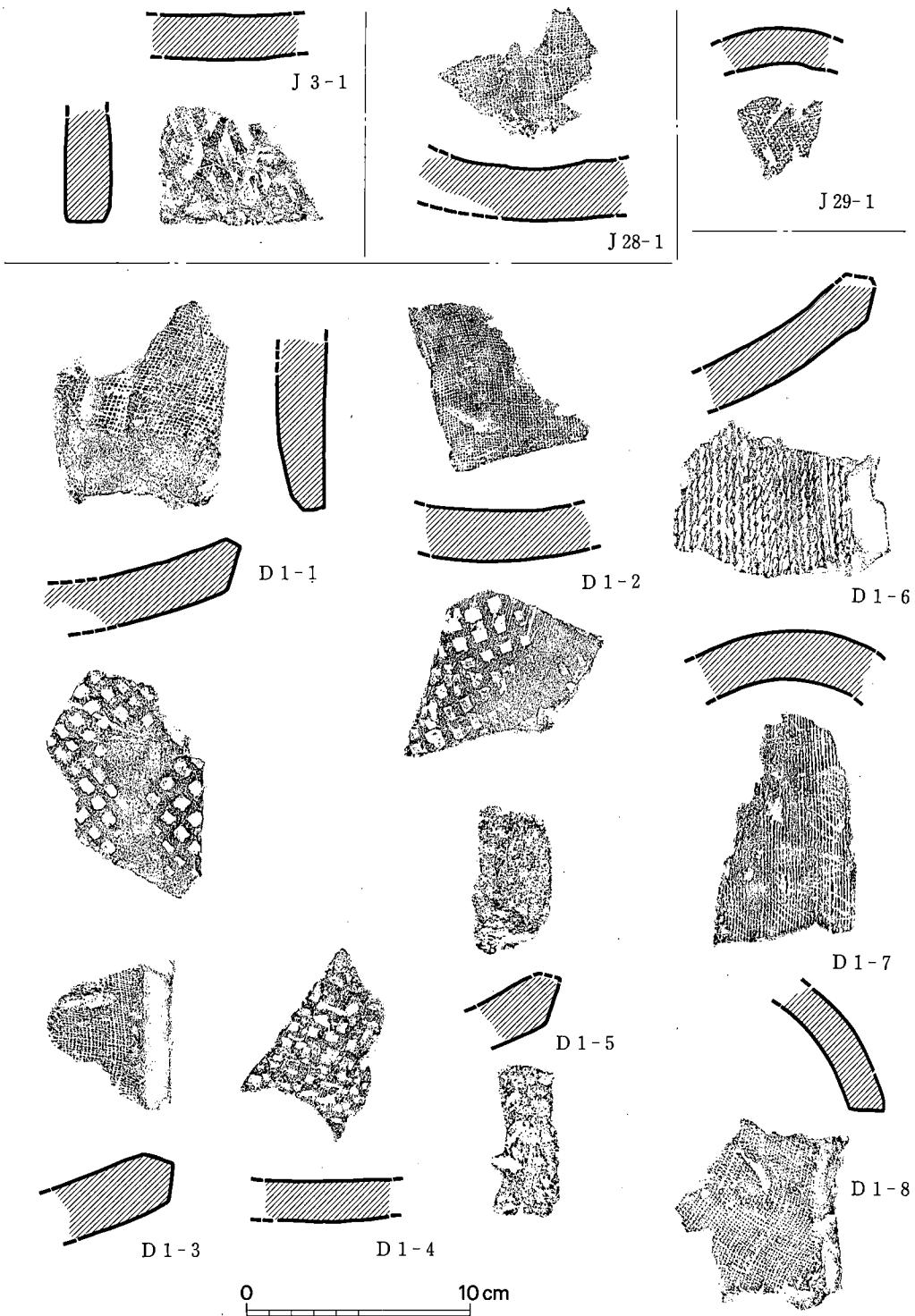
第152図 西台地出土鉄器・石器・土製品実測図その1 (1/2・1/4)



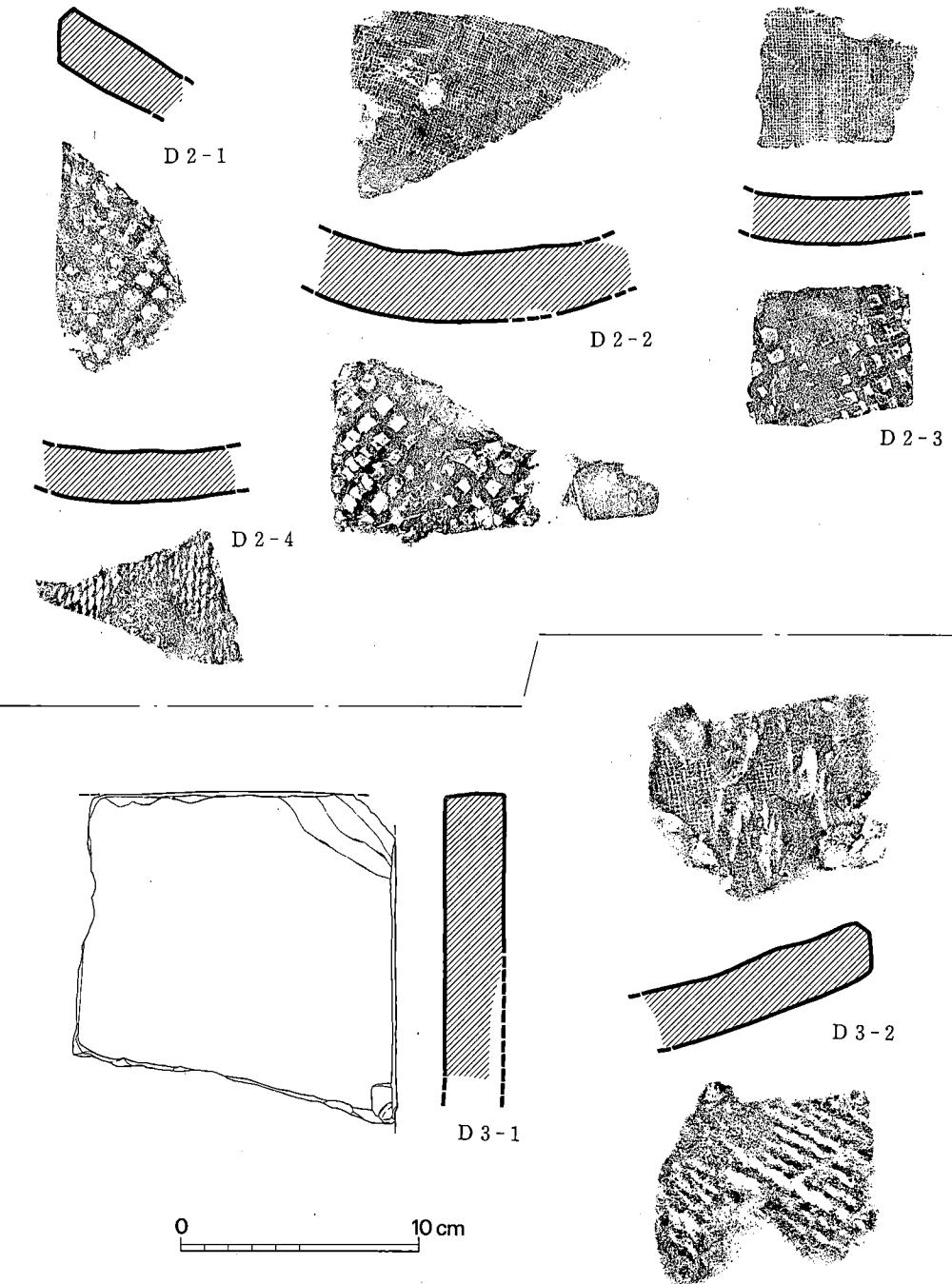
第153図 西台地出土鉄器・石器・土製品実測図その2 (1/2・1/4)



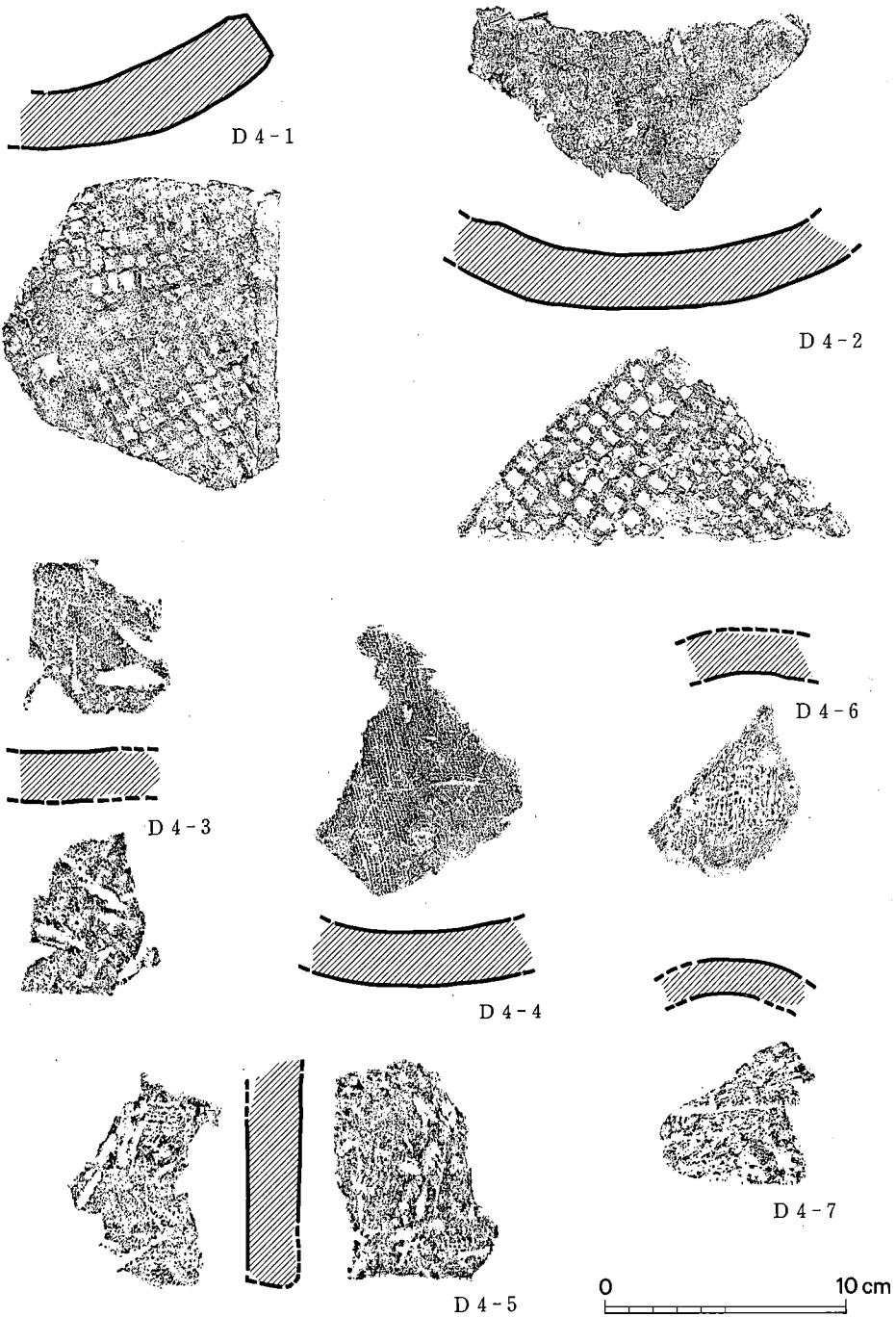
第154図 西台地出土鉄器・石器・土製品実測図その3 (1/2・1/4)



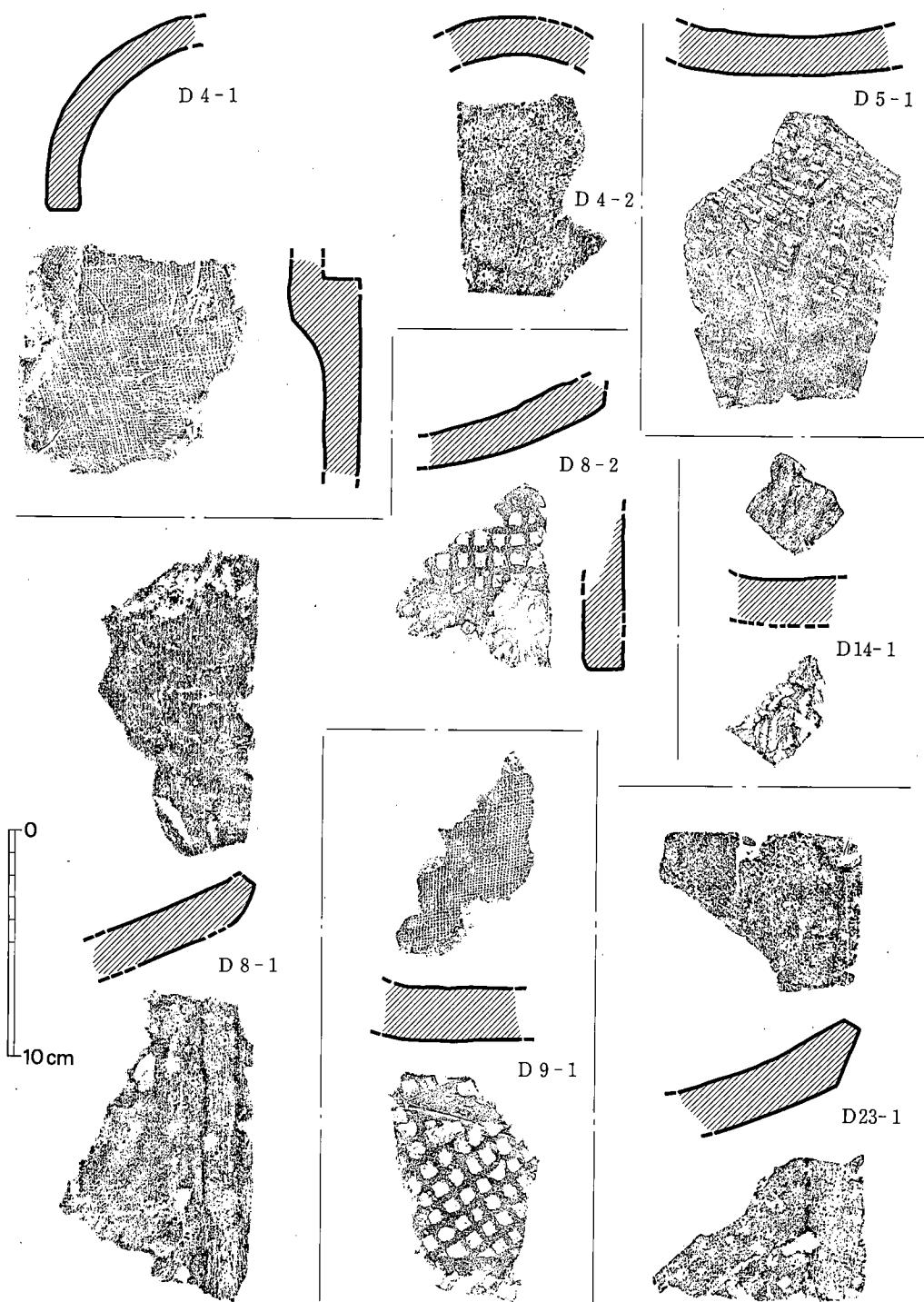
第155図 西台地出土瓦実測図その1 (1/3)



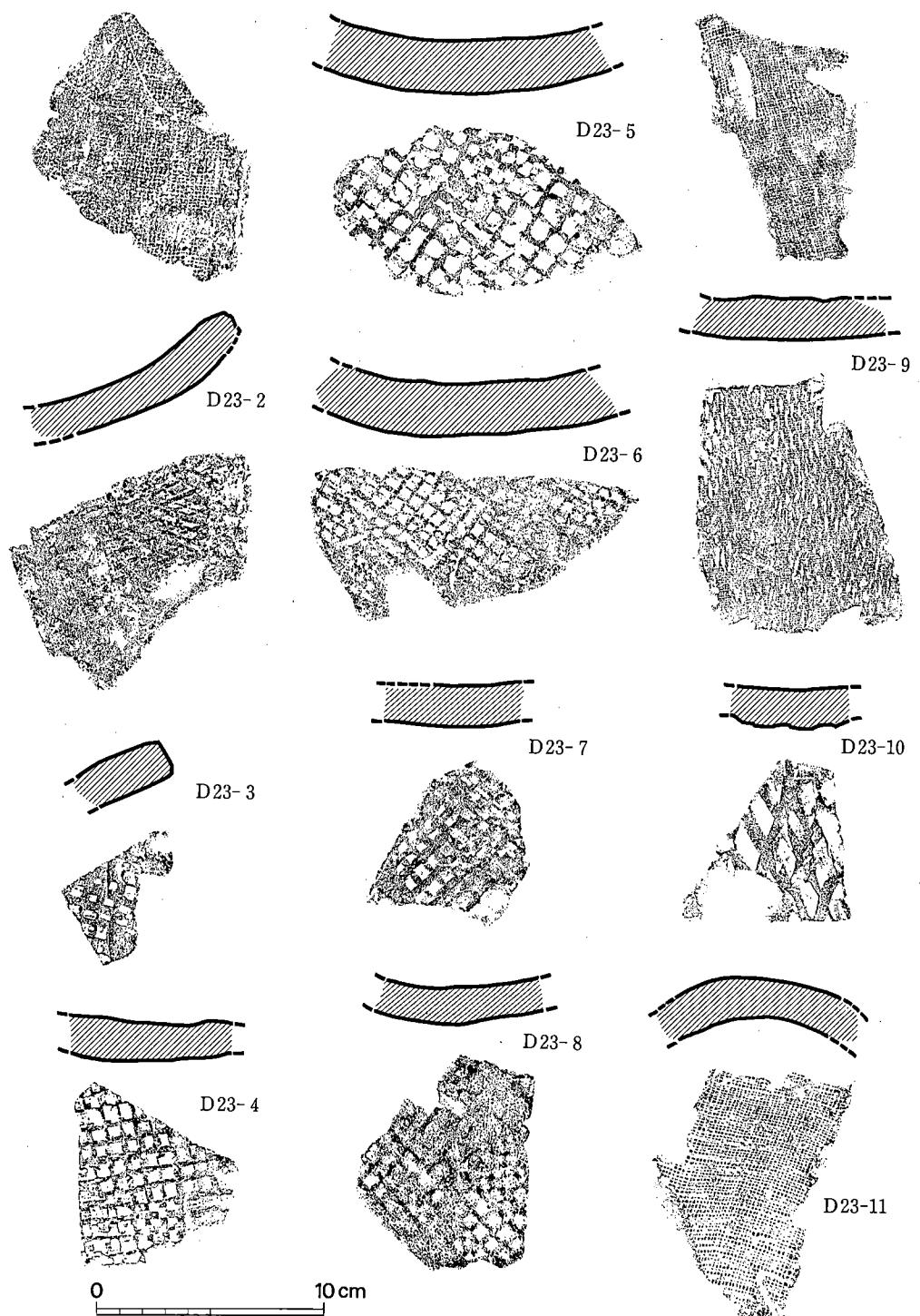
第156図 西台地出土瓦実測図その2 (1/3)



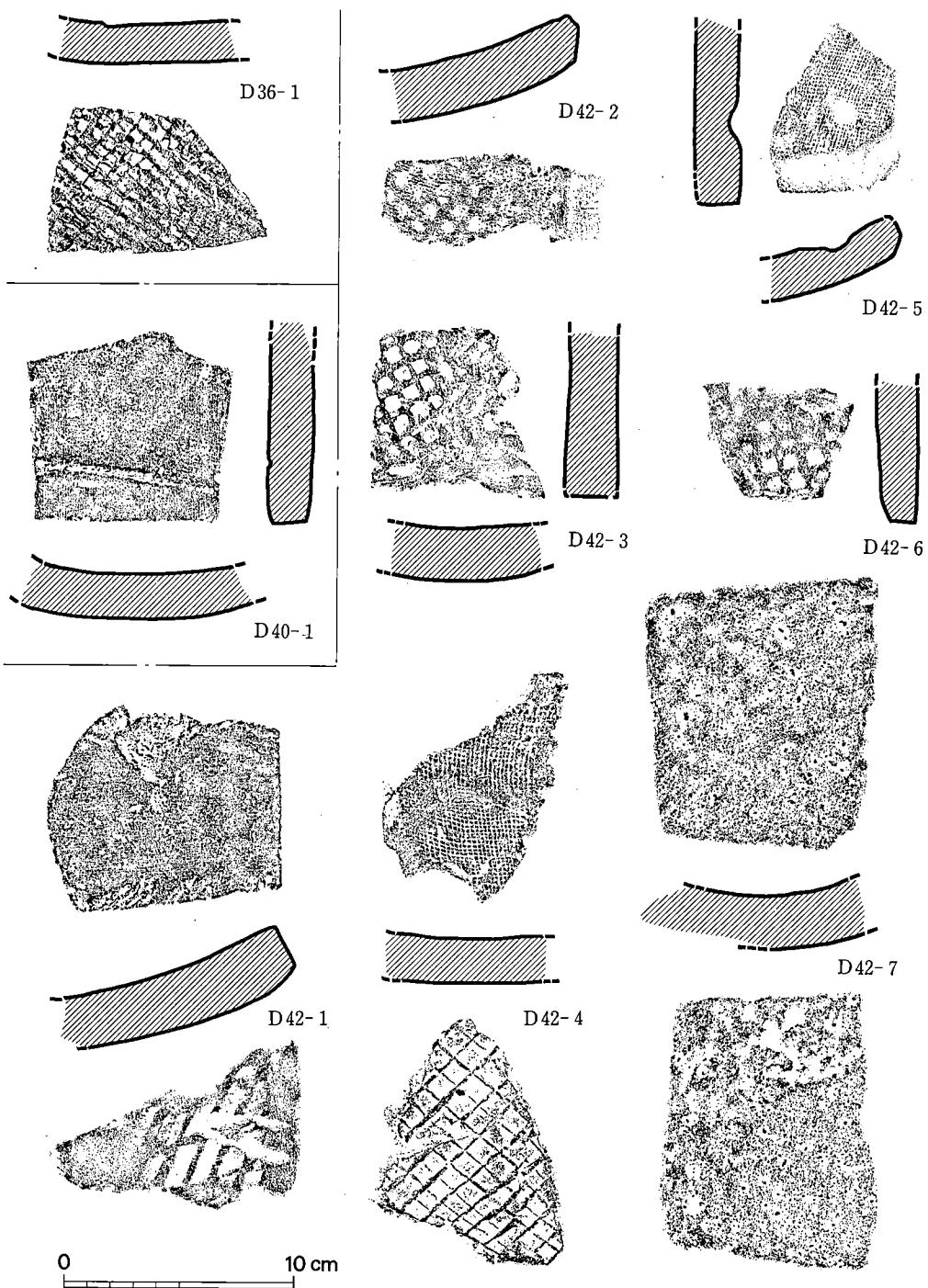
第157図 西台地出土瓦実測図その3 (1/3)



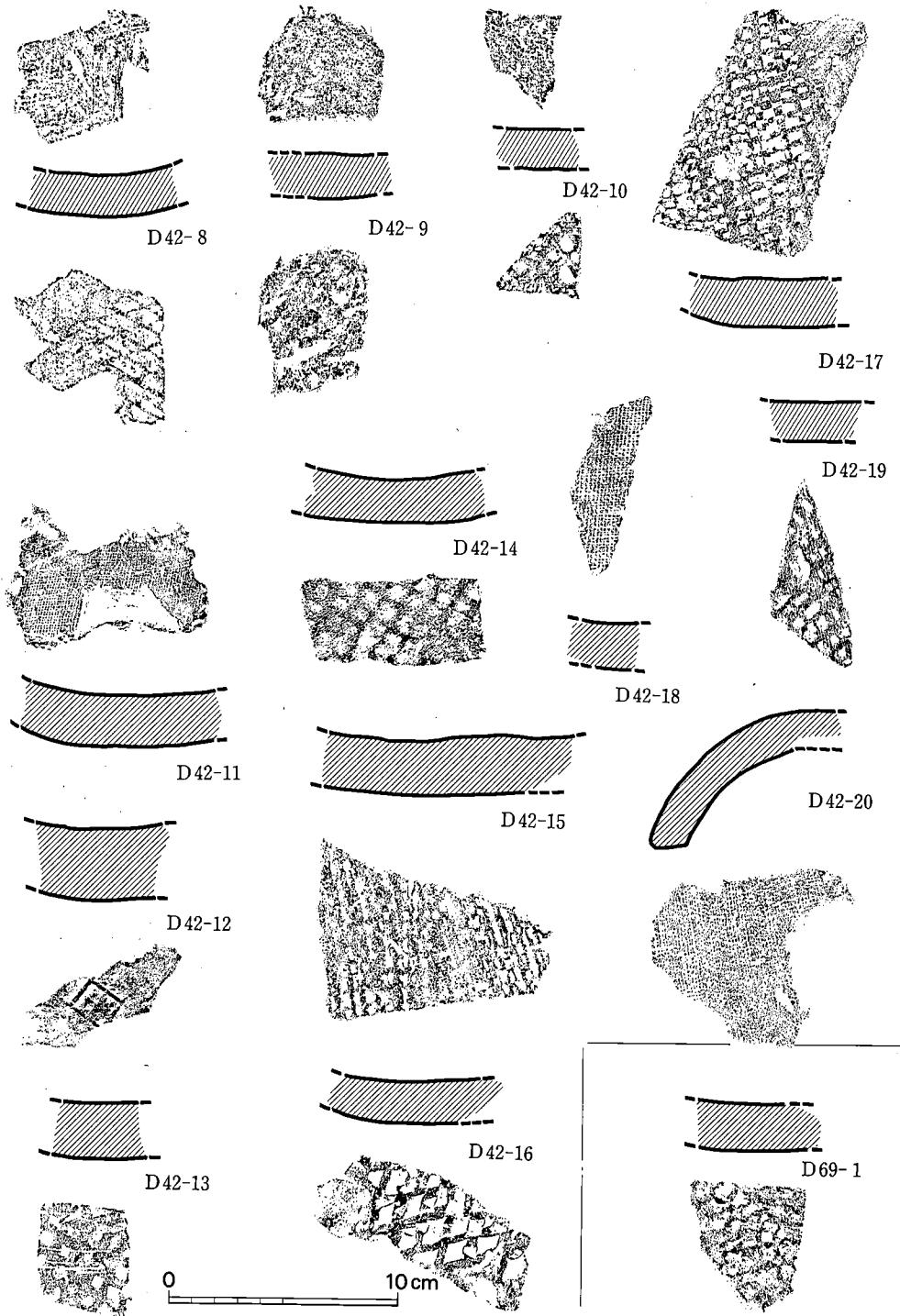
第158図 西台地出土瓦実測図その4 (1/3)



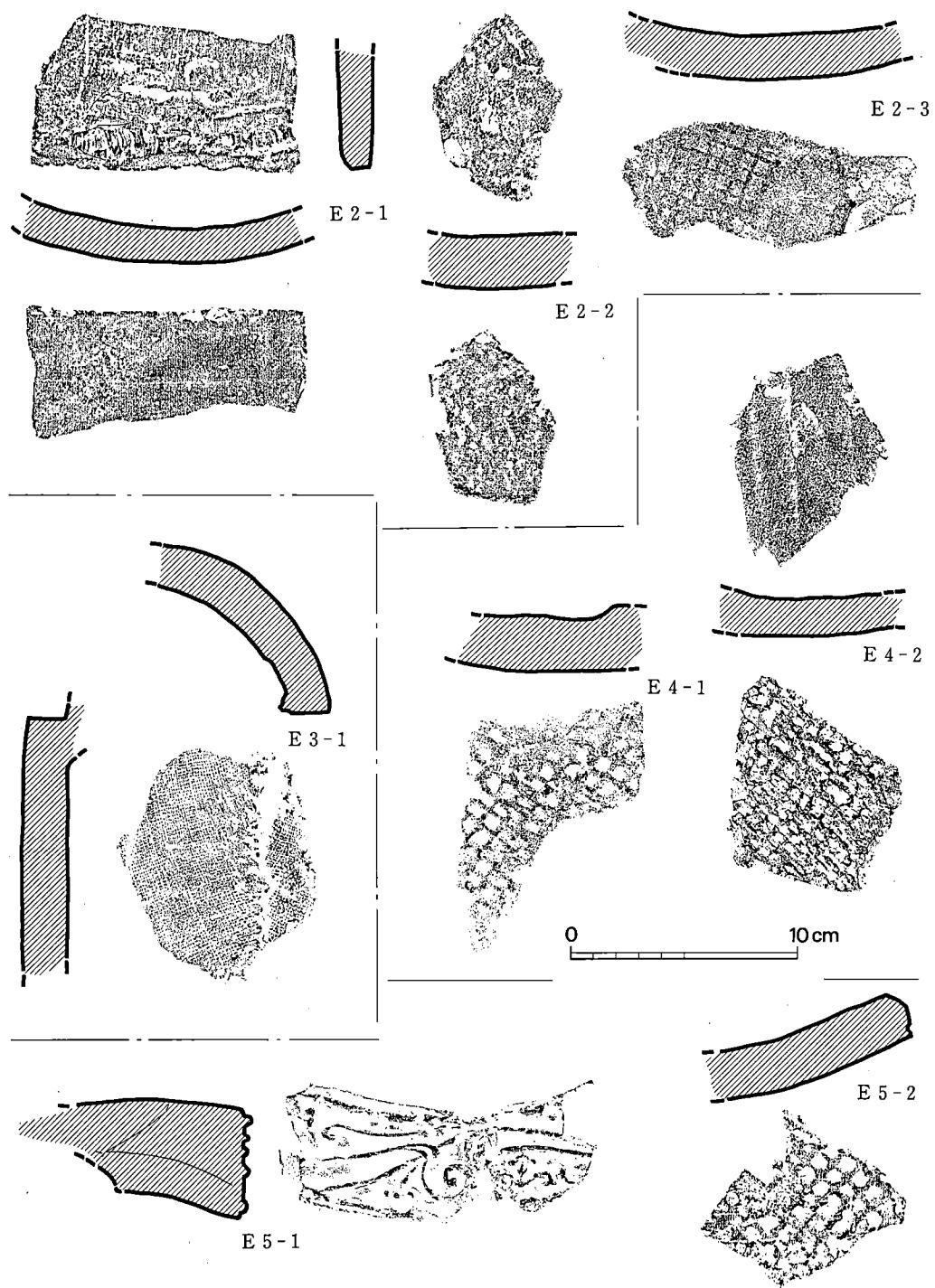
第159図 西台地出土瓦実測図その5 (1/3)



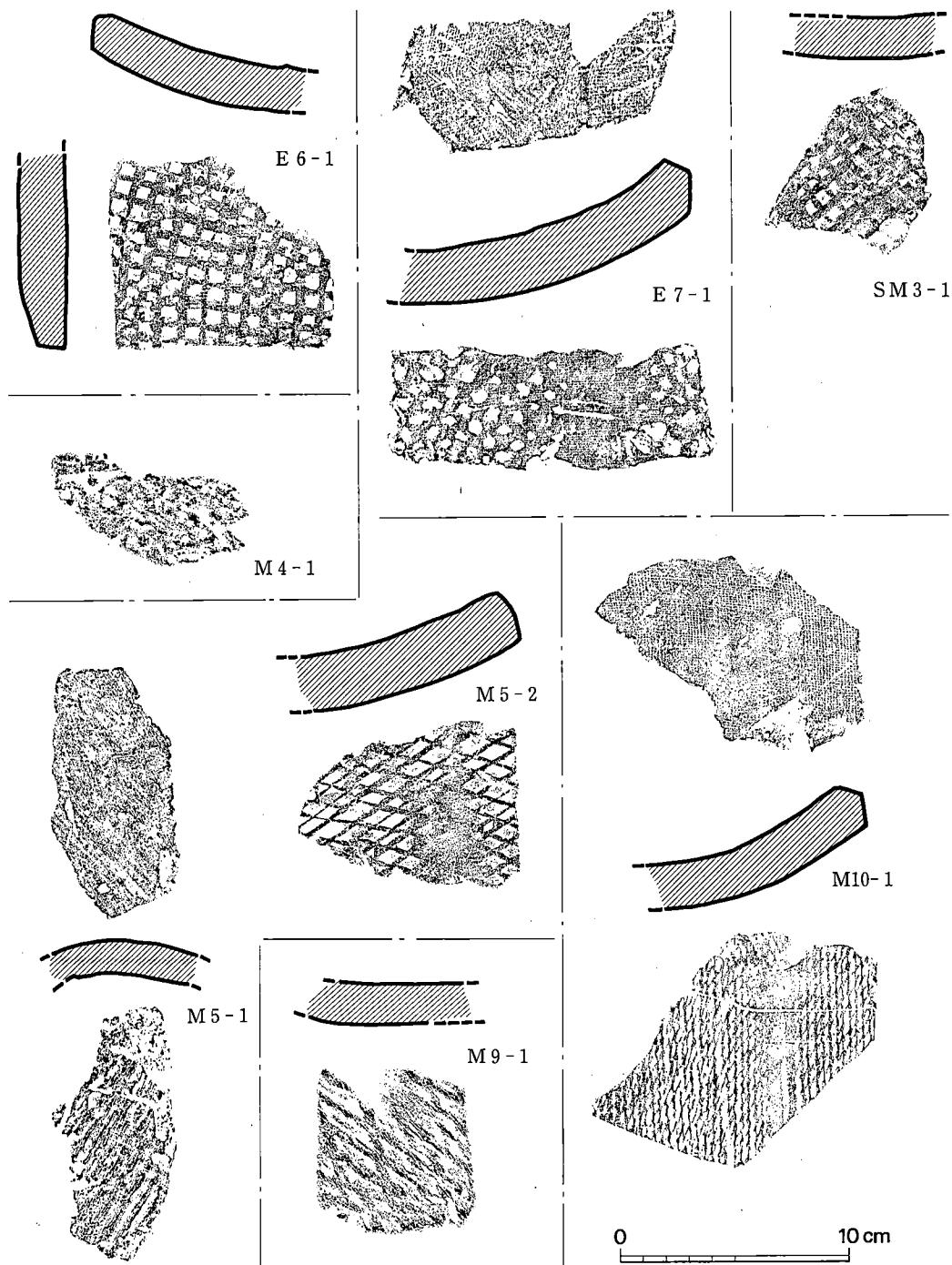
第160図 西台地出土瓦実測図その6 (1/3)



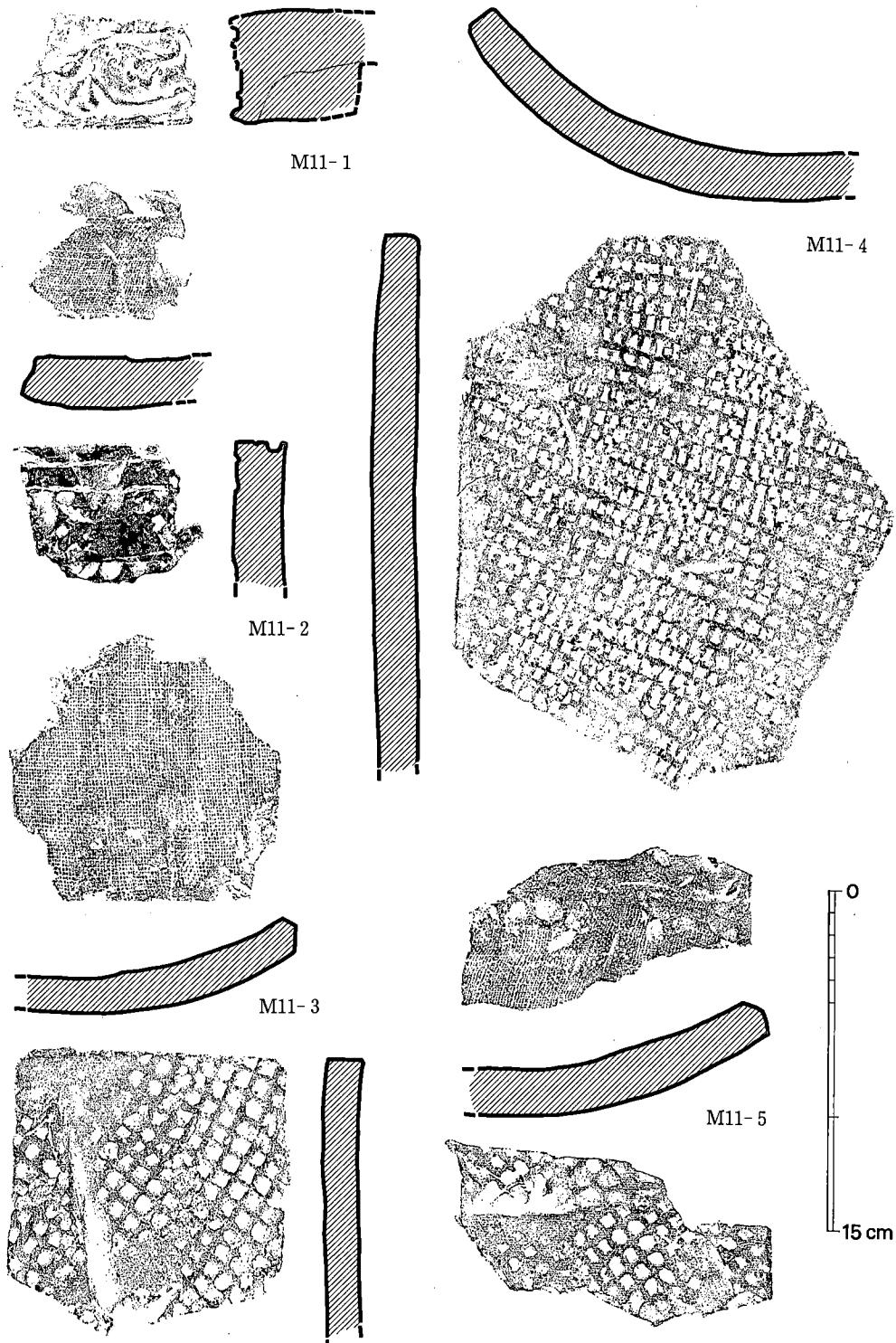
第161図 西台地出土瓦実測図その7 (1/3)



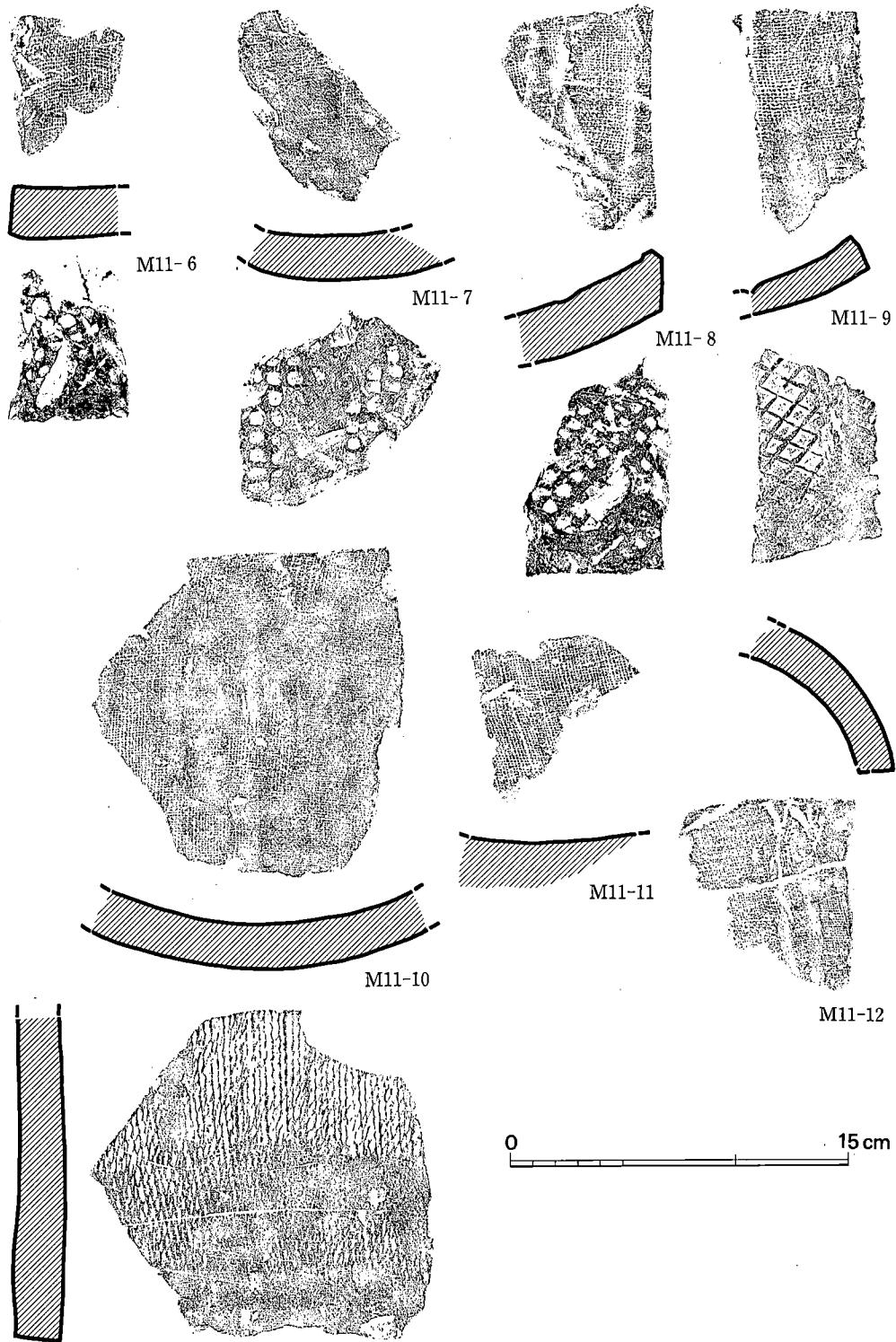
第162図 西台地出土瓦実測図その8 (1/3)



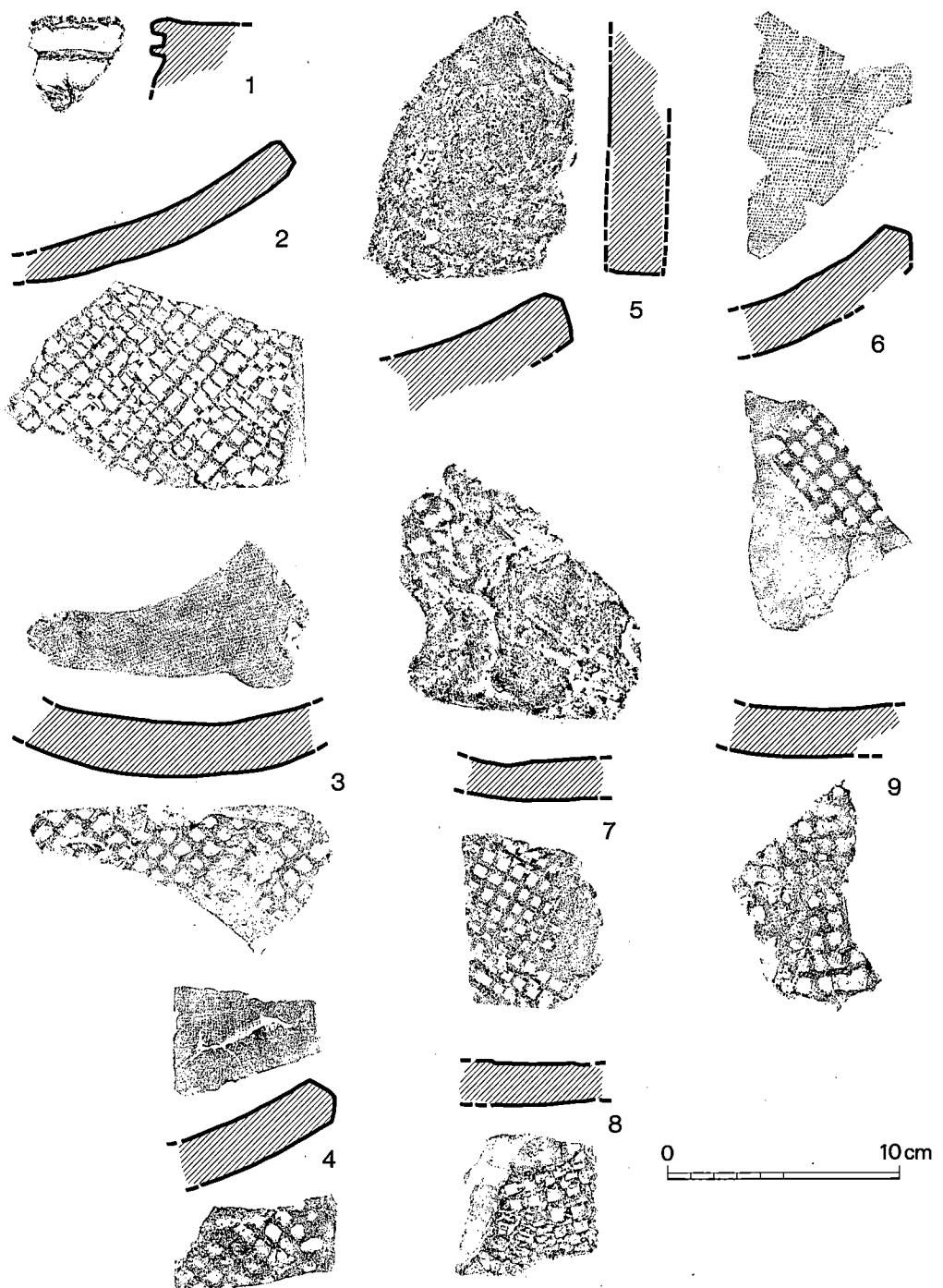
第163図 西台地出土瓦実測図その9 (1/3)



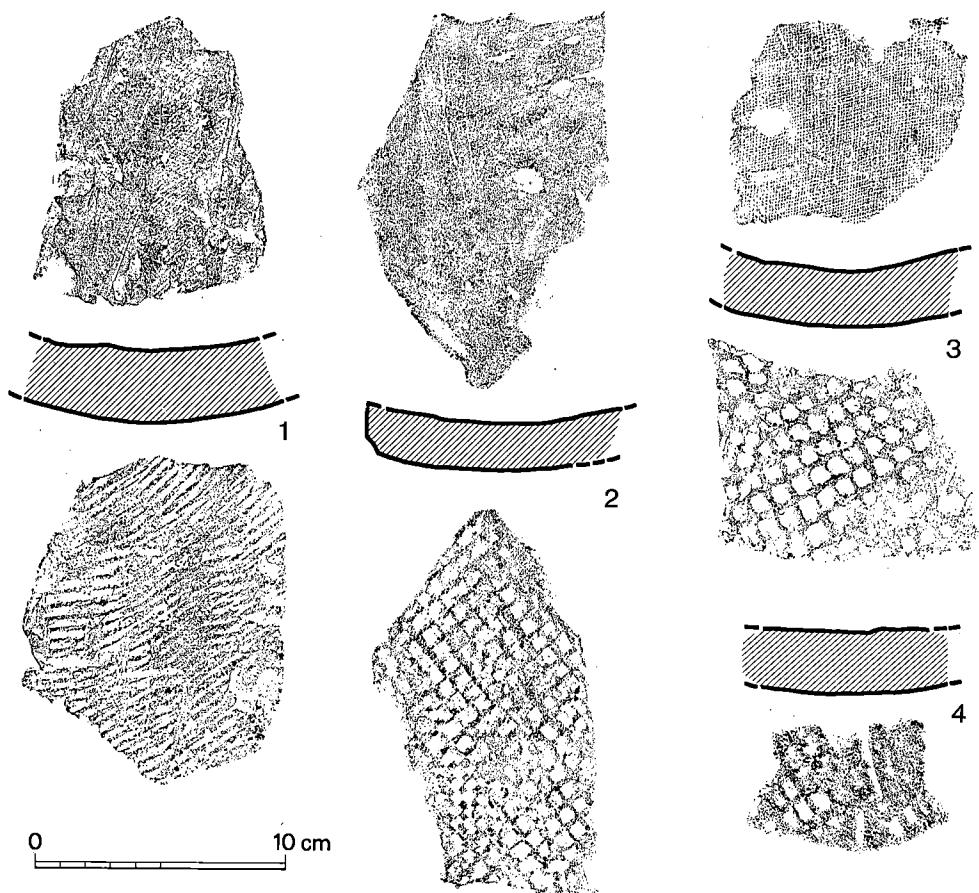
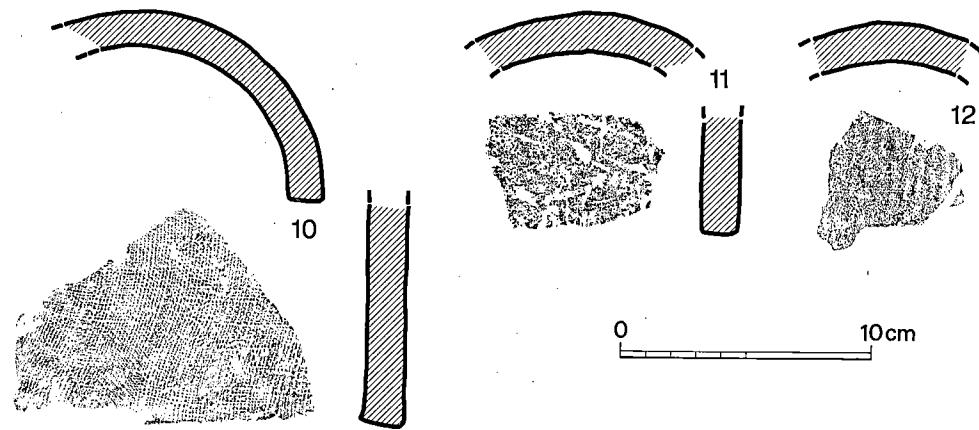
第164図 西台地出土瓦実測図その10 (1/3)



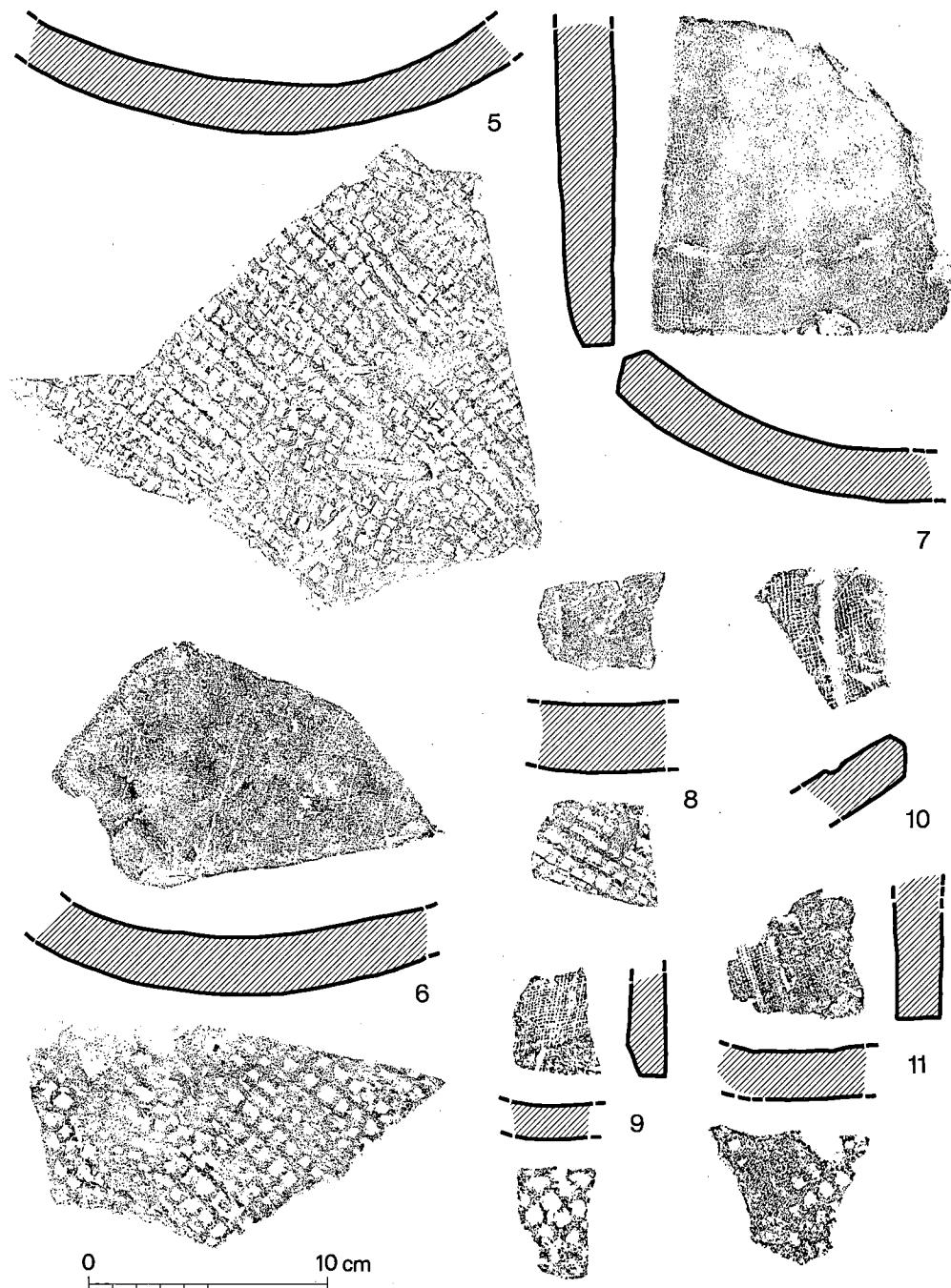
第165図 西台地出土瓦実測図その11 (1/3)



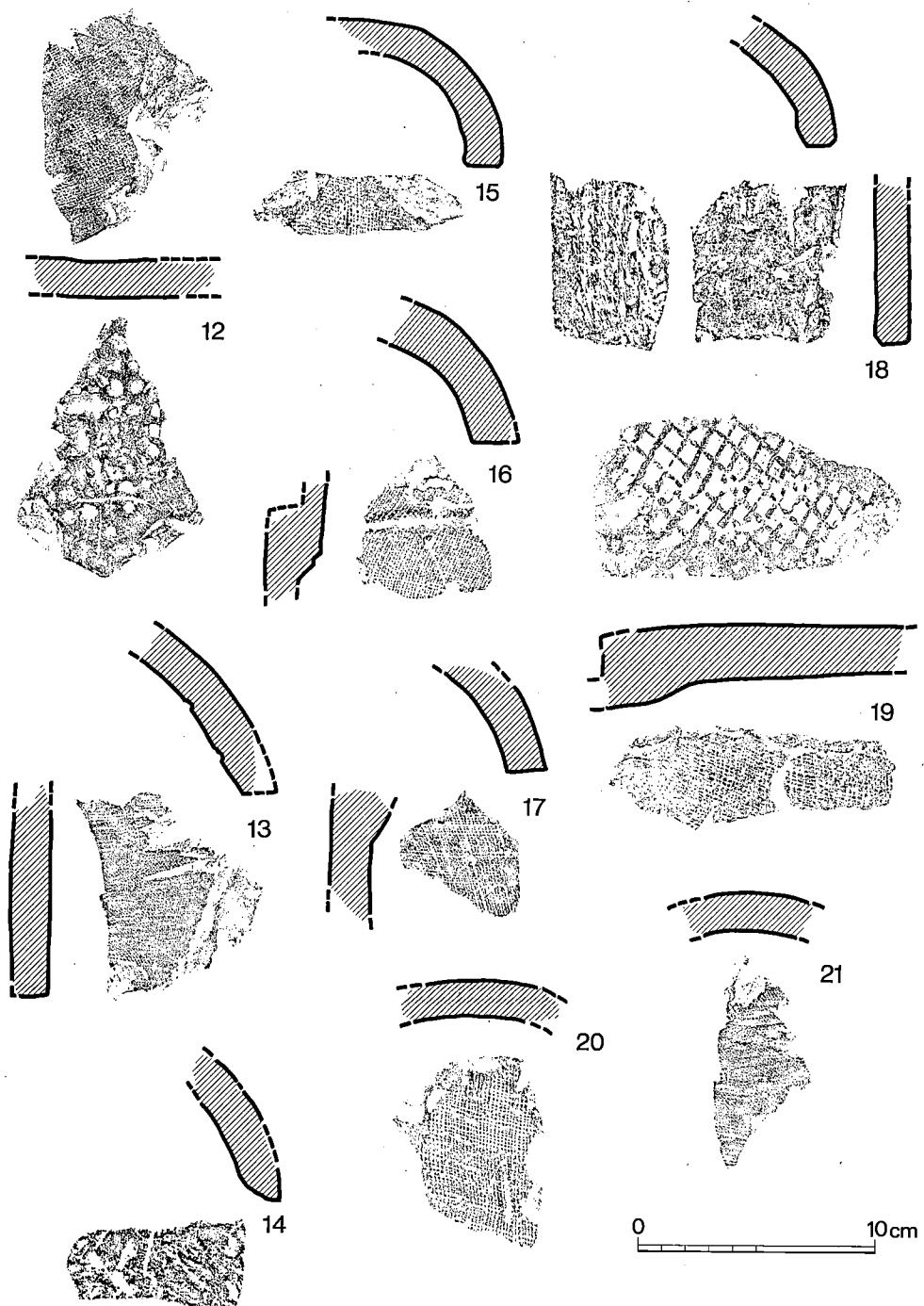
第166図 西台地出土瓦実測図その12 (1/3)



第167図 西台地出土瓦実測図その13 (1/3)



第168図 西台地出土瓦実測図その14 (1/3)



第169図 西台地出土瓦実測図その15 (1/3)

附 編 大溝出土の木製品補追

昭和61年度に報告した井上薬師堂遺跡の大溝（註1）は、今回報告した井上薬師堂遺跡の東台地と、昭和62年度に報告された薬師堂東遺跡（註2）との間に開析された小規模な谷部にある。北北東から南南西に走るこの谷は、調査時までは水田で、東西の村落遺跡が営まれた台地とは1～2mの比高差があった。土地の人々は「長者堀」と呼んでいたが、小字名は「蓮輪」で、水はけの悪い土地であったようである。

さて、かつて井上薬師堂遺跡の大溝の報告をした際に、報告し忘れた木製品があり、遅ればせながらここに報告する。それは、鼠返しと鋤の2点である。なお、註1文献第6図の農耕具（再掲第171図のA）は、現在、所在場所不明のため報告することができなかったことを深くお詫びする。

以下に、井上薬師堂遺跡の大溝と出土品の概略について、先の報告書（註1）を振り返りながら説明した上で、木製品2点の説明を行うこととする。

（1）大溝の概要

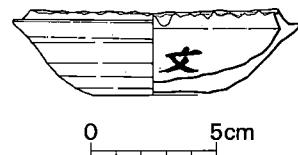
この大溝は調査の結果、以下の数値的なデータを獲得している。

- ①幅は、北側で16m、中央部分で18.4m、南側で21m。
- ②溝底幅は、北側で7m、中央部分で6m、南側で5.2m。
- ③深さは、最深部で2m程。

溝底は北から南に向かって低くなっている、水は南流していたことがわかる。出土品には、豊富な木製品のほかに、弥生時代～奈良時代の多量の土器（墨書き・ヘラ書き土器、硯転用須恵器を含む。）、瓦類がある。

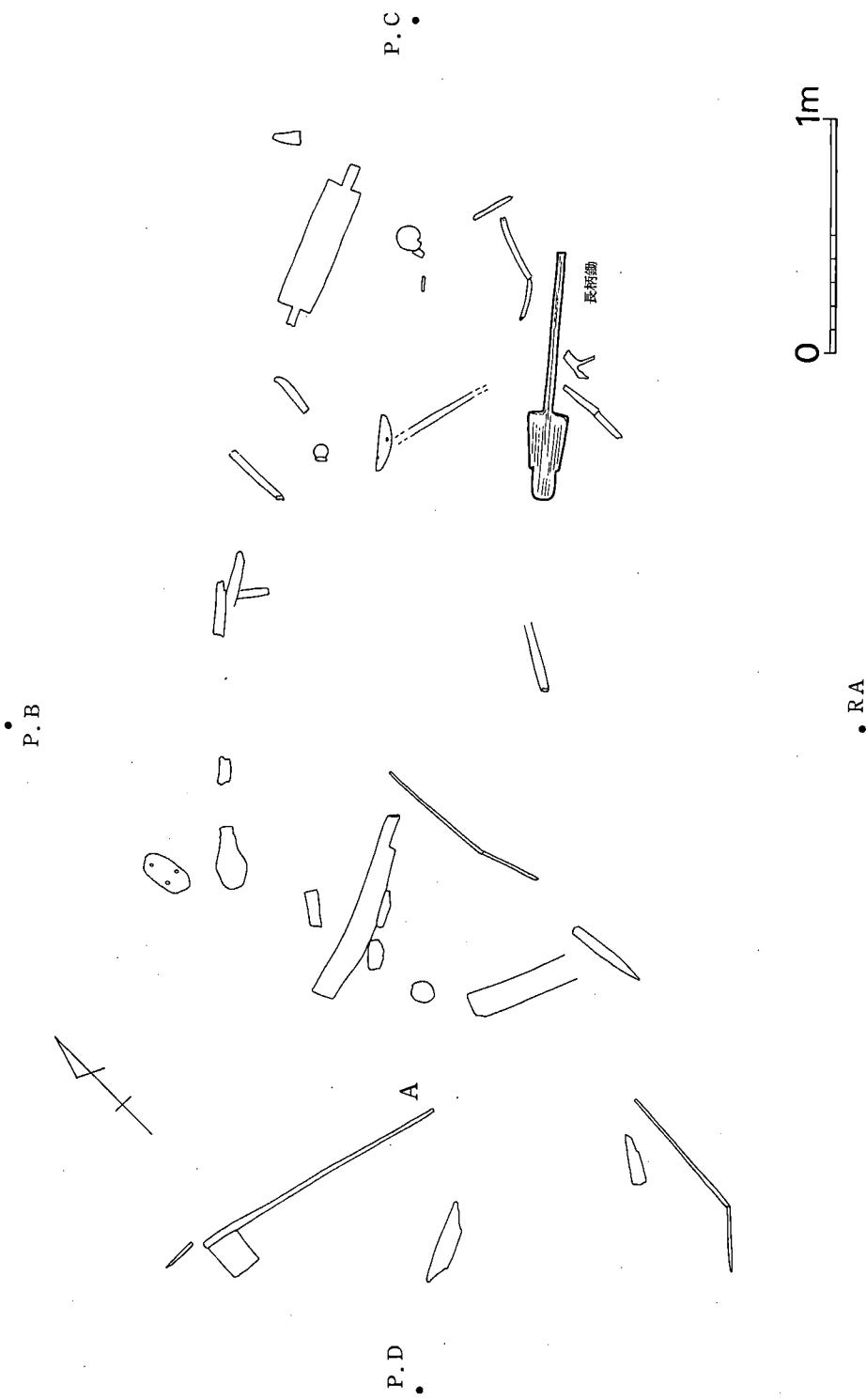
特に注目されるのは、右の須恵器である。降っても、7世紀初頭頃の壊身の口唇部をすべて打ち欠き、内面に「文」という墨書きがある。この文字の他にも墨痕が認められるが、文字としては読めない。

この他にも、多量の墨書き土器とともに、木簡も出土しており、この谷部大溝を挟んだ東西の村落は、極めて重要な問題をはらんでいる。



第170図 大溝出土墨書き土器実測図（1/3）

第171図 大溝木製品集中地区実測図

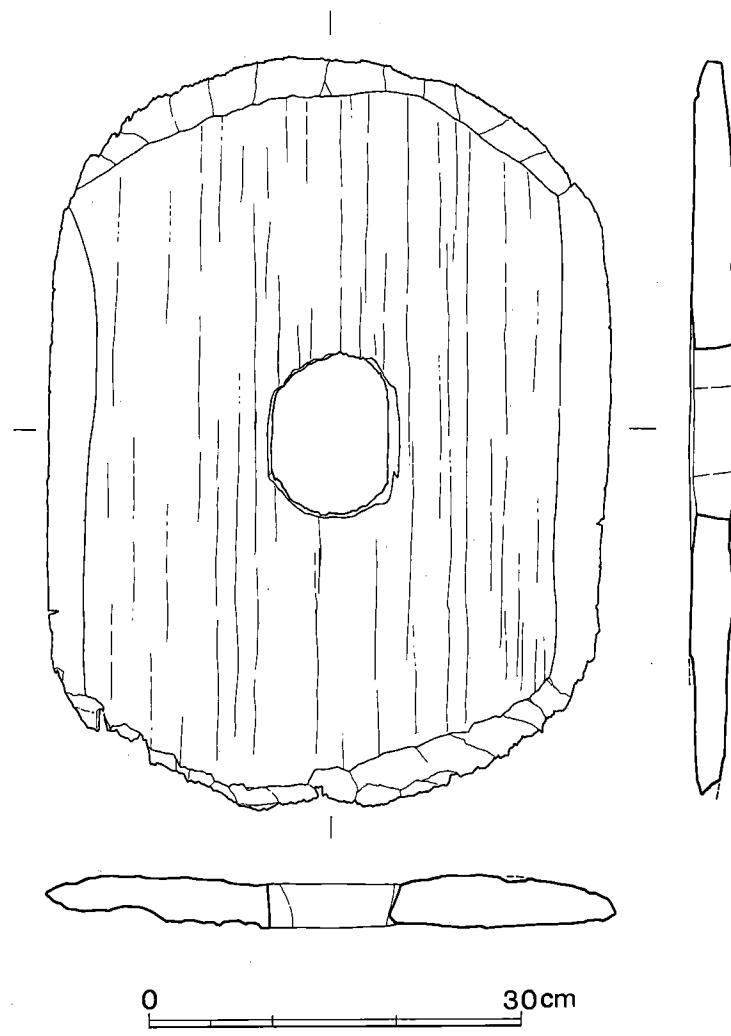


(2) 大溝出土の木製品

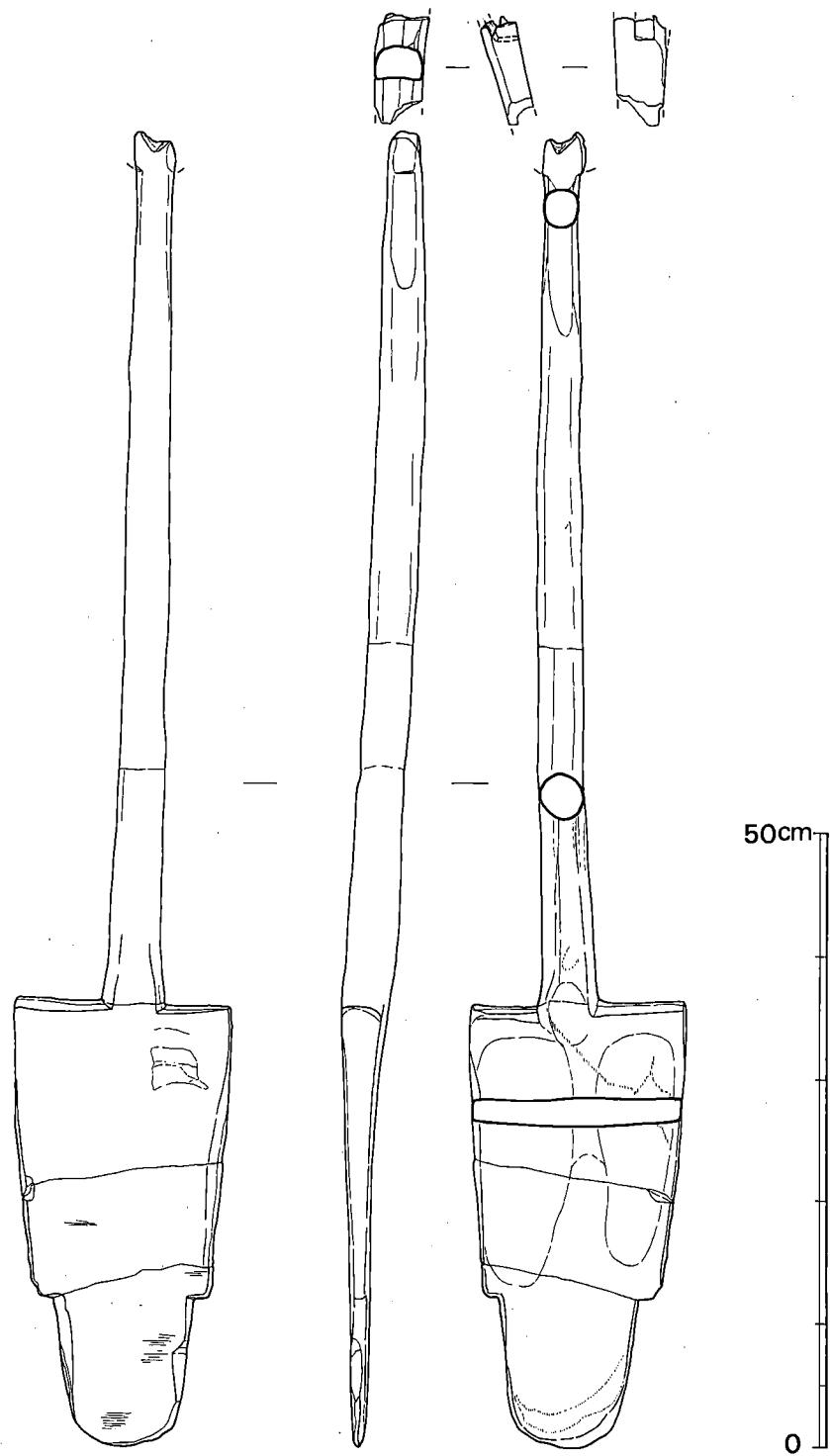
大溝で検出した木製品は255点を数え、そのうち、主要なもの46点が報告されている。ここでは、それらに追加して、鼠返し及び長柄鋤各1点づつを報告する。

鼠返し (図版83, 第172図)

片面の周縁は面取りされ、この面を下にした状態で検出した。長側面は直線に近く、短側面は弧を描き、橢円形に近い形である。中央に全形に相似した孔を穿つ。長さ59.6cm、幅45.3cm、厚さ4.3cmを測る。また、穿孔部は長さ13.8cm、幅10.5cmである。先述のように周縁は面取りさ



第172図 鼠返し実測図 (1/6)



第173図 長柄鋤実測図 (1/6)

れている。面取りは木目と平行方向に行う。短側面は腐食等により一部が欠損し、特に、図の下部の短側面に著しい。横断面図で明らかのように、図の裏面（面取りされない面）は腐食により、凹凸が随所に認められる。

長柄鋤（図版82、第173図）

第171図のように、U字形の鋤先をはずし、ほぼ水平に横たわった状態で検出した。把手の部分は完存しないが、ほぼ全形を知り得る良好な資料である。柄尻の割れ面から判断して、把手は三角形のものが作り出されていたようである。

鋤部と柄部の中軸は一致せず、柄部の中軸は鋤部の中軸から1cmほど偏っている。鋤部の面は、一方はほぼ平面であるが、他の面は中軸の両側に縦長の浅いくぼみが認められる。現存長106.7cm、柄部長70.7cm、鋤部長36cm、幅は柄側で17cmである。鋤部長36cmのうち、鋤先を取り付ける部分の長さは12.1cm、最大幅11.3cmである。柄の断面は円に近い楕円形を呈し、把手に近い方を細く作る。断面を示した部分の計測値は、柄の把手近くで長径32mm・短径27mm、鋤部近くで長径38mm・短径34mm、鋤部の厚さは中央部で25mm、側部は21mmである。鋤部の側面観は鋤先を取り付ける先端に向かって厚さを減じ、上部で30mm程、先端部付近では8mm程である。

この長柄鋤の把手と推定される木片を図示した。内面は平らで外面は丸味を帯びる。

（3）まとめ

今回報告した、鼠返しと長柄鋤は本遺跡で出土した木製品の中では白眉の資料である。先述のように、171図Aの農耕具を報告できないことが惜しまれる。

ここに報告した資料は、溝出土の資料の宿命的な運命により、所属時期を細かく特定できない。しかし、長柄鋤に取り付けられる鋤先は鉄製品であろうと推定されることから、この資料は古墳時代以降に属すると考える。

今後、本遺跡出土木製品の所在調査を再度行い、171図Aの農耕具等の貴重な資料を見つけ次第、速やかに再報告する予定である。

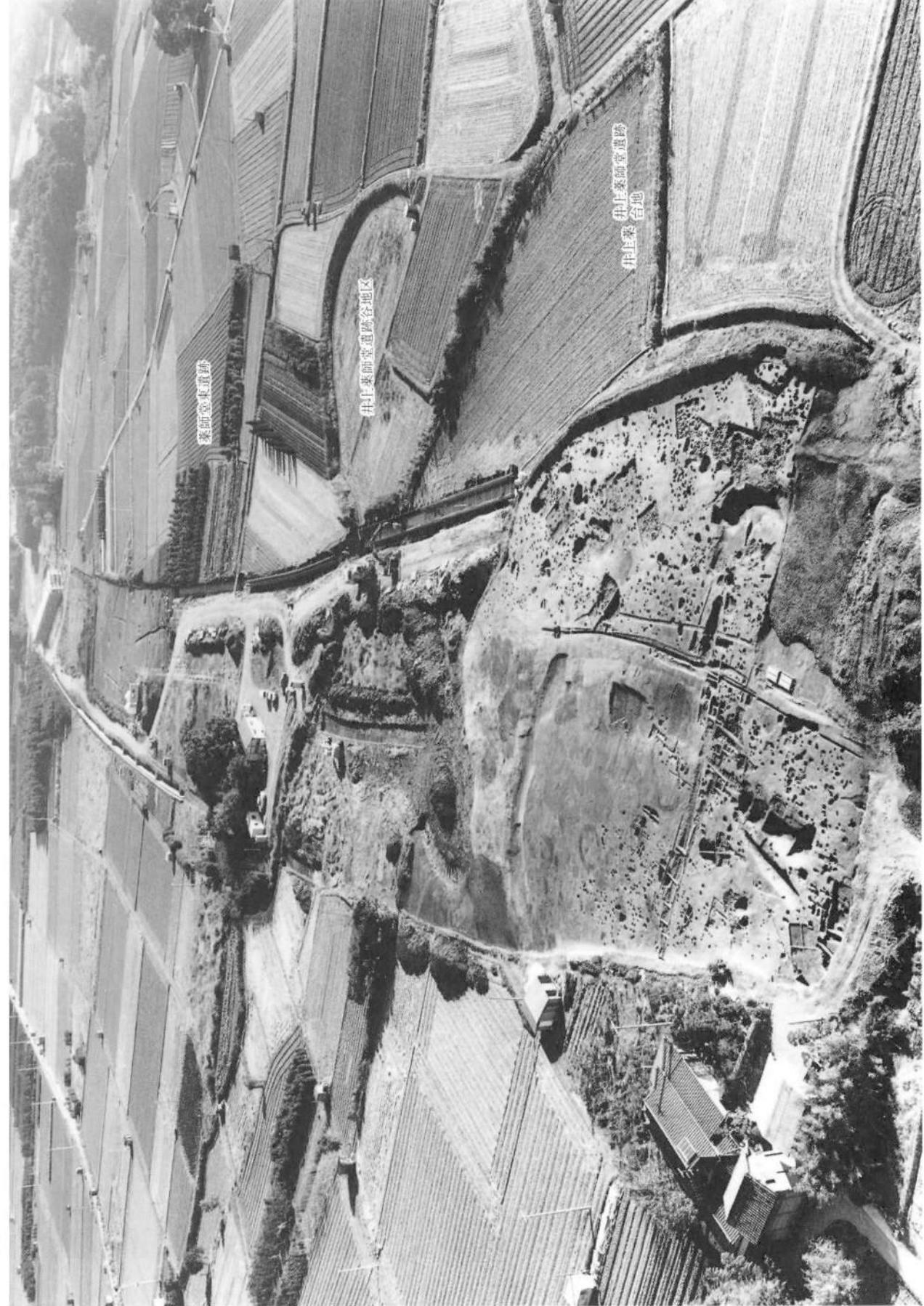
註1 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－10－』（小郡市所在井上薬師堂遺跡の調査）1987

註2 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告－13－』（小郡市所在薬師堂東遺跡の調査）1988

図 版



図版 1 井上葉室堂遺跡航空写真





圖版 3 井上薬師堂遺跡俯瞰

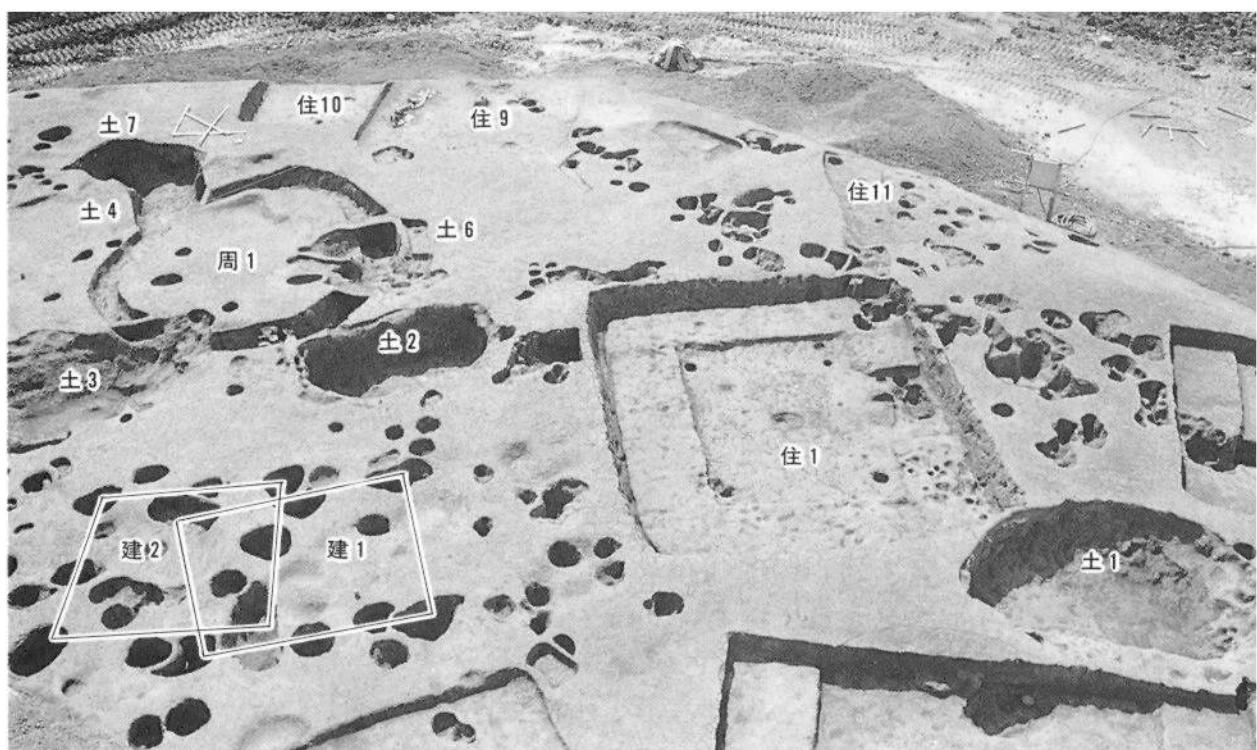


1

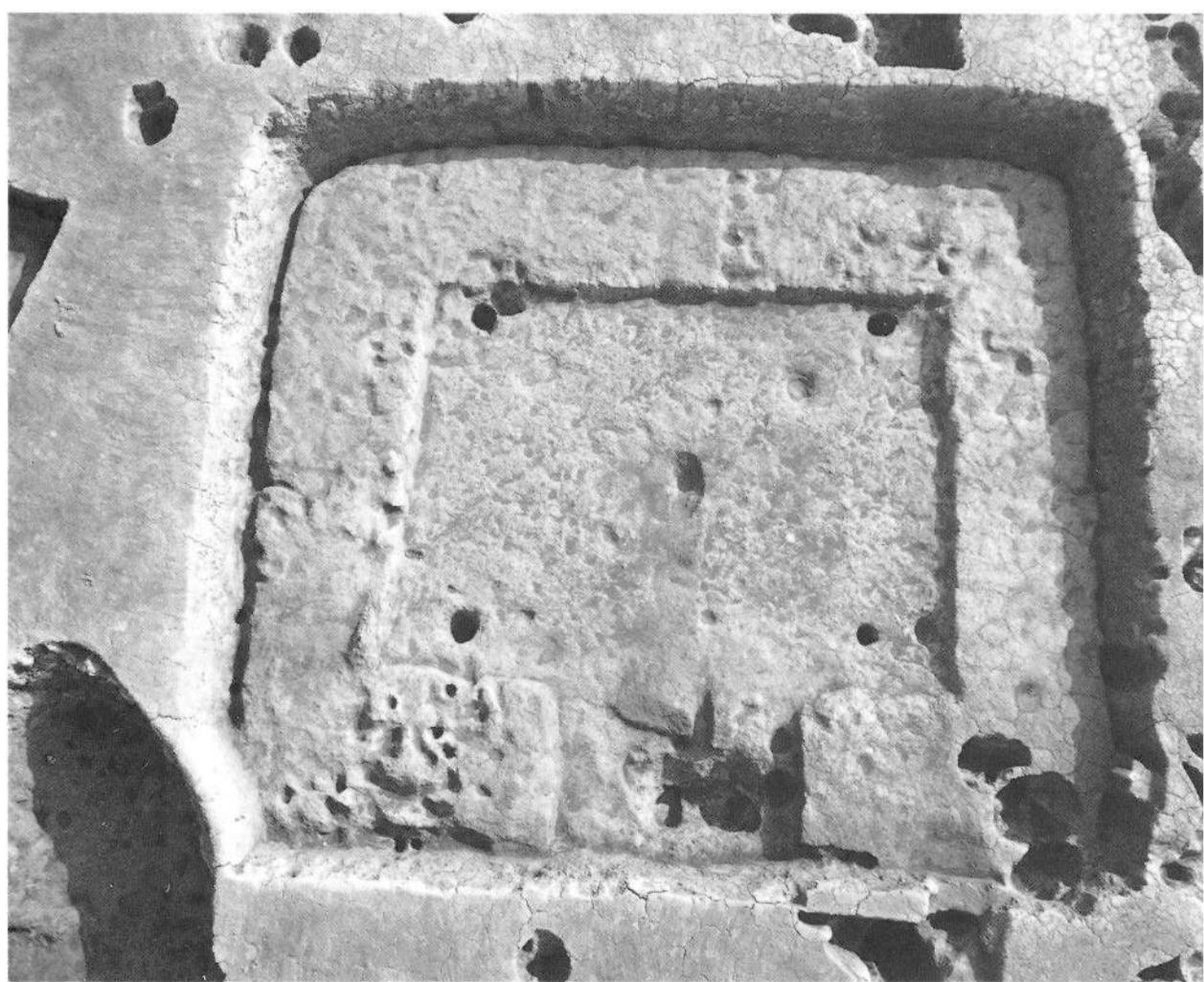


2

図版 4 (1) 井上薬師堂東台地俯瞰
(2) 東台地住居群俯瞰



1



2

図版 5 (1) 1号竪穴住居跡周辺 (北西から)
(2) 1号竪穴住居跡

1



2



図版 6 (1) 3号・4号・13号竪穴住居跡, 8号・9号土壤, 2号周溝状遺構 (2) 5号竪穴住居跡



1



2

図版 7 (1) 5号竪穴住居跡階段状遺構調査前
(2) 5号竪穴住居跡階段状遺構調査後



1



2

図版 8 (1) 1号・6号竪穴住居跡, 1号上壙(西から)
(2) 7号竪穴住居跡(北西から)



1



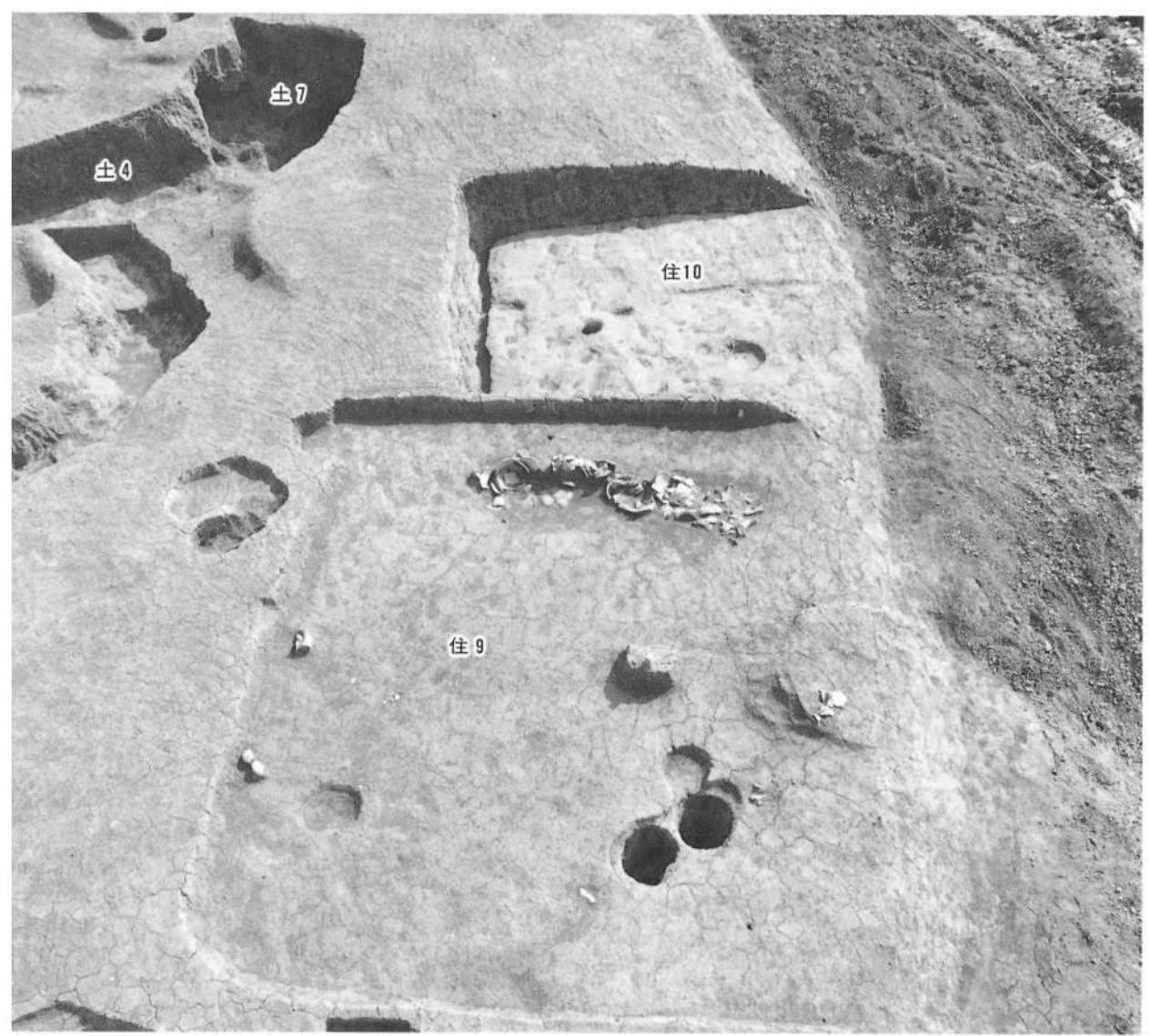
2

図版 9 (1) 7号竪穴住居跡屋内貯藏穴
(2) 7号・8号竪穴住居跡と溝 (西から)

1

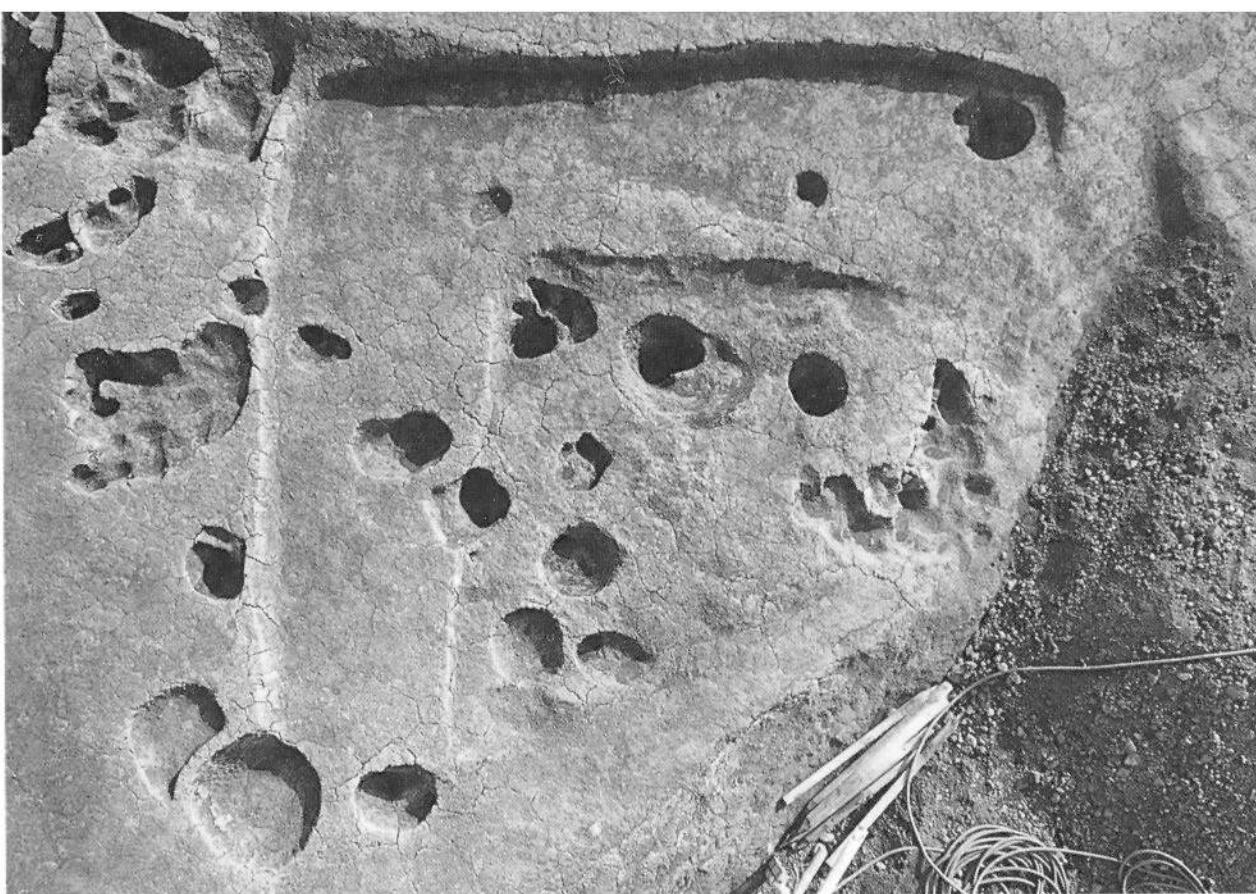


2



図版 10 (1) 8号竪穴住居跡カマド

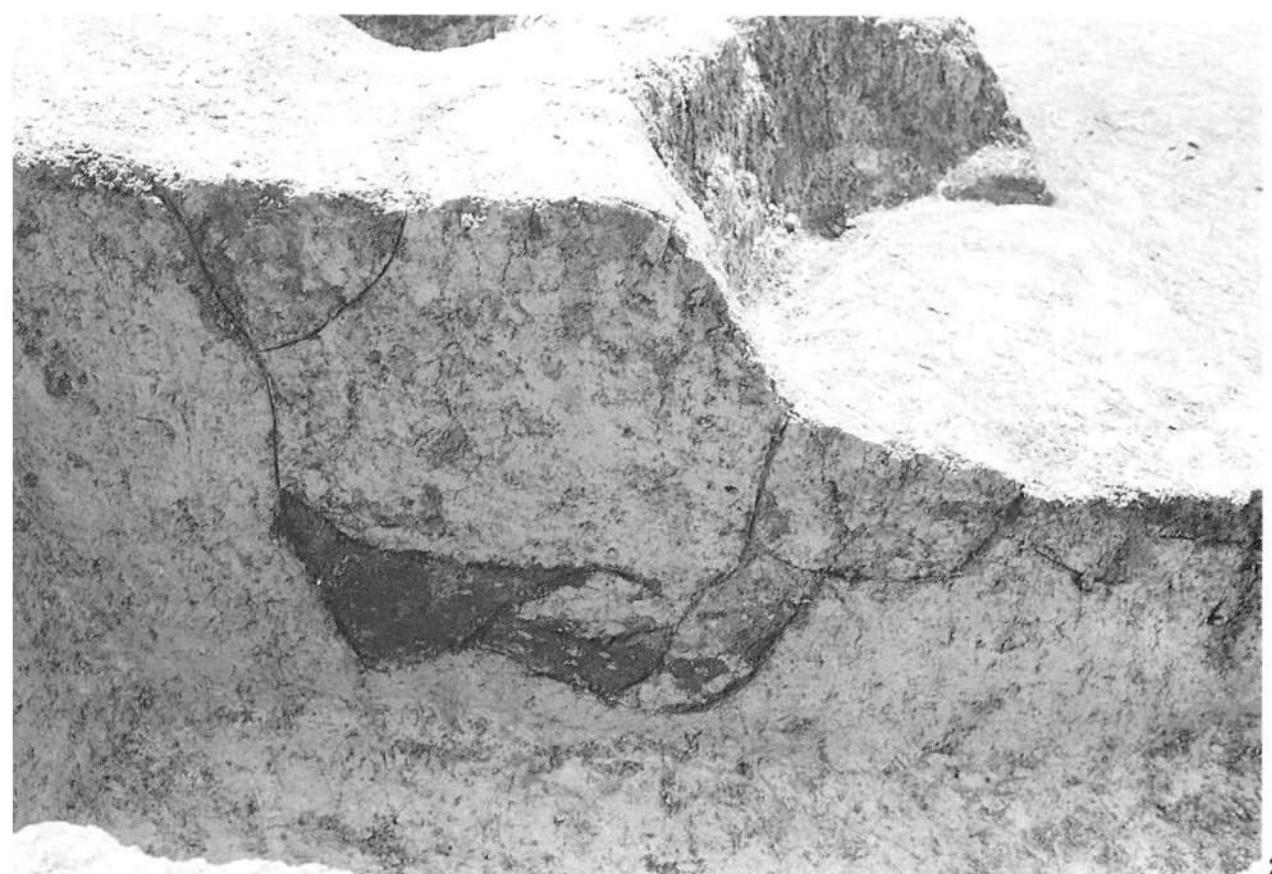
(2) 9号・10号竪穴住居跡、4号・7号土壤 (西南から)



図版 11 (1) 11号竪穴住居跡
(2) 12号竪穴住居跡



1



2

図版 12 (1) 12号竪穴住跡階段状遺構
(2) 階段状遺構の断面



1



2

図版 13 (1) 第1次調査西台地俯瞰
(2) 第1次調査西台地俯瞰

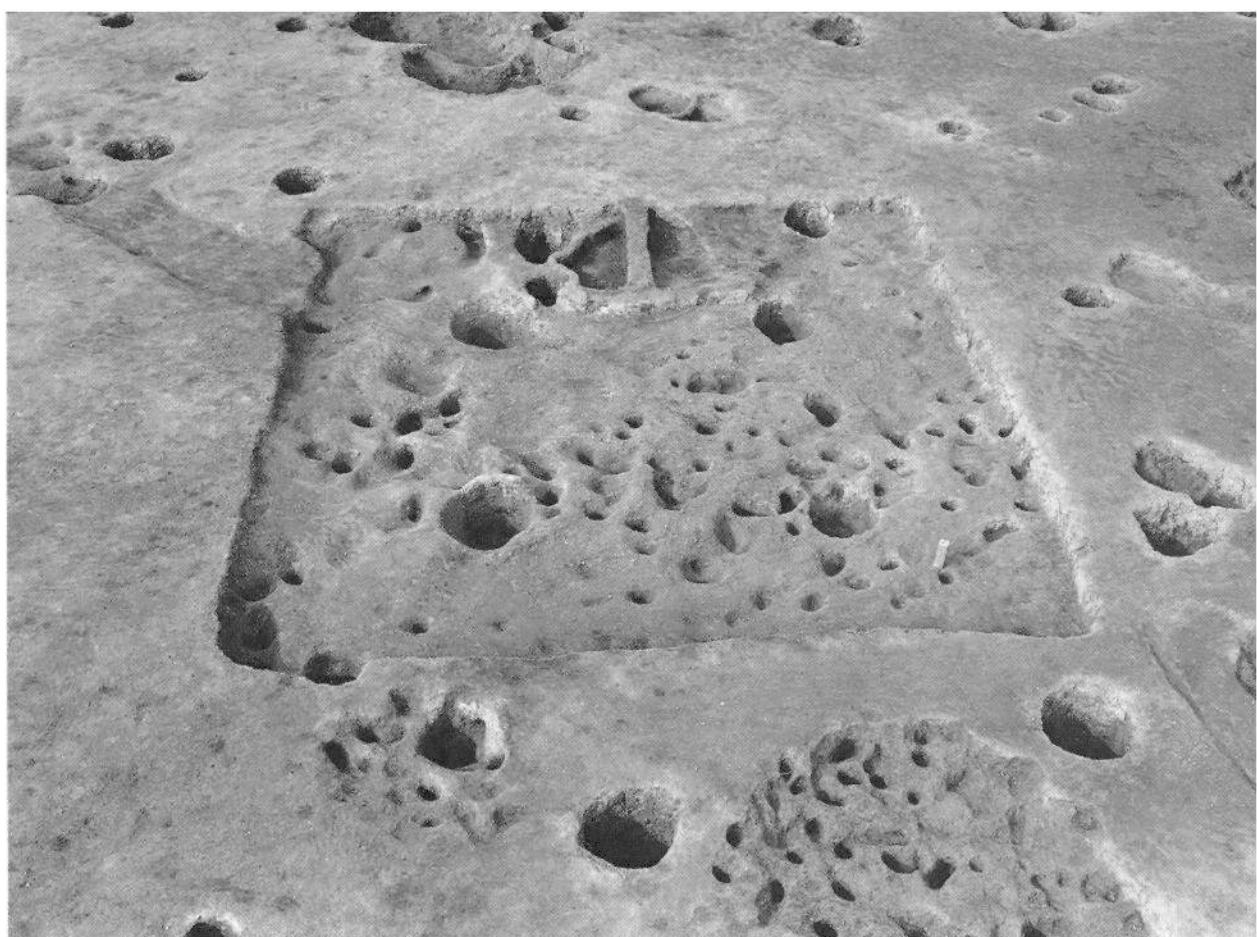


1

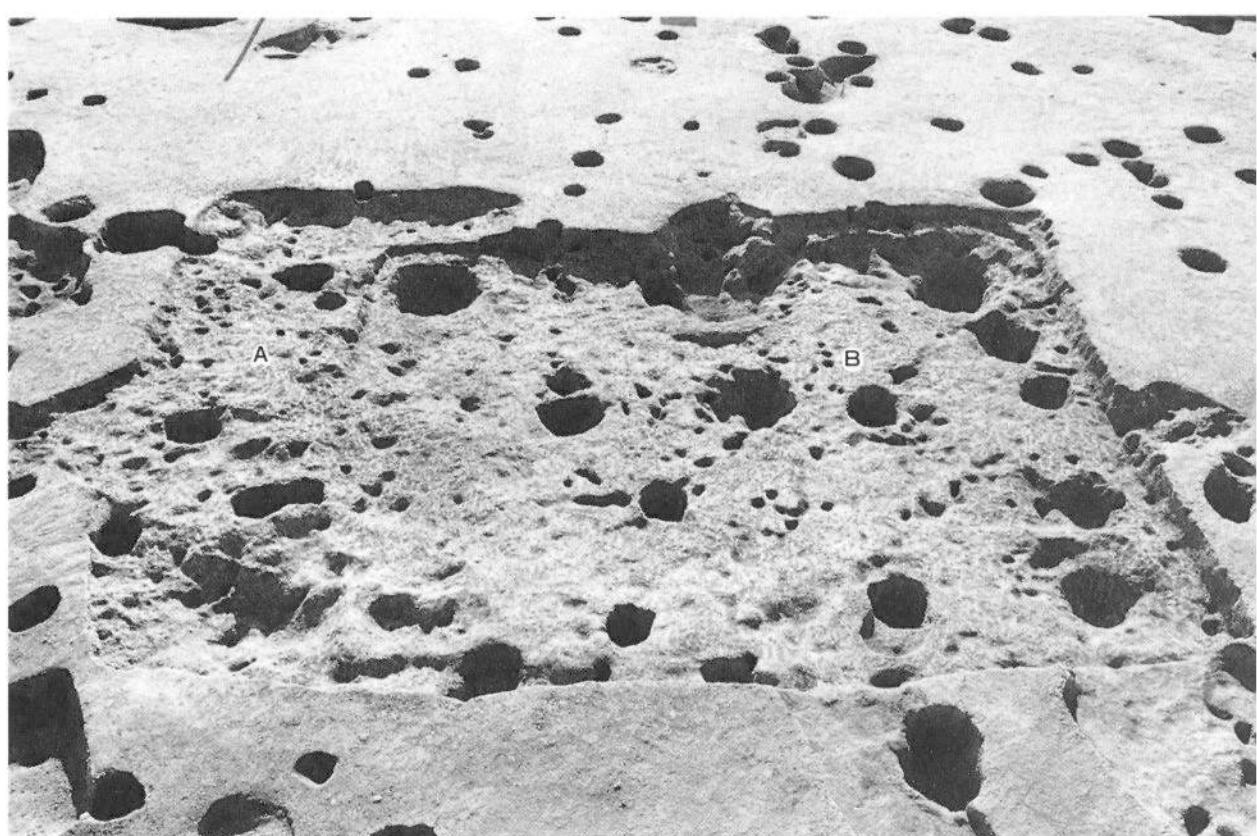


2

図版 14 (1) 第1次調査西台地南西側俯瞰
(2) 第2次調査西台地俯瞰

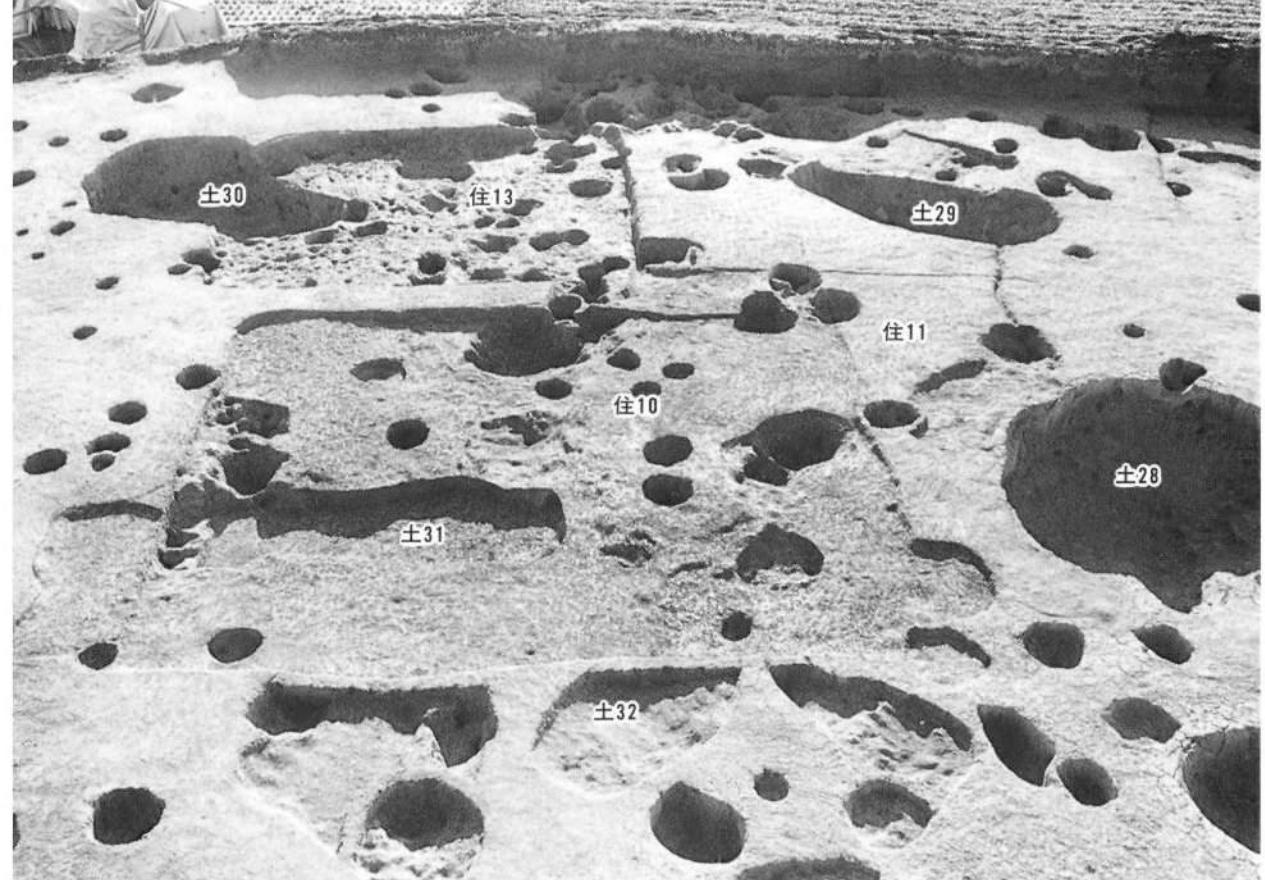


1

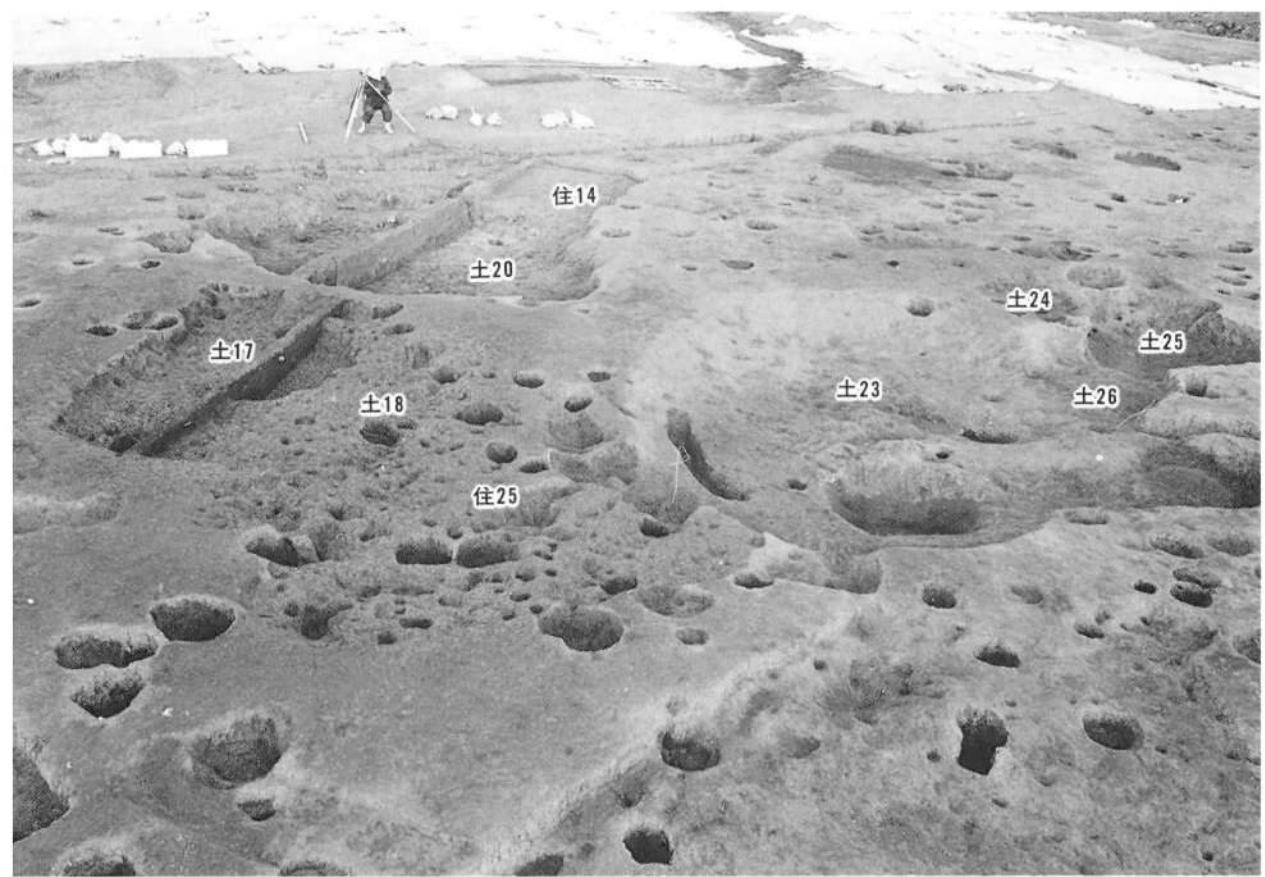


2

図版 15 (1) 5号竪穴住居跡（南東から）
(2) 8号A・B竪穴住居跡（北西から）



1



2

図版 16 (1) 14号・25号竪穴住居跡, 17号・18号・20号・23号～26号土壤 (北西から)
(2) 10号・11号・13号竪穴住居跡, 28号～32号土壤 (南東から)



1



2

図版 17 (1) 16号～18号竖穴住居跡, 2号周溝状遺構 (西南から)
(2) 16号竖穴住居跡 (西から)



1

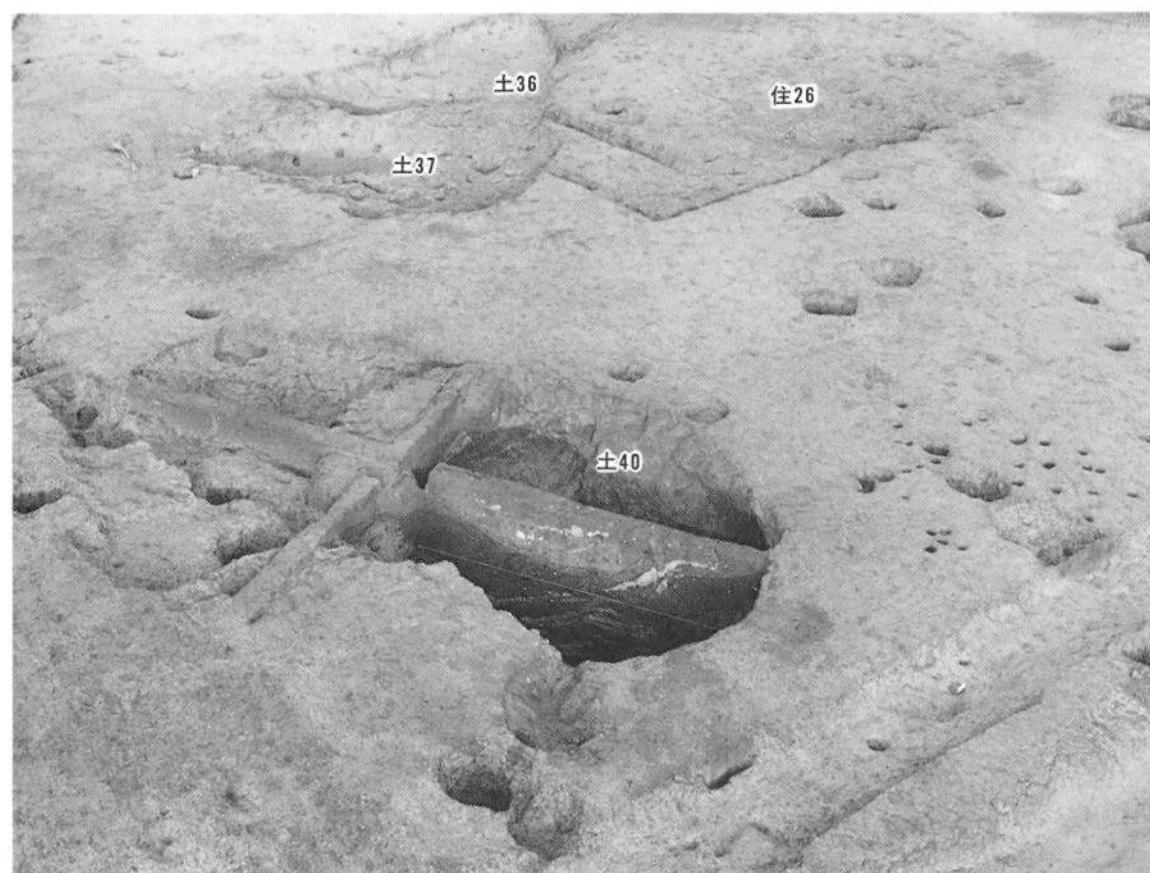


2

図版 18 (1) 17号竪穴住居跡（西から）
(2) 18号竪穴住居跡, 2号周溝状遺構（西から）



1



2

図版 19 (1) 25号竪穴住居跡、17号・18号・20号土壌（南東から）
(2) 26号竪穴住居跡、36号・37号・40号土壌（南東から）



1



2

図版 20 (1) 27号竪穴住居跡 (西から)
(2) 27号竪穴住居跡カマド出土状態



1

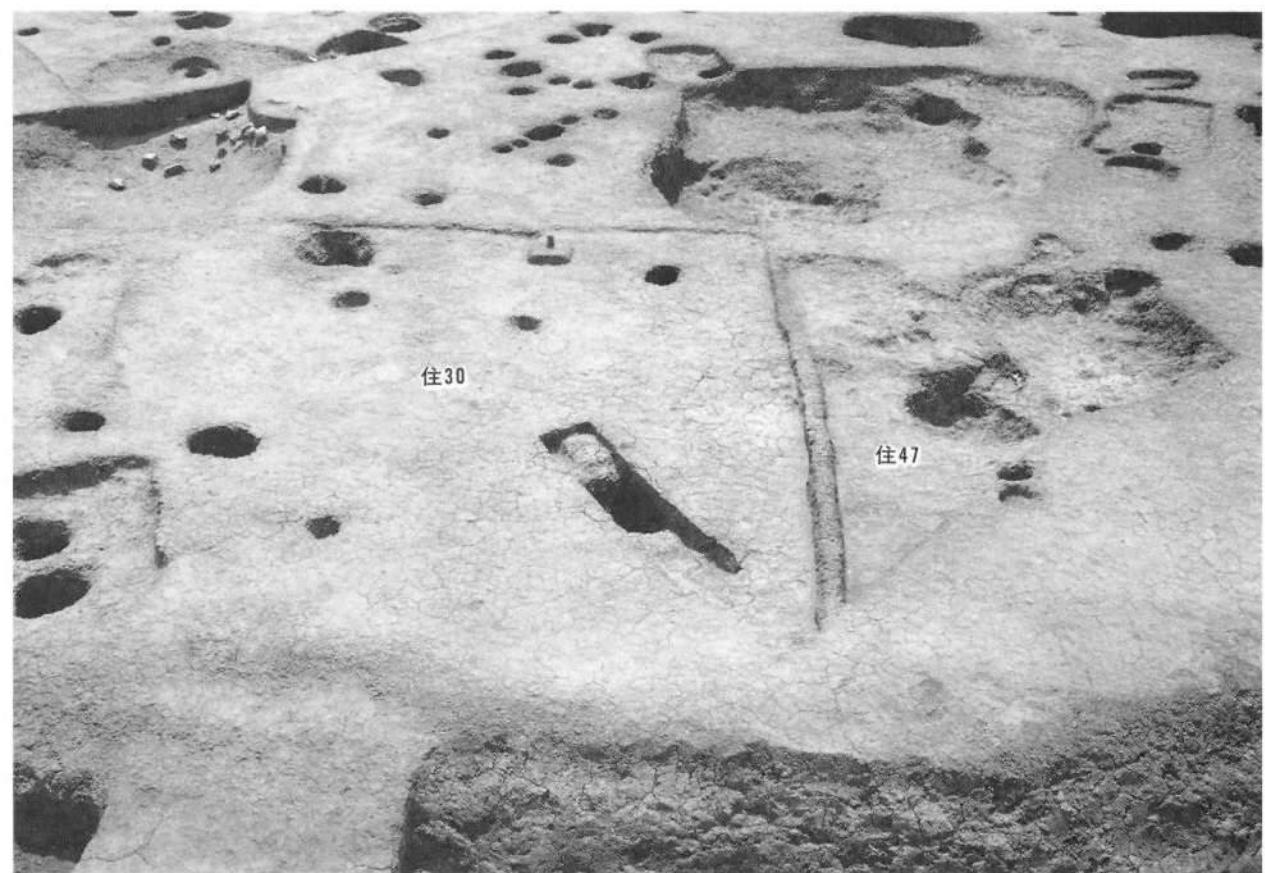


2

図版 21 (1) 27号竪穴住居跡下層 (南から)
(2) 28号竪穴住居跡、4号周溝状遺構 (南から)



1



2

図版 22 (1) 29号竪穴住居跡 (南東から)
(2) 30号・47号竪穴住居跡 (東から)



1



2

図版 23 (1) 30号竪穴住居跡下層 (南から)
(2) 31号竪穴住居跡 (北西から)



1



2

図版 24 (1) 32号竪穴住居跡 (南東から)
(2) 32号竪穴住居跡土器出土状態



2

図版 25 (1) 32号竖穴住居跡下層 (西南から)

(2) 33号竖穴住居跡 (南から)

溝11

1



2

図版 26 (1) 34号竪穴住居跡（南東から）
(2) 34号竪穴住居跡下層（南東から）



1



2

図版 27 (1) 35号竪穴住居跡（東南から）
(2) 35号竪穴住居跡下層（北西から）



1

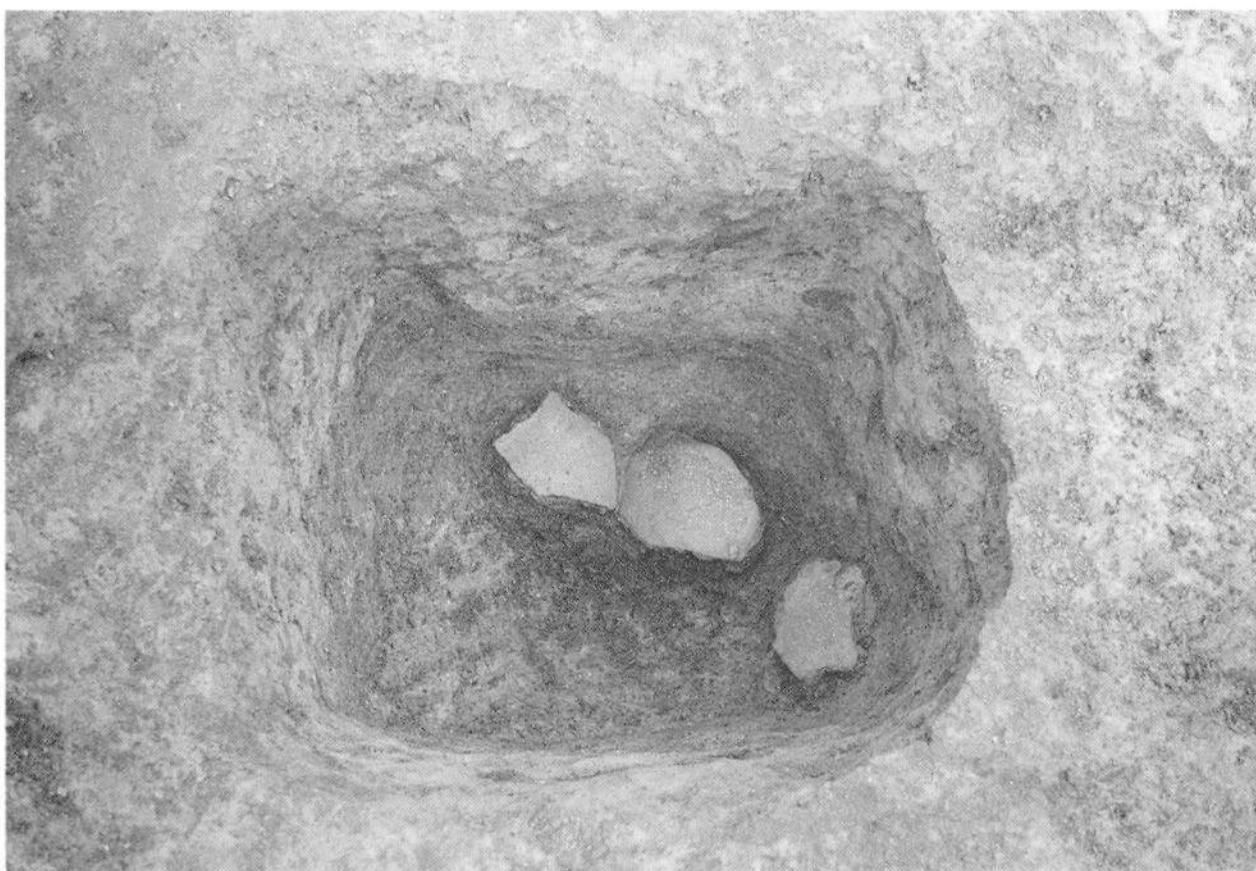


2

図版 28 (1) 36号竪穴住居跡 (南東から)
(2) 36号竪穴住居跡カマド



1

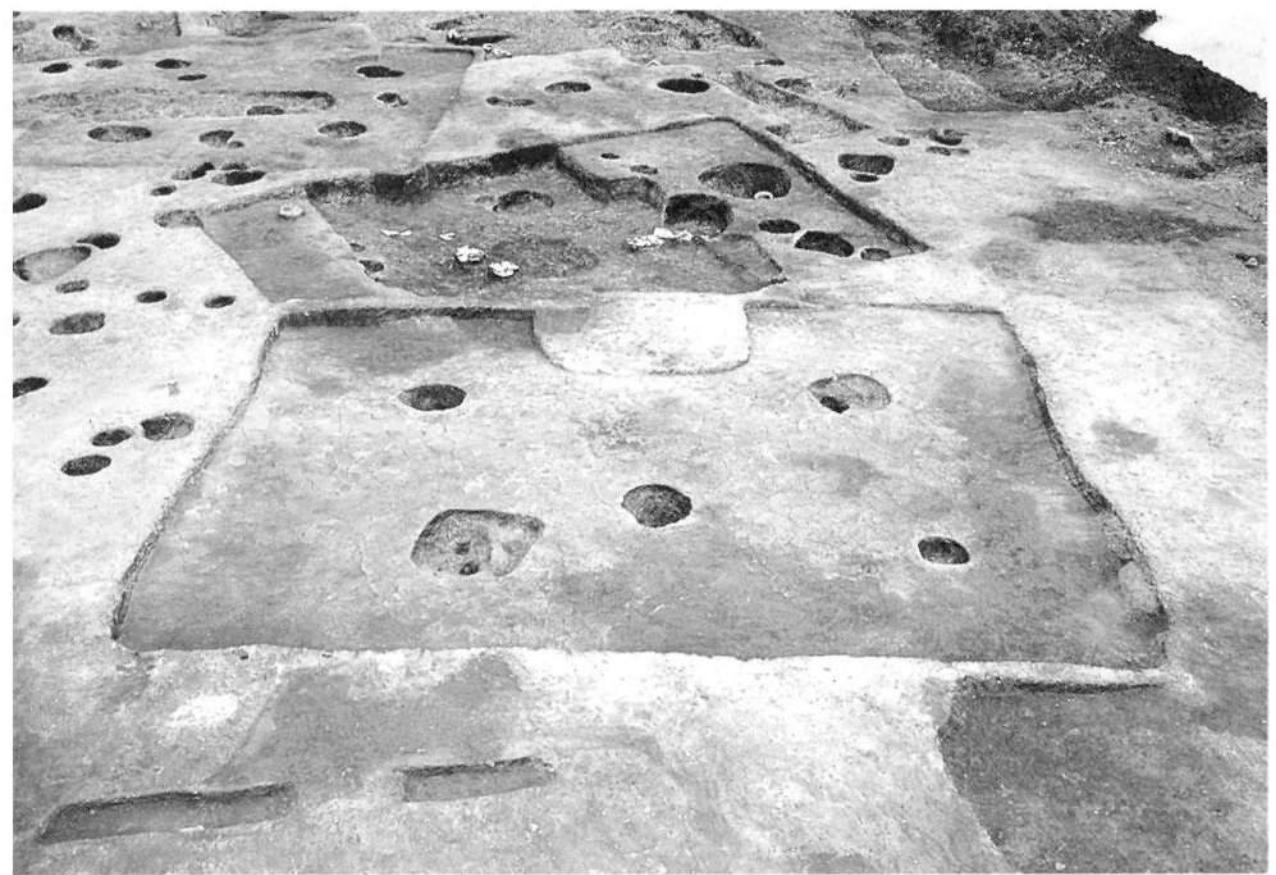


2

図版 29 (1) 38号竪穴住居跡（南東から）
(2) 38号竪穴住居跡屋内土壤

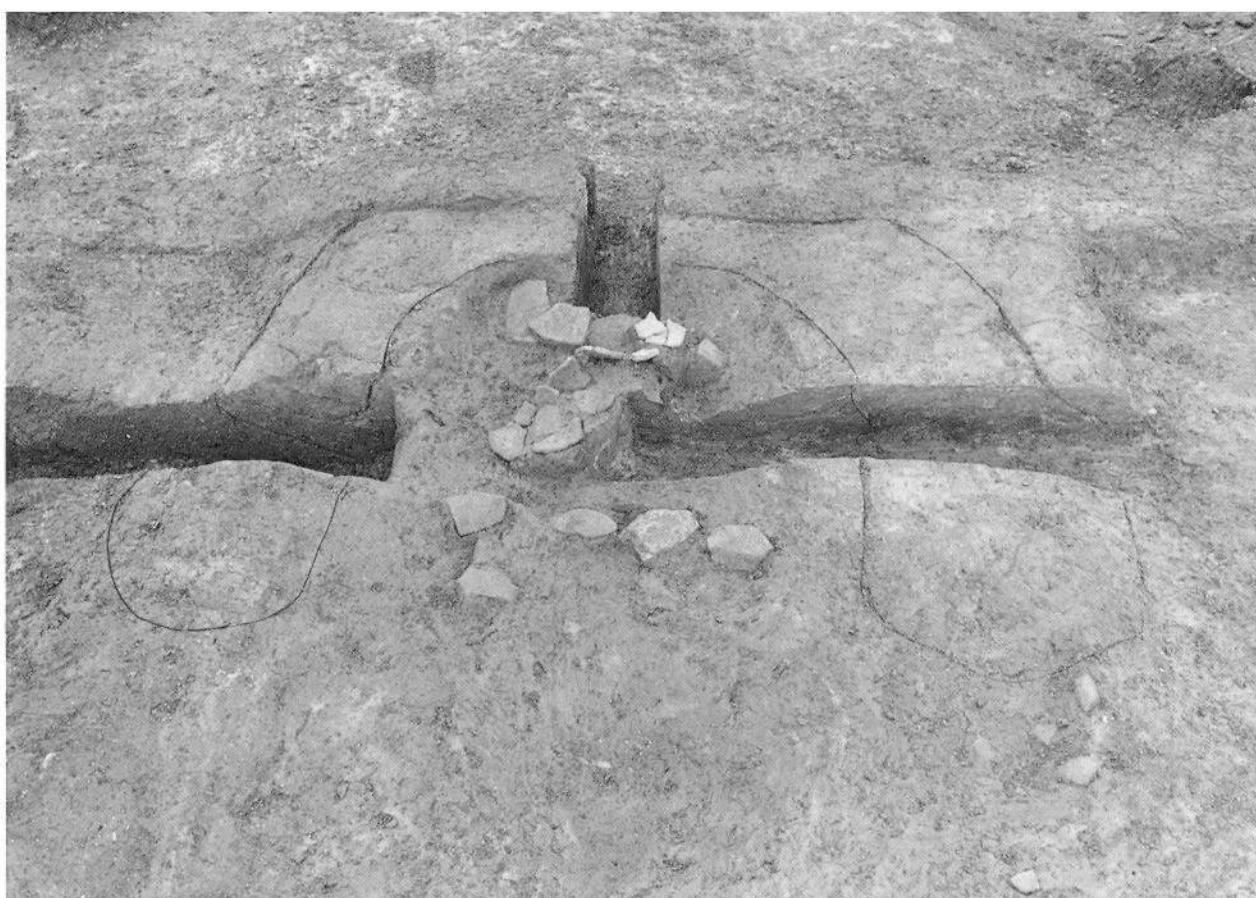


1

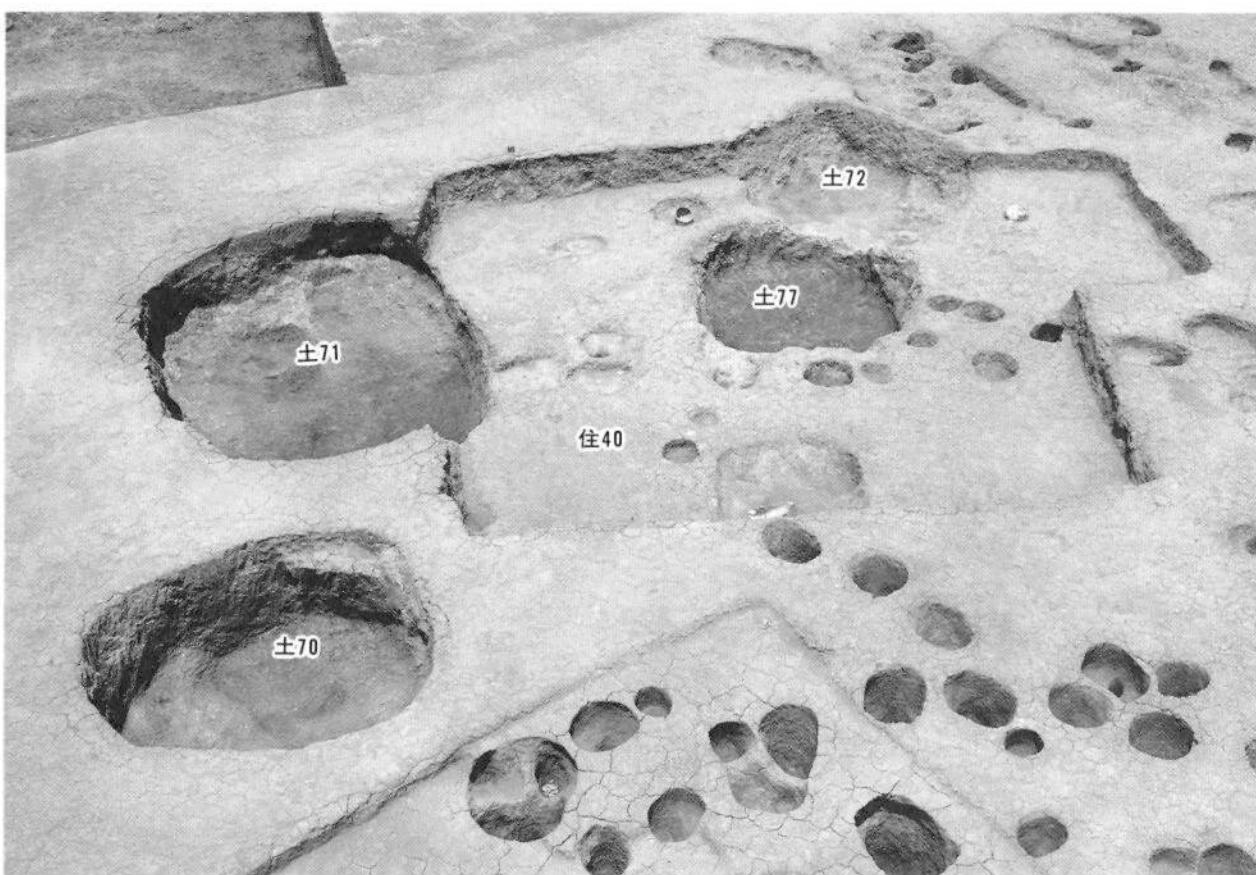


2

図版 30 (1) 38号竪穴住居跡下層（南西から）
(2) 38号・39号竪穴住居跡（南東から）



1

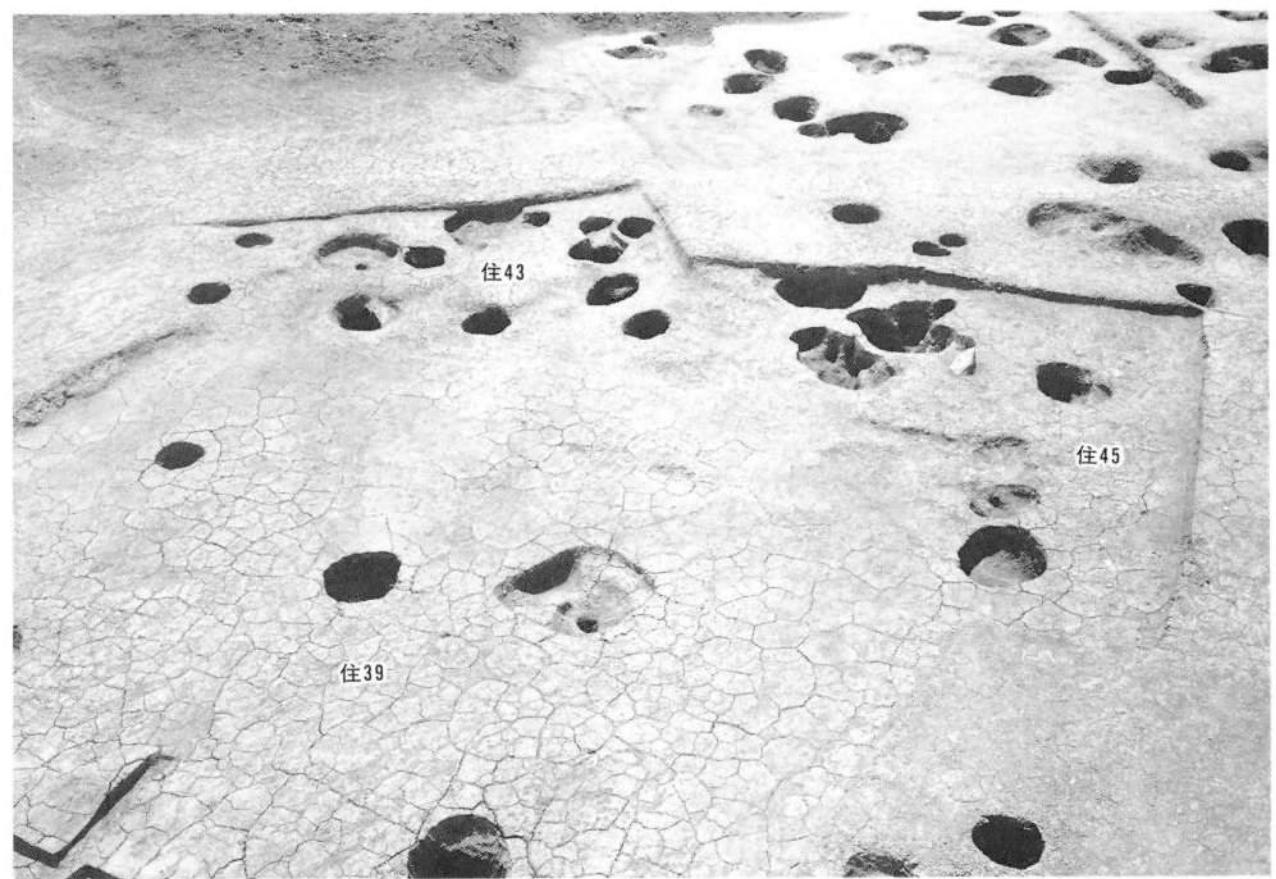


2

図版 31 (1) 39号竪穴住居跡カマド
(2) 40号竪穴住居跡、70号～72号・77号土壤 (南東から)

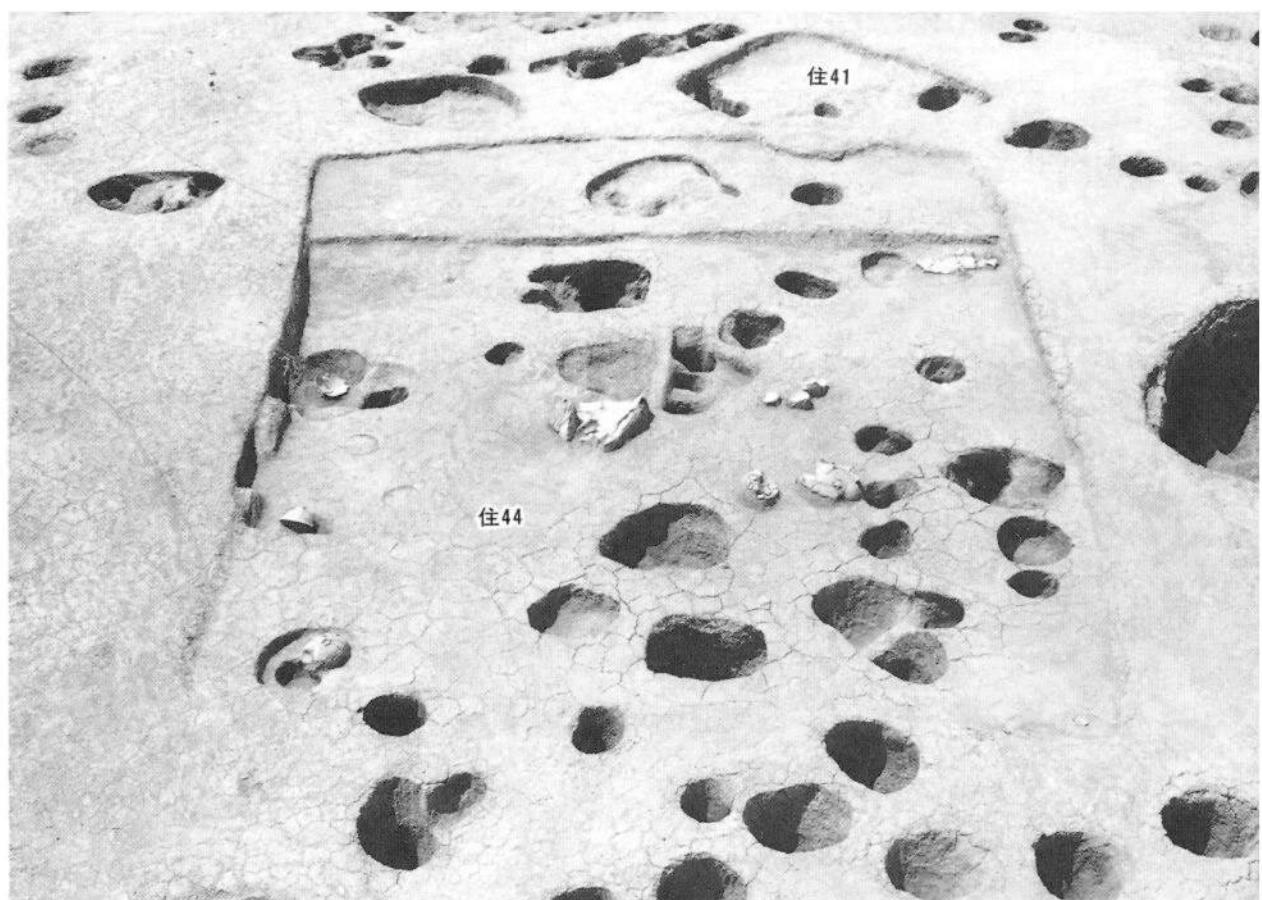


1

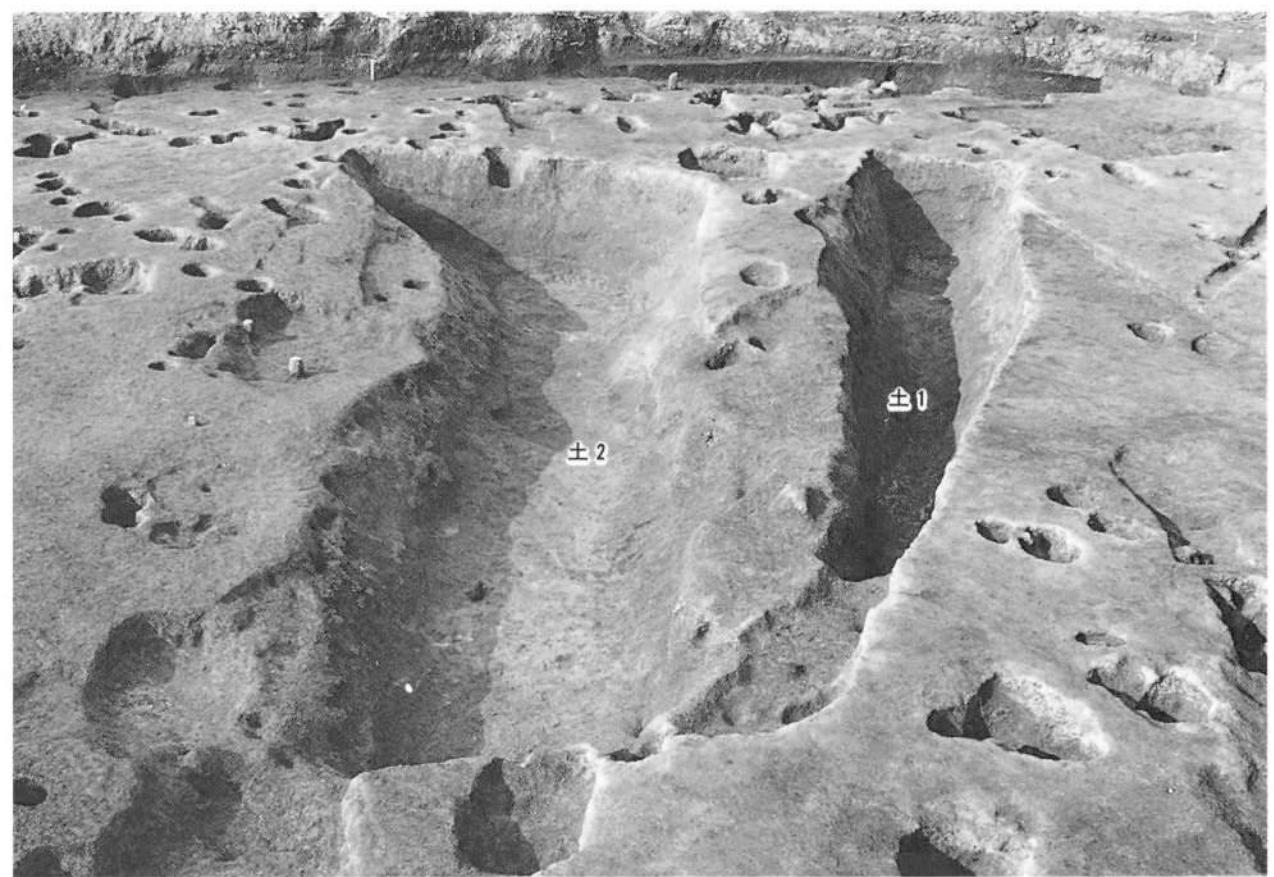
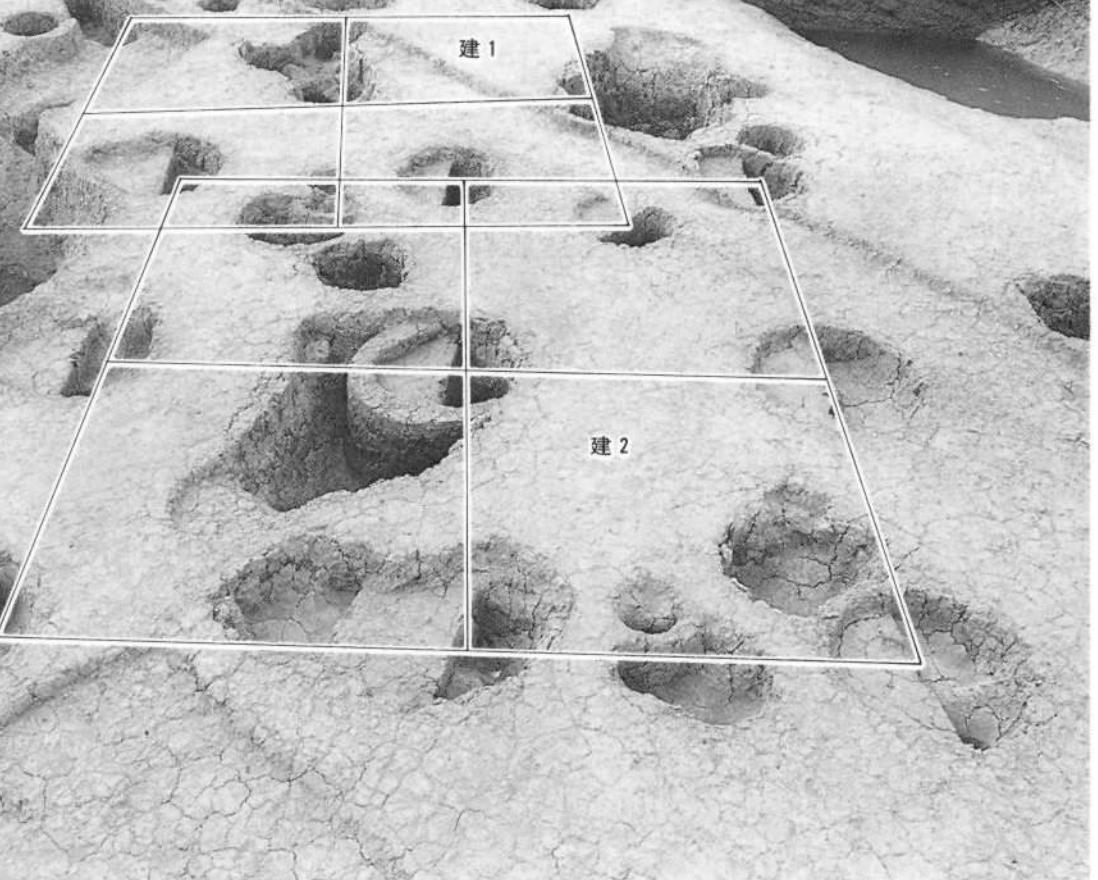


2

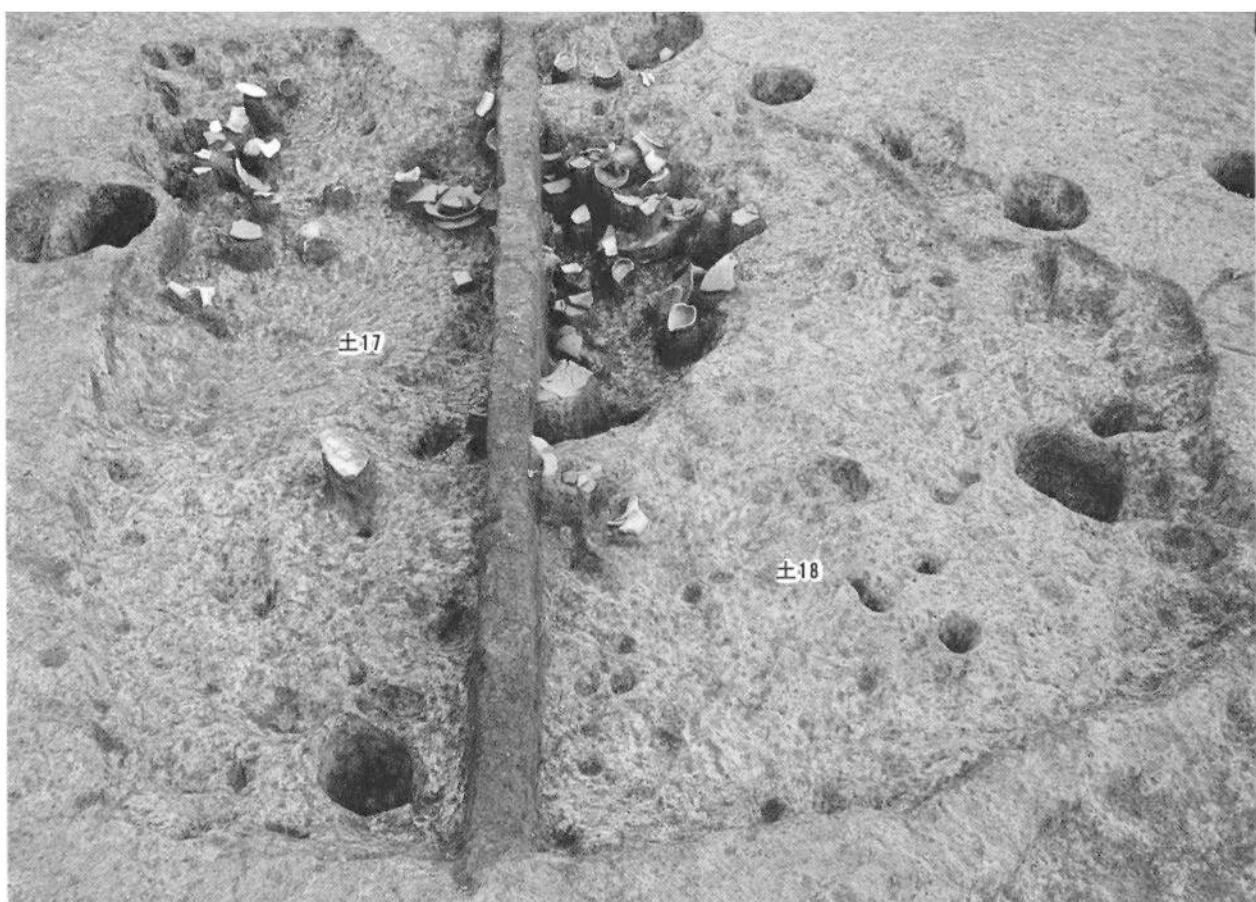
図版 32 (1) 42号竪穴住居跡 (東北から)
(2) 43号・45号竪穴住居跡 (西から)



図版 33 (1) 44号竪穴住居跡 (北から)
(2) 46号竪穴住居跡 (西から)



図版 34 (1) 1号・2号掘立柱建物（南東から）
(2) 1号・2号土壙（東から）



2

図版 35 (1) 17号・18号土壙 (南から)
(2) 17号土壙土器出土状態

1



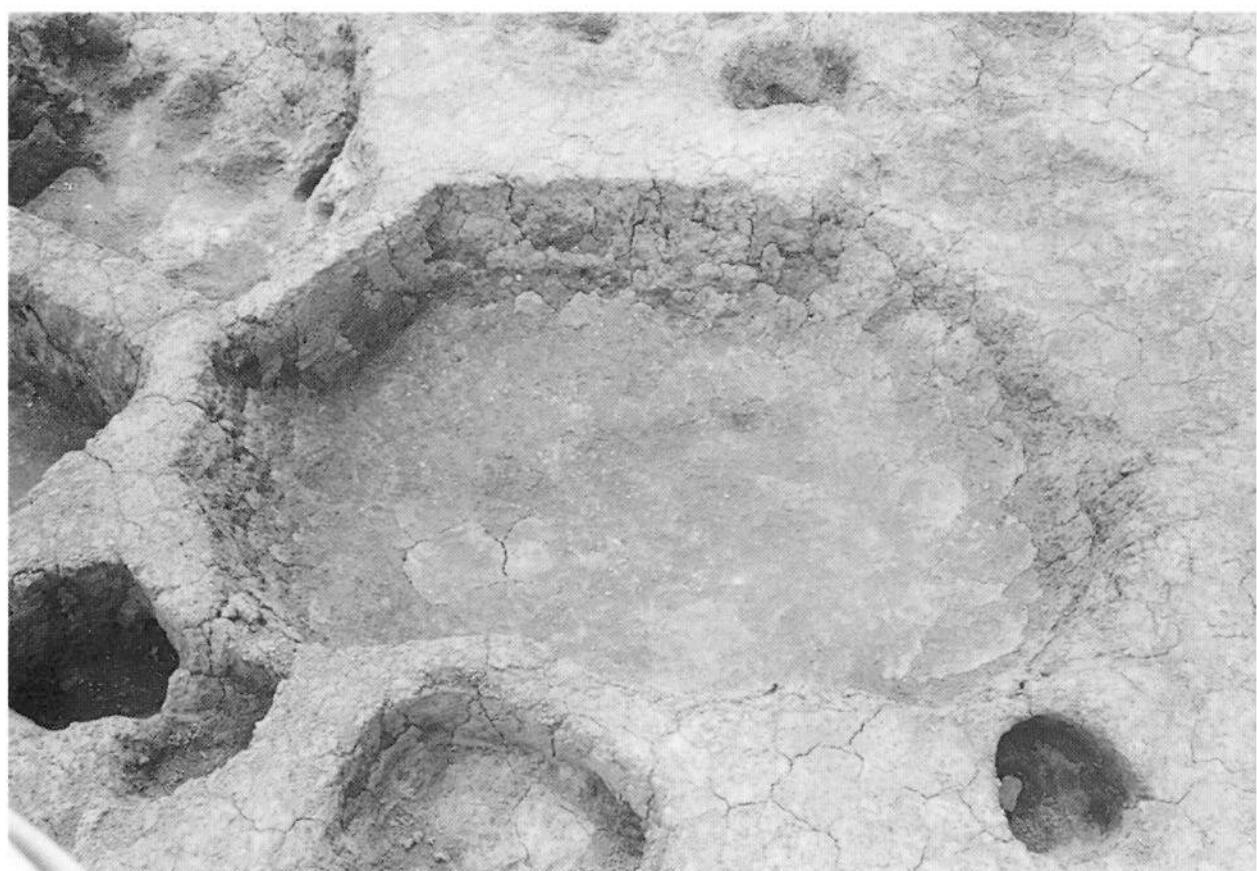
2



図版 36 (1) 23号土壤 (南から)
(2) 41号・42号土壤 (東から)



1



2

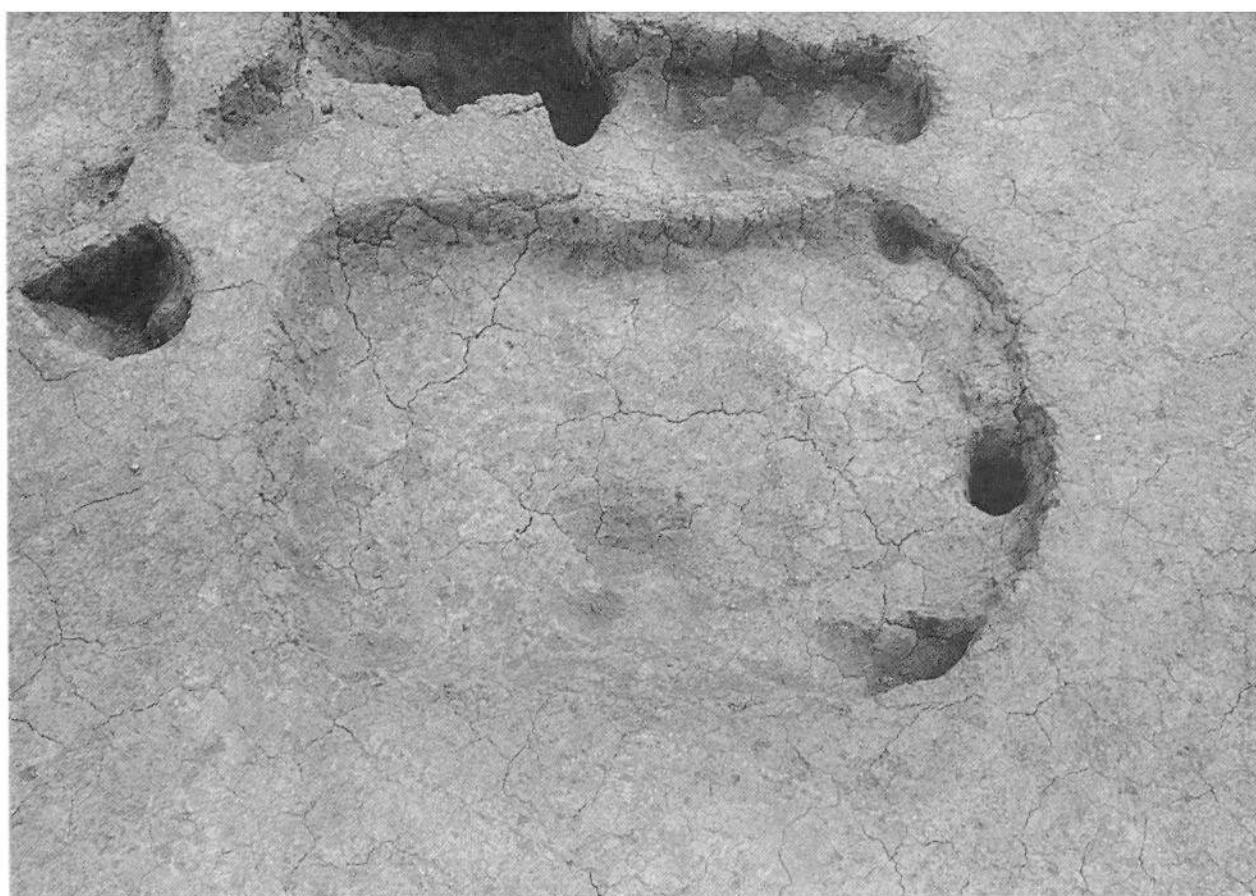
図版 37 (1) 43号～47号土壤 (北東から)
(2) 48号土壤 (東から)

1

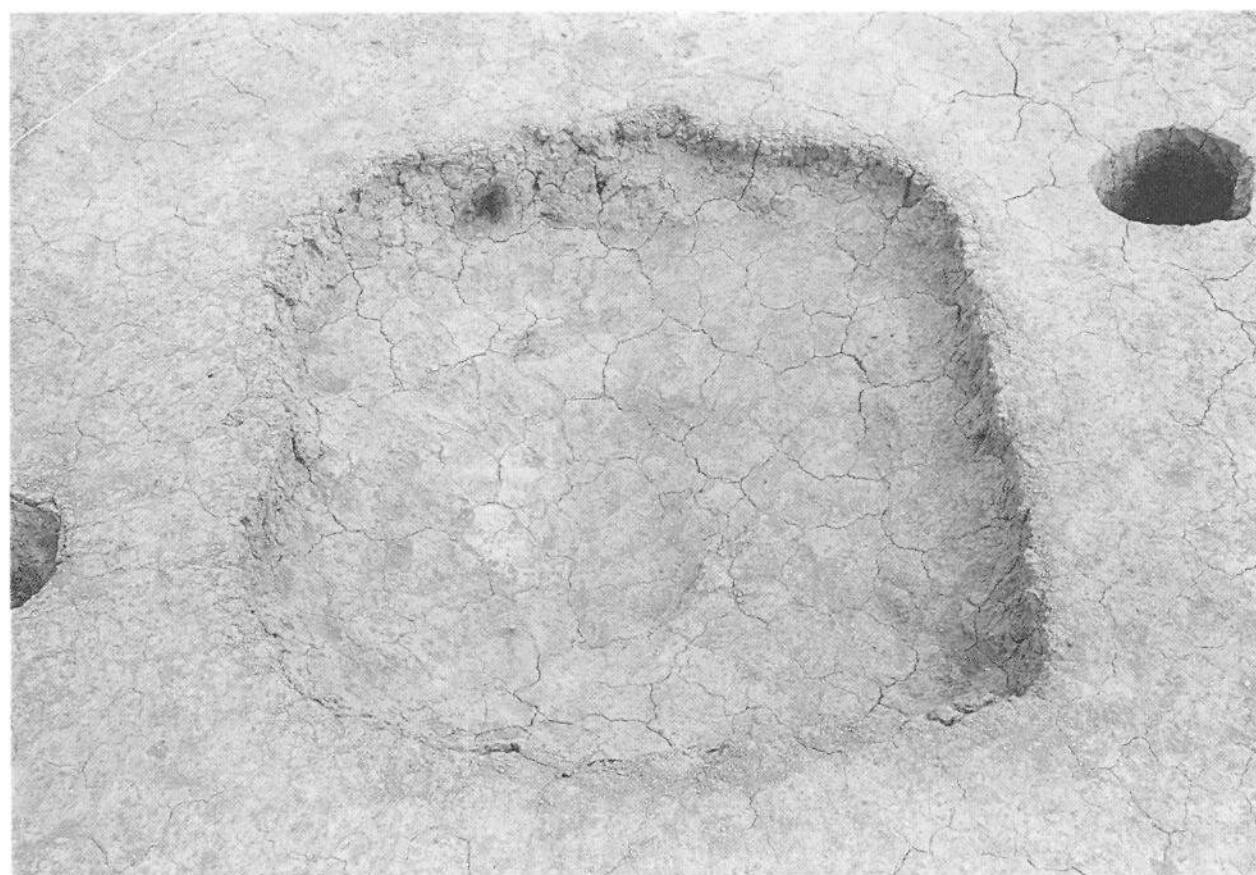
2



図版 38 (1) 55号土壤 (北から)
(2) 56号土壤 (南東から)



1

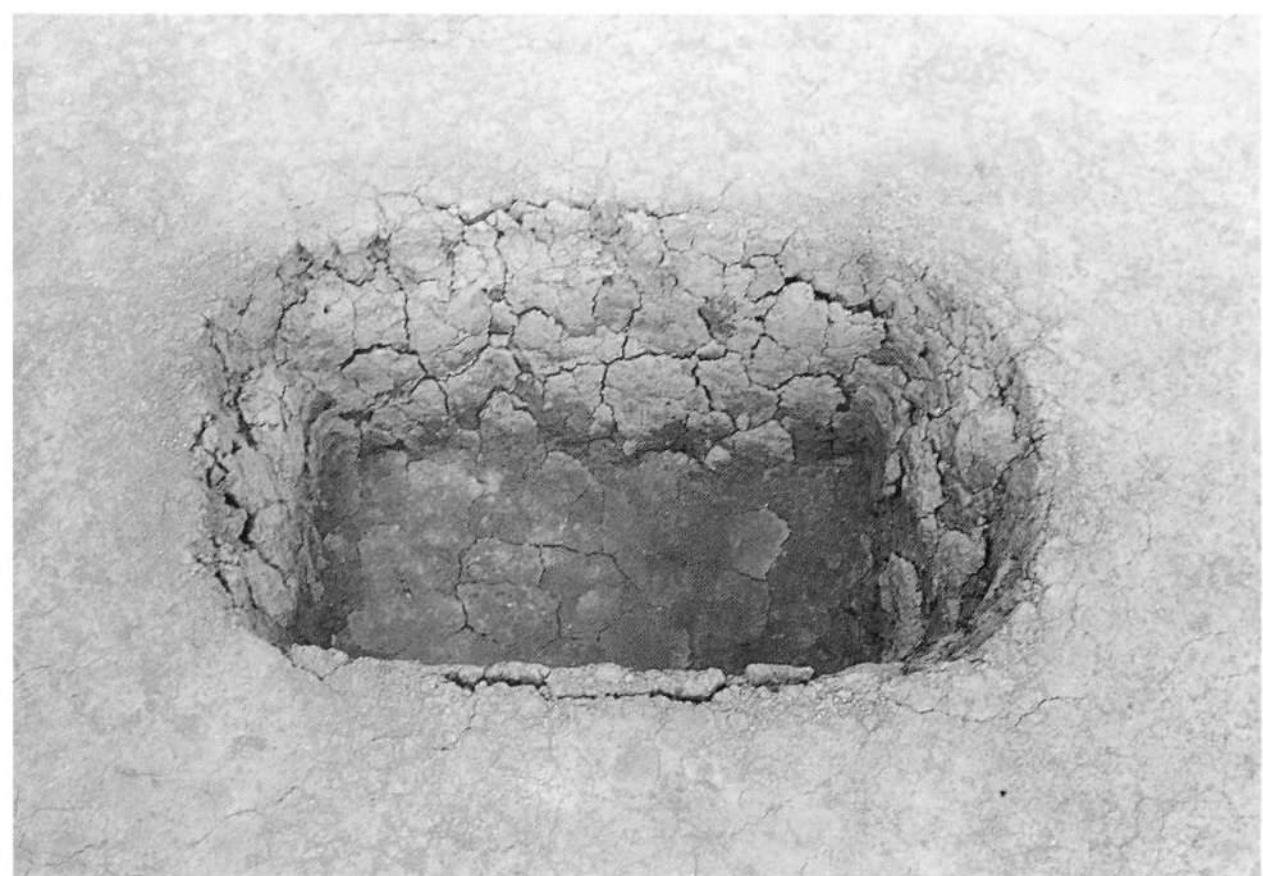


2

図版 39 (1) 57号土壤 (北東から)
(2) 58号土壤 (北から)

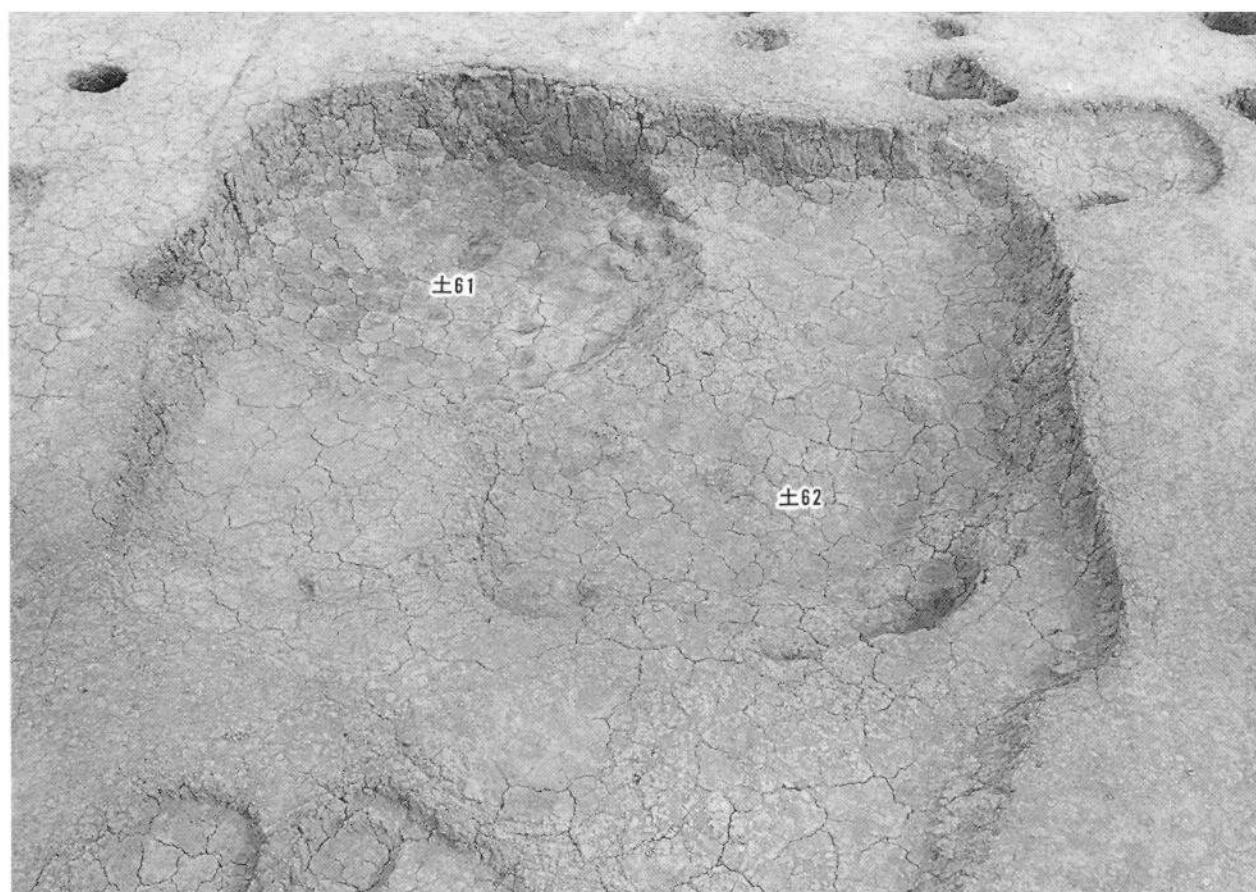


1



2

図版 40 (1) 59号土壤 (東から)
(2) 60号土壤 (西から)



1

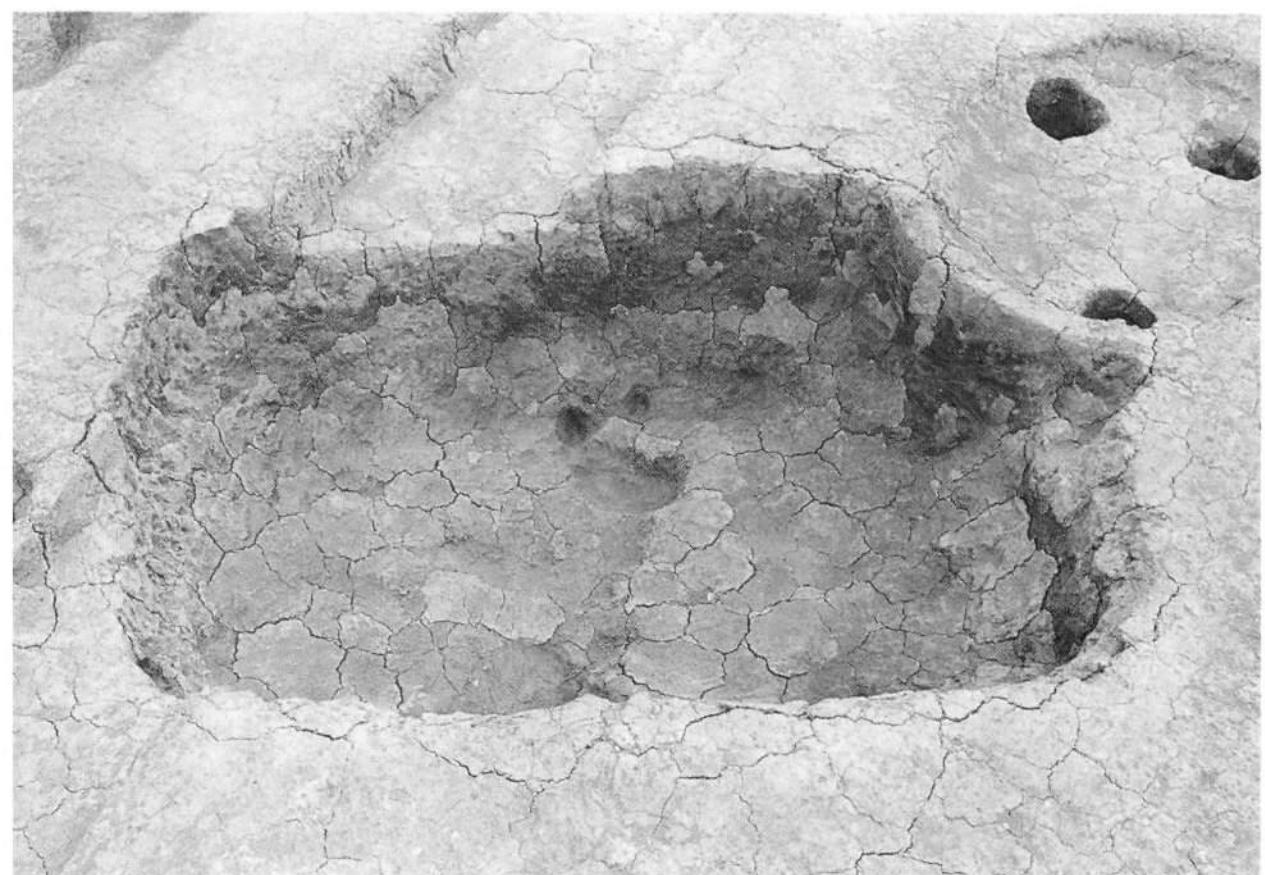


2

図版 41 (1) 61号・62号土壤 (北から)
(2) 63号土壤 (北から)



1



2

図版 42 (1) 65号土壤 (東から)
(2) 75号土壤 (東から)



1



2

図版 43 (1) 3号井戸土層堆積状態
(2) 4号井戸 (東から)



図版 44 (1) 4号井戸井戸枠出土状態
(2) 5号井戸(西から)



1



2

図版 45 (1) 6号井戸（西から）
(2) 6号井戸最下層出土の木材



1



2

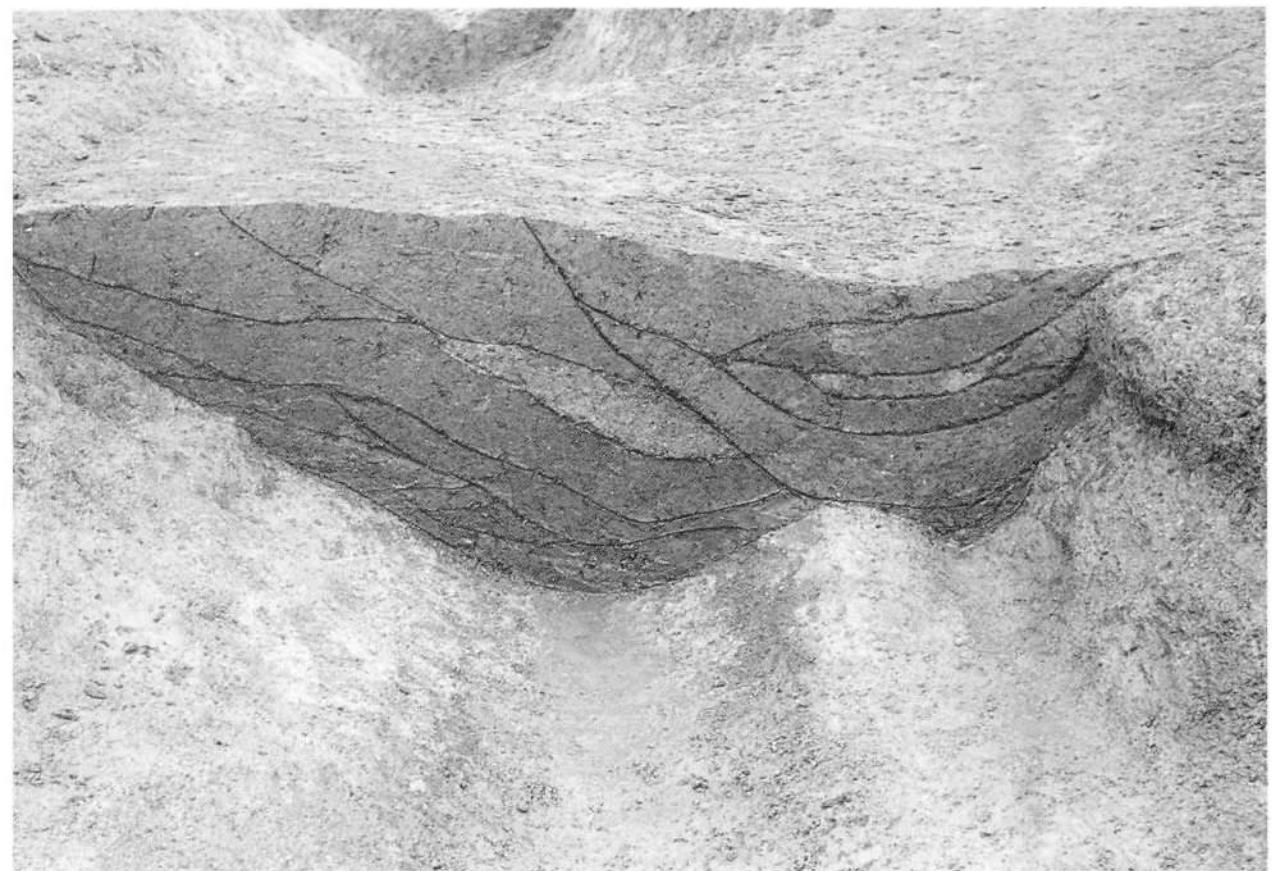
図版 46 (1) 7号井戸（北から）
(2) 7号井戸最下層の状態



図版 47 (1) 8号井戸 (東から)
(2) 3号周溝状遺構 (東から)



1



2

図版 48 (1) 4号周溝状遺構（北から）
(2) 11号溝埋土堆積状態



住 1-7



住 1-23



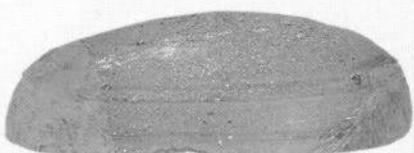
住 1-12



住 1-24



住 1-18



住 2



住 3-5



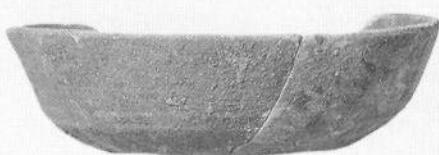
住 1-21



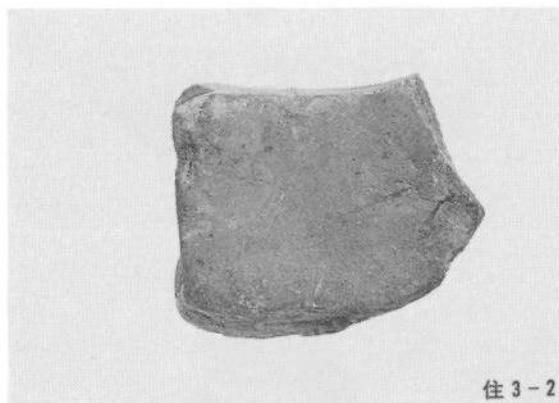
住 3-8



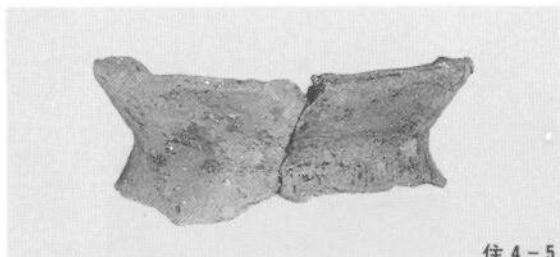
住 1-22



住 3-10



住3-2



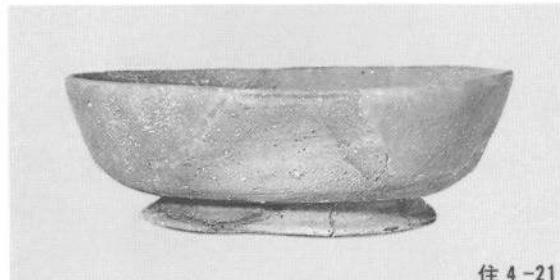
住4-5



住4-1



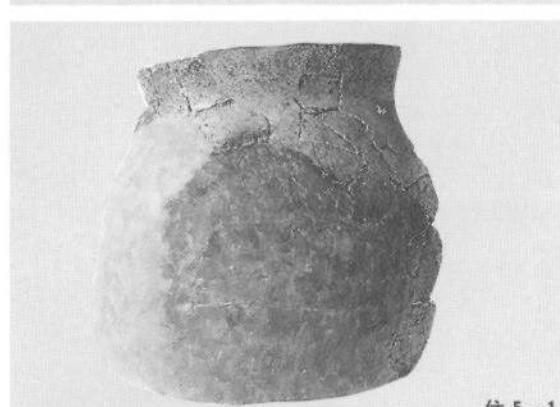
住4-15



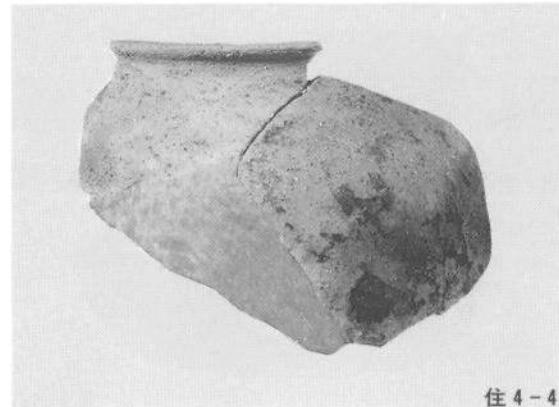
住4-21



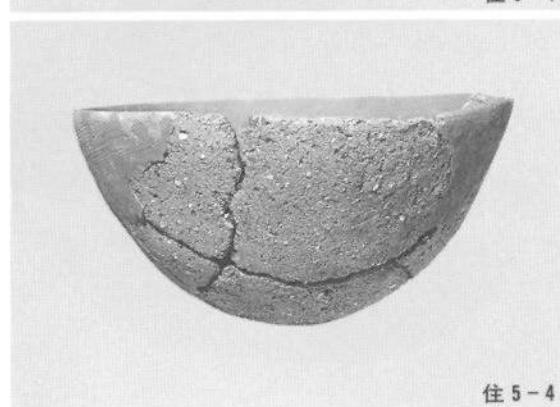
住4-2



住5-1



住4-4

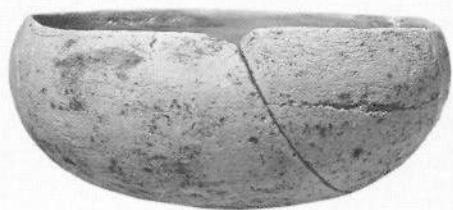


住5-4

図版 50 東台地3号～5号竪穴住居跡出土遺物



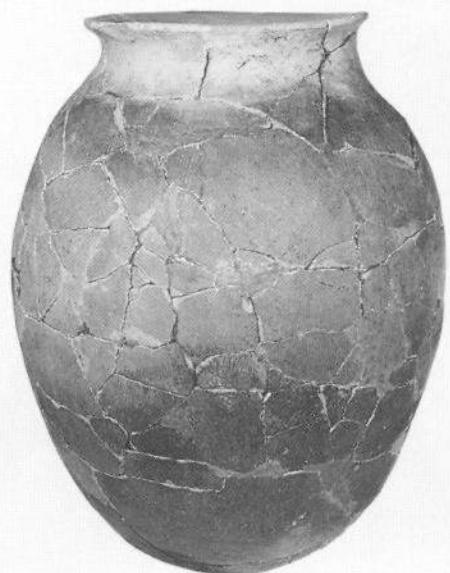
図版 51 東台地 5 号～8 号竪穴住居跡出土遺物



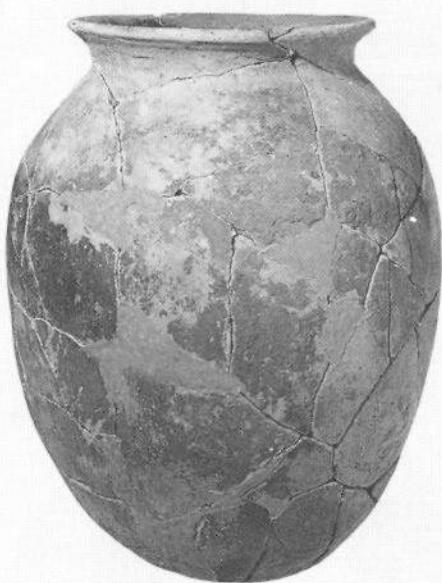
住8-6



住8-8



住9-2



住9-1



住9-3

図版 52 東台地 8 号・9 号竪穴住居跡出土遺物



住9-4



土1



土1



土1



土2-8



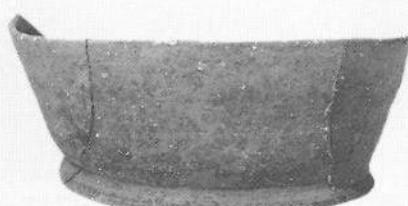
土1-6



土2-11



土1-11



土1-13



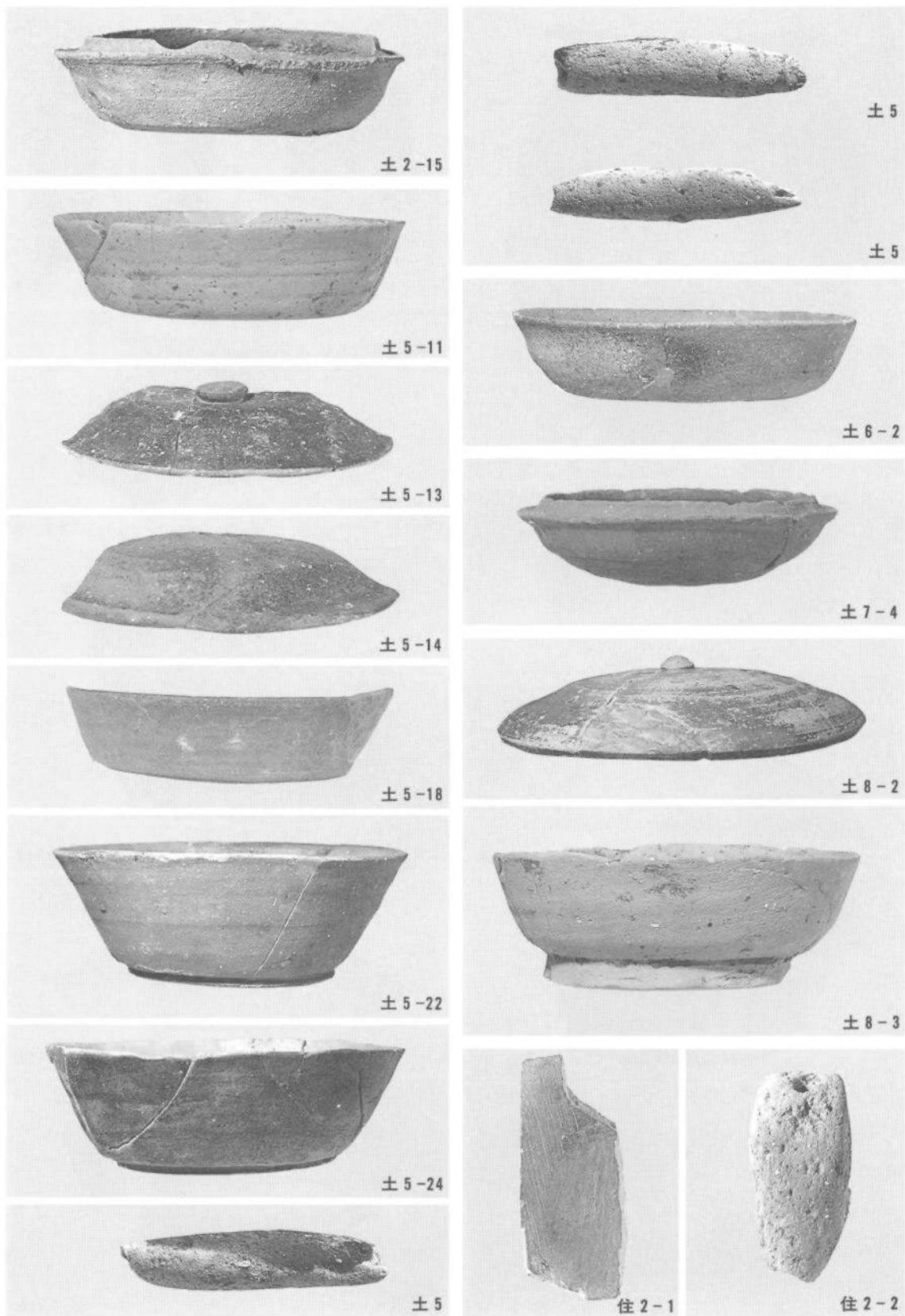
土2-13



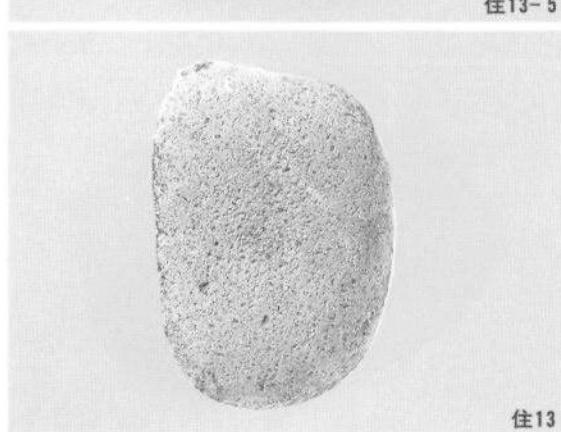
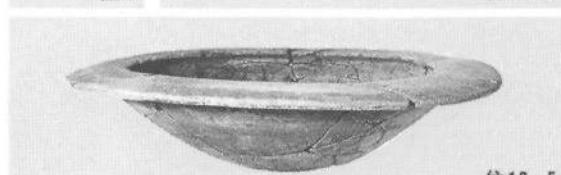
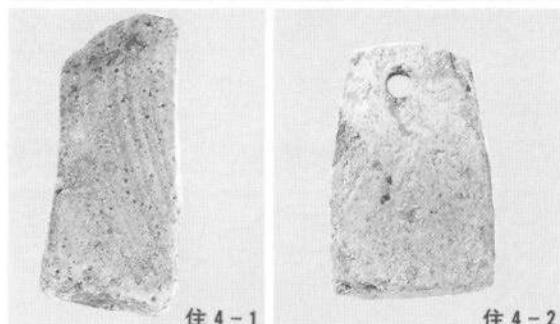
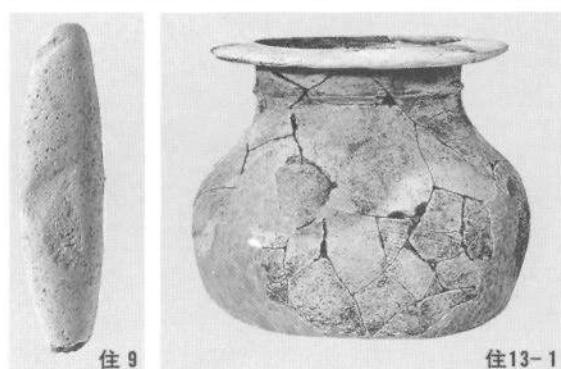
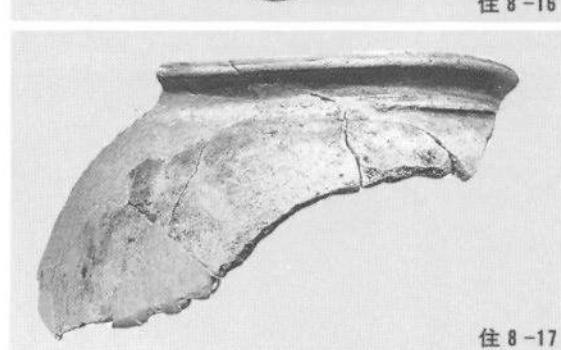
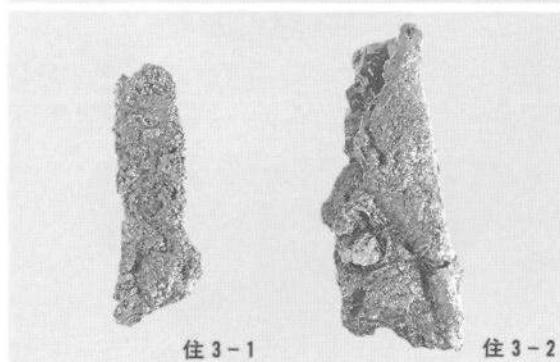
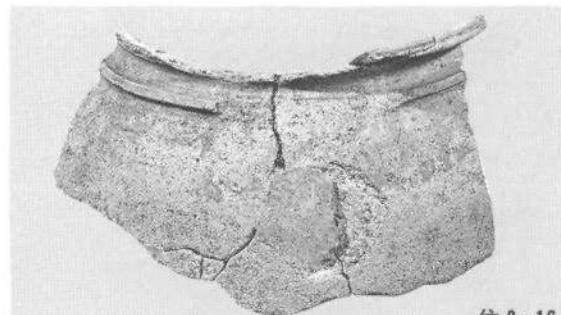
土1-14



土2-14



図版 54 東台地2号・5号・8号土壤、西台地2号竪穴住居跡出土遺物



図版 55 西台地3号・4号・8号・9号・13号竪穴住居跡出土遺物



住27-1



住27-2



住32-7



住29-4



住32-16



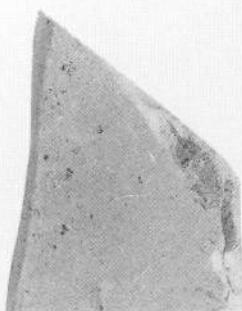
住29-1



住29-2



住29



住32-1



住32-2



住32-4



住35-3



住32-6



住35-4



住38-1



住38-8



住38



住38-3



住40-3



住40-8



住38-4



住38-5



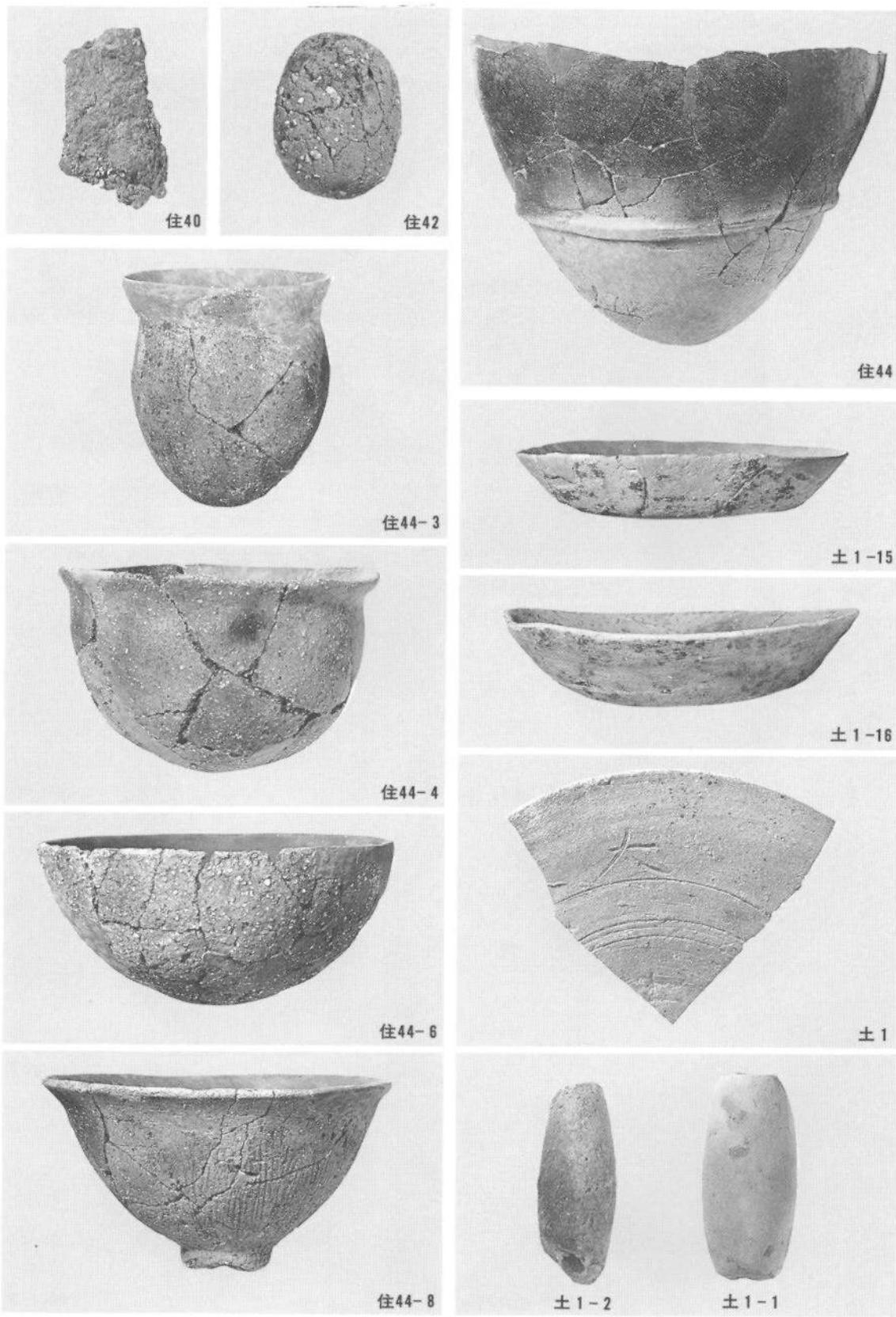
住40-9



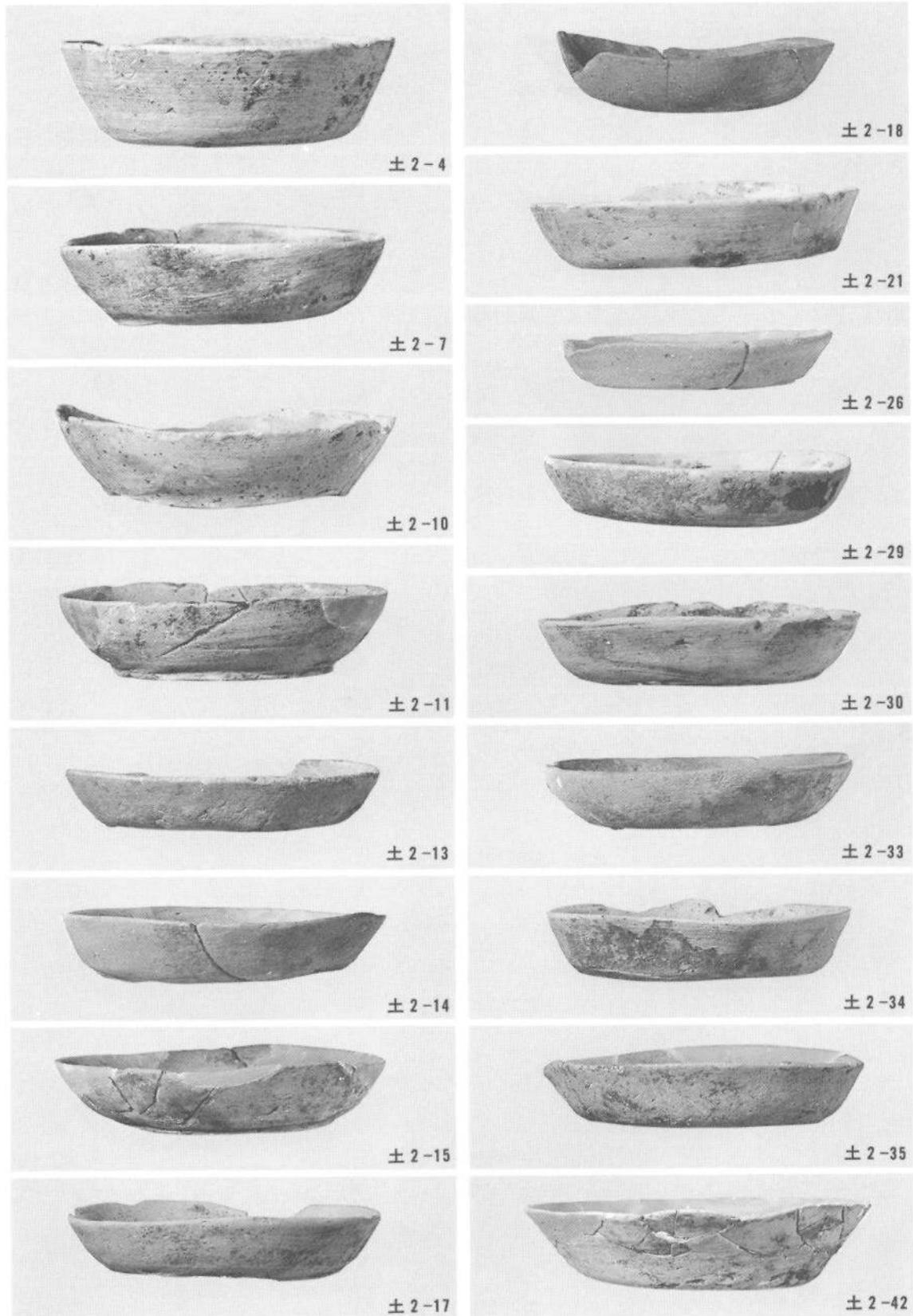
住38-6



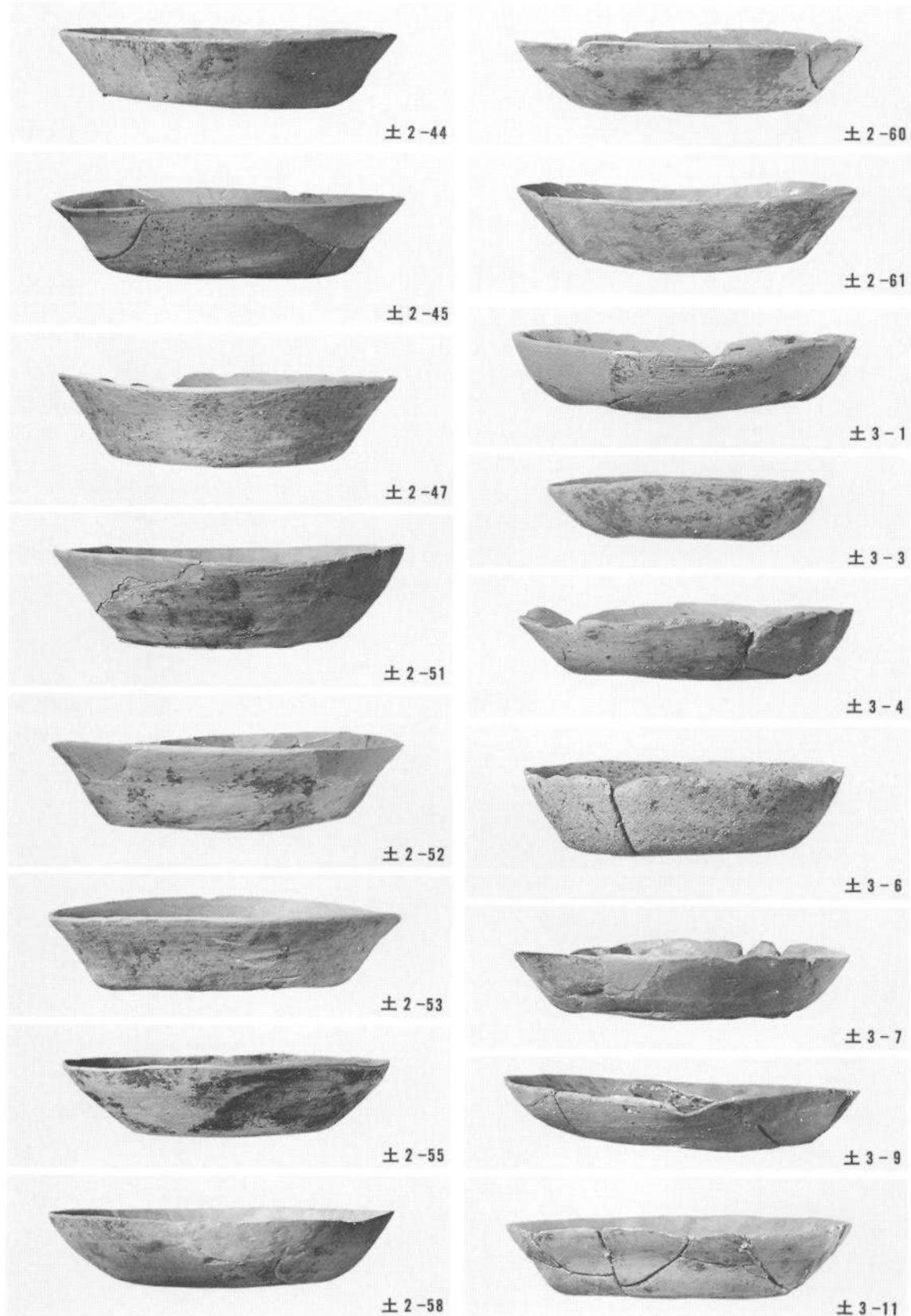
住42-3



図版 58 西台地40号・42号・44号竪穴住居跡、1号土壙出土遺物



図版 59 西台地 2 号土壤出土遺物



図版 60 西台地 2 号・3 号土壤出土遺物



土3-12



土3-21



土3-13



土3-22



土3-14



土3-23



土3-15



土3-24



土3-16



土3-25



土3-17



土3-26



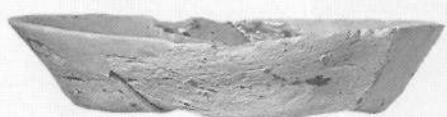
土3-18



土3-27



土3-19



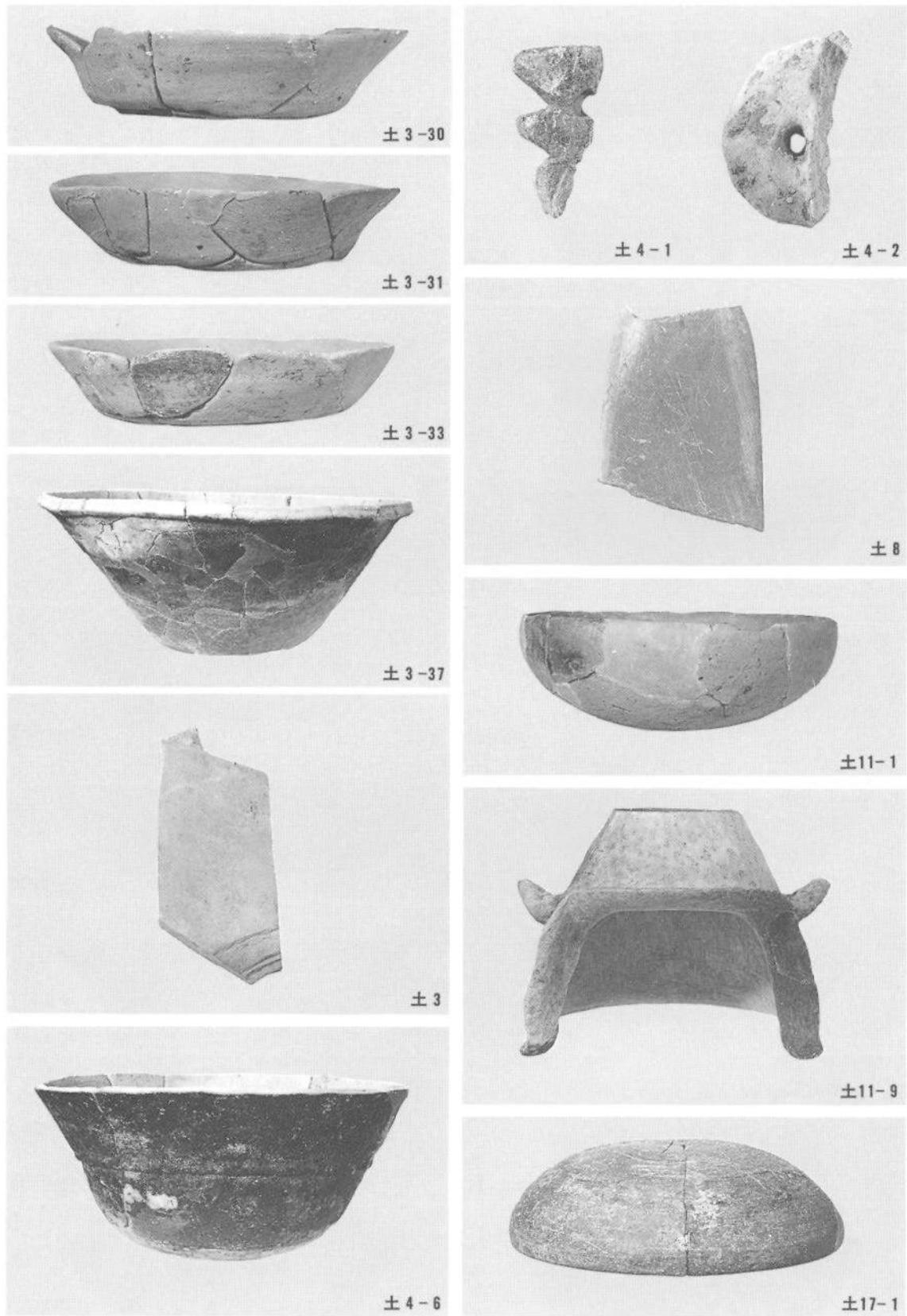
土3-28



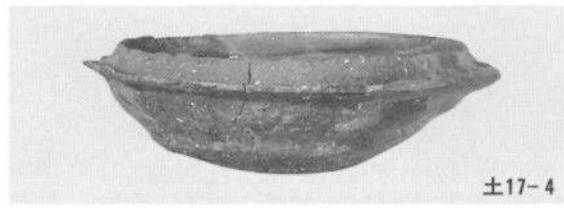
土3-20



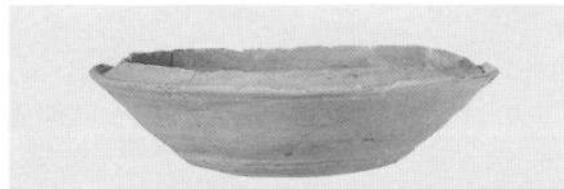
土3-29



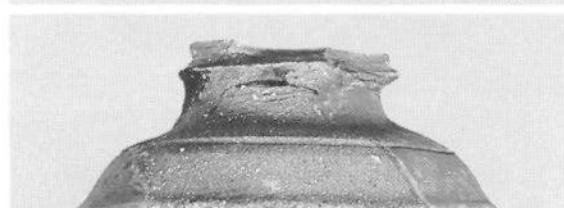
図版 62 西台地3号・4号・8号・11号・17号土壤出土遺物



土17-4



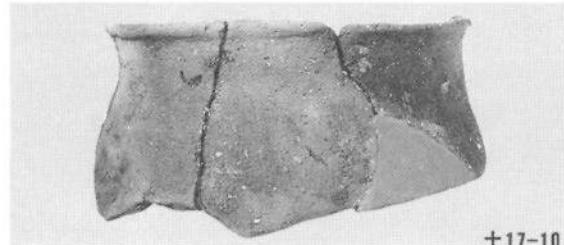
土17-5



土17-6



土17-8



土17-10



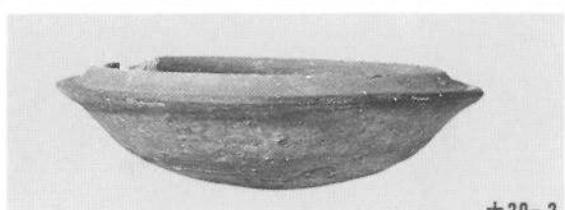
土17-13



土17-23



土17-24



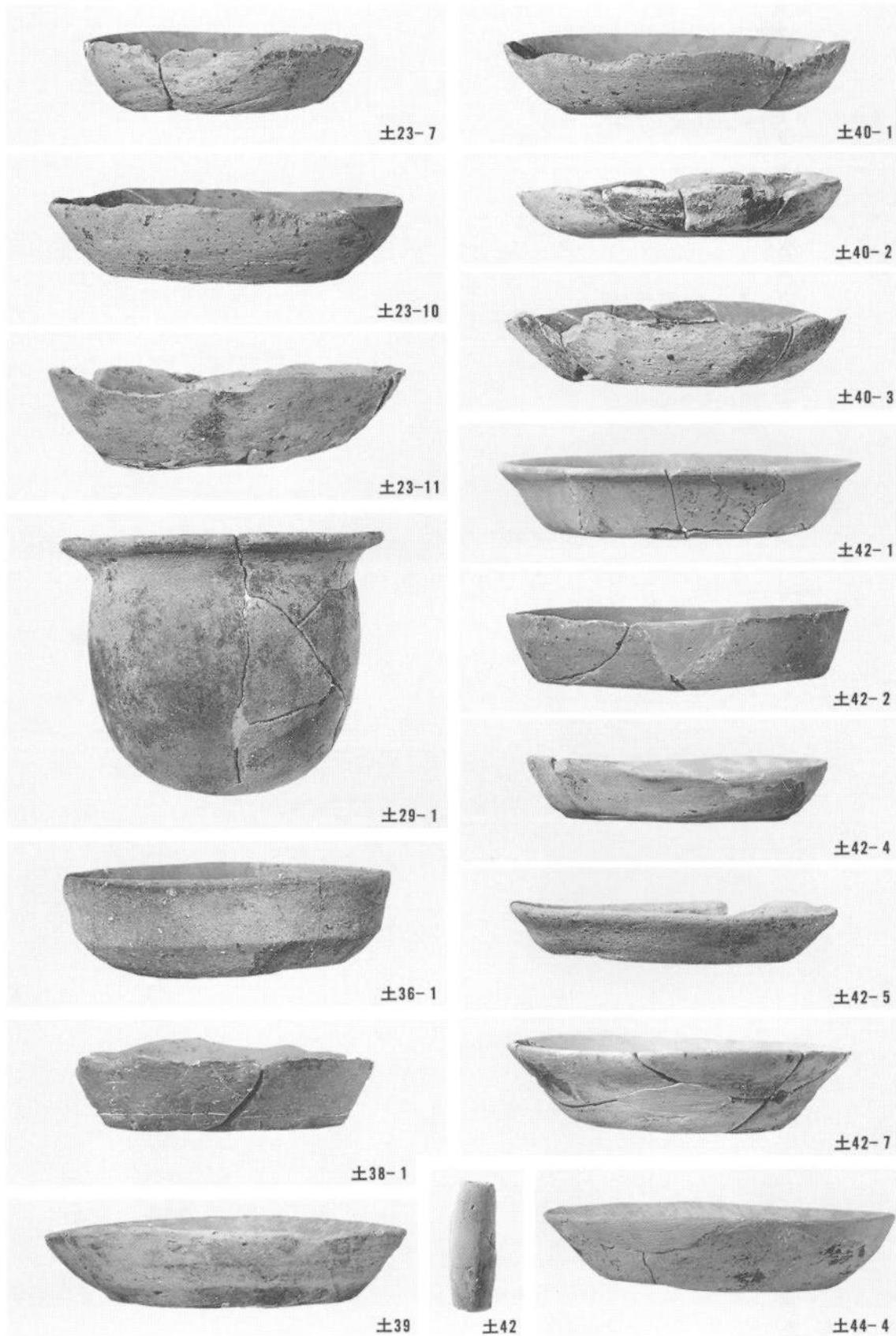
土20-2



土20-4



土20-7



図版 64 西台地23号・29号・36号・38号～40号・42号・44号土壤出土遺物



土44-5



土45-10



土45-1



土45-11



土45-5



土51



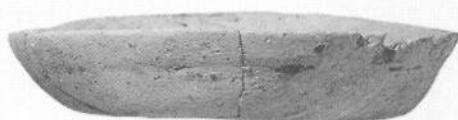
土45-6



土59-1



土45-8



土59-3



土59-4

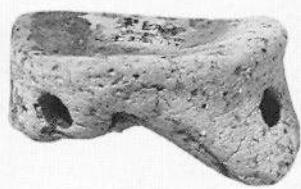


土45-9



土59-5

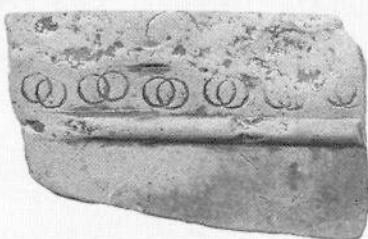
図版 65 西台地44号・45号・51号・59号土壤出土遺物



土61-2



土71



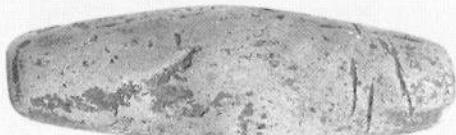
土65



土72



土66-6



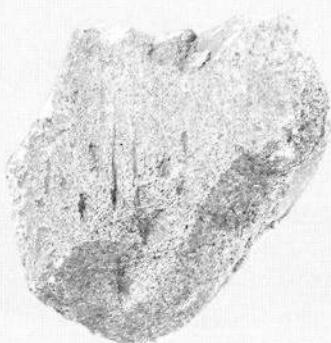
土74



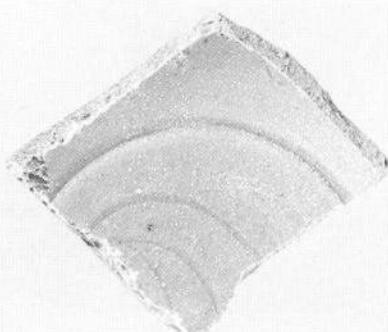
土66-7



井3

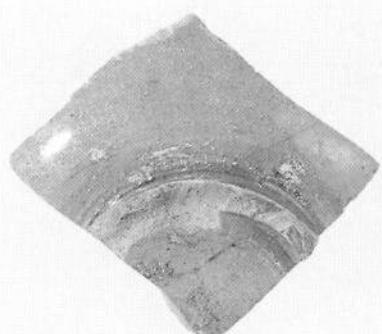


土69

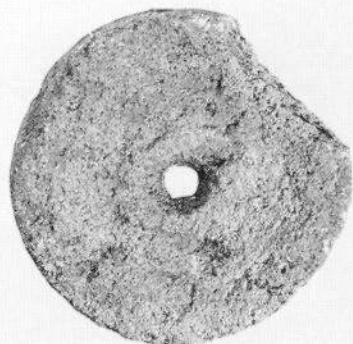


井4-1

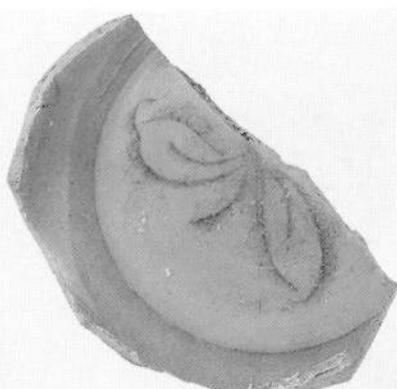
図版 66 西台地61号・65号～67号・69号・71号・72号・74号土壤、3号・4号井戸出土遺物



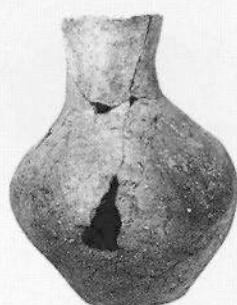
井 4-1



井 6-2



井 5-1



周 1-1



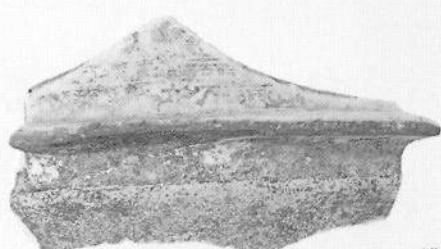
井 5-1



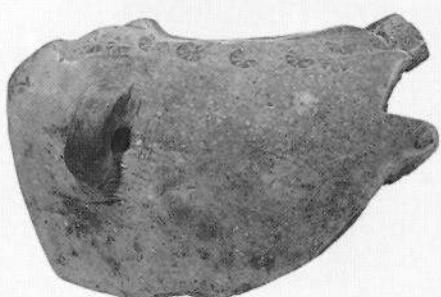
溝11



井 5



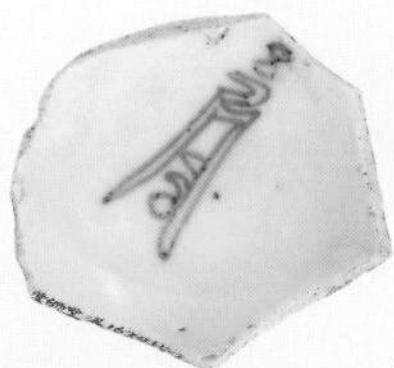
溝11-5



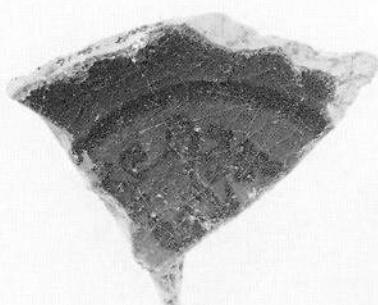
溝11-11



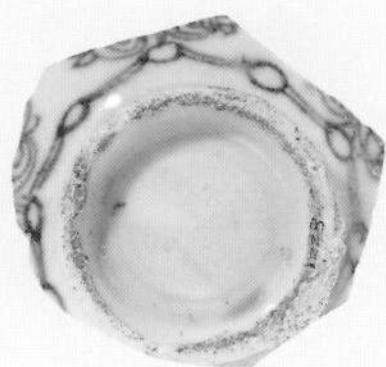
溝11-15



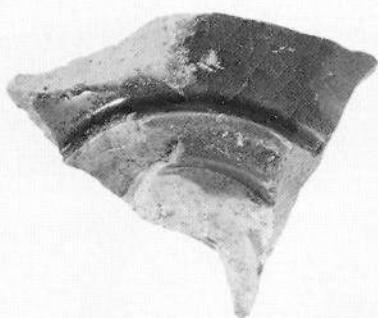
溝11-24



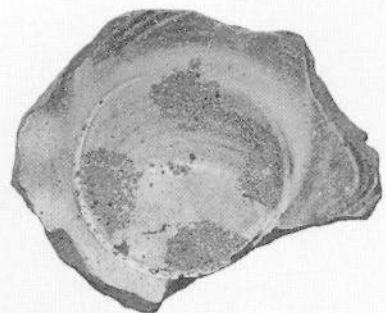
溝11-17



溝11-24



溝11-17



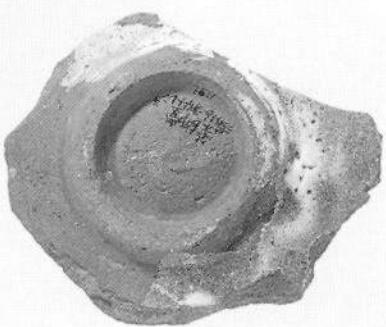
溝11-25



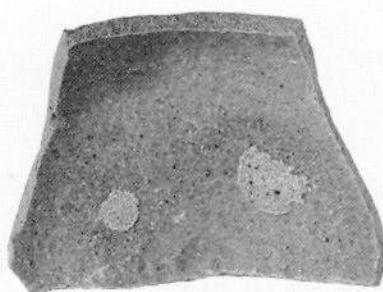
溝11-19



溝11-20



溝11-25



溝11-26



溝11-1



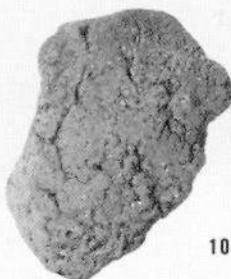
溝11-26



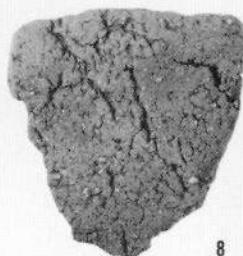
溝11-2



11



10



8



9



3



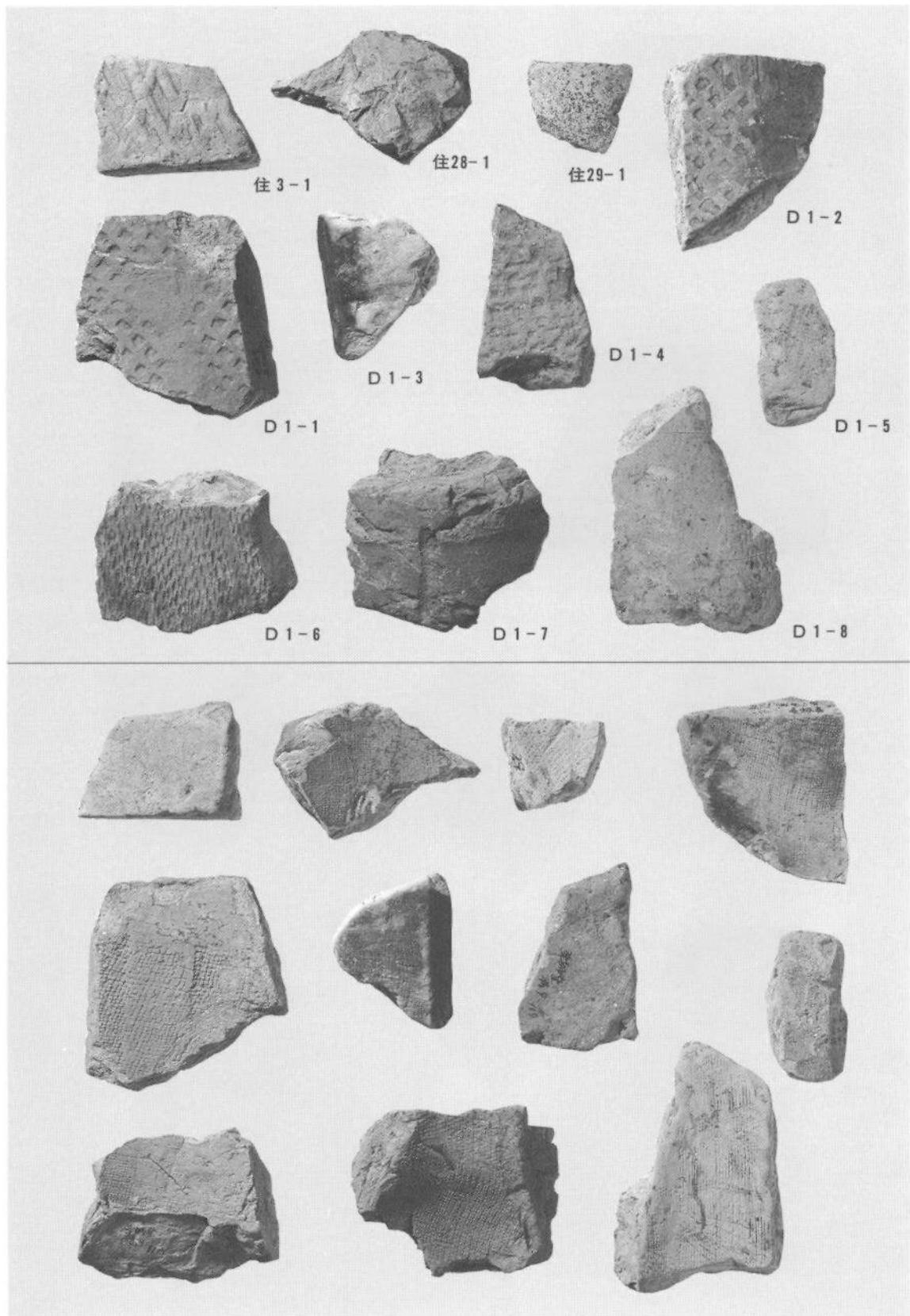
4



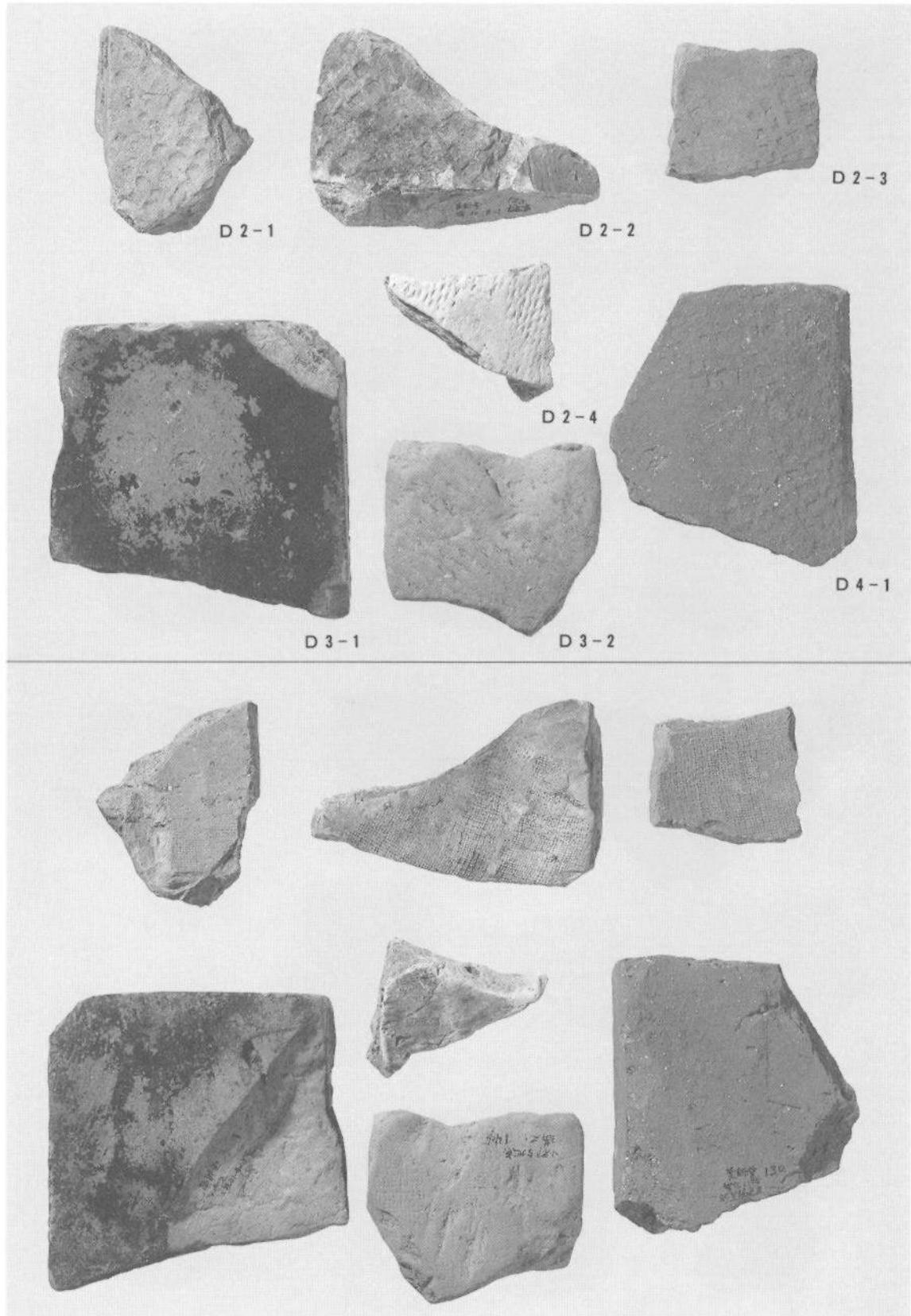
2



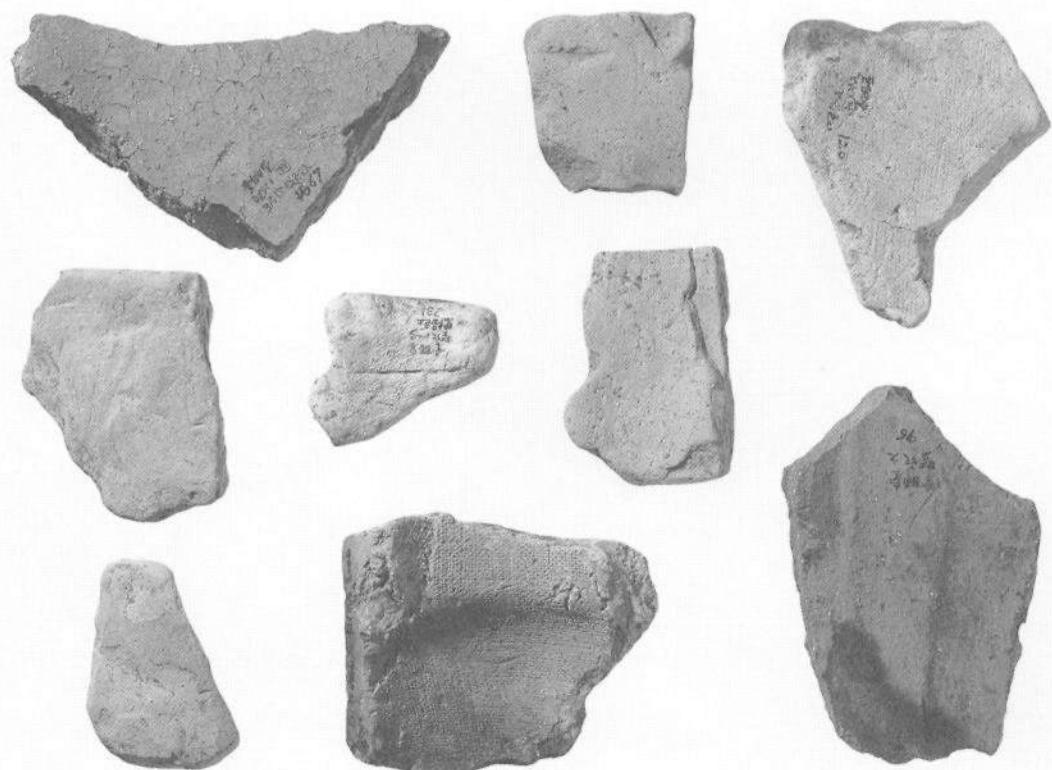
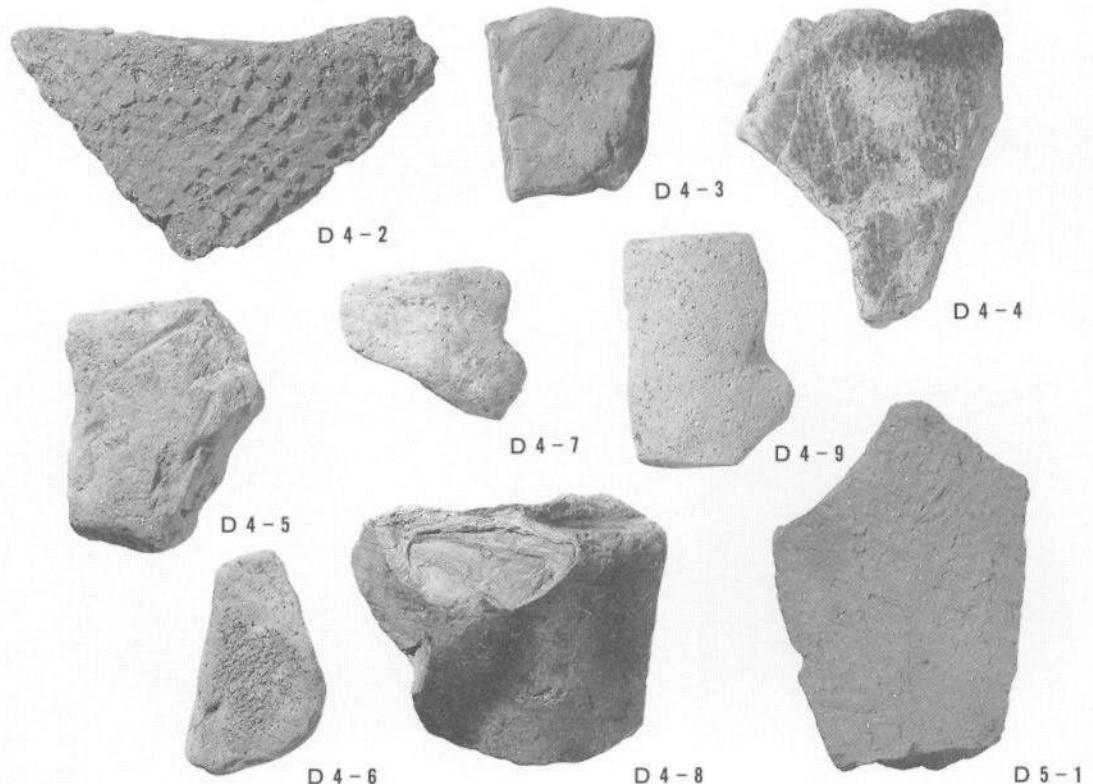
7



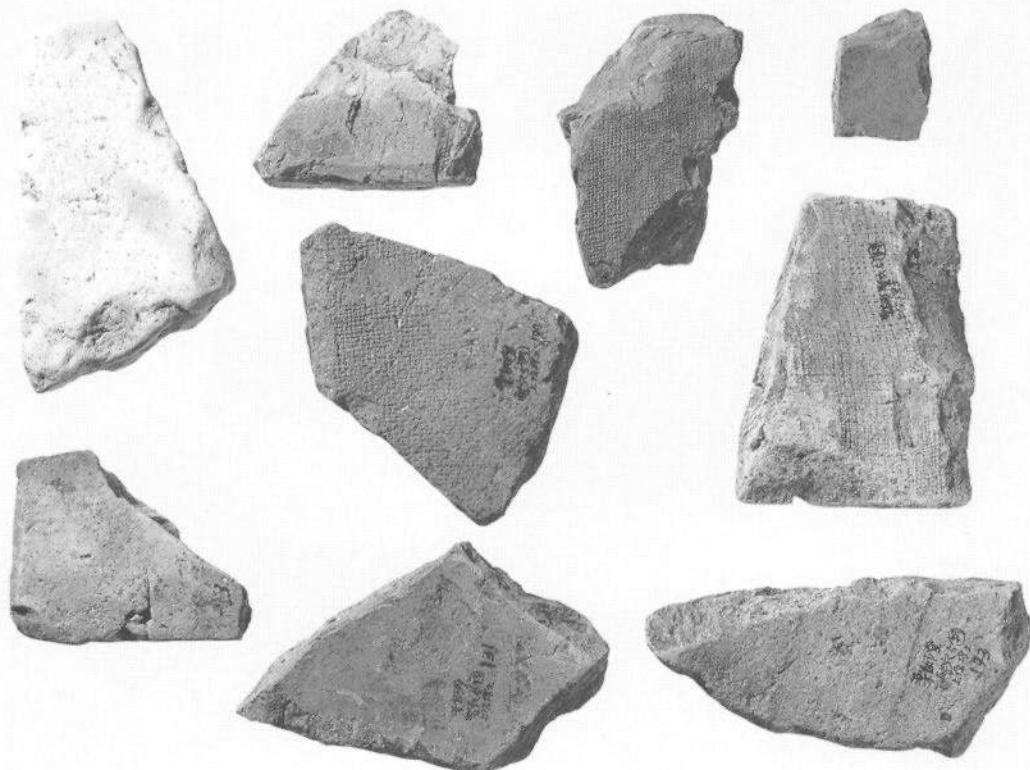
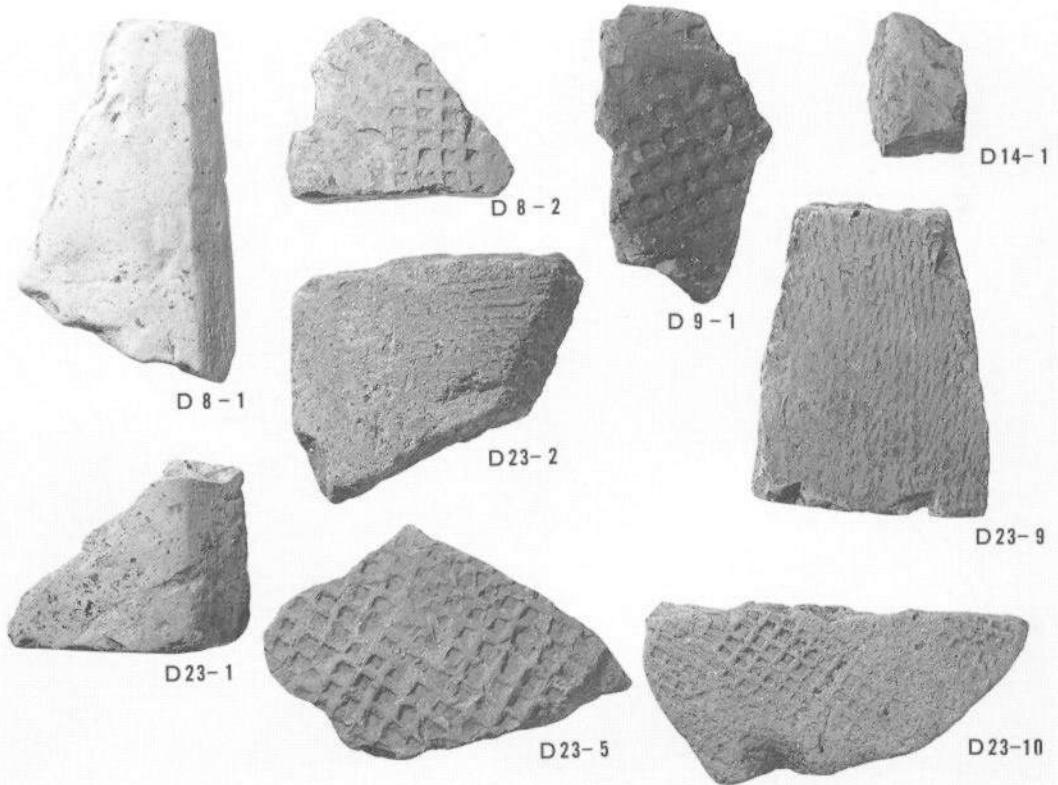
図版 70 西台地出土の瓦



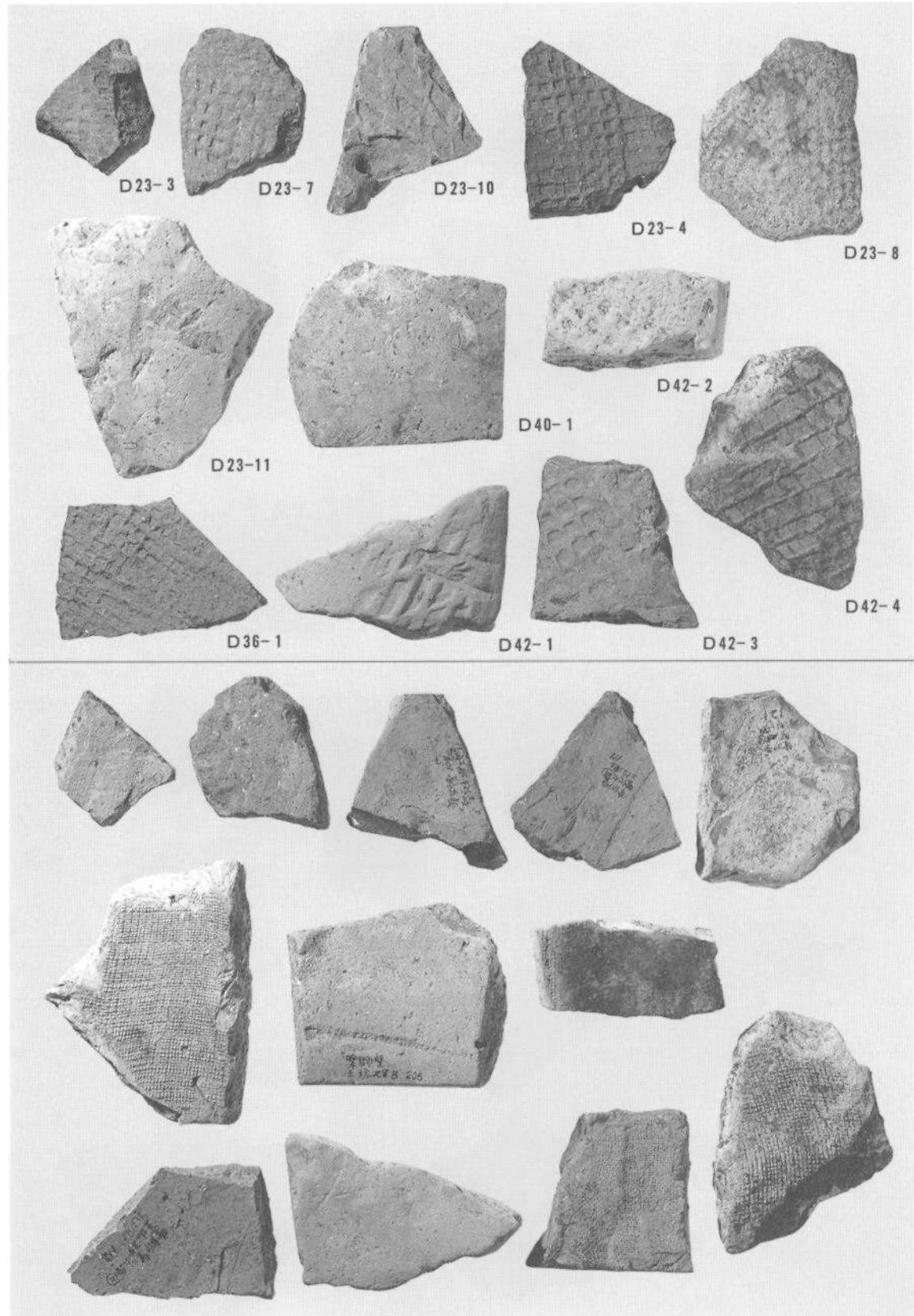
図版 71 西台地出土の瓦



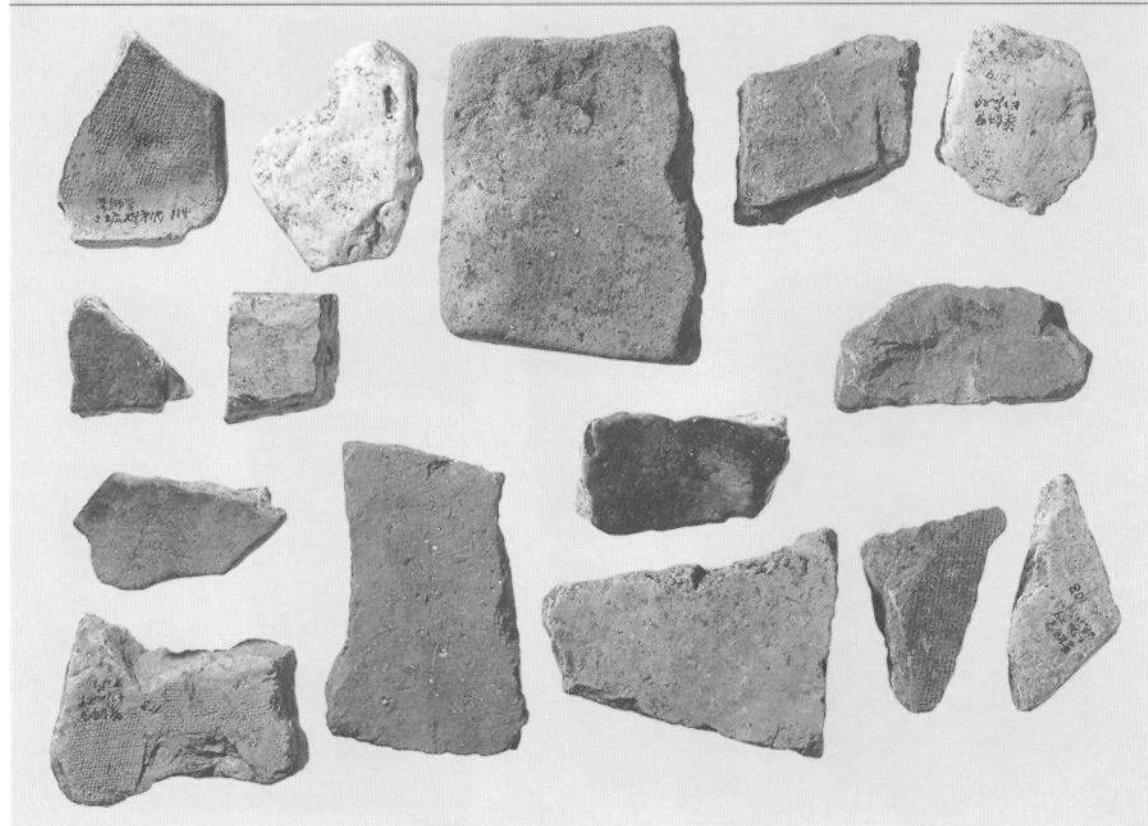
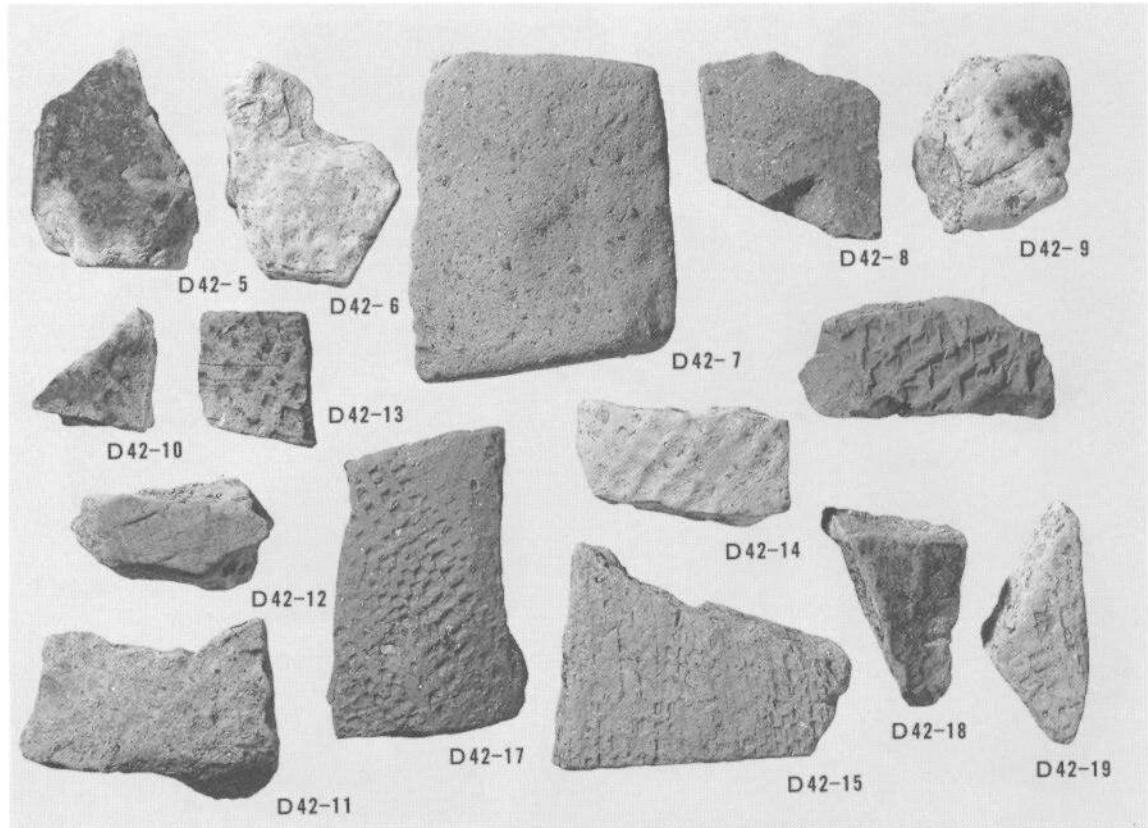
図版 72 西台地出土の瓦



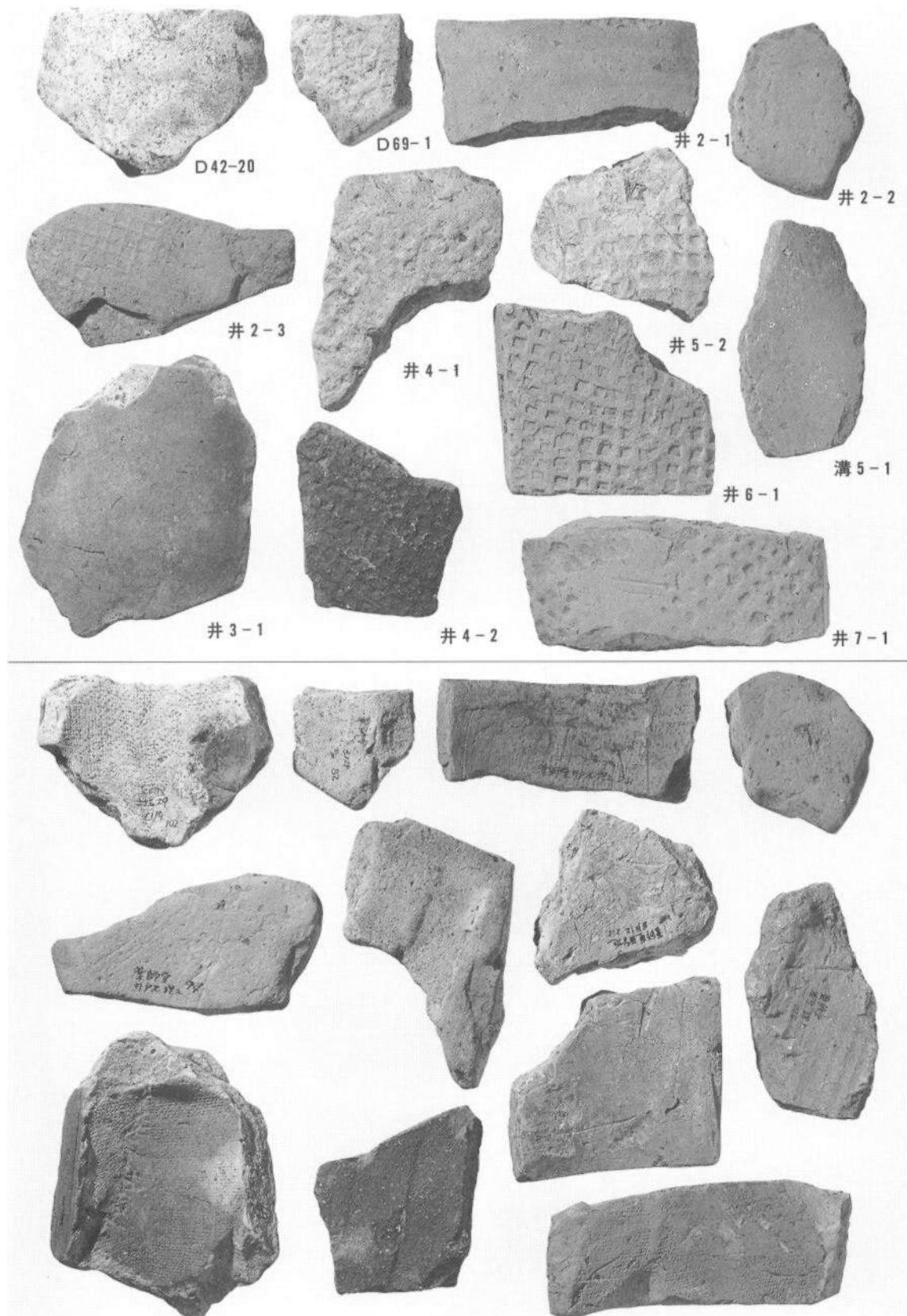
図版 73 西台地出土の瓦



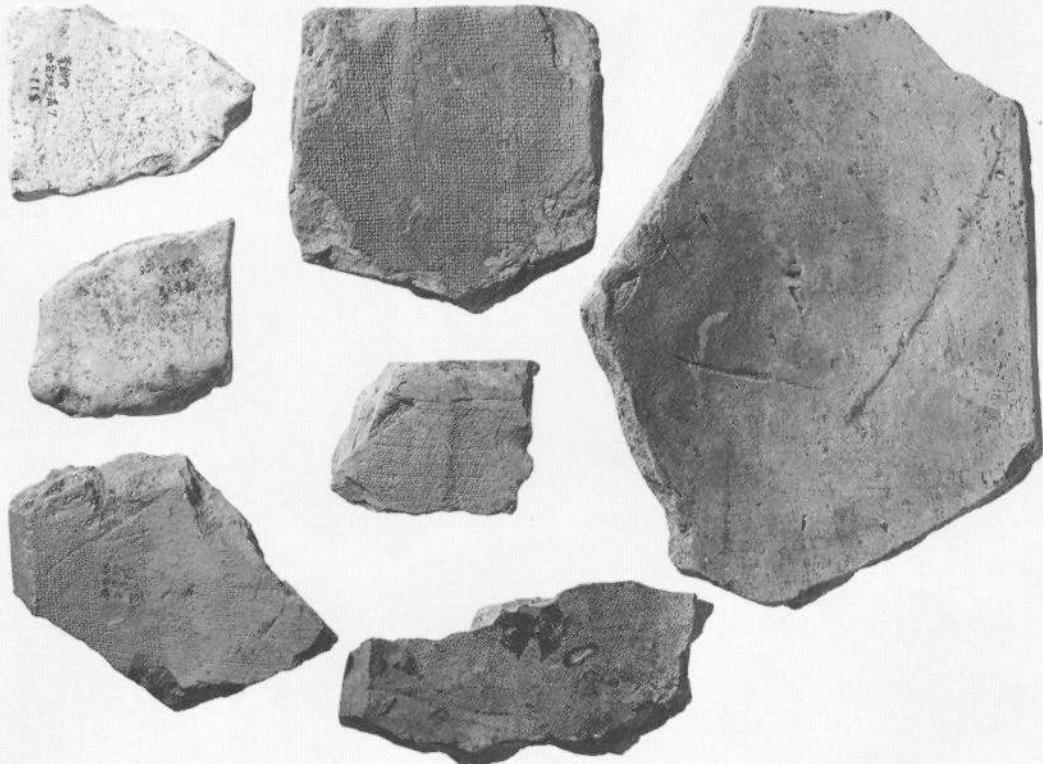
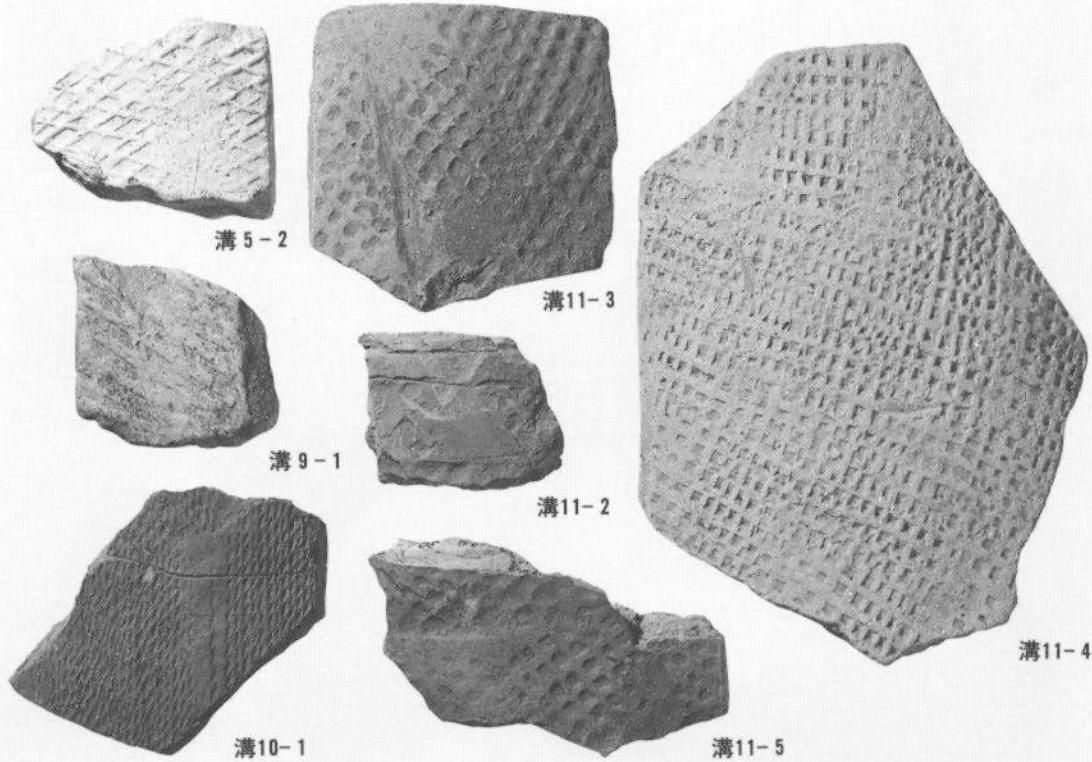
図版 74 西台地出土の瓦



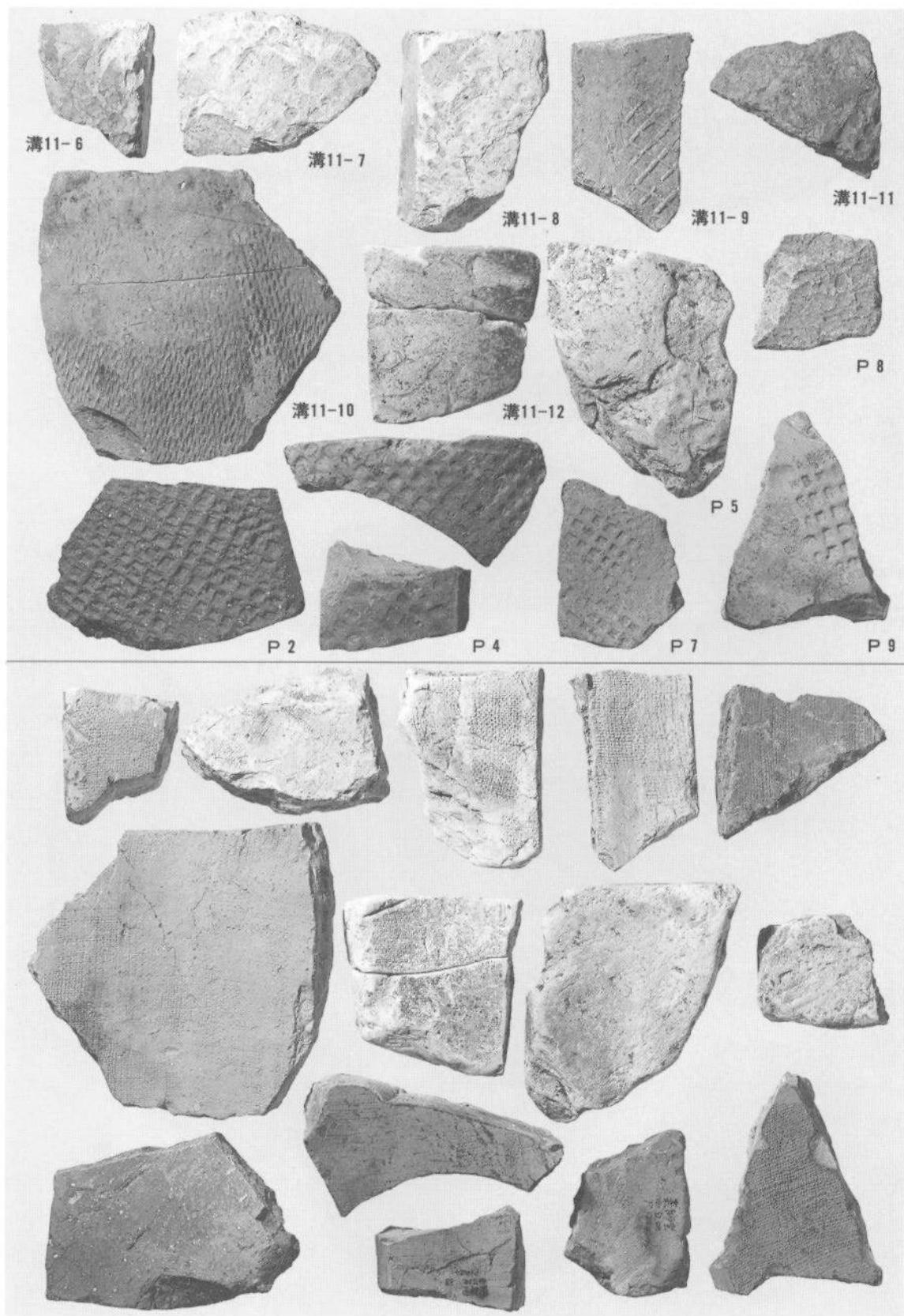
図版 75 西台地出土の瓦



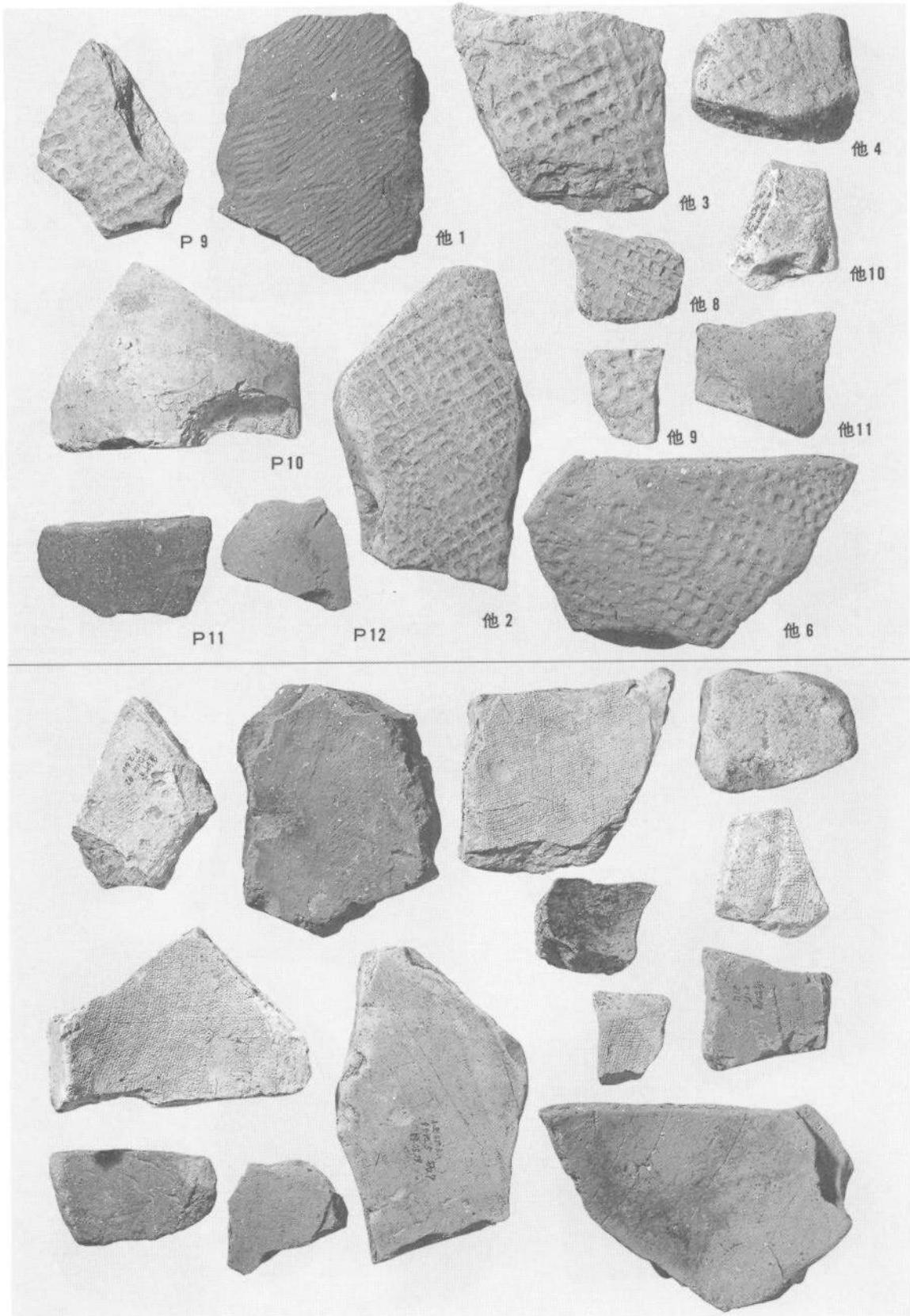
図版 76 西台地出土の瓦



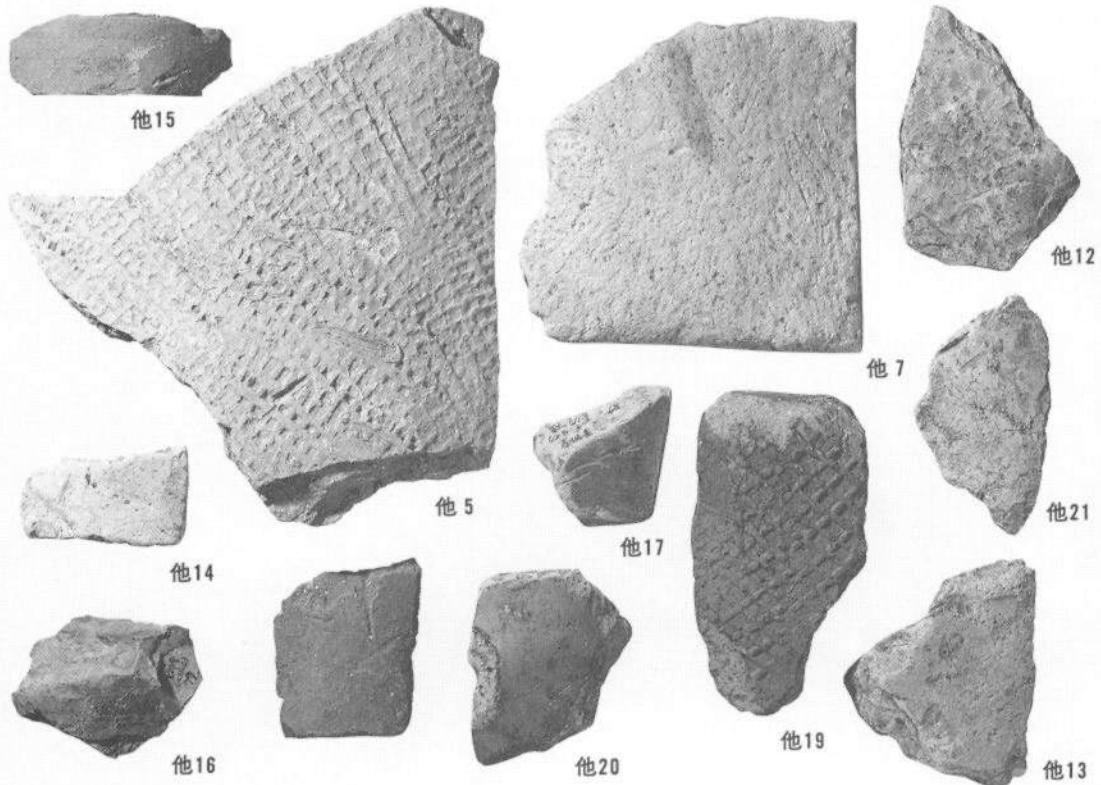
図版 77 西台地出土の瓦



図版 78 西台地出土の瓦



図版 79 西台地出土の瓦



図版 80 西台地出土の瓦



1



図版 81 (1) 西台地出土の瓦
(2) 谷部大溝全景



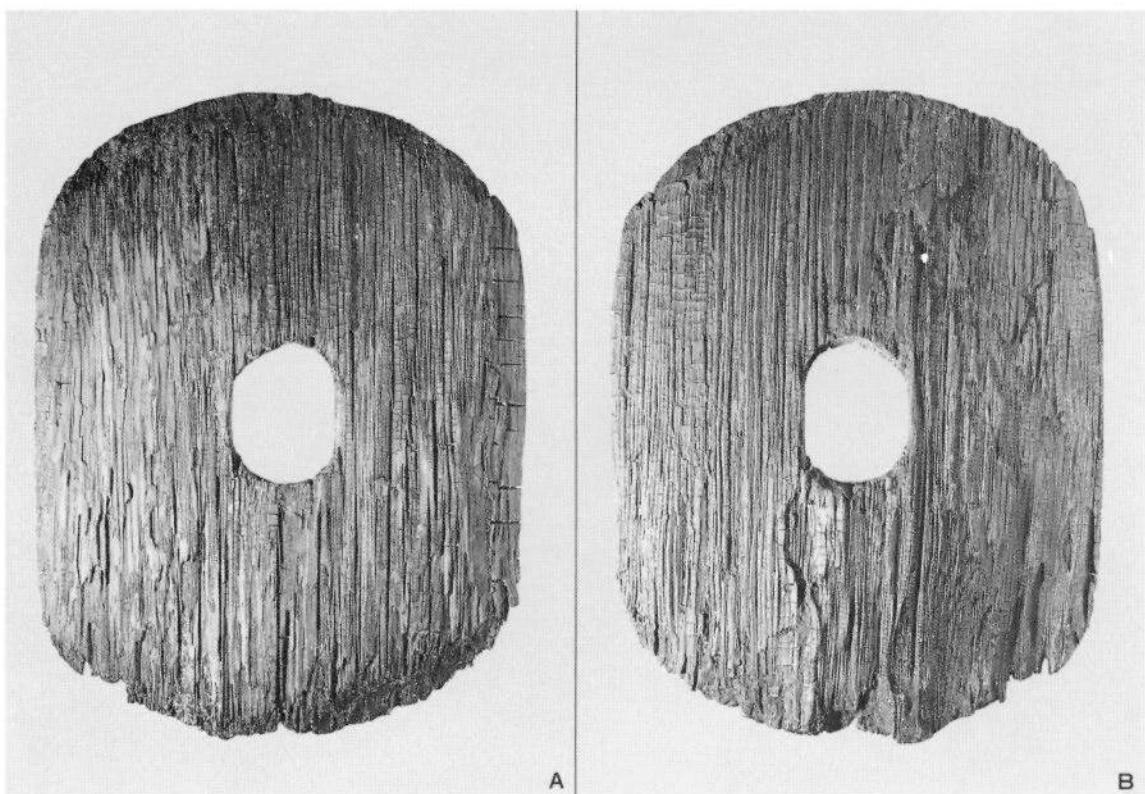
(1) 木製品集中地区（北西から、矢は長柄鋤）



(2) 長柄鋤出土状態



(1) 鼠返し出土状態



(2) 鼠返し（表裏）

報告書抄録

フリガナ	キュウシュウオウダンジドウシャドウカンケイマイゾウブンカザイチョウサホウコク							
書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告							
副書名	小郡市大字井上所在の井上薬師堂遺跡の調査2							
卷次								
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第38集							
編集者名	児玉真一（第1次調査）・佐々木隆彦（第2次調査）							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812・福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	1996年3月29日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
イノエヤクシドウ 井上薬師堂 遺跡	小郡市大字 井上字南薬 師堂	402160	市町村	33°23' 50"	130°34' 50"	19840817 ～850624	8800	九州横断 自動車道 建設に伴 う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
井上薬師堂 遺跡	集落	平安～ 室町時代 古墳時代 弥生時代	大溝・掘立柱 建物・土壙・ 竪穴住居・井 戸・周溝状遺 構・ピット群	陶磁器・土師 器・須恵器・ 弥生土器・鉄 器・石器・土 製品				

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告

-38-

平成 8 年 3 月 29 日

発 行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印 刷 球西日本新聞印刷
福岡市博多区吉塚 8 丁目 2 番 15 号

福岡県行政資料

分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 7	登録番号 5

九州横断自動車道関係

埋蔵文化財調査報告

—38—

小郡市大字井上所在の井上薬師堂遺跡の調査2

付 図



付図 井上薬師堂遺跡遺構配置図 (1/300)